國譯大藏經

論部

第九巻

目次

以　上

國譯瑜伽師地論

卷の第八十

攝決擇分中菩薩地の九

(一)復た次に、云何んが菩薩は正行の中に於いて所學を安立する。謂く諸の菩薩は法住を具足し、世俗諦の道理に依つて說く所の(二)不了義にして依る所に非ざる聲聞乘相應の經典に於て已に依持することを作し、已に善巧を作して、而も復た超度して大乘相應の甚深なる空性相應の世俗勝義諦の道理に依つて說く所の(三)了義にして依る可き經典に於いて勤めて修學する時を名づけて理の如く正に勤めて修學すと爲し、是の如く理の如く勤めて修學する時を正に中道の勝行を修行すと名づく。所以は何ん、此の正法に十三の中道の行を貫穿するに由るが故なり。一には補特伽羅空の性を貫穿し、二には補特伽羅無我の性を貫穿し、三には法空の性を貫穿し、四には法無我の性を貫穿し、五には增益の邊を貫穿し、六には損減の邊を貫穿し、七には法現觀を貫穿し、八には法現觀を貫穿して大菩提の性に廻向し、九には是の如き行を貫

【一】上來寶積經を解する十六門の中前五門訖る。以下第六門より解釋す。
【二】不了義。小乘經は唯だ人空のみを說いて未だ法空を說かざるが故に不了義經なり。
【三】了義。大乘經は人法二空を說くが故に了義の經なり。

穿する者〔に於て〕は煩惱衆苦〔ありて〕心性を纏繞せず、十には(四)二無我の勝解の差別を貫穿し、十一には前の無我性は是れ後の因性なりと貫穿し、十二には到邊際の空性を貫穿し、十三には卽ち此の威德を貫穿す。

云何んが補特伽羅の空性を貫穿する。謂く一種の相に由る、〔實我の相〕不可得なるに顯はさるるが故なり。此中の不可得とは謂く三種の事に於て〔實我の相不可得なりと〕するなり。一には有情の事、二には彼の〔蘊處界の〕差別の事、三には(五)彼の受用の事なり。若くは內、若くは外、若くは二の中間には愚夫の遍計所執の實我都べて不可得なり。

云何んが補特伽羅無我の性を貫穿する。謂く唯だ一相に由る、〔人無我の相〕可得なるに顯はさるるが故なり。此の中可得とは、謂く卽ち彼の三事に於て愚夫の遍計する所の、緣生の諸法の中の常住實性は不可得なるが故に、愚夫の計する所の(六)我の異相の性は道理として得可し。

云何んが法空の性を貫穿する。謂く唯だ一〔の遍計所執の〕相に由る、〔遍計所執〕不可得なるに顯はさるるが故なり。此の中不可得とは、卽ち彼の事に於て〔遍計して〕取る所の〔常〕無常〔等の〕性なり。若くは內、若くは外、若くは二の中間には愚夫の遍計所執の言說の自性都べて不可得なり。

云何んが法無我の性を貫穿する。謂く唯だ一〔の法無我の〕相に由る、〔法無我の相〕可得なるに顯は

【四】二無我とは補特伽羅無我と法無我なり。
【五】六根六識が六境を受用する事なり。
【六】我の異相とは實我と異れる無我の相を云ふ。

さるるが故なり。此の中可得とは、謂く即ち彼の事に於て道理として得可き聖智所行「の眞如」なり。又即ち彼に於ける自の内の所證は言を以て他の爲めに宣説す可らず。彼の六相に由りて、(七)諸の凡愚の遍計所執の言説の自性に於ける異相は可得なり。何等か六相なる。一には自ら尋思す可らず、二には他に説示す可らず、三には色根の所行を超過す、四には一切の相を超過す、五には識の所行を超過す、六には煩惱の所行を超過す。

云何んが(八)増益の邊を貫穿する。謂く二種の相に由る。一には差別の増益に顯はさるるが故に、二には自性の増益に顯はさるるが故なり。何等をか名づけて差別の増益と爲す、謂く後後展轉する八相に由る。一には即ち彼の事に於て常なりと執する増益、二には無常なりと執する増益、三には常なりと執する増益を所依止として我を執する増益、四には無常なりと執する増益を所依止として無我を執する増益、五には無我を執する増益を所依止として眞實心を執する増益、六には我を執する増益を所依止として不眞實心を執する増益なり。此に復た二種あり、一には決定、二には尋求なり。尋求とは、謂く(九)遍計の所依及び(一〇)遍計の相應にして所對治の雜染法の中に於いて五の過失、謂ゆる顛倒の過失、戲論の過失、惡行を發起する過失、麁重の過失、無常性の過失に由り及び彼の能對治の清淨法の中に於

【七】諸の凡愚乃至異相とは遍計所執の言説の自性に異れる離言の眞如を云ふ。

【八】増益の邊とは執著邊見なり、眞相の上に執著を増益すればなり。

【九】遍計の所依とは尋求せらるるもの。

【一〇】遍計の相應とは能く尋求する心所なり。

いてするなり。七には眞實心を執する增益を所依止として善等を執する增益乃至清淨を執する增益、八には不眞實心を執する增益を所依止と爲して不善等を執する增益乃至雜染を執する增益なり。是れを八種の差別の增益と名づく。此の中菩薩は彼の增益に於いて都べて執著せず、他を勸めて執せしめず、亦た讃美せざるなり。何等をか名づけて自性の增益と爲すや。謂く差別の增益を所依止と爲して諸の愚夫の遍計所執の所有言説の自性に由りて增益す、即ち彼の事に於いて增益して有なりと爲す。

云何んが損減を貫穿する。謂く一相に由る。實事を損減するより顯はさるるが故なり。此中實事を損減すとは、謂く即ち彼の（一）邪法なる無我性に於て勝解を起し、一切種の一切の法相都べて所有無しと執著するなり。

云何んが法現觀を貫穿する。謂く三種の相に由る。一には即ち（二）彼の事及び（三）第四の生の事の所治、能治、有爲、無爲を安立する中に於て自性不可得なるに顯はさるるが故に、二には彼の差別不可得なるに顯はさるるが故に、三には即ち彼の串習の故に如實に通達する智に顯はさるるが故なり。此の中自性不可得なりとは、謂く諸の愚夫の遍計所執の自性「不可得なる」なり。此の中差別不可得なりとは、謂く即ち彼の自性の（四）滅生集成の二分不可得なるなり。此の中通達とは、謂く即ち彼の自性の相を作意せず思擇せざる加行にて自內に證す

【一】邪法なる無我性とは惡取空なり。
【二】彼の事とは前の八相の增益の第一なり。
【三】第四の生の事とは八相の增益の中の第四なり。
【四】滅生集成の二分とは滅と生との二分なり、集成とは生の重説なり。

る所の智通達するなり。

云何んが法現觀を貫穿し大菩提性に廻向する。謂く一種の相に由る、思擇して得る所の能治、所治斷せざるが故なり。此の中能治、所治とは、謂く空は是れ煩惱の〔能〕對治、無願は是れ有願の〔能〕對治、無相は是れ諸相の〔能〕對治なり、是の如き(二五)一切を無造作と名づく。此れ復た是れ(二六)後有の業の〔能〕對治なり、亦た是れ(二七)生身流轉(二八)刹那生流轉の〔能〕對治にして滅涅槃行の無自性と名づく。此れ復た生死流轉を以て所對治と爲す。若くは諸の菩薩は此の對治に由るが故に(二九)思擇を起して所治を斷せず、此れ諸の衆生を悲愍するに由るが故に大菩提を希求するなり。

云何んが是の如き行を貫穿する者は煩惱衆苦に心を纏繞せられざるや。謂く一種の相に由る、所對治の法を斷ずることを求めずと雖も、而も能く如實に通達するが故なり。此の中如實に通達すとは、謂く卽ち彼の法に於いて法無我の加行に由りて彼の自性染無く苦無しと觀ずるなり。

云何んが(三〇)差別を貫穿する。謂く四種の相に由る。一には見差別に顯はさるるが故に、二には卽ち此の極遠損減の差別に顯はさるるが故に、三には迷失を斷ずるに於ける差別に顯はさるるが故に、

【二五】一切とは空、無願、無相の三解脫門なり。是れ生死の因苦を對治するが故に生死の因を造作する無しと名づく。
【二六】空は後有の業の能對治なり。
【二七】無願は生身流轉の能對治なり。
【二八】無相は刹那生流轉の能對治なり。
【二九】菩薩は生死流轉の苦界に受生し、有情を化益せんが爲めに、苦界受生の因たる煩惱を斷ぜず、煩惱を故留す。
【三〇】差別とは二乘と聲聞との差別なり。

四には心の迷失に於ける差別に顯はさるるが故なり。此の中見差別とは、謂く補特伽羅無我及び涅槃に住し、當來の身に於いて〔二〕斷滅の〔見を〕起す增上慢なり。又〔三〕所取に於いて〔是れ無なり〕と觀察するが故に、能取に於ける言說の自性畢竟遠離し、空性に攝せらると觀察せざるが故に、善く所知の境界を觀察せずと名づく。諸法に〔三〕執著するに由るが故に煩惱の斷を求む、而も諸の菩薩は則ち是の如くならず。此の中極遠損減の差別とは、謂く補特伽羅無我に住し、我見の異生の下中更に下なるに於いて二の因緣に由る。謂く(一)苦をば解脫せざるが故に、(二)苦に安住するが故に。〔四〕前後の二種の執著失壞するが故なり、而も諸の菩薩は則ち是の如くならず。此の中迷失を斷ずるに於ける差別とは、謂く補特伽羅無我に住し、法無我無自性を執するが故に便ち驚怖を生じ、言說の自性無しと謂つて斷滅を追求す、而も諸の菩薩は則ち是の如くならず。此の中心の迷失に於ける差別とは、謂く是の如く迷失を斷ずるに於いて補特伽羅無我に住し、自ら遍計して起す所の境界の中に於いて想顚倒等の爲めに顚倒せらる、而も諸の菩薩は則ち是の如くならざるなり。

云何んが因性を貫穿する。謂く二種の相に由る、一には能取を觀察して顯はす所なるが故に、二には彼れ如實に通達して顯はす所なるが故なり。此の中能取を觀察すとは、謂く卽ち此の無我を觀察す

〔二〕斷滅の見とは涅槃を得れば此身空寂に歸すとする無餘涅槃を執するなり。
〔三〕二乘は所取の無を觀ずるも能取の無を觀ぜず。
〔三〕二乘は人空を悟るも法空を悟らず。
〔四〕前後の二種の執著とは無我の見を執すると因緣法無きを執するとの二種なり。

る智は言説の自性を遠離するが故に、彼の分別を遠離するが故に、應に相を捨つべきが故に、刹那〔生滅〕あるが故なり。此の中彼れ如實に通達すとは、謂く所取能取の二種を觀察し、如理に作意し思惟するを因と爲し、各別に内證の決定智生ずるなり。

云何んが到邊際の空性を貫穿する。謂く一種の相に由る、卽ち彼の法無我智如實に顯現するが故なり。此の中如實に顯現すとは、謂く業煩惱相似の相顯現するが故に、言說す可らざる法なるが故に、言説の自性を離るるが故に、是の如く執著せざるが故に、刹那〔生滅〕あるが故なり。

云何んが卽ち彼の空性の威德を貫穿する。謂く一種の相に由る、業煩惱を斷じ對治して顯はす所なるが故なり。此の中斷ずとは、謂く彼の刹那に光明の想生じ、能く無始時より來た集めたる所の一切の諸の業煩惱を斷ずるなり。

復た次に、幾種の聲聞ありや、聲聞の所學、菩薩の所學に何の差別ありや。謂く四種の聲聞あり。聲聞の所學、菩薩の所學は、當に知るべし差別十三種ありと。

云何んが名づけて四種の聲聞と爲すや、一には變化の聲聞、二には增上慢の聲聞、三には廻向菩提の聲聞、四には一向趣寂の聲聞なり。變化の聲聞とは彼に由る所化の諸の有情を化度せんと欲するが爲めの故に或は諸の菩薩、或は諸の如來の化作する聲聞なり。增上慢の聲聞とは、謂く但だ補特伽羅無我の智及び[三五]邪〔見〕に執著する法無我に執著する智に由つて計して淸淨なりと爲すなり。廻

【三五】未だ眞の法無我を得ざる智。

向菩提の聲聞とは、謂く本より來た是れ極めて微劣なる慈悲の種性なるも如來に親近して住するに由るが故に廣大なる佛法の中に於いて大功德の想を起し、熏修相續し、究竟に到りて無漏界に住すと雖も而も諸佛覺悟の引入の方便開導を蒙り此の因に由るが故に便ち能く廣大なる菩提に發趣す、彼れ是の如き廣大なる菩提に於いて能く發趣すと雖も寂を樂ふに由るが故に此に於いて加行するに極めて遲鈍を成じ、初めて始めて發心せる佛種性ある者に如かざるなり。一向趣寂の聲聞とは、謂く本より來た是れ最も極めて微劣なる慈悲の種性なるが故に、一向衆生を利益する事を棄背するが故に、生死の苦に於いて極めて怖畏するが故に唯だ涅槃に安住する意樂あるのみにして畢竟して大菩提に趣くこと能はざること、二の王子相似して處生し、平等平等に王の快樂を受くるが如し。一は王の政討論、工巧處等に於いて皆な悉く善く知り、第二の王子は則ち是の如くならず。彼の二は但だ此の分の差別に由るのみにして王の快樂を受用するに由るに非ざるなり。是の如く無漏界の中の諸の菩薩衆と一向趣寂の聲聞とに於いて當に差別を知るべし。應に知るべし彼の二に復た差別ありと、(二六)謂く意樂の故に、白法集成するが故に、智集成するが故に、種類の故に、種性の故に、持種の故に、加行の故に、威德の故に、正行の故に、福田の故に、殊勝なる差別の故に、因果の故に、生の依止の故なり。(二七)一向趣寂の聲聞は諸行雜染にして有情を利益する事を棄背するが故に一向寂靜の意樂に安住す。菩薩は垢染ありと雖も而も彼れと相違す。又彼の聲

【二六】十三の差別を列擧す。
【二七】十三の差別を釋す。

聞は唯だ自身のみ增長することを得んが爲の故に白法狹小なり、菩薩は一切の有情の樂を增長せんと欲するが爲の故に白法無量なり。又彼の聲聞は無爲智に由り但だ自身の煩惱のみを除遣せんが爲にし、菩薩は普ねく一切十方の諸の有情類の爲にす。又彼の聲聞は最勝なる解脫の法境を緣じて作意し集成すと雖も而も佛子には非ず。菩薩は下劣なる諸行の有情の法境を緣じて作意し集成すと雖も而も是佛子なり。又彼の聲聞は勤めて精進し、諦〔理〕に於て善巧にして心善く定に安んずと雖も、佛種性の相を成就せざるが故に諸佛世尊は甚だ攝受したまはず、而も諸の菩薩は彼れと相違す。又彼の聲聞は究竟に到るが故に根成熟すと雖も當來世に於いて而も佛の所作の事を作すこと能はず、菩薩は初心刹那に生じ已つて便ち能く造作す。又彼の聲聞は究竟に到ると雖も而も彼の諸の天人等の爲めに供養讃歎せられざること始業に住して修業する菩薩の如し、而も諸の菩薩は復た未だ究竟の位に到らずと雖も而も其の威德及び智慧は一切の聲聞獨覺を映蔽す。又彼の聲聞は、煩惱の病を療ずる智慧の良藥復た成滿すと雖も而も一切衆生の諸の煩惱の病を治すること能はず、而も諸の菩薩は彼と相違す、能く他を利益する事を修行する勝義の行に由るが故なり。又彼の聲聞は究竟に到り、諸の有情に於いて智の光明照然たりと雖も諸天及び餘の世間の眞實の福田には非ず、諸の菩薩の未だ煩惱を盡さざるが如し。又聲聞に於いては一切時の中にて如來最勝なり、最勝の中に於いては諸の菩薩衆彌復た最勝なり、彼れ此に於いて〔菩薩に〕集成せらるるに由るが故なり。又二緣に由りて應に彼の〔菩薩の〕勝

れたるとを知るべし、彼は能く諸の有情を成熟するが故に、亦た能く諸の佛法を成熟するが故なり、此の因緣に由りて菩提の果を感ず。成熟する所の諸の有情類に隨つて能く解脱せしむ。譬へば人ありて能く辨じ能く熟し、覺慧希奇にして〔二八〕彼の〔聲聞の〕端然として食用する者に非ざるが如し。此の中の道理も當に知るべし亦た爾なりと。又彼の聲聞は復た一向清淨なる法の因を受學し修行し、亦た無量なる善友に攝受せらると雖も而も大菩提の果を引くと能はず、諸の菩薩衆は彼れと相違し而も能く引發す。又諸の聲聞は菩薩に依りて生ずるも、諸の菩薩は彼の聲聞に依るには非ず。

復た次に、云何んが世間。出世間の智に由りて能く他を利益する事を作すや。謂く諸の菩薩は遍ねく十方に於いてす、或は世界に遊歷し、或は國土に遊歷し、或は生に遊歷し、或は他を勸請し、大良醫と爲り、善く能く煩惱の鬼魁に著かれたる有情を療治するに上あること無しと爲し、三學清淨の道を宣說す。

云何んが世間智なる。謂く麤品の所有雜染に於いて能く止息の對治を爲し、中品なる者に於いては能く制伏の對治を爲す。云何んが名づけて麤品の雜染と爲すや。謂く在家の者の貪瞋癡の行ずる性、諸の出家の者の〔惡〕見の依止する性及び彼の〔惡見の〕所依たる〔二九〕不正作意の依止する性、後有の願の依止する性なり。總別の〔三〇〕四顚倒に由るが故に解脱に非ざるに於て執して解脱なりとする依止の

〔二八〕彼の聲聞は得果後に於ては寂然として果位に安住し化他の行なし。
〔二九〕不正作意とは定學に於て作意せざるを云ふ。
〔三〇〕四顚倒は常樂我淨の四顚倒なり。

性なり。云何んが中品の雜染なる。謂く已に麁品の雜染を止息し、別別の對治を依止と爲るが故に、諸の境界の貪瞋癡の纏の依止する性に於いて其の所緣に於いて正に繫念するが故に、定ならざる者をして心を定に安んずることを得、菩提分法を精勤し修習し、方に能く「惑を」制伏せしむ。此に依つて修して自ら悼擧せざるが故に所緣に於いて心を繫けて住せしめ勇猛に精進し、此より住に於いて能く正に攝受す。住を攝受するが故に「色等の」積聚の中に於いて一念の執「著」の中に煩惱轉ずるに由りて便ち能く制伏し、此れより出世間法の所對治を斷せんが爲めの故に對治に依止し、卽ち堅住せしめ、此れより能く諸の(三一)緣起の愚、(三二)補特伽羅無我性の愚及び(三三)法無我性の愚を伏し、此より能く(三四)邪道正智に於いて皆な決定を得。是の如き相に由りて應に知るべし麁品、中品の雜染を止息し制伏する能對治の智をば、是れを世間智と名づくと。

云何んが出世間智なる。謂く是の如く貪瞋癡の纏の諸の雜染を制伏し已つて復た能く微細なる隨眠の所有雜染を對治す、此の眞實の智を出世智と名づく。此れ復た云何ん。謂く卽ち彼の制伏し對治する三處の善巧に依る。謂く(三五)緣起の善巧、(三六)補特伽羅無我を勝解する善巧(三七)法無我を勝解する善巧なり。餘す無く雜染を對治する四種の無智を超度せんと欲するが爲めの故

【三一】十二緣起の理を知らざる愚。
【三二】人無我の理を知らざる愚。
【三三】法無我の理を知らざる愚。
【三四】內道外道の正邪を分別し決定す。
【三五】十二緣起の理を知る智。
【三六】人無我の理を知る智。
【三七】法無我の理を知る智。

に他の教を待たず、內に於いて精勤し自心を觀察す。四無智とは、一には共相に於ける無智、二には自相に於ける無智、三には雜染相に於ける無智、四には清淨相に於ける無智なり。三種の相に由りて應に心の共相を知るべし。一には緣生する者に於いては「已滅未生にして」現在前せず作用無きが故に、二には現在する者に於いては唯だ一刹那にして作用無きが故に、三には貪等の自緣より生ずる所に於ては心作に非ざるが故なり。三種の相に由りて應に心の自相を知るべし。一には前の如く言說の自性不可得なるが故に、二には前の如く〔三八〕六種の相に由りて如實に得可きが故に、三には一切聖者の無差別智の所得なるが故なり。三種の相に由りて應に心雜染の相を知るべし。一には生ずるが故に、二には轉ずるが故に、三には行ずるが故なり。諸趣の中に於いて種種の自體生ずるが故に雜染生ずと名づく。卽ち此の中に於いて生ずる者は自然に刹那に流轉あるが故に、一切の所緣伏し難く轉ずるが故に、貪愛の勢力の轉ずる所なるが故に雜染轉ずと名づく。若し彼の行に於いて若し是の如く行ずるを雜染行ずと名づく。謂く一時に於いては善の中に行じ、或は一時に於いては不善の中に行じ、或は一時に於いては境界の中に行じ、或は一時に於いては造業の中に行じ、或は一時に於いては煩惱の中に行ず。又煩惱に於いて行ずるは貪瞋等なり、決定無き行は非なり、卽ち此の行に於いて有貪を行じ已つて復た無貪を行じ、無貪を行じ已つて復た有貪を行ず、是の如き等なり。又樂等に隨順する法の中に於いて增上

【三八】 六種の相は前の法無我性を貫穿する中の六種の相なり。

し現行することを爲すことを得。又自苦を生じ衆樂を斷壞す、執著に由らざるが故に、但だ顚倒に由るが故に、此に由りて自身の衆苦を引發して厭足あること無し。或は善の中に於いて安置する時は卽便ち棄捨して瑕隙を思求し、不善をして現行に行ぜしむることを爲すが故に、其の瑕隙及び衰盛の中に於いて諸の愛恚の爲めに損惱せらる。又放逸の勢力に隨つて一切所作の諸の善根の本を皆な損壞せしむ。又極めて色等の境を樂著するが故に極めて利益する甘露界の中に於いて數數思擇すと雖も而も安立す可きこと難し。此の義の中に於いて示現する假［和］合所設の（三九）譬喩の其の事をば應に知るべし。三種の相に由りて應に心清淨なる相を知るべし。一には不得の相なるが故に、二には無爲の相なるが故に、三には種性の相なるが故なり。若し別異に由りて理の如く勤修し、心の清淨を求めば證得すること能はず、若し是の如きに由りて理の如く勤修せば便ち能く證得せん。又言說の自性を觀見せざれば眞如の相を見る。此れ九種の相に由りて當に無爲の相を觀ずべし。一には世に行ぜざるが故なり、二には滅盡定に在りて言說の自性行ずべからざるが如くには非ざるが故に、眞如の相は得可きが故に是れ（四〇）無二の相なり、三には（四一）生身の相に非ざるが故に、四には生身の因の自性の相を超過するが故に、五には當來の生を超過するが故に、六には死沒を超過するが故に、七には刹那［相續し］展轉して遠離せざることを超過するが故に、八には［五］趣の轉易を超過するが故に、九には

【三九】譬喩とは瓶衣・舍宅・軍林等の假和合の譬喩なり。
【四〇】眞如の相は有無に非ず平等無二の相なり。
【四一】生身とは果報なり。

業煩惱の行を超過するが故なり。此の中の種性の相は當に知るべし是れ(四二)無學界の相なりと。現法の中に於いて五事を超過す。一には(四三)所作を超過し、二には(四四)非所作を超過し、三には(四五)所作の加行を超過し、四には(四六)所作の非加行を超過し、五には(四七)非所作の加行を超過す。後法の中に於いて六事を超過す。一には能く後有を發起する〔現在の〕行を超過し、二には(四八)彼の行を超過し、三には彼の〔業所感の〕果生ずるを超過し、四には彼〔の業〕に依る衰盛を超過し、五には(四九)彼の所依の一切の無記〔の果〕動搖する中に於ける修學、期願、受用を超過し、六には彼の所依の自體の差別を超過す。復四位九相に由りて應に種性の相を知るべし。何等か四位なる。一には(五〇)不清淨位、二には(五一)清淨位、三には(五二)通達位、四には(五三)究竟位なり。云何んが(五四)九相なる、謂く(一)不清淨位は一切の相に於いて等しく隨行するが故に譬へば虚空の如し、若くは清淨位は(二)平等一味にして及び(三)身心遠離す、

【四二】無學界。界とは因の義、無學果の因を無學界と云ふ。
【四三】所作とは善法なり。
【四四】非所作とは惡法及び無記法なり。
【四五】所作の加行とは精進なり。
【四六】所作の非加行とは懈怠なり。
【四七】非所作の加行とは無記の加行なり。
【四八】彼の行とは後生にて造る所の業なり。
【四九】業所感の五趣の果を彼の所依の一切の無記の果と云ふ。
【五〇】不清淨位とは種性住即ち凡夫未發心の位なり。
【五一】清淨位とは勝解行地即ち地前三十心の位なり。
【五二】通達位とは實には見道なれども今は修道をも含む。
【五三】究竟位とは無學果の位なり。
【五四】九相。不清淨位に一相、清淨位に二相、通達位に二相、究竟位に四相、合して九相なり。

若くは通達位は(四)隨順して究竟に趣き、一切煩惱の自性の離繫離垢に由るが故に薩迦耶見を超過し、及び(五)彼れを根本とする諸の惡見趣を超過し、若くは究竟位は(六)安樂成滿し及び三種の變壞を超過す。何等をか名づけて三種の變壞と爲すや。一には老死等の變壞、二には顚倒處の變壞、三には淸淨退失する變壞なり。

、復た次に、云何んが菩薩の教授の中に於ける聲聞の所學なる。謂く諸の貪憂の毗柰耶なるが故に、是れ增上戒學の加行なり。厭患する作意の故に、是れ增上心學の加行なり。補特伽羅無我の性なるが故に、或は法無我の性なるが故に、是れ增上慧學の加行なり。此の中の貪憂は、是れ能く所有毀犯を發起す。又如くは正に除遣せず、如くは已に除遣せず、如くは正に除遣し、如くは已に除遣す。此の四相に由りて、應に自心の不如理に作意して起す所の貪欲、薩迦耶見、及び瞋恚を知るべし。若くは境界に由り、或は復た他に由りて妄計を起す、是の如きを、正に除遣せずと名づく。若くは境界に由り、或は他に由りて不饒益の加行に引奪せらる、是の如きを已に除遣せずと名づく。隨一を除遣せざるに由るが故に當に知るべし隨一も亦た除遣せずと。隨一を除遣するに由るが故に當に知るべし隨一も亦た復た除遣すと。又若し除遣せざれば律儀に住すと雖も增上戒に於て尙ほ毀犯すと名づく。何に況んや不律儀に安住する者をや。又增上心學にして所緣の境に於て散亂し錯誤するは、是れ能く補特伽羅無我に依りて增上慧を修する者を障礙し、薩迦耶見は是れ能く法無我に依りて增上慧を修す

る者を障礙し、自性差別を分別し計する縛は是れ能く此の三學を障礙す。正に〔除〕遣することを修する中に八種の學に違逆する法あり、八種の學に隨順する法あり。何等をか八と爲す。一には唐捐にして耽著し、二には耽著するが故に縛し、三には縛するが故に障礙し、四には障礙するが故に垢れ、五には垢るるが故に災雹〔あり〕、六には雹あるが故に瘡皰〔あり〕、七には瘡皰〔あるが〕故に熱惱し、八には熱惱するが故に諸の煩惱病療治す可きこと難し。此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ八種の學に隨順する法なりと。

復た次に、云何んが善く學ばざる沙門なりや。謂く三種あり、應に知るべし。一には顧みざる沙門、二には（五五）形相同分なるもの、三には軌則、正命、受用、加行、戒見、意樂皆な不同分なるものなり。若くは（五六）廻向の資具は是れ增上戒なり、形相同分なるは是れ增上心及び增上慧なり、（五七）形相同分なるは、是れ彼の行にして意樂は不同分なり。若くは廻向の聲譽は是れ奢摩他支なり、同分あるは此れ毗鉢舍那支なり、同分なるは是れ（五八）倶修支なり、同分なるは是れ（五九）倶資糧支なり、（六〇）同分なるは是れ意樂不同分なり。

復た次に、云何んが善く學する沙門なりや。當に知るべし四種の相に由ると。一には加行の故に、

【五五】形相同分とは外形のみ沙門に同じきも內に正行なきものを云ふ。

【五六】廻向の資具とは菩提に廻向する定慧二學の資糧を云ふ。

【五七】三學の修行の形相は沙門に同じきも內心の意樂は不同なり。

【五八】倶修支とは奢摩他支及び毗鉢舍那支なり。

【五九】倶資糧支とは奢摩他及び毗鉢舍那の資糧なり。

【六〇】止觀の形相は沙門に同じきも其意樂は不同なり。

二には意樂の故に、三には通達するが故に、四には究竟に趣くが故なり。現法の中に於いて厭患する加行に由るが故に、前生の中に於いて相續し成熟する加行に由るが故に、當に知るべし加行圓滿すと。法無我を勝解する意樂に由るが故に、若くは（六二）所應得、若くは（六三）能應得、此の二の言說の自性に於いて執著無きが故に、意趣の義に於いて正に尋求するが故に、但だ言辭のみに隨順せざるが故に當に知るべし意樂圓滿すと。若くは法の眞如に於いて他智に緣らずして自性に通達し雜染無きを以ての故に、世俗の寶及び世俗の生死、涅槃解脫、繫縛の自性に於いて所得無きが故に當に知るべし通達圓滿すと。已に善く一切の雜染の對治を修習するが故に、又眞如に於いて斷壞「の見」無きが故に、及び能く「斷壞の見を」勝伏するが故に當に知るべし究竟に趣くこと圓滿すと。

復た次に、善く學せざる沙門は三種の相に由りて當に知るべし彼れを其の義の如くならずと名づくと、一には意樂衰損し加行具足す、二には意樂具足し加行衰損す、三には意樂衰損し加行衰損するなり。此の中意樂衰損し加行具足するに復た三種あり。一には能く聽いて唯だ此れ喜足す、二には能く說いて唯だ此れ喜足す、三には能く世間の三摩地を證して而も愛味を生じ唯だ此れ喜足するなり。若くは善く學する沙門は唯だ一相のみに由る、當に知るべし意樂具足し加行具足すと。

【六二】**所應得**とは所證の境なり。

【六三】**能應得**とは能證の智なり。

復た次に、云何んが世俗律儀に住する。當に知るべし四種の相ありと。謂く(一)六支尸羅を成就すと雖も而も二種の損害の爲めに尸羅を損害せらる。謂く薩迦耶見の纒に由るが故に、及び毀犯に於いて出離することを了知せざるが故なり。(二)此の二種の過失を遠離すと雖も而も未だ(六三)世間の清淨の律儀を得ず、薩迦耶見を制伏すること能はず。(三)已に世間の清淨の律儀を得、已に薩迦耶見を制伏すと雖も而も法無我性を串習する怖畏を損滅せず尸羅を損壞す。(四)一切の所餘の過失を遠離すと雖も邪なる法無我の勝解及び增上慢の爲めに尸羅を損壞せらる。

復た次に、云何んが勝義律儀に住するや。謂く出世間には一切の煩惱相應せず。能く三界の尸羅を對治す。又四種の律儀に住する中に於いて諸の戲論の法は現所に得可し。若し能く彼の相を寂靜にすれば當に知るべし是れを無漏の尸羅と名づくと。云何んが名づけて諸の戲論の法と爲すや。謂く初めの律儀に住する中に於いて我執の得可きと、若くは我所の執と、若くは毀犯することを作すと、若くは彼を作さざると、若くは失念して行ずると、若くは行ぜざると、第二の律儀に住する中に於て薩迦耶見品の麤重隨行すると、若くは(六四)名の得可きと、若くは(六五)色の得可きと、若くは(六六)當來の生相と、若くは(六七)今時の無相と、若くは纒の寂靜なると、若くは隨眠の故に彼れ寂靜ならざると、

【六三】世間の清淨の律儀とは定共戒なり。
【六四】名とは五蘊の中の心蘊即ち受、想、行、識の四なり。
【六五】色とは五蘊の中の色蘊なり。
【六六】當來に於て身を生ずる相。
【六七】今時未だ身を生ぜざる相。

若くは補特伽羅無我の執と、若くは補特伽羅の執を棄捨すると、若くは即ち彼の補特伽羅無我の執の中に於ける所執の性と、若くは所執の性に非ざると、若くは此に由るが故に（六八）色等の中に於ける（六九）有情の執と、若くは彼の假設する（七〇）讃善の執と、若は能く假設する心語、假設する讃善の執と、第三の律儀に住する中に於いて若くは上［界］に生ずるが故に世間なると、若くは下［界］を捨つるが故に非世間なると、若くは三摩地の依止と、若くは諸欲の依止と、若くは自らの尸羅を恃擧すると、若くは他の尸羅を輕懱すると、第四の律儀に住する中に於いて若くは我が尸羅清淨なりと計すると、若くは自ら性の差別に由りて分別するが故に尸羅を分別するとなり。是の如き等の諸の戲論の法をば無漏戒の中に於いて皆な悉く靜寂にするなり。又即ち此の義と相應し、清淨なる三學に依りて應に所説の伽他を知るべし。當に知るべし福德の資糧の塵垢をして微薄ならしめんが爲めに善士を攝受し、失壞すると無きが故なり。智慧の資糧は甚深なる［文義の］處に於て勝解を起すが故に二の因緣に由つて如來の敎に入る、一には（七一）法住智に由つて深く了別するが故に、二には（七二）眞實智に由つて善く決定するが故なりと。

復た次に、云何んが如來の調伏の方便なる。當に知るべし此に二種ありと、謂く彼の所化と、自體同分なるが故に及び［彼の所化をして己が］勝解［に］同分な［らしむ］るが［爲の］故なり。又（七三）同分を

【六八】色等とは五蘊なり。
【六九】有情の執とは我執なり。
【七〇】讃善とは讃法なり。
【七一】法住智とは三界因果の理法を緣ずる智なり。
【七二】眞實智とは無漏正體智なり。
【七三】是れ自體同分を現する所由なり。

現じて教を受くる心を安住せしめんが爲めの故に、及び（七四）教授に依りて「所化」出離するが故なり。

又正清淨なる加行の教導教授に當に知るべし復た四種ありと。一には雜染とを清淨にする轉依に於ける驚怖の教導、二には雜染を遠離する因緣の教導、三には清淨を遠離する驚怖の因緣の教導、四には第一現法樂住の加行の教導なり。此の中雜染の因緣に二種あり。一には世俗の言說の自性と雜染の自性との執に由つて分別するが故に、二には彼の功德と過失との差別の執に由りて分別するが故なり。二種の相に由りて應に清淨道に於ける驚怖の因緣を知るべし、一には前後の清淨道に於いて雜染を分別するに由るが故に、二には雜染を遠離する分別に由るが故なり。二種の相に由りて應に涅槃清淨に於ける驚怖の因緣を知るべし、一には世俗の言說の自性の執に由るが故に、二には涅槃と增語との想の中に於いて心所有の想を作すが故なり。又寂靜に於ける心所有の想、若くは增語の想を遍く了知するが故に、彼の二の因緣に於いて倶に遠離するが故に當に知るべし是れ第一住の加行の教導なりと。

復た次に、云何んが名づけて密意の語言と爲すや。謂く無二相の智は是れ能く一切の密意の語言の相に悟入す。云何んが無二相なる。謂く諸の名言安足する處の事は彼の自性所有無きに由るが故に、名言熏習の想の所行の自性は有なるが故に說いて無二と爲す。此の無二に於いて若し二執を起さば名づけて雜染と爲し、若し二執無ければ名づけて清淨と爲す。又一切の名言の安足する處の事は、彼の

【七四】是れ勝解を同分ならしむる所由なり。

世俗の言說熏習の想の所行の自性所有無きが故に、彼の熏習智の所行の自性有るに非ざるが故に說いて無二と爲し、此の無二に於て若し二執を起さば名づけて雜染と爲し、若し二執無ければ名づけて淸淨と爲す。此の無二の相に由りて應に知るべし如來の一切の密意の語言に悟入すと。此の中五種の相に由りて名論圓滿し、卽ち敎授の中に於いて五種の相に由りて名果圓滿し、五種の相に由りて名果の勝利圓滿す、當に知るべし皆な密意の語言に依ると。云何んが五種の相に由りて名論圓滿するや。謂く若くは(一)【七五】此の相に由る宣說と、若くは(二)【七六】是の宣說と、若くは(三)【七七】宣說する所と、若くは(四)【七八】是の如き宣說と、若くは(五)【七九】彼の宣說と[に由りて]是の如く圓滿す。云何んが五種の相に由りて名果圓滿するや。謂く(一)無餘依涅槃界と、若くは(二)有餘依涅槃界と、若くは(三)聖道圓滿なると、若くは(四)【八〇】內怨に勝と、若くは(五)【八一】外怨に勝つと[に由りて]是の如く圓滿す。云何んが五種の相に由りて名果の勝利圓滿するや。謂く卽ち是れ(一)大師を供養し、(二)信施の恩を報じ、(三)生死の苦を超え、(四)福田の性に於いて退轉すること無く、(五)法に從つて化生するを如來の子と名づけ、如來に依止するなり。

復た次に、云何んが菩薩藏の敎授の中に於ける勝解の勝利なる。當に知るべし五種の相に由ると。一には建立時に由り卽ち能く映蔽して大富貴、增上の因を感ずるが故に、二には轉依に由るが故に、

【七五】是れ說法の因緣なり。
【七六】是れ說法の見なり。
【七七】是れ所說の法なり。
【七八】是れ說法の儀式なり。
【七九】是れ能說者なり。
【八〇】內怨とは煩惱なり。
【八一】外怨とは天魔なり。

三には卽ち是の處に於いて說の器と作るが故に。四には說者の器と作るが故に、五には身を捨つる時に於いて業清淨なるを見ることを得るが故なり。五種の相に由りて當に知るべし映蔽して大富貴、增上の因を感ずと。所謂(一)此の因能く有量、無量の果を引くが故に、(二)有盡、無盡の法なるが故に、(三)非廣大、廣大なる樂を感ずるが故に、(四)是れ智の資糧、智の自性なるが故に、(五)此に由りて能く彼を引くが故なり。又六種の過失を遠離するに由りて應に身行を知るべし。何等をか名づけて六種の過失と爲すや。一には愁憂相の過失、二には數習を了知せざる過失、三には(八二)二種の相に由る威儀の過失、四には(八三)三種の相に由る怖畏相の過失五には(八四)二種の相に由る(八五)遏履瑟吒の過失、六には身調柔ならざる過失なり。又相ひ慶慰する時に於いて五種の過失を遠離し、應に語行を知るべし。何等をか名づけて五種の過失と爲すや。一には怯怖の過失、二には麤獷の過失、三には佛語を棄捨して不相應の戲論を作す過失、四には如來を讃歎せざる過失、五には同法者に於いて諫誨を施さざる過失なり。又記別の所に於いて解了する時五種の過失を遠離して應に語行を知るべし。何等をか名づけて五種の過失と爲すや、一には證得する所に於いて忘念する過失、二には前後の語言相違する過失、三には道理相違する過失、四には聖敎を敬信する諸天の訶責する過失、五には如來の訶責する過失なり。又五種の過失を遠離するに由りて應に意行を知るべし。謂く現法の

【八二】二種の相とは大疾の威儀と大遲の威儀なり。
【八三】三種の相とは老病死の相なり。
【八四】二種の相とは煩惱、業なり。
【八五】遏履瑟吒は雜染の義也。

義に依りて前の四種あり、後法の義に依りて第五種あり。何等をか名づけて五種の過失と爲す。一には不忍の過失、現在過去の不饒益の事を忍受すること能はざるが故なり。二には覆藏の過失、覆藏に由るが故に、惡作燒惱するが故なり。三には貪染の過失、諸欲及び受用を希求するが故に、怨を出離することを希求するが故なり。四には忘念の過失、不正見を攝受するが故に、斷に於いて心迷亂するが故なり。五には期願の過失、自ら輕賤するに由りて廣大なる諸佛菩薩の加被したまふ所の諸佛の國土の微妙なる願を遠離するが故に、微細なる意樂に由りて諸の佛法を引發するが故に、一切法の殊勝世間の興盛の差別に於いて憍慢を起すが故に、及び彼を願ふが故なり。菩薩藏の教授の勝解の勝利を分別する無量の標釋の中に於いて當に知るべし無量無數の勝解の勝利ありと、此の地の中に於いて餘の決擇の文をば更に復た現ぜざるなり。

攝決擇分中有餘依及び無餘依の二地

是の如く已に菩薩地の決擇を說けり、有餘依、無餘依の二地の決擇をば我れ今當に說くべし。嗢柁南に曰はく、

『(一)離繫と壽行と、轉依と住と差別と、有と常と樂と殊勝と、異性と(二)自在等なり。』

(三)問ふ、有餘依涅槃界の中に於いて現在に轉ずる時一切の煩惱をば當に離繫すと言ふべきや、當に離繫せずと言ふべきや。答ふ、當に離繫すと言ふべし。問ふ、一切の苦に於いて當に離繫すと言ふべきや、當に離繫せずと言ふべきや。答ふ、當に亦たは離繫し、亦たは離繫せずと言ふべし。所以は何ん、若し未來生の所有の衆苦ならば當に離繫すと言ふべく、若し現在生の心所有の苦をも亦た當に離繫すと言ふべく、若し現身の中の飢苦、渴苦、界不平の苦、時節變の苦及び餘の所有逼迫等の苦ならば當に離繫せずと言ふべし、此は現前に行ずるに由るが故に、諸の煩惱の繫縛する所に非ざるが故なり。

(四)問ふ、若し一切の阿羅漢皆な心自在を得ば何の因緣の故に壽行を捨て般涅槃に入らず、苦に逼め

【一】此頌の中に十四門を標擧す。
【二】愛悪と種姓と秘密とを略す。
【三】以下頌の十二門を次第に釋す。初め第一門離繫を釋す。
【四】第二門、壽行を釋す。

らると雖も而も久住するや。答ふ、功能に差別あるが故なり、所以は何ん、㈤一分の阿羅漢は能く壽行を捨て、一分は能はず、一分の阿羅漢ありて能く壽行を増し、一分は能はざるが故なり。

㈥問ふ、若し阿羅漢にして先の所有六「根」處の生起の如き、卽ち是の如き住相續して滅せず、變異あること無ければ更に何等の異れる轉依の性ありて而も六處の相續に非ずして轉ずるや。若し更に異れる轉依あること無しといはば何の因緣の故に㈦前後二種の依止相似して而も今後時の煩惱轉せず、聖道轉ずるや。答ふ諸の阿羅漢には實に轉依あり、而も此の轉依と其の六處と異不異なる性は俱に說く可らず。何となれば此の轉依は眞如淸淨に顯はさるる眞如の種性、眞如の種子、㈧眞如の集成なるに由り、而も彼の眞如と其の六處との異不異なる性は俱に說く可らざればなり。不可說の義は前に已に辯せしが如し。是の故に若し所得の轉依と其の六處と異なりと爲んや、異ならざるやと問ふは如理なる問に非ず。若し此の轉依に體あること無しといはば應に前に說ける所の如き過失あるべし。謂く阿羅漢の煩惱は應に行ずべく、道は應に行ぜざるべきなり。是の故に當に知るべし轉依の性ありと。世尊此に依つて轉依の體性をば密意に說いて言はく、

「遍計の自性の中、有執、無執の二種の習氣に由るが故に、雜染、淸淨を成ず。

【五】利根の羅漢は壽行を捨て或は增すことを得、鈍根は能はざるなり。

【六】第三門轉依を釋す。轉依とは依は所依の身にして因位に於ける六根處の煩惱具足の身を轉捨して聖道涅槃の淸淨身を轉得するを云ふ。卽ち轉得せる淸淨身を轉依と云ふ。

【七】前後とは羅漢の因位を前と云ひ果位を後と云ふ。

【八】眞如の集成とは眞如が萬德を集成するを云ふ。

是れ卽ち有漏界なり、是れ卽ち無漏界なり、是を卽ち轉依と爲す、淸淨にして上あると無し。」屠牛師或は彼の弟子の如き、利き牛刀を以て牛を刹害し、已に內の一切に於いて斫り、刺し、椎ち、割り、骨肉、筋脈皆な悉く斷絕し、復た其の皮を以て張りて之を蔽へるを當に此の牛と皮とは離に非ず合に非ずと言ふべし。是の如く諸の阿羅漢は既に轉依を得、「智」慧の利刀もて一切の結縛、隨眠、隨煩惱の纏を斷截し已れるに由りて當に六處の皮と離に非ず合に非ずと言ふべし。又已に轉依せる諸の觀行者は衆相を取ると雖も當に知るべし昔取りし所と差別すと。此の取る所の相は猶し眞如の自らの內に證する所は言說を以て、他に於いて我が所觀の相は是の如し是の如しと示す可らざるが如し。

(九)問ふ、諸の阿羅漢の有餘依涅槃界の中に住するは何等の心に住し、無餘依涅槃界に於いて當に般涅槃すべきや。答ふ、一切の相に於いて復た思惟せず、唯だ正に眞の無相界を思惟し、漸く滅定に入り、(一〇)轉識等を滅し、次に(一一)異熟識は所依止を捨つ、異熟識取ることあること無きに由るが故に諸の轉識等は復た生ずることを得ず、唯だ餘の淸淨無爲にして垢を離れたる眞の法界のみ在るなり。此の界の中に於いて般涅槃し已つて復た天、龍、藥叉若くは健達縛若くは緊捺洛若くは阿素洛若くは人等の數に墮せず。要を以て之を言はば所有

【九】第四門、住を釋す。

【一〇】轉識とは第八阿賴耶識より轉生せる前七轉識卽ち前七識なり。

【一一】異熟識とは業より異熟して生じたる根本第八阿賴耶識にして是れ有情輪廻の主體なり。

（一二）有情の假想施設は遍ねく十方の一切の界、一切の趣、一切の生、一切の生類、一切の得身、一切の勝生、一切の地の中に於いて此れ更に復た彼の數に墮在するに非ず。何を以ての故に、此の眞界は諸の〔分別〕戯論を離れ、唯だ成辦する者の内の自證なるに由るが故なり。

（一三）問ふ、有餘依涅槃界の中若しくは無餘依涅槃界の中に於いて已に般涅槃せる諸の阿羅漢に何の差別ありや。答ふ、有餘依に住するは衆の數に墮在し、無餘依に住するは衆の數に墮せず、有餘依に住するは猶ほ衆苦あり、無餘依に住するは永く衆苦を離れ、有餘依に住するは所得の轉依猶ほ六〔根〕處と而も共に相應し、無餘依に住するは永く相應せざるなり。

問ふ、若し無餘依涅槃界の中にて已に般涅槃せるものの所有の轉依は永く六處と相應せずといはば彼れ既に六處の所依あること無し、云何にして而も住するや。答ふ、阿羅漢の得る所の轉依は六處を因と爲すに非ず、然も彼れは唯だ眞如の境を縁じて道を修するを以て因と爲す、是の故に六處若くは有り若くは無きすら尚ほ轉依の變異性を成ずること無し、何に況んや殞沒せんや。又復た此の〔無餘依涅槃〕界は（一四）遍知する所に非ず、（一五）應に斷ずべき所に非ざるが故に滅す可らざるなり。

（一六）問ふ、無餘依涅槃界の中に於いて般涅槃し已つて得る所の轉依は當に是れ有なりと言ふべきや、

（一二）有情の假想施設とは五蘊假和合なる身を云ふ。

（一三）第五門、差別を釋す。

（一四）苦諦をば遍知すべし然るに此の涅槃界は苦諦に非ざるが故に遍知する所に非ず。

（一五）集諦をば應に斷ずべし然るに此の涅槃界は集諦に非ざるが故に斷ずべき所に非ず。

（一六）第六門、有を釋す。

當に非有なりと言ふべきや。答ふ、當に是れ有なりと言ふべし。問ふ、當に何の相なりと言ふべきや。答ふ、無戲論の相なり。又善淸淨なる法界を相と爲す。問ふ、何の因緣の故に當に是れ有なりと言ふべきや。答ふ、有餘依及び無餘依涅槃界の中に於いて此の轉依は性皆な(一七)無動の法なり、無動の法なるが故に先有後無は道理に應ぜず。又此の法性は衆緣より生ずるに非ず、生無く滅無く、然も譬へば水の澄淸なる性の如く、譬へば眞金の調柔なる性の如く、譬へば虛空の雲霧を離れたる性の如し、是の故に轉依は當に是れ有なりと言ふべし。

(一八)問ふ、當に是れ常なりと言ふべきや、當に無常なりと言ふべきや。答ふ、當に是れ常なりと言ふべし。問ふ、何の因緣の故に當に是れ常なりと言ふべきや。答ふ、淸淨なる眞如の所顯なるが故に、緣生に非ざるが故に、生滅無きが故なり。

(一九)問ふ、當に是れ樂なりと言ふべきや、當に樂に非ずと言ふべきや。答ふ、勝義の樂に由りて當に是れ樂なりと言ふべし、樂を受くるに由りて說いて名づけて樂と爲るには非ず、何を以ての故に、一切の煩惱及び生ずる所の苦をば皆な超越するが故なり。

(二〇)問ふ、無餘依涅槃界の中に於いて般涅槃する者は少分の差別ありて意趣殊異なりと爲すや不や。答ふ、一切あること無し。所以は何ん、此の界の中には下中上品を安立することを得可きに非ず、高

【一七】無動とは不動、眞如にして不生不滅常住なるを云ふ。
【一八】第七門、常を釋す。
【一九】第八門、樂を釋す。
【二〇】第九門、殊勝を釋す。

下勝劣此は是れ如來、此は聲聞等なりと施設す可らざればなり。問ふ、何の因緣の故に差別あると無きや。所以は何ん、諸の聲聞等は餘殘の障あり、無餘依涅槃界の中に於て而も般涅槃し、佛は一切の障永く所有無し、「何故に差別なきや」。答ふ、有餘依涅槃界の中に住するには有障、無障を安立するとを得可く、無餘依涅槃界の中に住するには畢竟して障として差別を立つべき無し。何を以ての故に、此の界の中に於ては一切の衆相及び諸の麤重皆な永く息むが故に、皆な永く滅するが故なり。所以は何ん諸の阿羅漢は有餘依涅槃界に住する時一切の衆相悉く永く滅するには非ず、異熟の麤重も亦た永く滅するには非ず、彼に由りて煩惱の習氣ありと說き、即ち彼の相及び麤重を觀待して障ありと安立す、無餘依涅槃界に住する時は彼れ永くあること無し、是の故に當に知るべし此の界の中に於いては有障、無障の差別あること無しと。問ふ、若し此の界の中に永く障あること無くんば諸の如來の一切の障を離れたまへるが如く阿羅漢等も亦た復た是の如し。何の因緣の故に阿羅漢等は如來に同じく諸佛の事を作さざるや。答ふ、(二)彼れ修する所の本の弘願を闕くが故に、又彼の種類種性爾なるが故に阿羅漢等は決定して還つて意樂を起すこと有ること無く而も般涅槃す。是の故に諸の作事を作すこと能はず。

(三)問ふ、無餘依涅槃界の中に於いて般涅槃する者の所有の無漏界は此れ諸色と當に異ありと言ふ

【二】聲聞は修行の初發心に於て自利のみ目的とし利他の弘願なきが故に、阿羅漢に至りても佛の如き利他の事を作さず。

【三】第十門、異性を釋す。

べきや、當に異無しと言ふべきや。答ふ、當に異に非ず亦た不異に非ずと言ふべし。諸色と〔無漏界と〕の如く諸受と〔無漏界と〕の等きも當に知るべし亦爾なりと。一切の行と一切の界と一切の趣と〔無漏界と〕も亦た復た是の如し。

（三三）問ふ、無餘依涅槃界の中に於いて般涅槃する者は色等の法に於いて當に自在を獲得すと言ふべきや、當に自在を得ずと言ふべきや。答ふ、當に自在を獲得すと言ふべし。問ふ、此の所得の自在は當に能く現在前すと言ふべきや、當に能く現在前せずと言ふべきや。答ふ、一分は能く現左前し、一分は能く現在前せず。謂く諸の如來は無餘依涅槃界の中に於いて般涅槃し已つて能く〔自在を〕現在前したまふも所餘のものは現在前せしむること能はず。問ふ、若し此の界の中にて諸の戯論を離れ、此の因緣に由りて衆數に墮せざれば云何んが復た能く起つて現在前するや。答ふ、先に正しき弘願を發起するに由るが故に、又彼れと相似せる道を修習する勢力に由るが故なり。譬へば正に滅盡定に入る者是れ我れ滅定に於いて當に還出す可く、或は出で已つて住せんと念ずること無しと雖も、然も先時の加行力に由るが故に還つて定より出で心行あるに依りて、而も起つて遊行するが如し、當に知るべし此の中の道理も亦た爾なりと。

（三四）問ふ、（三五）菩提に廻向する聲聞は無餘依涅槃界の中に住して能く阿耨

【三三】第十一門、自在を釋す。
【三四】第十二門、發趣を釋す。
【三五】菩提に廻向する聲聞とは不定性の聲聞なり、定性の聲聞は唯自利にして無餘涅槃のみを目的とす、反之不定性の聲聞は心を回して大乘に發趣

多羅三藐三菩提に發趣すと爲んや、有餘依涅槃界に住「して發趣」すと爲んや。答ふ、唯だ有餘依涅槃界の中に住して此の事あるべし。所以は何ん、無餘依涅槃界の中にては一切發起する事業を遠離し、一切の功用をば皆な悉く止息するを以てなり。問ふ、若し唯だ有餘依涅槃界の中に住して能く阿耨多羅三藐三菩提に發趣すといはば、云何んが但だ一生のみに由りて便ち能く阿耨多羅三藐三菩提を證得するや。所以は何ん、阿羅漢等すら尙ほ當に所餘の一生あると無かるべし、何に況んや當に多生相續することあるべきや。答ふ、(三六)彼れ要らず當に諸の壽行を増して方に能く成辦するに由る。世尊は多分此の菩提に廻向する聲聞に依りて密意にて説いて言はく、「物類善男子は若くは善く四神足を修し已つて能く一劫或は餘の一劫に住することあり」と。餘の一劫とは、此の中の意一劫より過ぎたるを説きたまへるなり。彼れ是の如く壽行を増益して能く阿耨多羅三藐三菩提に發趣すと雖も、而も修行する所極めて遲鈍を成じ、涅槃を樂しむが故に初心始業の菩薩に如かず。彼れ既に是の如く壽行を増し已つて有根身を留め、別に化身と作り、同法者の前に方便示現して無餘依涅槃界に於いて而も般涅槃す。此の因緣に由りて皆な是の念を作さく、某の名の尊者は無餘依涅槃界に於いて已に般涅槃せりと。彼れ留むる所の有根の實身を以て卽ち此の界の贍部洲の中に於いて其の所樂に隨

し菩提涅槃を目的とし自利利他を成ぜんとす、之を菩提に廻向する聲聞と云ふ。

【三六】不定性の聲聞の大乘に廻向せる者にして預流果に在る者は八萬劫、一來果に在る者は六萬劫、不還果に在る者は四萬劫、阿羅漢果に在る者は二萬劫、獨覺の阿羅漢果に在る者は一萬劫の修行を經て般涅槃し佛果に入る。

つて遠離して住するを一切の諸天すら尙ほ觀ること能はず、何に況んや其の餘の衆生能く見んや。彼れ涅槃に於いて多く樂住するが故に遍く彼彼の世界に遊行し、佛菩薩に親近し供養する中に於いて及び菩提の資糧を修習する諸の聖道の中に於いて若し放逸なる時は諸佛菩薩數數覺悟したまふ、覺悟を被り已つて修行する所に於いて能く放逸ならざるなり。

(二七)問ふ、若し阿羅漢は菩提に廻向し、便ち能く阿耨多羅三藐三菩提を證得すといはば、何の因緣の故に一切の阿羅漢皆な無上菩提に廻向せざるや。答ふ、彼の種性差別あるに由るが故なり。所以は何ん、諸の阿羅漢には現に種性を見るに多くの差別あり、謂く或は見るに諸の阿羅漢の(二八)倶分解脫なるあり、或は復た見るに唯だ(二九)慧解脫にして無餘依涅槃界に於いて般涅槃するあればなり。是の故に當に知るべし彼の種性に差別あるに由るが故に、一切の阿羅漢は皆な能く無上菩提に廻向するに非ずと。

復た次に、菩提に廻向する聲聞は或は〔有〕學位に於いて卽ち能く聲聞を求むる願を棄捨し、或は無學位にて方に能く棄捨す、彼の根性に差別あるに由るが故に、所待の衆緣に差別あるが故なり。菩提に廻向する聲聞緣に遇ふに由るが故に無上乘に乘して般涅槃すること是の如くなるが如く、菩薩設し如來及び諸の菩薩の爲めに棄捨せられ、棄捨〔せらるる〕に因るが故に若し尤も重き下劣乘を求めて般

【二七】第十三門、種性を釋す。

【二八】倶分解脫とは阿羅漢にして滅盡定を得たるもの、是れ慧と定との障を倶に斷じ解脫せるなり。

【二九】慧解脫とは阿羅漢にして未だ滅盡定を得ざるもの、是れ唯だ涅槃を證する智慧の障のみを斷じ解脫せるなり。

涅槃する縁に遭はば應に下乘に乘じて般涅槃すべきも然も處無し。諸佛菩薩是の如く放逸にして彼を棄捨すべきこと無ければ定んで是の處無きなり。

復た次に、菩提に廻向する聲聞若し隨つて阿耨多羅三藐三菩提を證得すれば爾の時卽ち如來に同じく無餘依涅槃界に於いて般涅槃す。問ふ、菩提に廻向する聲聞は本より已來當に聲聞種性なりと言ふべきや、當に菩薩種性なりと言ふべきや。答ふ、當に不定種性なりと言ふべし。譬へば不定聚の諸の有情類ありと安立するが如く、般涅槃の法性聚の中に於いて、當に知るべし、此は是れ不定種性なりと。

〔三〇〕復た次に、彼れ卽ち此の住處に於いて轉ずる時死畏無きが如く、是の如く亦老病等の畏無し、如來も亦た爾なり。彼れ及び所餘の無餘依涅槃界の中に於いて般涅槃する者は、十方界に於いて當に知るべし、究竟して思議す可らずと。數數一切の有情の諸の利益の事を現作すること首楞嚴三摩地の中に說く幻師の喩、若くは商主の喩、若くは船師の喩の如し、當に知るべし此の中の道理も亦た爾なりと。是れを最極の如來の秘密と名づく。此れ及び餘の種種の差別せる如來の秘密に於いて〔三一〕勝解行地の修行の菩薩は下忍轉ずる時、其の勝解の差別に隨つて轉じ、此れより轉た勝進して〔三二〕增上意樂地に入る、是の如く乃至九地の中に於いて展轉して增進し、勝解淸淨なり。第十地の中にて此の勝解に於いて最も善

【三〇】第十四門、秘密を釋す。
【三一】勝解行地とは地前三十心の位なり。
【三二】增上意樂地とは初地なり。

く清淨にして彼の如來の諸の秘密の中に於いて是の諸の菩薩は應に正しきに隨つて轉ず。當に知るべし如來の是の如き秘密は思議す可らず、度量す可らず、一切の度量する境界を超過すと。

(三三)問ふ、法決擇に於ける總義云何ん。答ふ、

『(三四)品類の差殊に由りて、而も(三五)諸法を建立す、即ち彼の釋難に於いて、一行等を分別す。』

是の如く應に此の中の總義を知るべし、此の地の中に於いて餘の決擇の文をば更に復た現せざるなり。當に知るべし彼の一一の地の中に於いて皆な無量なる決擇の差別ありと。我れ今且らく略して少分を開示す、此の方隅に由り、此の所學に由り此の教導に由りて、諸の有智の者は餘をば類して應に思ふべし。

【三三】本論第五十一卷以來の十七地の攝決擇分を總結す。
【三四】品類とは境行果の品類差別なり。
【三五】諸法とは十七地の諸法なり。

(一)卷の第八十一

攝釋分の上

是の如く已に說いて攝決擇を釋せり。云何んが攝釋なる。(二)總の嗢柁南に曰く、

『體と釋と文と義と法と、起と義と難と次と師と、說衆と聽と讚佛と、略廣と學の勝利なり。』

(三)云何んが體と爲す、謂く契經の體なり、略して二種あり、一には文、二には義なり。文は是れ所依、義は是れ能依なり。是の如き二種を總じて一切所知の境界と名づく。

(四)云何んが釋と爲す、謂く略して五あり、一には法、二には等起、三には義、四には釋難、五には次第なり。

(五)云何んが文と爲す、謂く六種あり、一には名身、二には句身、三には字身、四には語、五には行相、六には機請なり。

【一】以下第八十一、第八十二の二卷には瑜伽五分の中の第三攝釋分にして諸經の儀則方法を解釋す。
【二】此の總頌の中に十四門を列す。
【三】以下順次頌の十四門を釋す。第一門、體を釋す。
【四】第二門、釋を釋す。
【五】第三門、文を釋す。

名身とは、謂く共に知る增語なり。此に復た略して說かば十二種あり、一には假立の名、二には實事の名、三には同類に相應する名、四には異類に相應する名、五には德に隨ふ名、六には假說の名、七には同じく了ずる所の名、八には同じく了ずる所に非ざる名、九には顯名、十には不顯名、十一には略名、十二には廣名なり。假立の名とは、謂く內に於いて假に我及び有情、命者等の名を立て、外に於いて假に瓶衣等の名を立つるなり。實事の名とは、謂く眼等の色等の諸根の義の中に於いて眼等の名を立つるなり。(六)同類に相應する名とは、謂く有情、色、受、大種等の名なり。(七)異類に相應する名とは、謂く佛(八)德友に青黃等の名を授くる〔が如き〕なり。(九)德に隨ふ名とは、謂く變礙するが故に色と名づけ、領納するが故に受と名づけ、光を發するが故に日と名づくる是の如き等の名なり。假說の名とは、謂く貧を呼んで富と名づけ、若くは餘の所有義を觀待せずして其の名を安立するなり。同じく了ずる所の名とは、謂く〔衆人〕共に解想する所なり。此と相違するは是れ同じく了ずる所に非ざる名なり。顯名とは、謂く其の義了し易きなり。不顯名とは、謂く其の義了じ難きなり。(一〇)達羅弭荼の明呪等の如し。略名とは、謂く一字の名なり、廣名とは、謂く多字の名なり。

【六】有情、色、受等の名は總じて一切有情の同類に通ず、之を同類に相應する名と云ふ。
【七】他の青黃等の名を或る一人の別名とするを異類に相應する名と云ふ。
【八】德友とは佛弟子のこと。
【九】德とは諸法の上に本來具へたる德相義理のこと。
【一〇】達羅弭荼(Dravila)。昔達羅弭荼國(師子國のこと)に仙人あり、國名に從つて達羅弭荼と名く、此の仙人の明呪は其の義難解なり。

句身とは、謂く名字の圓滿せるなり。此に復た六種あり、一には圓滿せざる句、二には圓滿せる句、三には所成の句、四には能成の句、五には標句、六には釋句なり。圓滿せざる句とは、謂く文究竟せず、義究竟せざるなり。當に知るべし第二句に由るが故に方に圓滿することを得と。

「諸惡をば作すこと莫く、諸善をば奉行し、善く自心を調伏す、是れ諸佛の聖教なり」

と說くが如し。若し唯だ「諸惡」と言ふのみならば、則ち文究竟せず。若し「諸惡は」と言はば則ち義究竟せず、更に「作すこと莫れ」を加へて方に圓滿することを得、卽ち圓滿せる句なり。所成の句とは、謂く前句は後句に由りて方に成立することを得るなり。

『諸行は無常なり、起盡ある法なり、生ぜるものは必ず滅するが故に、
彼の寂を樂と爲す』

と說くが如し。此の中「諸行は無常なり」を成ぜんが爲めの故に、次に說いて「起盡ある法なり」と言ふ、前は是れ所成、卽ち所成の句なり、後は是れ能成、卽ち能成の句なり。標句とは（二）「善性」と言ふが如し。釋句とは謂く「（三）正趣の善士」なり。

字身とは、謂く若くは究竟し、若くは究竟せざる名句の所依の（三）四十九字なり。

此の中（四）欲を名の首と爲し、名を句の首と爲す。句は必ず名あり、名は必ず字あり。若し唯一字

【二】善性とは所修の善法を云ふ。

【三】正趣の善士とは能修の人なり、能修の人を擧げて所修の善法を釋す、是れ釋句なり。

【三】四十九字は悉曇字數にして摩多十四字、體文三十五字合して四十九字なり。

【四】欲、想と尋伺とは並に名を發起す。

のみならば則ち句を成ぜず。又若し字あつて名に攝せざる所ならば唯だ字のみにして名無し。問ふ、何の因緣の故に名等の三種の身を施設するや。答ふ、諸の(一五)增語觸より生ずる所の受を領納せしめんが爲めの故なり。問ふ、名は是れ何の義なりや。答ふ、能く種種共に了知する所ならしむるが故に名づけて名と爲し、又能く意をして種種の相を作さしむるが故に名づけて名と爲し、又語言の呼召する所に由るが故に名づけて名と爲し、諸名を攝受して究竟して現見せざる義を顯了するが故に名づけて句と爲し、隨つて名句を顯はすが故に名づけて文と爲す。世尊の增語、增語路を說きたまへるが如し、乃至廣く說きたまへり。此の中增語とは、謂く(一六)一切衆の同類相應するを增語と名づけ、(一七)路とは謂く並に衆の同類能く彼を起さんと欲するが故なり。詞とは謂く彼の相應の語なり、又卽ち此の語は各別に彼彼の處に於いて若くは標し若くは釋す、彼の所依の處を名づけて彼の路と爲す。施設とは、謂く一一に分別し施設するなり。彼の所依の處を建立して名づけて彼の路と爲す。欲は卽ち是れ詞なり、別の欲あること無し、此れ卽ち增語を施設するの路なり。又名身等に略して六種の依處あり、一には法、二には義、三には補特伽羅、四には時、五には數、六には處所なり。彼を廣く分別することは當に知るべし已に聞所成地「に說ける所」の如しと。

【一五】增語觸。名は能く言語を增生するが故に增語と云ひ、彼の增語より生ずる觸を增語觸と云ふ。

【一六】一名に對して衆人同じく解して其の名の上に其の言語を增す。

【一七】路とは開生の義、欲心は名等を開生するが故に欲心を路と云ふ。

語とは當に知るべし略して八分を具ふと。謂く先首、美妙等にして彼の語は文句等と相應し乃至委に〔一八〕分資糧なるに由るが故に能く正法を說くなり。(一)先首の語とは涅槃宮に趣くを先首と爲すが故なり。(二)美妙なる語とは其の聲淸美なること羯羅頻迦の音の如くなるが故なり。(三)顯了なる語とは、謂く詞句文皆な善巧なるが故なり。(四)解し易き語とは巧なる辯說なるが故なり。(五)聞くことを樂ふ語とは法義を引くが故なり。(六)依ること無き語とは他の己を信ずるを希望するに依らざるが故なり。(七)違逆せざる語とは量を知つて說くが故なり。(八)無邊の語とは廣大の善巧なるが故なり。是の如き八種の語に當に知るべし略して三德を具ふと。一には趣向の德、謂く初の一種なり。二には自體の德、謂く次の二種なり。三には加行の德、謂く所餘の「五」種なり。(一)〔一九〕相應とは、謂く名句文身を次第に善く安立するが故に又〔二〇〕四種の道理相應するに依るが故なり。(二)助作とは能く次第を成ずるが故なり。(三)隨順とは、謂く次第を解釋するが故なり。(四)淸徹とは文句顯了なるが故なり。(五)淸淨なる資助とは善く衆の心に入るが故なり。(六)相稱とは衆會するが如くなるが故に、供に應ずるが故に、法に稱ふが故に、義を引くが故に、時に順ずるが故なり。(七)常委の分資糧とは審悉に作す所恆常に作す所なるが故に常委と名づく。彼の分とは、謂く〔二一〕正見等にして此れは是れ彼の資糧なるが故なり。

〔一八〕分資糧とは三十七科の菩提分法のこと。
〔一九〕以下八種の語一一に具ふる七德を擧ぐ。
〔二〇〕四種の道理とは一に觀待道理、二に作用道理、三に證成道理、四に法爾道理なり。
〔二一〕正見等とは八正道なり。

行相とは、謂く（二二）諸蘊と相應し（二三）諸界と相應し（二四）諸處と相應し（二五）緣起と相應し（二六）處非處と相應し（二七）念住と相應する、是の如き等の相應する語言なり、或は聲聞の說、或は如來の說、或は菩薩の說、是れを行相と名づく。

機請とは、謂く〔對〕機の請問に因りて言說を起すなり、此れ復た根等差別して當に知るべし二十七種の補特伽羅ありと。此の中根の差別に由るが故に二種を成す、一には鈍根、二には利根なり。行の差別に由るが故に（二八）七種を成ず、謂く貪等の行なり、聲聞地に已に說けるが如し。衆の差別に由るが故に二種を成ず、一には在家衆、二には出家衆なり。願の差別に由るが故に三種を成ず、一には聲聞、二には獨覺、三には菩薩なり。不救不可救の差別に由るが故に二種を成ず、謂く般涅槃法と不般涅槃法なり。加行の差別に由るが故に九種を成ず、一には已に正法に入れるもの、二には未だ正法に入らざるもの、三には障礙あるもの、四には障礙無きもの、五には已に成熟せるもの、六には未だ成熟せざるもの、七には具縛のもの、八には不具縛のもの、九には無縛のものなり。種類の差別に由るが故に二種を成ず、一には人、二には非人なり。

是の如き六文に總じて四相あり、說いて名づけて文と爲す。一には所說の相、謂く（二九）名身等の行

【二二】諸蘊とは五蘊なり。
【二三】諸界とは十八界なり。
【二四】諸處とは十二處なり。
【二五】緣起とは十二因緣なり。
【二六】處非處とは理非理なり。
【二七】念住とは四念住なり。
【二八】七種とは貪行、瞋行、癡行、著我行、思覺行、三毒等分行、薰塵行なり。
【二九】語は能說にして前なり、名身等は所說にして後なり。能所前後の關係なり。

相を後と爲すなり、二には〔三〇〕所爲の相、謂く機請に攝する二十七種の補特伽羅なり、三には能說の相、謂く語なり、四には說者の相、謂く聲聞・菩薩及與び如來なり。是の如き六種は皆な文を顯はす。若し一種を闕けば義を顯はすこと能はず、能く義を顯はすに由る是の故に文と名づく。

〔三一〕云何んが義と爲すや。當に知るべし略して十種ありと。一には地の義、二には相の義、三には作意等の義、四には依處の義、五には過患の義、六には勝利の義、七には所治の義、八には能治の義、九には略義、十には廣義なり。

地の義とは略して五地あり、一には資糧地、二には加行地、三には見地、四には修地、五には究竟地なり。又廣く分別すれば〔三二〕十七地あり、謂く五識身地を初と爲し、無餘依地を後と爲す。

相の義とは當に知るべし五種の相ありと。一には自相、二には共相、三には假立相、四には因相、五には果相なり。是の如き五相は思所成地に已に辯ぜるが如し。復た五相あり、一には異門の相、二には瑜伽の相、三には轉異の相、四には雜染の相、五には清淨の相なり。是の如き五相は當に知るべし前の處處に分別せしが如しと。復五相あり、一には所詮の相、二には能詮の相、三には此の二相應する相、四には執著の相、五には不執著の相なり。所詮の相とは、謂く〔三三〕相等の五法なり、五事の中に已に說けるが如し。能詮の相とは、謂く卽

〔三〇〕所爲とは教所被の機根のこと。
〔三一〕第四門。義を釋す。
〔三二〕十七地とは瑜伽本地分の十七地なり。
〔三三〕相、名、分別、正智、眞如。

ち彼の依止する名等に於いて自性の差別を隨說せんと欲するが爲めの所有語言なり。應に知るべし此れ卽ち是れ遍計所執の自性の相なりと。此の遍計所執の自性に差別の名あり、所謂亦たは遍計所執と名づけ、亦たは和合所成と名づけ、亦たは增益せらるる相と名づけ、亦たは虛妄の所執と名づけ、亦たは言說の所顯と名づけ、亦たは文字の加行と名づけ、亦たは唯だ音聲のみありと名づけ、亦たは體相あること無しと名づく、是の如き等の類の差別をば應に知るべし。此の二相應する相とは、謂く所詮能詮更互に相應す、卽ち是れ〔三四〕遍計所執の自性〔三五〕所依止を執するなり。執著の相とは、謂く諸の愚夫無始の時より來た相續し流轉する遍計所執の自性の執及び彼の隨眠なり。不執著の相とは、謂く已に諦〔理〕を見たる者實の如く遍計所執の相及び彼の習氣を了知して解脫するなり。若し正に分別することは思所成地の如く應に其の相を知るべし。

作意等の義とは、謂く七種の作意卽ち了相等なり、前の聲聞地に已に說けるが如し。復た十智あり、一には苦智、二には集智、三には滅智、四には道智、五には法智、六には種類智、七には他心智、八には世俗智、九には盡智、十には無生智なり、此れ亦た前の聲聞地に辯ずるが如し。復た六識身あり所謂眼識乃至意識なり、此れ亦た前の五識身地意地に已に辯ずるが如し。復た九種の徧知あり、一には欲界繫見苦集所斷斷徧知、二には色無色界繫見苦集所斷斷徧知、三には欲界繫見滅所斷斷徧知、四

【三四】能遍通計の心。
【三五】所依止とは所遍計の性なり。

には色無色界繫見滅所斷斷徧知、五には欲界繫見道所斷斷徧知、六には色無色界繫見道所斷斷徧知、七には順下分結斷徧知、八には色貪盡徧知、九には無色貪盡徧知なり。三摩呬多地に已に其の相を辯せるが如し。復た三解脱門あり、謂く空、無願、無相なり。當に知るべし亦た三摩呬多地に已に其の相を辯せるが如しと。此の中應に當に諸法は幾種の作意の思惟する所、幾の智の知る所、幾の識の識る所、幾種の徧知の徧知する所、幾の解脱門の解脱する所なりやと分別すべく、是の如き等の無量の觀門を以て應に諸法を觀ずべし。

依處の義とは、略して三種あり。一には事の依處、二には時の依處、三には補特伽羅の依處なり。

事の依處とは、復た三種あり、一には〔三六〕根本の事の依處、二には〔三七〕得方便の事の依處、三には他を悲愍する事の依處なり。根本の事の依處に復た六種あり、一には善趣、二には惡趣、三には退墮、四には昇進、五には生死、六には涅槃なり。得方便の事の依處に復た十二種あり、謂く十二種の行なり。一には欲行、二には離行、三には善行、四には不善行、五には苦行、六には非苦行、七には順退分行、八には順進分行、九には雜染行、十には清淨行、十一には自義の行、十二には他義の行なり。他を悲愍する事の依處に復た五種あり、一には欲を離れしめ、二には示現し、三には教導し、四には讚勵し、五には慶喜するなり。

〔三六〕根本の事の依處とは生死或は涅槃の果體なり。
〔三七〕得方便の事の依處とは前の果體の因なり、得と云ひ、方便と云ふは共に因の別名なり。

此の中善趣とは、謂く人天なり。惡趣とは、謂く諸の惡趣なり。退墮とは、復た二種あり、一には(三八)不方他、二には(三九)方他なり。初めは謂く自然に壽命退滅するなり、壽命の退滅するが如く是の如く色力、財富、安樂、名稱、辯才等の退滅するも當に知るべし亦た爾なりと。方他とは、謂く族姓退滅し、自在增上退減し、宗業を薄少にし、言威肅ならず、智慧弊惡にして廣大なる色聲及び香味觸を獲得すること能はず、受用する所の廣大なる事の中に於いて心喜樂せざるなり、是の如き等の類を名づけて退墮と爲す。此れと相違するを其の所應に隨つて名づけて昇進と爲す。生死とは、謂く卽ち善趣惡趣に墮し昇進するなり。涅槃とは、謂く有餘依及び無餘依の二涅槃界なり。

欲行とは、謂く(四〇)十種の受用欲の中に說けるが如し。離行とは、謂く卽ち彼の受用する所の事に於いて無常等と知り已つて厭うて出家し、禁戒を受持し、根門を守る等なり。善行とは、謂く施、戒、(四一)修の善有漏の行なり。不善行とは、謂く(四二)三種の惡行なり、苦行とは、謂く露形、無衣是の如き等の類なり乃至廣く說けり。非苦行とは、謂く如法に得る所の所有安樂を喜捨せず、二邊所謂欲樂行を受用する邊及與び自らの苦行を受用する邊を遠離し、中道に依止して如法に衣服等の事を追求し、及び正に受用するな

【三八】不方他とは他人に比較して退墮せりとするにあらず自己一人に就て前より退減せりとするなり。

【三九】方他とは他人に比較して自己退減せりとするなり。

【四〇】第二卷參照。

【四一】修とは四無量を修するなり。

【四二】三種の惡行とは前の善行に反して(一)施さず(二)戒を保たず(三)四無量を修せざるなり。

り。順退分行とは、謂く所有行能く壽等の諸の昇進する事を障ゆるなり、此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ順進分行なりと、鸚鵡經に說くが如し。雜染行とは、略して三種あり、一には業雜染、二には煩惱雜染、三には流轉雜染なり。當に知るべし此の中九の根本の句ありと。謂く業雜染に三句あり、一には貪欲、二には瞋恚、三には愚癡なり。煩惱雜染に四句あり、卽ち〔四三〕四顚倒なり。流轉雜染に二句あり、謂く無明及び有愛なり。所以は何ん、〔四四〕三の不善根に由り種種なる業雜染を生起するが故に、四の顚倒に由り能く種種なる煩惱雜染を發するが故に、煩惱生じ已つて無明門に由りて、諸の出家の者は能く種種なる流轉雜染を生じ、有愛門に由りて、諸の在家の者は能く種種なる流轉雜染を生ずればなり。

清淨行とは、略して三學五地あり、謂く〔四五〕資糧地乃至究竟地なり、先に已に說けるが如し。當に知るべし學等に九の根本の句ありと。謂く增上戒學及び增上心學に無貪、無瞋、無癡あり、資糧地及び加行地に在る增上慧學に四の無顚倒あり、及び解脫は見地修地及び究竟地に在り。自義の行とは、謂く自利の行なり、聲聞、獨覺の如きは彼れ或時は利他の行を起すと雖も然も本より期する願は唯だ利他にあらず、是の故に所行を自義の行と名づく。他義の行とは、謂く利他の行なり、佛菩薩の如きは無量なる衆生を利益せんと欲するが爲めに、無量なる衆生を安樂にせんと欲するが爲めなり、乃至廣く說けり。

【四三】常樂我常の四種の顚倒の見。

【四四】三の不善根とは貪瞋癡の三なり。

【四五】(一)資糧地(二)加行地(三)見地(四)修地(五)究竟地。

欲を離れしむとは、謂く（四六）六種の黑品の諸行を訶責し、過患を示現して愛欲を離れしむるなり。示現すとは謂く白品の行を受學せしめんが爲の故に四種の眞實の道理を示現するなり。敎導すとは、謂く示現し已つて信解することを得る者をば學處に安置して正に受行せしむるなり。已に彼に於いて自在を得るに由るが故に彼れ便ち請して言はく、我れ今者に於いて當に所作を行ずべし、唯だ願はくは示誨せよと、因て之に告げて曰はく、汝等今者是の如き是の如き事に於いて應に正に作すべく、應に隨學すべしと。讃勵すとは、謂く彼の有情若し所知、所行、所得の中に於いて心に退屈を生ぜば爾の時其の心を稱讃策勵して彼の事に於いて堪へて勢力あらしむるなり。慶喜すとは、謂く彼の有情法に隨て法を勇猛に正行するに於いて卽ち應に如實に讃悅して其をして歡喜せしむべきなり。

【四六】第三十卷に出づ。

復た次に、欲を離れしむると示現するとは、或は欲を離れしめて示現せざるあり、他を敎導して其をして欲を離れしむるが如し。而も彼に謂つて曰はく、某の言ふ所の如く應に作すべからざる者は汝今必定して應に復た作すべからずと。或は彼れ、汝若し作さば我も必ず當に是の如く是の如く作すべしと言はんことを怖れ、或は復た彼に求む、汝是の若くせば我が親愛なる善友も必ず應に作すべからずと。或は示現して欲を離れしめざるあり、處中なる者の如きは功德及び過失を示現し、而も未だ遮して過失を離れしむるに堪へざるなり。或は欲を離れしめて亦た示現するあり、彼の過を示して其をし

て欲を離れしむるが如し。教導し讃勵すとは、謂く初め未だ受學せざるをば其をして受學せしめ、既に受學し已つて未だ上昇進せざるをば其をして昇進せしむるなり。慶喜すとは、若し慶喜すべくして而も慶喜する時には五の勝利あり。一には彼れ己が所證に於いて其の心を決定せしむ、二には餘をして彼の所證の功德に於いて趣證の心を生ぜしむ、三には誹謗者をして心に淸淨なることを得せしむ、四には淸淨ならざる者の心をして處中に住せしむ、五には淸淨なる者をして倍復た增長せしむ。若し補特伽羅にして他の善事を慶することあらば當に知るべし造作增長し、能く意を悅ばしめ天に生ずるの業を感じ、若し命終し已らば彼彼の生に隨つて常に悅ばしむる美妙なる音聲を聞き、一切の境界に〔於いて〕意を悅ばしめざること無しと。

復た次に、欲行に或は能く善趣を感ずるあり、欲の爲めの故に後の善業を造るが如し。或は能く惡趣を感ずるあり、非法を以て諸欲を攝受するが如し。離行にして若し毀犯することあらば能く惡趣を感じ、若し能く成辦せば能く善趣を感じ、及び能く涅槃の資糧を作す。善行は能く善趣を感じ及び涅槃の資糧を作し、不善行は能く惡趣を感ず。苦行は能く惡趣を感ず、邪見に依りて自ら身を苦しむるに由るが故なり。非苦行は能く涅槃の資糧を作す。順退分行、順進分行は其の所應に隨ひ、退墮と昇進と雜染との行は能く生死を感じ、淸淨行は能く涅槃を證し、自義の行は唯だ自身をして善趣に往かしめ、昇進して涅槃を證するに逮り、他義の行は倶に自他をして善趣に往かしめ、昇進して涅槃

を證するに逮る。是の如く三事の中の根本の事に六種あり、謂く初め善趣より乃至涅槃を後と爲す。得方便の事に十二種あり、謂く十二行なり。他を悲愍する事に五種あり、謂く五種に衆生を悲愍するに由る。此の中根本の事の增上力に由るが故に、十二行に依りて、其の所應の如く他をして欲を離れしめ、乃至慶喜するなり。

時の依處とは、謂く略して三種の言事あり、一には過去の言事、二には未來の言事、三には現在の言事なり、經に廣く說くが如し。

補特伽羅の依處とは、謂く輭根等の（四七）二十七種の補特伽羅なり、應に其の相を知るべし。

卽ち是の如く上に說ける所の如き若くは事、若くは時、若くは補特伽羅に依るが故に諸佛世尊は聖敎を流布したまふ、是の故に彼を說いて名づけて依處と爲す。

過患の義とは、要を以て之を言はば應に毀厭すべき義に於いて毀厭を起す、或は法、或は補特伽羅なり。

勝利の義とは、要を以て之を言はば應に稱讃すべき義に於いて稱讃を起す、或は法、或は補特伽羅なり。

所治の義とは、要を以て之を言はば一切の雜染行なり。

【四七】二十七賢聖なり。

能治の義とは、要を以て之を言はば、一切の淸淨行なり。貪は是れ所治、不淨を能治と爲し、瞋は是れ所治、慈を能治と爲るが如き、是の如き等をば悉く當に知るべし。

略義とは、謂く〔四八〕諸法の同類相應するを宣說するなり。廣義とは、謂く〔四九〕諸法の異類相應するを宣說するなり。復た次に、〔五〇〕不了義經を說くが故に、〔五一〕了義經を說くが故なり。復た次に二種の略義あり、一には名略、二には義略なり。是の如き略義、是の如き廣義に亦た二種あり、一には名廣、二には義廣なり。世尊、「舍利子よ、我が說く所の法は或は略にまれ、或は廣にまれ、然も悟解する者甚だ得可きこと難し」と說きたまへるが如し、廣く說くこと經の如し。當に知るべし此の中には世尊は契經の中に於いては文廣にして義略に、伽他の中に於いては義廣にして文略なるとを顯示す。

〔上來の〕十義を攝せんが爲めの故に中間の嗢陀南を說いて曰はく、

『〔五二〕諸の地と相と作意と、依處と〔五三〕德と非德と、所對治と能治と、
廣と略との義なり應に知るべし。』

復た次に、是の如く略して佛敎の體性たる十種の義を說き已れり。諸の說法者は應に聖敎に依りて十種の若くは具、「若くは」不具を尋求すべく、旣に自ら求め已つて應に他の爲めに說くべし。是の如く諸經の文義の體を建立し已つて諸の說法者は應に五相を以て隨順して一切の佛經を解釋すべし。

【四八】同類のもののみ說いて餘な說かず。
【四九】異類のものをも說く。
【五〇】不了義經は略義なり。
【五一】了義經は廣義なり。
【五二】過患の義なり。
【五三】勝利の義なり。

謂く初には應に略して法要を說くべし。次には應に等起を宣說すべく、次には應に其の義を宣說すべく、次には應に難を釋すべく、後には應に次第を辨ずべし。

(五四)法とは略して十二種あり。謂く契經等の十二分敎なり。(一)契經とは、謂く(五五)義を貫穿する長行直說なり、多分に意趣と體生とを攝受す。(二)應頌とは、謂く長行の後に宣說する伽他なり、又略して所說の不了義經を標す。(三)記別とは、謂く廣く略して標する所の義を分別し、及び命過ぐる弟子の生處を記するなり。(四)諷頌とは、謂く句を以て說く、或は二句を以てし、或は三四五六句を以て說くなり。(五)自說とは、謂く請する無きに而も說くなり、弟子をして勝解を得せしめしんが爲めの故に、上品の所化の有情をして勝理に安住せしめんが爲に自然にして說く、經に『世尊今者自然に宣說したまふ』と言ふが如し。(六)緣起とは、謂く請するありて而も說く、經に『世尊一時黑鹿子に依りて諸の比丘の爲めに法要を宣說したまふ』と言ふが如し。又別解脫因起の道に依る、毗柰耶の攝たる所有の言說なり、又是の處に於いて是の如き言を說くなり、『世尊は是の如き是の如きの因緣に依り、是の如き是の如きの事に依り、是の如き是の如きの語を說く』と。(七)譬喩とは、謂く譬喩經あり、譬喩に由るが故に隱れたる義明了なるなり。(八)本事とは、謂く本生を除いて前際の諸の所有事を宣說するなり。(九)本生とは、謂く己身過去世に於いて菩薩の行を行ぜる時の自らの本生の事を宣說するなり。(十)方廣とは、謂く菩薩の

【五四】第五門、法を釋す。
【五五】經が義を貫くこと線が華を貫くが如し。

道を說くなり、七地と四の菩薩行とを說き、及び諸佛の百四十種の不共なる佛法を說くが如し、謂く四の一切種の清淨乃至一切種の妙智なり、〔五六〕菩薩地に已に廣く說けるが如し。又復た此の法廣きが故に、多きが故に、極めて高大なるが故に、時長遠なるが故に、謂く極めて勇猛にして三大劫阿僧企耶を經て方に成滿することを得るが故に方廣と名づく。(十一)未曾有法とは、謂く諸の如來、若くは諸の聲聞、若くは在家の者の說く希奇の法なり、諸經の中希有の事に因りて言說を起すが如し。(十二)論議とは、謂く諸の經典にて循環し研覈する摩怛理迦なり、且らく一切了義經の如きを皆な摩怛理迦と名づく。謂く是の處に於いて世尊自ら廣く諸法の體相を分別したまひ、又是の處に於いて諸の聖弟子已に諦迹を見、自らの所證に依りて無倒に諸法の體相を分別す。此を亦たは名づけて摩怛理迦と爲す。即ち此の摩怛理迦を亦たは阿毗達磨と名づく、猶ほし世間の一切書算詩論等に皆な摩怛理迦あるが如く、當に知るべし經中循環して諸法の體相を研覈するも亦た復た是の如し。又諸字若し摩怛理迦無ければ即ち明了ならざるが如く、是の如く契經等の十二分聖教も若し諸法の體相を建立せざれば即ち明了ならず、若し建立し已れば即ち明了なることを得。又雜亂して法相を宣說すること無し、是の故に即ち此の摩怛理迦を亦た阿毗達磨と名づく、又即ち此の摩怛理迦に依りて所餘の諸經の義を解釋する者を亦た論議と名づく。

〔五七〕等起とは、謂く三種の若くは事、若くは時、若くは補特伽羅の依處に由るが故に應ずるに隨つ

【五六】第四十九卷。
【五七】第六門、等起を釋す。

て當に說くべし、謂く是の如き補特伽羅に是の如き行あり、離欲し乃至慶喜せしめんが爲めなりと。

(五八)已に等起を說けり、次に應に義を說くべし。義とは略して二種あり、一には總義、二には別義なり。四種の相に由りて當に總義を說くべし、一には了義經を引くが故に、二には分別の事究竟するが故に、三には行の故に、四には果の故なり。行に復た二種〔あり〕、一には邪行、二には正行なり。果に亦た二種〔あり〕、一には正行の果、二には邪行の果なり。四種の相に由りて當に別義を說くべし、一には差別の名を分別し、二には自體の相を分別し、三には言詞を訓釋し、四には義門の差別なり。言詞を訓釋するは復た五種の方便に由る、一には相に由るが故に、二には自性に由るが故に、三には業に由るが故に、四には法に由るが故に、五には因果に由るが故なり。義門の差別は當に知るべし復た五相に由ると。一には自性の差別の故に、二には界の差別の故に、三には時の差別の故に、四には位の差別の故に、五には補特伽羅の差別の故なり。此の中自性の差別とは、謂く色の自性に(五九)十色處の差別あり、受の自性に(六〇)三受の差別あり、想の自性に六想の差別あり、行の自性に(六一)三行の差別あり、識の自性に六識の差別あり、是の如き等の類をば當に知るべし諸法の自性の差別なりと。界の差別とは、謂く欲界の差別の故に、色界の差別の故に、無色界の差別の故なり。時の差別とは、謂く過去時の差別の故に、未來時の差別

【五八】第七門、義を釋す。
【五九】十色處とは五根と五境なり。
【六〇】三受とは苦受、樂受、捨受なり。
【六一】三行とは身口意の三業なり。

の故に、現在時の差別の故なり。位の差別とは、當に知るべし、二十五種の分位差別ありと。謂く下中上の三位差別するが故に、苦、樂、不苦不樂の三位差別するが故に、善、不善、無記の三位差別するが故に、聞、思、修の三位差別するが故に、増上戒、増上心、増上慧の三位差別するが故に、內、外の二位差別するが故に、所取、能取の二位差別するが故に、所治、能治の二位差別するが故に、現前、不現前の二位差別するが故に、因、果の二位差別するが故なり。補特伽羅の差別とは、前に說ける所の二十七種の補特伽羅の如し、應に差別を知るべし。

【六三】第八門、難を釋す。

(三)難を釋すとは、若くは自ら設くる難、若くは他の設くる難をば皆な應に解釋すべし。當に知るべし此の難は略して五相に由ると。一には未了義を顯了することを得んが爲めの故なり、此二の文に何義ありやと言ふが如し。二には語相違するが故なり。何故に世尊先に說きたまへる所は今說きたまふ所に異なるやと言ふが如し。三には道理相違するが故なり、四の道理と相違する義を顯示することあるが如し。四には決定せずして顯示するが故なり、何故に世尊一種の義に於いて彼彼の處種種の異門に於いて差別し顯示したまふやと言ふが如し。五には究竟にして現見に非ざるが故なり、內我に何の體性あり、何の色相ありて、而も常恆にして變易あること無く是の如く正住すと言ふやと言ふが如し。是の如き等の類の難の相をば應に知るべし。此の五難に於いて其の次第に隨つて應に當に解釋すべし。謂く不了義の難に於いては方便して顯

示し、語相違する難に於いては意趣を顯示し隨順し會通す。語相違する難に於いては意趣を顯し、隨順し會通するが如く、是の如く決定せずして顯示する難に於いても、究竟して現見に非ざる難に於いても當に知るべし亦爾なりと。道理相違する難に於いては或は（六三）黑敎を以て之を決判し、或は復た四種の道理を示現し、或は復た因果相應を示現す、所謂此の言或は果を増すと爲んや、或は因を増すと爲んやと。又釋難に於いて應に四記を設くべし。一には一向記、謂く如理に來りて請問する者の爲めに無倒に諸法の性相を建立するなり。二には分別記、謂く如理に或は不如理に來りて請問する者の爲めに差別の諸法の性相を開示するなり。三には反問記、謂く彼の戲論に〔於いて〕問者をして自ら己が過を收めしめんが爲めなり。四には置記、四の因緣に由りて默置して記す、謂く體性無きが故に、甚深等なるが故なり。此れ廣く前の思所成地に已に其の相を説けるが如し。又如來は滅後有なりや無なりやと爲んや等と問ふが如し、此れ世俗及び勝義諦の所有理趣に於いて皆な應に記すべからざるなり、是の故に彼を説いて名けて置記と爲す。此の中如來は勝義諦に約すれば有性に非ざるが故に記別すべからず、世俗諦に約すれば所依能依の道相違するが故に、彼の果永く斷じて實を成ぜざるが故に亦た如來は滅後是れ有なり無なり等と記すべからざるなり。

（六四）次第とは、略して三種あり、一には圓滿の次第、二には解釋の次第、三には能成の次第なり。

【六三】黑敎とは惡説の義外道敎を云ふ。

【六四】第九門、次第を釋す。

此の三の次第を顯示せんと欲するが爲めに略して聖教を引かん、世尊「我れ昔し(六五)出家して甚だ盛美たり、(六六)第一盛美たり、(六七)最も極めて盛美たりき」と言へるが如し。此の言は盛美の圓滿せる次第を顯示するなり。又復た說いて言はく、「(六八)我れ曾し父淨飯王の宮に處し、顏容端正なりき」と。(六九)乃至廣く說きたまへり。此の言は盛美の解釋の次第を顯示するなり。又復た說いて言はく、「何の義の爲めの故に盛美にして出家せるや、老病死等の法を見るに由るが故なり」と。此の言は(七〇)能成の次第を顯示するなり。又復た經中に略して諸法を說いて三受は樂受、苦受、不苦不樂受なりと言ふが如き、是の如き等の類は但だ圓滿の次第を顯はすのみなり、所餘の句に由りて此の受を圓滿するが故に圓滿と名づく。受の如く四諦も亦た爾なり、謂く先に一句を說き、後後隨順して次第に宣說するなり。能成の次第に復た二種あり、謂く或は前句を以て後句を成立し、或は後句を以て前句を成立するなり、解釋の次第も當に知るべし亦た爾なりと。

(七一)師とは、謂く十法を成就するを說法師の衆相圓滿すと名づく。一には法義を善くす、謂く(七二)六種の法(七三)十種の義に於いて善く能く解了するが故なり。二には能く廣く宣說す、謂く多聞聞持し、其の聞積集するが故なり。三には具足して無畏なり、謂く刹帝利等の勝れたる大衆の中に於いて正法

【六五】是れ出家の美なり。
【六六】是れ成道の美なり。
【六七】是れ轉法輪の美なり。
【六八】是れ前の第一出家の盛美を解釋す。
【六九】前の第二第三の盛美を解釋するを略す。
【七〇】能成とは出家、成道、轉法輪を成ぜる理由を云ふ。
【七一】第十門、師を釋す。
【七二】前の第三門の文の六種。
【七三】前の第四門の義の十種。

を宣說し、怯懼する所無きが故に、又此に因るが故に聲斷掉せず、腋汗を流さず、念忘失無きが故なり。四には言詞善巧なり、謂く語工圓滿し、八支成就し、言詞具足して衆に處して法を說くが故なり。語工圓滿すとは、謂く文句相應する助伴等なり、乃至廣く說けり。(七四)八支成就すとは、謂く此の語言は先首たり美妙なり等、乃至廣く說けり。五には善く方便して說く、謂く二十種に善巧方便して正法を宣說するが故なり、時を以て殷重にする等の如し。六には法隨法行を具足し成就す、謂く但だ聽聞のみを以て究竟なりと爲さず、其の所說の如く卽ち是の如く行ずるが故なり。七には威儀具足す、謂く說法する時手足亂れず、頭動搖せず、面變異無く、鼻改異せず、進止往來威儀痒序たるが故なり。八には勇猛に精進す、謂く常に未だ聞かざる所の法を聽聞せんことを樂ひ、已に聞きたる法に於いて轉た明淨ならしめ、瑜伽を捨てず、作意心を捨てず、內の奢摩他を捨離せざるが故なり。九には厭倦あること無し、謂く(七五)四衆の爲めに廣く妙法を宣べ、身心倦むこと無きが故なり。十には忍力を具足す、謂く罵弄訶責せられんに終に反報せず、若くは輕懱せられんに忿慼を生ぜざるなり、乃至廣く說けり。

(七六)說衆とは、謂く五衆に處して八種の言を宣ぶるなり。何等をか八と爲す、一には喜樂すべき言、二には善く開發する言。三には善く難を釋する言、四には善く分析する言、五には善く順入する言、

【七四】前に說ける語の八分を云ふ。
【七五】四衆とは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷なり。
【七六】第十一門、說衆を釋す。

六には餘を引いて證する言、七には勝れたる辯才の言、八には宗趣に隨ふ言なり。五衆とは、一には在家衆。二には出家衆、三には淨信衆、四には邪惡衆、五には處中衆なり。

憙樂す可き言とは、當に知るべし五相ありと。一には證因あり、二には譬喩あり、三には語具に圓滿し、四には文句綺靡なり、五には言詞顯了なり。善く開發する言とは、深隱の義を開いて麤顯ならしむるが故に、麤顯の義を辯じて深隱ならしむるが故なり。善く難を釋する言とは、要を以て之を言はば當に知るべし（七七）五種の難を離れて善く成就するが故なり。善く分析する言とは、一一の法に於いて增一の道理に依り乃至「分」析して十種と爲し、或は復た此を過ぐ、（七八）三法に依りて說き或は四念住に依り乃至廣く說くが如し。善く順入する言とは、唯だ善く顯現して契經、應頌等の法を解釋し、終に餘の外道の邪論を引かざるなり。餘を引いて證する言とは、謂く餘經を引いて所說を成立するなり。勝れたる辯才の言とは、自の（七九）所忍に隨つて善く義を分別するなり。宗趣に隨ふ言とは、摩怛理迦に依つて分別し顯示し、或は其の餘の無倒なる說者の所說の言教に依りて理の如く解釋するなり。

復た次に、在家衆に處するものは、應に諸の惡行を毀り、諸の善行を讃むるに依り、正法を現說して其をして止息し、及び進修せしむべきが故なり。出家衆に處する「もの」は、應に增上戒等の三學に依

【七七】五種の難とは第八門難を釋する中の難の五相を云ふ。
【七八】三法とは蘊處界の三科或は三學なり。
【七九】所忍とは所認に同じ。

りて正法を現說して速に欣樂せしむべきが故なり。淨信等の衆に處する「もの」は、應に聖教の廣大なるべき威德に依りて正法を現說して其の次第の如く倍增長ならしめ、處中に信せしめ、淨信を生せしむが故なり。

卷の第八十二

攝釋分の下

(二)聽とは、謂く是の如き說法者正法を說く時、應に他を安處し、恭敬に住し、無倒に聽聞せしむべし。云何んが安處する。謂く或は一因或は乃至十に由る。

一因とは、謂く恭敬して法を聽けば現前に能く利益安樂を證するが故なり。此の中利益にして安樂に非ざる等の四句あり、菩薩地の法受の中に已に說けるが如し。

二因とは、謂く(一)善く一切の法を建立するが故に、善く建立する者は諸過を離るるが故に、大義を具ふるが故に、又(二)說者聽者の爲めに設くる所の劬勞に勝果あるが故なり。若し爾らずんば、能說能聽[者]徒らに己業を廢し、虛しく功勞を設け、應に果あること無かるべし。

三因とは、(一)恭敬して法を聽けば能く衆生をして惡趣を捨てしむるが故に、(二)善趣を得るが故に、(三)速に能く涅槃の因を引攝するが故なり。是の如き三事は要らず恭敬して聽聞するに由りて方に得るなり。

【二】前卷總頌の十四門の中第十二門聽を釋す。

四因とは、一には恭敬して法を聽けば能く善く契經等の法を了達す。二には是の如き正法は能く衆生をして諸の不善を捨て諸善を攝受せしむ。若し善く聽く者は則ち能く精勤して若くは「不善を」捨て若くは「諸善を」受く。三には〔二〕捨受に由るが故に惡因の招く所の後苦を捨離す。四には此の善惡の因を受捨するに由るが故に速に涅槃を證す。

五因とは、謂く佛世尊の說きたまへる所の正法に(一)因緣あり、(二)出離あり、(三)依趣あり、(四)勇猛あり、(五)神變あり、是の如き諸句は攝異門分に當に廣く分別すべきが如し。復た五因あり、謂く(一)我れ當に未だ聞かざる所を聞くべく、(二)我れ當に聞き已つて研究すべく、(三)我れ當に疑網を除斷すべく、(四)我れ當に諸見を棄背すべく。(五)我れ當に慧を以て一切甚深の句義に通達すべし。諸佛世尊は此の五種を說きたまひて聞思修の三より成る所の慧の清淨なる方便を顯はしたまふ、謂く初めの二種は聞より成る所の慧を顯はし、次の二種は思より成る所の慧を顯はし、後の一種は修より成る所の慧を顯はす。

六因とは、一には大師の恩德を敬ひ報ぜんと欲するが爲めなり、謂く佛世尊は我等が爲めの故に無量なる難行苦行を行じて此の法を求得したまへり、云何んが今者而も聽聞せざらんやと。二には自らの義利を觀ず、謂く佛の正法には現「前」の義利ありと。三には究竟して能く一切の熱惱を離る。四には善く正儀に順ず。五には了見すべきこと易し。六には諸の聰慧なる者內に所知を證するなり。

〔二〕捨受。不善を捨て善を受く。

七因とは、謂く我れ當に㊂七種の正法を修習すべく、我れ當に法を知り義を知るべしと、乃ち善く補特伽羅の尊卑の差別を知らんと欲するなり。

八因とは、一には佛法は得易し、乃至㊃旃荼羅等の爲めにも而も開示するが故に、二には修學すべきこと易し、行住坐臥に皆な修することを得るが故に、三には義利を引發す、謂く能く增上なる生果、決定せる勝果を引發するが故に、四には初善なるが故に、五には中善なるが故に、六には後善なるが故に、七には現〔在〕の樂果を感ずるが故に、八には後〔世〕の樂果を引くが故なり。

九因とは、謂く能く九種の世間の逼迫の事を解脫するが故なり。一には能く生死の大牢獄を出づるが故に、二には永く貪等の堅牢なる縛を斷ずるが故に、三には㊄七財の貧を棄捨し、七財の富を建立するが故に、四には善行し正法を聞くこと尠きを超度し、善行し正法を聞くこと豐なるを建立するが故に、五には無明の闇を滅し、智慧の明を起すが故に、六には㊅四の暴流を度り涅槃の岸に昇るが故に、七には究竟して能く煩惱の病を療ずるが故に、八には一切貪愛の羂を解脫するが故に、九には能く無始なる生死の曠野稠林を度りて行くが故なり。諸の牢獄の中にて生死の牢獄を最も第一と爲す、是の故に先に說けり。

【三】七種の正法とは七覺支なり。
【四】旃荼羅(Caṇḍāla)は印度の最下級に屬する賤民にして屠殺を業とす。
【五】七財とは一信財、二戒財、三慚戒、四愧財、五聞財、六捨財、七慧財なり。
【六】四の暴流とは一欲暴流、二有暴流、三見暴流、四無明暴流なり。

十因とは、一には恭敬して法を聽けば思擇力を得、此に由りて能く聞法の勝利を受け、如法に財を求め非法を以てせず、深く過患を見て而も之を受用す。二には善く出離を知る、謂く財寶を喪失するも憂ふること無く感ふること無く亦た嗟怨せず、乃至廣く說けり、眷屬離壞し若くは病苦に遭ふも甚だしく悲歎せず。亦た愁惱せず、乃至廣く說けり。三には諸欲の中に於いて深く過患を見、及び出離の最勝なる功德を見、清淨にして出家し上妙なる臥具の貪著を捨離し、乃至能く諸の妙靜慮を證す。四には恭敬して法を聽けば速に順じて（七）廣大甚深、（八）相似甚深の諸の緣起の法を證解し、又能く廣大なる善根出離の歡喜を引發す。世尊の說きたまへるが如し、『我が聖弟子にして專心に耳を屬して正法を聽聞するは能く（九）五法を斷じ、能く（一〇）七法を修し、速疾に圓滿す』と。五には諸の聖弟子恭敬して法を聽けば所有（一一）集法皆な（一二）滅法を成ずるなり。六には正法を解し已つて遠塵離垢し、諸法の中に於いて正法眼を生ず。七には能く預流果を證する最勝なる資糧を引攝し、乃至阿羅漢果を證得し、及び能く阿羅漢果の最勝なる資糧を引攝す。八には能く獨覺の資糧を引攝す。九には能く善く無上正等菩提の資糧を引攝す。十には能く一切世間出世間の（一三）靜慮、解脫、等持、等至を引く。

【七】廣大甚深とは所證の眞如なり。
【八】相似甚深とは眞如に相似たる能證の正智卽ち二空智なり。
【九】五法とは五蓋の惑なり。
【一〇】七法とは七覺支なり。
【一一】集法とは集諦卽ち煩惱及び業等の苦因なり。
【一二】滅法とは滅諦卽ち涅槃の樂果なり。
【一三】靜慮等は禪定の異名なり。

(一四)佛を讃する略廣とは、謂く說法師將に開闡せんと欲せば先づ當に佛を讃すべし。讃に二種あり、一には略、二には廣なり。

略して佛を讃すとは、五種の相に由る、應に當に了知すべし、一には妙色、二には靜寂、三には勝智、四には正行、五には威德なりと。妙色とは、謂く三十二の大丈夫の相、八十の隨好なり。靜寂とは、謂く善く能く諸の根門等を密護し、及び能く永く煩惱の習氣を拔くなり。勝智とは、謂く過去未來現在世の法及び非世の法に於いて無礙無著なるなり。正行とは、謂く自他利の正行圓滿するなり。威德とは、謂く諸の如來の神通遊戲なり。復た六種あり、略して如來を讃す、謂く(一)功德圓滿するが故に、(二)垢染を離るるが故に、(三)濁穢無きが故に、(四)與等無きが故に、(五)唯だ有情を利するを以て業と爲すが故に、(六)此の業用に於いて堪能あるが故なり。此れ廣く分別すること攝決擇分の如し。

廣く佛を讃すとは、謂く佛世尊は無邊なる名稱にして德無量なるが故に、能く光明を施し智明を發するが故に、能く黑闇を除き永く一切の無智の闇を滅するが故に、明眼を成就し三眼を具するが故に、勝義諦を見無等の諸の聖諦を了知するが故に、禁戒を成就し戒圓滿するが故に、戒の耆宿なるが故なり。是の如く(一五)兩足の中の尊なり、諸の(一六)調御の中の最勝最上なり、沙門衆の中にて最も殊

【一四】總頌の十四門の中第十三門佛を讃する略廣を釋す。

【一五】兩足とは兩足の有情を云ふ。

【一六】調御とは一切衆生を調伏制御するを云ふ。

美なりと爲し、是れ諸の世間に得難き珍寶なり。是の如きを哀愍者と爲し、大悲者、義を樂爲する者、利益を求むる者、常に悲愍する者と爲し、是の如きを眼と爲し、智と爲し、義と爲し、法と爲し、明了なる義に於いて能く善く決定し、凡そ所作あれば皆な義に依る。

是の如きは能く一切の未だ證せざる所の義を證す、先に聖八支道を證せるに由るが故に、自然に證するが故に、善く能く未だ曾て立てざりし所の勝梵行を制立するが故なり。是れ中道を知る者、是れ證道者、是れ示道者、是れ說導者、是れ引導者なり。是の如きは是れ人中の師子なり、怖畏を離るるが故に、是れ人中の牛王なり、大衆を御するが故に、是れ人中の持御なり、衆の上首なるが故に是れ人中の龍王なり、誤失無きが故に是れ人中の良馬なり、心善く調ふるが故に、是れ人中の最勝なり、家族姓等は衆人を暎ずるが故に、是れ人中の最上なり、戒、正行、智、勝威德等は衆人を暎ずるが故に、是れ人中の蓮華なり、世間の（一七）八法の染さざる所なるが故なり。

是の如きは是れ無等者なり、與等無きが故に、無等等者なり、去來今の無等者に等しきが故に、是れ最第一なり、諸の有情に於いて最上たるが故に、是れ大仙王なり、戒の耆宿なるが故に、長時に勝梵行を積集するが故に、古の大仙の證する所の道を證するが故に、是れ最勝者なり、諸の外道煩惱等の魔に於いて能く勝つことを得るが故に、是れ（一八）大牟尼なり、一切の掉慢等あること無きが故に、

【一七】八法とは一利、二衰、三毀、四譽、五稱、六譏、七苦、八樂。
【一八】大牟尼。牟尼(Muni)は梵語、寂默と譯す。

(二九)三の寂靜と具に相應するが故に、一切の生等を引奪す可らず、及び諸の異論も引奪せざるが故に、善く沐浴する者なり、永く一切の諸の惡法を離るるが故に彼岸に到れる者なり、一切の薩迦耶を超度するが故なり。

是の如きは如來應正等覺乃至廣く說かば是れ薄伽梵なり、是の如く白法圓滿す。一切智者一切法主なり、法を妄失する無く、諸の有情「の中」に於いて堅固最勝にして一切の苦樂其の心を擾さず。是れ善調者なり、根門を密護し善く圓滿するが故に、是れ寂靜者なり、尸羅を受持し能く圓滿するが故に、是れ安隱者なり、已に決定地に入れるが故に、般涅槃者なり、已に菩提を證せるが故に、毒箭を拔ける者なり、愛箭を拔くが故に、調未調者なり、靜未靜者なり。已に前に說けるが如く一切の安隱ならざる者を安慰し、善く能く諸の異生等を安立して(三〇)預流(三一)一來果を證せしむるが故に、一切の未だ寂滅せざる者を寂滅せしめ、善く能く建立して(三二)初二果に住し、(三三)不還及び(三四)阿羅漢果を證せしむるが故に、杻械無き者なり、火坑を出でたる者なり、深塹を度れる者なり、諸求を制せる者なり、傾動すること無き者なり、慢幢を摧ける者なり、大常住者なり。

是の如きは是れ阿羅漢なり、諸漏永く盡く、前に廣く說けるが如く、乃至諸の有結を盡せり。

【二九】三とは身語意の三業なり。
【三〇】預流は四果の第一。
【三一】一來は四果の第二。
【三二】初二果とは預流果及び一來果なり。
【三三】不還は四果の第三。
【三四】阿羅漢は四果の第四。

是の如きは永く(二五)五支を斷じ、(二六)六支を成就す、廣く說かば乃至純善積集せる最上の丈夫なり。
是の如きは善く法を知る者乃至善く補特伽羅に尊卑あることを知る者なり。
是の如きは是れ大沙門、大婆羅門、離垢無垢の良醫、勝主なり、是れ勝觀者なり、是れ(二七)世間依なり、是れ衆生の尊なり。此の中離垢とは煩惱障斷ずるが故なり、無垢とは所知障斷ずるが故なり。又永く習氣を拔くが故に無垢と名づけ、日夜に六反世間を觀察するが故に勝觀と名づく。

是の如きは是れ一切種の善清淨者なり、「三十二の」大丈夫相及び「八十の」隨形好にて身を莊嚴する者なり。十力を具足すれば大力者と爲し、四無畏を具すれば無所畏者なり、是れ大悲者なり。三念住に於いて善く念に住する者なり、三種不護の法を成就する者なり。法を妄失する無く永く一切の煩惱の習氣を害し一切種の微妙智を具する者なり。此の中大悲者は長時に積集するが故に、謂はゆる三大劫阿僧企耶を經て方に乃ち證得す。又復一切の有情を緣ずるに依るが故に、一切種の苦を緣じて境界と爲るが故に、諸の衆生の一切の損惱、變異、利養に於いて轉ずること無きことを得るが故に、諸の有情に於いて平等に轉ずるが故なり。

(二八)復た次に、此の中諸の說法師は應に是の如く經法を釋する相を安立すべし。先づ當に若くは

【二五】五支とは五上分結なり。
【二六】六支とは六恆住なり。
【二七】佛は世間衆生の所依となる。
【二八】總頌の十四門の中第十四門學の勝利を釋す。二段あり。
(甲)體に依つて釋す。

文若くは義を尋求すべし。次に復た他の爲めに（二九）五種の釋を轉ず、先に說ける所の如く道理を解釋し、正法を宣說するなり。又應に是の如く自身先に說ける所の說法者の相を安立すべし、謂く法義を善くする等の（三〇）十種圓滿するなり。是の如く自ら安立し已つて應に是の如き品類の言說を起すべし、謂く（三一）五大衆に處して前に說ける所の如き喜樂す可し等の（三二）八種の言詞を以て衆の爲めに法を說くなり。又他を安處し、恭敬に住し、無倒に聽聞せしむ。又應に先づ大師の功德を讃すべし。若し是の如き（三三）五分を具足して正法を說くことあらん者は當に知るべし、猶し五分の音樂能く自他をして大喜樂を生ぜしむるが如し、又能く自他の利益を引發すと。若し能く是の如く善く修學し已れば當に知るべし五種の勝利を具足すと。一には佛の言義に於いて解了すること難からず、二には善く能く圓滿して諸法の相を說く、三には能く善く自他相續の廣大なる歡喜を發起す、四には能く善を引いて出離し、乃至天上人中に稱譽遍滿す、五には能く無量なる功德を生起す。

（三四）復た次に、經の中に學に住する勝利を說くが如き、當に知るべし此の經は文義を體と爲すと。文とは、謂く此の經に言はく、「汝等苾芻よ。應に當に修學の勝利に安住すべし」と。此の中に

【二九】五種の釋とは前卷首に出づ。一法、二等起、三義、四釋難、五次第なり。
【三〇】前卷に出づ。
【三一】同上。
【三二】同上。
【三三】前卷文に六種ある中の前五種を五分と云ふ。
【三四】（乙）學の勝利の經文を擧げて次第に解釋す。二段あり。（イ）文義に依つて「學の勝利」等の經の四句を解釋す。

【三五】十二の字、【三六】四の名、【三七】一の句あり、是の如きは則ち名句字身を攝す。此の中の言説は是れ學處の相なれば則ち行相を攝し、如來の言説は本苾芻の請問せるが爲めなれば則ち機請を攝し、如來所説の言音なれば則ち語を攝す。是の故に此の經の一句に具に【三八】六文を攝す。「【三九】是の如き慧を上首と爲す」等の諸句の中皆な相に隨つて應に知るべし。

【四〇】義とは、謂く地の義の中に但だ聲聞地を説くのみ、或は五地を具す。經に「學の勝利」と言ふは是れ【四一】資糧地なり。「慧を上首と爲す」とは、是れ【四二】加行地なり。「【四三】解脱堅固は念を增上と爲す」とは是れ【四四】見地と【四五】修地と【四六】究竟地なり、是れを地の義と名づく。【四七】相の義の中に於いて「學の勝利」とは、是れ戒の自相なり。「慧を上首と爲す」とは、【四八】二種の相を具す。謂く慧の自相、所依、助伴等の中に於いて唯だ慧の自體は是れ慧の自相なり。慧の所依、助伴、所緣を名づけ

【三五】十二の字とは汝、等、苾、芻、應、當、修、學、勝、利、安、住の十二字なり。
【三六】四の名とは「汝等苾芻」は是れ第一名、「應に常に安住すべし」は是れ第二名、「修學」は是れ第三名、「勝利」は是れ第四名なり。
【三七】一の句とは「汝等乃至安住すべし」の全文なり。
【三八】六文とは文の六種即ち名身、句身、字身、語、行相、機請の六なり、前卷に出づ。
【三九】此句亦た前經に説く所なり。
【四〇】義を辨ずるに八段あり、第一、地に約す。
【四一】資糧地とは資糧位即ち地前三十心の位なり。
【四二】加行地とは加行位即ち四善根の位なり。
【四三】此の句また前經に説く所なり。
【四四】見地とは見道即ち通達位なり。
【四五】修地とは修道即ち修習位なり。
【四六】究竟地とは究竟位即ち佛果の位なり。
【四七】第二、相に約す。
【四八】二種の相とは自相と共相なり。

て共相と爲す。「解脱堅固」とは、謂く永く一切煩惱の麁重を離る、是れ解脱の自相なり。「念を增上と爲す」とは是れ念の自想なり、是れを相の義と名づく。(四九)作意の義の中「學の勝利」とは、(五〇)諸の作意を非して唯作意建立の處所を顯はすのみなり。「慧を增上と爲す」とは、應に知るべし了相と勝解との作意なりと。「解脱堅固」とは、遠離、攝樂、方便究竟、方便究竟果の作意を顯示す。「念を增上と爲す」とは、當に知るべし此れは觀察作意を顯はすと、是れを作意の義と名づく。此の道理に由りて(五一)「十」智等の中に於いても應に隨つて建立すべし。(五二)依處の義の中涅槃の學處の所攝と清淨行とに依りて、其の所應に隨つて教導等を起す、所謂(五三)教導乃至慶喜なり。當に知るべし此の中に亦た通じて善等の行あるも、其の最勝なるに隨つて但だ清淨行のみを説くと。(五四)出家の補特伽羅は是れ補特伽羅の依處なり。又(五五)鈍根等の一切の補特伽羅に依るは應に當に慶喜すべし、又過去現在の時に於いて應に當に慶喜すべし。已に證得せるが故に、正に證得する

【四九】第三、作意に約す。

【五〇】諸の作意とは七作意なり。七作意とは了相、勝解、遠離、攝樂、方便究竟、方便究竟果の作意なり。

【五一】十智等。六識、九遍知、三解脱門を含む。

【五二】第四、依處に約す。依處に三種あり、一事依處、二時依處、三補特伽羅依處なり。事依處に亦三あり。一根本事依處、二得方便の事の依處、三他を悲愍する事の依處なり。根本事依處に六ある中「學の勝利」等の四句は但だ第六涅槃の學處に當り、得方便の事の依處に十二ある中「學の勝利」等の四句は、但だ清淨行に當り、他を悲愍する事の依處に五ある中「學の勝利」等の四句は但だ後の三句、所謂教導、讃勵、慶喜に當る。

【五三】教導乃至等。教導、讃勵、慶喜なり。

【五四】補特伽羅依處に二十七ある中「學の勝利」等の四句は但だ出家の補特伽羅に當る。

【五五】鈍根利根等。

が故に、現在に於いて示現を起し、未來時に於いて教導及び讃勵を起す。是れを依處の義と名づく。

(五六)勝利の義の中、謂ゆる三學を修し速に圓滿することを得るは是れ勝利の義なり。(五七)過患の義の中、謂ゆる出家の者は應に異行を行ずべからず、應に餘の財物を儲くべからず。(五八)所治の義の中、謂ゆる尸羅を犯すは無智煩惱及び忘失念なり。當に知るべし尸羅を護る等は即ち是れ能治の義なり、又一切の雜染の行は皆な是れ所治なり、三學等の行は皆な是れ能治なりと。(五九)略義の中に於いて、謂ゆる「學の勝利に住し、乃至念を增上と爲す」と、此は略して宗を擧ぐれば名づけて略義と爲す。當に知るべし即ち此を分別するを名づけて廣義と爲すと。是れを略廣の義と名づく。此を除いて更に若くは過ぎ若くは增こと無し。

(六〇)復た次に、解釋の中に於いて法とは、謂く十二分教に於いては當に知るべし(六一)此は是れ契經の所攝なりと、又是れ記莂なり、了義に由るが故なり。

(六二)等起とは、謂く應に當に依止する處所を說くべし。自ら徧行する行智力を顯はさんと欲するが爲めの故に此の經を發起す。又清淨の行を精勤し修習する者を顯示せんが爲め、及び財利を重んずる者に顯示して彼の所化の有情、學の勝利等に依住して精進修習して速かに三學の勝利を圓滿すると

【五六】第五、勝利に約す。
【五七】第六、過患に約す。
【五八】第七、所治能治に約す。
【五九】第八、略及び廣に約す。
【六〇】(ロ)教に依つて「學の勝利」等の經の四句を解釋す。五段あり。第一、法に約す。
【六一】「學の勝利」等の四句の經文は十二分教の中、契經の所屬なり。
【六二】第二、等起に約す。

を得るを信解せしめんが爲めなり。又（六三）四種の苾芻の體を顯示せんが爲めの故なり。此の中經に「學の勝利」と言ふは種姓を遠離せしめんが爲めなり。「端正なる」形相は苾芻の體なるが故に、及び詐つて軌則を現ずるを遠離せしむ、威儀を密護するは苾芻の體なるが故なり。「慧を上首と爲す」とは、虛妄なる聲譽に計著することを遠離せしめんが爲めなり、「眞正なる」稱讃は苾芻の體なるが故なり。「解脫堅固は念を增上と爲す」とは、勸めて眞實の正行を修習せしむ　苾芻の體なるが故なり。所以は何ん、若し聲譽等を愛樂することあらん者は自ら勉勵して正法を聽受すと雖も慧增長せず、若し前に說く所の過を遠離することあれば便ち眞實の正行、攝受、正解脫の中に於いて勸導するに堪任すればなり。又下劣に於いて喜足を生ずる者の爲めに勸めて漸漸に修學增進せしめ、樂しんで追求して世間の文章呪術に隨順し、戒に於いて慢緩なる者の爲めに學の勝利を說き、尸羅を守り多聞を捨つる者の爲めに慧を上首と爲すと說き、唯だ聞思に於いて喜足を生ずる者の爲めに解脫堅固を說き、戒慧解脫に於いて增上慢を起す者の爲めに念を增上と爲すと說く。是の如き等の類を皆な等起と名づく。

（六四）義とは、謂く總義の中にては、當に知るべし此の經に正行及び正行の果を宣說すと。是の如き戒等の三學は當に知るべし是れを學の邊際と名づくと。又言はく、是の如く住すとは此れ正方便を顯はす、（六五）四種の瑜伽の所攝なり。又言はく、是の如く三學に住すとは此れ正行の果を顯はす。此の

【六三】四種は波羅門等の四種姓を云ふ。
【六四】第三、義に約す。
【六五】四種の瑜伽とは境、行、果、教の四瑜伽なり。

中信欲を先と爲し、尸羅を攝受し、精進慧等の方便を聽受す。

(六六)別義の中に於いて言ふ所の學とは、是れ勤めて精進して聖教の如く行じ若くは習ひ若くは修する名の差別なり。身語を淸淨にし、正命現行するは是れ學の自性なり。此に由りて正行の尸羅忍辱等の修顯發す、故に名づけて學と爲す。又靜寂の爲めに、及び淸涼の爲めに進んで習ひ〔煩惱を〕除滅す、故に名づけて學と爲す。是の如き等の類は名言を訓釋するなり。又應に前の如く相の故に、自性の故に、業の故に、法の故に、及び因果の故なりと說くべし。義門差別の中、自性の差別とは謂く學の勝利は是れ顯示する所の(六七)七品の尸羅或は過、(六八)二百五十の學處なり。界の差別とは、謂く欲行の中に別解脫律儀あり、色無色行の中に靜慮律儀あり、無漏律儀は界の所繫に非ず。時の差別とは、謂く學の勝利は過去の已學、未來の當學、現在の正學なり。此の學の勝利は、當に知るべし去來今に於いて平等にして異る無しと。位の差別とは、謂く已に正法に入れる補特伽羅は諸れ學の勝利なり、未だ成熟せざる者は是れ下位なり、正に成熟する者は是れ中位なり、已に成熟せる者は是れ上位なり。若し心に喜樂せずして勉勵して諸の梵行を修する者は此の學の勝利は是れ苦位なり。若し心に喜樂して自ら勉勵して梵行を修せざる者は此の學の勝利は是れ樂位なり、若し梵行に於いて喜樂するに非ず、喜樂せざるに非ざる者は此の學の勝利

【六六】別義の中に於ては(一)名の差別、(二)自性、(三)訓釋、(四)門の差別の四門に約して以て分別解釋せり。

【六七】七品の尸羅とは七衆の律儀戒なり。

【六八】二百五十の學處とは比丘の二百五十戒なり。

は是れ不苦不樂の位なり。又學の勝利は皆な是れ善の位にして不善の位に非ず無記の位に非ず。若くは聽受する者は是れを聞位と名づけ、若くは思惟する者は是れを思位と名づけ、若くは修習する者は是れを修位と名づく。若し未だ增上心慧を證得せざれば唯だ是れ增上戒の位なり、若し證得する者は亦た是れ增上心慧の二位なり。是の如き等の類は是れ位の差別なり。補特伽羅の差別とは、此の中の意、出家の補特伽羅は或は是れ鈍根、或は是れ利根、或は貪等行、或は等分行、或は薄塵行なるを說く、唯だ是れ聲聞にして諸の獨覺に非ず、諸の菩薩に非ず。彼の獨覺は別に覺悟するに由るが故に、菩薩の解脫は堅固なるが故に共住して修する學の勝利を說かず。又復た此の中唯だ般涅槃を說いて法と爲る者は已に正法に入れる者、障礙あること無き者、亦たは具縛の者、具縛にあらざる者、縛無きに非ざる者の唯だ人のみにして天には非ず。是の如き等の類を補特伽羅の差別と名づく。學の勝利に於いて是の如くなるが如く、慧を上首と爲る性に於いても、解脫堅固の性に於いても、念を增上と爲る性に於いても其の所應に隨つて當に知るべし皆な(六九)五種の差別ありと。

此の中勝利とは、是れ功德、增進、圓滿の名の差別なり、說くが如く當に觀ずべし。(七〇)十種の勝利は是れ其の自性なり。此の法能く饒益することあり、應に稱讚すべし、故に勝利と名づく。又復た此の法は生ずるに隨つて有情定んで應に隨逐すべし、故に勝利と名づく。又復た此の法は稱讚の隨ふ

【六九】五種の差別とは、一自性の差別、二界の差別、三時の差別、四位の差別、五補特伽羅の差別なり。

【七〇】十種の勝利は下に出づ。

所なるが故に勝利と名づく。門差別とは、當に知るべし（七二）十種の差別ありと。謂く能く僧を攝受し、僧をして精懇せしむ、乃至廣く說けり。

此の中苾芻とは是れ沙門にして家法を捨離して非家に趣く等の名の差別なり。別解脫律儀を具足する衆同分は是れ其の自性なり。其の形色に於いて勤めて精進するが故に、惡趣を怖畏して自ら防守するが故に、攝して損すると無きが故に名づけて苾芻と爲す。門の差別は謂はく刹帝利等の差別の故に、上族下族の差別の故に、少中老の年の差別の故なり、當に知るべし是れは門の差別なりと。

此の中住とは、是れ俯就時に於いてし、精勤し修習する名の差別なり、此れ住の自性なり。說く所の學を離れて別法あること無く、種種なる威儀時分を攝受するが故に名づけて住と爲す、此は是れ訓詞なり。門の差別とは、謂く威儀差別の故に、朝中後分の差別の故に、日夜の差別の故なり、當に知るべし是れを住の門の差別と名づくと。

此の中の慧とは、是れ智見明に現觀する等の名の差別なり。法相を簡擇する心所有の法を其の自性と爲す。訓詞をいはば、簡擇の性なるが故に、無智を治するが故に之を名づけて慧と爲す、又各品別に能く了知するが故に之を名づけて慧と爲し、又能く顯了する諸の聰慧なる者は是れ聰慧の性なるが故に名づけて慧と爲す。門差別は其の所應に隨つて前の如く安立するなり。

此の中解脫とは、是れ永斷、離繫、淸淨、滅盡、離欲等の名の差別なり。自性をいはば、謂く麤重

【七二】十種の差別は十種の勝利と其目同じ。

永へに害ひ、煩惱永へに斷ずるなり。訓詞をいはば、謂く能く種種なる貪等の繫縛を脱するが故に解脱と名づけ、又復世尊種種なる牟尼の說を爲したまふ、此を以て牟尼の體性と爲す、故に解脱と名づく。門、差別をいはば、謂く待時解脱、不動解脱、見所斷解脱、修所斷解脱、欲行解脱、色行解脱、無色行解脱、此の如き等の類なり。義門の差別は前の如く應に知るべし。

此の中念とは、是れ忘失せざる心明に記憶する[等の]名の差別なり。自性をいはば是れ心所有の法なり。訓詞をいはば、諸法を追憶す、故に名づけて念と爲し、又經る所の事に隨ひ、其の作意に隨ひ、此に由りて能く明了に記憶せしむ、故に名づけて念と爲す。門、差別をいはば、謂く佛隨念、法隨念等乃至廣く說かば(七二)六種の隨念なり。是の如く念住差別の如く、當に廣く差別を說くを知るべし。又復た前の如く其の所應に隨つて當に差別を知るべし。

復た次に、(七三)釋難の中に於いて、問ふ、學に住する勝利とは義何の謂ぞや、答ふ、此れは(七四)增語にして增上戒學に於いて勝れたる功德を見て住することを顯示す。問ふ、慧を上首と爲すとは義何の謂ぞや、答ふ、此れは增語にして諸根の中に於いて慧根第一なることを顯示す。問ふ、解脱堅固とは義何の謂ぞや、答ふ、此れは增語にして見修所斷の煩惱永く斷ずることを顯示す。問ふ、念を增上と爲すとは義何の謂ぞや、答ふ、此れは增語にして少下劣に於いて喜足を生

【七二】(一)佛隨念、(二)法隨念、(三)僧隨念、(四)施隨念、(五)戒隨念、(六)天隨念。

【七三】第四、難に約す。

【七四】增語とは名なり、名は能く語言を增す、故に名を增語と云ふ。

せざることを顯示す。

問ふ、餘經の中に於いては三學の次第をば世尊異說したまへり、何故に此の中には增上戒の後に增上慧を說き增上心に非ざるや。答ふ、此の中には學に住する勝利を顯示す、此の言說に由りて、聞等より成ずる所の慧は無悔等を攝受し、此に由りて漸次に三摩地を得ることを顯はす、卽ち是れ增上心學を顯示するなり。世尊の、是の(七五)五根に於いて最も能く攝受し、攝受せらるる者は所謂慧根なり。諸の苾芻慧根を成就するに由りて乃至能く定根を修し、是の如く乃至定根を成就す、當に知るべし皆な是れ慧根の力なりと說きたまへるが如し。今此の經の中には世尊慧根は是れ三摩地の引因及び煩惱斷の引因なることを顯示し、增上心學と增上慧學と俱時にして說きたまへり。

問ふ、餘經の中には三學をば修習し進趣し圓滿すと說きたまへり、何故に增上心學をば修習し滿ずと說きたまはざるや。答ふ、前に說ける所の如く、當に知るべし、此の中の道理も亦た爾なりと。

問ふ、何故に此の中には但だ學に住する勝利のみを說いて、慧に住する勝利、解脫に住する勝利等を說かざるや。答ふ、下劣の中に於いて勝利を取ることを勸む、當に知るべし、亦た所化の有情をして勝妙の中に於いて勝利を攝受せしむと。又僧を攝受し、僧をして精懇せしむる等の十種の勝利は分明にして了し易く悟入す可きこと易し、是の故に但だ學に住する勝利のみを說けり。

【七五】五根は信、精進、念、定、慧の五根なり。

問ふ、夫の解脱は諸法の中に於いて最も殊勝なりと爲す、何の因緣の故に但だ慧に住する上首のみを説いて解脱に住する上首を説かざるや。答ふ、下劣の中に於いて上首の性を取ることを勸む、當に知るべし、亦た所化の有情をして勝妙の中に於いて上首の性を攝受せしむと。又解脱に於いては不共差別の功德を顯示するが故なり。何等をか名づけて不共差別の功德と爲すや。謂く(七六)無情に於いては無上の慧に邊り、解脱は常なるが故に最も堅固なりと爲す。

問ふ、何等をか名づけて學に住する勝利と爲すや。答ふ、施設する所の如き諸の學處中に十の勝利を觀じ、常に尸羅を守り、堅く尸羅を守り、常に作し常に轉ず、是の如きを名づけて學に住する勝利と爲す。問ふ、(七七)僧を攝受する等の諸句に何の義ありや。答ふ、僧を攝受するは是れ總句なり、(七八)僧をして精懇せしむるは欲樂を受用する邊を離れしむるが故に(七九)僧をして安樂ならしむるは、自苦を受用する邊を離れしむるが故に、(八〇)未だ淨信ならざる者をば淨信者たらしむるが故に、未だ正法に入らざる者をば正法に入らしむるが故に、(八一)已に淨信なる者をば增長せしむるが故に、已に正法に入れる者をば成熟せしむるが故に、(八二)調伏し難き者をば調伏せしむるが故に、尸羅を犯す者をば善く「過を」驅擯するが故に、(八三)慚愧せしむる者、安樂住の者、淨く戒を持つ者をば悔無からしむるが故に、(八四)現法の漏を防ぐ、

【七六】無常法に於ては慧を極上となす。
【七七】十勝利の第一。
【七八】十勝利の第二。
【七九】十勝利の第三。
【八〇】十勝利の第四。
【八一】十勝利の第五。
【八二】十勝利の第六。
【八三】十勝利の第七。
【八四】十勝利の第八。

者は隨順して煩惱纏を摧伏するが故に、(八五)後法の漏を害する者は邪願を止息し梵行を修するが故に、隨順して永く惑隨眠を斷ずるが故に、(八六)多人をして梵行久住し轉た增廣することを得せしめんが爲め、乃至諸の天人の爲めに正に善く開示するは聖教をして長時に相續し斷絶すること無からしめんが爲めの故なり。

是の如き十種の勝利を(八七)略攝して三と爲す、卽ち此の三種を廣開して十と爲す。何等をか三と爲す。一には僧をして無染汙に住せしむ、二には僧をして安樂住を得せしむ、三には佛の聖教をして長時に隨轉せしむ。此の中七種の隨護に由りて無染汙住及び安樂住を顯示す。七種の隨護とは、一には(八八)敬養隨護、二には(八九)自苦行隨護、三には(九〇)資財乏少隨護、四には(九一)展轉相觸隨護、五には(九二)心追變隨護、六には(九三)煩惱纏隨護、七には(九四)邪願隨護なり。最後の一句は聖教の長時に隨轉することを顯示す。

云何んが常に尸羅を守る、謂く學處を棄捨せざるが故なり。云何んが堅く尸羅を守る、謂く學處を毀犯せざるが故なり。云何んが常に作す、謂く學處に於いて穿穴する無きが故なり。云何んが常に轉ずる、謂く穿穴し已つて復た還つて淨むるが故なり。云何んが學處を受學する、謂く具に諸の學處を隨學するが故なり。

【八五】十勝利の第九。
【八六】十勝利の第十。
【八七】三種の中の前二に各十勝利の中の前九を略攝し三種の中の第三に十勝利の中の第十を攝す。
【八八】是れに第一勝利を攝す。
【八九】是れに第二、第三の勝利を攝す。
【九〇】是れに第五、第四の勝利を攝す。
【九一】是れに第六の勝利を攝す。
【九二】是れに第七の勝利を攝す。
【九三】是れに第八の勝利を攝す。
【九四】是れに第九、第十の勝利を攝す。

是の如く行者常に尸羅を守り、堅く尸羅を守り、正法を聞き已つて獨り靜處に居り、繫念し思惟し籌量し觀察し、增上心慧を趣求せんと欲するが爲めに聞思修より生ずる所の妙慧に依りて能く解脫を證す。此の解脫の性は退法無きが故に說いて堅固と名づく、是れ出世間の聖智の果なるが故なり。又此の行者は正念力に由りて審に自ら、我が尸羅蘊圓滿すと爲んや不や、我れ諸法に於いて正慧ありて善く通達すと爲んや不や、我れ解脫に於いて善く證すと爲んや不やと觀察す。是の如く正念力の〔保〕持に依止して學の勝利を具へ、上首の慧を發し、堅き解脫を證す。又此の正念に略して三種あり。謂く或は說法に因るが故に、或は教授に依るが故に、或は應に作すべきと應に作すべからざるとを觀察するに由るが故なり。

問ふ、世尊は、「戒に無量種あり、謂く事善戒、苾芻戒、近住戒、靜慮戒、等持戒、聖所愛戒なり」と說きたまへり、是の如き等の戒今何に依つて「學の勝利に住す」と說きたまへるや。答ふ、苾芻戒に依る、最勝なるに由るが故なり。問ふ、世尊は、「慧に亦た多種あり、謂く聞所成慧、思所成慧、修所成慧なり」と說きたまへり、何れの慧に依りて「慧の上首に住す」と說きたまへるや、答ふ、具に三慧に依る。問ふ、世尊は「解脫に亦た多種あり、謂く世間解脫、出世間解脫、有學解脫、無學解脫、可動解脫、不可動解脫、是の如き等の類なり」と說きたまへり、今何に依つて「解脫堅固に住す」と說きたまへるや。答ふ、出世間、不動解脫に依る。問ふ、世尊は「念に亦た無量種あり、謂く身に於ける住念、受に於ける住念、

心に於ける住念、法に於ける住念、久しき所作所說に於ける隨念、受誦する所の諸法に於ける隨念、敎授の隨念、應に作すべきことと應に作すべからざることとの隨念、佛の隨念等の所有諸念なり」と說きたまへり、今此の中に於いて何れの念に依つて「念を增上と爲す」と說きたまへるや。答ふ、勝れたるに就いて言を爲す、應に作すべきと應に作すべからざることとの觀察隨念に依るなり。

復た次に、(九四)次第の中に於いては、先づ應に苾芻尸羅に安住すべく、次に應に如來の正法を聽受すべく、次に應に如理に作意し思惟すべし。是の如く行者淨く戒を持つに由り、憂悔あること無く、悔等無きに由りて、漸次に定を生じ、正方便所攝の智慧〔もて〕如理に作意し正しく思惟するに由るが故に、增上心學速に成滿することを得。是の如きを名づけて圓滿の次第と爲す、前前後後漸く圓滿するが故なり。能成の次第とは、謂く學の勝利に住するに由りて、能く慧を上首と爲すことを成じ、慧を上首と爲るに由りて能く解脫堅固なることを成ず。云何んが能く學の勝利に住することを得乃至能く解脫堅固なることを成ずるや。謂く念を增上と爲るに由る。是の如きを名づけて能成の次第と爲す。又是の如く三學を修習するに住して速に圓滿することを得、此れを亦た名づけて能成の次第と爲す。解釋の次第とは、謂く能く善く聲聞の弟子に一切の應に作すべきと應に作すべからざるとの事を敎誡す、故に大師と名づく。又能く無量の衆生を化導して苦をして寂滅せしむ、故に大師と名づく。又邪穢外道を摧滅せんが爲めに世間に出現す、故に大師

【九五】第五、次第に約す。

と名づく。他に從つて正法の音聲を聽聞し、又能く他をして正法の聲を聞かしむ、故に聲聞と曰ふ。
問ふ、何の因緣の故に唯だ聲聞の爲めのみに學に住する勝利等を說きたまへるや。答ふ、聲聞衆は是れ佛世尊に隨順し修學する眞實の子なるに由るが故なり。
此の中「法」とは當に知るべし名句文身を宣說するなりと。「學處」とは、謂く宣說する所の五の毀犯聚なり。「憐愍を具ふ」とは、謂く長夜に於いて諸の有情の所に恆に（九六）慈等の諸の無量に住するが故なり。「大悲を具ふ」とは、謂く能く無量なる衆生の多苦の法を拔濟するが故なり。義利を樂ふ者には能く衆生の多樂の法を與ふるが故に、利益を求むる者には能く衆生の無量なる品類の妙善法を與ふるが故なり。「恆に悲愍す」とは、能く衆生の無量なる諸の惡不善の法を拔くが故なり。「多人をして梵行を久住せしめんが爲め」とは刹帝利等の族姓に依りて說き、「轉た增廣す」とは卽ち是の如き有情の種類後後增廣するに依りて說き、乃至「諸の天人の爲めにす」とは謂く卽ち彼の勢力あるに由りて說く。此の中には世尊の大悲は普ねく一切を覆うて唯だ一分のみに非ざるとを顯示す。「正しく善く開示す」とは、謂く其の所有の性の如くなるが故に、及び其の所有の性を盡すが故なり。「正法を宣說す」とは、謂く十二分敎なり。「是の如き正法を聽受し、研尋し、任持し、讀誦し、靜に處して思惟すれば、是の如く能く汝をして利益せしむ」とは、增上戒に依つて說く。「是の如く能く汝をして安樂ならしむ」とは、謂く弊苦、艱難、不自在行に依止せざるな

【九六】慈、悲、喜、捨の四無量なり。

り。「是の如く能く汝をして利益安樂せしむ」とは、謂く離欲者の增上心の行、增上慧の行なり。此の行善なるが故に名づけて利益と爲し、能く饒益するが故に名づけて安樂と爲す。

復た次に、若くは是の處に於いて世尊は（九七）杜多の功德を讃美したまへり、是を利益と名づく。若くは是の處に於いて世尊は百味の飲食、百千の衣服を受くることを聽したまへり、是を安樂と名づく。若くは「是の」處に世尊は三學を制立したまへり、是の如きを名づけて利益安樂と爲す。又「如來は諸法の中に於いて彼彼の慧を以て善く觀察する者なり」と說きたまへり。若くは利益の爲め、若くは安樂の爲め、若くは利益安樂の爲めに增上戒學、增上心學、增上慧學に依つて說きたまへり。當に知るべし此の中に二の因緣ありて善く觀察すと名づくと。一には長夜に串習して徧く了知するが故に、二には無倒に正しく覺悟するが故なり。「彼彼の解脫に於いて善く證得す」とは增上心「學」、增上慧「學」に依りて說きたまへり。二の因緣に由りて善く證得すと名づく、一には究竟に到るが故に、二には不還の法なるが故に、無退の法なるが故なり。「我が尸羅蘊圓滿せず」とは、謂く或は尸羅に於いて一分を修習し或は依止せざるなり、是の如き尸羅圓滿するは諸の定地の戒を修習するなり。「我れ諸法に於いて善く觀察せず」とは二種の相に由る、前の如く應に知るべし。「我れ解脫に於いて善く證得せず」とは、二種の證に由る、前の如く應に知るべし。「我が應に說くべき所は是の如く已に說けり」とは、謂く總じて前に略して標

【九七】 杜多（Dhūta）は浣洗、洮汰と譯す。衣食住の三種の貪著なき行を云ふ。

擧し及び廣く分別する所を結ぶなり。

(九八)復た次に、六種の相に由りて應に當に一切の契經を解釋すべし、一には徧く事を知るが故に、二には惡行及び諸の煩惱隨煩惱を捨離するが故に、三には善行を受學するが故に、四には(九九)病等の如き行智徧く知り通達するに由るが故に、五には彼の果に由るが故に、六には自及び他彼の果を領受するに由るが故なり。此の六相に由り、及び前に建立せる所の如き(一〇〇)〔七〕相に由りて應に善く一切の經典を解釋すべし。此の中事とは、謂く〔五〕蘊と〔十八〕界と〔十二〕處と〔十二〕緣起と〔四〕念住及び〔四〕正斷等なり。彼の果とは、謂く厭患と離欲と解脫及び(一〇一)徧解脫なり。自他彼の果を領受すとは、謂く我生じ已つて盡くるなり。是の如き等の類を解釋分と名づく。

【九八】上來廣く七相(開いて十四相)を以て佛經を擇釋し了る。以下略して六相に依つて佛經を解釋す。

【九九】行智徧く通達するを、病癰等身に徧ねく通達するに喩ふ。

【一〇〇】前卷解釋分上の初に列する頌の十四を義類相從すれば七相となる。今此の十四相或は七相を指す。

【一〇一】徧解脫とは永へに解脫せるなり。

卷の第八十三

㈠攝異門分の上

是の如く已に攝釋を說けり、云何んが攝異門なりや。總の嗢柁南に曰く、

『㈡白品と　㈢黑品との、異門等を宣說し、義學を開悟せんが爲めに、略總して頌す應に知るべし。』

㈣別の嗢柁南に曰く、

『師と第一と二慧と、四種の善說等と、亦た因緣ある等と、施と戒と道との廣說なり。』

㈤此の中の大師は所謂る如來なり、紹師は即ち是れ第一の弟子なり、彼の尊者舍利子等の如し。襲師と言ふは謂く、軌範師若くは親教師若くは同法の者、能く開悟する者、憶念せしむる者なり。大師は即ち是れ聖教を立つる者なり。紹師は即ち是れ聖教を傳ふる者なり。襲師は即ち是れ聖教に隨ふ者なり。一切の應に作すべきことと應に作すべからざることとを開悟し制止するが故に、時時

【一】經の中名に種種の不同あり、義に衆多の差別あり、一門に多門を攝し一義に多義を攝する等文義に種種異說あり、今之れを辨じ決擇するを攝異門分と云ふ。

【二】白品とは有漏無漏の善法なり。

【三】黑品とは不善法なり。

【四】白品を解する頌なり。此中八門を列れ、次第に分別す。

【五】第一門、師を釋す。

に教授し教誡して轉ずるが故に、當に知るべし卽ち是れ能說、傳說及び隨說の者なりと。應に作すべからざることを造作するを驅擯するが故に能弊者と名づけ、應に作すべき事を造作するを慶慰するが故に勝弊者と名づけ、前の二事に於いて能く開示するが故に至弊者と名づく。隨つて生起する所の一切の疑惑をば皆な能く遣るが故に能導者と名づけ、惡作、憂悔をば皆な能く遣るが故に勝導者と名づけ、一切の煩惱及び隨煩惱をば皆な能く遣るが故に至導者と名づく。諸の疑惑に於いて能く斷除する者は謂く未だ顯はさざる義を能く顯發するが故に、已に顯發せる義を明淨ならしむるが故に、甚深なる義句は慧を以て通達し廣く開示するが故に、誓許して軌範と爲作し、尊重して依止する所なるが故に第二伴と名づけ、隨轉して伴ふが故に名づけて善友と爲し、宿昔居家に同處して樂しめるが故に名づけて智識と爲し、父母宗親互に相繫屬するを憐愍者と名づけ、若し眷屬に非ざるに而も恩惠を施すを有恩者と名づく。(六)義利と言ふは、求むる所の事能く義利を引くに名づけ、樂しんで此を爲すが故に義利を樂しむと名づく。利益と言ふは、善行を爲すに名づけ。樂しんで此を爲すが故に利益を樂しむと名づく。安樂と言ふは、安樂に住して身心の義〔利〕を益するに名づけ、樂しんで此を爲すが故に安樂を樂しむと名づく。現法の樂に依りて安隱を樂しむと名づけ、後法の樂に依りて說いて名づけて相應の安隱を樂しむと爲す。一切の事に於いて現に正に隨從す、故に信順と名づけ、若くは卽ち彼の補特伽羅の處所に於いて起すが故に名づけて信と爲

【六】以下二十九句は弟子所修の行を擧げ釋す。

す。彼の功德及與び威力殊勝なる慧を聞き已つて卽ち彼の法の處所に於いて而も起つて理門に隨順す故に淨信と名づく。是の如き增上力に由るが故に身の毛爲めに竪ち、悲泣して涙を墮す、是の如き等の事は是れ淨信の相なり。彼の功德威力等を聞き已つて行住等の諸の威儀の中に於いて恆常に彼れ實に功德ありと信ずるが故に信述と名づく。言ふ所の欲とは、若くは是の處に於いて作さんことを樂ひ得んことを樂ふなり。精進と言ふは、加行を發起して其の心勇悍なるなり。策勵と言ふは既に勇悍し已つて彼の加行に於いて正に勤めて修習するなり。剛決と言ふは、精進を發し已つて終に懈廢すること無く、壞らず退かざるなり。超越と言ふは、殷重に精進するなり。奮發と言ふは、謂く夜分を過ぎ、或は前一更にして鎧甲を被服して當に精進を發すべきなり。威勢と言ふは、被服する所の如く勤精進を發し、或は更に昇進し、威猛勇悍なるなり。勤精進を發し、深く彼の果の所有勝利を見るが故に勇銳と名づけ、勤修する時に於いて能く忍んで寒等の淋瀝を受くるに堪ふるが故に勇悍と名づけ、善く前後の差別を了知するに由り、其の勝上なる差別の證の中に於いて深く信順を生ずる所有の精進を制伏し難しと名づけ、少下劣なる差別の所證に於いて進んで善を修する中に怯劣無きが故に喜足無しと名づく。勵心と言ふは、謂く精進所有の障處たる一切の煩惱及び隨煩惱の諸の魔事の中に於いて頻頻に覺察して心をして靜息せしむるなり。常恆と言ふは、謂く卽ち此の正しき加行の中に於いて能く常に修作し、能く軛を捨てざるなり。正信と言ふは、謂く大師の正法を說く時に於いて此の正

法に於いて既に聽聞し已つて淨信を獲得するなり。不放逸とは、謂く信を得已つて出離を樂ふ障礙の法の中に於いて其の心を防護して恆常に善法を發起し修習するなり。瑜伽と言ふは、受持し讀誦し問論し決擇して正に加行を修するなり。思惟と言ふは、受持する所に隨つて法義を究竟し、審諦に觀察するなり。憶念と言ふは、觀察する所の一切の法義に於いて能く忘失せず、久しき所作、久しき所說の中に於いて能く正に隨念するなり。尋思と言ふは、卽ち是の如き無倒なる法義に依り出離等を起す所有の尋思なり。言ふ所の智とは、謂く出世間の加行の妙慧なり。言ふ所の解とは、謂く出世間の正體の妙慧なり。言ふ所の慧とは、謂く已に出世間の慧を證得して後時に得る所の世間の妙慧なり。觀察と言ふは、謂く無倒なる觀察作意に由り審諦に（七）已斷（八）未斷、有餘、無餘を觀察するなり。梵行と言ふは、謂く（九）八聖支道及び遠離なり。非正梵行とは婬欲の法を習ふなり。又餘の梵行に安住すと言ふは、謂く三十七の菩提分法なり。彼は三處に由つて攝受せらる、謂く（一）奢摩他に由るが故に、（二）毘鉢舍那に由るが故に、（一〇）（三）修身念に由るが故なり、其の所應の如く彼の自性なるが故に、彼の品類なるが故に、此の中の（一一）信念は俱に（一二）二品に通ず。

【七】已斷とは已に斷ぜる煩惱なり。

【八】未斷とは未だ斷ぜざる煩惱なり。

【九】八聖支道とは八正道なり。

【一〇】修身念とは七方便の中の四念住、四正斷、四神足、五根、五力を云ふ。

【一一】信念とは五力の中の信力のこと。

【一二】二品とは定（奢摩他）、慧（毘鉢舍那）の二なり。

（一三）復た次に、即ち此の大師を亦たは第一と稱す、（一四）自義行の故に亦たは稱して尊と爲し、他義行の故に亦たは稱して勝と爲し、倶義行の故に亦たは稱して上と爲し、一切の諸の外道を映蔽するが故に亦たは無上と稱す、一切の聲聞獨覺中下乘を映蔽するが故なり。復た差別あり、第一と言ふは、諸の世間善に共じて圓滿するが故に、言ふ所の尊とは、諸の聲聞善に共じて圓滿するが故に、言ふ所の勝とは、諸の獨覺善に共じて圓滿するが故に、言ふ所の上とは、煩惱障に於いて淸淨を得るが故に、無上と言ふは、所知障に於いて淸淨を得るが故なり。復た差別あり、第一と言ふは、（一五）欲行の善に於いて圓滿を得るが故に、言ふ所の尊とは、色行の善に於いて圓滿を得るが故に、言ふ所の勝とは、無色行の善に於いて圓滿を得るが故に、言ふ所の上とは、一切三界の世間の善に超過して圓滿するが故に、無上と言ふは、出世間の善に圓滿を得るが故なり。無足の有情とは、蛇等の如く、二足の有情とは、謂く人等なり、四足の有情とは牛等の如く、多足の有情とは、百足等の如く、有色の有情とは、謂く欲界より乃ち第四靜慮に至り、無色の有情とは、謂く空無邊處より乃ち非想非非想處に至り、有想の有情とは謂く欲界より乃ち無所有處に至る、無想天を除く、無想の有情とは、謂く無想天なり、非有想非無想の有情とは、謂く非想非非想處所有の生天なり。是の如く略して品類差別を說き、如來は（一六）三種の

（一三）第二門、第一を釋す。
（一四）自義行とは自利行、他義行とは利他行、倶義行とは自他二利行なり。
（一五）欲行とは欲界、色行とは色界、無色行とは無色界なり。
（一六）三種類の中にて如來の第一なることを顯示す。

第一なることを顯示す、謂く、(一)蠢動に由るが故に、(二)依止に由るが故に、(三)心に由るが故なり。

(二七)復た次に、能得の慧とは、謂く總じて一切の能く義利を引く所有の善慧を攝す。生長と增益と廣大との慧とは、謂く輭中上品の增進する差別なり、清淨慧とは、謂く宿世に串習し、多時を經歷して其の慧成熟せるなり。成辦慧とは、謂く諸の煩惱に於いて徧く知り永へに斷ぜるなり。圓滿慧とは、謂く卽ち此の善慧已に究竟に到れるなり。無退慧とは、謂く卽ち此の善慧成ずれば無退の法にして究竟して出離するなり。捷慧と言ふは速疾に了知するが故なり。速慧と言ふは慧に滯礙無きが故なり。利慧と言ふは其の所有を盡し、其の所有の如く皆な能く了知するが故なり。出慧と言ふは出離の法世間の離欲に於いて能く善く了知するが故なり。決擇慧とは出世間の諸の離欲の法に於いて能く了知するが故なり。甚深慧とは甚深なる空の相應緣起に隨順する諸法に於いて能く了知するが故に、又一切の甚深なる義句に於いて皆な能く如實に善く通達するが故なり。此の中如來慧は能く聲聞等の慧を制立し、制立する所に於いて能く隨つて覺了す。又大慧とは、謂く卽ち此の慧は長時に串習するが故なり。其の廣慧とは、謂く卽ち此の慧は無量無邊なる所行の境なるが故なり。無等慧とは其の餘の諸慧に與等無きが故なり。慧寶と言ふは(二八)諸根の中に於いて慧最勝なるが故に、末尼珠の輪王の毗瑠璃寶を顯發して光をして淨からしむるが如くなるが故に、彼れと相應するが故に慧寶と名づ

【二七】第三門、二慧を釋す。二慧とは第二慧の意、前を第一とするに次で慧を第二とす。

【二八】諸根とは信、精進等の五根なり。

け、皆な成就することを得。又慧眼とは、謂く俱生の慧なり。慧明と言ふは、謂く他より引く所なり、卽ち他より引く所の善加行の慧なり。慧光と言ふは、謂く卽ち加行聞思の成ずる慧なり。慧曜と言ふは、謂く卽ち此の修に由りて成ずる所の慧なり。慧燈と言ふは、謂く如來の所說の經典の甚深なる〔一九〕建立等に於いて開示するが故なり。慧炬と言ふは、謂く法敎に於いて量に隨ひ時に隨つて能く隨轉するが故なり。慧照と言ふは、謂く彼彼の所有諸法に於いて其の妙慧を以て善く了知し、善く了知すと雖も猶ほ他に隨つて轉じて而も未だ身證せざるなり。慧の無闇とは、謂く身證を作すなり。其の慧根とは、謂く他の所證に於いて能く徧ねく增上力の故なりと了知する諸の所有慧なり。慧力と言ふは、謂く自らの先後差別の所證に於いて能く徧ねく增上力の故なりと了知して法の道理に由りて退屈すること無き慧なり。慧財と言ふは、謂く能く一切の自在、最勝、富貴を招引して自身に隨へ獲て自在に轉ずるが故なり。又此の慧寶は一切の財に於いて最も殊勝なりと爲し、能く一切世間の珍財の根本の因と爲るが故なり。慧劍及び慧刀と說くが如きは、謂く能く永く一切の〔二〇〕結を斷ずるが故なり。慧杖と言ふは、謂く能く一切の煩惱、天惡魔を遠ざけ防ぐが故なり。慧轡と言ふは意根の馬を縱にして善行の地に於いて馳驟するが故なり。慧の無墮とは諸の身分をして散壞せざらしむるが故なり。慧の垣墻とは徧く一切一門に於いて轉ずるが故なり。慧の階陛とは、加行道なるが故なり。慧の堂殿とは究竟に到るが故なり、垣墻等の三は復た

〔一九〕建立とは立說、法門のこと。

三種を說くことを顯示せんと欲するが爲めなり、所謂る(一)界智と(二)種種界智と(三)非一界智なり。又正見とは能く善く眞實の法に通達するが故なり。有學の慧とは如理に作意し、復た能く心善く解脫し慧善く解脫するとを引發す。又後時に於ける諸の有學の慧は、謂く預流果及び一來果、不還果の攝、諸の無學の慧は、謂く阿羅漢の菩提の所攝、若くは諸の獨覺の菩提の所攝、若くは諸の如來の最勝無上なる菩提の所攝なり。

云何んが界智なりや。謂く能く種種なる界を了知するが故なり、若し能く十八界を了知するをば非一界智と名づけ、彼の界の種種なる品類を了知するを種種界智と名づく、彼の界と趣と地と補特伽羅との品類差別に通達し了知するが故なり。又微細とは能く眞實の甚深なる義に入るが故なり。審悉と言ふは具に能く一切の義に證入するが故なり。聰明と言ふは、謂く引發する慧と相應するが故なり。叡哲と言ふは、謂く俱生の慧と相應するが故なり。或は復た此に飜ずる眼とは能く現見の事を取るが故なり。智とは能く不現の事を取るが故なり。明とは(二一)所有を盡す事に悟入するなり。覺とは(二二)如所有の事に悟入するなり。義行と言ふは、謂く思所成の善法の攝なるが故なり。法行と言ふは、謂く聞所成の善法の攝なるが故なり。善行と言ふは施戒所成の善法の攝なるが故なり。調柔行とは、謂く修所成の善法の攝なるが故なり。

【二〇】結とは煩惱束縛の異名。
【二一】所有を盡すとは煩惱を斷盡するを云ふ。
【二二】如所有とは眞如のこと。

（三三）復た次に、善說と言ふは、謂く諸の文句善く圓滿するが故なり。善覺と言ふは、謂く能く善く等覺の義を現ずるが故なり。出離と言ふは、謂く世間道にて衆苦を斷除して出離を得るが故なり。等覺に趣くとは、謂く出世道にて衆苦を超えて能く眞實に等覺を現ぜんが爲めの故なり。無差別とは師と弟子との說く所の文義相滋潤するが故に、相違せざるが故なり。（三四）窣堵波ありとは一切の外道、天魔及び餘の世間のもの傾動すること能はざるが故なり。有依と言ふは（三五）四依を具足して失壞すること無きが故なり。大師如來應正等覺とは、謂く說く所の致善清淨なるが故なり。此の中の諸句は略して四種の善說の法律最極圓滿なることを顯はす、謂く初めの二句は文義圓滿なることを顯はし、次の二句は果圓滿なることを顯はし、次の二句は行圓滿なることを顯はし、後の一句は師圓滿なることを顯はす。

（三六）復た次に、佛世尊の法は因緣ありとは、謂く緣起ありて一切の所學の處を制立するが故なり。出離ありとは、謂く已に制立せるを犯せば如法に還つて出離することあるが故なり。有依と言ふは、謂く四依の制立に由り、一切の惡戒、諸の毀犯を超越するが故なり。超越ありとは制立して欲樂と自苦行とを受用する邊を遠離することを制立して士用に隨順して成就せしむるが故なり。神變ありとは、謂く（三七）三種に現ずる所の神變に由りて速疾の

【三三】第四門、四種の善說を釋す。先に八句を釋し後之れを攝して四と爲すが故に四種の善說と云ふ。

【三四】窣堵波（Stūpa）は方墳、圓塚、靈廟と譯す。

【三五】四依とは（一）糞掃衣を著す、（二）常に乞食を行す、（三）樹下に依りて坐す、（四）陳腐藥を用ふ。

【三六】第五門、因緣ある等の五句を釋す。

【三七】三種の神變とは（一）神足通、（二）漏盡通、（三）教誡通なり。

神通を獲得せしめんが爲めに無間に制立して正しく教授するが故なり。

(二八)復た次に、解脱捨とは涅槃に廻向するが故に施果の中に於いて繫著無きが故なり。常に手を舒ぶとは殷重に廣く施すが故なり。棄捨を樂しむとは施の前、正に施すとき及與び施の後に意悅び清淨にして追悔無きが故なり。祠祀施とは一向如法にして凶暴を以て財物を積集せず、時時に數數周く徧く所施の物を捨施するが故なり。捨圓滿なりとは、謂く福田に於いて奉獻するが故なり。惠施の中に於いて分布するを樂しむとは、謂く父母妻子等の所に於いて時時に平等に分布するが故なり。是の如き一切に總じて六施あり、一には所依無き施、二には廣大なる施、三には歡喜施、四には數數施、五には田器施、六には眷屬を攝受する施なり。此の中には品類と時處との布施に依止して說けり。

(二九)復た次に、廣く戒を說かば、中の嗢柁南に曰く、

『尸羅と法と殺生と、具戒等なり廣く說けり。』

尸羅と言ふは、謂く能く寂靜なるなり、淨戒を毀犯すれば罪熱惱するが故に、又清涼と義相應するが故なり。律儀と言ふは、謂く是れ自らの體相を遠離するが故なり。具足と言ふは、謂く正に無悔等を攝受するが故なり。清涼と言ふは三摩地を攝受し現行するが故なり。又善と言ふは、謂く能く可愛の果を攝受するが故なり。無罪と言ふは、謂く能く自他の利を攝受するが故なり。無害と言ふは、謂

【二八】第六門、施を釋す。
【二九】第七門、戒を釋す。

く能く刀杖を執持して鬪諍する等の事を違拒するなり。隨順と言ふは（三〇）諸の沙門果を證得し、及び餘の所有勝れたる功德に隨順するが故なり。隱覆と言ふは、謂く常に自らの善法を隱覆するが故なり。顯發と言ふは、謂く常に自らの惡法を發露するが故なり。端嚴と言ふは、謂く具に諸の少欲等の所有沙門の莊嚴の具を攝受するが故なり。福田と言ふは、正見、軌範、淨命、圓滿の德を攝受するが故なり。無熱と言ふは、謂く正に自苦の邊を遠離するが故なり。無惱とは、欲樂を受用する邊を遠離するなり。無悔と言ふは、謂く正に染汙と、不樂と、憂慼との事を遠離するが故なり。

復た次に、善說の法とは道理の所攝なるが故に、勝德を住持するが故なり。毘奈耶とは一切煩惱の滅に隨順するが故なり。言ふ所の聖とは一切雜染汙の法を遠離して生ぜざらしむるが故なり。又善と言ふは能く無罪可愛の果を與ふるが故なり。應に習ふべしと言ふは應に習近すべきが故なり。善哉と言ふは是れ諸の聖賢の稱讚する事なるが故なり。

復た次に、殺生と言ふは、謂く一あるが如し、乃至廣く說かば黑品白品なり、當に知るべし廣くは有尋有伺地の中に已に說けるが如しと。

復た次に、（三一）具戒等なり皆な廣く說けりと言ふは、謂く具戒に安住し、亦た能く別解律儀を守護するなり、乃至廣く說かば根門を守護し、若くは念を守護し、若くは常に委に念じ、乃至廣く說かば

【三〇】諸の沙門果とは預流、一來等の四沙門果なり。

【三一】具戒とは具足戒なり、比丘の二百五十戒の如きなり。

食に於いて量を知り、諸の飲食に於いて思擇して而も食し、充悅の爲めにせず、憍逸の爲めにせず、乃至廣く說かば進止往來正知にして住す、乃至廣く說けり。是の如き一切は廣く說くこと應に知るべし聲聞地の如しと。

(三一)復た次に、廣く道を說かば、中の嗢柁南に曰く、

『念住と正斷と、神足と根と力と、覺支と道支とにして、無量を後と爲す。』

(三二)四念住を勤修せんと欲するが爲めの故に上品なる猛利を發起するなり。欲とは謂く不正なる作意の諸の過失を斷除せんが爲めの故なり。精進と言ふは、謂く慢緩を斷除せんが爲めに諸の過失を策勤するが故なり。策勤と言ふは、謂く惛沈掉擧の二の隨煩惱の諸の過失を斷除せんが爲めの故なり。勇悍と言ふは、自ら輕懱せざるが故なり。勇銳と言ふは、能く外敵を抗ぐが故なり。制伏す可らずとは、少下劣なるに於いて喜足を生ぜざるが故なり。正念と言ふは敎授を忘れざるが故なり。正知と言ふは、能く毀犯する所を毀犯せざるが故なり。不放逸とは善軛を捨せざるが故なり。熱光に住すとは、能く懈怠の對治法を修するが故なり。正解と言ふは能く毀犯の對治法を修するが故なり。念成辦とは、能く忘念の對治法を修するが故なり。世間を調伏すとは能く貪憂一切の世法の正しき對治を修するが故なり。此の中には[四]念住を勤修する諸の苾芻等は應に當に(三三)四種の對治を修習すべ

【三一】 第八門・道を釋す。
【三二】 (イ)四念住を解す。
【三三】 四種の對治とは前述の如し。

きことを顯示す。

(三五)復た次に、(三六)諸の正斷、(三七)諸の神足の中に於ける所有の異名は、廣く說くこと應に知るべし聲聞地の如しと。

(三八)復た次に、如來の所に於いて(三九)正信を安立する等は廣く說くこと應に知るべし攝決擇分の如しと。(四〇)有勢力、有精進、有勇悍に安住する等は廣く說くこと應に知るべし菩薩地の如しと。

(四一)復た次に、諸法を簡擇し、最も極めて簡擇し、周徧く尋思し、周徧く觀察す、廣く說くことは應に知るべし聲聞地の如しと。已に無漏の眞の作意を得たるが故に聖諦の境を緣ずるに一切無漏の作意相應するを名づけて擇法と爲す。簡擇すと言ふは總じて一切の苦法の種類を取りて苦聖諦と爲るが故なり。最も極めて簡擇すとは各別に分別して諸苦を取るが故なり。謂く生苦老苦等なり。極めて法を簡擇すとは此の處所に依つて契經等の法を簡擇するが故なり。所以は何ん、此に依止するが故に先づ所作を修するなり。又簡擇すとは、謂く審定して解了するなり。最も極めて簡擇すとは、謂く審定して等しく解了するなり。極めて法を簡擇すとは、謂く審定して近く解了するなり。(四二)前は是れ(四三)尋求道なり。今

【三五】(ロ)四正斷四神足を解す。
【三六】四正斷。
【三七】四神足。
【三八】(ハ)五根五力を解す。
【三九】五根の中の信根、五力の中の信力等。
【四〇】五根の中の精進根、五力の中の精進力等。
【四一】(ニ)七覺支を解し、偏に擇法覺支を解す。
【四二】六種の簡擇の中前三は是れ尋思の作用なり、後三は如實智の作用なり。
【四三】尋求道とは尋思の作用なり。

は是れ（四四）決定道なり。復た差別あり、解了すと言ふは所知の事に於いて作意し發悟するなり。等しく解了すとは既に發悟し已つて方便して尋求するなり。近く解了すとは求め已つて決定するなり。

（四五）復た次に、（四六）黠了すとは體を了知し分別するが故なり。通達すとは所知の事に通達するが故なり。復た差別あり、黠了すとは自相を了知するが故なり、通達すとは共相を了知するが故なり。審察すとは謂く能く定取し、其の所有を盡し、其の所有の如く先後漸次に倍増廣するが故なり。聰叡とは先後漸次に彼の義の中に於いて忘失すること無きが故なり。覺とは、謂く能く簡擇するに堪へたる倶生の慧なり。明とは、謂く習うて得る所の慧なり。慧行とは、謂く能く受持し讀誦し問論し勝れて決擇する等の増上なる了別なり、卽ち彼の義に於いて轉た明了なることを増し勤めて修習する慧なり。毗鉢舍那とは、謂く卽ち前に了別せる所の義に於いて審に觀察するが故なり。涉入すとは、謂く先づ所緣の境を尋思して作意し、思惟し、心涉入するが故なり。納受すとは謂く彼に於いて能く攝受するが故なり。推尋すとは、謂く彼の諸相を取るが故なり。極めて推尋すとは、謂く彼の隨好を取るが故なり。復た差別あり、推尋すとは、謂く尋求する心なり。極めて推尋すとは、謂く伺察する心なり。最も極めて推尋すとは、謂く得失に於いて推構し、尋思し、極めて校計するが故なり。聖教を［所］依と爲して尋求を起すを說いて尋思と名づけ、現量を［所］依と爲るを說いて思惟と名づけ、比

【四四】決定道とは如實智の作用なり。
【四五】（ホ）八聖道支を解す。
【四六】正見を明す。

量を〔所〕依と爲るを說いて分別と名づく。(四七)厭離とは增上なる意樂、遠離の中に於いて(四八)決定を起すが故なり。遠離とは、謂く他邊より遠離を受くるが故なり。隨離とは、謂く受け已つて後能く隨つて彼の尸羅を守護するが故なり。還離とは、謂く誤り犯し已つて卽ち能く如法に悔除するが故なり。此より已後寂止、律儀にして隨つて尸羅を護るなり。寂止とは忍辱、柔和の事を具ふるに由るが故なり。律儀とは少欲、慈心等を具ふるに由るが故なり。根門を密護すとは自然に作さざるが故なり。作さずとは他に由つて作さざるが故なり。行ぜずとは正しく了知するに由りて現行せざるが故なり。犯さずとは失念に由りても而も現行せざるが故なり。橋梁とは此を〔所〕依と爲るに依りて惡法を渡るが故なり。船筏とは、謂く對治に依り誓つて能く彼の癡狂なる失道を運び、相違障礙の法を渡らしむるが故なり。喜樂せずとは、謂く遠離の增上なる意樂に於いて極めて滿足するが故なり。違越せずとは、謂く一切の所學に於いて衆中にて毀犯すること無きが故に、棄捨せざるが故なり。異り違越せずとは、謂く一分に於いて穿穴無きが故に、棄捨せざるが故なり。(四九)言ふ所の念とは、謂く其の心を住むるが故なり。等念と言ふは、謂く等しく其の心を住むるが故なり。是の如く廣く說かば應に九種の心住の差別に隨ふべきこと、聲聞地の如く、當に其の相を知るべし。

(五〇)復た次に、嗢柁南に曰く、

〔四七〕正語正業を明す。
〔四八〕決定とは身語意三業の中の語業なり。
〔四九〕正念を明す。
〔五〇〕廣說を辨ずる第一。

『智と宣說と善と欲と、熾然たると獨と遠塵と、病の如き等と解釋と、我と斷と生を盡す等と、天世と衆生とを弁くと、依等と我作等なり。』

(五一)智とは、謂く言說を聞くを先と爲る慧なり。見とは、謂く言說を見るを先と爲る慧なり。覺とは、謂く言說を覺るを先と爲る慧なり。知とは、謂く言說を知るを先と爲る慧なり。智とは、謂く現見せざる境を知るなり。見とは、謂く現見し現在前する境を見るなり。明とは、謂く無明と相違する解なり。覺とは、謂く實有の義智なり。覺とは、謂く非實有を增益せざる智なり。慧とは、謂く俱生生得の慧なり。明とは、謂く加行習に由りて成ずる所の慧なり。現觀とは、謂く內に於いて法を現觀し已れば、諸法の中に於いて現見せざるにはあらず、他智を緣ずるにはあらず。

(五二)復た次に、宣說すとは、謂く他の請問に因て記別を爲すなり。施設すとは、謂く語及び欲に由りて次第に名句文身を編列するなり。安立すとは、謂く次第に編列し已つて略して他の爲めに說くなり。分別すとは、謂く略して說き已つて分別し開示して其の義趣を解するなり。開示すとは、謂く他の展轉して生ずる所の疑惑をば皆能く除遣するなり。顯發すとは、謂く自ら甚深なる義句に通達し、他の爲めに顯示するなり。敎ふとは、謂く他の發起し請問するに因らず、哀愍に由るが故に說法開示するなり。徧く開示すとは、謂く無間に演說して師拳を作さず、隱覆する所無きなり。

【五一】智を辨ず。
【五二】宣說を辨ず。

(五三)復た次に、初善とは、謂く聽聞する時歡喜を生ずるが故なり。中善とは、謂く修行する時艱苦あること無く、(五四)二邊を遠離して中道に依りて行ずるが故なり。後善とは、謂く極めて究竟して、諸垢を離るるが故に及び一切究竟の離欲を後邊と爲るが故なり。義妙なりとは、謂く能く利益安樂を引發するが故なり。文巧なりとは、謂く善く名身等を緝綴するが故に、及び語具圓滿するが故なり。純一とは、謂く一切の外道と共せざるが故なり。圓滿とは、謂く限量無きが故に、最も尊勝なるが故なり。清淨とは、謂く(五五)自性解脱するが故なり。鮮白とは、謂く(五六)相續解脱するが故なり。梵行とは、謂く八聖支道なり、當に知るべし、此の道は純一等の(五七)四種の妙相に由つて顯説せらると。諦聽すとは、謂く是の如き相法に於いて、勸めて審聽せしむるなり。應に善く懇到すべしとは、謂はく勸めて無倒、無間、殷重、如理に思惟せしむるなり。

(五八)復た次に、猛利なる欲とは、謂く我れ何にして當に彼の處所に於いてすべきやと、乃至廣く説けり。猛利なる愛とは、謂く修する所の正しき加行の中に於いてするなり。猛利なる樂とは、謂く説者及與び大師の尊重なる處等に於いてするなり。猛利なる信とは、謂く敎法、敎授、敎誡に於いてするなり。

【五三】善を辨す。
【五四】二邊とは有無の二邊なり。
【五五】自性とは心なり。
【五六】相續とは身なり。
【五七】四種の妙相とは純一、圓滿、清淨、鮮白の四相なり。
【五八】欲を辨す。

(五九)復た次に、能く熾然たりとは、謂く速疾なる通慧を證得せるが爲めに終に自ら後期に推延して勤精進を發するに暇あらざるなり。瑜伽に順ずとは、謂く尊敎若くは等しきもの、若くは勝れたるものに隨ひて加行を修して終に減劣せざるなり。能く永へに斷ずとは、謂く能く煩惱の對治を修習するなり。能く閑居すとは、謂く所有の邊際の臥具に依り、遠離して居して三摩地を修し現在前せしめ、三摩地に依つて對治を修習するなり。

(六〇)復た次に、獨とは、謂く遠離、邊際の臥具に處して第二あること無くして安住するが故なり。遠離と言ふは、謂く諸の染汙無記の作意現行せざるが故なり。縱逸無しとは、謂く欲等の惡法を尋思するに於いて心を防護するが故に又善の中に於て自ら安處するが故なり。熾然たりと言ふは、謂く前に說けるが如し。發遣すと言ふは、謂く五蓋を除き內に心を持つが故に、又此に由るが故に其の心を發遣して無上安隱の處に趣かしむるが故なり。

(六一)復た次に、遠塵離垢とは、塵は謂く已に生じ未だ究竟せざる智能く現觀を障へ、有間無間に我慢現轉するなり。垢とは謂く(六二)彼の品及び(六三)見斷品の所有(六四)麤重なり、永く無からしむるが故に遠塵離垢と名く。又復た塵とは所謂我慢及び見所斷の一切の煩惱なり。垢は謂く二品所有の麤重なり。

【五九】熾然たるを辨ず。
【六〇】獨を辨ず。
【六一】遠塵を辨ず。
【六二】彼の品とは我慢同時の心所なり。
【六三】見斷品とは見道所斷の煩惱品なり。
【六四】麤重とは煩惱の種子なり。

諸法の中に於いて[す]とは、謂く自相共相所住の法の中に於いて[する]なり。法眼とは、謂く如實に現證して唯だ法慧のみあるなり。法を見ると言ふは、謂く苦等[の四諦]に於て如實に見るが故なり。法を得すと言ふは、謂く隨つて[四]沙門果を證得するが故なり。法を知ると言ふは、謂く證得し已つて其の所得に於て能く自ら我れ是れ預流[果なり]、我れ已に退墮無き法を證得せりと了知するが故なり。法に至誠なりとは、謂く諦現觀增上力の故に證淨を獲得し、佛法僧及び自ら得る所の聖所愛戒に於いて正信を以て行じ如實に至誠なるが故なり。惑を越渡すとは、謂く自らの所證に於てするなり。疑を越渡すとは、謂く他の所證に於いてするなり。他に緣るに非ずとは、謂く此の法に於いて內に自ら證する所にして但だ他に隨つて聽聞する等に非ざるが故なり。餘の引く所に非ずとは、謂はく大師と所有の聖教とに於いて一切の外道異論の爲めに引奪せられざるが故なり。諸法の中に於いて畏るる所無きを得たりとは、謂はく自らの所證に於いて若し他のもの詰問するも悚懼すると無きが故なり。(六五)流に逆ふと言ふは、謂く已に聖道に登れるが故なり。趣向すと言ふは、謂く說神通究竟して往趣し、退還すること無きが故なり。復た差別あり、當に知るべし世俗と勝義との二種の法を建立するが故なりと。

(六六)復た次に、病の如し乃至廣く說けりと說くが如き、云何んが彼の病の如き等を顯示するや。但だ彼れ猶ほし重病の如しと說くのみに非ず、乃至廣く說けり。然れば修行する者先づ如實に無常等の

【六五】流とは生死の流なり。

【六六】病の如き等を辨す。

行を以て彼の事の中に於いて如實に訶毀し、此の思惟を作す、此れ病等の如し、甚だ厭逆すべしと、彼れと和合せざらんことを欲するが爲めなり。是の故に次に無常の行等を說き、如實に顯示し彼の果を觀察せしむ。無常と言ふは顯現せる（六七）生身及與び刹那皆な展轉するが故なり。刹那展轉すとは彼彼の觸の起盡するに由るが故なり。彼彼の受起盡し、此に相續して見る。「苦を」現見せざるに非ず、（六八）他「身」を緣ずる智に非ざるに由るが故なり。言ふ所の苦とは二種の苦なり、謂く（六九）生等の諸苦及び諸の所有受を皆な說いて苦と爲す。此の二種の苦は、其の所應の如く、生身の展轉して有るを見るに由るが故に而も悟入することを得。謂く死の無間に生ありて身生じ、生じ已つて復た老等の諸苦あり、是の故に說いて無常と言ふ。故に苦は生身の展轉して有るを見るに由るが故に苦性に悟入す。云何んが諸の所有受をば皆な說いて苦と爲すや。謂く諸の樂受は變壞するが故に苦なり、一切の苦受は生じ住するが故に苦なり、（七〇）非苦樂受は體是れ無常滅壞の法なるが故に之を說いて苦と爲す。此の中樂受は無常に由るが故に必ず變壞あり。一切の苦受は無常に由るが故に生じ住し相續して皆な苦を起す。非苦樂受は已に滅壞せる者なれば無常に由るが故に之を說いて苦と爲す。已に生起せる者は滅壞の法なるが故に亦た說いて苦と爲す。此の滅壞の法は（七一）彼の二の隨逐する所なるが故に二と相應す、故に亦た名

【六七】生身。一身の無常を觀ずるを生身觀、念念の無常を觀ずるを刹那觀と云ふ。
【六八】自身を觀じて苦を現見す、他身を緣ずるには非ず。
【六九】生老病死の四苦。
【七〇】非苦樂受とは捨受なり。
【七一】彼の二とは苦苦と壞苦なり。

づけて苦と爲す。云何んが當に樂受を觀じて苦と爲すべきや。謂く此の受は貪の（七一）隨眠する所なるに由る。隨眠するに由るが故に當來の苦を取り、現法の中に於いて能く壞苦を生ず。是の如く當に樂受を觀じて苦と爲すべし。云何んが當に苦受は箭の如しと觀ずべきや。謂く毒箭の如し、乃至現前に常に惱壞するが故なり。非苦樂受は體是れ無常滅壞の法なりとは、謂く已に滅せる者は即ち是れ無常なり、其の未だ滅せざる者は是れ滅壞の法なり。若し無常なる者は此より復た若くは樂若くは苦を生ぜば、滅壞の法は終に苦樂の二種を解脫せず。言ふ所の空とは、無常無恆にして變易せざる無き眞實の法なるが故なり。無我と言ふは、我を遠離するが故に、衆緣より生ずるが故に、自在ならざるが故なり。

（七二）復た次に、解釋とは、謂く能く彼の自性を顯示するが故なり。開示すとは、謂く即ち此れは應に徧く知るべく、此は應に永へに斷ずべし等の差別を顯示するが故なり。顯了すとは、謂く若し永へに斷せず、徧く知らざる等は過患を成ずることを顯示するが故なり。了とは謂く了相作意なり。解とは謂く勝解作意なり。知とは謂く遠離等の作意なり。等しく解了すとは、謂く自相を了するが故なり。近く解了すとは、謂く共相を了するが故なり。黠了すとは、謂く了すると其の所有を盡すが故なり。通達すとは、謂く了すること其の所有の如くなるが故なり。觸とは謂く八聖支道に於ける梵行の所攝なり。作證とは、謂く彼の果たる涅槃に於いてするなり。

【七一】隨眠すとは種子として潛在し隨逐するを言ふ。

【七二】解釋を辨ず。

（七四）復た次に、我とは、謂く五取蘊に於いて我我所の見現前し行ずるが故なり。（七五）有情と言ふは、謂く諸の賢聖如實に唯だ此の法のみありて更に（七六）餘無しと了知するが故に、又復た彼に於いて愛著あるが故なり。（七七）意生と言ふは、謂く此は是れ意の種類の性なるが故なり。（七八）摩納縛迦とは謂く意に於いて（七九）或は高或は下なるに依止するが故なり。（八〇）養育者と言ふは、謂く能く後有の業を増長するが故に、能く一切の士夫の用を作すが故なり。

（八一）補特伽羅とは、謂く能く數數（八二）諸趣に往取して厭足すること無きが故なり。（八三）命者と言ふは、謂く壽和合して現に存活するが故なり。（八四）生者と言ふは、謂く生等の所有法を具ふるが故なり。

（八五）復た次に、當に諸愛を斷じ、諸結を止息すべしとは、謂く適ら聖諦に於いて現觀を得る時、便ち能く永へに（八六）三結を斷じ、一切處の後有の愛に於いて復た現行せず、彼れ後時に於いて數數生滅隨觀を勤修し、復た能く餘す無く永へに慢等を斷ずるなり。是の故に說いて能く正しく修習して永へに諸慢を斷ずと言ふ。眞現觀の故に彼の愛の隨眠一切永へに斷じ、此の因緣に由りて當來

【七四】我を辨ず。
【七五】有情とは我の異名也。
【七六】餘無しとは有情の外に「我」等無きを言ふ。
【七七】意生とは我の異名なり。有情は意より生ずるが故に意生と云ふ。
【七八】摩納縛迦（Mānavaka）は儒童或は年少と譯す、我の異名なり。
【七九】或は高或は下とは意自在なるを言ふ。
【八〇】養育者とは我の異名を言ふなり。
【八一】補特伽羅（Pudgala）は我の異名なり。
【八二】諸趣とは五趣なり。
【八三】命者も我の異名なり。
【八四】生者も我の異名なり。
【八五】斷を辨ず。
【八六】三結とは見結、戒取結、疑結なり。

の諸苦諸の後有の法復た得可き無く、又能く究竟して苦の邊際を作す。

(八七)復た次に、我が生已に盡くとは、謂く(八八)第八有等なり。梵行已に立つとは、謂く聖道に於いて究竟して修するが故に復た退失すること無きなり。所作已に辦ずとは、謂く一切の結永へに餘ること無きが故に、一切の道果をば已に證得せるが故なり。後有を受けずとは、謂く(八九)七有に於いて亦た永へに盡くせるが故なり。又た我が生已に盡くとは二種の生あり。一には生身の生、此れは前に說けるが如し。二には煩惱の生、此れは微薄なるが故に亦た說いて盡くると爲す、此れ則ち(九〇)初の二果を(九一)記別するなり。梵行已に立つとは、謂く不還果には非梵行の貪此に永へに斷ずるが故なり。所作已に辦じ後有を受けずとは、謂く阿羅漢なり。當に知るべし此の中には(九二)四種の解了の行相を記別すと。

(九三)復た次に、天世間を除くとは、此れ總句なり。此れに二種あり、一には魔を除き、二には梵を除き、沙門婆羅門を除く。衆生とは、謂く諸の沙門若くは婆羅門にして人中に生在して魔梵を希求して修行する者なり。諸天、衆生を除くとは、謂く天中に於いては魔及び梵を除き、其の人中に於いては沙門、婆羅門を除

【八七】生を盡す等を辦ず。
【八八】第八有。有とは生なり、不還果以上の聖者は七世受生より解脫し欲界に受生ぜるが故に第八生の位なり、之れを第八有と云ふ。
【八九】七有とは欲界七世受生を言ふ。
【九〇】初の二果とは四果の中の初二果即ち預流果及び一來果なり。
【九一】記別とは他の爲めに說くこと。
【九二】四種の解了とは「我が生已に盡く」等の四句を言ふ。
【九三】天世と衆生とを除くことを辦ず。前の四沙門果より除外す。

くなり。是の如く總じて（九四）三縛を解脱し、欲貪を出離することを結ぶ。又毗柰耶、斷、超越とは、毗柰耶は了相と勝解との作意に由り、斷は（九五）遠離等の作意に由り、超越は方便究竟果作意に由る。離繫と言ふは（九六）九結を離るるが故なり。解脱と言ふは一切の生老等を解脱するが故なり。顚倒を離るとは見道に由るが故なり。言ふ所の多とは修道に由るが故なり、彼の修道に由つて多く修習するが故に說いて名づけて多と爲す。利益すと言ふは、謂く諸の善行なり。安樂にすと言ふは損惱の行無きなり。哀愍すと言ふは、謂く一あるが如き諸の善行に由り、損惱の行無きなり。他を哀愍するは是れ求むる所の事なるが故に、能く義利を引くが故に之を名づけて義と爲す。愛樂す可きが故に、罪あること無きが故に利益と爲す。安樂とは、謂く彼に於いて所有善行を起し損惱の行無きなり。言ふ所の人とは、謂く刹帝利等なり。若しくは佛の世間に出現し、善く正法を說き、善き修行を增し、能く多く利益し、能く多く安樂にしたまふに因りて或は但だ自ら利益安樂を爲して世間を悲愍し、或は但だ他の利益安樂を爲し、或は二種を爲すあり、是の故に說いて其の義利利益安樂を爲すと言ふ。此の中唯だ天及び人のみを說くは彼に勢力ありて能く其の義を了じ、正行を修するが故なり。

（九七）復た次に、依とは謂く五取蘊及び七種に攝受する所の事なり、即ち是れ父母及び妻子等なり。

【九四】三縛とは貪瞋癡なり。
【九五】遠離等の作意とは遠離作意、攝樂作意、加行究竟作意なり。
【九六】九結とは㈠愛㈡恚㈢慢㈣無明㈤見㈥取㈦疑㈧嫉㈨慳なり。
【九七】依等を辨す。

言ふ所の取とは、謂く諸の欲貪を亦たは名づけて取と爲す、(九八)不安立及び(九九)安立に由るが故に(一〇〇)四の取心ありと說く。依處とは、謂く(一〇一)四識住なり。執著と言ふは、謂く諸の煩惱能く依に趣くを卽ち名づけて纒と爲し、彼の品の麤重を說いて隨眠と名づけ、是の如きを依と名づく、取心の依處なり。此の有識身及び外の一切の相の中に執著し隨眠すとは、謂く我我所に於いて、因緣の境界の相の中に我慢し執著し隨眠するなり。

(一〇二)復た次に、我我所の行とは、謂く薩迦耶見なり。我慢と言ふは、謂く卽ち此れ慢なり、卽ち彼の諸の纒を名づけて執著と爲し、卽ち彼の麤重を名づけて隨眠と爲す。執著するは多分是れ諸の外道なり、隨眠は(一〇三)二に通ず。

(一〇四)復た次に、嗢柁南に曰く、

『如來と無常想と、底沙と怖と無爲と、不有と不相續と、空と無常と無餘なり。』

(一〇五)如來、應、正等覺等とは經に分別するが如し。言ふ所の(一〇六)應とは供養に應ずるが故なり。(一〇七)明行圓滿は所謂る(一〇八)三明と(一〇九)遮行と(一一〇)行

【九八】不安立。在家の人には但だ欲取のみを安立し餘の三取を安立せざるなり。
【九九】安立。在家出家に通じて四取を安立するなり。
【一〇〇】四の取心とは(一)欲取(二)見取(三)戒取(四)我語取なり。
【一〇一】四識住とは(一)色識住(二)受識住(三)想識住(四)行識住なり。
【一〇二】我作等を辨ず。
【一〇三】二とは內外道なり。
【一〇四】廣說を辨ずる第二。
【一〇五】如來を辨ず。
【一〇六】如來十號の一。
【一〇七】同上。
【一〇八】三明とは宿命明、天眼明、漏盡明なり。
【一〇九】遮行とは根門を密護する行なり。
【一一〇】行行とは三業の修行なり。

行と皆な悉く圓滿するなり。又復た（二一）四種の增上心法現法樂住皆な悉く圓滿するなり、（二二）前は是れ行行、（二三）後は是れ住行なり、此の中清淨なる身語意業現行す。正命は是れ行圓滿し根門を密護するは是れ遮圓滿するなり。中（二四）此の二種は如來の（二五）三種不護と忘失無き法とを顯示す。過を造らざる世間の靜慮は自苦行を遮するに由る。（二六）善逝と言ふは、謂く長夜に於いて一切種の自利利他の二の功德を具ふるが故なり。（二七）世間解とは、謂く一切種の有情世間及び器世間に皆な善く通達するが故に、善く有情世間の依、前後際宿住死生の依、一切時の八萬四千の行の差別に悟入するに由るが故に、器世間の謂ゆる東方等の十方世界の無邊なる成壞に於いて善く了知するが故に、又世間の諸法の自性。因緣、愛味の過患、（二八）出離、（二九）能趣の行等に於いて皆な善く知るが故なり。（三〇）無上丈夫調御士とは、智等しきもの無きが故に、過上無きが故に、現法の中に於いて是れ大丈夫にして多分無量なる丈夫を調御し、最も第一なるが故に、極めて尊勝なるが故なり。（三一）天人師とは、彼の天人甚深なる義を解し、正行を勤修するに力能あるに由るが故なり。（三二）佛陀とは、謂く畢竟して一切の煩惱並に諸の習氣を斷じ、等正覺阿耨多羅三藐三菩提を現ずるが故な

【二一】四種の增上心法現法樂住とは增上心法現法樂住は禪定の異名、今四禪を言ふ。
【二二】前とは明行圓滿を指す。
【二三】後とは四種の增上心圓滿を指す。
【二四】此の二種とは行行と遮行なり。
【二五】三種不護とは身、口、意の三淨業なり。
【二六】如來十號の一。
【二七】同上。
【二八】出離とは離欲行なり。
【二九】能趣とは菩提に趣く行なり。
【三〇】如來十號の一。
【三一】同上。
【三二】同上。

り。薄伽梵とは、坦然として妙菩提座に安坐し、任運に一切の魔軍を摧滅する大勢力の故なり。此の中如來は是れ初めの總序なり。應正等覺は、謂く永く一切の煩惱障及び所知障を解脱するが故なり。其の別の中に於いて略して二種あり、所謂る共德及び不共德なり。共德の中に於いて且らく諸の煩惱障及び所知障を解脱すと說く、自餘の明行圓滿等の句は是れ不共德なり。

〔一三〕復た次に、無常想に於いては素怛纜の中にて修す、謂く若くは修し、若くは習ふ乃至廣く說けり。修果とは、謂く一切の欲貪〔を斷ず〕乃至廣く說けり。修の差別とは、謂く譬喩の差別の故なり。修の方便とは、謂く或は阿練若に住す、乃至廣く說けり。此の中若くは修すとは、謂く了相作意に由るが故なり、若くは習ふとは、謂く勝解作意に由るが故なり。多く修習すとは、謂く餘の作意に由るが故なり。又若くは修すとは、謂く所知の事に於いて發趣するが故なり。若くは習ふとは、謂く無間に殷重に加行を修するが故なり。多く修習すとは、謂く長時に於いて熟し、修習するが故なり。處と爲すとは、所依と作すが故なり。事と爲すとは所緣と作すが故なり。隨順すとは、作意し思惟するに由るが故なり。串習すとは所欲に隨つて艱難無きことを得るが故なり。善く攝受すとは正法を聽聞するが故なり。善く發起すとは內に於いて如理に作意し、思惟するが故なり。又善く攝受すとは殷重に作意するが故なり。善く發起すとは無間に作意するが故なり。又善く攝受すとは究竟に到るが故なり。善く發起すとは正しく加行するが故なり。

【一三】無常想を辨ず。

欲[界の]貪に隨順するが故に掉を說き、色[界]の貪に隨順するが故に慢を說き、無色[界の]貪に隨順するが故に無明を說く。根本を拔除すとは隨眠を害するが故なり。枝條を摧折すとは下地の善法彼に由りて斷滅して增長せざるが故に、無常想の所緣を以て無常想を顯示し、自心に作意し、無常を觀ずるが故なり。臺閣とは、謂はく(二四)解脫と俱行する無常想なり。梁棟とは、謂はく彼の依因なり。(二五)象跡とは、謂はく不淨等の想に於いて[無常想を]第一なりと爲るが故に、所緣廣大なるが故なり。流注とは、謂はく解脫の因と俱行する無常想は能く涅槃に趣くが故なり。日出とは、謂はく能く無明の闇を對治するが故なり。輪王の如しとは、謂はく無學の無常想なり。城王の如しとは、謂はく所餘の想なり。又或は阿練若に居り、或は樹下に居り、或は空室に居り、或は逈露に居り、樹下覆障等を取るに由るが故に卽ち一切の臥具の遠離を攝す。唯だ色のみありて無常の性なりとは、謂はく唯だ色のみあつて都べて我あること無く、是の如く正に加行を修するなり。

(二六)復た次に、略して(二七)四種の道に往趣する障、(二八)二種の道等あり。謂く疑に由るが故に發趣すること能はず、復た發趣すと雖も邪尋思に由りて餘處に往き、邪分の尋思、見行に由るが故に[能はず]、

【二四】此の無常想は無學果に在り。

【二五】諸跡の中に於て象跡最も大なるが如く諸想の中に於て無常想最も大なり。

【二六】底沙を辨ず。底沙(Tisya)とは星の名、此星の名に從つて底沙佛と名づくる佛あり、四障及び二道は底沙佛の爲めに說ける敎なりとす。

【二七】四種の障とは(一)疑、(二)邪尋思、(三)邪分尋思、(四)邪分見行なり。

【二八】二種の道とは正道及び邪道なり。

是の事無しと雖も然も教授教誡に堪任せず。言ふ所の忿とは、謂く他の諫諍する時「に起る」なり。苦惱と言ふは、謂く出家の者自在を得ず、禁約し艱難する麤弊なる行等なり。不樂と言ふは瞋を雜ふる事なるが故なり。此の二種は猶ほし坑澗の如し、又此の二種は能く行路を障ふ。是の事無しと雖も利養及び恭敬に由るが故に山林に入るに於いて能く障礙を爲す。猛利なりと言ふは、深稠林に處するが故なり。所以は何ん、〔二九〕攝受する所の事を捨つと雖も而も〔三〇〕此を捨つること能はざるが故なり。

〔三一〕復た次に、怖れありと言ふは、謂く盜賊及び矯詐あるが故なり。畏れありと言ふは、謂く稠林を渉るが故に、諸の惡獸及び非人の諸の恐畏あるが故なり。刺ありと言ふは、謂く一切處に毒刺多きが故なり。道を失ふと言ふは餘處に往くが故なり。惡道と言ふは平正ならざるが故なり。是の如き五種は道の過失を顯はし、弊趣惡趣とは趣の過失を顯示し、道を失ひ惡道にして行き及び不善士に親近すとは、能行の補特伽羅の所有過失を顯示す。諸の盜賊等を不善士と名づく。

〔三二〕復た次に、〔三三〕無動とは謂く一切の相をば皆な遠離するが故なり。無轉とは謂く貪愛盡くるが故に、諸の境界に於いて轉變無きが故なり。見難しとは謂く甚深なるが故なり。甘露とは謂く生老病死皆な永く盡くるが故なり。安隱とは、謂く一切の人と非人との災横怖畏を超過するが故なり。清涼

【二九】父母妻子等。
【三〇】利養及び恭敬。
【三一】怖を辨ず。
【三二】無爲を辨ず。
【三三】無動等とは無爲の異名なり。

とは謂く一切の苦皆な寂滅するが故に、極めて清涼なるが故なり。善事とは謂く現法樂住の緣ずる所の境なるが故なり。吉祥に趣くとは謂く一切の煩惱の所緣の境を斷ずるが故なり。愁憂無しとは謂く一切の愛非愛を超過するが故に、又證得し已つて失壞すること無きが故なり。死歿せずとは謂く常住なるが故に、退還せざるが故なり。熾然なしとは謂く清淨なるが故なり。熱惱無しとは謂く所欲の匱乏永く止息するが故なり。無病とは謂く一切の病諸の癰瘡等永く寂靜なるが故なり。動亂無しとは、謂く一切の動亂皆な滅盡するが故なり。涅槃とは、謂く一切の(二三四)依皆な寂滅するが故なり。

(二三五)復た次に、我は何にして當に有らざるべきや、我所は何にして當に有らざるべきやとは、謂く未來世に約して我我所の性の所攝、內處外處の所攝、自らの內體の性及び攝受する事に於て不生を希求するが故なり。又復た依止の不生を希求するが故に、及び彼れに依る受の不生を希求するが故なることを顯示す。我は當にあらざるべく、我所は當にあらざるべしとは、謂く現在世に約して說く、此は無常滅を觀ずる前に(二三六)擇滅を觀ずるなり。又(二三七)前は但だ希望あるのみなるが故に、(二三八)後は現在の因に於いて無常性を觀ずるが故なり。

(二三九)復た次に、不相續とは、謂く死歿し已つて後餘識生ぜざるが故なり。取無しと言ふは、謂く住

【二三四】依とは所依の身心なり。
【二三五】不有を辯す。
【二三六】擇滅とは具には擇力所得の滅にして智慧の簡擇力にて覺れる眞如無爲涅槃を云ふ。
【二三七】前とは未來に約する方。
【二三八】後とは現在に約する方。
【二三九】不相續を辯す。

する所の識無ければ名色に趣入する事あること無きが故に、自體永く生ぜざるが故なり。生長することと無しとは、謂く名色更に增廣することあること無きが故なり。一切の行皆な寂止すと言ふは、謂く諸の五蘊皆な止息するが故なり。

(一四〇)復た次に、言ふ所の空とは、謂く一切の煩惱等を離るるが故なり。所得無しとは、謂く一切の所有相を離るるが故なり。愛盡くと言ふは、謂く未來の事を希求せざるが故なり。欲を離ると言ふは、謂く現在に受用する嘉樂無きが故なり。言ふ所の滅とは、謂く餘の煩惱斷ずるが故なり。涅槃と言ふは、謂く餘依無きが故なり。

(一四一)復た次に、無常と言ふは、謂く性破壞朽敗の法なるが故なり。有爲と言ふは、謂く前際に依り尋思する所なるが故なり。造作と言ふは、謂く後際に依り希望する所なるが故なり。緣生と言ふは、謂く現世の衆の因緣力に依り生起する所なるが故なり。又盡くることある法とは、謂くは一分盡くるが故なり。沒することある法とは、謂く全分滅するが故なり。又盡くることある法とは、謂く全分滅するが故なり。沒することある法とは、謂く相續變壞するが故なり。離欲ある法とは、謂く過患相應するが故なり。滅することある法とは、謂く一切有爲の法は皆な出離することあるが故なり。

(一四二)復た次に、餘す無く斷ずとは、謂く是れ總句なり。永へに棄捨すとは、諸纏斷ずるが故なり。

【一四〇】空を辨ず。
【一四一】無常を辨ず。
【一四二】無餘を辨ず。

永へに變吐すとは、隨眠斷ずるが故なり。永へに盡くと言ふは、過去に解脱せるが故なり。永へに離欲すとは、現在に解脱するが故なり。永へに滅すと言ふは、未來に解脱するが故なり。永へに寂靜なりとは、見道に由るが故なり。永へに滅沒すとは、修道に由るが故なり。當に知るべし此の中〔二四三〕二種の道にて煩惱の事を斷ずるに由りて餘す無く斷ずることを顯はすと。

【二四三】二種の道とは見道と修道なり。

卷の第八十四

攝異門分の下

(一)復た次に、嗢柁南に曰はく、

『欲の三種と延請と、法と僧と惠施するが故なると、厭と梵志と無常とにして、聚沫等を後と爲す。』

(二)諸欲は無常なり虚僞なり不實なりとは、謂く諸欲に於いて顚倒なりと宣說するは、是の(三)四種の顚倒の事を以ての故なり。當に知るべし此の中虚なるが故に無我なり、僞なるが故に不淨なり、不實なるが故に苦なり、是の處に由りて樂は實に非ざるが故なりと。然るに彼の諸欲の(四)常等に似て現ずるをば說いて妄法と名づく、顚倒の事なるが故なり。云何んが諸欲を名づけて妄法と爲すや。此の義を顯はさんが爲に幻事の喩を說く。常等に非ずと雖も然も似て顯現するが故なり。彼の「幻事の」法愚夫を誑惑するに同じとは、謂く無聞の愚夫彼の諸欲に於いて如實に知らざるが故に長夜に於いて恆に欺誑せられ、深く染著を生じ、變壞の苦の

【一】廣說を辨ずる第三。
【二】欲の三種を辨ず。欲の三種とは三種の門を以て欲を訶責するなり、(一)四倒に約し、(二)八喩を擧げ、(三)不淨等に約す。
【三】四種の顚倒とは無常、苦、無我、不淨に對する常、樂、我、淨とする顚倒なり。
【四】常樂我淨等。

爲めに逼觸せらる、[然るに]諸の聰慧なる者は則ち是の如くならず、如實に知るが故なり。又彼の諸欲を枯骨に喩ふるは飽くこと無からしむるが故なり。（五）段肉に喩ふることは多く共ずる所なるが故なり。草炬に喩ふることは是れ非法の行、惡行の因なるが故なり。一分炭に喩ふることは欲愛を增長し大に熱惱するが故なり。大毒蛇に喩ふることは諸の聖賢の爲めに遠離せらるるが故なり。夢の所得に喩ふることは速に散壞するが故なり。假借する所の莊嚴の具に喩ふることは衆緣に託するが故なり。

諸の樹端の爛熟せる果に喩ふることは危亡の地なるが故なり。又不淨とは是れ其の總句なり。臭穢と言ふは受用する飲食變壞して成ずるが故なり。屎尿不淨の變壞して成ずる所なるが故に臭處と名づけ、諸の肉血等の變壞して成ずる所なるが故に生臭と名づく。厭逆すべしとは受用する婬欲變壞して成ずる所は惡逆す可きが故なり。

（六）復た次に、應に招延すべしとは、世財を捨つるに約し、應に請し奉るべしとは、貪愛を盡すに約するなり。果報を求めんと欲す、是の故に招延す。解脫を求めんと欲す、是の故に請し奉る。應に合掌すべしとは、卽ち（七）二事の爲めに延請する時なり。應に和敬すべしとは、應に禮拜問訊等を設くべきが故に、應に彼れと戒見同じかる可きが故なり。無上なる福田にして世のもの應に奉施すべしとは、彼れに於いて惠施すれば果無量なるが故なり。

【五】段肉とは段食なり。

【六】延請を辯ず。延請とは啓請なり、說法を聞き貪等を斷ぜんが爲めに啓請するなり。

【七】二事とは（一）果報を求む、（二）解脫を求む。

〔八〕復た次に、善說すとは、文義巧妙なるが故なり。現見すとは、現法の中に於いて證得す可きが故なり。無熱とは、煩惱を離るるが故なり。無時とは、三世を出づるが故なり。引き難しとは、老病死等も引く能はざるが故なり。見難しとは、天等の趣中には見る可らざるが故なり。內に自ら證する所とは、唯だ信ずるのみにして、他のもの等證すること能はざるが故なり。諸の有智とは、謂く無學を舍と爲し洲と爲し、救と爲し歸と爲し趣と爲す者なり。後後の句に由りて前前の句を釋して出離の義を顯はすなり。又能く四聖諦を了知するが故に名づけて正見と爲す。生起すと言ふは、一切時に於いて生ずべきが故なり。已に生起せりとは、過去世に於いて無學の位に住せるなり。今生起すとは、現在世に於いて或は已に證得し、或は修圓滿するなり。當に生起すべしとは、或は未だ證得せず、或は勤めて修習し、應に修むべく應に習ふべきなり。應に多く修習すべしとは、其の所應に隨つて前の如く當に知るべし。應に隨護すべしとは、退墮に隨順する法を遠離するが故なり。應に觸すべしと言ふは、身體に由るが故なり。應に作證すべしとは、或は果、或は勝智をば說の如く我れ已に道を證せるが故なり。時に應じて說くとは、若くは彼の願樂を了知し、聞くを欲し、及び聞くに堪へたる者には方に爲めに說くべく、卑座に坐する等是れを名づけて時と爲す、應に當に說を序ぶるに時を先として作すべきなり。若くは彼れは是れ增上なりと了知し已れば卽便ち殷重に其の能ふ所に隨つて己が所有を盡して爲めに法を說き、彼彼の差別未曾有

【八】法を辨ず。

の義を開示せんと欲するが爲めに直に詞を華にするに非ずして樂說するのみ。次第とは義を開示するが故なり。隨密すとは、妨難を設くるが故なり。隨會すとは、彼を顯釋するが故なり。歡喜せしむとは、敎を受くる者を化するが故なり。愛樂せしむとは、處中なる者を化するが故なり。喜樂せしむとは、誹謗する者を化するが故なり。讃勵すとは、彼の實德を求めて稱順する心を以て自らの言音を發し、揄揚し讃美するなり。訶擯すとは、彼の實過を觀、無恚の心を以て自らの言音を發し、開示し訶責するなり。道理とは、四の道理を具ふるが故なり。謂く觀待道理と作用道理と法爾道理と證成道理なり。益ありとは、所爲の處に於いて棄捨せざるが故なり。無雜とは、雜亂無きが故に、繫屬することあるが故なり。法ありとは、能く義を引くが故に、苦等に於いて無量種の出離遠離より生ずる所の法あるに依るが故なり。衆會の如しとは、刹帝利等の四種の會衆の堪能する所に隨ふが故なり。慈心を以てすとは、彼をして樂義を得せしめんと欲するが爲めの故なり。利益心とは、云何にして當に、若し殷重に正法を聽聞することあらんには皆な悟解を得、大利益を獲せしむべきやとするが故なり。哀愍心とは、彼れをして法隨法行を修せしめんと欲するが故なり。所依無しとは、利養恭敬名稱の爲めにせざるが故なり、謂く衣服等の事に依止せず、又禮敬等の事に依止せず、唯だ他をして正法に悟入せしめんと欲し、又他に於いて輕懱する所あらず、乃至廣く說けり。自ら高ぶらずとは、利養恭敬の事の爲めの故に是の如き言を作さず、「唯だ我れのみ能く是の如き法律を知る、汝等が輩に

は非ず」と、乃至廣く說かば己が功德を讃し彼れの過失を談ずるなり。時時の間に於いて應に法を聽くべき者至れる是の如きの時應に自ら觀察すべし、我れ今法を說くに多く作す所あり、他のもの法を說く時應に正に了知して我れ中に於いて當に障礙を爲すこと勿るべしと、卽便ち殷重に謙下の心を以て卑座に坐し、威儀を具足し、其の能ふ所に隨つて正法を聽聞し、恭敬の相を起し、先に未だ解せざりし義を啓悟せんと欲するが爲めに請問を興し、若くは悟解せず、或は復た疑に沈めども譏誚せず、其の勝れたる者に於いては恭敬し隨順し、等しきに於いても劣れるに於いても法を恭敬するが故に亦た輕懱せず、說法師に於いて深く尊重を生せば說法者の如く當に無上の大果勝利を獲べきが故なり。法を輕んぜずとは、是の言を作さず、此れ文字章句を綺飾するに非ず、所有文句は悉く皆な麤淺なるが故なりと。法師を輕んぜずとは、是の言を作さず、彼れ我所に於いて種姓卑劣等の故なりと。自ら輕んぜずとは、是の言を作さず、我れ法を解するに於いては力能あること無く、其の所證に於いては怯劣無きが故なりと。奉敎心とは、惱亂の心無く唯だ解を求めんと欲するが故なり。心一趣とは、文句の差別を領解せんと欲するが爲めの故なり。耳に屬して聽くとは、音韻の差別を了知せんと欲するが爲めの故なり。修治の意とは、甚深なる義に悟入せんと欲するが爲めの故なり。一切の心に於いて繫念せざる無しとは、無間に音韻文句の義を領解せんと欲するが爲めの故なり。了知せざる無く通達せざる無く而も空しく過る者あり。

(九)復た次に、正行と言ふは、謂く是れ總句なり。應理行とは、果に住する有學なり。質直行とは、向道に住するなり。和敬行とは、是れ其の無學にして彼れ唯だ大師の正法及び學處等に於いて深く恭敬するに由るが故なり。隨法行とは、因に於いて轉ずる時法に隨つて法を行じ、他の音を聞くに由り、內に正しく如理にして思惟するなり。又應理行とは、是れ其の正道及び果の滅行なり。質直行とは、其の聖教の如く正しく修行して諂ふなく誑す無く如實に顯現するなり。和敬行とは、(一〇)六堅法と而も共に相應するなり。隨法行とは、法に隨つて法を行ずる諸の阿羅漢の諸漏永く盡くるなり。乃至廣く說かば最極究竟なり。乃至廣く說かば亦たは出離とも坑塹を超出すとも坑塹を越度すとも名づく。乃至廣く說かば永く五支を斷じ六支を成就するなり。乃至廣く說かば預流の顚墜せざる法を獲得し、決定して(一一)三菩提の果に趣向するなり。乃至廣く說かば是の如き一切をば自の處所の攝事分の中に於いて我れ當に廣く說くべし。又大師とは、是れ其の總句なり。腹より生ずる所なりとは、異生卑劣の子を簡去するが故なり。口より生ずる所なりとは、說法の音に從つて誕生するが故なり。法より生ずる所なりとは、如理に作意する法隨法行より生ずる所なるが故なり。法より化する所なりとは、法身路に從つて相似せる法を成立することを得るが故なり。法の等分とは、無漏法の財寶と相似せる法を受用するが故なり。是の如きの諸句は(一二)增上より生ずる圓滿及び

【九】僧を辨ず。
【一〇】六堅法とは六和敬なり。
【一一】具には阿耨多羅三藐三菩提の果即ち道果なり。
【一二】增上緣より生ず。

(一三)父と相似せる法生ずる圓滿を顯示す、謂く(一四)初めの句は其の增上より生ずる圓滿の中に於いて器の過失を遮し、(一五)第二の句は其の精血不淨なるより生ずる所なることを遮し、(一六)第三の句は其の欲貪非正法の生を遮し、是の如き三句は增上より生ずる圓滿を顯示し、(一七)第四の句は自體相似する法を顯示し、(一八)第五の句は受用相似する法を顯示し、是の如き二句は父と相似する法生ずる圓滿を顯示す。又序とは是れ緣、集とは是れ因なり。緣より增上するが故に彼の種類と名づけ、因より增上するが故に彼より生ずる所なりと名づく。因より生ずる所なりと雖も緣の勢力を藉りて方に生起することを得、彼の〔所〕依と爲るが故なり。又此の中に於いて後の句は前を釋す。又善く見るとは、是れ其の總句なり。善く知ると言ふは、法義を知るが故なり。善く思惟すとは、其の正理の如く思惟するが故なり。善く黠慧なりとは、全分知るが故なり。善く通達すとは、如實に知るが故なり。後の二句に由りて善く見るの性を顯はし、前の二句に由りて彼の加行を顯はす。又聖と言ふは、是れ無漏なるが故に及び聖に在りとは、相續の中なるが故なり。出離すと言ふは、三界の一切の苦を出離するが故なり。決達すと言ふは、究竟して出離し退轉すること無きが故なり。

(一九)復た次に、諸法皆な世尊を以て本と爲すとは、佛世尊は是れ其の最初に等覺を現じたまへるに

〔一三〕親因緣より生ず。
〔一四〕「腹より生ず云云」の句。
〔一五〕「口より生ず云云」の句。
〔一六〕「法より生ず云云」の句。
〔一七〕「法より化する云云」の句。
〔一八〕「法の等分」の句。
〔一九〕惠施を辨す。

由るが故なり。世尊を眼と爲すとは、等覺を現じ已つて諸の天人等の爲めに開示したまへるが故なり。世尊を依と爲すとは、所說の法の中生起する所に隨つて一切の疑惑をば皆な能く遣るが故なり。又佛世尊能く眼と爲るとは、謂く能く〔二〇〕倶生の慧を引發するが故なり。能く智を爲すとは、謂く能く〔二一〕加行の慧を引發するが故なり。能く義を爲すとは、謂く能く思所成の慧を引發するが故なり。能く法を爲すとは、謂く能く聞所成の慧を引發するが故なり。顯了せざる義を能く決了すとは、一切の疑惑をば皆な能く斷ずるが故なり。能く一切の義の所依と爲るとは、謂く能く一切の世間及び出世間の興盛の事を引發するが故なり。

〔二二〕復た次に、厭ふとは、謂く見道に於いてするなり。離欲すと言ふは、謂く修道に於いて離欲究竟するなり。言ふ所の滅とは、謂く無學に於いて〔二三〕一切の依滅するなり。前の二種は加行位に於いて厭行及び離欲行を修習し、後の一種は無學位に在りて滅行を行ずるなり。又厭ふと言ふは、諦〔理〕を見るに由るが故に一切の行に於いて皆な悉く厭逆するなり。離欲すと言ふは、修道に由りて永く貪を斷ずるが故なり。解脫すと言ふは、貪を離るるに由るが故に、一向安隱にして餘の煩惱に於いて心に解脫を得るなり。徧く解脫すとは、煩惱斷ずるが故に〔二四〕生等の苦に於いて、普ねく解脫を得

〔二〇〕倶生の慧とは先天的の智慧なり。
〔二一〕加行の慧とは後天的の智慧、修行によりて得る所の智慧なり。
〔二二〕厭を辨ず。厭とは有漏世間を厭ふなり。
〔二三〕一切の依とは所依の身心を言ふ。
〔二四〕生老病死等。

るなり。

(三五)復た次に、是れを婆羅門と爲すとは、究竟して彼岸に到るが故に、諸惡を蠲除するが故なり。是れを其の相と爲す。猶豫等無しとは、自らの所證に於いて疑惑を離るるが故なり。諸の惡作を斷ずとは、應に作すべき事に於いて作さざる無きが故に、應に作すべからざる事を作すことあること無きが故なり。諸の貪愛を離るとは、利養恭敬の愛あること無きが故なり。有非有の〔執〕著に於いて隨眠あること無しとは隨眠永く斷ずるが故なり。當に知るべし此の中若くは現在世若くは未來世を之を名づけて有と爲し、其の過去世を名づけて非有と爲すと。此の諸句に由りて無倒に觀察するなり。婆羅門の相は(三六)前の三句に由りて多聞及び正知にして其の相を觀察することを顯示す、或は謂く正しく善品を修習せざるが故なり。復た第四の一句を顯示して其の相を觀察す、此の中の著とは、謂く(三七)八種の著なり。非有の中に於いて愁憂の著を作す、現在世の所攝の有の中に於いて五種の著あり、一には修治を作し、二には救護を作し、三には我所と作し、四には高勝と作し、五には下劣と作す、未來世の所攝の有の中に於いて行を作し動を作す。總じて(三八)三處に於て極厚重と作し極甘味と作し、愁憂を作すとは愛する所變壞するが故なり。修治を作すとは、養育し攝藏するが故なり。救護を作すとは、逼

〔三五〕梵志を辨ず。梵志とは婆羅門の譯語なり。

〔三六〕前の三句とは(一)猶豫等無し、(二)諸の惡作を斷ず、(三)諸の貪愛を離る。

〔三七〕八種。非有卽ち過去世に一種、現在世に五種、未來世に二種、合して八種なり。

〔三八〕三處とは三世なり。

惱する處に於いて求めて救護を作すが故なり。(二九)我所と作すとは、執して我所と爲るが故なり。高勝と作すとは、我を計して勝れたりと爲して憍慢を起すが故なり。世尊、世間の衆生は慢を高幢と爲すと言へるが如くなるが故なり。下劣と作すとは、我を計して劣れりと爲して憍慢を起すが故なり。行を作すと言ふは、是れ其の未來世を希望する愛なり。動を作すと言ふは、既に希望し已つて方便して追求するなり。極厚重と作すとは、是れ愛樂する所にして食用す可きに非ず、謂ゆる金銀等にして應に貿易すべし。極甘味と作すとは、是れ食用すべきなり。復た差別あり、謂く此の五句は略して得道の道果作證を顯はす。(三〇)是を婆羅門と爲すとは、略して得道を顯はし、(三一)猶豫等無く、(三二)諸の惡作を斷じ、(三三)諸の貪愛を離れ(三四)有非有の著に於いて隨眠あること無しとは、是の如き諸句は略して道果作證を獲得することを顯はす、所解を記することに於いて疑惑斷ずるが故に、所行の中に於いて一切の法を忘失する行斷ずるが故に、未來世に於いて苦因斷ずるが故に、現在の苦因麤重斷ずるが故なり。言ふ所の有とは、謂く此の義の中に當に知るべし其の三界所攝の諸相に於いて作意すと。非有と言ふは、無相界に於いて作意し思惟するなり。言ふ所の著とは、謂く此の義の中には是れ貪瞋癡なり。無相定の諸の有學の者の如きは猶ほ隨眠あり、阿羅漢は尋思、戲論、著、想の四種の雜染あることを得るに非ず。前の二は是れ出家

【二九】我所とは共に我所有即ち自己の所有なり。
【三〇】第一句。
【三一】第二句。
【三二】第三句。
【三三】第四句。
【三四】第五句。

品、後の二は是れ在家品なり、著の隨眠あるに由るが故に彼れ生起するとを得。諸の出家の者は追て曾し更し所の境を憶念するに由るが故に尋思あり、動亂現行するが故に戲論あり、諸の在家の者は現前の境に住して著あり想あり、染著あつて諸相を取るに由るが故なり。復た二種の雜染の因緣あり、謂く不如理なる作意及び彼の處に順ずる法なり。此の因緣に由りて彼れ生起することを得、是の故に此を說いて彼の因緣と爲す。

(三五)復た次に、所有無常は皆な是れ苦なりとは義何の謂ぞや。若し無常の衆同分ある者は生老等の衆苦ありて生起し、若し諸觸に依りて諸受ある者は彼れ皆な變壞す、生じ已つて尋いで滅するが故に諸受皆な悉く是れ苦なりと說く。若し生等の苦法あり及び(三六)壞等の苦法あらば彼れ皆な無我なり、自ら我に非ざるが故に是の處所に於いて亦た我あること無し、此に由りて空無我の行を攝受す。又解了すとは、聞所成の慧なり、諸の智論者是の如く說くが故なり。等しく解了すとは、思所成の慧なり。審に解了すとは、修所成の慧なり。卽ち是の如き三慧の行の中に於ける所有の諸忍を名づけて喜樂と爲す、若くは等しく喜樂し、若くは徧ねく喜樂す。又無常の隨觀、斷の隨觀、離欲の隨觀、滅の隨觀ありとは、聲聞地に已に廣く分別せるが如し。又無常力に損害せらる、乃至廣く說けり、當に知るべし此の中(三七)增一の略文は無常等の差別を顯はし、障礙の差別を後と爲すこと其の所應の如しと。未だ得ざる所を獲得

【三五】無常を辨ず。
【三六】壞苦、苦苦、行苦等。
【三七】增一阿含經。

せんと欲するが爲めとは、最初に得るが故に、或は先には下劣にして所證あるが故なり。上の差別に於いて作證すとは、謂く其の斷に於いて作證するが故なり。觀察すと言ふは、此れは慧を說けるなり。審慮すと言ふは、三摩地を說けるなり。如理に觀察すとは、此れは〔三八〕二法の顚倒無く轉ずることを說けるなり。實にあること無しと雖も而も顯現すとは、謂く此の中に於いて實に樂無きが故なり。虛とは、空無我なるが故なり、僞とは、不淨なるが故なり、堅からずとは、無常なるが故なり、此れ則ち四顚倒無きことを顯示するなり。

〔三九〕復た次に、色は聚沫の如しとは、速に增減するが故に、水界より生ずるが故なり。飮食の味を思ふは、水より生ずる所なるが故に、揉捼す可らざるが故なり、泥團の如く轉變せしめて餘物を造作すべきに非ず、是の故に說いて揉捼すべからずと言ふ、又實に聚に非ずして聚に似て顯現し、能く一有情の解を發起するが故なり。受を浮泡に喩ふるは、二和合して生じ、久しく堅住せざると相似する法なるが故なり。地の如しと言ふは、所謂る諸根彼れより生じ〔彼れに〕依るが故なり。雲の如しと言ふは、謂く諸の境界なり、雨の如しと言ふは、所謂諸識なり、雨の撃つが如しと言ふは、所謂諸觸なり。浮泡の如しとは、所謂る諸受は速疾に起謝して堅住せざるが故なり。想は陽焰に同じとは、飄動の性なるが故に、無量種の相變易して生ずるが故に、所緣に於いて顚倒を發さしむるが故に、其の境界をして極めて顯了ならしむるが故に、此に由

〔三八〕二法とは慧と定なり。
〔三九〕聚沫等を辨ず。

りて男女の相を分別して差別を成ずるが故なり。云何んが行を芭蕉に類するや。明眼の人の如しとは、謂く聖弟子なり。利刄と言ふは、謂く妙慧刀なり。林に入ると言ふは、謂く五趣に於いて意を擧げて種種なる自性衆苦の差別に攀緣すること樹法に同じきが故なり。端直なる芭蕉柱を取ると爲すとは、謂く作者、受者の我見を爲すなり。其の根を截るとは、謂く我見を斷ずるなり。葉を披拆すとは、委細に簡擇すれば唯だ種種なる思等の諸行の差別の法あるが故なり。彼れ其の中に於いて都べて獲る所無しとは、謂く彼れ時を經て堅住することなきが故なり、何に況んや堅實なる者をや、何に況んや餘の常恆なる實我の作者、受者ありて見ることを得べけんや。云何んが識は幻事の如くなる。幻士と言ふは、福、非福、不動行に隨ふなり。識は四衢道に住すとは、四識住に住するなり。四種の幻化の事を造作すとは、謂く象馬等なり。象身等の如く現に見る可しと雖も而も眞實の象身等の事無し。是の如く應に知るべし福、非福、不動行に隨つて識四識住に住し、作者及び受者等の我相の見る可きありと雖も、然も眞實の我性の得可き無しと。又識は内に於いて其の實性を隱し、外に異相を現ずること猶ほし幻像の如し。

〔四〇〕復た次に、已に白品の異門を說けり、黑品の異門をば今當に說くべし、〔四一〕嗢柁南に曰はく、

『生と老と死と藏等と、喜ぶ可し等と煩惱と、廣く貪瞋癡を說くと、少等と差別等なり。』

【四〇】上來白品を解し訖る。以下黑品を解す。

【四一】黑品を解する頌なり、此中九門を列れ、次第に解釋す。

（四一）言ふ所の生とは、謂く初の結生卽ち（四二）名色の位等生ず、則ち是れ胎藏圓滿するなり。出は謂く胎を出づるなり。現は謂く嬰孩乃至少年及び中年の位なり。起とは乃至極老年の位なり。又蘊得とは、謂く名色の位の（四三）界得、卽ち是れ此の位の中に於ける彼の種子の得なり。處得と言ふは、名色增長して六處圓滿するなり。諸蘊現ずとは、謂く出胎より乃ち老位に至る。命根起るとは、故き衆同分を捨て新らしき衆同分を取るなり。

（四四）復た次に、蹎蹶すと言ふは、年衰邁する時行步去來多く僵仆するが故なり。皓首と言ふは、髮毛變改して白銀色なるが故なり。褶多しと言ふは、皮緩び皺むが故なり。衰熟すと言ふは、言はく衰邁する時卽ち彼の黃皴光澤無きが故なり。朽壞すと言ふは、勢力勇健皆なあること無きが故なり。脊傴曲すとは、身形前に僂まり杖に憑つて行くが故なり。多くの諸の黑子身を莊嚴すとは、靑黑雜黶支體に徧ずるが故なり。惛耄すと言ふは、所作の事、經行、住等に於て多く能ふること無きが故なり。羸劣なりと言ふは、諸根境に於いて多く能ふると無きが故なり。衰退すと言ふは、念智慧等多く能ふると無きが故なり。徧く衰退すとは、卽ち諸根等彼彼の念を經、瞬息等の位漸く損減するが故なり。諸根熟すとは、卽ち彼れ衰廢して堪能無きが故なり。諸行朽つとは、根の所依處時經ること久しきが故なり。體腐敗すとは、卽ち彼の說く所の性衰變するが故なり。

【四一】第一門、生を釋す。
【四二】名色とは十二因緣中の名色支なり。
【四三】界とは種子の意。
【四四】第二門、老を釋す。

（四六）復た次に、殞すとは、身形を捨つるが故なり。終るとは、死時に臨むが故なり。喪すとは、若くは是の時に於いて屍骸猶ほ在るなり。沒すとは、若くは是の時に於いて屍骸殄滅するなり。又喪すとは、色身に據るが故に、歿すとは、名身に據るが故なり。壽退き煖退くとは、將に終らんと欲する時餘心處在するなり。命根滅すとは、一切の壽量皆な窮盡するが故なり。死すとは、其の識心胷の處を棄捨するが故なり。殂落すとは、死より已後或は一七日、或は復た二、三七日を經るなり。

（四七）復た次に、一切の愚夫異生其の（四八）六處に於いて我を執するが故に藏と名づけ、我所を執するが故に護と名づけ、薩迦耶を以て根本と爲し、各異世の間に趣の差別を見、我慢增上し愛現行するに由るが故に覆と名づく。樂受に順ずる所有の六處に於いて貪欲あるが故に味と名づけ、苦受に順ずる所有の六處に於いて瞋恚あるが故に結と名づけ、不苦不樂受に順する所有の六處に於いて愚癡あるが故に合と名づく。過去世の所有六處に於いて顧戀あるが故に隨眠と名づけ、未來世の所有六處に於いて希望あるが故に繫屬と名づけ、現在世の所有六處に於いて耽染することあるが故に執著と名づく。（四九）自ら攝受する他身の六處に於て執して我所と爲し、劣中勝にして自ら攝受するに非ざる他身の六處に於て慢の種類に依りて慢を發起し、不定地の欲界の所繫に於いて後後の所有の希求を發起し、其の定地の色無色繫に於いて其の所應の如く廣大微妙なるに由るが故に厚重を發起するは在家品の色聲

【四六】第三門、死を釋す。
【四七】第四門、藏等を釋す。
【四八】六處とは六根處なり。
【四九】父母妻子等の六根處。

香味觸に依る。愛味の眷屬の隨逐する所に由るが故に甘味を發起するは出家品の六處に依る。懈怠放逸の煩惱に由るが故に徧く一切に於いて捨離すること能はざるなり。

〔五〇〕復た次に、欣ぶ可し樂しむ可し愛す可し意す可しとは、當に知るべし此の四句は略して愛す可き事を顯はすと。此の愛す可き事に略して三種あり、一には希求す可き事、二には尋思す可き事、三には耽著す可き事なり。未來の愛す可き事は希求す可きが故に名づけて欣ぶ可しと爲し、過去の愛す可き事は唯だ欲す可きが故に、唯だ樂しむ可きが故に名けて樂しむ可しと爲す。現在の愛す可き事に略して二種あり、一には境界の事、二には領受する事なり。若くは境界の事は愛樂す可きが故に名づけて愛す可しと爲し、若くは領受する事は愛樂す可きが故に名づけて意す可しと爲す。是の如く說く所の諸の愛す可き事は或は過去、或は未來、或は現在、或は境界、或は領受、差別あるが故に或は希求す可き事と名づけ、或は尋思す可き事と名づけ、或は耽著す可き事と名づく。是の故に是の如き一切の諸句の差別を宣說す。又欣ぶ可しとは未來世に約す、希求す可きが故なり。樂しむ可しとは、現在世に約す、現に欲樂して厭足無きが故なり。意す可しとは、過去世に約す、意す可きを隨念して追憶するが故なり。愛す可しとは妙色相に約す、三世を貫通して皆な愛す可きが故なり。又欲す可しとは、悅意記念するが故なり。欲の所引とは、欲界繫なるが故に、或は復た〔五一〕二種の差別に隨順し

【五〇】第五門・喜ぶ可し等を釋す。

【五一】二種。(一)境界の事、(二)領受する事なり、前說の如し。

て欲を受用するが故なり。染著す可しとは、處所を貪るが故なり。

〔五二〕復た次に、五種の事に於いて能く和合するが故に說いて名づけて結と爲す。五種の事とは、一には所結の事、二には能結の事、三には罪過の事、四には等流の事、五には趣向の事なり。諸結の所緣を所結の事と名づく。所以は何ん、愛恚等各所緣に於いて相の差別に隨つて和合するに由るが故なり。卽ち彼の諸結展轉して相引いて和合するが故に能結の事と名づく。諸結の因緣現法の中に於いて能く罪過を生じ乃至領受す、彼より生ずる所の心法の憂苦は此の因緣に由りて能く和合するが故に罪過の事と名づく。當來世の猛利なる貪等生成するの因と爲りて和合するが故に等流の事と名づく。能く五趣を生じ、諸趣の中に於いて能く和合するが故に趣向の事と名づく。此の因緣に由りて自ら惡行を行じ、他の笞罰、縛錄、訶罵、驅擯の害等の種種なる衆苦生起するに遭ふが故に能く自ら損すと名づけ、若くは自ら遭はず他をして遭はしむるが故に能く他を損すと名づけ、若くは彼に由るが故に自他俱に遭ふを能く俱に損すと名づく。能く現法の罪を生ずとは、謂く彼に由るが故に說く所の如き種種なる苦事に遭ふも、然も決定して諸の惡趣に往かざるなり。能く後法の罪を生ずとは、謂く彼に由るが故に現法に於いて他の知らざる所なりと雖も、然も能く因と爲り諸の惡趣に往くなり。能く現法後法の罪を生ずとは、謂く二種を具ふ。現法の中に於いて多く染著を懷いて所欲を遂げず、廣く種種なる心法の憂苦を生じ、復た當來に於いて

〔五三〕第六門、煩惱を釋す。

諸の惡趣に往くなり。結無量なりと雖も勝れたるに就て言はば略して（五三）九結あり。又所欲に隨はざる義に約するが故に三縛ありと說く、謂く貪瞋癡の三受に依るが故なり。彼の因緣に由りて彼を脫せんと欲すと雖も而も脫すること能はざるが故に名づけて縛と爲す。又煩惱品の麤重種子と隨逐する所なれば說いて隨眠と名づく。是の隨縛の義、是の微細の義は其の（五四）根本を取らば但だ（五五）七種あるのみ。又煩惱より生ずるが故に、煩惱に親近するが故に、隨つて心を惱亂するが故に隨煩惱と名づく。（五六）七隨眠を除いて所餘の一切の染汚の心法は皆な隨煩惱なり。又現起し相續して斷絶する義なきを說いて名づけて纏と爲す。纏に（五七）八種あり、謂く無慚等なり。又彼れ能く轉じて上品と成り相續して起らしむるが故に、能く身心をして堪能無からしむるが故に說いて株杌と爲す、鹵田に瀉ぐに耕植するに任へざるが如し。又處所別なるが故に、彼より生ずる所の疑に差別あるが故に（五八）五心株を說き、貪等別なるが故に（五九）三種ありと說く。又彼れ能く清淨ならざらしむるが故に說いて名づけて垢と爲す。又諸處の門に於いて常に流注するが故に名づけて（六〇）儞伽と爲し、常に能く害するが故に亦儞伽と名づく。又彼れ能く寂靜ならざらしむるが故に說いて名づけて箭と爲す、毒箭を被つて若し未だ拔かざる

【五三】九結。前卷に出づ。
【五四】根本とは貪瞋癡の三なり。
【五五】七種とは十煩惱の中貪瞋癡を除ける餘の慢、疑、身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見なり。
【五六】七隨眠とは前說七種なり。
【五七】八種とは無慚、無愧、惛沈、睡眠、掉擧、惡作、慳、嫉なり。
【五八】五心株とは五心栽なり。
【五九】三種とは三毒なり。
【六〇】儞伽は「常に流注す」又は「常に害す」と譯す。

時は多く寂靜ならざるが如し。又能く捨を障ふるが故に、戲論あるが故に名づけて所有と爲す。又非法行、不平行等現在前するが故に說いて惡行と名づく。又能く一切の煩惱諸の惡行を等起するが故に說いて名づけて根と爲す。又能く當來の生を出生するが故に說いて名づけて漏と爲す。又既に生じ已つて老死等に由つて匱乏せしむるが故に說いて名づけて匱と爲す。又非愛合會し、所愛乖離し、利養を貪求して燒然せらるるが故に說いて名づけて燒と爲す。又能く愁歎し憂ひ苦惱せしむるが故に說いて名づけて惱と爲す。又能く流に順つて漂溺せしむるが故に說いて暴流と名づく。又前際に依りて能く現法に生死流轉する勝れたる方便と爲るが故に說いて名づけて軛と爲す。又現在に依り能く未來の勝れたる方便と爲るが故に說いて名づけて取と爲す。又解け難きが故に說いて名づけて繫と爲す。又所知の事に於いて能く智を障ふるが故に說いて名づけて蓋と爲す。又色、無色界に望むれば欲界を下分と爲し、其の修道に望むれば見道を下分と爲し、此の二の下分の差別に約するに由り、其の所應に隨つて說いて五下分障と名づけ、亦たは五下分結と名づく。此と相違して當に知るべし五上分結ありと說くと。又林と言ふは、能く種種なる苦蘊を生ずるなり、體性親愛に由るが故に彼れ增長することを得るを說いて稠林と名づく。又能く諸の鬪訟等の種種なる忿競を發起するが故に名づけて諍と爲す。明の所治なるが故に說いて名づけて黑と爲し、能く苦を引くが故に說いて無義と名づけ、所用無きが故に說いて弊と名づけ、下性染汙するが故に說いて有罪と名づけ、應に習近すべからざるが

故に說いて應に遠離すべしと名づけ、受くる所の清淨戒を毀犯するが故に（六一）尸羅を突くと名づく。又惡法とは、謂く極めて猛利なる無慚無愧にして佛等を信ぜず、賢聖を毀謗し、邪見相應するが故に、或は復た種種なる惡法現行するが故なり。又貪欲瞋恚心等あり、乃至廣く說けり。當に知るべし此の中內朽敗すとは、外に沙門の相を持つが故に、內に沙門の法無きが故なり。猶ほし大木の外皮は堅妙にして內蟲に食はれ、虛うして實あること無きが如し。（六二）下產生ずとは、廣くは下產及び非下產の法門の中に說くが如し。水蝸螺を生ずとは、謂く聽受する所水と相似して渴愛を除くが故なり。若くは諸の苾芻禁戒等を犯すは彼の蝸螺の淨水を穢濁するが如し。是の故に猶ほし蝸螺ある水の飲用するに堪へざるが如く應に遠離すべきが故なり。（六三）螺音狗行すとは、謂く諸の苾芻惡行を習行し、利養臥具（六四）等を受くる時は自ら年臘最も第一なりと稱するが故に、實に沙門に非ずして沙門と稱する者は已に苾芻の分を失ひ、苾芻の分ありと稱するが故に、實に惡欲を懷き而も自ら稱して我れ是れ第一の眞の沙門なりと言ふが故に、非梵行の者實に婬欲穢濁を遠離するに非ずして而も自ら稱して我れ遠離すと言ふが故なり。又苾芻の性を失ひて而も自ら苾芻の性ありと稱す、是の故に說いて妄りに梵行と稱すと名づく。實に沙門に非ずして而も自ら稱して我れは是れ第一眞實の沙門なりと

【六一】尸羅を突くとは戒を逆害し損つること。

【六二】下產とは下等の資產なり、善財なく煩惱惡業より成る資產なり。

【六三】螺音狗行すとは螺音の如き狗の行を行ずるなり、比丘の言實行に伴はざるに喩ふ。

【六四】等。宋元明三本倶に籌に作る。

言ふ、是の故に說いて妄りに沙門と稱すと名く。又受くる所「の戒」を捨つるが故に尸羅を突くと名づく。先に惡法を捨て、復た還つて取るが故に名づけて惡法と爲す。形相と意樂と互に相稱はず、是の因緣に由りて內朽敗すと名づけ、其の欲する所に隨つて行住するが故に下產生ずと名づく。所聞を毀辱するが故に水蝸螺を生ずと名づけ、邪に由り諸の信施を受用するが故に螺音狗行すと名づけ、邪なる言說の故に名づけて妄りに沙門梵行を稱すと爲す。又貪瞋癡忿恨等あり、乃至廣く諸の雜碎の事を說けり、攝事分の中に我れ當に廣く說くべし。又無常、苦、空、無我、生法、老法乃至燒雞あり、其の處所に隨つて卽ち彼の中に於いて我れ當に廣く說くべし。

〔六五〕復た次に、染とは、謂く樂著して受用するが故なり。著とは、謂く卽ち彼の無に於いて顧惜する所なるが故なり。饕餮すとは、謂く未來に得る所の受用の事を希望するが故なり。呑吸すとは、謂く彼の所餘の助伴の煩惱に呑吸せらるるが故なり。迷悶すとは、次後に當に說くべし。耽著すとは、謂く已に得たるを堅執し營爲する所無きが故なり。貪求すとは、謂く未だ得ざるを追求して勤めて加行するが故なり。欲すとは、謂く未得と已得とに於いて獲得し及び受用するとを希求するが故なり。貪るとは、謂く受用する喜樂に於いて堅著するが故なり。親昵し及び愛樂するは親昵する所、受樂する所の中の如く應に其の相を知るべし。藏すとは、謂く內の所攝たる自體の中に於いて愛するが故なり。護るとは、謂く〔六六〕他相續の中に於いて愛

【六五】第七門、廣く貪瞋癡を說くを釋す。
【六六】他相續とは他身を云ふ。

するが故なり。執すとは、謂く（六七）我所の中に於いて愛するが故なり。渇すとは、謂く倍增して希求するが故なり。染する所とは、謂く貪居處するが故なり。憍る所とは、謂く（六八）七種の憍居處する所なるが故なり。欲する所とは、謂く種種なる品類を受用する貪欲の居處する所なるが故なり。親昵する所とは、謂く是れ過去の諸の顧戀は愛の隨處する所なるが故なり。愛樂する所とは、謂く是れ現在の諸の欣喜は愛の隨處する所なるが故なり。又現法の中に串ひ習ふ所の愛を名づけて親昵と爲し、宿世の串習より發生する所の愛を名づけて愛樂と爲す。迷悶する所とは、中に於いて功德及び過失を觀察すること能はざるが故なり。貪著する所とは、是れ耽樂の心の居處する所なるが故なり。縛著する所とは、是れ貪瞋癡の居處する所なるが故なり。希求する所とは、能く愛を生ずるが故なり。繫縛する所とは、是れ一切の結の居處する所なるが故なり。是の惡作とは、謂く能く不善法を和合するが故なり。現前せしめんが爲めに而も喜樂すとは、謂く希望するが故なり。現前せしめんが爲めに而も言說すとは、謂く語言を以て追求するが故なり。證得せしめんが爲めに而も言說すとは、謂く語言を以て追求するが故なり。證得せしめんが爲めに而も遽に務むとは、謂く貪著を生じ身追求するが故なり。耽著して住すとは、謂く得已つて抱持して捨てざるなり。等しく染すとは、謂く樂受に於いて貪欲を起すが故なり。等しく惡むとは、謂く苦受に於いて瞋恚を起すが故なり。等しく愚なり

【六七】我所とは具には我所有にして自己の所有物を云ふ。

【六八】七種の憍とは七慢の等流なり。

とは、謂く(六九)三受に於いて愚癡を起すが故なり。顧戀すとは、謂く過去に於いてするなり。心を繫ぐとは、謂く未來に於いてするなり。劬勞すとは、謂く彼の因緣に由り正しく追求を起すが故なり。熾然なりとは、謂く所欲を果し遂げて染汙心を起すが故なり。燒くとは、謂く所欲の衰損するに染汙心を起すが故なり。惱むとは、謂く所得變壞するが故なり。祈禱を爲すとは、吉祥に執著する愛を顯示するが故なり。觸對を爲すとは、取摩し著執する愛を顯示するが故なり。希求を爲すとは、取著と利愛とを顯示するが故なり。欣悅を爲すとは、取著し意の如く思惟する所有の愛を顯示するが故なり。又諸欲に於いて其心淸淨に趣入す、乃至廣く五種の出離界を說けり。應に知るべし前の三摩泗多地に已に說けるが如しと。憍醉すと言ふは、謂く(七〇)三憍と共に相應するが故なり。極めて憍醉すとは、謂く憍に依止して徧ねく諸の惡不善法の中に於いて能く其の心をして防護せざらしむるが故なり。憍醉に趣くとは、謂く憍醉所有の因緣に於いて受學し轉ずるが故なり。諸欲の中に於いて等しき憍を生ずとは、謂く過を觀ず欲を受用するが故なり。平安とは、謂く樂受の自相なるが故なり。領受とは、謂く諸受の共相なるが故なり。趣受とは、謂く餘受の因相なるが故なり。又欲貪、堅著、拘礙、饕餮等の貪は聞所成地に已に說けるが如し。

復た次に、內垢と言ふは、謂く怨の意樂に於いて堅持して捨てざるが故なり。內忌とは、謂く所愛

【六九】三受とは苦受、樂受、捨受なり。

【七〇】三憍とは三界の憍なり、又云はく三毒所起の憍なり。

の障礙に於いて住するが故なり。內敵とは、謂く能く愛せざる所を引發するが故なり。內怨とは、謂く宜しからざる所を引發するが故なり。又喜ぶべからず樂しむべからず愛すべからざる等は喜ぶべき等に翻じて前の如く應に知るべし。又苦と言ふは、謂く彼の自性苦なり、亦は隨つて憶念する苦なるが故なり。損害すとは、謂く現前に苦なるが故なり。違逆すとは、謂く三世に於いて思惟する苦なるが故なり。意に順せずとは、謂く現に苦ありて能く損害するが故なり。又苦の猛利、堅鞭、辛楚、不可意なる等は攝事分の如し、我れ當に廣く說くべし。又暴惡とは、是れ其の總苦なり。怛蜇とは麤言猛切なるが故なり。怨字の語とは、謂く文字に依あること無く違せる麤獷なる言を造るが故なり。怨嫌すとは、謂く所依を毀辱するが故なり。憤發すとは、謂く言を出し惡意樂を顯發するが故なり。恚害すとは、謂く手等を以て害を加ふるが故なり。顰戚して住すとは、謂く憤害し已つて後眉面を顰戚して默然として住するが故なり。偏ねく憤恚を生ずとは、謂く數數追念し、不饒益なる相にして深く怨恨を懷き、心を惱亂するが故なり。若し煩惱を生じ、其の心を惱亂せば此の因緣に由りて便ち苦に住することは、苾芻懈怠し諸惡を雜へて衆苦に住せしむと說くが如し。苦ありとは、謂く彼れ未來の苦を攝受するが故なり。匱ありとは、謂く彼れ諸の善品を遠離するが故なり。災ありとは、謂く彼れ能く餘惑の因を爲るが故なり。熱ありとは、謂く後時に於いて熱惱を發するが故なり。又苦と言ふは、是れ其の總句なり。苦ありとは、謂く憂苦相應するが故なり。匱ありとは、謂く樂受變壞するが故な

り。災ありとは、謂く不苦不樂受の中に在りて、二に於いて解脫せざるが故なり。熱ありとは、謂く樂等に於いて其の所應の如く貪瞋癡の過あるが故なり。有とは、過去に於いて苦あり、未來に於いて匱あるなり。又害とは、謂く上品なる怨嫌を攝受することを顯示するが故なり。敵とは怨者なり、前に已に說けるが如し。又摧伏すとは、謂く未だ生ぜざる士用の生ずると相違するが故なり。破壞すとは、謂く生じ已れる士用の住すると相違するが故なり。他の爲めに勝たるとは、謂く未だ生ぜざる功能の生ずると相違するが故なり。他後に落在すとは、謂く已に生ぜる功能の住すると相違するが故なり。又摧伏せず、破壞せず、勝たるるに非ず、證する所ありとは、是の如き諸句は前の諸句に由りて其の義をば應に知るべし。

復た次に、前際に於ける無智とは、謂く過去の諸行無常なる法性に於いて了知せざるが故なり。後際に於ける無智とは、謂く現在の諸行盡滅する法性に於いて了知せざるが故なり。前後際に於ける無智とは、謂く未來の諸行の當に生ずべき法性及び當に生じ已つて當に盡くべき法性に於いて了知せざるが故なり。彼れ是の如きに於いて了知せずとは、謂く前際等に依り不如理なる思惟を起す。我れは過去世に於いて曾て有りしと爲んや、乃至廣く說かば、我れは是れ誰とか爲ん、誰か當に是れ我れなるべき、今の此の有情は何れより來り、此に於いて沒し已つて當に何處へか往くべきと、是の如く前後際に依つて不如理に作意するが故に是の如き無常の法性に於いて愚癡にして了ぜず、諸行の中に於

いて我見隨逐し、内に於いて外に於いて倶に二種に於いて唯だ法性ありと了知すること能はざるなり。内は謂く内處、外は謂く外迹、内外は卽ち是れ根の所住處及以び法處なり。彼の諸法内に於いて得可く、又是れ外處の所攝なるに由るが故なり。業に於ける無智とは、謂く諸業に唯だ行性あるに於いて了知すること能はず、而も妄りに我を計度して作者と爲るなり。異熟に於ける無智とは、謂く有情世間及び器世間若くは餘の境界の業因より起る所に於いて妄りに自在、作者、生者を計するなり。業異熟に於ける無智とは、謂く徧ねく一切に愚にして業果を誹謗する邪見を獲得するなり、此は卽ち外道異生の諸法の中に於ける所有の無智を宣說するなり。佛に於ける無智とは、謂く如來の法身及び諸の形相を了知せざるなり。法に於ける無智とは、謂く善說等の相を了知せざるなり。僧に於ける無智とは、謂く諸行等の相を了知せざるなり。苦等に於ける無智とは、謂く諸經に分別する所の相の如き及び（七一）十六行の中に〔於いて〕了知せざるが故なり。因に於ける無智とは、謂く無明等の諸有支の中の能く行等の所有の因と爲る性に於て了知せざるが故なり。因の所生に於ける無智とは、謂く行等の諸有支の中の無明等の因より生ずる所の性に於て了知せざるが故なり。又雜染清淨品に於ける法とは、謂く不善と善と有罪と無罪と過患と功德なり。相應するが故に黑白に隨順すとは、謂く無明と明との分なるが故なり。黑黑の異熟、白白の異熟及び（七二）有對分

〔七一〕 十六行とは四諦十六行相卽ち苦、空、無常、無我、集、因、生、緣、道、如、行、出、滅、淨、妙、離なり。

〔七二〕 有對分とは黑白相並ぶを云ふ。

とは、謂く卽ち黑と白と黑白との異熟なり。是の如き一切は皆な因緣より生ぜらるるが故に名づけて緣生と爲し、彼の一切に於いて了知せざるが故に名づけて無智と爲す。或は六觸處に於いて如實に徧ねく通達すること能はずとは、謂く〔七三〕六處の〔七四〕樂受等に順ずる觸の所生の中に於いて彼の滅寂靜を如實に徧ねく了知すること能はざるが故なり。又此の加行をば如實に法に於いて通達し智見し現觀すること能はずとは、謂く卽ち彼の法に於いて如實に知らざるが故なり。彼に於いて此に於いてすとは、說く所或は未だ說かざる所に於いてするなり。智無しとは、現見せざるに於いて「智無しと」するなり。見無しとは、現見し現前するに於いて「見無しと」するなり。現觀無しとは、如實の證に於いて「現觀無しとし」他緣に由らざるなり。闇黑とは、其の實事に於いて正しく了知せざるなり。愚癡とは、不實の事に於いて妄りに增益を生ずるなり。無明とは、所知の事に於いて善巧なること能はざるなり。彼彼の處に於いて正しく了知せずとは、謂く彼彼の所說の義の中に於いて及び名句文身に於いて解了すること能はざるなり。昏闇とは、一切を誹謗する邪見を成就するなり。又障蓋、無明等は廣く說くこと攝事分の如し。又覆蔽、隱沒、昏昧、徧き昏昧等は廣く說くこと愛契經の如し。恭敬せずとは、恭敬を修せざるが故なり。尊重せずとは、彼の德を信ぜざるが故なり。貴尙せずとは、彼をして所欲に匱乏あらしむるが故なり。供養せずとは、利養を施さざるが故なり。又恭敬せず乃至供養せずとは、當に知るべし展轉して後の句は前

〔七三〕六處とは六根處なり。
〔七四〕樂受、苦受、捨受。

「の句」を釋すと。又恭敬せず尊重せず信せずして、有ひは而も法を聽聞する等は廣く說くこと攝決擇分の如し。又承聽せずとは、聞くことを欲せざるが故なり。審聽せずとは、心散亂するが故なり。奉敎の心に住せずとは、修行することを欲せざるが故なり。正行を修せずとは、法隨法行に於いて意樂の如く正しく修行せざるが故なり。又受學し轉せずとは、大師の聖敎に於いて證すること能はざるが故なり。又睡眠を樂しみ虛しく生命を度るとは、是れ其の總句なり。唐捐すとは、善趣に往く因を修すること能はざるが故なり。果無しとは、彼の善趣の果を得ること能はざるが故なり。義無しとは、涅槃を得る因を修すること能はざるが故なり。利無しとは、彼の涅槃の果を得ること能はざるが故なり。又問ふ病惱少なきや不やとは、(七五)界に不平等無きが故なり、少き事業なりや不やとは、加行の事業に不平等無きが故なり、起居輕利なりや不やとは、飲食を希須し、既に飲食し已つて消化し易きが故なり。又務力の樂及び無罪等は聲聞地の食に量を知る中に已に其の相を說けるが如し。又簡擇せず極めて簡擇せず等は廣く說くこと聲聞地の如し。又思惟せず稱量せず等は廣く說くこと聲聞地の如し。

(七六)復た次に、少しとは、高廣なる量相應せざるが故なり。小しとは、卑狹なる量相應するが故なり。尠しとは、纔かに世間の言語を受くる量なるが故なり。

(七七)復た次に、或は異門とは、自相差別するが故なり。或は意趣とは、俗相差別するが故なり。或

【七五】界とは種子なり。
【七六】第八門、少等を釋す。
【七七】第九門、差別等を釋す。

は殊異とは、因相差別するが故なり。

（七八）是の如きを名づけて攝異門分と爲す、是の如きの異門は諸經の中に於いて其の麤顯なるに隨ひ、言多く用ふる者をば、略して已に採集し、差別の義を示せり。其の餘の無量なる諸佛世尊の所説の異門及ひ義の差別は此の方隅に由り、此の所學に**由り、此の言敎に由り、應に當に精勤し、別別に異門異義を思擇し、顯示し、安立すべし。**

【七八】攝異門分を結す。

卷の第八十五

(一)攝事分中契經事行擇攝第一の一

是の如く已に攝異門を說けり、云何んが攝事なりや。謂く三處に由りて應に攝事を知るべし、一には素呾纜の事、二には毗柰耶の事、三には摩呾理迦の事なり。

云何んが素呾纜の事なりや。謂く二十四處に由りて略して一切の契經を攝す。一には別解脫契經、二には事契經、三には聲聞と相應する契經、四には大乘と相應する契經、五には未だ顯了せざる義を顯了せしむる契經、六には已に顯了せる義を更に明淨ならしむる契經、七には先時所作の契經、八には稱讚契經、九には黑品を顯示する契經、十には白品を顯示する契經、十一には不了義契經、十二には了義契經、十三には義略にして文句廣なる契經、十四には義廣にして文句略なる契經、十五には義略にして文句略なる契經、十六には義廣にして文句廣なる契經、十七には義深く文句淺き契經、十八には義淺く文句深き契經、十九には義深

【一】前の攝異門分に於て種種なる文義の異說を辨じたり。今此の攝事分に於ては種種なる文義の所依たる三藏の事を辨ぜんとす。就中第八十五卷より第九十八卷に至る十四卷に於て、素呾纜卽ち契經を明し、第九十九卷より第百卷前半に至る一卷半に於て毗柰耶卽ち調伏(律)を明し、第百卷後半に於て摩呾理迦卽ち本母(論)を明す。

く文句深き契經、二十には義淺く文句淺き契經、二十一には當來の過失を遠離する契經、二十二には現前の過失を遠離する契經、二十三には所生の疑惑を除遣する契經、二十四には正法をして久住せしめんが爲めなる契經なり。

(二)別解脫契經とは、謂く是の中に於いて(三)五犯聚及び五犯聚を出づるに依りて過を說けるなり。(四)一百五十の學處は自愛する諸の善男子をして精勤し修學せしめんが爲めなり。

事契經とは、謂く(五)四阿笈摩なり、一には(六)雜阿笈摩、二には(七)中阿笈摩、三には(八)長阿笈摩、四には(九)增一阿笈摩なり。雜阿笈摩とは謂く是の中に於いて世尊彼彼の所化を觀待して(一〇)如來及び諸弟子の(一一)所說の相應、〔五〕蘊、〔十八〕界、〔十二〕處の相應、〔十二〕緣起、〔四〕食、〔四〕諦の相應、〔四〕念住、〔四〕正斷、〔四〕神足、〔五〕根、〔五〕力、〔七〕覺支、〔八〕道支、入出息念、〔三〕學、〔四〕證淨等の相應を宣說したまひ、又八衆

【二】 別解脫契經とは別解脫戒を說ける經なり。

【三】 五犯聚とは五篇罪なり、(一)波羅夷(Pārājika)、(二)僧伽婆尸沙(Saṅghādiśeṣa)、(三)波逸提(Prāyattika)、(四)波羅提提舍尼(Pratideśanīya)、(五)突吉羅(Duṣkṛta)なり。

【四】 一百五十の學處とは實は比丘の二百五十戒なり、論主此中但だ麤戒のみを錄して且らく一百五十とせり。

【五】 四阿笈摩とは四阿含經なり、阿笈摩(Āgama)は阿含にも作る。傳と譯す、傳說の義なり。

【六】 雜阿笈摩は雜阿含經也。宋求那跋陀羅譯して五十卷とす。

【七】 中阿笈摩は中阿含經也。東晉僧伽提婆譯して六十卷とす。

【八】 長阿笈摩は長阿含經也。後秦佛陀耶舍、竺佛念共譯して二十二卷とす。

【九】 增一阿笈摩は增一阿含經なり。東晉僧伽提婆譯して五十一卷とす。

【一〇】 玆に列する五の相應は雜阿含の內容の五區分なり。

【一一】 所說の相應とは能說の人と所說の教と相應すること。

に依りて衆の相應を説きたまへり。後、結集する者聖教をして久住せしめんが爲めに嗢柁南頌を結び其の所應に隨つて次第し安布せり。當に知るべし是の如き一切の相應は略して三相に由ると。何等をか三と爲す。一には是れ能説、二には是れ所説、三には是れ所爲説なり。若くは如來若くは如來の弟子は是れ能説なり。(二)弟子所説佛所説分の如きの若くは了知せられ若くは能く了知するは是れ所説なり。(三)五取蘊六處因緣相應分及び(四)道品分の如きの若くは諸比丘、天魔等の衆は是れ所爲説なり、結集品の如し。是の如き一切をば粗ぼ略して能説、所説及び所爲説、卽ち彼の一切の事相應の敎を標擧して間廁し鳩集す、是の故に説いて雜阿笈摩と名づく。卽ち彼の相應の敎を復た餘相を以て(五)處中にして説けり、是の故に説いて中阿笈摩と名づく。卽ち彼の相應の敎を更に餘相を以て廣長にして説く、是の故に説いて長阿笈摩と名づく。卽ち彼の相應の敎を更に一二三等漸く增する分數の道理を以て説く、是の故に説いて增一阿笈摩と名づく。是の如き四種をば師弟展轉して今に傳來す、此の道理に由りて是の故に説いて(六)阿笈摩と名づく。是れを事契經と名づく。

(七)十二分敎の中に於いて方廣分を除ける餘を聲聞と相應する契經と名

(二) 此分は五區分の中の第一分なり。

(三) 此分は五區分の中の第二第三分なり。

(四) 此分は五區分の中の第四分なり。

(五) 處中。雜阿含の如く簡略なる説相にあらず、長阿含の如く廣長なる説相にあらず中庸を得たる説相なり。

(六) 宋元明三本倶に阿笈摩の上に增一の二字を置くは誤れり。

(七) 十二分敎とは(一)契經(二)應頌(三)諷頌(四)因緣(五)本事(六)本生(七)希有(八)譬喩(九)論議(十)自説(十一)方廣(十二)授記なり、聲聞經に

づけ、卽ち方廣分を大乘と相應する契經と名づく。此の分別の義は前の如く應に知るべし。

是の如き〔一八〕四種の契經は餘の未だ顯了ならざる義を顯了せしむる等の〔一九〕二十種の契經に由る、其の所應の如く當に其の相を知るべし。

是より已後此の所說の四種の契經に依りて當に契經摩呾理迦を說くべし、如來の說きたまふ所、稱したまふ所、讃したまふ所、美めたまふ所の先聖の契經を決擇せんと欲するが爲めなり、譬へば〔二〇〕本母無き字は義明了ならざるが如し。是の如く本母に攝せざる所の經は其の義隱昧にして義明了ならず、此れと相違するは義明了なり、是の故に說いて摩呾理迦と名づく。總の嗢柁南に曰く、

〔二一〕『界と略敎と想行と、速通と因と斷支と、二品と智事と諦と、無厭と少欲にして住するとなり。』

〔二二〕別の嗢柁南に曰く、

〔二三〕『界と說と前行と觀察すると果と、愚相と無常等の〔決〕定と界と、二種の漸次と應に當に知るべし、非斷非常と及び染淨なり。』

大乘經にも共に十二分敎を具すれども今は且らく一義に從つて區別す。

〔一八〕四種の契經とは前述二十四種の中の前四種を指す。

〔一九〕二十種は二十四種契經の後の二十種を指す。

〔二〇〕本母は摩呾理迦(Mātṛkā)の譯語、本とは理なり、論藏は理を生ずる本なれば本母と云ふ。

〔二一〕此の總頌に十一門を列す。

〔二二〕以下十一頌あり、前の總頌の十一門一一に一頌を設けて釋す。

〔二三〕總頌十一門の中の第一門界を釋する別頌なり。此別頌の中復た十一門を列し、次で長行に於て釋す。

(二四)四種の所化の有情あり、先に數邪なる解脫の見を習つて(二五)集成せる所の(二六)界なり。何等をか四と爲す。謂く(一)先有、先世、先身、先所得の自體の中に於いて常見增上せる不正法を聽聞し、不如理に作意せる增上力の故に今に於いて彼を因と爲るに由り、彼を緣と爲るに由り數邪なる解脫の見を習つて集成せる所の界なり、常見に由るを說くと是の如くなるが如く、(二)斷見に由り、(三)現法涅槃の見に由り、(四)薩迦耶見に由るをも廣く說かば亦爾なり。此の中世尊は、(二七)種種なる勝解の智力、(二八)種種なる界の智力の增上力に由るが故に、彼の先の勝解及び彼の後の界を尋求して其の所應の如く彼の邪なる勝解と界とを調伏せんが爲めの故に多分爲に(二九)四種の法敎を轉ず、或は復た餘の智未だ成熟せざる者をば彼の智を成熟せしめんが爲めの故に、智已に成熟せる者をば彼をして諸の煩惱を解脫せしむるが故なり。初の邪界の有情の爲めに因滅するが故に行滅すと說き、行盡門に由りて無常性を說く、彼の邪なる勝解と界とを調伏せんが爲の故なり。第二の邪界の有情に隨ふが爲めに因集るが故に行集ると說き、行起門に由りて無常性を說く、彼の邪なる勝解と界とを調伏せんが爲めの故なり。第三の邪界の有情に隨ふが爲めに諸行苦門に由りて正法敎を轉ず、彼の邪なる勝解と界とを調伏せんが爲めの故なり。第四の邪界の有情に隨ふが爲めに若

【二四】界を釋す。
【二五】集成すとは熏習するなり。
【二六】界とは熏習せられたる種子を云ふ。
【二七】種種なる勝解を知る智力。
【二八】種種なる界卽ち種子を知る智力。
【二九】四種の所化の有情に對する四種の法敎なり、下出。

し（三〇）諸行を離れて薩迦耶見を起す行者には諸行空門に由りて正法教を轉じ、若し（三一）諸行に卽して薩迦耶見を起す行者には無我門に由りて正法教を轉ず、彼の邪なる勝解と界とを調伏せんが爲めの故なり。

（三二）復た次に、善說の法律は略して三種の不共支に由るが故に外道に共せず善說の數に墮す、一には眞實究竟の解脫を宣說するが故に、二には卽ち彼の方便を宣說するが故に、三には卽ち彼の自らの內の所證を宣說するが故なり。云何んが眞實究竟の解脫なる。謂く（三三）畢竟解脫及び（三四）一切解脫、卽ち是れ見道の果及び此の後に得る所の世出世の修道の果なり。此の中見道の果は畢竟に由るが故に眞實と名づくることを得るも、而も究竟には非ず、一切解脫に於いて應に作すべき所あるが故なり。又解脫に三種あり、一には世間解脫、二には有學解脫、三には無學解脫なり。世間解脫は是れ眞實に非ず、退轉あるが故なり。有學解脫は是れ眞實なりと雖も而も究竟に非ず、猶ほ作す所あるが故なり。當に知るべし所餘は（三五）二種を具足すと。云何んが方便なりや。謂く諸行の中に於いて、如所有性及び盡所有性に依りて無常想を修し、無常に依りて苦想を修し、苦に依りて空無我想を修し、此に因りて諦現觀に入ることを得る時、所知の境を正しく觀察するに由るが故に正見を獲得し、此の正見を依止と爲るに由るが故に修道の位の中に

【三〇】是れ離蘊我の見なり。
【三一】是れ卽蘊我の見なり。
【三二】說を釋す。
【三三】畢竟解脫とは見道の果なり。
【三四】一切解脫とは修道の果なり。
【三五】眞實と究竟との二種。

て偏く諸行に於いて厭逆の想に住す。彼れ住する時に於いて彼の相應の受に由り不現前の境を憶念し思惟すれば明了に現前すと雖も而も喜を生ぜず、喜を生ぜざる增上力に由るが故に彼れ行ずる時に於いて卽ち彼の受の所緣の境界に於いて染著を生ぜず、彼れ一切の所求の境界に於いて處中を得たるが故に尙ほ希求せず、何に況んや耽著せんや。彼れ是の如く若くは住し若くは行ずるに喜貪の纏に於いて速に能く滅盡するに由りて心淸淨にして住し、乃ち卽ち彼に於いて所得の道の如く極めて多く修習し、〔此の〕因緣の爲めの故に永く彼の品の麤重隨眠を拔き、眞實究竟の解脫を獲得す、當に知るべし卽ち是れ心善く解脫せるなりと。云何んが自らの內の所證なりや。當に知るべし（三六）四種の相ありと。若し有學の解脫轉ずる時に於いては二種の相に由りて內慧觸證す、謂く（三七）我れ已に諸の惡趣の中に生ずる所の諸行を盡し、又已に盡く其の七生二生一生所餘の後有に生ずる所の諸行を除けり、又（三八）我れ已に能く究竟し盡く退轉すると無き道に住せりと。若し無學の解脫轉ずる時に於いては卽ち是の如き二種の相に由るが故に內慧觸證す、謂く（三九）我れ已に其の餘の一切の煩惱を斷ぜんが爲めに應に學すべき所の事を作せり、我れ今尙ほ餘の一生の在る無し、況んや二、況んや七をや。又（四〇）所樂に隨つて亦た能く他の爲めに實の如く記別せりと、是の如きを名づけて自らの內の所證と爲す。

【三六】四種の相。有學と無學との解脫に各二相あり、故に四種の相となる。
【三七】第一相。
【三八】第二相。
【三九】第一相。
【四〇】第二相。

(四一)復た次に、卽ち彼の解脱の二種の(四二)前行法あり、一には(四三)見前行法、二には(四四)道果前行法なり。見前行法とは、謂く解脱及び彼の方便の自内所證の增上力に由るが故に、他の言音に從つて聞思修より成る所の妙善を起し、如理に作意し未だ(四五)正性離生に入らざるなり、能く正性離生に入れば如實なる見出世の正道を得。道果前行法とは、謂く是の如き正見を得已つて復た所餘の正思惟等を起すなり。或は同時に生じ、或は後時に生ずる道前行法は所餘の諸の煩惱を斷ぜんが爲めの故なり。

(四六)復た次に、未だ得ざる所の解脱を證得せんと欲するが爲めの故に應に八事を觀察すべし、謂く諸行の中に於ける(一)愛味と(二)過患と(三)出離との觀察と及び(四)聞と(五)思と(六)思擇力と(七)見道と(八)修道との觀察なり。諸行の中に於いて愛味を觀察する時能く善く諸行の愛味の所有自相に通達し、卽ち諸行に於いて患過を觀察する時能く善く(四七)三の愛の分位の過患の共相を了知す、謂く是の中と甚と少との愛味の諸の過患多きに於いて是の如く愛味染著に諸の過患の共相多きことを了知す。應に已に愛味する所の一切の行の中に於いて生起する所の欲貪の煩惱に隨つて卽ち能く除遣し制伏し斷捨すべし。此に於いて欲貪現行

【四一】前行を釋す。
【四二】前行法とは前方便行前加行卽ち豫備的修行のこと。
【四三】見前行法とは見道前の方便加行なり。
【四四】道果前行法とは修道の結果たる菩提涅槃の前方便なり。
【四五】正性離生とは見道の異名なり、眞如を正性と云ひ、欲界の生を解脱せるを離生と云ふ。
【四六】觀察するを釋す。
【四七】三の愛の分位とは次下の中と甚と少なり。

せざるが故に說いて名づけて斷と爲す、永く欲を離るるが故に名づけて斷と爲るには非ず。又彼の事に於いて心未だ解脱せざらんに、若し隨眠に於いて究竟して超越し、乃ち永く欲心を離るれば解脱を得、是れを(四八)一門の觀察の差別と名づく。又修行者彼の諸行に於いて正に觀察する時先づ聞より成る所の慧を以て阿笈摩の如く諸行の體は是れ無常なり、無常なるが故に苦なり、苦なるが故に空及び無我なりと了知す。彼れ聖教に隨つて是の如く勝解し、是の如く通達し、既に通達し已つて復た推度相應の思惟より成ずる所の微細の作意を以て卽ち彼の境に於いて如實に了知し、卽ち是の如く通達し了知する增上力に由るが故に彼の相應の煩惱現行する現法、當來の所有過患に於いて如實に觀察し、思擇力を依止と爲るに由るが故に設ひ復た生起するも而も實に著せず、卽ち能く捨離す。彼れ是の如く通達し了知し及び思擇する力に由りて多く修習するが故に能く正性離生に入り、既に正性離性に入り已つて修道の力に由りて漸く諸欲を離る。彼れ思擇と見道との二種の力に由るが故に其の所應に隨つて諸の煩惱を斷ず、謂く(四九)不現行斷の故に、及び(五〇)一分斷の故に修道の力に由りて究竟して離欲す。是の如く前の二種に由りて究竟して離欲す。是の如く前の二種に由りて漸く欲貪を離れ修道の力に由りて心に解脱を得。

(五一)復た次に、二種の煩惱斷ずる果、及び苦滅の果あり。一には見所斷の果、彼を證するに由るが

【四八】一門。八事の中の前三を結して一門となす。

【四九】不現行斷とは方便道の思擇力にて煩惱を暫く伏するを云ふ。

【五〇】一分斷とは見道にて一分の見惑を斷ずるを云ふ。

【五一】果を釋す。

故に能く自ら我れ已に永く那落迦、傍生、餓鬼〔の生〕を盡し、我れ今預流の退墮すること無き法を證得すと了知す、乃至廣く說けり。二には修所斷の果、彼を證するに由るが故に能く自ら我が最後身は暫時支持す。(五二)第二有等は永く復た轉ぜずと了知す。復た二種の苦滅するあり、一には現在を因と爲る未來の苦滅し、二には過去を因と爲る現在の苦滅するなり。復た二種の苦滅するあり、一には心苦滅し、二には身苦滅するなり。復た二種の苦滅するあり、一には壞苦、苦苦の苦滅し、二には行苦の苦滅するなり。復た二種の苦滅するあり、一には非愛業果の苦滅し、二には可愛業果の苦滅するなり。復た少分已に(五三)諦迹を見たる諸の聖弟子あり、已に諸の惡道の苦の所有怖畏を超過すと雖も未だ永く一切の結〔縛〕を盡さざるに由るが故に其の心に猶ほ當來世に於て諸の異生に共ずる生老死の怖あり、彼を斷ぜんが爲めの故に而も能く猛利なる樂欲乃至正念及び無放逸を發起し、勤めて觀行を修す。

(五四)復た次に、二種の愚夫の相あり。何等をか二と爲す、一には應に求むべき所に於いて如實に知らず、二には應に求むべき所に非ざるに返つて生起す。何等をか名づけて是れ應に求むべき所と爲すや。所謂涅槃は諸行永滅す、而るに諸の愚夫は當來世の諸行の(五五)不生に於ては都べて樂欲する無く、諸行の生ずるに於て唯だ欣樂することあるのみ、是の因緣に由りて應に求むべき所及び諸行の(五六)生

【五二】第二有とは第二生なり。
【五三】諦迹とは諦道卽ち諦理なり。
【五四】愚相を釋す。
【五五】不生は滅なり、涅槃安樂の狀態なり。
【五六】生ずるは苦なり。

する所有の衆苦に於て如實に知らざるなり。何等をか名づけて應に求むべき所に非ざるに而も返つて生起すと爲すや。求むる所に非ずとは、謂く老、病、死、(五七)非愛の合會、(五八)所愛の別離、(五九)所欲の匱乏愁歎憂苦、種種なる熱惱なり、彼れ是の如き諸行の生起するに於て返つて欣樂を生じ、生を本と爲る一切の行の中に於いて深く樂著を起し、生を本と爲る所有諸苦に於いて造作し積集す。是の因縁に由りて生苦及び生を本と爲る老病死等ある衆苦の差別に於いて解脫を得ず、是の如きを名づけて應に求むべき所に非ざるに而も返つて生起すと爲す。

(六〇)復た次に、諸行の中に於いて四決定あり、一には無常決定、二には苦決定、三には空決定、四には無我決定なり。云何んが諸行は無常決定せるや。三種の相に由りて當に知るべし過去未來の諸行すら尚ほ定んで無常なり、何に況んや現在をやと。何等をか三と爲す。謂く(六一)(一)先に無にして而も有なるが故に、(六二)(二)先に有にして而も無なるが故に、(六三)(三)起盡相應するが故なり。若し未來の行は先に未だ有らざる所なれば定んで非有なりといはば是れ卽ち應に先に無にして而も有なるに非ざるべく、是の如くならば應に無常決定に非ざるべし、彼れ先時に非有を施設し、非有を先と爲し、後時に方に有なるに由り、是の故に未來の諸行は無常決定なり。若し現在は緣より行生じ已つて決定して有なりといはば是れ卽ち應に先に有にして而も無なるに非ざるべく、未來の

【五七】是れ怨憎會苦なり。
【五八】是れ愛別離苦なり。
【五九】是れ求不得苦なり。
【六〇】無常等の決定を釋す。
【六一】是れ未來の諸行の相なり。
【六二】是れ過去の諸行の相なり。
【六三】是れ現在の諸行の相也。

諸行は便ち應に是れ無常決定に非ざるべく、現在の諸行も亦應に起盡と相應せざるべし。現在の行は緣より生じ已つて決定して有なるに非ず、有を以て先と爲し、非有を施設するに由り、是の故に過去の諸行は無常決定なり。是の如く現在の諸行は、未來の行は先に無にして而も有なるに因り、過去の行は先に有にして而も無なるに因り、此に由りて起盡相應すと施設す。是の故に說いて、當に知るべし去來の諸行の無常性すら尚ほ決定す、何に況んや現在をやと言ふ、是れを諸行は無常決定すと名づく。云何んが諸行は苦性決定せるや。謂く去來の諸行すら尚ほ是れ生等の苦法なり、何に況んや現在をや。所以は何ん、過去の諸行は是れ已に度れる苦なり、未來の諸行は是れ未だ至らざる苦なり、現在の諸行は是れ現前の苦なればなり、是れを諸行は苦性決定すと名づく。云何んが諸行は空性決定せるや。謂く去來の諸行すら尚ほ定んで空性なり、何に況んや現在をや。所以は何ん、未來の諸行は其の性未だあらず、此に由るが故に空なり、過去の諸行は其の性已に滅す、此に由るが故に空なり。現在の諸行は有なりと雖も未だ滅諦の義勝義の性の遠離する所にあらず、此に由るが故に空なり、是れを諸行は空性決定すと名づく。云何んが諸行は無我決定せるや。謂く去來の諸行すら尚ほ定んで無我なり、何に況んや現在をや。所以は何ん、未來の諸行は我の相に非ず、未だ現前せざるが故に過去の諸行は我の相に非ず、已に越度せるが故に、現在の諸行は我の相に非ず、正に現前するが故なり、是れを諸行は無我決定すと名づく。又二相に由りて當に諸行の決定して無常なるを知るべし、一には過

去世は已に壞滅せるに由るが故に、二には未來現在世は是れ應に滅壞すべき法なるに由るが故なり。又二相に由りて當に諸行は決定して是れ苦なりと知るべし、一には是れ（六四）生等の苦の法なるが故に、二には是れ（六五）三苦の性なるが故なり、此の諸の苦相をば前の如く應に知るべし。又二相に由りて當に諸行は決定して是れ空なりと知るべし。一には畢竟して（六六）離性空なるが故に、二には後方に離性空なるが故なり。畢竟して離性空なりとは、謂く諸行の中の我我所の性畢竟して空なるが故なり、後方に離性空なりとは、謂く已に一切の煩惱を斷じ、心解脫せる中に於いて一切の煩惱皆な悉く空なるが故なり。又二相に由りて當に諸行は決定して無我なりと知るべし、一には諸行は（六七）種種外性なるが故に、二には諸行は衆緣より生じて自在ならざるが故なり。復た（六八）十相に由りて當に諸行は四相決定せりと知るべし、謂く、（一）敗壞と、（二）變易と、（三）別離の相と、（四）法性に應ずる相とに由るが故に、（五）樂しむべきに非ざると（六）安穩ならざる相と（七）應に遠離すべきと、（八）異相の相なるが故なり、是の如き等の相は前の聲聞地に已に廣く分別せるが如し。

（六九）復た次に、出世道に依りて作意し修する中に五の離繫品の界あり、一には斷界、二には無欲界、

【六四】生老病死の四苦。
【六五】三苦は苦苦、壞苦、行苦なり。
【六六】離性空とは煩惱性を離れたるところを云ふ。
【六七】種種外性とは我所無き性を云ふ。
【六八】十相。茲には唯八相のみを擧げたるも第七相を開いて一、常を遠離し、二、樂を遠離し、三、淨を遠離すとするが故に十相となる。
【六九】界を釋す。

三には滅界、四には有餘依涅槃界、五には無餘依涅槃界なり。謂く見道所斷の諸行斷ずるが故に名づけて斷界と爲す。修道所斷の諸行斷ずるが故に無欲界と名づく。卽ち此れ唯だ餘依あるのみなるが故に有餘依涅槃界と名づく。此の依滅するが故に名づけて滅界と爲し、亦た無餘依涅槃界と名づく。卽ち此の五界は一切の行永く寂靜なるに由るが故に諸行止と名づく。我〔見〕、我所〔見〕、我慢、執著及與び隨眠皆な遠離するに由るが故に說いて名づけて空と爲す。一切の相皆な遠離するに由るが故に無所得と名づく。斷界の中に於いて一切の有漏に隨順する法の上の所有貪愛皆な遠離するが故に名づけて愛盡くと爲す。無欲界に於ける所有の欲貪皆な遠離するが故に名づけて無欲と爲す。滅界の中に於いて及び有餘依無餘依涅槃界の中に於いて其の所應の如く皆な永く滅するが故に皆な寂靜なるが故に其の次第に隨つて說いて名づけて滅と爲し、亦た涅槃と名づく。又斷界に於いて未だ得ざるを得んが爲めに勤めて修習するが故に諸行に於いて厭を修すと名づく。無欲界に於いて未だ得ざるを得んが爲めに勤めて修習するが故に諸行に於いて離欲を修すと名づく。滅界に於いて未だ得ざるを得んが爲めに勤めて修習するが故に諸行に於いて滅を修すと名づく。

【七〇】二種の漸次を釋す。

〔七〇〕復た次に、心解脫の爲めに勤めて修習する者に二種の漸次あり、一には智の漸次、二には智果の漸次なり。云何んが智の漸次なりや。謂く諸行の中に於いて先づ無常智を起す、彼の生滅の道理を

思擇するに由るが故なり。次に後に彼に於いて相應の行を生じ、觀じて生法老法乃至憂苦熱惱等の法と爲す、是の因緣に由りて一切皆な苦なり、此れ卽ち先の無常智に依りて後の苦智を生ずるなり。又彼の諸行は是の生法乃至是の熱惱の法に由るが故に、卽ち是れ死生緣起し、展轉流轉して自在の行相を得ざる道理なるが故に我あること無し、此れ卽ち先の苦智に依りて後の無我智を生ずるなり。是の如く無常を觀ずるが故に苦なり、苦なるが故に無我なり、是れを智の漸次と名づく。云何んが智果の漸次なりや。謂く厭と離欲と解脫と徧き解脫なり。云何んが厭なる。謂く對治現前することあるが故に、厭逆の想を起して諸の煩惱をして復た現行せざらしむ。云何んが離欲なる。謂く厭心を修習するに由るが故に對治に於いて作意し思惟せずと雖も、然も一切の染愛の事境に於いて貪現行せず、此れは伏斷增上力に由るが故なり。云何んが解脫なる。謂く卽ち此の伏斷對治に於いて多く修習するが故に永く隨眠を拔くなり。是の如きを厭と離欲と解脫との第一の差別と名づく。復た差別あり、謂く厭の位に於いて斷界極めて成滿するが故に厭と名づけ、卽ち厭に依止して非想非非想處を除いて餘の下地に於いて離欲を得る時離欲の位を施設するが故に離欲と名づけ、非想非非想處に於いて離欲を得る時解脫の位を施設するが故に解脫と名づく、是れを厭と離欲と解脫との第二の差別と名づく。云何んが徧き解脫なる。謂く是の如く煩惱雜染をば解脫するに由るが故に、生等の諸苦雜染をも亦た普く解脫す、是れを徧き解脫と名づく、是の如きは智增上力に由るが故なり。諸行の中に於いて厭を起し、厭

を習ふに由るが故に離欲を得、離欲を習ふに由るが故に解脱及び徧ねき解脱を得、是の如きを名づけて智果の漸次と爲す。此の中に復た四種の邪執あり、何等をか四と爲す。一には見の邪執、二には慢の邪執、三には自らの內の邪執、四には他敎の邪執なり。見の邪執とは、謂く諸行の中に於いて我我所を執するなり。慢の邪執とは、謂く諸行の中に於いて我慢を起すなり。前の見の邪執を執すれば諦現觀を障へ、後の我慢の邪執は修所斷の煩惱等斷ずるを障ふるなり。自らの內の邪執とは、謂く獨り空閑に處して正しき分別を依止と爲さざるが故に實我ありと執して或は見邪執し、或は慢邪執するなり。他敎の邪執とは謂く他の敎に由りて邪なる執著を起す、謂く此は是れ我なり、此は是れ我所なりと我慢行轉ずるなり。又內に於いて正しからざる分別を起し、我我所を執するを內の邪執と名づけ、亦た他敎の邪執に非ずと名づく。是の如き一切の邪執永く斷ずるを當に知るべし是れを智果と名づくと。

〔七一〕復た次に、三種の相應に由りて諸行の非斷非常を知る。何等をか三と爲す。一には〔七二〕無住行を以て因と爲るが故に、二には〔七三〕生じ已つて住因無きが故に、三には〔七四〕未來の諸行の因は性滅するが故なり。此の中諸行の因は無常なるが故に、生じ已つて住因不可得なるが故に當に知るべし諸行は常に非ずと。能く未來の諸行を生ずる現在の因性滅するが故に當に知るべし諸行は斷に非ずと。復た四

【七一】非斷非常を釋す。
【七二】無住行とは無常法なり、現在の諸法は過去の無常法を因と爲す。
【七三】生じたる現在法には常住の因なし。
【七四】未來の諸行の因たる現在法は性是れ無常なり。

縁あり、能く諸行をして展轉し流轉せしむ。何等をか四と爲す。一には因縁、二には等無間縁、三には所縁縁、四には增上縁なり。即ち此の四縁に略して二種あり、一には因、二には縁なり。因は唯だ因縁、餘の三は唯だ縁なり。又因縁とは、謂く諸行の種子なり、等無間縁とは、謂く前六識等及び(七五)相應法等無間に滅し、後の六識等及び相應法等無間に生ずるなり。所縁縁とは、謂く五識身等は(七六)五の別境を以て所縁と爲し、第六識身等は一切の法を以て所縁と爲す。增上縁とは、謂く五識等は(七七)眼等の各別の所依を以て增上縁と爲し、及び能生の作意等を增上縁と爲し、意識身等は四大種の身及び能生の作意等を增上縁と爲す。又先に造れる所の業を所生の愛非愛の果に望むるに當に知るべし亦た是れ增上縁なりと。是の如く(七八)資糧を(七九)道に望め、道を涅槃を得るに望むるも當に知るべし亦た是れ增上縁の攝なりと。

(八〇)復た次に、三種の事、二種の相に由りて應當に雜染と清淨とを觀察すべし。云何んが三種の事に由りて一切の雜染と清淨とを觀察するや。一には諸行の中に於いて雜染の因縁を觀察す、謂く彼の愛味を觀じて愛味と爲るが故なり。二には諸行の中に於いて清淨の因縁を觀察す、謂く彼の過患を觀じて過患と爲るが故なり。三には諸行の中に於いて清淨を觀察す、謂く彼の出離を觀じて出離と爲るが故なり。是の如き一切を總略して一と爲して

【七五】相應法とは前六識相應の心所法なり。
【七六】色、聲、香、味、觸等の五境。
【七七】眼等の各別の所依とは五識各別の所依たる眼耳鼻舌身の五根を云ふ。
【七八】資糧とは七方便等の前加行を云ふ。
【七九】道とは見修二道なり。
【八〇】染淨を釋す。

三事に由りて一切の雜染と淸淨とを觀察すと名づく。云何んが二種の相に由りて一切の雜染と淸淨とを觀察するや。一には如所有性に由るが故に、二には盡所有性に由るが故なり。如所有性とは、謂く諸行の中の若くは愛味若くは過患若くは出離に於て〔所有の性の如く觀察〕するなり。盡所有性とは、謂く諸行の中に於いて所有の愛味を盡し、所有の過患を盡し、所有の出離を盡すなり。此の中諸行を緣と爲して樂を生じ喜を生ずと觀察す、是れを彼の愛味に於て〔觀察〕すと名づけ、又此の愛味をば極めて狹少なりと爲す、是の如く二種の相に由りて如所有性の所謂愛味を觀察す。又諸行は是れ無常、苦、變壞の法なりと觀察す、是れを彼の過患と名づけ、又此の患過をば極めて廣大なりと爲す、是の如く二種の相に由りて如所有性の所謂過患を觀察す。又復た諸行の中の欲貪の滅、欲貪の斷、欲貪の出を觀察す、是れを彼の出離と名づけ、又此の出離は寂靜なり無上なり畢竟安穩なり〔と爲す〕。是の如く二種の相に由りて如所有性の所謂出離を觀察す。又即ち此の愛味、即ち此の過患、即ち此の出離をば諸行の中の若くは過去若くは未來若くは現在、若くは內若くは外、若くは麤若くは細、若くは劣若くは勝、若くは遠若くは近に於て審諦に觀察するを當に知るべし是を彼の如所有性の所謂愛味と過患と出離とを觀察すと名く。又是の如き三事の體性は是れ有なりと了知せんが爲めに應に三種の有情衆の別を知るべし、一には諸欲に於て染著する衆、二には諸欲に於て遠離する衆、三には諸欲に於て離繫する衆なり。此の三處に於いて復た三種の世間の愚癡あり、謂く若くは天世間、若くは沙門婆羅門、

若くは諸の天人なり。是の如き三種の世間は三の因緣に由りて應に安立することを知るべし。一には(八一)欲自在及び(八二)淨自在を得るに由るが故なり、謂く若くは魔、若くは梵世間なり。二には勤修して(八三)彼の因を得るに由るが故なり、謂く若くは沙門婆羅門なり。三には種種なる業因の(八四)果に趣くが故なり、謂く若くは諸の天人なり。又此の三處に於いて其の所應に隨つて能く斷じ、作證するに(八五)二種の道ありて(八六)四の倒心を離る、謂く已に見地に入り及び上の修道に於けるを修習住と名づく。又此の三種の道に四種の相の心解脫の果あり、一には貪瞋の縛を解脫する相、二には欲貪の滅と斷と出との出離の相、三には九結を離繫する相、四には生等の諸苦を解脫する相なり。此の中前の三相は因處の煩惱を解脫することを顯示し、後の一相は果處の諸苦を解脫することを顯示す。此の義の中に於いて譬へば人あり、囹圄に處在して種種なる縛の爲めに繫縛せらるるが如し。所謂或は木、或は索、或は鐵、又は餘人を置いて其をして防守せしめ、或は設し彼の幽禁の處より逃れて遠所に至るを還た執へ將ち來りて或は尙は彼をして轉動せしめざるあるあり、況んや逃避することを得んや。或は廣大微妙なる種種の可愛に繫がるる妙欲を安置して幽禁の處に在りて彼をして自然に心に樂著を生じ、逃避せんと欲すること無からしむるあり。(八七)是の如く彼の人(一)一切種の縛の爲めに縛せら

【八一】欲自在とは欲界に於ける自在なり。
【八二】淨自在とは欲惡不善を離れたるを云ふ。
【八三】魔梵に生ずる因を得。
【八四】果とは天趣人趣を云ふ。
【八五】二種の道とは見修二道なり。
【八六】四の倒心とは常樂我淨の四顚倒心なり。
【八七】以下四縛を擧ぐ。

れ、(二)善方便の守の爲めに守られ、(三)最も堅牢なる繋の爲めに繋がれ、復た(四)爲めに怨家隨つて害を加へんと欲す。所謂(八八)打拍し或は復た解割し、或は杖捶を加へ、或は總べて命を斷ず。若し能く是の四縛を脱することある者は乃ち名づけて一切の縛より解脱を得たりと爲ることを得。是の如く彼の三處の世間に於ける愚癡の有情種種なる縛の爲めに繋縛せらるとは當に知るべし卽ち貪瞋癡の縛に譬ふと。其の守禁する者とは不正なる尋思及び未だ永く煩惱隨眠を拔かざるに譬ふ。不正なる尋思の故に尙ほ動ぜしめず、況んや離欲して遠く逃避することを得んや。煩惱隨眠をば未だ永く拔かざるが故に世間道の方便にて逃避して遠く有頂に至ると雖も後執へ將つて還る。可愛なる妙欲をば之を九結に譬ふ、彼の結に由るが故に生死に於いて自然に樂著し、自らの繋縛に於いて解脱を欲せざらしむ。彼れ旣に是の如く種種なる縛の爲めに極めて密縛せられ、善方便の縛に密縛せられ、最も堅牢の之を縛するに密しく縛せられ、復た(八九)四の魔怨は其の所欲に隨つて生等の苦を以て加す之を害す。若し能く彼の四種の繋縛より善く解脱する者は乃ち名づけて一切の縛より解脱を得と爲すべし。

復た次に、嗢柁南に曰はく、

(九〇)『略教と教果と終と數に墮すると、三の徧智「及び」斷と縛と解脱と、見慢の雜染と淨說句と、遠

【八八】打拍等の四は四魔に譬ふ。

【八九】四の魔怨とは蘊魔、死魔、天魔、煩惱魔なり。

【九〇】總頌十一門の中第二門略教を釋する別頌なり。此別頌の中復た十一門を列し、長行に於て之を釋す。

離の四具と三の圓滿なり。』

（九一）「三の因緣に由りて諸の聲聞ありて大師の所に往きて略教授を請ふ。何等をか三と爲す。（九二）謂く唯だ多聞のみを究竟と爲る者、諸の餘行に於て而も厭背する者是の如き解を生ず、但だ略して法を聞くに（九三）自義を得るに足れり、何ぞ多聞に藉るを以て究竟と爲んや、要ず正行を修するを貞實と爲るが故に、又多聞を棄捨して欲を究竟するが故に、（九四）又入る所の門に所作多きを怖畏することある者は、善方便を爲して入ることを得るが故に、或は卽ち彼れ已に多法に於いて善く聽き善く思ふことあつて、彼れ是の念を作さく、我れ多法に於いて已に善く聽思せり、若し我れ今已に聽思して得たる所の諸法を盡して以て依止と爲さんに、（九五）住心の境及び解脫の境に於ける（九六）欲繫の心は將に我れをして散亂を作意せしめざらんとす、若し爾らば住心すら尙は得ること能はず、何に況んや解脫をやと。（九七）又是の如く聞く所思ふ所の一切の法の中に於いて決定することを得ず、當に何れの者に依りて速に通慧を證すべく、當に何れの者に依りて速に出離を得べく、當に何れの境に緣りて住心を得べく、當に何れの境に緣りて解脫を得べきやと。彼れ既に是の如く自ら決定せず、若くは大師或は衆の識る所の如來の弟子に於いて現前し、見已つて便ち卽ち往詣して略教授を請ふ。

【九一】略教を釋す。
【九二】第一の因緣。
【九三】自義とは自利なり。
【九四】第二の因緣。
【九五】住心とは禪定なり。
【九六】欲繫の心とは欲界繫の心なり。
【九七】第三の因緣。

(九八)復た次に、當に知るべし正敎授に四種の自義の果得ありと。謂く此の出家及び此の出家の如きは卽ち(九九)形相具足し、(一〇〇)事業具足し、(一〇一)意樂具足し、(一〇二)處捨取具足し、此に依るが故に(一〇三)無上得、(一〇四)現法得、(一〇五)自然得、(一〇六)內證得を得と爲す。

(一〇七)復た次に、六種の死あり。謂く過去死、現在死、不調伏死、同分死、不同分死なり。過去死とは、謂く過去の諸行沒し、乃至命根滅するが故に死するなり。現在死とは、謂く現在の諸行沒し、乃至命根滅するが故に死するなり。不調伏死とは、謂く過去世に於いて調せず伏せず、隨眠の行、展轉する隨眠、世俗に說いて言ふ士夫の隨眠ありて、而も命終し已らんに現在世に於いて結生相續し、隨眠の行に攝せられたる自體あつて而も生起することを得、現在世に於いて乃至壽盡き亦た復た是の如く調せず伏せず廣く說かば乃至而も命終し已つて未來の自體復た生起することを得。又能く隨眠ある行を攝取し、彼れを攝取して以て因と爲るに由るが故に便ち生等の衆苦の爲めに縛せられ亦た貪等の大縛の爲めに縛せらるるなり。調伏死とは、謂く現在世に於いて已に調し已に伏し隨眠あること無く、命終し已つて未來の自體復た生起せず、亦た隨眠ある行を攝取せず、彼を攝取して以て因と爲さざるが故に生等の衆苦の差別を解脫し、亦た復た貪等の大縛を解脫するなり。同分死とは、

【九八】敎果を釋す。
【九九】形相とは剃髮染衣の形相なり。
【一〇〇】事業とは三學なり。
【一〇一】意樂とは五神通なり。
【一〇二】處捨取とは生死を捨て涅槃を取る。
【一〇三】無上道を得。
【一〇四】現法樂卽ち靜慮を得。
【一〇五】自然に見道に入るを得。
【一〇六】內に眞理を證得す。
【一〇七】終を釋す。

謂く過去にて調せず伏せずして會て身命を捨てしが如く、現在世に於いても亦た復た是の如くして身命を捨つるなり、當に知るべし此の如きを同分死と名づけ、相似死と名づけ、隨順死と名づくと。若し過去に於いては調せず伏せずして身命を捨て已るも、現在世に於いて已に調し已に伏して身命を捨つるは、當に知るべし此を不同分死、不相似死、不隨順死と名づくと。若し現在に於いて隨眠の行、展轉する隨眠ありて而も命終する時過去の死の如くなるを同分死及び隨順死と名づけ、過去の如くならずして而も命終する時は當に結生する所の未來の相續の同分の諸行を攝取する能はず。又此の六種の死に當に知るべし二種の相ありと、謂く諸行流轉する過患の相、及び諸行還滅する勝利の相なり。若し過去に於いて及び現在に於いて調せず伏せず同分にして死し、復た未來に於いて生等の苦を取り、及び貪等の煩惱の爲めに縛せらるる者をば諸行流轉する過患の相と名づく。若し現在に於いて已に調し已に伏し、不同分にして死し、又未來に於いて衆苦を取らず、一切の煩惱の縛を解脫する者をば諸行還滅する勝利の相と名づく。

【一〇八】數に墮することを釋す。

【一〇八】復た次に、八種の相に由りて、彼の諸行の生起に於いて世俗に言說する士夫の數の中に入ることを得、謂く(一)是の如きの名、(二)是の如きの種類、(三)是の如きの族姓、(四)是の如きの飮食、(五)是の如きの若くは苦若くは樂を領受すること、(六)是の如きの長壽、(七)是の如きの久住、(八)是の如きの所有壽量の邊際なり。是の如き諸相は菩薩地の宿住念の中に於いて、當に知るべし、前に已に廣

く分別せるが如しと。

〔二〇九〕復た次に、三種の相に由りて諸行の中に於いて應に無我の徧智及び斷を知るべし。何等をか三と爲す。一には內徧智、二には外徧智、三には內外徧智なり。斷も亦た是の如く、其の所應に隨ふ、所謂諸行都べて〔二一〇〕我あること無く、〔二一一〕我所あること無く、亦た〔二一二〕餘の互に相繫屬することあること無し。當に知るべし是の如く內と外と俱の徧智及び斷に於いて此の中に法住智決定を得るに由り、徧智數此を習ふが故に彼の相應する所有の隨眠を捨て畢竟斷を得と。當に知るべし此の中諸行に於いて未だ徧智を得ざる者に徧智を得せしめんが爲めの故に如來大師は正しき法要を說きたまへりと。若し諸行に於いて已に徧智を得るも、而も未だ永く斷せざる者には唯だ先に得たる所の如き徧智に於いて數永く斷ずることを習得せしめんが爲めの故に復た勸導を加へたまへり。

〔二一三〕復た次に、生死の中に於いて流轉する者に三種の縛あり、此の縛に由るが故に心解脫し難し、當に知るべし此れ唯だ善說法律のみ能く解脫せしむ、惡說「法律」に由るには非ずと。何等をか三と爲す、一には其の〔二一四〕愛結を除ける餘結に繫せらるる所の諸の有漏の事なり、二には愛結に染せらるる諸の有漏の事なり、三には能く當來を生ずる「有漏の事」なり。復た諸行あり、此の三縛に於いて、

【二〇九】三の徧智及び斷を釋す。
【二一〇】內斷なり、內の我見を斷す。
【二一一】外斷なり、外の我所見を斷す。
【二一二】內外斷なり、內の我見及び外の我所見相繫屬するを斷す。
【二一三】縛を釋す。
【二一四】愛結とは愛煩惱なり。

三因緣に由りて心解脱し難し、謂く初は種種「なる結」に由るが故に、第二には「結縛」堅牢なるに由るが故に、愛樂す可きが故に、第三には「結縛」微細なるに由るが故なり。復た五相に由りて後有の縛の爲めに繫縛せらるとは、當に知るべし(二一五)五我慢の現行するありと。謂く(一)所依に由るが故に、(二)所緣の故に、(三)助伴の故に、(四)自性の故に、(五)因果の故なり。當に知るべし此の中薩迦耶見を以て依止と爲して我を計す、未來に或は當に是れ有なるべし、或は當に非有なるべしと、有と非有とを以て所緣の境と爲す。此の中非有を所緣の境と爲るに唯だ(二一六)一種あり、有を所緣と爲るに乃ち五種あり。謂く(一)我は當に有色なるべし(二)我は當に無色なるべし(三)我は當に有想なるべし(四)我は當に無想なるべし(五)我は當に非有想非無想なるべしと。是の如き一切を總收して一と爲し、合して(二一七)六種の所緣の境界あり。助伴と言ふは、謂く心を動亂するなり。自性と言ふは、獨り擧る行相を其の自相と爲し、戲論する自性を其の共相と爲す、一切の煩惱は戲論の性なるが故なり。因果の性とは、謂く能く生を感ずるを因性と爲るが故に、業行を造作し愛し隨逐するが故なり。

(二一八)復た次に、三種の相に由りて當に知るべし心善く解脱すと。謂く(一)諸行に於いて徧く了知するが故に、(二)彼の相應の諸の煩惱に於いて斷じて作證を得るが故に、(三)煩惱斷じ已つて一切處に於いて

【二一五】五我慢。以下に出す五種の我見を云ふ。
【二一六】我は非有なりとする斷見なり。
【二一七】六種。五種各別の所緣と五種合一せるものの所緣との六種。
【二一八】解脱を釋す。

愛を離れて住するが故なり。又此の中に於いて(二九)四種の行に由りて諸行の中に於いて能く徧く如所有性を了知す、謂く無常等なり。(三〇)十一の行に由りて諸行の中に於て能く徧く盡所有性を了知す、謂く過去未來等なり、前に廣く說けるが如し。

(三一)復た次に、二種五種の雜染並に五種の因相あり、是の如き二種は諸の有學の者は應に知るべく應に斷ずべく、諸の無學の者は已に知り已に斷せり。何等をか二と爲す。謂く見雜染、及び慢雜染なり。此の二に當に知るべし五種の差別ありと、謂く行に由るが故に、隨眠の故なり。何等をか五と爲す。一には我を計し二には我所を計し、三には我慢、四には執著、五には隨眠なり。當に知るべし此の中我、我所、我慢の三種を計して所依止と爲し、所緣の事に於いて固く執し、唯だ此のみ諦實にして餘は皆な愚妄なりと取著すと。當に知るべし此の中に纏はるゝ道理に由りて說いて執著と名づけ、即ち彼の種子隨縛し相續するを說いて隨眠と名づくと。又有識身及び外事等は當に知るべし是れ彼の五種の因相なり、謂く我を計する因相乃至隨眠の因相なりと。即ち此の因相に復た二種あり、一には所緣の因相、二には因緣の因相なり。「五種の因相とは」(一)我を計すると(二)我慢とは有識身を以て所緣の因相と爲し、(三)我所を計するは通じて(三二)二種を以て所緣の因相と爲し、(四)彼の執著は不正なる法を聞きて不如理に作意すると及び彼

【二九】四種の行。無常、苦、空、無我の四種の決なり、此卷前出。
【三〇】十一の行。過去、未來、現在、內、外、麤、細、劣、勝、遠、近なり。此卷前出。
【三一】見慢雜染を釋す。
【三二】二種。有識身及び外事。

の隨眠とを以て因緣の因相と爲し、(五)彼の隨眠は如實に諸行を了知せざると煩惱諸の纏をば數數串習するとを以て因緣の因相と爲す。

復た次に、四種の有情衆あり、當に知るべし中に於いて雜染を安立すと。何等をか四と爲す。一には外道有情衆、二には(二三)此法の異生有情衆、三には有學有情衆、四には無學有情衆なり。外道有情衆の中には具に一切「の雜染」あり、此法の異生有情衆の中には(二四)四種「の雜染」得可く、及び(二五)彼の因相並に執著の因相の一分なり而も執著「の因相の一分」得可らず。有學有情衆の中には(二六)我、我所の二種を計す、及び(二七)彼の因相と執著「の因相」と隨眠「の因相」とは皆な得可らず、及び我慢「の因相」執著「の因相」並に彼の因相「あり得べからざる」なり、然も(二八)我慢と隨眠とあり得可し。無學有情衆の中には一切皆な得可らず。又外道有情衆の凡そ所有る行は彼れを斷せんが爲にせず、此法の異生有情衆の修する所の諸行は正しく彼を斷せんが爲にして、而も未だ斷ずること能はず、未だ(二九)見ること如實ならざるが故なり。有學有情衆は已に一分を斷じ、餘分を斷せんが爲めに、復た正行を修し、見ること如實なりと雖も、而も自ら我れ已に能く見たりと稱せず、猶ほ未だ盡無生智を獲得せざるが故なり。無學有情衆は一切已に

【二三】此の法の異生とは入佛法の凡夫のこと。

【二四】四種。前の五種の因相の中執著の因相の一分とを除けるを其の餘の三種の因相及び執著の因相の一分を合し四種とす。

【二五】彼の因相とは有識身の因相なり。

【二六】俱生起の我、我所見。

【二七】彼の因相等は分別起のものなり。

【二八】俱生起の我慢及び隨眠。

【二九】見るとは道を見るなり。

斷じ、諸行の中に於いて而も自ら稱して我れ如實に見たりと言ふ。

(三〇)復た次に、八種の清淨なる說句あり。何等をか八と爲す。謂く見、慢を超過するに由るが故に(三一)二種は超過せる意の清淨なる說句と名づけ、(三二)彼の因相を斷ずるに由るが故に相を除ける清淨なる說句と名づけ、彼の執著を斷ずるに由るが故に寂靜の清淨なる說句と名づけ、彼の隨眠を斷ずるに由るが故に善く解脫の清淨なる說句と名づく。復た次に、有學に二の清淨なる說句あり、謂く後有の一切の行の中に於いて現行せざる道理に由りて(一)已に貪愛を割き及び(二)三結を轉ずと名づく。無學に二の清淨なる說句あり、謂く(一)止慢を現觀するが故に、及び(二)一切の苦本の貪愛隨眠をば永く拔除するが故に已に苦邊を作すと名づく。是の如き一切を總收して一と爲し、合して八種の清淨なる說句あり。

(三三)復た次に、四支に由るが故に遠離を具足するを善く具足すと名づく。何等をか四と爲す。一には(三四)第二無くして住す、二には邊際の臥具に處す、三には其の身遠離す、四には其の心遠離す。謂く居家の境界に於いて生ずる所の諸相の尋思、貪欲、瞋恚をば悉く皆な遠離し、不放逸に依りて其の心を防守するなり。又五相に由りて勤めて精進することを發し速に通慧を證す、謂く(一)勢力ある者は被甲精進に由るが故に、(二)精進ある者は加行精進に由るが故に、(三)勇悍ある者は廣大なる法の中

【三〇】淨說句を釋す。
【三一】二種とは見及び慢なり。
【三二】彼の因相とは有識身の因相なり。
【三三】遠離の四具を釋す。
【三四】佛を捨離する也。

に於いて怯劣無き精進に由るが故に、(四)堅猛ある者は寒熱蚊虻等の動かすこと能はざる所の精進に由るが故に、(五)善軛を捨てざることある者は下劣に於いて喜足無き精進に由るが故なり。又惛沈、睡眠、掉擧、惡作其の次第の如き奢摩他毘鉢舍那品の隨煩惱を斷せんが爲めの故に正しき止觀に失壞あること無からんことを願ふ。

【三五】三の圓滿を釋す。

(三五)復た次に、善說法毘奈耶の中に於いて三の圓滿あり。何等をか三と爲す。一には行圓滿、二には果圓滿、三には師圓滿なり。行圓滿とは、謂く斷と無欲と滅界とを觸證せんが爲めの故に正法を聽聞し、他の爲めに演說し、自ら正しく修行し、法に隨つて法を行ず、是れを行圓滿と名づく。果圓滿とは、謂く卽ち此の法に隨つて法を行ずる增上力に由るが故に心善く解脫し、又能く現法涅槃を證得す、是れを果圓滿と名づく。師圓滿とは、謂く一切の梵行の法を引發するは、皆な世尊を用て根本と爲るが故に、皆な世尊に由りて法眼を轉ずるが故に、皆な世尊を以て所依と爲るが故に、如來の出世に由りて彼の教の知るべきあるが故に、世尊を說いて彼の根本と爲し、佛出世し已つて彼彼の所化の有情を觀待して正法眼を說きたまひ、師及び弟子展轉して傳來するが故に、世尊正法眼を轉じ、法眼を轉じ已らんに若し中に於いて諸の疑惑を生ずることあらば、唯世尊に依りてのみ乃ち能く決了するが故に世尊を說いて所依止と爲すと說く。又說法師に略して二種あり、一には教に由る、二には證に由る。斯れは他より正法を聞き已つて宣說す

るに由るが故に、學道無學道を證し已つて宣說するに由るが故なり。

卷の第八十六

攝事分中契經事行擇攝第一の二

復た次に、嗢柁南に曰はく、

(一)『想行と愚の相と眼と勝利と、九智と無癡と勝進と、我見の差別と三相の行とにして、法總等の品の三をば後に廣ず。』

(二)諸行の中に於いて無常想の行を修するに五種あり、謂く無常性、無恆性、久住に非ざる性、保つべからざる性、變壞法の性に由るが故なり。此の中刹那刹那に壞するが故に無常なり、自體有限なる住壽に繫屬するが故に無恆なり、外事初後決定して住すること無きが故に久住に非ざるなり、壽量未だ滿たざるに容緣に壞ぶられて非時にして死するが故に保つべからざるなり。乃至爾所の時に住し、其の中間に於いて定んで安樂ならざるが故に變壞の法なり。

(三)復た次に、愚夫に略して、三種の愚夫の相あり。何等をか三と爲す。謂く諸の愚夫は一切の行に於いて上に說ける所の如き五無常性をば思惟すること能はず、非眞實なる勝劣性の中に於いて勝劣を

【一】總頌十一門の中第三門想行を釋する別頌なり。此別頌の中復た十門を列し、長行に於て之を釋す。
【二】想行を釋す。
【三】愚の相を釋す。

分別し自他を稱量して、己を謂つて勝れりと爲す、是れを第一の愚夫の相と名づく。己れ勝れりと謂ふが如く（四）等しと謂ひ（五）劣れりと謂ふも、廣く說くこと亦た爾なり。此と相違して當に知るべし、智者に亦た三種の智者の相ありと。

（六）復た次に、二種の相に由りて當に聖者の慧眼淸淨なることを知るべし、謂く（一）遠塵及び（二）離苦に由るが故なり。見所斷の諸の（七）煩惱の纏に〔於て〕離繫を得るに由るが故に名づけて遠塵と爲し、彼の（八）隨眠に〔於て〕離繫を得るに由るが故に說いて離垢と名づく。又現觀する時麤なる我慢隨入し、作意し、間無間に轉ずるあり、若し徧く所取能取所緣平等なりと了知すれば彼れ卽ち斷滅す、彼れ斷滅するが故に說いて遠塵と名づけ、一切の見道所斷の煩惱隨眠斷ずるが故に說いて離垢と名づく。

（九）復た次に、遠塵離垢し、諸法の中に於いて法眼を得る時、當に知るべし卽ち十種の勝利を得と。何等をか十と爲す。一には四聖諦に於て已に善く見るが故に說いて見法と名づく。二には一種の沙門果を隨獲するが故に說いて得法と名づく。三には己が所證に於いて能く自ら我れ今已に所有那落迦、傍生、餓鬼〔の生〕を盡し、我れ預流を證すと了知す、乃至廣く說けり、是の如きに由るが故に說いて知法と名づく。四には（一〇）四證淨を得、佛法僧に於いて如實に知るが故に

【四】第二の愚夫の相。
【五】第三の愚夫の相。
【六】眼を釋す。
【七】煩惱の纏とは煩惱の現行なり。
【八】隨眠とは煩惱の種子なり。
【九】勝利を釋す。
【一〇】四證淨とは諦理を覺知し正しく三寶及び戒を信ずるを云ふ。

徧堅法と名づく。五には自らの所證に於いて惑無し。六には他の所證に於いて疑無し。七には聖諦と相應する教を宣説する時他緣に藉らず。八には他面を觀せず他口を看ず、此の正法毗奈耶の中に於いて一切の他論も轉ずること能はざる所なり。九には一切の所證の解を記別する時都べて畏るる所無し。十には二の因緣に由りて聖教に隨入す、謂く(一)正世俗及び(二)第一義なるが故なり。

(三)復た次に、九種の智あり、能く諸行に於いて徧知し超越す、謂く(一)諸行流轉の智、(二)諸行還滅の智、(三)雜染の因緣の智(四)清淨の因緣の智、(五)清淨智及び、(六)苦智、(七)集智、(八)滅智、(九)道智なり。此の中諸行流轉の智とは、略して三種の因緣集るに由るが故に、一切行集る「とする」所有の正智なり。謂く(一)喜集るが故に、(二)觸集るが故に、(三)名色集るが故に、其の所應に隨つて若くは(四)色集り、若くは(五)受等集り、若くは(六)識集る。卽ち此の三種の因緣滅するが故に三種の行滅す「とす」、是れを諸行還滅の智と名づく。雜染因を緣ずる智、清淨因を緣ずる智及び清淨智とは、謂く(七)愛味と(八)過患と(九)出離とに於いて前の如く應に知るべし。四聖諦の中の苦等の四智は前に聖諦の道理を分別せるが如く應に其の相を知るべし。異生の位に於いて前の五智を修して

【一】正世俗とは能詮の教なり。
【二】第一義とは所詮の理なり。
【三】九智を釋す。
【四】喜集るが故に色集る。
【五】觸集るが故に受想行集る。
【六】名色集るが故に識集る。
【七】愛味を緣ずるは是れ雜染因を緣ずる智なり。
【八】過患を緣ずるは是れ清淨因を緣ずる智なり。
【九】出離を緣ずるは是れ清淨智なり。

能く速に後の四聖諦の智を證し、彼を證するに由るが故に能く諸行に於いて如實に了知す。又若し前の諸智に於いて闕くることあれば必定して諦の道理を以て諸行を徧知すること能はず、要らず當に證得して方に能く徧知すべし。若し諦理に於いて行を徧知するも、智に闕くる所あれば必定して上の修道に於いて對治力を以て諸の煩惱を斷じ、一切の行を起すこと能はず、此れと相違すれば乃ち能く超越す、是の故に說いて九種の智ありて能く諸行に於いて徧知し超越すと言ふ。

〔一〇〕復た次に、觀行を修する者三處に由るが故に諸行の中に於いて愚癡無くして住す。何等をか三と爲す。一には過去の諸行に於いて如實に是れ無常の性なりと了知す。二には現在の諸行に於いて如實に是れ滅法の性なりと了知す。三には未來の諸行に於いて如實に生滅法の性なりと了知す。彼れ是の如く三世の行に於いて愚癡あること無く、不染汙心安樂にして住し明の數に墮在す、此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ愚癡ありて住し無明の數に墮すと。復た三種の煩惱の異名あり、多分煩惱品の中に在りと說く、一には貪の異名、二には瞋の異名、三には癡の異名なり。貪の異名とは亦たは名づけて喜と爲し、亦たは名づけて貪と爲し、亦たは名づけて願と爲し、亦たは名づけて欣と爲し、亦たは名づけて欲と爲し、亦たは名づけて昵と爲し、亦たは名づけて樂と爲し、亦たは名づけと藏と爲し、亦たは名づけて護と爲し、亦たは名づけて著と爲し、亦たは名づけて希と爲し、亦たは名づけて耽と爲し、亦たは名づけて愛と爲し、亦たは

〔一〇〕無癡を釋す。

名づけて染と爲し、亦たは名づけて渇と爲す。瞋の異名は亦たは名づけて恚と爲し、亦たは名づけて惛と爲し、亦たは名づけて瞋と爲し、亦たは名づけて忿と爲し、亦たは名づけて損と爲し、亦たは不忍と名づけ、亦たは違戾と名づけ、亦たは暴惡と名づけ、亦たは蛆螫と名づけ、亦たは拒對と名づけ、亦たは慘毒と名づけ、亦たは憤發と名づけ、亦たは怒憾と名づけ、亦たは懷慼住と名づけ、亦たは生欻勃と名づく。癡の異名は亦たは無智と名づけ、亦たは無見と名づけ、亦たは非現觀と名づけ、亦たは惛昧と名づけ、亦たは愚癡と名づけ、亦たは無明と名づけ、亦たは黑闇と名づく。是の如き等の名は當に知るべし前の攝異門分に多分已に辯ぜるが如しと。喜貪の差別をば我れ今當に説くべし、依止の受を緣じて生ずる所の欣樂を説いて名づけて喜と爲し、受を生ずる境界を緣じて生ずる所の染著を説いて名づけて貪と爲す。又將に得んとする境に於いて生ずるを喜と名づけ、若し已に得たる境に於いて生ずるをば貪と名づく。又已に得たる「もの」に於いて將に受用せんとするに臨むを喜と名づけ、卽ち此の事に於いて正に受用する時を貪と名づく。又能く境界を得る方便に於けるを喜と名づけ、卽ち境界に於ける貪と名づく。又後有に於けるを喜と名づけ、現の境界に於けるを貪と名づく。又愛する所の他の有情類の榮利に於けるを喜と名づけ、自ら得る所の榮利に於けるを貪と名づく。

【三】勝進を釋す。

(三)復た次に、諸行の中に於いて如理に修する者に四の勝進あり、謂く勝進の想に略して三種あり、

一には未だ得ざるを得んが爲め、二には未だ會せざるを會せんが爲め、三には未だ證せざるを證せんが爲めなり。若し現法樂住を獲得せんが爲めなるを第四の精進と名づく。最初に能く先に未だ得ざりし所の預流果を得るが故に當に知るべし是れを未だ得ざるを得んが爲めなりと名づくと。卽ち此れを依と爲して復た能く上の學果に契會するが故に當に知るべし是れを未だ會せざるを會せんが爲めなりと名づくと。卽ち此れを依と爲して復た能く阿羅漢果を證得し、諸惑に於いて斷じ能く證を作すが故に當に知るべし是れを未だ證せざるを證せんが爲めなりと名づくと。若し已に阿羅漢果を證得すれば更に未だ得ざるを得んが爲め乃至未だ證せざるを證せんが爲めにする無きが故に正に勤めて修習して但だ現法樂住の爲めにす。正に勤めて修習するに又自義に依りて三の勝進の想あり、謂く諸行の中に於ける厭背の想と過患の想と實義の想なり。厭背の想とは、復た四行あり、謂く諸行に於いて思惟す(一)病の如く(二)癰の如く(三)箭の如く(四)惱害すと。病の如しとは、謂く一あるが如き界錯亂して生ずる所の病苦に因りて厭背の想を修するなり。癰の如しとは、謂く一あるが如き先業より生ずる所の癰苦に因りて厭背の想を修するなり。箭の如しとは、謂く一あるが如き他の怨箭の中る所の苦に因りて厭背の想を修するなり。惱害すとは、謂く親財等の匱乏の中に於いて自ら邪計して生ずる所の諸苦に因りて厭背の想を修するなり、是の如きを名づけて觀行を修する者諸行の中に於いて厭背の想を修すと爲す。過患の想とは、復た二行あり、謂く諸行に於いて(一)無常を思惟し、及び(二)苦を思惟するな

り。實義の想とは、亦た二行あり、謂く諸行に於いて㈠空性及び㈡無我性を思惟するなり。此の中先づ過患の想及び實義の想に於いて正に修習し已つて然して後方に能く厭背の想に住す。當に知るべし此の中には先づ其の果を説き、後に其の因を説くと。

㈢復た次に、四種の我見を所依止と爲して能く我慢を生ず。一には有分別の我見、謂く諸の外道の起す所なり。二には倶生の我見、謂く下禽獸等に至るまで亦た能く生起す。三には自らの依止を縁ずる我見、謂く各別の内身に於いて起す所なり。四には他の依止を縁ずる我見、謂く他身に於いて起す所なり。分別の我見を所依止と爲して我慢を生ずとは、謂く此の見に由り自他の身を觀じて實我ありと計するなり。此の㈢二種の我見を依と爲るに由りて我慢を發生す、譬へば清淨なる圓鏡の面上に質像を依と爲して影像を發生し、影像を依と爲して自らの依止に於いて劣中勝の想を發生するが如し。是の如く邪なる分別に由るが故に自らの依止を縁ずる我見を縁と爲して他の依止を縁ずる我見を發生すること、質像に依りて影像を發生するが如し。又此れを縁と爲して我慢を發生し、他に方べて己は或は勝れり或は等し或は劣れりと謂ふ。倶生の我見を縁と爲して我慢を生ずとは、當に知るべし譬喩前と差別す、明眼の人淨水の器に臨み、自ら眼耳を觀るが如しと。所餘は前の如く應に其の相を知るべし。此の一切種の薩迦耶見をば唯だ善説法毗奈耶に依りてのみ方に能く永へに斷ず、餘の邪教には非ず。是の如く如來及び衆の共に知る同

【㈢】見の差別を釋す。
【㈢】二種とは自他の身を觀じ

梵行者、或は諸弟子の同梵行者に（二四）大恩德あり。唯だ是の如き（二五）一因緣に由るが故に大師或は滅度の後の同梵行者に於いて眞實に恩を報ずと名づく。又第二に由る、謂く若し能く卽ち是の如き差別の句義に依りて利益せんが爲めの故に正行を勤修するあり、是の如きを亦た隨分の報恩と名づく、彼の希望する所未だ滿足せざるが故なり。

（二六）復た次に、三種の相に由りて諸行滅するが故に、說いて無餘依涅槃界と名づく、一には先に生起せる所の諸行滅するが故に、二には自性滅壞し諸行滅するが故に、二には一切の煩惱永へに離繫するが故なり。先に生起する所の諸行滅すとは、謂く先世の能く後有を感ずる諸の業煩惱の造作する所、及び先願の思求する所に由り今生起する所に於いて諸行永へに滅するなり。自性滅壞し諸行滅すとは、謂く彼れ生じ已らんに性の滅壞するに任せ究竟して住するに非ずして諸行永へに滅するなり。一切の煩惱永へに離繫すとは、謂く諸の煩惱餘す無く斷滅し、今滅するに由るが故に後更に生せず、是の故に此の三相に由りて諸行滅するが故に說いて寂滅と名づく、永へに相無きには非ず、其の相異なるが故なり、若し永へに相無くんば施設して說いて寂滅と名づく可らず。

（二七）復た次に、三解脫門の增上力に由るが故に當に知るべし（二八）四種の法嗢柁南を建立すと。謂く空

て起す所の我見なり。

【二四】佛敎は能く薩迦耶見を滅するが故に之を敎示する佛及び弟子に大恩德あり。

【二五】佛及び弟子の敎示の如く薩迦耶見を滅するの因緣。

【二六】三相の行を釋す。

【二七】法總等の品の三を後に廣ずることを釋す。

【二八】四種の法嗢柁南とは四法印を云ふ、(一)諸行無常印(二)諸行苦印(三)諸法無我印(四)涅槃寂靜印なり。

解脱門、無願解脱門、無相解脱門なり。一切行は無常なり一切行は苦なりとは、無願解脱門に依りて建立する第一第二の法嗢柁南なり。一切法は無我なりとは、空解脱門に依りて建立する第三の法嗢柁南なり。涅槃は寂靜なりとは、無相解脱門に依りて建立する第四の法嗢柁南なり。

復た次に、當に知るべし二種の法嗢柁南の增上行の欲ありと。一には勝解と倶行する欲、二には意樂と倶行する欲なり。勝解と倶行する欲とは、四種の法嗢柁南に由るが故に諸行の中に於いて(二九)樂欲を生ずるなり。又諸行の寂靜に於いて樂欲を生ずとは意樂に由るが故に獨り空閑に處して作意し思惟するなり。四種の相に由りて彼の寂靜に於いて其の心退還す。一には中に於いて勝利を見て趣入せざるに由るが故に、二には彼れを信ぜず不淸淨なる信を得るが故に、三には彼の所縁に於いて喜樂を生ぜず安住せざるが故に、四には彼に於いて不樂の勝解を起すが故なり。彼と相違するは當に知るべし卽ち是れ意樂と倶行する欲なりと。又二縁に由りて、無我の勝解の欲に依止するもの彼の涅槃に於いて驚恐に由るが故に其の心退還す、一には此の欲に於いて善く串習せず、未だ究竟に到らざるが故に、二には作意する時に於いて彼の因縁に由りて念忘失するが故なり。(三〇)又此の忍欲をば未だ串習せざるが故に爾の時に當りて諸行の中に於いて唯だ行のみを了する智にして其の心愚昧にして數數我を思惟す、我は爾の時當に何れの所にか在るべきと、我を尋求する行微細に倶行し障礙して轉ず。此の縁に由るが故に彼

【二九】常、樂、我、淨等の顚倒の見を斷除せんと欲す。

【三〇】無我の忍欲。

れ是の思を作さく、我は當に有らざるべしと。是の念を作さず、唯だ諸行のみあり、當來は有ならずと。彼れ是の如く隨逐する身見を依止と爲すに由るが故に變異隨轉する識を發生し、驚恐に由るが故に彼の寂滅に於いて其の心退還す。

復た次に、是の如きの驚恐を斷ぜんが爲めに二種の法ありて多く所作あり。一には諸の有智の同梵行［者］の所に於いて如實に自ら顯はす、二には善法の欲に因り解了心及び調柔心を發す。又是の如き解了心を發す者は正法を聽聞して三種の相に由りて歡喜を發生す。一には補特伽羅の增上に由るが故に、二には法の增上に由るが故に、三には自らの增上に由るが故なり。補特伽羅の增上とは、謂く深く讃仰す可く大威力を具せる端嚴なる大師及び稱揚する所の善說法者を覩見するに由る。法の增上とは、謂く說く所の法能く煩惱業苦を出離せしめ、及び最上なる深義を信解せしむるなり。自らの增上とは、謂く力能ありて、說く所の法に於いて能く隨つて覺悟するなり。又是の如き調柔心を發す者は、謂く三見あり、一には若くは(三一)彼に依りて轉じ、二には若くは(三二)彼に由りて徧知し、三には若くは(三三)應に引發する所なり。彼に依りて轉ずとは、謂く諸諦に於いて未だ現觀を得ざれば現觀を得んが爲に彼の勝解と倶行し極めて善く串習せる正見に依りて轉ずるなり。彼に由りて徧知するとは、謂く現觀の正見に隨順するに依りて三事の我執、薩迦耶見及び彼の隨眠(三四)斷常

【三一】是れ順解脫分の正見なり。

【三二】是れ順決擇分の正見なり。

【三三】是れ見道の正見なり。

【三四】斷常の兩見の依止する性

の兩見の依止する所の性並に（三五）得る所の果に於いて能く徧く了知す。三事と言ふは、一には若くは所取、二には若くは能取、三には若くは是の如く此れを取るなり。何れか所取なる、謂く五取蘊なり。誰れか能取なる、謂く（三六）四取なり。云何にして取るや、謂く（三七）四識住は其の次第に隨つて前の如く應に知るべし、（三八）二取心の所依處と爲ると。又即ち彼の所有諸纏の非理ある所引、彼の境界を緣ずる薩迦耶見の生起する執著及び彼の隨眠に於いて前の如く應に知るべし。云何んが應に引發する所なりや、謂く彼に住して能く永く薩迦耶見の三事の執著及び彼の隨眠を斷じ、聖諦智に於いてし、他緣を藉らざるなり。（三九）又若くは彼の應に徧知する所に依りて、正見轉ずる時、其の三處に於いて我の執著を起し及び隨眠あり、諸行の中の若くは（一）集若くは（二）沒に於いて善く知らざるが故に（三）處中の行に於いてすら尚ほ入ること能はず、況んや出離することを得んや。（四〇）若し現觀に隨順して正見住する時三事の中に於ける所有の我執をば皆な已に離繫せるも、猶ほ隨眠のために繫縛せらる。諸行の中の若くは集若くは沒に於いて能く善く知るが故に、（四一）二邊を遠離して處中の行に入り、未だ出離せずと雖も能く出離するに堪ふ。（四二）若し已に聖諦現觀を引發すれば正見に出るが故に三事の中に於いて我の執著

とは我執なり。

【三五】得る所の果とは我見の隨眠なり。

【三六】四取とは五蘊の中色蘊を除ける餘の四蘊なり。

【三七】四識住とは識蘊の依住する前四蘊にして色識住、受識住、想識住、行識住なり。

【三八】二取心とは能取所取なり。

【三九】順解脫分の正見を說く。

【四〇】順決擇分の正見を說く。

【四一】二邊とは斷、常の二の邊見なり。

【四二】見道の正見を說く。

無く、隨眠を遠離し、處中の行に於いて先づ趣入し已つて、後、此れに由るが故に方に出離することを得、當に知るべし是の如く三見轉ずる時此の差別ありと。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(四三)『速通と自體と智の境界と、流轉と喜足の行と流に順ふと、知斷の相と想と達糧を立つるとにして、師の所作等の品をば後に廣ず。』

(四四)未だ得ざる眞實究竟の解脫を證得せんと欲するが爲めに略して三法ありて能く速疾なる通慧を獲得せしむ、一には智力、二には不放逸力、三には數習力なり。智力とは、謂く若し彼に住して能く無間に永へに諸漏を盡すに堪ふるは、當に知るべし卽ち是れ有學の智見なりと。不放逸力とは、謂く已に是の如き智見を獲得し、卽ち是の如く得たる所の道に依り、方便し勤修して心に於いて惡不善の法を防護するなり。數習力とは、謂く卽ち此の方便勤修をば常に作し常に轉ずるに依りて(四五)終に、我れ今日に於いて諸漏を盡し心解脫するを得と爲んや、來日に於いてすと爲んや、後日に於いてすと爲んやと謂はず、(四六)此の邪思に由りて心をして厭倦せしむ、厭倦を無くし已つて便ち怯畏無く、怯畏を無くし已つて加行を捨てず、能く諸漏を盡すなり。問ふ、智と見と何の差別なりや。答ふ、若し過去及以び未來を照らし現見の境には非ざる

【四三】總頌十一門の中第三門速通を釋する別頌なり。此別頌の中復た十門を列し、長行に於て之れを釋す。

【四四】速通を釋す。速通とは速疾なり、通意を云ふ。

【四五】終に解脫を期せず。

【四六】解脫を期せざるを邪思と云ふ。

此の慧を智と名づけ、現在の境を照らす、此の慧を見と名づく。又所取を縁と爲る此の慧を智と名づけ、能取を縁と爲る此の慧を見と名づく。又聞思より成ずる所の此の慧を智と名づけ、修より成ずる所の者、此の慧を見と名づく。又能く煩惱を斷ずる此の慧を見と名づけ、煩惱斷じ已つて能く解脱を證する此の慧を智と名づく。又自相の境を縁ずる此の慧を智と名づけ、共相の境を縁ずる此の慧を見と名づく。又假りに施設するに由りて徧く彼彼の内外の行の中に於いて或は立つて我と爲し、或は有情、天、龍、藥叉、健達縛、阿素洛、掲路荼、緊捺洛、牟呼洛伽等を立て、或は軍林及び舍山等を立つ、是の如き等の世俗の理行を以て所知の境を縁ずる此の慧を智と名づけ、若し能く自相共相を取る此の慧を見と名づく。又諸法を尋求する此の慧を智と名づけ、既に尋求し已つて諸法を伺察する此の慧を見と名づく。又無分別の影像を縁じて境と爲す此の慧を智と名づけ、有分別の影像を縁じて境と爲す此の慧を見と名づく。又有色〔四七〕爾焔の影像を縁と爲す此の慧を見と名づけ、無色爾焔の影像を縁と爲す此の慧を智と名づく。彼れ是の如き若くは智若くは見を所依止と爲る方便に由りて修する時、復た更に四の善巧の事を勤修す、一には觀察の事、二には捨取の事、三には出受の事、四には方便の事なり。觀察の事とは、謂はく四念住なり、四顚倒を對治せんと欲するが爲めの故に如實に一切の境を徧知するが故なり。捨取の事とは、謂はく四正斷なり、不善法を斷除せんと欲するが爲めの故に及び諸の善法を修習せんが爲めの故なり。

【四七】爾焔(Jñeya)とは所縁亦は境界と譯す。

〔四八〕出受の事とは、謂く四神足なり、四靜慮に依りて〔四九〕次第に始め憂根より乃至樂〔根〕を超出するが故なり。方便の事とは、謂く諸の〔五〕根〔五〕力〔七〕覺支〔八正〕道支なり。當に知るべし卽ち是れ能く見修所斷の煩惱を斷ずる正方便なるが故なり。是の如く善巧の事を勤修する者は當に知るべし、〔五〇〕四種の所依能依の義ありと。所依の義とは、謂く觀行者正に勤めて修習するなり。能依の義とは、謂く諸の無漏法を學することを成就せるも、而も未だ清淨ならず、餘の無明の縠に纏裹せらるるが故なり。又彼の諸法は〔五一〕清淨道に由つて後方に清淨なり。此の清淨道に當に知るべし復た四種の差別ありと。一には正法を習近し正審に靜慮するなり、二には善友に親事するなり、三には尸羅、根護、少欲等の法を以て其の心を熏練するなり、四には獨り空閑に處し、奢摩他、毗鉢舍那の勝正なる安樂を用ゐて以て翼從と爲るなり。又清淨とは、謂く卽ち彼の清淨に依りて道を行じ、多く修習するが故に有學の法をして無明の縠を破つて無學地に趣かしむ。又眞實究竟の解脫を得んが爲めには當に知るべし略して五種の漸次ありと。一には先に資糧を集め以て依止を爲す、二には此を以て依〔止〕と爲して奢摩他、毗鉢舍那を修す、三には此を以て依〔止〕と爲して諦現觀涅槃の勝解を具ふ、四には此を以て依〔止〕と爲して劣少なる證に於いては喜足を生ぜず、亦た安住せず、厭ふ可き法に於い

【四八】出受とは五受を超出するを云ふ。
【四九】初靜慮にて憂根を、第二靜慮にて苦根を、第三靜慮にて喜根を、第四靜慮にて樂根を超出す。
【五〇】四種。四種の善巧に各所依能依の義あるが故に四種の所依能依と云ふ。
【五一】清淨道とは無學道なり。

て深く厭患を生ず、五には此を以て依「止」と爲して最後の金剛喩定相應の學心を證得す。

(五二)復た次に、五の因緣に由りて當に一切の自體は諸行皆な悉く無常なりと知るべし。(五三)謂く一切の自體は壽量に限あり、(五四)假使ひ人ありて自ら驗を祈らんと欲し、我れ今手を以て泥團或は牛糞團を執持し、能く幾時を經んと、是の願を作し已つて隨つて彼の團を取らんに、是の人爾の時情の所欲に任せて能く執つて捨てず、乃至後に於て棄てんと欲せば卽ち棄て、持たんと欲せば卽ち持つ、受くる所の必死の身は壽の盡くる際に至るも尙ほ已が所欲を遂げ、一刹那をも延ぶると能はざるが如きには非ず、況んや久住せんや。(五五)又一切の自體は因より生ずる所なるが故に、彼の因作るが故に、是れ無常なるが故なり。(五六)又自體廣大に興盛なれども終に磨滅に歸することありて而も得可きが故なり、謂く色界欲界に在る天人、大梵、帝釋、轉輪王等なり。(五七)又無倒なる阿笈摩に由るが故なり、謂く佛世尊諸の自體の無常なる法性に於いて現見し現證して宣說したまへるが故なり。(五八)復た三種の諸の受欲者の圓滿の差別あり、是の因緣に由りて諸の受欲者恆常に戲論す。何等をか三と爲す、一には資產圓滿、二には自體圓滿、三には廣大殊勝なる有情の供養圓滿なり。當に知るべし復た三種の因緣ありて能く是の如き圓滿の差別を得と。謂く(五九)施戒の諸根を調伏して倶行し、及び(六〇)欲

【五二】自體を釋す。
【五三】第一の因緣。
【五四】泥團を取捨するは自在なるも、延壽は能はざることを述ぶ。
【五五】第二の因緣。
【五六】第三の因緣。
【五七】第四の因緣。
【五八】第五の因緣。
【五九】資產圓滿の因。
【六〇】自體圓滿の因。

界の慈修より得る所の果〔なるが故に〕、(六一)慈を先導と爲し、慈を因處と爲し諸の有情に於いて損害寂靜の行相轉ずるが故なり。

(六二)復た次に、當る知るべし所知の事に於いて七種の如實に通達する智行ありと。一には已に得たる智、二には未だ得ざる智、三には顚倒無き智、四には(六三)是處非有を非有なりと知る智、五には(六四)是處所餘を不空なりと知る智、六には苦不淨の智、七には速に滅壞する智なり。又十五種の相に由りて諸行を覺了し、能く速に一切行の愚を斷滅す。何等か十五なりや。謂く(一)水界より生ずる所なるが故に、(二)無我は我に似て顯現するが故に、(三)(六五)隨欲に住せずして造作するが故に、諸の色は猶ほし聚沫の如しと覺了す、(四)(六六)三和合して生ずる相似の法なるが故に、(五)雲地雨の〔三〕和合する方便の如く、諸の受は喩へば(六)浮泡の若しと覺了す、所知の境に於いて(七)能く顯はし(八)能く燒き(九)能く迷亂せしむる相似の法なるが故に、諸の想は陽燄に同じと覺了す、(十)薩迦耶見の根本斷ずるが故に、(十一)多品の自體は因差別するが故に、(十二)刹那の量にして後時に暫らくも停まること無き相似の法なるが故に、諸行を覺了して芭蕉柱に譬ふ、(十三)(六七)有取の識は、(十四)四識住に依りて(十五)種種なる身體を發起し隨轉する相似の法なるが故に諸識を覺了し

【六一】有情の供養圓滿の因。
【六二】智の境界を釋す。
【六三】遍計所執の非有なるを非有なりと知る智。
【六四】依他起性の不空なるを不空なりと知る智。
【六五】人の欲求に隨はずして生滅造作す。
【六六】根境識の三和合するなり。
【六七】有取の識とは有漏の識と同じ。

て幻事に方ぶ。此の廣き分別は前の攝異門の名分の如し、應に知るべし。

（六八）復た次に、二の世間ありて一切の行を攝す、一には有情世間、二には器世間なり。有情世間を種類生死と名づけ、器世間を器生死を名づく。種類生死は其の餘の生死の法に同じからざるが故に器生死に望むるに當に知るべし略して五の不同分ありと。謂く器生死は共因より生ずる所なるも種類生死は但だ不共［因］のみに由る、是れを第一の因不同分と名づく。又器生死は無始終に於て前後際斷ずるも、種類生死は無始終に於いて相續し流轉して常に斷絶すること無し、是れを第二の時不同分と名づく。又器生死は或は火水風に斷壞せらるるも、種類生死は則ち是の如くならず、是れを第三の治不同分と名づく。又器生死は因永へに斷ずること無きも、種類生死は則ち是の如くならず、是れを第四の斷不同分と名づく。又器生死は斷じて復た續くも、種類生死は斷じ已れば續くこと無し、是れを第五の續不同分と名づく。又生死に於いて五種の相に由りて一切の愚夫は流轉して息まず、一には愛の因に由るが故に、二には愛の果に由るが故に、三には愛の自性に由るが故に、四には因展轉するに由るが故に、五には卽ち因展轉し依止して前際窮盡すること無きが故なり。此の中無明、是れを愛の因と名づけ、能く善趣惡趣に往く諸業、是れを愛の果と名づく。善趣に往く業に由るが故に愛結に繫がれて愚夫自然に往くことを樂ひ、惡趣に往く業に由るが故に愛鎖に繫がれて愚夫往くことを欲せずと雖も强ひ逼めて去らしむるなり。愛の自性とは、

【六八】流轉を釋す。

略して三種あり、一には後有の愛、二には喜貪俱行する愛、三には彼彼の喜樂の愛なり。是の如き三愛を略攝して二と爲す、一には有愛、二には境愛なり。後有の愛とは、是れを有愛と名づく。喜貪俱行する愛とは、謂く將に現前することを得んとする境界に於ける及び已に得たるも未だ受用せざる境に於ける、並に現前して正しく受用する境に於ける所有の貪愛なり。彼彼の喜樂の愛とは、謂く未來に希求する所の境に於ける所有の貪愛なり。當に知るべし此の中喜貪俱行する愛に由るが故に愛結に繫がると名づけ。後有の愛及び彼彼の喜樂の愛に由るが故に愛鎖に繫がると名づく。若し彼の事に於いて愛結に繫がるるを名づけて馳走と爲し、若し彼の事に於て愛鎖に繫がるるを名づけて流轉と爲す、又長世に於て因展轉して來り、諸行相續して前際知り難く後〔際〕窮盡すること無し。是の五相に由りて流轉す。愚夫は、當に知るべし、復五相に由りて縛せらると。一には彼の處に於て縛す、二には彼に由つて縛す、三には正に是れ能く縛す、四には彼に依るが故に縛す、五には領受する所あるなり。彼の處に於て縛すとは、謂く能く惡趣に往く業に由るが故に善趣の柱に於て之を繫縛し、或は能く惡趣に往く業に由るが故に惡趣の橛に於て之を繫縛するなり。又喜貪俱行する愛に由るが故に自事の柱に於て之を繫縛し、彼彼の喜樂の愛及び後有の愛に由るが故に自事の橛に於て之を繫縛す。（六九）自彼に由つて縛すとは、謂く愚夫異生無明の爲に縛せらるるなり。正に是れ能く縛すとは、謂く

【六九】自らの同類。能縛の苦は行者自身と同類なり、自苦を厭はざるが故に自苦能く自身を縛す。

らの同類にして苦に於いて厭ふこと無き、相似の法なるが故なり。彼れに依るが故に縛すとは、謂く後の「五」蘊に依りて縛せらるるが故なり。領受する所ありとは、謂く彼の生等の衆苦を領受するなり。

(七〇)復た次に、愚夫異生は有漏の事に於いて四の喜足あり、當に知るべし多分は是れ諸の外道なりと。何等をか四と爲す。一には人身に於いて喜足し、二には欲界天身に於いて喜足し、三には梵世に生ずるに於いて喜足し、四には邊際の有頂に到ることに於いて喜足す。愚夫彼に於いて其の次第に隨つて、若くは趍り、若くは住し、若くは坐し、若くは臥するなり。復た五種の一切愚夫の愛の行く所の路あり、一には後有、二には未來に求むる所の境界、三には將に現前することを得んとする境界なり。當に彼に於いて其の次第の如く趍る等の差別を知るべし。應に知るべし此の中趍るに二種ありと、一には後有に於いてし、二には未來に求むる所の境界に於いてするなり。復た四種の愛の行く所の路あり、一には意業にて希求する境界、二には身語の二業、三には獲得、四には所得の中に於いて其の所欲に隨つて若くは轉じ、若くは習ふなり。此は是れ業を發する愛の行く所の路にして、若くは境界或は復た諸有を求む。當に知るべし彼の四種の行路に於いて其の次第の如く趍る等差別すと。趍る等を說くが如く餘の所說の諸の有漏の事に於ける所有の喜足の愛の行く所の路に喜樂と戲論と染著と耽湎との四處差別すること其の次第の如く、

【七〇】喜足の行を釋す。

當に知るべし、亦た爾なりと。復た二種の遊愛行路の果相の差別なり、一には心の差別、二には身の差別なり。心の差別とは、復た二種あり、一には品類の差別、二には雜染の差別なり。品類の差別とは、謂く自性に由るが故に、所依なるが故に、所緣なるが故に、助伴なるが故なり。雜染の差別とは、謂く貪瞋癡等の所有煩惱及び隨煩惱に由るなり。身の差別とは、亦た二種あり、一には(七一)種種なる身の差別なるが故に、二には(七二)一種の身の差別なるが故なり。當に知るべし此の中心の所有の雜染の差別は能く二種の身の差別の因と爲ると。彼を斷ぜんが爲めの故に諸の修行者は應に無倒に數數作意するを以て觀行を勤修すべし。復た四種の因の差別に由るが故に果をして差別せしむ。謂く若くは(一)此に於いて差別し、若くは(二)此に由りて差別し、若くは(三)即ち此れ差別し、若くは(四)此の如く差別す。此に於いて差別すとは、謂く善趣惡趣に於ける所有の差別なり。此に由りて差別すとは、謂く貪瞋癡の染汙する所の心に由りて、彼れをして差別せしむるなり。即ち此れ差別すとは、謂く(七三)五種の行に攝受する所の身の種種なる差別なり。此の如く差別すとは、謂く諸行の流轉する雜染淸淨の因緣及び淸淨の體に於いて如實に知らずして、喜樂等及び趍走等の種種の差別を生ずるなり。

(七四)復た次に、能く諸行の無常なることを了達せず、薩迦耶見を所依止と爲して流に順つて行く。諸の愚夫の類は五種の相に由りて當に知るべし流に順つて漂溺せらると。謂く若くは(一)此に於い

【七一】欲界の五趣の身。
【七二】色界一趣の身。
【七三】五種の行とは五蘊を云ふ。
【七四】流に順ふことを釋す。

て漂溺し、若くは(二)此れに由りて漂溺し、若くは(三)此れに依りて漂溺し、若くは(四)此の如く漂溺し、若くは(五)漂溺する時の諸の所有相なり。此に於いて漂溺すとは、謂く善趣惡趣に於いて漂溺せらるること兩岸より彼此往來して倶に漂溺せらるるが如し。此に由りて漂溺すとは、謂く愛河浸淫の性に漂溺せらるるに由る。當に知るべし此の愛に五種の相ありと。一には諸の境界に遊び下分に趣くが故に、二には微細に隨行して覺了し難きが故に、三には諸の境界に於いて廻轉し難きが故に、四には乃至有頂まで一切廣大なる種種の諸行に隨逐する所なるが故に、五には不寂靜の相身心を亂すが故なり。此れに依りて漂溺すとは、謂く（七五）色等の五種の諸行に依りて漂溺せらる、即ち善趣惡趣の兩岸に於いて五種の行の品類差別ありて數數攀緣し、流に順つて漂溺す。此の如く溺漂すとは云何んが漂溺する。謂く諸行に於いて前に說ける所の如き（七六）流轉等の事をば其の次第に隨つて如實に知らずして或は計して我及び我所と爲すが故なり。漂溺する時に於ける所有相とは、謂く彼れ是の如く漂溺せらるる時身を寶として愛し長久ならしめんと欲すと雖も、自性滅するに由りて住せしむること能はざること漂溺せらるるが如し。此れと相違するは當に知るべし即ち是れ流に逆つて行く者なりと。又聰慧の者に十種の相あり、當に知るべし、具に諸の聰慧の相を攝すと。謂く(一)倶生の慧を成就するが故に、又(二)方便の聞思修より成ずる所の慧を成就するが故に、又(三)成熟するが故に、動搖すること無きが故に、善く

【七五】色等の五種とは五蘊なり。

【七六】五種の流轉の相。

所思を思ひ善く所説を説き善く所作を作す、又(四)能く自ら己が所有の性に依りて未だ嘗て命の爲めにも他に依附せず、又(五)求むる所あらんに安樂ならざる無く、又(六)求むる所あらんに能く正行に依り皆な悉く法を以てし非法を以てせず、又(七)自らの宜しき所の資産の衆具をば能く正に防守して散失せしめず、又(八)過患を觀て之を受用し、又(九)病縁に於ける所有の醫藥をば觀察し思擇して然して後服行す、又(十)能く善く非時の死縁を避く。是の如き十種の聰慧の者の相は當に知るべし具さに諸の聰慧の相を攝すと。

(七七)復た次に、諸行の中に於いて無我の理に依りて(七八)知る者(七九)斷ずる者は當に知るべし略して三相の差別に由ると。謂く諸行に於いて能く徧く薩迦耶見を了知するも而も未だ斷ぜざる者は、彼れ諸行に於て忘念の行多分に現行して少かに不忘念なり。薩迦耶見をば已に永く斷ぜる者は當に知るべし其の相彼と相違すと。是れを第一の差別の相と名づく。又諸行に於いて徧く薩迦耶見を了知すと雖も而も未だ斷ぜざる者は、諸の廣大なる可愛の事の中に於て多く喜樂を生じ、諸の下劣なる不可愛の境に於いて多く憂苦を生ず。彼の二の境界現在前する時縱逸無き者すら尚ほ自ら正念を繫守すること能はず、況んや縱逸なる者をや。彼れ爾の時に於いて薩迦耶見[もて]其の心を纏繞し、彼に由りて心をして解了すること能はざらしむ。薩迦耶見をば已に永く斷ぜる者は當に知るべし其の相彼れと

【七七】知斷の相を釋す。
【七八】知る者とは無我を知る者なり。
【七九】斷ずる者とは我執を斷ずる者なり。

相違すと。是れを第二の差別の相と名づく。又諸行に於いて薩迦耶見をば未だ永く斷せざる者は未だ内の一切の行の中に於いて現前し安立し、(八〇)有情想を離るること、草木葉等の外事に於けるが如くなるを得ず。薩迦耶見已に永斷する者は當に知るべし其の相彼と相違すと。是れを第三の差別の相と名づく。是の如く已に薩迦耶見を斷ぜるに此の三種の差別の相あり。當に知るべし復た三種の勝利ありと。一には永く能く後有を感ずる一切の煩惱を斷ず。二には彼に依りて久しからずして速に能く(八一)彼の對治道を積集することを獲得す。三には既に自らの義利を作し已つて卽ち彼の道に依りて方便勤修し現法樂住し、此に由りて極安樂住を獲得するなり。

(八二)復た次に、四の差別に由りて當に知るべし一切種の行の無常苦想を修習すと。何等をか四と爲す。一には果の差別の故に、二には自性の差別の故に、三には品類の差別の故に、四には方便の差別の故なり。果の差別とは、謂く此の想を修し能く一切の(八三)欲貪、色貪及び無色貪、掉、慢、無明を遣るなり。當に知るべし此の中(八四)三種の「根」本煩惱の斷を顯示し、及び(八五)三種の隨煩惱の斷を顯はすと。欲貪の煩惱は掉を助伴と爲し、色貪の煩惱は慢を助伴と爲し、無色貪の惑は無明を作と爲す。復た差別あり、謂く此の中に於いて(八六)下分上分の結盡くることを顯

【八〇】有情想とは我想なり。
【八一】彼の對治道とは煩惱を治する道なり。
【八二】想を釋す。
【八三】欲貪とは欲界の貪煩惱なり、色貪、無色貪准知。
【八四】三種の根本煩惱とは欲貪色貪、無色貪なり。
【八五】三種の隨煩惱とは掉、慢、無明なり。
【八六】欲貪は五下分結に攝し、色貪、無色貪、掉、慢、無明は五上分結に攝す。

示す。自性の差別とは、謂く此の中に於いて正に聞より成ずる所の慧を修習するに由りて說いて親近すと名づけ、正に思より成ずる所の慧を修習するに由りて能く修に入るが故に說いて修習すと名づけ、正に修より成ずる所の慧を修習するに由りて多く修習すと名づく。又了相作意を修習するに由るが故に親近すと名づけ、唯だ加行と究竟との作意を除いて、正に諸餘の作意を修習するに由るが故に修習すと名づけ、加行と究竟との作意を修習するを多く修習すと名づく。是れを第二の三種の差別と名づく。又所依、所緣、作意に由り、其の次第に隨つて當に知るべし是れを名づけて乘と爲し事と爲し隨つて建立すと爲すと。又長時に串ひ修習するに由るが故に說いて純熟すと名づけ、數數無倒に方便を修するが故に說いて善く受く及與び善く發すと名づく。品類の差別とは、謂く是の如き無常想を修する時速に能く永く一切の隨眠を拔き、下地の一切の善法を棄捨して上地の一切の善法を攝受し、餘の一切の不淨想等の最も高廣なる性に於いて能く善く住持す。徧く一切を行ずること猶ほし所取の事を觀察するが如し、卽ち是の如く能取の事を觀じて彼の相を解脫し、能く無漏無常の想を得。若くは有漏想、是の如き一切は皆な涅槃に於いて善く能く隨順し趣向し臨入し、皆な能く無明の大闇を對治し、一切永く斷す。永く彼を斷ずるが故に清淨鮮白なり、諸の無學の想は皆な一切の無漏[有]學の想の增上に由るが故に得るなり。方便の差別とは、謂く獨り空閑に處して無顚倒に數數作意するを以て、諸行は無常の性なりと觀察し、無常の想に由りて無我の想に住し、見道の中に於いて既に無漏の無我

の想に住し已つて上の修道に於いて有學の想に由りて永く我慢を害し、（八七）涅槃を隨得する二種皆な具するなり。

（八八）復た次に、涅槃に住せんが爲めなるも仍は未だ善き資糧を積集せざる者には略して五種の資糧に違する法あるなり。一には往昔の笑戲歡娛承奉等の事を憶念し、思慕俱行する作意を發し愁歎を生ずる等に因る。二には彼の種種なるを［所］依と爲るに由りて領受する所の究竟法の中に於いて多く忘念を生じ、諸法に於いて能く顯了ならざらしむ。三には食ふ所或は過ぎ或は少く此れに由りて身をして沈重羸劣せしめ、諸の梵行に於いて修行することを樂まず。四には眠ることを喜んで斷ずることを串習せず、便ち上品の睡眠の爲めに纒はる。五には猥雜に親近して住し、諦に正法を思ふ加行を遠離す。是の如き五種は資糧に違する法なり。

復た次に、五種の彼れに隨順する法あり。一には二の離欲に於いて猶は未だ離るること能はずして一種の欲に隨ふ、［二の離欲とは］謂く諸纒の遠分に於いて離欲し善品を勤修し及び隨眠に於いて永へに害し離欲して正しき對治を得るなり。二には根門を護らず。三には食するに量を知らず。四には初夜後夜に勤修し、勉勵し警覺すること能はず。五には善法を觀察し究竟すること能はず。上と相違するを當に知るべし是れを資糧に順ずる法及び能く彼に隨順する隨順法と名

【八七】 涅槃を隨得す。涅槃に隨順するは方便道、涅槃を得るは卽ち無學道なり、此方便道及び無學道の二種具足して涅槃を證得す。

【八八】 資糧を立つることを釋す。

づくと。又諸の聲聞是の如き資糧に順ずる法及び彼の因緣を修行し、其の中間に於いて涅槃を求むる時、大師彼れが爲めに五種の正道の言教を制立したまふ。一には聞く所の法の如く徧く一切に於いて諸行は無常なり、諸法は無我なり、涅槃は寂靜なりと觀察するに由り、依つて且らく世間の作意を以て惑無く疑無きを得。二には卽ち住する時に於いて三事に著せず、正しく尋思せず。何等か三事なる。一には資命の衆具、二には他の損害する相、三には或は他の毀罵、或は一の非愛あつて現行するに隨ふ同梵行者の不同分法なり。三には敎授を先と爲し、他の音に由り依つて如理に作意し、能く正見を生じ、能く邪見を斷ず、當に知るべし此の三是れを住時の正道の言教と名づく。復た二種の彼の行時に於ける正道言教あり、謂く諸の有智の同梵行者は彼れが爲めに處非處を宣說する時忿恚を生ぜず、又麤弊の資命の衆具を若くは得「若くは」得ざるに由り及び戒等の所有災害に由るも、心に熱惱せざるを、是れを第一と名づく。所得の勝れたる利養恭敬に於いて心悒然ならざるを、是れを第二と名づく。彼れ是の如く住時行時に能く正しく涅槃の妙道を修行するに由り、此に由りて久しからずして當に涅槃を得、終に毀失すること無かるべし。

(八九)復た次に、大師諸の聲聞に於けるや略して五種の師の作す所の事あり、一には(九〇)正しく折伏す、二には(九一)正しく攝受す、三には正しく訶責す、四には正しく(九二)雜染を說く、五には正しく(九三)清

【八九】師の所作等の品を釋す。
【九〇】正しく邪道を折伏す。
【九一】正しく正道を攝受す。
【九二】雜染とは苦集二諦也。
【九三】清淨とは滅道二諦也。

淨を說くなり。

復た次に、この因緣に由りて諸の諍事に於いて違越せるを聲聞は（九四）覆相して彼の所諍の事を記別す、一には（九五）擾亂增廣するが故に、二には（九六）律と相應するが故なり。

復た次に、七の因緣に由りて大師は諸の聲聞衆を驅擯す、一には一切種皆な邪行を行ずるを見るが故に、二には彼の多分「邪行する」を見るが故に、三には彼の衆首上座なる（九七）阿遮利耶（九八）鄔波柁耶の方便に由「りて邪行す」るが故に、四には共住するに堪へざるが故に、五には「餘處に於いて」驅擯せられたるが故に、六には現前の過を避くるが「ための」故に、七には未來の過を生起せざらしむるが故なり。

復た次に、十の因緣に由りて如來は聚落に入りて乞食したまふ。一には當に杜多の功德を顯はすべきが故に、二には彼の一分を引きて乞食に入らしめんと欲するが爲めの故に、三には同事行を以て彼の一分を攝せんと欲するが爲めの故に、四には未來の衆生の與めに大照明を作らんが爲めの故に乃至彼をして暫く觸證を起さしむるが故に、五には彼の麤弊なる勝解の諸の外道を引かんと欲するが爲めの故に、六には彼れ聲を承けて謗を起すが爲めの故に妙色寂靜なる威儀を現じて其をして驚歎し、心に歸向を生せしむ

【九四】覆相とは草の地面を覆ふが如き相なり。
【九五】擾亂增廣するを恐るが故に記別す。
【九六】覆相して記別するは律と相應するが故なり。
【九七】阿遮利耶（Ācārya）は教授、師範、規範と譯す。
【九八】鄔波柁耶（Upādhyāya）は親教師、依止師と譯す。

るが故に、七には彼の處中の衆生は其の少功を以て多福を樹つるが爲めの故に、八には壞信放逸なるものをして深く恥愧を生ぜしめんが爲めには小功を用ふると雖も、而も大福を獲るが故なり、放逸なる者の爲めにするが如く懈怠なる者にも亦た然なり、九には彼の盲聾顚狂心亂の衆生の種種なる災害をば皆な靜息せしめんが爲めの故に、十には無量無邊なる廣大の威德［ある］天、龍、藥叉、健達縛、阿素洛、揭路茶、緊捺洛、牟呼洛伽等をして如來に隨從して入る所の家に至り、深く羨仰を生じ、勤めて賓衞を加へ、惱害を爲さざらしめんが爲めの故なり。

復た次に、八の因緣に由りて如來は寂靜天に入りて住したまふ。一には雜住を樂ふ者を引いて遠離に入らしめんが爲めの故に、二には同事行を以て遠離者を攝せんと欲するが爲めの故に、三には自ら現法樂住を受くるが故に、四には大族の諸天と亦た同じく集會せんが爲めの故に、五には佛眼を以て十方世界を觀察し、大神化を現じ、其の所應に隨つて饒益の事を作さんが爲めの故に、六には諸の聲聞衆をして如來を見たてまつるに於いて深く渴仰を生ぜしめんが爲めの故に、七には諸の大聲聞は略說する所に於いて善く能く悟入することを顯はさんが爲めの故に、八には勸めて戲論に樂著し、言辭を制作することを捨てしむるが［爲めの］故なり。

復た次に、五種の相に由りて大師は諸の聲聞衆を攝受したまふ。一には法を以ての故に、二には財を以ての故に、三には依止の與めの故に、四には初めて攝受するが故に、五には擯し攝受するが故な

り。

復た次に、七の因緣に由りて釋梵天等は如來の所に往く。一には如來を供養したてまつらんが爲めの故に、二には正法を聽聞せんが爲めの故に、三には生ずる所の疑を決せんが爲めの故に、五には他を愍み饒益を爲さんと欲するが爲めの故に、六には如來の聖教を愛重するに由るが故に、七には如來世俗の心を起して會に趣かしめんと欲すと知るが故なり。

復た次に、五種の相に由りて當に一切の初新の者の性を知るべし。一には晩き出家に由るが故に、二には幼き出家に由るが故に、三には少き出家に由るが故に、四には(九九)勞策の出家に由るが故に、五には(一〇〇)受具の出家に由るが故なり。

復た次に、三種の相に由りて惡作を生起す。一には所學に違越せる增上の故に、二には誓つて法律を受けたる增上の故に、三には居家を棄捨せる增上の故なり。

復た次に、如來將に諸の聲聞の爲めに正法を宣說せんと欲せば四種の相を現じたまふ。一には極下座より安庠として起つて極高座に上り、儼然として坐したまふ、二には說法に隨順する威儀に安住したまふ、三には謦欬音を發し、將に說法せんとすることを示したまふ、四には面目顧視したまふこと龍象王の如し。

【九九】勞策。沙彌(Śrāmaṇera)の譯語、沙彌としての出家を勞策の出家と云ふ。

【一〇〇】受具の出家とは具足戒を受けたる出家なり。

復た次に、犯戒の聲聞は當に三處に於いて安住し、大師の所に往くことを慚羞すべし。一には深く己が犯を知るを增上處と爲す、二には師事するに儀を失することを增上處と爲す、三には事乖けるに由りて則ち當に方便を以て威儀を調順して大師の所に往くべきことを增上處と爲す。

復た次に、三種の相に由りて應に正に犯戒の聲聞を訶責すべし。一には曰く汝は甚だ鄙劣にして活命すと、二には曰く汝が意樂は清淨ならずと、三には曰く汝は活命の意樂を以て非法の行を行ずと。

復た次に、善說の法毘柰耶の中に於いて略して六相に由り、當に知るべし、徧く一切の邪行を攝すと。一には現行の過失の故に、二には意樂の過失の故に、三には加行の過失の故に、四には智慧の過失の故に、五には尋思の過失の故に、六には依止の過失の故なり。現行の過失とは、謂く貪纏に由るが故に、瞋纏に染〔著〕するが故に憎み、旣に猛利なる貪瞋等を懷くが故に遂に羞恥無く、羞恥無きが故に惡に住して捨てざるなり。意樂の過失とは、謂く染〔著〕する者の邊に於いては此の貪の意樂を最も下劣と爲し、是の如く憎む者の邊に於いては此の瞋の意樂を最も下劣と爲す。加行の過失とは、謂く或は精進を發せざるあり、或は精進して慢緩なるあり。智慧の過失とは、謂く或は聞思より成ずる所の慧の中に於いて正念を忘失し多く愚癡に住し、修より成ずる所に於いて心寂定ならず。尋思の過失とは、謂く居家に隨順する所有の惡に於いて善く覺らず多分に尋思し、正しき法律に於いて其の

心錯亂するなり。依止の過失とは、謂く彼れ其の往昔に於いて修習せざる因に依止し、修習せざる因に由るが故に自性の微褊なる小信を成就し、自性小戒を修し住することを成就し、自性小念に住し守ることを成就し、自性の俱生の小慧を成就するなり。

復た次に、四種の相に由りて能く彼の人をして聖教に入らしむと雖も而も邪行を行ぜしむ。一には微劣不淨なる意樂に由るが故に、二には聖教の瑕隙を伺求して正法の賊と爲るに由るが故に、三には專ら飮食、衣服、活命の爲めにする因緣に由るが故に、四には王賊債主の加ふる所の迫切を怖畏するに由るが故なり。若し是の如き諸の邪行を行ずる者は便ち二事に於いて稽留する所あり、一には在家の自義を失壞して稽留し、二には出家の自義を失壞して稽留す。

復た次に、是の如き邪行に二の因緣あり、謂く三事に於いて正しく尋思せざると及び彼の前行の諸の不正なる想なり。〔一〇一〕其の三事とは、前の如く應に知るべし。彼に於いて諸の不正なる想を發起し相好を隨取し、斯れより已後其の隨法に於いて多く隨つて尋思し、多く隨つて伺察す。

復た次に、是の如き邪行の因緣を斷せんが爲めに當に知るべし亦た二種の對治ありと。一には不正なる尋思を斷せんが爲めに顚倒無きと數數なるとの二行を以て〔一〇二〕諸の念住に於いて善く其の心を

【一〇一】其の三事とは前に說ける資命の衆具等の三事なり。

【一〇二】諸の念住とは四念住なり。

住せしむ、二には諸の不正なる想を斷せんが爲めに無相心の三摩地を修習す。此の對治を修するは要らず彼の對治を修する中に於ける猛利なる樂欲に由りて方に成辦することを得、彼の樂欲猛利ならざる者には非ず。此の猛利なる欲は二緣に由りて生ず、謂く(一)此の對治に大果あるが故に、(二)一切の諸の外道に共せざるが故なり。大果ありとは、謂く修習する時便ち能く無相心定を剋證し、及び〔一〇三〕二界の妙甘露門所謂斷界及び無欲界、若くは有餘依及び無餘依に住するなり。此に安住する者は二涅槃に近づく。未だ今時に於いて一切皆な得ざるを不共なりと言ふは、謂く無相定は唯だ〔一〇四〕內法のみにありて諸の外道には無し。何を以ての故に、彼の外道は若し所得あれば即便ち增益して量の如く觀せず、若し所得無ければ即ち妄りに分別するに由り、我見に由るが故なり。諸行に於いて愚にして或は唯だ身或は唯だ〔一〇五〕無色に於て或は總じて二に於て我を生じて執著し我を執するを以ての故に、我は當に無なるべしと謂つて便ち二涅槃に於て心に欣樂せず、尙ほ未だ入ること能はず、況んや安住せんや、唯だ驚怖を增すのみにして其の心退還す。內法に住する者は彼れと相違し、般涅槃に於いて心に退轉すること無く、唯だ苦滅なるのみなりと了し、唯だ靜德なるのみなりと見る。若くは諸の有學は唯だ〔一〇六〕內の滅のみを祈りて道を生ぜんが爲めに更に他より敎授敎誡を求むるには非ず、若くは諸の無學

【一〇三】二界とは斷界及び無欲界なり。妙甘露門とは有餘依涅槃及び無餘依涅槃なり。

【一〇四】內法とは內道即ち佛敎なり。

【一〇五】無色とは心のこと。

【一〇六】內の滅とは內心の煩惱滅すること。

は唯だ内の滅を欣んで終に更に（二〇七）諸の煩惱を盡すことを求めず、唯だ先因より生ずる所の諸行のみあり任運に滅に歸して般涅槃す。

【二〇七】諸の煩惱 こは所知障の煩惱を云ふ。

卷の第八十七

攝事分中契經事行擇攝第一の三

復た次に、嗢柁南に曰く、

(一)『因と勝利と二智と、愚夫の分位の五と、二種の見の差別と、斯の聖教等に於けるなり。』

(二)一切行の因に略して二種あり、一には共、二には不共なり。共因とは、謂く喜を先因と爲す、此の喜に由るが故に彼彼の生處に於いて厭離することを障へ、自體を滋潤す、將に所生の處に生ぜんと欲するが爲めには、一切の煩惱の因たるありと雖も、而も生處に於いて喜を生ずる者は生ず、彼に於いて厭逆の想を起す者には非ず。又卽ち(三)此の喜は唯だ色に依りて宿因と說く、生じ已つて餘因の究竟するを待たずして轉ずるが故なり。不共因とは、謂く苦、樂、非苦樂に順ずる觸を受等の所有心法に望め、(四)無間滅の意及び(五)俱生の名、(六)十種

【一】總頌十一門の中第五門因を釋する別頌なり。此の別頌の中復た六門を列し、長行に於て次第に釋す。

【二】因を釋す。

【三】色は但だ宿世の善因あつて則ち生ずるを以て、受蘊の更に觸の緣に藉り、識名色に藉つて方に生起することを得るに同じからず。

【四】無間滅の意とは意根卽ち前滅の六識なり。

【五】俱生の名とは受、想、行の三蘊の心所なり。名とは心法の義なり。

【六】十種の色等とは五根及び五境なり。

の色等を六種の識に望むるに彼は先因より生ずる所なりと雖も、刹那刹那に別に餘因を待つて方に生起することを得るに由る。

(七)復た次に、解脫心あり淨智見ある諸の阿羅漢には四の勝利あり、當に知るべし、諸の外道と共せずと。一には行の時に於いては(八)恆常にして住する性なり、二には住の時に於いては(九)無相にして住する性なり、三には(一〇)往昔の因より生ぜる所の諸行任運に滅に歸す、四には(一一)後有の行今の因斷ずるが故に當に復た生ぜざるべし。是の如き四種の勝利を證するが爲めに(一二)三の漸次あり、謂く(一)學智見を依止と爲るが故に(一三)厭離を得たる者は諸行の中に於いて喜樂を生ぜず、乃至耽湎を生ぜずして住し、厭離を先と爲して(一四)離欲を得、(二)離欲を先と爲して(一五)心善く解脫し、斯より已後卽ち是の如く心善く解脫するに由りて恆常にして住す、故に傾ずる無く違ふ無し。

又行の時に於いて、或は住の時に於いて一切の相に於いて復た作意すること無く、無相界に於いて作意し思惟し無相にして住す、能障此の一切の見趣に於て先づ已に永へに斷ぜり、況んや當に「障」礙を爲すべけんや。彼れ是の二の若くは行、若くは住、乃至壽盡くるに由り

【七】勝利を釋す。
【八】有餘涅槃に住する性なり。
【九】無餘涅槃に住する性なり。
【一〇】過去因の果たる現身滅し無餘涅槃に入る。
【一一】未來を引く現在の因滅するが故に後身を生ぜず無餘涅槃に入る。
【一二】三の漸次とは見、修、無學の三道の次第を云ふ。
【一三】厭離とは見道なり。
【一四】離欲とは修道なり。
【一五】心善く解脫すとは無學道なり。

て便ち無學の內般涅槃を以て般涅槃し、先より生ぜる所の（二六）有今に於いて永へに盡き、當來の諸行復た更に生ずること無し。

又三分に由りて當に薩迦耶見を建立して以て根本と爲る一切の見趣を知るべし、一には前際に倶行するに由るが故に、二には後際に倶行するに由るが故に、三には前後際に倶行するに由るが故なり。前際に倶行すとは、謂く一あるが如き是の思惟を作さく、我は〔過〕去世に於いて曾て有りしと爲んや、曾て無かりしと爲んや、曾て是れ誰れなりしと爲んや、云何にして曾て有りしやと。後際に倶行すとは、謂く一あるが如き是の思惟を作さく、我は來世に於いて當に有るべしと爲んや、當に無かるべしと爲んや、當に是れ誰れなりと爲んや、云何にして當に有るべきやと。前後際に倶行すとは、謂く一あるが如き是の思惟を作さく、我は曾て有りしや、誰れなりしや、誰れか當に有り我れなるべきや、今此の有情何れの所よりか來り、此に於いて沒し已つて何れの所にか去り至るやと。

又諸の外道は薩迦耶見を以て根本と爲して（二七）六十二の諸の惡見趣あり、謂く四の常見論、四の一分常見論、二の無因論、四の有邊無邊想論、四の（二八）不死矯亂論なり。是の如き十八の諸の惡見趣は是れ前際を計して我を說く論者なり。

【二六】有とは生のこと。

【二七】六十二の諸の惡見趣とは次下の十八と四十四との惡見趣なり。六十二見は本地分及び決擇分に於て既に釋せり。

【二八】一外道不死を說き他の人其理を詰問すれば答ふること能はず、餘事に託して矯亂して之を避けて答へず、是れを不死矯亂論と云ふ。

又十六の有見想論、八の無想論、八の非有想非無想論、七の斷見論、五の現法涅槃論あり、此の四十四の諸の惡見趣は是れ後際を計して我を說く論者なり。是の如く後際を計度する論者をば略攝するに五あり、一には有想論、二には無想論、三には非有想非無想論、四には斷見論、五には現法涅槃論なり。是の如き五種をば復た略して三と爲す、一には常見論、二には斷見論、三には現法涅槃論なり。

又此の一切の諸の惡見趣をば六の因緣に由りて建立することを得、一には因緣に由るが故に、二には教に依るに由るが故に、三には靜慮に依るに由るが故に、四には世に依るに由るが故に、五には諸見に依るに由るが故に、六には生處に依るに由るが故なり。

因緣に由るとは、謂く彼の一切の薩迦耶見を以て因緣と爲すなり。

教に依るに由るとは、謂く彼の能く見趣を顯はす不正なる法藏に依り師弟傳聞し、展轉相ひ授くるを方便と爲すに由るが故なり。

靜慮に依るに由るとは、謂く靜慮を依止と爲るを以ての故に先に聞ける所先に信解せる所に於いて決定を得るなり。

又此の靜慮に復た二種あり、一には(一九)宿住隨念と倶行し、二には得る所の天眼と倶行するなり。

宿住隨念と倶行すとは、謂く前際を計する(二〇)三の常論の中下中上の淸淨の差別に由り、及び四種の

【一九】宿住隨念とは過去世を憶念するを云ふ。

【二〇】三の常論とは四種の常見の中の前三見なり。

邊無邊論に於いて彼れ諸の器世間の成壞の兩劫の出現の方便を憶念するに由る。若し時に成劫の分位を憶念せば爾の時便ち【二】三種の妄想を生ず。【三】若し一向に上下を憶念することあれば下は無間捺落迦の下に至り、上は第四靜慮の上に至るまで是の如き分量の邊際を憶念し、便ち世間に於いて有邊の想に住す。若し一向に傍に無際を憶することあれば、便ち世間に於いて無邊の想に住す。若し二種を憶念すること倶行するあれば、便ち世間に於いて二倶なる想に住す。若し時に壞劫の分位を憶念せば爾の時便ち非有邊想非無邊想に住す、諸の器世間所得無きが故なり。復た諸の靜慮に依止することあるが故に當に知るべし或は一分常論を説き、或は無因論を説き、或は不死矯亂論を説くと。應に知るべし此の中二の淨天ありと。一には不善清淨、二には善清淨なり。若し唯だ能く世俗定に入れば當に知るべし是の天は不善清淨なり、諸諦の中に於いて了達せざるが故に、其の心未だ善解脱を得ざるが故なりと。若し能く内法定に證入すれば當に知るべし是の天を善清淨と名づく、諸諦の中に於いて已に了達せるが故に、其の心已に善解脱を得たるが故なりと。當に知るべし無亂に亦二種ありと。一には無相無分別、二には有相有分別なり。此の中第一は是れ善清淨天、第二は是れ不善清淨天なり。前の清淨天は自らの不死無亂に於いて轉ず、是の故に説いて不死無亂と名づく。後の不清淨は若し不死無亂に依るとあらんに、詰問せらるることあれば便ち餘事に託して矯亂して之を

【二】三種の妄想とは前の三種の常見論を云ふ。

【三】以下四種の邊無邊論を起すことを説く。

避け、諸諦に於ける無相心定善巧ならざるを以ての故に先づ心慮を興し是の思惟を作さく、我等既に不死無亂と稱するも復た〔三三〕所餘の不死無亂あり、諸の聖諦に於ける無相心定已に善巧なるを得、彼の成ずる所の德を我に望むるに勝れたりと爲す。彼れ若し中に於いて我に詰問せば我れ若くは記別し、或は爲めに異記し、或は〔三四〕實有を撥し、或は〔三五〕非有を許さんと。彼れ記別に於いて是の如き等の諸の過失を見已つて、是の思惟を作さく、我れ一切の詰問せらるる中に於いて、皆な應に記すべからずと。

又是の中に於いて餘過有るを見る、謂く他のもの此に由りて我が無知の因を鑑み、則ち不死無亂を輕笑すれば諂を行ずる者ありて是の思惟を作さく、我れ此の中に於いて應に是の如く記すべし、我が淨天は一切隱密にするには非ず、皆な記別することを許す、謂く自らの所證及び清淨の道なりと。是の如く思ひ已るが故に詭言を設けて相矯亂す。彼れ既に是の如く邪なる思惟に住し、徧く其の心を彼の最上なる清淨天の所に布くが故に。我れは是れ不死無亂なりと稱し、恐怖を懷くに由りて記別する無く、我が劣味なることを他の爲めに知らるること勿れと。是の因緣に由りて解脫すること能はず、此を以て室と爲して自ら安處す。

又愚戇にして〔三六〕止行を專修するあり、其の諂詐の方便を以て矯つて亂言を設くると能はず、但だ

〔三三〕善清淨天の不死無亂。
〔三四〕不死の實有なることを撥す。
〔三五〕不死の非有なることを許す。
〔三六〕止行とは奢摩他行なり。

是の思を作さく、諸有の來りて問はば我れ當に反詰すべく、彼れの答ふる所に隨つて我れ當に一切言ふが如くにして滅ずること無くして之に印順すべしと。是の計度に差別あるに由るが故に四種を建立す。

世に依るに由るとは、謂く過去及び現在世に依りて分別を起すが故に前際を計すと名づけ、未來世に依りて分別を起すが故に後際を計すと名づく。

諸見に依るに由るとは、謂く三見に依る、前の如く應に知るべし。初見に依るに由つて現法の中に於いて我は有色なりと計し、後には或は有色有想なり或は無有想なり或は非有想非無想なりとす。第二の見に依りて現法の中に於いて我は無色なりと計す、後に於いて計する所は前の如く應に知るべし。第三の見に依る我論に二あり、一には我の有色無色なるを說き、二には我の非有色非無色なるを說く、餘は前に說けるが如し。

又即ち我は是れ有色なりと計する者は或は〔我は〕狹小なりと言ひ、或は〔我は〕無量なりと言ふ、我の無色なるを計するも當に知るべし亦た爾なりと。此の二我論は第三の見に依りて立てて二論と爲す、一には我の狹小なるを計し、二には我の無量なるを計す。是に由りて四種の我論をば差別して說く、我有邊說、我無邊說、我亦有邊亦無邊說、我非有邊非無邊〔說〕なり、其の次第に隨つて前の如く應に知るべし。

又即ち是の如き諸見に依止し、及び我論に依りて復た我の淸淨解脫を宣說す、〔二七〕欲、靜慮に於いて皆な自在を得、其の所欲に隨つて多く變化に住し、其の所欲の如く靜慮に安住し、淸淨の見を以て方便の法樂に遊戲受用す。是の如きを名づけて諸見に依るが故なりと爲す、應に安立を知るべし。

生處に由るとは、謂く我に一の想あり乃至廣く說けり。一の想ありとは、謂く無色「界」の空無邊處、識無邊處に在るなり。種種なる想ありとは、謂く下地に在るなり、卽ち所說の如く其の次第に隨つて、應に知るべし、我に狹小の想あり、無量の想ありと說くと。一向樂ある者は謂く〔二八〕下三靜慮に在り、一向苦ある者は謂く捺落迦に在り、樂あり苦ある者は謂く鬼、傍生、人、欲界の天に在り、不苦不樂ある者は謂く第四靜慮已上乃至非想非非想處に在り。

【二七】欲とは欲界、靜慮とは色界四靜慮天なり。

【二八】下三靜慮とは色界四靜慮天の中の下三天を云ふ。

又是の如き諸の外道の處に於いて當に知るべし總じて三種の衰損ありと。一には見及び欲樂展轉し相違し論ずる衰損、二には我の無智に依りて論じ問記する衰損、三には法隨法行に依る證得の衰損なり。

此の中の三種の若くは有想を計し、若くは無想を計し、若くは非有想非無想を計する論者及び斷見の論者は或は他を責むるを勝利と爲るに依りて論じ、或は難を免るるを勝利と爲るに依りて論じて計度を起す、當に知るべし是れを第一の衰損と名づくと。彼の諸論に由つて後際を計度し、未來世に依

りて妄りに我を計して有なり無なりと爲るが故なり。

我の無智に依りて論じ問記する衰損とは、謂く若くは諸の雜染若くは雜染の處、若くは能く雜染するに於いては、是の如き一切の世俗勝義の二諦の道理をば如實に知らず、此の無智に由りて趣向する所を以て先と爲ることあるが故に差別あることを得。此の無智に從つて何の所にか趣向するや。謂く〔二九〕三の四轉なり、一には常、無常等、二には有邊、無邊等、三には自作、他作等なり。所以は何ん、彼れ無智に由り要らず趣向を先にし是の如き〔常、無常等の〕差別〔の道理〕をば後方に問記すればなり。

又聖法毗奈耶の中に於ける所有の智者は〔三〇〕記事すべからず、二の道理に於いて記すべからざるが故なり、謂く世俗勝義の二諦の道理なり。此の中四種の一向常論の前際を計する者及び前際を計する無因論者の二種の差別は皆な先に我を計して後方に我は一向常なり等と緣ずる諸論の差別なり。

又即ち四種の一分常論にして前際を計する者に彼に差別あり、謂く一分常無常を緣ずる論あり、或は一分非常非無常を緣ずる論あり、邊無邊等の諸論は前の邊無邊等の如し、應に其の相を知るべし。若し一切は皆な宿因の〔所〕作なりと欲するを自作論と名づけ、若し一切は皆な自在〔天〕等の變化する因の〔所〕作なりと欲するを他作論と名づけ、若し少分は自在天等の變化する因の〔所〕作なり、一分は

【二九】 三の四轉とは常無常、有邊無邊、自作他作の三に各各四句分別あるを云ふ。

【三〇】 問記せざるなり。

爾らずと欲するを倶作論と名づけ、若し無因作論をば倶非作論と名づく、當に知るべし是れを第二の我の無智に依つて論じ問記する衰損と名づくと。彼の諸論に由りて前際を計度し過現世に依りて妄りに分別するが故なり。

法隨法行に依る證得の衰損とは、謂く沙門若くは婆羅門あり、他を責むるを勝利と爲すと觀ぜずして論じ、難を免るるを勝利と爲すと觀ぜずして論じ、亦た我の無智の諸論に依りて利養恭敬等の事を求めんが爲めに樂欲し開闡せざるも、惡說の法毘奈耶の中に於て出家を求む、唯だ出離解脫を樂求するをば除く、當に知るべし彼れは是れ（三一）薄塵の種類にして性と爲り愚癡にして專ら止行を修す。彼は初靜慮定の敎授敎誡を得んが爲に能く（三二）後際に倶行する見趣に於いて、及び（三三）前際に倶行する見趣に於いて然りと許さざるに由るが故に（三四）超過することを得、現法の中に於いて又能く欲界の諸結を超過し喜を遠離することを證し、斯より已上無聞無知にして卽ち此の中に於いて涅槃の想を生ず。彼れに由るが故に喜を遠離することを證するが如く是の如く、或は別の因緣に由りて第二、第三靜慮の愛味無き樂、第四靜慮の苦樂無き受を證得することあり。此より已上乃至非想非非想處も當に知るべし亦た爾なりと。種種の想と倶行する苦樂受等の差別に於いて已に超過せるが故なり。是の如く「なるも」彼れ

【三一】薄塵とは煩惱微薄なること。

【三二】過去世に對して起る諸の惡見。

【三三】未來世に對して起る諸の惡見。

【三四】後際に倶行する見趣及び前際に倶行する見趣を超過することを得。

趣の諸の（三五）取行に於いて超越すること能はず、退還する法を樂つて未だ般涅槃せず涅槃の慢を起す、當に知るべし是れを第三の衰損と名づくと。此の中如來は自然に寂靜の妙迹を證覺し、說く所の如き一切の行相に於ける三種の衰損をば五種の相に由り如實に了知す。謂く若くは(一)彼の自性、若くは(二)彼の諸見、若くは(三)無智に由りて彼れ生起することを得ること、若くは(四)所緣轉ずること、若くは(五)彼の所緣の麤弊の過患及び上の出離、是の如き事に於いて如實に了知し、卽ち出離の中常に自ら出離す。

（三六）復た次に、二智あり、能く見をして清淨ならしめ及び見をして善清淨ならしむ、謂く法住智及び此を先と爲る涅槃智なり。法住智とは、謂く能く諸行の自相の種類の差別を了知し、及び能く諸行の共相の過患の差別を了知す。謂く若くは苦、若くは樂、不苦不樂の三位に隨順する諸行の方便に於いて（三七）三苦等の性を了知するなり。涅槃智とは、謂く是の如き一切の行の中に於いて先に苦想を起し後是の如く思ひ、卽ち此の一切の有苦の諸行餘す無く永く斷ず、廣く說かば乃至名づけて涅槃と爲す、是の如く了知するを涅槃智と名づく。卽ち（三八）此の二智は見をして清淨及び善清淨ならしむ。要ず二門に由りて正に勤めて修習して方に彼をして淨ならしむ。一には（三九）自ら力無き補特伽羅は他の敎授に因りて能く彼をして淨からしめ、二には（四〇）自ら力ある補

【三五】取行とは五趣に取生する行なり。

【三六】二智を釋す。

【三七】三苦とは苦苦、壞苦、行苦なり。

【三八】有學の見をして清淨ならしめ、無學の見をして善清淨ならしむ。

【三九】是れ隨信行の人なり。

【四〇】是れ隨法行の人なり。

特伽羅は多聞思求して能く彼をして淨からしむ。此の中第一の補特伽羅は聰利ならざるが故に、信等の諸根唯だ一味なるが故に、止觀の所緣は少分の法の(四一)諦察忍に於て轉ず。此と相違するは當に知るべし第二の補特伽羅なりと。復た三種の現觀邊智あり、彼を修習するが故に見淸淨なることを得と。一には(四二)能く無漏を生ずるに順ずる智、二には(四三)無漏智、三には(四四)無漏智の後に相續する智なり。初のは(四五)世間第一法に攝めらるる智なり、第二は若し彼れに住すれば能く(四六)見諦の一切煩惱を斷ず、第三は煩惱斷じて後解脫相續する智なり。若し(四七)中智に住すれば便ち已に(四八)正性離生に入り異生地を超過すと名づくるも、(四九)未だ預流果を得ず。未だ第三解脫の預流果の智を剋證せずと雖も其の中間に住する所の刹那に於て「のみ」未だ剋證せざるが如し。終に中夭無く時少きを以ての故に、此より無間に必ず第三を證す、此の位の中に住して如實に所知の境を現見するが故に見淸淨なりと名づくるも、(五〇)餘惑あるが故に善淸淨なるには非ず。若し此の智に於いて更に各修習し、阿羅漢を成じ、(五一)一切の煩惱をば皆な離繫するが故に善淸淨なりと名づく。又餘す無く斷ずる三相をば應に知るべし、一には現行せざ

【四一】 諦察忍とは諦察法忍卽ち法を諦察する忍智なり。
【四二】 加行智なり。
【四三】 根本智なり。
【四四】 後得智なり。
【四五】 世間第一法とは世第一法卽ち四加行位の最高位なり。
【四六】 見諦とは見道なり。
【四七】 中智とは三智の中の第二無漏智のこと。
【四八】 正性離生とは見道の異名なり。
【四九】 見道十六心の中前十五心は預流向、第十六心は預流果なり、今預流向の位にして未だ預流果を得ざるなり。
【五〇】 分別起の惑斷ずるも俱生起の惑尙ほ存す。
【五一】 分別起俱生起の一切の煩惱。

るに由るが故に、二には界に由るが故に、三には事に由るが故なり。現行せずとは、謂く生起すと雖も而も染著せず、未だ永へに斷ぜずと雖も數數諸の善法を修習するに由るが故に遠分の諸の纏煩惱をして復た現行せざることを成ぜしむ。界とは三界なり、前の如く應に知るべし。事とは謂く二事なり、一には煩惱の事、二には是れ苦事なり。又安樂利益の隨逐する諸の離繫品の（五二）五種の界の中に於いて（五三）寂靜、（五四）微妙、（五五）勝功德等あり乃至（五六）涅槃を其の最後と爲す、差別をば應に知るべし。又此の中に於いて一切の依持をば皆な喜捨すとは、當に知るべし（五七）父母等の事を割捨するなりと。又中有、生有、後有に於いて復た更に生ずること無し、其の次第の如く當に知るべし說いて（五八）相續ある無く取無く生無しと名づくと。又（五九）三品に於いて三種の門に由りて障礙を爲すが故に當に知るべし（六〇）三結の差別を建立すと。（六一）謂く（一）（六二）未だ發趣せざるが故に、（二）（六三）已に發趣すと雖も邪成立するが故に、（三）（六四）正法の中に於いて正行せざるが故なり。即ち

【五二】五種の界とは(一)斷界(二)無欲界(三)滅界(四)有餘涅槃界(五)無餘涅槃界なり。

【五三】寂靜とは斷界の相なり。

【五四】微妙とは無欲界の相なり。

【五五】勝功德とは滅界の相なり。

【五六】涅槃とは有餘無餘二涅槃なり。

【五七】父母妻子等の七攝事。

【五八】相續有る無しとは中有無きなり、取無しとは生有無きなり、生無しとは後有無きなり。

【五九】三品とは在家品、出家品、善說の法毘柰耶品なり。

【六〇】三結とは身見、戒禁取見、疑なり。

【六一】以下三門を列す。

【六二】此の門に由りて身見を建立す。

【六三】此の門に由りて戒禁取見を建立す。

【六四】此の門に由りて疑を建立す。

在家品は惡說の法毗奈耶の中に處し、而も出家品は善說の法毗奈耶品に處す。又行じて逆流に趣向する行者は惡趣を解脫し、二種の解脫の決定することを成就す。一には煩惱を解脫すること決定し、二には後有を解脫すること決定す、是の因緣に由るが故に預流と名づく、乃至廣く說けり。又若し阿羅漢果を證得するは、先に〔有〕學地に住し、諸行の中に於いて已に我及び我所を執受せず、後諸漏に於いて皆な解脫を得。又四種の義と相應するが故に當に知るべし是れを阿羅漢の相と名づくと。一には自事已に究竟して應に他事を作すべき義なるが故に、二には應に自義を得一切に徧滿すべき道理の義なるが故に、三には未來の行因已に永へに斷滅し、應に現法樂住を證すべき義なるが故に、四には有學地を超え無學地に入れると相應する義なるが故なり。

【六五】愚夫の分位の五を釋す。
【六六】眞聖の慧とは無漏慧なり。

(六五)復た次に、愚の位に五あり、若し中に於いて轉ずれば愚夫の數に墮す。何等をか五と爲す 一には俱生の慧を獲得せざるが故に、二には他音を聞くに從つて緣生ずる慧を獲得せざるが故に、三には(六六)眞聖の慧を獲得せざるが故に、四には愚癡の纏に纏縛せらるるが故に、五には彼の隨眠に隨縛せらるるが故なり。復た四種の妄我論あり、一には諸行は是れ我なりと宣說す、二には我に諸行ありと宣說す、三には諸行は我に屬すと宣說す、四には我は行の中に在りと宣說す。二の因緣に由りて妄りに我を計する論は諸の雜染を作る、一には執著するが故に、二には隨眠の故なり。執著するが故なりと

は、謂く諸の外道解脱を求むと雖も彼れ障と爲るに依つて一切種に於いて獲得すること能はず。隨眠の故なりとは、謂く諸の內法境界に耽著し、暫時障を爲すも究竟には非ず。

(六七)復た次に、若くは有我の見、若くは無我の見は同じく諸行を緣じて境事と爲るが故に說いて同分と名づけ、而も彼の事に於いて(六八)邪取、正取、染汙、淸淨等の義別なるが故に不同分と名づく。又四相に由りて所緣の事に於いて邪僻に執著する增上力の故に能く我見をして諸の雜染を作さしむ、一には因緣の故に、二には自性の故に、三には果に由るが故に、四には等流の故なり。因緣の故なりとは、謂く二の愚癡なり、一には事の愚癡、二には見の愚癡なり。事の愚癡とは、(六九)事に愚なるに由るが故に先に邪法を聞き、後に我見を起すなり。見の愚癡とは、謂く(七〇)見に愚なるが故に見と相應する諸の無明觸より生起せられたる受に於いて妄りに計して我と爲し、此を緣と爲るに由りて恆に我愛の爲めに隨逐せらるるなり。復た此れに由るが故に常に我見に於いて捨離すること能はざるなり。(七一)自性の故なりとは、謂く(七二)二の因緣に攝受する所等を隨つて觀察するに彼の(七三)隨眠に於いて遠離することを得ざるなり。果に由るが故なりとは、謂く卽ち彼の薩迦耶見を以て依止と爲るが故に、

【六七】二種の見の差別を釋す。
【六八】邪取云云。取とは境を取るなり、有我の見は邪取なるが故に染汙、無我の見は正取なるが故に淸淨なり。
【六九】事とは所緣の境事なり、所緣に迷ふを事に愚なりと云ふ。
【七〇】見とは能緣なり、能緣迷ふを見に愚なりと云ふ。
【七一】自性とは種子なり。
【七二】二の因緣とは前の事の愚癡及び見の愚癡なり。
【七三】隨眠とは煩惱の種子なり。

〔七四〕我慢の隨眠を遠離すること能はざるなり。是の二の隨眠の增上力の故に、能く當來の諸根を引いて起らしめ、彼に由りて苦樂二受の因を領納し、更に我我所を發起し計し、正理の如く思惟し相應せず、意言分別して我我所に其の領受ありと謂ふ。等流の故なりとは、謂く先因の力に持たるるに由るが故に卽ち〔我〕見の種子は意に隨逐する所にして、後有の〔七五〕意界は前の因緣の熏修する所の力に由りて成滿することを得。卽ち是の如き後有の意の中に於いて〔七六〕無明種及び〔七七〕無明界あり、是の二の種子隨逐せらるる意の所緣の法界は彼れ宿世に惡說の法及び毗柰耶に依つて生ぜる所の薩迦耶を分別する見以て依止と爲すに由りて今の界を集成す。卽ち此の界の增上力に由るが故に俱生の薩迦耶見を發起し、善說の法毗柰耶の中に於いて亦た復た現行して能く障礙を爲す。又卽ち此の見は二種の相に由りて〔七八〕六轉して現行す、一には世に由るが故に、二には慢に由るが故なり。世に由るが故なりとは、謂く我れ過去に於いて曾て有なりしと爲んや、曾て無なりしと爲んやと、〔七九〕乃至廣く說けり、應ずるが如く當に知るべし。慢に由るが故なりとは、謂く我れを勝れたりと

【七四】我慢の隨眠とは我見及び慢の隨眠なり。

【七五】意界とは意の種子のこと。

【七六】無明種とは無明の新熏種子なり。

【七七】無明界とは無明の本有種子なり。

【七八】六轉とは二種の相に各三轉あり、世に由つて三轉あり、謂く三世に由る、慢に由つて三轉あり、謂く等勝劣に由る、文の如く知るべし。

【七九】乃至廣く說かば我れ未來に於て當に有なるべしと爲んや、當に無なるべしと爲んや、我れ現在に於て有なりと爲んや、無なりとせんやと分別す。

爲せんやと、(八〇)乃至廣く說けり。彼れ是の如き一切に於いて如實に知らず見ず、此の因緣に由りて正理の如くならずして邪觀を起す。又明位に三あり、謂く他の音を聞き如理に作意するは是れ初の明位なり、已に能く正性離生に證入せるは是れ第二の明位なり、心善く解脫せる阿羅漢果は是れ第三の明位なり。其の無明位に復た二種あり、一には先、二には後なり。隨眠の位は是れ先なり、諸纏の位を後と爲す。又(八一)見修の所斷に約すれば異りあり、當に知るべし是れを第二の差別と名づくと。

(八二)復た次に、是の處に世尊自らの聖敎に依りて善說の發起を顯示せんと欲するが爲め、他の邪敎に依りて惡說の失墜を顯示せんと欲するが爲めに、自ら所說あり、後結集する者法門の中に於いて稱して世尊の嗢柁南の說と爲す。二の因緣に由りて善說の法律を名づけて大果大利を發起すと爲し、惡說の法律を卽ち唐捐と爲す。一には善說の法毗柰耶の中に於いては一切の衆苦をば永く離るることを得べし、謂く(八三)三種の苦性なり、二には一切の諸結をば永く斷ずることを得可し、謂く(八四)下上分結なり、惡說の法毗柰耶の中に於いては是の如き二事皆な得可からず。彼れ薩迦耶見に依止するに由りて諸行の中に於て心苦を厭ひ、樂を欲するを「所」依と爲して玆の勝解を起す、願くは當來に於いて我れを苦しむることあること無く、我

【八〇】乃至廣く說かば我れ等しと爲んや、我劣れりと爲んやと分別す。
【八一】見道所斷の無明を先とし、修道所斷の無明を後とす。
【八二】斯の聖敎等に於けるを釋す。
【八三】三種の苦性とは苦苦・壞苦・行苦なり。
【八四】五下分結及び五上分結。

れに苦あること無からんことをと。或は復た已に卽ち彼の苦因及び彼の當果を斷じて未來世に於いて二種の相に由りて勝解を生ず、謂く(一)苦は未來に當に我を離るべく、(二)及び我れ未來に當に苦あると無かるべしと。是の如き（八五）四種の行相に由り斷を樂ふを「所」依と爲し、欲界の欲を離れて初靜慮に生じ、次第に乃至彼の非想非非想處の若くは定若くは生に於いてし、是の因緣に由りて苦苦を超越すと雖も、而も未だ下分の諸結を斷ずること能はず、未だ彼を斷せざるが故に當に知るべし苦苦をば未だ永く超越せず、彼れ（八六）壞、行の二苦の斷の中に於てすら尚ほ樂を生ぜず、何に況んや能く斷せんやと。彼の隨順して未だ斷せざる所なるに由るが故に當に知るべし（八七）上分に順ずる諸結に於いて亦た未だ斷ずること能はず。（八八）內法に住する者、初め觀を修する時欲界に於いて未だ離欲を得ずと雖も有情勝るるが故に而も三苦に於いて深く心に厭離し、欲を斷ずることを樂ふに依りて諸行の中に於いて無我の見を用ゐて以て依止と爲し其の勝解を發す、願はくは未來に於いて三苦に我れ無く、我れに三苦無からんことをと。彼れ初め是の如き行を修習し已つて欲界の欲に於いて遠離することを得、永へに苦苦を斷じ、前の如く復た是の如き勝解を生ず、當に彼に我れ無かるべく、我れに當に彼れ無かるべしと。是の如く行する者は其

【八五】四種の行相とは未來に苦を離れんとする四種の行相なり。前文の如し、知るべし。

【八六】第三靜慮の樂受は是れ壞苦なり、第四靜慮の捨受は是れ行苦なり。然るに外道此の樂受捨受を執して我と爲し壞行の二苦を斷ぜず却つて二苦に隨順す。

【八七】上分に順ずる諸結とは五上分結のこと。

【八八】內法に住する者とは佛法に入れる者なり。

の苦苦に於いて究竟して解脫し、亦た永へに（八九）下分に順ずる結を超越し、卽ち此の道に於いて次第に進修し、乃至能く阿羅漢果を得、若し諸の愚夫は薩迦耶見を以て依止と爲し、永く壞、行の二苦を超越し及び永く上分に隨順する一切の結を斷滅する中に於いて我は當に無かるべしと謂つて應に怖るべからざるに於いて妄りに怯畏を生じ、尙ほ樂を起さず、況んや當に能く斷ずべきや。又是の處に於いて（九〇）二の因緣に由りて應に怖を生ずべからず。（九一）謂く唯だ有心にして四識住に住すれば轉ずるあり染あり、又唯だ有心にして四識住を斷ずれば轉ずる無く染無し。復た四依あり、謂く（一）色（二）受（三）想（四）行なり。復た四取あり、謂く（一）欲と（二）見と（三）禁戒と（四）我語とに於ける所有の欲貪なり。復た二緣あり、謂く若くは所緣及び若くは能緣なり。復た六識あり、謂く眼識等なり。復た二識住あり、謂く煩惱纏住及び彼の隨眠住なり。此の中諸取の增上力の故に不如理の分別を以て先と爲す、（一）我我所の邪なる境界の取に由り、（二）自相の境界を緣ずるの取に由り、（三）倶有依に由る。此の三因緣は諸識をして轉せしめ及び染汙せしむ。（九二）復た三種に由る、謂く（一）現法に於いて集諦に趣くが故に、（二）未來の苦を緣じて我れ當に是の如くなるべしとし是の如く愛するが故に、（三）彼の先因より生ずる所の現苦に於いて而も安住するが故なり。復た三種に由る、謂く（一）樂位に趣くが故に、

【八九】下分に順ずる結とは五下分結のこと。
【九〇】二の因緣とは第一の因緣には六種を擧げ、第二の因緣には五種を擧げて唯法無人なれば怖を生ずべからざることを明す。
【九一】以下第一の因緣の六種を擧ぐ。
【九二】以下第二の因緣の五種を擧ぐ。

(一)苦位を緣ずるが故に、(三)不苦不樂位に安住するが故なり。彼れ三種に依る、謂く(一)來世に趣くが故に、(二)去世を緣ずるが故に、(三)現世に住するが故なり。復た三種に由る、謂く(一)後有の愛に由りて後有に趣くが故に、(二)彼彼の喜樂の愛に由りて未來の境界を緣ずるが故に、(三)喜貪倶行の愛に由りて現在に住し已つて境界を得るが故なり。復た三種あり、(一)貪欲の身繫に由りて貪處の事に趣向し隨順するが故に、(二)瞋恚の身繫に由りて彼の事を緣ずるが故に、(三)戒禁と(九三)此の實との二取の身繫に由りて彼の事に住するが故なり。中の嗢柁南に曰く、

(九四)『果因と受と、世と愛及び繫なり。』

(九五)喜愛の滋潤は前の如し應に知るべし、謂く(九六)諸行因の中に宣說せるが如し。又卽ち彼の識是の如く轉ずる時二の生處に於いて、應に知るべし、結生相續し增廣すと、一には有色に於いてし、二には無色に於いてす。(九七)有色處に於いては中有に依止して去來あり、(九八)無色處に於いては唯だ從つて生ずるあり、卽ち兩處に於いて乃ち壽盡くるに至るまで相續して住するが故に名けて住と爲す。當に知るべし此の欲界に住する人中に三分の位ありと。謂く初めて胎に入り識の滋潤せらるると、胎分圓滿すると、胎より出づるとなり。當に知るべし此の三に復た差別あり、欲、色、無色なり、其の次第の

【九三】此の實とは見取見のこと、見取のみ實の見にして餘は皆虛妄なるが故に此の實と云ふ。

【九四】此の頌に前の第二の因緣の五種を略記す、次第の如く本文に配して知るべし。

【九五】以下經文を擧げて詳釋す。

【九六】此の卷首因を釋する中に說けり。

【九七】有色處とは色界のこと。

【九八】無色處とは無色界のこと。

如しと。若くは如來の說きたまへる所の識流轉の道を棄捨して是の言を作すことあり、我れ當に更に別異の施設を作すべしと。當に知るべし是の人の施設する所は其の文に異あり其の義別無く、但だ言事のみありと。或は餘の智者其の異文に於いて先づ道理を示し、後方に汝が施設する所の別異は何んと詰問すれば、彼れ爾の時に於いて茫然として了せず、或は後時に於いて自ら達鑒することを得、前の所立に於て如理に諦觀し、反つて愚昧を生じ、愚昧に由るが故に自ら覺つて我れ本受持する「所」は惡たり善に非ずと知ること無し。又〔九九〕十色界を名づけて色界と爲す、當に知るべし復た〔一〇〇〕六種の受界、想界、行界ありと。又三位に於いて當に諸識煩惱を解脫することを知るべし、謂く〔一〕諸行に於いて深く過患を見、能く諸纏の遠分をして離れしむるが故に、〔二〕〔一〇一〕見地の中に於いて一切の外道の諸繫の隨眠永く斷滅するが故に、〔三〕修道に依止して究竟することを得るが故なり。又諸の外道は妄りに計する所の一切の生處、謂く大自在、〔一〇二〕那羅衍拏及び〔一〇三〕衆主等の無量なる品類に於いて彼に生ぜんと樂ふが故に貪身繫と名づく。他の諸見の異分の法の中に於いて深く憎嫉するが故に瞋身繫と名づく、邪願に依りて梵行を修するが故に、同梵行「者」の樂しむべき法の中に於いて憎背を起すが故なり。此の二緣に由りて增上戒學に於いて能く雜染を爲す、當に知るべし卽ち彼れ戒禁取に由り增上心學に於い

【九九】十色界とは五根界及び五境界なり。

【一〇〇】六種云云。六識各に受、想、行、相應するが故に受、想、行に六種あり。

【一〇一】見地とは見道なり。

【一〇二】那羅衍拏(Nārāyana)は天上界の力士の名なり。

【一〇三】衆主とは大梵王のこと。

て能く雜染を爲すと、此れ實に身繫を執取するに由るが故に增上慧學に於いて能く雜染を爲す。是の如き（一〇四）四法能く（一〇五）色身名身の（一〇六）趣向、所緣の立安の事の中に於いて心をして繫縛せしむるが故に身繫と名づく。又彼れ意地に在るが故に、意の分別なるが故に、意と相應するが故に、意の隨眠なるが故に、染汚の意なるが故に意の所成と名づく。又彼れ斷ずとは、謂く彼の境を緣ずる諸の煩惱斷ずるなり、彼の所緣には非ず、卽ち彼の境に於いて倒解無きが故なり。又後有の諸の業煩惱に攝持せらるるに由つて、後有の（一〇七）種識をば當に知るべし、此の（一〇八）依止に於いて建立す。彼れ〔種識〕有ると無きが故に當來の（一〇九）三種の前に說ける所の如き差別の理趣の生長廣大は當に知るべし、一切悉く皆な盡滅すと。又卽ち彼に住する所の識無きに由りて因分果分復た生長せず、諸道に攝せられて生長することを得。又彼の空解脫門を依止と爲るが故に所爲無しと名づけ、無願解脫門を依止と爲るが故に名づけて喜足と爲し、無相解脫門を依止と爲るが故に說いて名づけて住と爲し、彼の愛樂に於いて數修習するが故に（一一〇）善く解脫するを得、一切の隨眠永く滅盡するが故に（一一一）心善く解脫す。是より已後（一一二）恆住を逮得し、諸行に住すと雖も畏るる所無く、已に諸蘊任運に

【一〇四】四法とは前の二緣、及び戒禁取に由ると、身繫を執取するとの二緣を云ふ。
【一〇五】色身とは眼等の五色根、名身とは心法卽ち意根なり。
【一〇六】趣向とは所緣の境に趣向する卽ち能緣のこと。
【一〇七】種識とは種子識卽ち阿賴耶識のこと。
【一〇八】依止とは所依の身なり。
【一〇九】三種とは前に說ける所の入胎、胎圓滿、出胎の三を云ふ。
【一一〇】是れ有學の解脫なり。
【一一一】是れ無學の解脫なり。
【一一二】恆住とは涅槃のこと。

して滅することを得、餘因斷ずるが故に復た更に生ずること無し。彼の有漏識永へに滅し已るに由つて徧く十方に於いて皆な(二三)所趣無し、唯だ(二四)影の如き諸受と彼の識蘊識樹とを除くのみ、當に知るべし燈の如く皆な寂滅に歸すと。卽ち有餘依涅槃界の中に於いて(二五)初の纏斷ずるに依りて說いて寂靜と名づけ、(二六)第二斷ずるに依りて說いて清涼と名づけ、(二七)第三斷ずるに依りて說いて宴默と名づく。又三緣に由り識趣識住皆な所有無し、一には自然に染汚するに非ざるに由るが故に、二には所餘は染汚せざるに由るが故に、三には餘識の助伴無きに由るが故なり。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(二八)『斷支と實に顯了すると、行緣と無等の敎と、四種の有情衆と、道の四と究竟の五なり。』

(二九)諸の修斷とは、略して五支に由りて、斷を攝受し能く諸行に於て如實に顯了す、一には身遠離するに由るが故に、二には心遠離するに由るが故に、三には奢摩他品の三摩地に由るが故に、四には毗鉢舍那品の三摩地に由るが故に、五には常に委に所作するに由るが故なり。

【二三】三界五趣に輪廻することなし。

【二四】識蘊を樹に喩へ諸受を影に譬ふ。受は識より生じ、識は受の本なるが故なり。

【二五】初の纏とは見道所斷の煩惱なり。

【二六】第二の纏とは修道所斷の無所有處までの煩惱なり。

【二七】第三の纏とは修道所斷の非想非非想處の煩惱なり。

【二八】總頌十一門の中第六門に斷支を釋する別頌なり。此の別頌の中復た七門を列し、長行に於て次第に釋す。

【二九】斷支を釋す。

(二〇)復た次に、當に知るべし十二種の如實に顯了する行相ありと、攝異門分に說けるが如し。謂く(一)聽聞して(二一)各別に(二)善取し(三)惡取するが故に、(四)正教[量]と(五)現量と(六)比量との境界なるが故に、(七)自相と(八)共相との故に、(九)如所有性と(十)盡所有性との故に、(十一)(二二)見と(十二)究竟地とに入るが故なり。

(二三)復た次に、略して四種の如實に顯了する行相、道理智の所緣の事あり。謂く(一)內法に住する異生率爾に境に墮して起す所の受の中に於て如實に知らざる增上力の故に、能く諸行をして流轉し雜染せしめ如實に知るが故に能く清淨ならしむ。復た(二)在家の異生あり、後有を欣ぶ等の所依の中に於いて如實に知らざる增上力の故に、諸行をして流轉し雜染せしめ、後と相違すれば能く清淨ならしむ。復た(三)諸の外道あり、愛樂する所の虛妄分別定んで喜愛を生ずる所依の行の中に於いて如實に知らざる增上力の故に能く諸行をして流轉し雜染せしめ、彼と相違すれば能く清淨ならしむ。復た(四)內法に住する有學あり、諸の根境所有の忘念に依り、餘殘[の煩惱]の行に於いて如實に知らざる增上力の故に流轉し雜染す、餘殘[の煩惱]を斷ずるが故に便ち清淨なることを得。當に知るべし此の一切品の中に於いて諸の清淨品は皆な內法に住すと。是の如きを名づけて四の所緣の事と爲す。

【二〇】實に顯了するを釋す。
【二一】善をば善とし、惡をば惡とす。
【二二】見とは見地、卽ち見道なり。
【二三】行緣を釋す。行とは能緣の行相、緣とは所緣の事なり。

(二四)復た次に、三の因緣に由りて如來の所說の敎に與等無きなり、一には不共法を宣說したまふが故に、二には無倒なる法を宣說したまふが故に、三には自ら覺りたまへる法を宣說したまふが故なり。此の中宣說したまはく、若くは薩迦耶の集行に趣くは卽ち是れ苦集行に趣くなり、若くは薩迦耶の滅行に趣くは卽ち是れ苦滅行に趣くなり、是れを不共法の敎を宣說したまふと名づく。若くは復た說いて此れ眞實有なりと言ふ、是れを無倒なる法の敎を宣說したまふと名づく、若くは復た說いて我れ如實に知ると言ふ、是れを自ら覺りたまへる法の敎を宣說したまふと名づく。復た三種の諸行流轉する差別あり、一には薩迦耶は是れ諸の有情の染著の(二五)安足する處所の義なるが故に、二には世間は是れ染著の處敗壞する義なるが故に、三には有は是れ染著する者の更生する義なるが故なり。

(二六)復た次に、彼の有情衆に略して四種あり。何等をか四と爲す。一には一向可愛の業果に安住す、卽ち此の果に於いて耽著し受用す、謂く天處に生じ專ら放逸を行ずるなり。二には一向因轉ず、謂く彼の所有を希求する沙門若くは婆羅門なり。三には般涅槃を樂ふ諸の有情衆なり。四には諸の雜種類なり、謂く此に住し、或は果に於いて耽著し受用し、或は當來の愛果を攝受することを樂ひ、或は時時に涅槃の資糧を修し、諸の放逸を離る。前の三種の有情衆の中に於いて其の所應に隨つて當に

【二四】無等の敎を釋す。
【二五】安足する處所とは所依處のこと。
【二六】四種の有情衆を釋す。

（二二七）世間、（二二八）彼の集滅する邊及び（二二九）薩迦耶、彼の集滅する邊を知るべく、後の第四の有情衆の中に於いて當に薩迦耶、彼の集、彼の滅、趣道の差別を知るべし。

（二三〇）復た次に、二種の道に依りて當に知るべし四種の行相を施設すと。云何んが二種の道に依る、謂く見道に依り及び修道に依る。（二三一）云何んが四種の行相を施設する、一には應に徧知すべき行相、二には應に永斷すべき行相、三には應に作證すべき行相、四には應に修習すべき行相なり。是の如き四種の「中の」三は見道に依り、一は修道に依る。見道に入る時諦現觀し、倶に能く苦を徧知し、一分の集を斷じ、一分の滅を證し、彼の一分に於いて能く斷證する者は修道の中に於いて餘す無く斷じ、及び證することを求めんが爲の故に所得の如き道をば應に勤めて修習すべし。是の如き諸の思擇道及び修道を修するに因るが故に永へに餘の集を斷じ、餘の滅を證得す。

復た次に、是の如き極究竟を證得する者は五種の相に由りて應に究竟を知るべし。何等をか五と爲すや。謂く（一）已に苦及び苦因餘す無く盡くることを證得せるが故に、（二）（二三二）他義を作すに堪へ一切の（二三三）自義皆な圓滿するが故に、（三）畢竟の斷

【二二七】世間とは世間の果なり、第一の有情に於て世間の果（苦諦）は滅すべき法なることを知るべし。

【二二八】彼の集とは世間の因なり、第二の有情に於て世間の因（集諦）は滅すべき法なることを知るべし。

【二二九】薩迦耶（Satkāya）とは身と譯す、身は苦果なり、第三の有情に於て苦果（苦諦）及び彼の因（集諦）は滅すべき法なることを知るべし。

【二三〇】以下四諦なり、趣道とは道諦なり。

【二三一】道の四を釋す。

【二三二】他義とは他利なり。

【二三三】自義とは自利なり。

及び智を證得するが故に、(四)能く究竟の涅槃城に入るが故に、(五)既に入ることを得已つて其の聖位に於いて能く安住するが故なり。第一相に於いて(二三四)割愛等の四種の差別あり、前の如く應に知るべし。第二相に於いて阿羅漢諸漏を盡す等の所有差別あり、(二三五)前の如く應に知るべし。第三相に於いて(二三六)畢竟の究竟あり、一切の行事皆な悉く斷ずるが故に、畢竟の無垢あり、一切の煩惱畢竟じて斷ずるが故に、(二三七)畢竟の梵行あり、以て後邊と爲す、謂く已に(二三八)彼の對治を獲得せるが故なり。第四相に於て譬へば世間にて五種の相を具ふるを宮城に入ると名づけ、一種を闕くに隨つて名づけて入ると爲さざるが如く、是の如く要ず彼と相似せる五種の相を具せるが故に當に知るべし涅槃の宮城に入ると名づくと。何等をか世間の五相を具ふと名づくるや。一には宮城の門を闢く、二には隍塹を超踰して墮落せず、三には深く果決「定する」を起して之を越度す、四には隍塹を越え已つて逼りて宮闕に臨む、五には自「の希望する所」に非ず餘の希望する所に非ず、(二三九)勝幢既に仆れて徐に中宮に入り、是の如く宮に入りて諸の罣礙無し、涅槃の宮に入るも亦た復た是の如し。先に能く五下分に順ずる結を斷ずるは彼の門を闢くが如し。次に涅槃に於いて深坑の想を起し無明の怖畏斷じて餘す無きが故に隍塹を超えて墮落せざるが如

【二三四】割愛等の四種は此の卷の二智を釋する處に出づ、(一)父母等の事を割捨す、(二)中有無し、(三)生有無し、(四)後有無し。

【二三五】同上處に出づ。

【二三六】此の二句は斷を明す。前句は業斷すること、後句は煩惱斷ずることを明す。

【二三七】此の一句は智を明す。

【二三八】彼の對治とは業煩惱の能對治の智なり。

【二三九】勝幢既に仆るとは魔を伏するに譬ふ。

し。能く薩迦耶の彼岸に到るが故に、能く最後身を持つが故に彼の果決「定」して之を越度するが如し。將に無餘依涅槃界に入らんとするは宮闕に逼るが如し。已に有愛を斷じ諸の境界に於いて復た愛生ずること無く、徧く一切に於て憍慢起らずして涅槃に入ること自他の希望する所に非ず、勝幢既に仆れて徐に中宮に入るが如し。前に說ける所の五種の因緣の如く涅槃宮に入るも當に知るべし亦た爾なりと。又既に入り已つて二種の相に由りて堅住に安住す、一には行に由るが故に、二には住に由るが故なり。行をば三相に由りて應に正に了知すべし、一には共せざるが故に、二には染無きが故に、三には正に所依止に依止するが故なり。永へに五下分に順ずる結を斷ずるが故に、諸欲の中に於いて畢竟して離欲し、卽ち是の處に於いて遊行するが故に、說いて共せずと名づく。六恆住に於いて常に攝受するが故に名づけて染無しと爲す。一分の法に於いて思擇し遠離す、謂く惡象馬等なり、一分の法に於いて思擇し習近す、謂く衣服飲食等なり、是れを名づけて正に所依に依止すと爲す。是の如く行に於いて善清淨にして已る。復た五相に由りて應に住を了知すべし。謂く若くは(一)此に由りて住し、若くは(二)此を「所」依と爲し、若くは(三)此れに由つて離繫し、若くは(四)此を「所」依と爲し、若くは(五)此に由りて相應す。當に知るべし此の中不動心解脫に由りて住し、一分の法に於いて思擇し除遣す、謂く遊行と散亂と劬勞との因緣の身心の疲怠なり。一分の法に於いて思擇し忍受す、謂く寒熱等なり、是れを名づけて「所」依と爲す。三種の雜染に於いて離繫するに由る、謂く見雜染及び愛雜

染、尋思雜染なり。見雜染に〔於いて〕離繫することを得るに由るが故に後有の中に於いて心に動搖すること無く。愛雜染〔に於いて〕離繫することを得るに由るが故に諸の境界に於いて漂淪せられず、尋思雜染に〔於いて〕離繫することを得るが故に尋思は唯だ善なるのみにして不善あること無し、是の如きを名づけて此れに由て離繫すと爲す。此の四種靜慮の無動三摩地に依りて第一の現法樂住に安住するを、是れを名づけて〔所〕依と爲す。無學の心善く解脫すると慧善く解脫すると而も共に相應するに由る。又愛を離るとは第二身に於いて復た生ぜざるが故に、涅槃の舍に於いて退轉すること無きが故に、無上圓滿なる德を剋證するが故なり。此の五相に由りて應に知るべし圓滿に第一住に住すと。

復た次に、嗢柁南に曰く、

〔四〇〕『二品の總略と三の異あると、勝解と斷と流轉と有性と、不善淸淨と善淸淨と、善說と惡說との師等の別なり。』

〔四一〕略して三處に由りて總じて一切の黑品白品を攝す、一には偏知する所の法に由るが故に、二には偏知するに由るが故に、三には偏知することを成ずるに由るが故なり。偏知する所の法とは、謂く苦諦集諦なり、當に知るべし總じて一切の黑品を攝すと。偏知すとは、謂く滅諦なり、當に知るべし此れに白品の一分を攝すと。偏知することを成ずとは、謂く〔四二〕補特伽羅及び道諦なり、補特伽羅は是

【四〇】總頌十一門の中第七門に二品を釋する別頌なり。此の別頌の中に復た十一門を列し、長行に於て次第に釋す。

【四一】二品の總略を釋す。

【四二】今は佛、菩薩、聖弟子を指す。

れ假有なりと雖も當に知るべし亦た是れ白品の所攝なりと。此れ卽ち如來、諸の聖弟子は世俗諦及び勝義諦に於いて皆な悉く善巧にして、(一四三)二の道理に依りて如實に隨觀す。(一四四)俱に記すべからずとは、謂く如來は滅後若くは有なり、若くは無なり、亦は有亦は無なり、非有非無なること皆な取るべからず亦た記すべからず。所以は何ん、(一四五)具に勝義に依れば彼れ不可得なり、況んや其の滅後或は有なり或は無なるをや。若し世俗に依れば諸行に於いて如來を假立すると爲し、涅槃に於いて、若くは諸行に於いて如來は滅後に一行として流轉し得可きことあること無しと爲す。爾の時何れの處にか如來を假立せん、既に如來無し何ぞ有無等あらん。若し涅槃に於いては涅槃は唯だ是れ行の顯はす所無く、諸の戲論を絕す、自ら內に證る所にして戲論を絕するが故に施設して有と爲すも道理に應ぜず、亦た復た應に有に非ずと施設すべからず、當に(一四六)妙有寂靜なりと施設する涅槃を損毀すること勿れ。又此の涅槃は極めて知り難きが故に、最も微細なるが故に說いて甚深と爲し、種種にして一に非ず、諸行煩惱斷じて顯はるる所なるが故に說いて廣大と名づけ、現量比量及び正教量の量らざる所なるが故に說いて無量と名づく。

(一四七)復た次に、三の因緣に由り內の荷擔の苦と外の荷擔の苦と其の差別あり、一には所荷擔、二に

【一四三】二の道理とは世俗諦及び勝義諦なり。

【一四四】因に記すべからざる法を明す。

【一四五】如來は假りに身を現す、本來眞如の不可得の相にして有無を論ずべきにあらず。

【一四六】妙有寂靜とは妙有眞空と同じ、有にあらず無にあらず亦は有亦は無なるを眞空妙有と云ふ。

【一四七】三の異りあるを釋す。今第一內外の荷擔の異りを示す。

は能荷擔、三には荷擔の時なり。謂く外の荷擔は色の一分の攝なり、或は稈、或は薪、或は餘の種類は是れ所荷擔なり、愚夫は乃ち一切の諸行を以て所荷擔と爲す。又外の荷擔の屬して身肩に在るは是れ能荷擔なり、愚夫は乃ち一切の愛蘊を以て能荷擔と爲す。又外の荷擔は唯だ現肩を以て所擔を荷擔す、愚夫は乃ち一切の受蘊を以て所擔を荷擔し、所擔を捨てんと欲すれば要ず並に蘊を除き、別の方便無くして能く棄捨す、乃至未だ所擔を捨つる能はざる來たは恆常に大重擔を荷擔するが故に、尫劣、微弱、細輭、不靜なる肩に執持するが故に、長時に無間に所擔を荷ふが故に内に〔一四八〕三德の領受あり、是の如く衆苦を荷擔す。外には則ち然らず。是れを二種の荷擔の差別と名づく。

〔一四九〕復た次に、五種の相に由りて愚夫の内縛と彼の外縛と而も差別あり。謂く(一)彼の外縛は色の一分の爲めに繫縛せらる、或は木、或は鐵、或は索に繫〔縛〕せられ、愚夫は乃ち諸行の爲めに縛せらる。又(二)彼の外縛は他の縛に縛せられ、愚夫は乃ち自縛の爲に縛せらる。又(三)彼の外縛は縛〔及び〕縛する因緣、〔一五〇〕脫〔及び〕脫する方便を了知すべきと易きも、愚夫の内縛は一切知り難し。又(四)彼の外縛は死後には卽ち無きも、愚夫の内縛は死後に諸行隨逐し、往來循環して捨せず。又(五)彼の外縛は所有出家の能く諸欲を捨つる〔もの〕は、便ち解脫を得、一切の怨讎拘礙することを能はず、愚夫の内縛は欲を離るることを得ると雖も、乃至有頂

【一四八】三德とは恆常に大重擔を荷擔するが故に等の三句を言ふ。

【一四九】第二内外縛の異りを示す。

【一五〇】脫とは解脫なり。

「天」すら尚ほ未だ脱すること能はず。況んや唯だ出家をや。當に知るべし此の中欲を離れたる位に在りては魔羂も彼に於いて自在を得ず、未だ欲を離れざる位にては便ち自在を得、其の出家の位にては未だ魔手を脱せず、若し在家の位にては欲に隨つて作し、未だ欲を離れざる位にては魔縛に縛せられ、世間道に由りて有頂「天」に生ずと雖も未だ魔羂を脱せずと。

〔一五二〕復た次に。略して四相に由りて當に如來と慧解脱の阿羅漢等との同分異分を知るべし。一種の相に由りて説いて同分と名づく、謂く解脱等しきが故なり。三種の相に由りて説いて異分と名づく、謂く(一)現に等覺するが故に、(二)能く説法するが故に、(三)正行を行ずるが故なり、此の中(一)如來は師無くして自然に三十七の菩提分法を修し、現に等正覺し、(二)等正覺し已つて徧く勝義に依りて、若くは現法に能あるもの、能無きもの、若くは現見する法、現見せざる法に於いて一切種に於いて皆な悉く了達す、是れを自然に菩提を等覺すと名づく。(三)是の如く勝義の法を了達し已つて其の二障に於いて善く解脱を得、謂く習氣諸の煩惱障及び所知障を除き、(四)諸の天衆及び餘の世間の爲めに解脱の師と爲り獨一にして二無し。當に知るべし是の如き四相を了達するを是れを自然に菩提を等覺すと名づくと。此れに由りて諸の聲聞と共せざるなり。又他の義に依つて所作等を作し能く正法を説くに、五種の相に由りて、當に不共なることを知るべし。何等を五と爲すや。一には如來は如實に了知して一切種の道を道と爲し、一切種の非道を

【一三】第三如來と阿羅漢との異りを示す。

非道と爲す。二には知り已つて如實に是れは道なり〔是れは〕道に非ずと宣說す、道に趣き非道に趣かざらしめんが爲めなり。三には若し說く所の道の如く樂欲し勤行する〔もの〕あれば彼の行をして方便を攝受し、理の引く所の如く正道を作意せしめんが爲めに敎授門を以て爲めに宣說す。四には彼れ聖敎の如く行ずる時若し止觀を障礙する過失あれば皆な除遣せしむ。五には若し彼の法に隨順するものあれば皆な攝受せしむ。是れを能く不同分法を說くと名づく。此の中正行の不同分とは、謂く彼の聲聞は先に如來に依り後に正行を行ず、夫れ如來は少しの所依なし。又彼れは聲聞種性を成就し、正行を行じ、佛如來は自の種性を成ず。又彼の聲聞は或は已に成熟し、或は當に成熟すべし、最後有の菩薩の身中には〔一五二〕二行得可きにあらず。若くは未熟の者は彼れ道に隨つて行じ能く熟し、當來に成熟すること相續し、若くは已熟の者は彼れ現法に於いて大師と成り、此の如き二種を敎ふ、(一)其の聖敎の如く卽ち是の如く行じ、若くは(二)道に隨つて行ずれば彼れ來世に於いて當に涅槃を證すべしと。若し現法に於いて大師と成り彼を敎ふれば此の身に依りて便ち聖道、道果の涅槃を證す、卽ち此れ聖道及び聖道の果なり、無損の樂なるが故に如實なる法と名づけ、饒益する性なるが故に又說いて善と爲す。

〔一五三〕復た次に、諸行の中に於いて略して二種の無我の勝解あり、一には聞思の增上の勝解、二には修證の增上の勝解なり。此の中聞思の增上の勝解は能く修證の增上の勝解の與めに生ずる依止と作

〔一五二〕二行とは成熟、不成熟のこと。
〔一五三〕勝解を釋す。

る。諸の善男子は淨信にして出家し、復た〔二五四〕此に在りて極善に殷到すと雖も且つ其の中に於いて應に喜足すべからず、要らず〔二五五〕此れを〔所〕依と爲して諸行の中に於いて漸次に無常等の想を修習し、無我の增上の勝解を證得し、彼の證をして轉た增勝ならしめんが爲めの故に方に觀解を修す。

〔二五六〕復た次に、四種の相に由りて應に知るべし諸行に二種の斷あることを。何等をか四と爲す。一には諸纏斷ずるが故に、二には隨眠斷ずるが故に、三には後有の諸行の因性斷ずるが故に、四には現在の諸行の染行斷ずるが故なり。是の如き四種を當に知るべし、總說して二種の斷と爲す、謂く煩惱斷及び事斷なり、前の三相を煩惱斷と名づけ、後の一相を說いて事斷と爲す。

〔二五七〕復た次に、欲界の中の諸行流轉する初中後の位に於いて當に知るべし略して三種の密苦ありと。一には生るる時其の胎藏の爲めに覆障せらるるが故に覆障の苦あり、二には生れ已つて嬰稚の位に處して疾病の苦多し、三には衰耄せる諸根成熟して老死の苦あり。又彼の諸行流轉し生起する初中後の滅は、當に知るべし卽ち是れ三種の苦滅なりと。

〔二五八〕復た次に、三の有性あり、彼れを斷ぜんが爲めの故に諸の聖弟子は當に勤めて修學すべし。一には過去を因と爲す有性に依る、是の因緣に由りて淨信にして家を捨てて非家に趣き、深く過患を見て諸欲を厭棄す。二には未來に生ずる所の諸行を因と爲す有性に依る。三には現在に未だ意樂の雜染

〔二五四〕淨信に在りて。
〔二五五〕聞思を所依と爲して。
〔二五六〕斷を釋す。
〔二五七〕流轉を釋す。
〔二五八〕有性を釋す。

を斷せざる有性に依る。是の如き三種の有性を斷せんが爲めの故に三の斷あり。謂く(一)顧戀無きが故に、(二)欣樂せざるが故に、(三)斷「界」と離欲「界」と滅界とを集成するが故なり。

（一五九）復た次に、諸行の中に於いて略して二種の增上慢を離れ無我を觀ずる見あり。何等をか二と爲す。一には不善清淨、二には善清淨なり。云何んが名づけて不善清淨と爲すや。謂く一あるが如き遠離して住し。諸行は無常の性なりと觀ずる忍〔智〕に依り、（一六〇）世間智に由りて無我の性に於いて勝解を發生し。此の勝解に因りて眼所識の色乃至意所識の法等に於いて隨つて觀察し、我我所の相現行せざるが故に說いて名けて斷と爲す。又能く四の外の（一六一）繫に攝する所の貪瞋癡の三種の所有を制伏す。謂く、貪欲身の繫に攝する貪の所有と、瞋恚身の繫に攝する瞋の所有と、餘の（一六二）二身の繫に攝する癡の所有なり。當に知るべし此の中極めて鄙穢なる義は是れ所有の義なりと。增上慢を離れたる無我智の者は如理なる作意共に相應するが故に、定地に攝するが故に、當に知るべし、此の智は二の因緣に由りて不善清淨なりと。一には卽ち此の時に於いてす、謂く順決擇分の善根の位に趣入する時に於て麤なる我慢ありて隨入し、微細に現行し作意し〔有〕間無間に轉ず。是の因緣に由りて是の如き念を作さく、我れ今空に於いて能く修し能く證す、空は是れ我が有なり、是の空に由るが故に我を計して勝れたりと爲すと。空の如く無相及び無所有も當に知るべ

【一五九】不善清淨と善清淨とを釋す。

【一六〇】世間智とは有漏智なり。

【一六一】繫とは繫縛のこと。

【一六二】二身とは愚癡及び睡眠なり。

し亦た爾なりと。二には能く彼の法をして現行せしむる因緣なり、謂く諸欲或は薩迦耶の染愛ある識に於て。是の如く染愛ある識に由りて徧く了知せざる增上力の故に、便ち諸欲、薩迦耶の愛の爲に漂溺せらる。此の意樂に由りて彼の涅槃に於いて趣入すること能はず、其の心退還すること前に已に說けるが如し。又八相に由りて能く徧く了知し、徧く了知するが故に諸の過患を除く、當に知るべし是れを極善清淨と名づくと、增上慢を離れたる無我の眞智なり。【一六三】又(一)此の中に於いて已に滅壞するが故に、滅壞する法なるが故に說いて無常と名づく。(二)諸の業煩惱の集成する所なるが故に說いて有爲と名づく。(三)昔の願力に由りて集成する所なるが故に思より造らると名づく。(四)自の種子の現在の外緣より集成する所なるが故に說いて緣より生ずと名づく。(五)未來世に於いて衰老する法なるが故に說いて老と名づく。(六)死歿する法なるが故に歿する法と名づく。(七)未だ老死せざる、疾病等の種種なる災橫の爲めに逼惱せらるるが故に破壞する法と名づく。(八)現量に依るに由りて能く欲を離るるが故に能く斷滅するが故に現法に於いて欲を離るる法及以び滅する法を得と名づく。當に知るべし此の中欲を離るる法及以び滅する法を除いて、所餘の相に由りて略して三世所有の過患を觀じ、所除の相に由りて彼の出離を觀ず。若し是の如き過患の出離に由って徧知すれば彼の識を善く徧知すと名づく。一切の法の中に我性あると無きを諸の法印と名づく。即ち此の法印は道理を隨喬する法王の造る所なれば諸聖の身に於いて

【一六三】以下八相を出す。

惱害を爲さず、隨喜して能く（一六四）一切の聖財を得、此れに由りて自然に吉安にして生死の廣大なる險難の長道を超度す、是の故に亦た衆聖、法印と名づく。當に知るべし此の中前に由るを通達智と名づけ、後に由るを善淸淨の見と名づくと。

（一六五）復た次に、應に五種の相に由りて（一六六）內外の法師及び弟子に於ける高下の差別を知るべし。一には住に由るが故に、二には衆を御するに由るが故に、三には論の決擇に由るが故に、四には建立し開顯する道に由るが故に、五には行に由るが故なり。謂く諸の外道の師及び弟子は恆に常に憒鬧なる住〔所〕に住し、內〔道〕の法師〔及び〕弟子は時時に極めて寂靜なる住〔所〕に住す。是れを第一の高下の差別と名づく。又外道の師は自らの（一六七）有量なる出家の弟子に由りて諸の外道の僧を說いて僧ありと名づけ、自らの有量なる在家の弟子に由りて諸の外道の衆を說いて衆ありと名づけ、彼の一切共に許して師と爲ることを希ふが故に衆師と名づけ、愚類の衆生咸く有德と謂ふ、是の故に說いて共推する善色と名づく。當に知るべし如來は彼れと相違す、一切の天及び世間無上の大師たりと雖も彼の同く尊ぶに於て冀ふ所無しと、「是れを第二の高下の差別と名く」。又外道の師は自らの弟子と共に議論を興し之を決擇する時、凡そ所說あれば展轉して意解し、各各に差別して相ひ扶順せず、轉た愚昧を增し其の智を淨ふするに非ず、當に知るべし

【一六四】七聖財卽ち信、戒、聞、慚、愧、捨、慧なり。

【一六五】善說と惡說との師等の別を釋す。

【一六六】內外。內とは內道卽ち佛道、外とは外道なり。

【一六七】有量とは有限なり。

内法と彼と相違するとを、「是れを第三の高下の差別と名づく」。又外道の師は諸の弟子の爲めに無因不平等因に依止して其の道を施設し建立して開顯す。是の如き不正法を聽聞するが故に大羅刹の爲めに其の心を嬈亂せらる。又不正なる尋思と相應する非理なる作意に由りて其の心散動す、他に於て懷く所の勝負の心を以て他を呰責せんに、若し他のもの反詰すれば便ち卒暴を興し、審に思擇せずして、輕しく言詞を出す。自ら無因不平等因の爲めに覆藏せらるるが故に名づけて雜染と爲し、此に由りて愚夫は染の因緣に於いて若くは自、若くは他如實に知らざるが故に愚昧と名づけ、清淨を離るるが故に不明了と名づけ、清淨の因に於いて善巧ならざるが故に說いて不善と名づく。又乃至所說に應ずる語、所說の如き語、〔一六八〕是處の說語、是の如き一切に於いて如實に知らず、是の故に彼を說いて量を知らずと爲し、〔一六九〕田を知らずと爲す。當に知るべし内法は彼と相違すと、「是れを第三の高下の差別と名づく」。又諸の外道の師及び弟子は異說無しと雖も所說減ずる無く顚倒無きが故に、流漫せずと雖も所說增す無く加益無きが故に、等しと雖も所說の義相似たるが故に、是法なりと雖も說文平等なるが故に、復た法及び隨法を記別すと雖も然も同法に於いて樂んで朋黨を爲す。當に知るべし彼れ法に隨つて法を行ずる〔一七〇〕自義を證得するに於いて不放逸なる者も尙ほ得ること能はず、況んや縱逸なる者をや。彼れ是の如く自義を

【一六八】是處。是とは是不是の中の是、處とは處非處卽ち理非理の中の理なり、正理のことを是處と云ふ。

【一六九】田とは量の義歟、宋元明三本恩に作り、『瑜伽略纂』には因に作る。

【一七〇】自義は自利に同じ。

得ざるに由りて便ち他論の爲めに幷に彼れの受けたる所の諸の惡邪法を制伏し輕毀せらる。當に知るべし内法は彼れと相違することを。是れを第五の高下の差別と名づく。是れを五種の高下の差別と名づく。

〔一七一〕復た次に、四種の相に由りて當に知るべし諸行は定んで苦樂に非ず、又四相に由りて定んで樂淨に非ず。是の如き四相は總じて三事に依ると。何等をか三と爲す。一には生處に依るが故に、二には受に依るが故に、三には世に依るが故なり。

〔一七二〕此の中樂とは、謂く第三靜慮に在り。樂の隨ふ所なりとは、謂く人中に在り二種あるべし、喜樂偏しとは、謂く初二靜慮に在り、未だ永へに樂を離れずとは、謂く第四靜慮已上に在り。〔一七三〕此の中苦とは、謂く餓鬼及び傍生に在り、苦の隨ふ所なりとは、謂く人中に在り。憂苦偏しとは、謂く那落迦に在り、未だ永へに苦を離れずとは、謂く上の天衆の中に在り、〔一七四〕當苦の隨ふ所なるが故なり。〔一七五〕又樂と言ふは、謂く不苦不樂受の現在前する位なり、樂の隨ふ所なりとは、謂く苦受の現在前する位なり、喜樂偏しとは、謂く樂受の現在前する位なり、永へに樂を離れずとは、謂く一切の位に於いて樂因の隨ふ所なるが故なり、若し此れと相違するは當に知るべし苦の差別なりと。〔一七六〕又樂と言ふは、謂く樂に順ずる行及び樂の已に滅せるなり、樂の隨ふ所なりとは、謂く樂の因ありて未來世に於いて當に

【一七一】苦樂不定を釋す。苦樂不定に類い等の字に略取せられたる一門なり。
【一七二】生處に依る樂の四相を述ぶ。
【一七三】生處に依る苦の四相を述ぶ。
【一七四】當苦とは未來の苦なり。
【一七五】受に依る樂の四相を述べ苦の四相を略す。
【一七六】世に依る樂の四相を述べ苦の四相を略す。

樂を生起すべきなり、喜樂徧しとは、謂く現在に於いて樂處に隨順するなり、未だ永へに樂を離れずとは、謂く（二七）餘の二世なり。此れと相違するは苦の差別の四「相」なり、應ずるが如く當に知るべし。

【二七】餘の二世とは過去及び未來なり。

卷の第八十八

攝事分中契經事行擇攝第一の四

復た次に、嗢柁南に曰く、

(一)『二智幷に其の事と、樂等の行の轉變と、請と無請との說經と、涅槃に二種あるとなり。』

(二)智に二種あり、一には正智、二には邪智なり。此の中正智は(三)事あるに依りて生ず、邪智も亦た爾なり。此の二智倶に事あるに依ると雖も然も正智は如實に事を取り、邪智は邪に分別して如實に事を取らず。正敎の如理なる作意を前行と爲ることあるに由るが故に所知の境に於いて正智生ずることを得、邪敎の非理なる作意を前行と爲ることあるに因るが故に所知の境に於いて邪智生ずることを得。正智生じて所知の境を壞するには非ず、但だ此の境に於いて邪執を捨てて正執を起すのみ、闇中の色の如し、明燈生ずる時此の色を壞せず、但だ能く照了するのみ、當に知るべし此の義も復た是の如しと。

(四)復た次に、樂受に隨順する諸行と無常相と共に相應するが故に若し苦位に至れば爾の時說いて損

【一】總頌十一門の中第八門に智事を釋する別頌なり。此の別頌の中に復た四門を列し、長行に於て次第に解釋す。
【二】二智並に其の事を釋す。
【三】事とは所緣の境なり。
【四】樂等の行の轉變を釋す。

惱迫迮すと名づけ、若し不苦不樂の位に至れば爾の時方に行苦に於いて苦迫迮すと名づけ、若し彼の位に至らざれば便ち應に畢竟して唯だ樂受に順ずるのみにして餘位に至ることなかるべし。又生老等の法に隨ふ所の諸行は皆な悉く是れ苦なり、彼れ若し疾病の位に至れば說いて損惱迫迮すと名づけ、若し〔五〕生等の苦の位に至れば苦迫迮すと名づけ、若し彼の位に至らざれば諸行の中に於いて生等の苦因に隨逐せらるるも果位に至ることなし。又本性諸行は衆緣より生ずるが故に〔六〕自在を得ず亦た〔七〕宰主無し、若し宰主あれば彼の一切の行は性無常なりと雖も應に所樂に隨つて流轉するも絕えず或は生せしめざるべく、廣く說かば乃至〔八〕死に於いて「も亦爾なりと」す。

〔九〕復た次に、二種の契經あり、一には請に因つて說きたまひ、二には請に因らずして說きたまふ。請に因つて說きたまふとは、謂く若し補特伽羅にして此の諸の行相の教に由りて調伏する者あらんに、彼の請に因るが故に爲めに是の如き諸の行相の教を轉じたまふなり。請に因らずして說きたまふとは、謂く若くは彼の多百の衆の中に於いて無量なる門を以て美妙なる說を作し、或は大師、近住の弟子の阿難陀等の爲めに是の如き說を作すなり、正法をして久住することを得せしめんが爲めの故なり。

〔一〇〕復た次に、當に知るべし三分に由るが故に圓滿なる涅槃を攝受すと。一には教授に隨順するに

【五】生老病死の四苦。
【六】自在とは我の作用なり。
【七】宰主とは萬物の支配者、我の異名なり。
【八】死せざるべし。
【九】請と無請との說經を釋す。
【一〇】涅槃に二種あるを釋す。

由るが故に、二には正しく一切の行を觀察するに由るが故に、三には一切の煩惱を永へに斷ずるに由るが故なり。教授に隨順すとは、謂く（一）教誡、記說、神變の所攝なり。如來彼の心を記說せんと欲するに隨つて自らの定意に由りて三の行相を以て徧く（二）他の心を照らす、［他の心とは］若くは展轉して久遠に滅せる心、若くは無間に滅する心、若くは現在の所緣に於いて轉ずる心なり。定より起ち已つて以て定內に愛する所の他心を隨念し分別し思惟し、其の受くる所の如く卽ち是の如く記す、汝是の如き心あり、謂く久遠に滅せる者は是の如き意なり、謂く無間に滅する者は是の如き識なり、謂く現在の者は此れ種類に據るも刹那に據らずと。卽ち是の如き記說に神變を依止と爲るを以ての故に其の三處に於いて教誡を爲す。一には行處の現前する境界に於いて如理なる作意を開許し、不如理なる作意を遮止す。二には住處に於いて不正なる尋思を遮止し、正しき尋思を開許す。三には止觀を勤めて修行する處に於いて未だ斷ぜざる諸行を斷せしめ、及び煩惱永へに離繫することを得て涅槃を證せしむることを開許す。是の如く宣說して三處に從つて諸の隨煩惱をして心に清淨なることを得せしむ、謂く行處、住處、依處に從ふ。又正しく過去未來現在の諸行を觀察するを正しき觀察と名づく。一切の諸行に又三漏あり、（三）三漏を（四）先と爲して欲害あ

【一】教誡等は佛三輪の說法なり。教誡輪は口業の說法、記說輪は意業の說法、神變輪は身業の說法なり。

【二】他人の心を知るを他心智と云ふ。

【三】三漏とは（一）欲漏、欲界の煩惱、（二）有漏、色、無色界の煩惱、（三）無明漏、三界の癡煩惱なり。

【四】先と爲すとは先因と爲すなり。

り、欲害を先と爲して尋思の熱惱あり、尋思の熱惱を先と爲して追求の憂惱あり、是の如き一切をば皆な永へに斷ず、故に說いて一切の煩惱を永へに斷ずと名づく。是の如く心善く解脫せる無相樂住に安住して恐怖無き時を現法の中に於いて圓滿なる般涅槃處に入ると名づく。又三法に依りて自義に依止するを歸依に住すと名づけ、他義に依止するを洲渚に住すと名づく。何者をか三と爲す。一には內の如理なる作意を先と爲して法に隨つて法を行ずるに依る、二には佛の所說の正法を聽聞するに依る、三には正法に親近する內の善士に依り、餘の正法の外に親近する一切の外道の諸の不善士に依らず。是の如き三法は當に知るべし八中の四種の多くの所作の法を顯示すと。謂く(一)善士に親近し(二)正法を聽聞し(三)如理に作意し(四)法に隨つて法を行ずるなり。復た三緣及び五種の相に由りて當に知るべし彼の分涅槃を證得すと。何等か三緣なる。一には徧く苦を知るが故に、二には深く一切の苦行に隨順する諸の過患を見るが故に、三には愁等の一切の苦を超過するが故なり。云何んが五相なりや。一には苦の種類相變滅する時愁等を發生すと知る。是れを苦に於いて徧く自性を知ると名づく。二には種子ありて彼の當生ずることを出るを知る、是れを集に於いて徧く因性を知ると名づく。三には自らの所行所知の境界を知る、是れを[illegible]に於いて徧く緣性を知ると名づく。四には我所及び我に執著するは皆な是れ能く衆苦の諸行に順ずと隨觀す、是れを[illegible]に於いて徧く行性を知ると名づく。五には三世の欲界所繫の諸行の過患を隨觀して能く一切の愛等の諸苦を斷ず。當に知るべし此の三緣

五相に由りて是の如き彼の分涅槃を獲得すと。可愛の事の無常轉變するに因りて悲傷し心感ふるが故に名づけて愁と爲し、彼に由りて言を發し咨嗟し歔欷するが故に名づけて歎と爲し、此に因つて膺を拊するが故に名づけて苦と爲し、內に冤結を懷くが故に名づけて憂と爲し、玆に因つて迷亂するが故に名づけて惱と爲す。又財寶を喪失し、無病なる親戚等の事隨一現前して憂惱を生ずるを以て說いて名づけて愁と爲し、此に由り依るが故に次に乃ち言を發し哀吟し冤なりと悲しみ、身を擧げて煩熱するを歎と名づけ、苦の位は此の愁歎を過ぎ、身煩熱し已つて內燒け外靜にして心猶ほ未だ平ならざるを說いて憂の位と名づけ、初日を過ぎ已つて或は二、三、五、十の日夜月に彼の因緣に由りて意尙ほ未だ寧かならざるを說いて名づけて惱と爲す。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(二五)『諍と芽と見大染と、一趣と學と四怖と、善說惡說の中の、宿住念の差別なり。』

(二六)四の因緣に由りて、如來は世間の迷執と共に怨諍を爲さざれども。然も彼の世間のもの邪なる分別を起して謂つて怨諍と爲す。何等をか四と爲す。一には道理の義を宣說するが故に、二には眞實なる義を宣說するが故に、三には利益の義を宣說するが故に、四には有時は世に隨つて轉ずるが故なり。(二七)此の中如來は四の道理に依つて正法を宣說したまふこと前の如し。所謂觀待道理、作用道理、

【二五】總頌十一門の中第九門に諍を釋する別頌なり。此の別頌の中に復た七門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【二六】諍を釋す。

【二七】第一の因緣を述ぶ。

因成道理、法爾道理なり、此れに由て如來を法語者と名づく。如來は終に故に他所に往いて諍を興す事を求めず。所以は何ん、諸の世間のもの（一八）他義に違返するを謂つて（一九）自義と爲るに由るが故に諍論を興すも、如來は乃ち一切の他義を以て卽ち自義と爲すが故に諍ふ所無し、唯だ、哀愍して其をして義を得せしむるが故に、他所に往きて爲めに正法を說かんに而も諸の邪執愚癡なる世間のもの顚倒して妄りに自義我義と謂つて差別あるが故に我の諍を興すを除く、此の因緣に由りて當に知るべし如來を道理語者と名づくと。（二〇）又復た如來を眞實語者と名づく、謂く若し世間の諸の聰敏なる者共に許して（二一）有なりと爲せば、如來は彼れに於いて亦た說いて有なりと爲したまふ、謂く一切の行は皆な是れ無常なり、若し世間に於ける諸の聰敏なる者共に許して（二二）無なりと爲せば、如來は彼れに於いて亦た說いて無なりと爲したまふ、謂く一切の行は皆は是れ常住なり。（二三）又復た如來を利益語者と名づく、謂く諸の世間の盲冥ある者は、自ら世法に於いて了知すること能はず、如來は彼に於いて自ら等覺を現じて爲めに開闡したまふ。（二四）又復た如來は或る時は世間に隨順して轉ず、謂く（二五）阿死羅摩登祇等少事業に依りて以て自ら存活すれば然も諸の世人は彼が爲めに大富、大財、大食の名想を假立す、彼の世人名想を假立するが如く如來も彼れに隨つて亦是の如

【一八】他義とは他利なり。
【一九】自義とは自利なり。
【二〇】第二の因緣を述ぶ。
【二一】有とは有爲法にして因緣生滅の法なり故に無常なり。
【二二】無とは無爲法にして不生不滅なり故に常住なり。
【二三】第三の因緣を述ぶ。
【二四】第四の因緣を述ぶ。
【二五】阿死羅摩登祇とは女の別名、摩登祇は女の總名なり。

く說きたまふ。又一事に一國土に於いて名想を假立し、餘の國土に於て卽ち此の事に於いて餘の名想を立つるが如く。如來も彼れに隨つて亦た是の如く說きたまふ。若し怨を懷きて怨諍を興せば則ち道理語者、眞實語者、利益語者、世に隨つて轉ずる者と名づくることを得ず。是の如き四種の因緣を具するに由る。是の故に當に知るべし如來は無諍なりと。又佛世尊は自然に應に作すべき所の義を觀察し、請問すること無しと雖も而も自ら現に等覺する法を宣揚し、能く稱當せる名句文身を以て諸法の差別を施設し建立したまふ。廣く說くこと前の攝異門分の如し。是の如く當に知るべし乃至說くを平等に開示すと名づくと。

（二六）復た次に、一因二緣は後有の芽をして當に生長することを得せしむ。謂く（二七）五品の行の中（二八）煩惱の種子に隨逐せらるる識を說いて名づけて因と爲し、因と相似する（二九）四種の識住を說いて名づけて緣と爲す。又喜貪は其の識を滋潤し、彼彼の當に生を受くべき處に於いて結生相續して（三〇）薩迦耶を感ぜしむるに由りて亦た名づけて緣と爲す。此の中一あり、〔その〕（三一）四識住に由りて攝受する所依に由り喜貪に由るが故に現法の中に於いて（三二）新新に造集し及以び增長す。彼れ後時に於いて阿羅漢を成じ、識の種子をして悉く皆な腐敗し、

【二六】芽を得す、芽とは種子のこと。
【二七】五品とは五蘊なり。
【二八】煩惱の種子に隨逐せらるる識とは種子を保持する阿賴耶識を言ふ。
【二九】四種の識住とは五蘊の中識蘊を除ける餘の四色蘊也、此の四蘊は識の住する所依なるが故に四識住と云ひ亦緣と云ふ。
【三〇】薩迦耶（Satva-Kaya）は身と譯す。
【三一】四識住乃至所依とは色身を言ふ。
【三二】新新に造集すとは新業を造るなり。

一切の(三三)有の芽をして永く生ずることを得ざらしむ。又復た一の一切の縛を具ふるあり、正行を勤修し、涅槃を欣樂し、徧く一切の諸の生を受くる處に於いて厭逆の想を起す、彼れ縛を具ふるが故に種子壞せず識住和合す、然も諸の有に於いて厭逆の想を起すが故に喜貪無し、彼れ是の如く正行を修するに由るが故に現法の中に於いて般涅槃するに堪へ、其の後有の芽亦た生ずることを得ず。又復た一あり、學地に住し不還果を得、唯だ非想非非想處の諸行のみありて〔殘〕餘と爲し、(三四)有頂定に於いて具足し安住す。彼の識の種子猶ほ未だ一切悉く皆な滅盡せざるも、然も識住に於いて能く徧く了知し、能く徧く通達す。彼の內の忘念の增上力の故に上地の貪愛猶ほ少分を殘す。是の不還果の者は當來の下地の一切の有の芽復た更に生ぜず。此れと相違するは當に知るべし一切の諸の後有の芽皆な生長することを得と。

(三五)復た次に、雜染に二あり、一には見雜染、二には餘の煩惱雜染なり。見雜染とは、謂く諸行に於いて我我所を計して邪執して轉ずる薩迦耶見なり。此の見に由るが故に或は諸行を執して以て實我と爲し、或は諸行を執して實の我所と爲す。復た所餘あり、此を根本と爲る(三六)諸の外の見趣其の餘の貪等の所有煩惱なり、當に知るべし是れを第二の雜染と名づくと。又見雜染をば解脫し得る時亦た

【三三】有とは生なり。
【三四】有頂定とは非想非非想處の定なり。非想非非想處を有頂天と云ふ、三界の最頂上なればなり。
【三五】見大染を釋す。見雜染を見大染と云ふ、其所以下出。
【三六】諸の外の見趣とは薩迦耶見の外の邊見、邪見、見取見、戒禁取見の四見を云ふ。

能く餘に於いて畢竟して解脱するも、餘の雜染をば解脱し得る時卽ち能く諸の見雜染を解脱するには非ず。所以は何ん、〔三七〕此に生ぜる者は世間道に依り乃至能く無所有處の所有貪欲を離れ、諸の〔三八〕下地に於いて其の餘の煩惱心に解脱するを得るも、而も未だ薩迦耶見を脱すること能はざるに由り、此の見に由るが故に〔三九〕下上地の所有諸行の和雜せる自體に於いて差別を觀ぜず、總じて計して我と爲し、或は我所を計し、此の因緣に由りて有頂天に昇ると雖も而も復た退還し、若し是の如き一切の自體に於いて徧知して苦と爲し、出世道に由りて先づ一切の薩迦耶見を斷ずれば、後能く永へに所餘の煩惱を斷じ、此の因緣に由りて復た退轉すること無ければなり。是の故に當に知るべし唯だ見雜染のみ是れ大雜染なりと。

〔四〇〕復た次に、應に知るべし〔四一〕三種の相に由りて道を一趣と名づくと。謂く異生地に於いて五の行相を以て諸行の〔四二〕五處の差別を觀察し、卽ち此の觀察を〔四三〕二時の中に於いて修治し淨からしむ、謂く行に於いて「有」學地及び無學地に向ふ。云何んが名づけて五種の行相には諸行「の五處の差別」を觀察すと爲すや。一には諸行の自性を觀察し、二には諸行の因緣を觀察し、三には雜染の因緣を觀察し、四には清淨の因緣を觀察し、五には清淨を觀察するなり。

〔三七〕此とは上地なり。
〔三八〕下地とは欲界なり。
〔三九〕下上地とは欲界及び上二界なり。
〔四〇〕一趣を釋す。
〔四一〕三種の相とは異生地、有學地、無學地に於て觀察するなり。
〔四二〕五處とは五蘊なり。
〔四三〕二時とは有學位及び無學位の時を云ふ。

(四四)復た次に、應に知るべし異生の位に於いて先づ(四五)五處に於いて善巧なるとを得已つて後、學位に於いて卽ち是の如き五種の處所に於いて更に五種の差別の行相を以て審諦に觀察し、能く速疾なる通慧を獲得せしむと。何等をか名づけて五種の行相と爲すや。謂く(一)諸行と諸行の因緣と雜染の因緣と淸淨の因緣と滅寂靜とを觀察するが故に、(二)淸淨道に趣向し出離するが故に、(三)諸行は種種衆多なる性なるが故に、(四)各自の種子より生起する所なるが故に、(五)各餘緣を待つて生起する所なるが故なり。

(四六)復た次に、應に知るべし四の因緣に由りて(四七)二處に於いて發生する所の恐怖能く障礙を爲すことを。何等をか四と爲す。一には若くは此の位に於いて生起し、二には若くは此の法に依りて生起し、三には若くは彼れ是の如く生起し、四には若くは彼の行相生起するなり。位に「於いて」生起すとは、謂く(四八)非聖位の中に於いて諸の聖諦を生起し未だ善巧なることを得ず、又此の(四九)非聖は四の處所に於ても亦た未だ善巧ならざるなり。「此の法に」依りて生起すとは、謂く諸行に於いて邪なる行相を起し、我我所を計して薩迦耶見を「所」依と爲して生起するなり。是の如く生起すとは、謂く二種の諸行變壞する差別に由つて生起す、一には異緣に變壞せらるるに由るが故に、二には自心に邪なる分別を起して變壞するに由るが故なり。行

【四四】學を釋す。
【四五】五處とは五蘊なり。
【四六】四怖を釋す。
【四七】二處に於いて云云。一には有爲の諸行に於いて怖を生ず、二には涅槃に於て怖を生ず。怖畏を生ずるに由つて其の聖敎及び涅槃に於て受樂を生ぜず、之れを名づけて障礙となす。
【四八】非聖位とは凡夫位なり。
【四九】非聖とは凡夫なり。

相生起すとは、謂く愛する所に於いて未來に當に變壞すべきことを慮恐するが故に恐怖の行相を生じ、正に變壞するに於いては損惱の行相を生じ、即ち愛する所の已に變壞せる中に於いては欣んで彼れ重ねて顧戀の行相を生起す。又涅槃に於いて自體永へに變壞することを分別するが故に怖畏の行相を起す。是の如き行相差別し轉ずる時聖教を愛樂し及び涅槃を愛樂するに於いて能く障礙を爲す。又二種の門に由りて所緣の境自らの所行の處に於いて我我所の執差別して轉ず、謂く(一)推求するが故に、(二)領受するが故なり、即ち(五〇)見及び(五一)受なり。

(五二)復た次に、三種の相に由りて(五三)善說法者惡說法者は等しき事の中に於いて(五四)宿住隨念す、當に知るべし(五五)染淨其の差別ありと。何等をか三と爲すや。謂く惡說法者の宿住隨念は彼の諸行の自相共相に於いて如實に知らず、便ち諸行に於いて全く常なりと計し、或は一分常なり或は非常なりと計し、或は無因なりと計し、善說法者の宿住隨念は如實に知るが故に邪なる分別無し、是れを第一の二念の差別と名づく。又惡說法者は何れの定に依るに隨ふも宿住念を發し、如實に是れ苦なりと了知すること能はず便ち愛味を生じ、愛味に由るが故に過去の行に於いて深く顧戀を生じ、未來の行に於いて深く欣樂を生じ、現在の行に於て、厭離し欲滅することを修行

【五〇】見とは推求なり。
【五一】受とは領受なり。
【五二】善說惡說の中の宿住念の差別を釋す。
【五三】善說法者とは善說の法毘柰耶の中に於て修行する者を云ふ、惡說法者准知。
【五四】宿住隨念。宿住とは過去、隨念とは記憶、過去の事を記憶するなり。
【五五】染淨。染とは惡說法者、淨とは善說法者なり。

すること能はず、善說法者は當に知るべし一切彼れと相違すと、是れを第二の二念の差別と名づく。又惡說法者は是の如き邪行の四種の雜染に雜染せらるるが故に能く後有を感ず。何等をか名づけて四種の雜染と爲す。一には業雜染、二には見我慢纏の雜染、三には愛纏の雜染、四には彼の隨眠の雜染なり。若くは諸の新業をば造作し增長し、若くは諸の故業數數觸し已つて變吐せず、是れを業雜染と名づく。若くは諸行に於て邪に分別し薩迦耶見を起し、他の有情に於いて諸の沙門婆羅門等と己れとを校量するを以て自らを勝れたりと爲し、或は等し或は劣れりと謂ふ、是れを見我慢纏の雜染と名づく。內に於いて、外に於いて起す所の貪欲は愛行の中に於いて應に其の相を知るべし、是れを愛纏の雜染と名づく。相續の中に於いて見と我慢と愛との三品の(五六)麤重常に隨逐する所なり、是れを彼の隨眠の雜染と名づく。是の如き四種を總攝して二と爲す、謂く業と煩惱なり。煩惱復た二なり、纏及び隨眠なり。諸行の中に於いて先づ邪執を起し後に貪著を生ず、此の二種の增上力に由るが故に復た餘の煩惱雜染ありと雖も而も但だ此れのみを取る。爾所の煩惱にして諸行の中に於いて他を校量せず、自ら邪執を起すを說いて名づけて見と爲し、他を校量するを說いて我慢と名づく。是の如き邪執は是れ無明品なり、此を先と爲るに由りて貪著を發起するを名づけて愛品と爲す。此の(五七)二種の根本の煩惱に由りて生死の中に於いて流轉すること絕えず、若し善說の法毗柰耶の中に正しく修行す

【五六】麤重とは煩惱の種子なり。

【五七】二種とは無明品及び愛品なり。

る者は能く是の如き四種の雜染を斷じ、現法の中に於いて能く般涅槃す。又此れに由るが故に能く究竟圓滿の涅槃に住す、若し爾らざる者は尙ほ彼の分涅槃にすら住すること能はず、何に況んや究竟なるをや、是れを第三の二念の差別と名づく。又此の中に於いて見及び我慢を說いて高視と名づけ、愛を說いて煙と名づく。何となれば諸行の中に於いて見と我慢との爲めに覆障せらるる者は如實に其の性弊劣なる諸行の體相を知らずして、人天の身及び彼の衆具に於いて謂つて高勝なりと爲す、是の故に彼の二を說いて高視と名づく。愛は猶し煙の如く心をして擾亂し安隱なることを得ざらしむ、是の故に煙と名づく。

復た次に、嗢柁南に曰く、

〔五八〕『厭患無きと無欲と、亂るる無く問起すると相と、障と希奇と無因と、毀とにして純染は俱に後なり。』

〔五九〕二の信者あり而も信者の所作に稱當するに非ず。何等をか二と爲すや。一には在家の信者なり、涅槃あること及び一切の行は是れ無常の性なることを信ずるも、然も諸行に於いて過患を觀ず、厭離して住せず、出離することを知らずして之を受用す。二には家法を捨離し非家に趣く淨信ある者なり、彼れ涅槃に於いて猛利なる樂欲に安住すること能はず、此の欲を用て所依止と爲し、常に勤めて所有善法を修習せず、現法の中に於いて般涅槃せざるなり。此と相違するは應に知るべし信者の所作

【五八】總頌十一門の中第十門に無厭を釋する別頌なり。此の別頌の中に復た八門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【五九】厭患無きと無欲とを釋す。

に稱當するなりと。

（六〇）復た次に、內法の中に於いて略して二種の聰明を具ふる者あり。若し淨信なるあらんに或は諸の外道來つて請問する時能く（六一）亂ること無くして記す、謂く中道に依るなり、諸行の中に於いて生滅を問ふ時は（六二）有情を增さず、實事を滅せず、唯だ諸行に於いて生滅を安立して亂れずして記す。若し有情に〔實に〕生あり〔實に〕滅ありと立つれば是れを（六三）一邊と名づく、謂く（六四）增益の邊なり。若し生滅して都て所有無しと立つれば是れ第二邊なり、謂く（六五）損減の邊なり。唯だ諸行に於いて生滅を安立する、是れを中道にして二邊を遠離すと名づく。是の故に若し能く是の如く記別するを善く記別すと爲す、如來の讚したまふ所なり。或は復た言へることあり、何の因緣の故に乃ち沙門（六六）喬答摩の所に於いて梵行を修習するやと。若し此の問を得ば應に前の如く記すべし。增益、損減の二邊を遠離し、中道に依りて記するを亂れずして記すと名づく。若し有情染淨を修習すと謂はば是れを一邊と名づく、謂く增益の邊なり。若し一切都て修習すること無しと謂はば是れ第二邊なり、謂く損減の邊なり。若し諸行の爲めに厭離し欲滅して修習

【六〇】亂るる無く問起するを釋す。

【六一】亂るること無くして記答する。

【六二】有情を增さずとは有情に於て增益の執の起さざるを云ふ。增益の執とは假有なる有情を實有なりと執する常見なり。

【六三】一邊とは一の邊見、邊見とは偏見なり。

【六四】增益の邊とは常見なり、假を實とし、無を有とするが故に一法の上に增益するところあり。

【六五】損減の邊とは斷見なり、有を無とするが故に一法の上に損減するところあり。

【六六】喬答摩(Gautama)は釋種の姓、今は釋尊を指す。

すれば是れを中道にして二邊を遠離すと名づけ、是の故に此の記を亂れずして記すと名づけ、名づけて善く記すと爲す。當に知るべし此の記は諸佛の讃したまふ所なりと。

(六七)復た次に、法に二種あり、一には有爲、二には無爲なり。此の中有爲は是れ無常の性なり、(六八)三有を相と爲して施設することを得可し、一には生、二には滅、三には住異性なり。是の如き三相は二種の行の流轉に依つて安立す、一には生身展轉して流轉するに依り、二には刹那に展轉して流轉するに依る。初の流轉に依るとは、謂く彼彼の有情の衆同分の中に於いて初めて生ずるを生と名づけ、終沒するを滅と名づけ、二の中間の嬰孩等の位に於いて住異性を立て、乃至壽住するを説いて名づけて住と爲し、諸位「に於て」後後轉變する差別を住異の性と名づく。後の流轉に依るとは、謂く彼の諸行刹那刹那に新新に生ずるを説いて名づけて生と爲し、生ぜる刹那の後住せざるを滅と名づけ、唯だ生ぜる刹那のみ住するが故に住と名づく。異性に二あり、一には異性の異性、二には轉變の異性なり。(六九)異性の異性とは、謂く諸行相似し相續して轉ずるなり。轉變の異性とは、謂く相似せずして相續して轉ずるなり。此の異性は住相を離れて外に別體として得可きに非ず、是の故に(七〇)二種を總攝して一と爲して(七一)一相を施設す。此れと相

【六七】相を釋す。
【六八】三有。生住異滅の四相の中住異の二相を合して一相となして三相とす。
【六九】異性の異性とは同一の法前後生滅して念念別なるを云ふ。前念は後念に異り後念は前念に異るが故に異性の異性と云ふ、前後異ると雖も前後同一法の相續なるが故に相似し相續すと云ふ。
【七〇】二種とは住相異相なり。
【七一】一相とは住異相なり。

達するは應に知るべし常住無爲の三相なりと。

(七二)復た次に、應に知るべし涅槃の資糧を修習するに略して三障あり、一には廣き事業に依り財寶具足して多く放逸を行ずるなり、二には善知識の方便して曉喩する無きなり、三には未だ正法を聞かず、未だ正法を得ず、忽に死緣に遇つて非時に夭沒するなり。此れと相違するは當に知るべし無障なり亦た三種ありと。又諸の聖者將に終らんと欲する時略して二種の聖者の相あり、謂く臨終の時(一)諸根澄靜にして(二)佛の(七三)所記を蒙るなり。二種の相に由りて佛過世の一切の聖者の爲めに記別したまひ、聖性の種姓滿つるが故に但だ(七四)物類のみを記したまふ。我れ已に法及び隨法を了知すとは、法とは謂く正見の前行たる聖道の言なり、隨法とは謂く彼の法に依りて他の音を聽聞して如理に作意するなり。又我れ未だ曾て正法の所依處を惱亂せずとは、謂く此の義の爲めに如來生命し、及び此の義の爲めに宣說する所あり、乃至諸漏をして永へに盡さしめんが爲めなり。彼れ此れに由るが故に已に漏を盡すことを得たり。

(七五)復た次に、諸佛如來に略して二種の甚だ希奇なる法あり、謂く(一)未だ信せざる者をば信せしめ、已に信せる者をば增長せしめ、(二)速に聖教に於いて悟入することを得せしむ、謂く大師の相、或は法教の相、或は已に第一の德を證得せる相にして普ねく十方に於いて美妙なる聲稱廣大なる讚

【七二】障を釋す。

【七三】所記とは記別なり。

【七四】物類とは沓婆摩羅弗多羅(Dravya-mallaputra)の譯名、亦物力士、財力士とも譯す、羅漢の名なり。

【七五】希奇を釋す。

頌偏滿せざる無し。又能く無因論及び惡因論を說くを除遣し、一切の正因論を說くを攝受す。所以は何ん、無因論及び惡因論を說くすら尙ほ人天の善趣及び樂解脫に往かんと欲する諸の聰慧なる者の勝解の〔所〕依處に非ず、況んや是れ其の餘をや。當に趣入する所として正因論を說くは、當に知るべし其の相彼と相違すと。大師の相とは、謂く薄伽梵は是れ眞の如來應正等覺乃至世尊なり、廣く釋することは前の攝異門分の如し。法教の相とは、謂く正法を說く初中後善なり、乃至廣く說くことは當に知るべし亦た攝異門分の如しと。第一の德相を證得すとは、謂く一切に於いて此世他世に自然に通達し、現に等正覺す、乃至廣く說けり。此の中欲界を說いて此世と名づけ、色、無色界を名づけて他世と爲す、（七六）現在、過去二世別なるが故に當に知るべし是れを第二の差別と名づくと。師に由らざるが故に說いて自然と名づけ、六種の通慧にて現に得る所なるが故に名づけて作證と爲し、諸の有情に於いて最も第一なるが故に說いて圓滿と名づけ、此の第一の性は自然に知るが故に、他に顯示するが故に說いて開示と名づく。

（七七）復た次に、二種の相に由る無因論とは、諸行の中に於いて無因を執して轉ず、謂く諸行の（一）生起する因緣（二）滅盡する因緣に於いて了知せざるが故なり。此の生に由るが故に彼の諸行生じ、此の滅に由るが故に彼の諸行滅す、此の二事に於いて證得すること能はざるなり。又諸行の性相を證得せ

【七六】現在は此世、過去は他世なり。

【七七】無因を釋す。

ずして、是の如き見を起し、是の如き論を立つ、有は定んで有なり、無は定んで無なり、無は生ず可らず、有は滅す可らずと。即ち此の論者は(七八)三位の中に於いて現に諸行の生滅を證得し一切世間の共に了達する所の麤淺なる現量にて毀謗し違逆す可し。何となれば現に彼彼の若くは刹帝利或は婆羅門、吠舍等の家の所有の男女和合の因緣を見るに或は八月を過ぎ、或は九月已つて便ち男女を生じ、是の如く生じ已らんに或は一類あり、當に爾の時に於いて壽盡きて中夭すべく、復た一類あり、乃至住壽存活し支持し、或は苦、或は樂、或は非苦樂の受の〔三〕位の差別の心 諸の心法皆な是れ新新にして古古に非ざればなり。

(七九)復た次に、略して二種の自讚毀他あり、謂く(一)唯だ語言し及び(二)說法し正行するなり。若し唯だ語言するのみにして自ら稱讚し他を毀呰するは但だ非善士の法に由つて其の心を纏擾するのみ、是れを自毀と名づく、勝賢善には非ず。若し法を說き正行を行ずるに由るは讚毀すること無しと雖も而も是れ眞實の自讚毀他なり。又諸の如來は正法を宣說して速に能く二種の無智を壞滅す、謂く不正なる法を聞きて勝解等を生じ長時に積集して堅固なる無智及び久習せるに非ずして近く生ぜる無智なり。復た俱生に由りて善趣に往く道を了知すること能はず、亦た能く現法涅槃に往く道を了知すること能はざるが故なり。

(八〇)復た次に、當に知るべし(八一)十一種の相に諸行を總攝して立てて行聚

【七八】三位とは苦受、樂受、非苦樂受の三位なり。

【七九】毀を釋す。

【八〇】純染を釋す。

と爲すと。應に知るべし聚の義は是れ其れ〔五〕蘊の義なりと。又一向雜染の因緣の增上力に由るが故に取蘊を建立す、當に知るべし取蘊は唯だ是れ有漏なりと。又雜染と淸淨との因緣の二の增上力に由つて總蘊を建立す、當に知るべし此の蘊は漏無漏に通ずと。又三相に由り諸行の中に於いて煩惱生起す、謂く(一)所依の故に、(二)所緣の故に、(三)助伴の故なり。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(八二)『少欲と　(八三)自性等と記の三と、似正法と疑癡の處所と、不記と變壞と大師の記と、三見の滿と　(八四)外の愚相等なり。』

(八五)三種の相に由りて如來の心は少欲住の中に入る。一には爾の時〔敎〕化の事究竟し現法樂住に安住せんと欲するが爲めなるに由り、二には弟子正行門に於いて深く厭薄す可きに由り、三には常に樂ひ營んで多事多業を爲す所化の有情を化導せんが爲めなり。又　(八六)前に說けるが如き如來寂靜天住に入る一切の因緣は當に知るべし此の中にても亦た復た是の如しと。

(八七)復た次に、諸の所化の者に略して三種の調伏する所の性あり、一には愚癡放逸なる性、二には極めて下劣なる心の性、三には能く正行を修する

【八一】十一種の相。五蘊の義は五相、雜染の因緣是れ一相、雜染と淸淨との因緣是れ二相、合して八相なり、此れに最後の三相を加へて十一相を成ず。

【八二】總頌十一門の中第十一門に少欲住を釋する別頌なり。此の別頌の中に復た十八門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【八三】自性等。此に四門あり(一)自性(二)四處(三)三種の無上(四)二時なり。

【八四】外の愚相等。此に四門あり(一)外の愚相(二)六分を成ず(三)二種の論(四)學無學二種の差別なり。

【八五】少欲を釋す。

【八六】第八十六卷に說く、八の因緣に由つて如來は寂靜天住に入ると。

性なり。

(八八)復に次に、四種の相に由り四の處所に於いて恭敬住を生じ速に無上を證す。一には應に得べき所に於いて猛利なる樂欲を生ずるが故に、二には得る方便たる法隨法行に於いて猛利なる愛樂を生ずるが故に、三には大師の所に於いて猛利なる愛敬を生ずるが故に、四には所說の法に於いて猛利なる淨信を生ずるが故なり。

(八九)復た次に、三種の無上あり、謂く妙智無上、正行無上、解脫無上なり。妙智無上とは、謂く(九〇)盡智無生智、無學の正見智なり。正行無上とは、謂く樂速通行なり。解脫無上とは、謂く不動心解脫なり。當に知るべし此の中總じて智斷の現法樂住を說くと。有學の妙智正行解脫をば無上と名づけず、猶ほ有上なるが故なり。當に知るべし一切の阿羅漢の行をば皆な名づけて樂速通行と爲すことを得と。一切の麁重永へに滅するが故に、一切の所作已に辦せるが故なり。

(九一)復た次に、菩提分「法」に依りて諸行を(九二)擇ぶが故に二時の中に於いて四種の相に由りて如實に薩迦耶見を徧知し、卽ち二時に於いて無間に諸漏永へに盡くることを證得す。云何んが二時なる。一

【八七】自性を釋す。
【八八】四處を釋す。
【八九】三種の無上を釋す。
【九〇】盡智無生智。盡智とは既に一切の煩惱を斷盡すれば、我既に苦を知れり、集を斷ぜり、滅を證せり、道を修せりと知る、卽ち煩惱を斷盡し了りし時に生ずる自信の智也。無生智とは既に知斷證修の事畢りぬれば更に此の事無きを云ふ。
【九一】二時を釋す。
【九二】擇ぶとは智慧の作用にて煩惱を簡擇し滅するなり。

には（九三）異生地に在り、二には（九四）見地に在り。云何んが四種の相に由る。一には自性に由るが故に、二には處所に由るが故に、三には等起するに由るが故に、四には果に由るが故なり。自性の故なりとは、謂く諸行の自性［に於ける］の薩迦耶見及び（九五）五種の行をば彼れ計して我と爲し、或は我所と爲すなり。處所の故なりとは、謂く（九六）所緣の境なり。等起するが故なりとは、謂く（九七）見取所攝の（九八）無明なり、觸受を生ずるを緣と爲る愛なり。此に復た（九九）五の緣起の次第あり、謂く（一〇〇）界の種種なる性を緣と爲して觸の種種なる性を生じ、觸の種種なる性を緣と爲して受の種種なる性を生じ、受の種種なる性を緣と爲して愛の種種なる性を生じ、愛の種種なる性を緣と爲して取の種種なる性を生ず、夫れ緣より生ずる者は體必ず無常なり。果に由るが故なりとは、謂く三時に於いて薩迦耶見能く障礙を爲す、一には無我の（一〇一）諦察法忍に依る時、二には［見道に於て］現觀する時、三には阿羅漢［果］を得る時なり。此の中一時彼の隨眠の薩迦耶見の增上力に由るが故に惑あり疑あり、多く修習するに由りて諦察法忍を因緣と爲るが故に疑惑に於いて少しく能く除遣すと雖も、然も（一〇二）諦現觀を修習する時に於いて意樂に由るが故に涅槃に於いて我れ當に

【九三】異生地とは地前三十心の凡夫の位なり。
【九四】見地とは見道なり。
【九五】五種の行とは五蘊なり。
【九六】所緣の無我なるに於て我見を起す。
【九七】見取とは見取見なり。
【九八】無明より後に觸を生じ觸より受を生じ、受より愛を生ず、斯く次第して起るを等起と云ふ。
【九九】五とは界、觸、受、愛、取なり。
【一〇〇】界とは六界、十二緣起支の六入なり。
【一〇一】諦察法忍とは見道前に法無我を觀察する智なり。
【一〇二】諦現觀とは正智の眞如を觀するなり。

有ること無かるべしと恐れ、此の隨眠の薩迦耶見の增上力に由るが故に諸行の中に於いて邪なる分別を起し、我れ當に斷ずべく、當に壞すべく、當に無なるべしと謂つて便ち涅槃に於いて斷見及び有ること無きの見を發生す。此の因緣に由りて般涅槃に於いて其の心退還して趣入することを樂はず。彼れ異時に於いて此の過に從つて淨く其の心を修し、又聖諦に於いて已に〔一〇三〕現諦を得たりと雖も然も我れ能く〔一〇四〕諦現諦を證せりと謂ふ。彼れ此の慢に於いて隨眠に由るが故に仍ほ未だ離るること能はず。又時時の間に忘念に由るが故に我を觀じて慢を起し、此れに因つて慢の纏差別して轉じ、謂つて我れを勝れたり或は等し或は劣れりと爲す。前の兩位の中にては隨眠の力に由りて能く障礙を作し、第三の位に於いては習氣の力に由りて能く障礙を作す。又三緣に由りて諸行生長す、一には宿世の業煩惱の力に由り、二には願力に由り、三には現在の衆の因緣の力に由る。異生地に於いて能く〔一〇五〕徧知するが故に見地の中に於いて無間に能く見道所斷の諸漏永へに盡くることを得、見地の中に於いて能く〔一〇六〕徧知するが故に次に餘結を斷じて阿羅漢を得、無間に諸漏永へに盡くることを證得す。

〔一〇七〕復た次に、五種の相に由りて諸行の中に於いて如理に問起す。何等をか五と爲す。一には自性の故に、二には流轉還滅する根本なるが故に、三には還滅するが故に、四には流轉するが故に、五に

【一〇三】現諦とは相似の諦現觀にして眞の諦現觀に非ず。
【一〇四】諦現諦は諦現觀に同じ。
【一〇五】分別起の煩惱を徧知す。
【一〇六】俱生起の煩惱を徧知す。
【一〇七】記の三を釋する中第一に五相の問起を釋す。

は流轉還滅する方便なるが故なり。自性の故なりとは、當に知るべし〔一〇八〕色等の五種の自性なりと。流轉還滅する根本なるが故なりとは、謂く欲なり、善法欲に由り乃至能く諸漏永へに盡くることを得、是の故に此の欲を還滅する根本と名づく。若くは是の欲に由つて我れ當に人中の下類を得べく、乃至當に梵衆天等の衆同分の中に生ずべしと願ひ、此の心に於いて親近し修習し多く修習するに由るが故に彼に於いて生ずることを得、是の故に此の欲を流轉する根本と名づく。還滅するが故なりとは、諸行の中に於いて唯だ貪取を斷滅することを得んと欲するが故なり。若し諸行に卽して是れ取の性なりといはば應に滅すべからず、阿羅漢猶ほ諸行の現に得可きあるを以ての故なり。若し諸行に異んじて取の性ありといはば應に是れ無爲なるべく、無爲なるが故に常〔住〕にして亦た滅す可らず、是の故に取の性は但だ是れ諸行の〔一〇九〕一分の所攝なり。卽ち此の一分已に斷滅することを得て畢竟して行ぜざるが故に還滅す可し。流轉するが故なりとは、復た三種あり、一には後有の因なるが故に、二には品類別なるが故に、三には現在の因なるが故なり。後有の因とは、謂く一あるが如き當來を願樂して諸業を造作し、彼れ是の念を作す、願はくは我れ來世に當に此の行を成ずべしと。是の因緣に由りて能く後有の諸行を引く生因にして現在を引かず、彼れ現在に於いて引くこと能はざるが故に諸行に唯だ〔一一〇〕二種

【一〇八】色等の五種とは五蘊なり。

【一〇九】一分。諸行は有爲無爲二法なり、今取の性は其一分たる有爲法に攝めらる。

【一一〇】二種。一には生報の中に於て後有を造作する、二には後報の中に於て後有を造作する業なり。

あるのみなりと施設す。品類別なりとは、謂く（二一）十一種の諸行の品類なり前の如く應に知るべし。現在の因とは、謂く所造の色の因は四大種なり、受等の心法は觸を以て緣を爲し、所有諸識は名色を緣と爲す。流轉する方便とは、謂く薩迦耶見を所依と爲るが故に諸行の中に於いて我慢及び諸の愛味我我所の見を發生するなり。還滅する方便とは、謂く諸行に於いて我慢を遠離し、及び過患を見並に彼れを出離して我我所無きなり。又流轉する方便とは、謂く無明愛品なり、其の所應に隨つて當に其の相を知るべし。還滅する方便とは、謂く彼の「無明愛品の」對治なり。又二緣に由りて諸の聰慧ならざる聲聞の弟子は大師の教に越え惡見の中に墮し、或は言說を起す。何等か二緣なる。一には世俗諦に愚なり、二には勝義諦に愚なり。此の愚に由るが故に一向世俗諦の理に違越し、及び一向勝義諦の理に違越し、行流轉するに於いて正しく思惟せず。

（二二）復た次に、三種の處に於いて唯だ諸の聖者のみ其の所樂に隨つて能く如實に記す、諸の異生には非ず、他より聞くをば除く。謂く諸行の中の（二三）我我所見の我は如實に非ず。若くは彼れを「所」依と爲して（二四）我慢ありて轉ず、彼れ已に斷ずと雖も而も此の我慢一切未だ斷せず。若くは（二五）起る「所」依無きも「俱生起の我見に依る」我慢斷せず故の如く現行す。當に此の中

【二一】十一種。此卷の純染を釋する處に出づ。
【二二】記の三を釋する中第二に三處の實記を釋す。
【二三】見道所斷の分別起の我見なり。
【二四】我慢とは修道所斷の俱生起の我慢なり。
【二五】起る所依とは分別起の我見なり。

の二種の我慢を知るべし、一には諸行に於いて執著して現行す、二には失念に由りて率爾に現行するなり。此の中に執著して現行する我慢をば聖者已に斷じて復た現行せず、第二の我慢は隨眠に由るが故に、(二六)薩迦耶見復た永へに斷ずと雖も、聖道に於いて未だ善く修せざるを以ての故に猶ほ起つて現行す。薩迦耶見は唯だ習氣のみあり、常に隨逐する所にして、失念する時に於いて能く我慢の與めに所依止と作り、暫らく現行せしむ。是の故に此の慢を亦た未だ斷ぜず亦た現行することを得と名づく。又諸の聖者は若し諸行に於いて(二七)自相を思惟するすら尚ほ我慢をして復た現行せざらしむ、況んや(二八)共相を觀ずるをや。若し假法に於いて作意し思惟して、正念に住する者も亦た我慢をして現行することを得ざらしむ、若し假法に於いて作意し思惟して、正念に住せざれば爾の時我慢暫く現行するとを得。若し諸の異生は諸行に於いて共相を思惟すと雖も、尚ほ我慢の爲めに亂心相續す。況んや餘位に住するをや。又薩迦耶見は(二九)聖相續の中にては隨眠と纏と皆な已に斷盡す、[有]學位の中に於いては習氣隨逐して未だ永へに斷ずること能はず。若くは諸の(三〇)我慢は隨眠と纏と皆な未だ斷ずること能はず。又我欲を計する者は當に知るべし卽ち是れ我慢の纏の[所]攝なりと。何となれば失念に由るが故なり。欲に於いて定に於いて諸の愛味の爲めに漂淪せらるることは此の欲

【二六】見道所斷の分別起の薩迦耶見なり。

【二七】自相とは自體、地水火風等なり。

【二八】共相とは諸法に共通する義理、苦、無我等なり。

【二九】聖相續の中とは見道なり、此位にて分別起の薩迦耶見の隨眠と纏とを斷ず。

【三〇】倶生起の我慢なり。

門に依りて諸の我慢の纒數數現起するなり。未だ斷ぜずと言ふは、隨眠に由るが故なり。未だ徧知せずとは彼の纒に由るが故に、彼れ爾の時に於いて忘念あるが故なり。未だ滅せずと言ふは、此の纒に於いて暫く遠離することを得たりと雖も尋で復た現行するなり。未だ吐かずと言ふは、彼の隨眠をば未だ永へに拔かざるに由るが故なり。

(二二)復た次に、同梵行者餘の同梵行の所に於いて略して二種の慰問あり、一には病苦を問ふ、二には安樂を問ふ。病苦を問ふとは、彼れに問うて受くる所の疹疾寧ろ忍ぶ可きや不やと言ふが如きは、謂く氣息に擁滯無きやを問ふなり。(二三)支持することを得るや不やとは、謂く苦受至つて增さざるや、無間に非ずや、不愛の觸に觸せらるるに非ずや、慮に違ふに非ずや、身を笮すに非ずや、或は笮さるる者除釋を得るやを問ふなり。安樂を問ふとは謂く一あり、所問に隨つて少病なりや不やと言ふが如きは、此れは嬰疹の爲に惱まされざるやを問ふなり。少惱なりや不やとは、此れは外の諸災の爲めに橫に侵逼せられざるやを問ふなり。起居輕利なりや不やとは、此れは夜寢るに安善を得るや、進むる所の飲食消化し易きやを問ふなり。歡樂ありや不やとは、此れは無罪なる觸に住することを得るやを問ふなり。是の如き等の類の差別の言詞は聲聞地に飲食する所量を知る中に於いて釋せるが如し。當に知るべし (二三)此の問は四位の中に在り、一には內の逼惱する

【二二】記の三を釋する中、第三に二種の慰問を釋す。
【二三】支持。宋元明三本俱に支任に作る。
【二三】安樂を問ふ四問をば次での如く四位に配し知るべし。

分、二には外の逼惱する分、三には夜分に住し、四には晝分に住す。

（二三四）復た次に、若くは說いて諸の阿羅漢は現法の中に於いて食物に於いて〔五〕蘊〔十八〕界〔十二〕處等を務むと言ふあり、若くは順不順をば如實に知らず、阿羅漢は不順なりと言ふは、不順は是れ不如理なる虛妄分別にして阿羅漢の現法の不順には非ず。所以は何ん、彼れ食物に於いて〔五〕蘊〔十八〕界〔十二〕處等を務むることは現に見る可きが故なり。此の因緣に由りて諸の阿羅漢は其の滅後に於いて諸行に順ぜず、執著を了せず、是の故に世尊の言はく、「阿羅漢は是れ不順なり」とは定んで是れ密語なり。當に知るべし此れは是れ似正法の見なりと。二種の義の勢力を緣と爲るに由りて、諸の同梵行のもの、或は大聲聞は、是の如く生ずる所の似正法の見を斷滅せんと欲するが爲めに極めて功用を作す、（一）彼の人をして或は自ら陳說し、或は他に示し、是の因緣に由りて極下趣に墮せしむること勿く、或は（二）如來の聖敎を愛敬するに由りて是の如き似正法の見に因りて佛の聖敎をして速疾に隱滅せしむること勿れと。復た二因あり、能く是の如き似正法の見を生ず、一には內の薩迦耶見に於いて未だ永へに斷ずること能はず、二には此れに依りて妄りに流轉還滅する（二三五）士夫を計す。是の如き二種の因を斷ぜんが爲めの故に二の正法を說いて以て對治と爲す、謂く諸行に於いて次第に（一）無常（二）無我を宣說す。（二三六）四轉の中に於いて流

【二三四】似正法を釋す。

【二三五】士夫とは「我」の異名なり。

【二三六】四轉とは有爲、無爲の四句なり（一）有爲（二）無爲（三）亦は有爲亦は無爲（四）有無に非ず無爲に非ず。

轉還滅する士夫を推求するに都べて不可得なり、謂く有爲に依り、或は無爲に依る。聲聞、獨覺、佛世尊は我を說いて如來と名づく。當に知るべし此の我は二種の假立なり、有餘依の中には有爲を假立し、無餘依の中には無爲を假立すと。若し勝義に依れば有爲に非ず無爲に非ず、亦た無爲に非ず有爲に非ず。是の如き正法の敎を說くに由るが故に六種の相に於いて覺悟生ずる時當に知るべし永へに似正法の見を斷ずと。謂く阿羅漢は(一)依の所攝に於いては滅壞する法なるが故に無常を覺悟し、(二)現法の中に於いて老病等の衆の苦器の爲の故に是の苦を覺悟し、(三)(二七)任運に滅すると(四)(二八)斷界と(五)(二九)離界と及び(六)(三〇)滅界とに於いて覺悟して滅と寂靜と淸涼と及與び永沒と爲す。若し是の如き正しき覺悟を具ふる者は是れ阿羅漢なりや、增上慢と俱行する妄想すら尙ほ有ることを得ず、況んや是の如き其の滅後に於て若くは順「若くは」不順に戲論し執著す可けんや。當に知るべし未だ薩迦耶見を斷ぜざれば二の過患ありと。一には能く害し苦ある諸行に於いて我我所を執す、此の因緣に由りて能く生死に流轉する大苦を感ず。二には現法に於いて能く無上なる聖慧命の根を礙ふ、譬へば人あり、自ら力能く怨家を害する無しと知り、彼れ害を爲さんことを恐れ、先づ相ひ親附して如意の事を以て現に之に承奉する時彼の怨家親附するが如くし已つて便ち其の命を害ふが如く、愚夫異生も亦た復た是の如し。怨家に似たる薩迦耶見の當

【二七】任運に滅するに於いて覺悟して滅と爲す。
【二八】斷界に於て覺悟して寂靜と爲す。
【二九】離界に於て覺悟して淸涼と爲す。
【三〇】滅界に於て覺悟して永沒と爲す。

に苦害を爲すべきを恐れ、便ち愛縛を起し、可意の行を以て現に承奉す、是の如く愚癡異生の類は能く害を爲す薩迦耶見に於いて唯だ功德のみを見て過失を見ず、殷勤に親附し、既に親附し已つて未だ退くことを得ざるに由りて說いて聖慧命の根を損害すと名づく。

（三一）復た次に、諸の外道の輩は內の法律の二種の處所に於いて疑惑し愚癡なり。何等をか二と爲す。謂く佛世尊は（三二）有の見及び（三三）無有の見を誹毀して而も弟子の終沒の後に於いて一は有生なりと記し、一は無生なりと記し、又勝義の常住の我は現法にも當來にも都べて不可得なりと說く。世に三師あり而も現に得可し、一には常論者、二には斷論者、三には如來なり。此の疑癡の者に二種の因あり、當に知るべし前の似正法の見の二種の法教の如しと。能く此の因を斷ずること、亦た前に二の因緣に由ると說けるが如し。卽ち此の所說の無我の法性は彼の諸の外道入り難く了し難し、謂く此の「無我の」自性は了知し難きが故に、此の「無我の」相貌は了知す可きこと易しと雖も、然も其の相貌相似せざるが故なり。當に知るべし此の中虛誑無き義、自らの所證の義、是れ不共の義なるが故に彼の自性は悟入す可きこと難しと。卽ち此の自性は體是れ甚深にして甚深に似て現ず、是の故に說いて虛誑無き義なりと名づく。又此の自性は內に於いて見難く、他の言音より亦た覺了し難し、是の故に說いて自らの所證の義なりと名づく。又此の自性は尋思する者の尋思する所に非ず、度量する者の行ずる所の境界に非ず、是の

【三一】疑癡の處所を釋す。
【三二】有の見とは常見なり。
【三三】無有の見とは斷見なり。

故に說いて是れを不共の義なりと名づく。又卽ち此の法は微妙審諦にして聰明なる智者の內に證る所なるが故に說いて了し難しと名づく。此等の差別は當に知るべし前の攝異門分の如しと。二種の相に由りて一切如來の所說の義智をば皆な應に了知すべし。何等をか二と爲す、一には敎智、二には證智なり。敎智とは、謂く諸の異生の聞思修より成ずる所の慧なり。證智とは、謂く（二三四）學、無學の慧及び（二三五）後に得る所の諸の世間の慧なり。此の中異生は一切の佛の所說の義に於いて皆な能く了知するに非ず、亦た慢に於いて是れ慢なりと覺察するに非ず、又未だ斷ずること能はず、若くは諸の有學は我見の一切の義の中に於いて皆な了知せざるには非ず、又能く慢に於いて是れ慢なりと覺察するも、而も未だ斷ずること能はず、若くは諸の無學は能く一切を作す。

（二三六）復た次に、諸佛如來は世俗諦及び勝義諦に於いて皆な如實に知り、正に彼の二種の道理を觀じて應に記別すべからず。若し記別すれば能く無義を引くが故に記別せず亦た執著せず、謂く滅後の若くは有、若くは無、亦有亦無、無有非無に於いて、若くは如來に於いて是の如き智見を先と爲して記せざるなり、謂く無知の者は、當に知るべし、自ら妄見と倶行する無智の性を顯はすと。

（二三七）復た次に、應に知るべし略して二種の變壞ありと。一には諸行衰老する變壞なり、謂く一ある

【二三四】無分別の正體智。
【二三五】有分別の後得智。
【二三六】不記を釋す。
【二三七】變壞を釋す。

が故き年百二十にして其の形衰邁するなり、是の因緣に由りて身老病すと名づく。二には心憂ふる變壞なり、是の因緣に由りて心老病すと名づく。第一の變壞は若くは愚〔者〕も若くは智〔者〕も皆な其の中に於いて欲する所に隨はざるなり。第二の變壞は智者は中に於いて能く欲する所に隨ふも、諸の愚者には非ず。又諸の愚夫は若し身老病すれば當に知るべし其の心定んで隨つて老病す、其の智ある者は身老病すと雖も而も心自在にして隨つて老病せずと。是れを此の中の愚癡の差別と名づく。

〔二三八〕復た次に、善く法を取るは聞思〔の二慧〕に由るが故なり、善く思惟するは修慧に由るが故なり、善く顯了するは所有の性の如くなるが故なり、善く通達するは所有の性を盡すが故なり。二種の和に由りて諸の聖弟子は能く正しく請問し大師は善く記す、謂く〔二三九〕諸取を斷ずると徧知するとに於いて論ず。何等をか二と爲す。一には此の諸取を斷ずると徧知するとに於いて論ず、二には此の諸取を斷じ徧知するが爲めに論ず。當に知るべし此の中一切の行を斷ずると徧知するとに於て論ずるは所謂る如來なりと。又此の諸取をば若し未だ斷滅せずして隨觀すれば彼に三種の過患あり、若し已に斷滅し隨觀すれば彼に三種の功德あり。一には諸行の中に於いて生ずる所の諸取の行若し變壞すれば便ち愁等を生ず、是れを第一の過患と名づく、已に諸行の變壞して作す所を得たり。二には諸行の中に於いて生ずる所の諸取は、未だ得ざる可意の諸行を得んが爲めに、追求する時に於いて廣く非一種種なる衆多の差別の不善

【二三八】大師の記を釋す。
【二三九】諸取。取とは愛の異名、境界を著取するなり。

を行ず、此の追求に由りて不善を行ずるが故に四種の苦に住す、一には將に現前せんとする隣近に起す所なり、二には正に現前する現在に起す所なり、三には他の逼迫增上して起す所なり、四には自らの雜染增上して起す所なり、應に知るべし是れを第二の過患と名づくと。三には卽ち是の如き惡不善の法の愛習を因と爲るに由りて身壞し死して後諸の惡趣に往く、應に知るべし是れを第三の過患と名づくと。此れと相違するは諸取を斷じ隨觀するに於ける三種の功德勝利なり、應ぜるが如く當に知るべし。

【一四〇】三見の滿を釋す。

(一四〇)ま 復た次に、當に知るべし略して三種の聖者、三の見圓滿して能く三苦を超ゆるとありと。云何んが名づけて三種の聖者と爲すや。一には正見具足す、謂く無倒なる法無我の忍に於いて異生の位に住する者なり。二には已に聖諦を見、已に能く正性離生に趣入し、已に現觀に入り、已に果に至ることを得て、有學の位に住する者なり。三には已に最後究竟第一の阿羅漢果を得て、無學の位に住する者なり。云何んが名づけて三の見圓滿すと爲すや。一には初め聖者の隨順する無漏有漏の見圓滿し、二には未だ善淨ならざる無漏の見圓滿し、三には善清淨なる無漏の見圓滿す。此の三圓滿は三種の補特伽羅を說くに依りて、其の次第に隨ふこと前の如く應に知るべし。云何んが名づけて三種の苦を超ゆと爲るや。謂く初の見圓滿は能く外道の我見違諍より生ずる所の衆苦を超ゆ、第二の見圓滿は能く一切の惡趣の衆苦を超ゆ、第三の見圓滿は

能く一切の後有の衆苦を超ゆ。此の中云何んが諸の外道の我見違諍より生ずる所の衆苦と名づくるや。謂く此の正法毗柰耶の外の所有世間の種種なる異道の薩迦耶見を以て根本と爲して生ずる所の一切の顚倒せる見趣、是の如き一切を總じて我見と稱す。謂く我論者の我論と相應する一切の見趣、或は一切常論者、或は一分常論者、或は無因論者、或は邊無邊論者、或は斷滅論者、或は現法涅槃論者の彼の論と相應する一切の見趣なり、或は有情論者の彼の論と相應する一切の見趣、謂く諸の邪見にして一切の化生の有情を撥無し、他世を誹謗するなり、或は命論者の彼の論と相應する一切の見趣、謂く命論者にして命は身に卽し或は身に異なり等と計するなり、或は吉祥論者の彼の論と相應する一切の見趣、謂く參羅、暦算、卜筮を觀ずる種種なる邪論にして妄りに誦呪、祠祀、火等は所愛の境を得、能く吉祥を生じ、能く無義を斷ずと計するなり、又相を視て祥不祥と爲すと計す。彼れ復た云何ん。謂く二十句の薩迦耶見を所依止と爲して妄りに前際後際を計する六十二種の諸の惡見趣を發起するなり、又總じて一切を謗る邪見を起す。云何んが違諍より生ずる所の衆苦なりや。謂く彼れ展轉して見欲相違し、互に諍論を興し、種種の心を發起して憂惱する苦、深く愛藏する苦、互に勝劣する苦、堅く執著する苦なり、當に知るべし此の中若し他に勝たるれば便ち愁惱を生ず、是れを（四一）初の苦と名づくと。若し他に勝たば遂に方便を作して自らの見品をして轉た復た增盛ならしめ、他の見品をして漸く更に隱昧ならしめ、唯だ我が見のみ淨

【四一】初の苦とは憂惱する苦なり。

にして餘の所見に非ずとし、邪見に執著して深く愛藏を起す、此の因緣に由りて種種不正なる尋思を發生し、及び種種寂靜ならざる意を起し其の心を損害するを（一四二）第二の苦と名づく。邪見を愛藏する增上力の故に他を以て己れを量る、謂く己れを勝れたり或は等し或は劣れりと爲し因つて自ら高擧し、他を陵蔑するなり、是れを第三の互に勝劣する苦と名づく。彼れ此れに依るが故に利養を追求し、卽ち追求する苦の爲めに觸せられ、凡そ作す所あれば皆な惱亂を爲し、他論を詰責し及び自論の爲めに他の難ずるを免脫す、是れを第四の堅く執著する苦と名づく。是の如き四種を見諦より生ずる所の衆苦と名づく。內法の異生は上品の無我の勝解に安住して、當に知るべし、已に是の如き衆苦を斷ぜりと。所以は何ん、彼れ當來に於いて意樂に由るが故に是の如き等の諸の惡見趣に於いて能く除遣するに堪ふ、是の故に若し初の見圓滿に住すれば能く初の苦を超ゆ。又卽ち此の初の見圓滿に依りて親近し修習し、極めて多く修習し、內の諸行に於いて（一四三）法智を發生し、現見せざるに於いて（一四四）類智を發生するを總攝して一聚と爲し、他を緣ぜざる智を以て現觀に入る、謂く無常の行或は隨つて餘の一行を以てし、彼れ爾の時に於いて能く隨つて第二の見圓滿を證得し、及び第二の苦を超ゆ。彼れ此に住し已つて先に得たる所の如き（一四五）七覺分法に親近し修習し、極めて多く

【一四二】第二の苦とは愛藏する苦なり。

【一四三】法智とは欲界の四諦を觀ずる無漏智なり。

【一四四】類智とは色無色界の四諦を觀ずる無漏智なり、是れ法智に類するが故に類智と云ふ。

【一四五】七覺分法とは七覺支なり。

修習し、能く前に說ける所の如き四種の業等の雜染を斷じ、能く隨つて後の見圓滿を證得し、後有の苦を超ゆ。此の中第一の補特伽羅は猶ほ二苦を殘し、及び現在の所依の身の苦を殘し、第二の補特伽羅は唯だ一苦及び依身の苦を殘し、第三の補特伽羅は一切の苦斷じ、但だ依身の苦暫時餘在す、譬へば幻化の如し。又分別〔起〕の薩迦耶見に依りて二十句を立つ、俱生〔起〕に依らず、又(四六)內法の者は是の如き行無く、徧處定に依る、謂く地を我と爲す、我卽ち是れ地なり、乃至廣く說けり、一切應に知るべし。

(四七)復た次に、諸の外道の輩に略して五種の愚夫の相あり、彼の相に由るが故に愚夫の數に墮す、謂く諸の外道にして性となり聰慧なる者すら尙ほ聰慧の慢を懷くとを免れず、況んや聰慧に非ざるをや、是を第一の愚夫の相と名づく。又諸の外道は多く利養恭敬を貪求せんが爲に自ら讚め他を毀る、是れを第二の愚夫の相と名づく。又諸の外道は、若し諸の聖者爲めに正法、正敎、正誡を說かば卽便ち違逆して呵罵し毀呰す、是れを第三の愚夫の相と名づく。又諸の外道は喜んで自ら似正法論を陳說し、或は他に開示す、是れを第四の愚夫の相と名づく。又諸の外道は、如來、如來の弟子の爲めに降伏せられ、亦た如來の說きたまふ所の法律は是れ眞善の說なりと知り、自らの法律は是れ妄惡の說なり知ると雖も、然も我慢の增上力に由るが故に都べて信受せず、乃至集〔諦〕に因緣を觀察せざるなり、是れを第

【四六】內法の者とは內道、佛道に入れるものなり。

【四七】外の愚相を釋す。

五の愚夫の相と名づく。

(二四八)復た次に、如來六分を成就したまふを無間論師子王と名づくることを得。何等をか六と爲すや。所謂(一)最初に外道敵論者の所に往詣し、乃至其の一切の義を問ふことを恣にす、凡そ興す所の論は諍論の爲めには非ず、唯だ、諸の有情を哀愍するが故に其の未だ信ぜざる者をば彼をして信を生ぜしめ、若し已に信ぜる者をば倍す増長せしむるを除く。又(二)論を興す時諸根寂靜にして形色變ること無く、亦た怖畏の習氣隨逐すること無し。又(三)終に諸天世間の爲めに勝伏せられず、一切世間に敵論者無く、能く越ゆること一翻、唯だ說くこと一翻にして皆な能く摧伏す。又(四)諸の世間の極めて聰慧なる者、極めて無畏なる者若し如來と共に論を興す時は所有の辯才皆な悉く謇訥し、増上の怖畏身心を逼切し、一切の矯術虛詐の言論をば皆な設くること能はず。又(五)復た一切の同一會坐の處中の大衆は皆な佛の所に於いて他に勝る心を起し、彼の外道の敵論者の所に於いては他勝る心を起す。又(六)佛世尊の言辭は威肅なり、其の敵論者の出す所の言辭には威肅あること無し。

【二四八】六分を成ずるを釋す。

(二四九)復た次に、二種の論あり。何等をか二と爲す。一には有我論、二には無我論なり。無我論は力あり、有我論は力無し、有我論は常に無我論者の爲めに伏せらる、唯だ「無我」論者の其の力羸劣なるを除く。云何んが名づけて有我論者と爲すや。謂く一あるが如き是の如きの見を起し、是の如きの論

【二四九】二種の論を釋す。

を立て、色等の行に於いて建立して我と爲す、謂く我に行あり、行は是れ我所なり、我は行の中に在りて流れず散ぜず、徧く支節に隨つて所として至らざる無し、是の故に色等の諸行の性我は諸行の田に依りて福非福を生じ、玆に因りて愛不愛の果を領受す、譬へば農夫の良田に依止して農業を營事し、及與び藥草叢林を種植するが如し、是れを我論と名づく。云何んが名づけて無我論者と爲すや。謂く二種あり、一には我を破する論、二には無我を立てて我を破する論者なり。若し實我能く作用ありて愛非愛の諸果の業の中に於いて自在を得と謂はば、此の我は恆時に樂を欣ひ苦を厭ふ、是の故に此の我は唯だ應に福を生じ非福を生ぜざるべし。又我の作用は常に內外の諸行に現在前す、若し變異する時に應に愁憂悲歎を發生すべからず。又我は是れ常に覺を以て先と爲し、凡そ生起する所は常に應に隨轉して變易あると無かるべく、然も不可得なり。是の如きを名づけて有我論を破して無我を立つる者と爲す。一切の行は衆緣より生ずるを以て若し福緣に遇はば福便ち生起し、此れと相違すれば非福を生起す。此を緣と爲るに由りて能く一切の愛非愛の果を招く、衆緣に依るが故に皆な是れ無常なり、唯だ是の如き因果所攝の諸行の流轉に於いて我等を假立す、若し勝義に依れば一切の諸法皆な無我等なり。是の如きを名づけて無我論を立つと爲す。

【二五〇】學無學の二種の差別を釋す。

(二五〇)復た次に、五種の相に由りて「有」學、無學の二種の差別あり。謂く(一)諸の無學の成就する所の

智を說いて無上なりと名づけ、一切の有學の成就する所の智を說いて有上なりと名づく。智の無上なるが如く當に知るべし(二)正行及與び(三)解脫の無上なるも亦た爾なりと。又(四)諸の無學は善清淨なる諸の聖慧眼を以て佛の法身を觀ず、有學は爾らず。又(五)諸の無學は善圓滿なる無顚倒の行を以て如來に奉事す、有學は爾らず。是れを五相と名づく。

卷の第八十九

攝事分中(一)契經事處擇攝第二の一

是の如く已に行擇攝を說けり。(二)處擇攝をば我れ今當に說くべし。總の嗢柁南に曰く、

(三)『初は安立等と智同等なり、最後は常に離欲等を知るなり。』

別の嗢柁南に曰く、

(四)『安立と差別と、愚と不愚と敎授と、解脫と煩惱と業と、皆な廣く說く應に知るべし。』

(五)五種の相に由りて當に諸受を安立する差別を知るべし。一には自性の故に、二には所依の故に、三には所緣の故に、四には助伴の故に、五には隨轉するが故なり。自性の故なりとは謂く三受あり、一には苦、二には樂、三には不苦不樂なり。所依の故なりとは、謂く六種あり、即ち眼、耳、鼻、舌、身、意なり。所緣の故なりとは、謂く(六)色等の六の所緣の境界なり。

【一】契經に四擇ある中、以下は第二に處擇を明す、四卷あり。

【二】處とは十二處なり。

【三】此の總頌に四門を列す、(一)安立等(二)智等(三)同等(四)離欲等なり、後此四門に一一別頌を結ぶ。

【四】此は總頌第一門安立等を解する別頌なり。此の中更に八門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【五】安立を解す。

【六】色、聲、香、味、觸、法の六なり。

助伴の故なりとは、謂く想、思、或は餘の善、不善、無記の心法此れと相應するなり。隨轉するが故なりとは、謂く此の相應の心彼れに依るに由るが故に三受隨轉す、彼を諸受の同生同滅する所依止の處と爲す。

(七)復た次に、是の如き五相に諸受を安立す、當に知るべし復た八種の差別ありと。一には內處の差別、二には外處の差別、三には六識身の差別、四には六觸身の差別、五には六受身の差別、六には六想身の差別、七には六思身の差別、八には六愛身の差別なり。當に知るべし此の中(八)三和合の義に由りて前の三の差別を立て、(九)受の因緣の義に由りて第四の差別を立て、三和合の(一〇)觸の果の義に由りて第五の差別を立て、受を分別し隨つて言說する義に由りて第六の差別を立つと。所以は何ん、諸受を受くる時是の如き想を作す、我れ今此の苦、此の樂、此の非苦樂を領受し、亦た復た他の爲めに隨つて言說を起すと。業、煩惱の二の離染の義に由りて當に知るべし第七、第八の兩種の差別を建立すと。所以は何ん、彼の受の若くは合し若くは離るるに於いて(一一)思の造作を起し、如如思の造作する所を發起すれば是の如く是の如く愛を生じ求願するに由る。

(一二)復た次に、當に知るべし略して二種の一切ありと。一には少分の一切、二には一切の一切なり。

【七】差別を解す。
【八】三和合とは根境識の三和合するなり。
【九】受の因緣とは受の起る因緣卽ち觸のこと。
【一〇】觸の果とは受なり。
【一一】思の造作とは業なり。
【一二】愚を解す。

一切皆な無常なりと說くが如きは當に知るべし此れ少分の一切に依ると、唯だ一切の行のみにして、無爲には非ざるが故なり。一切の法皆な無我なりと言ふは當に知るべし一切の一切に依ると。又三相に由りて應に是の愚を知るべし、一には自性に由るが故に、二には因緣に由るが故に、三には果に由るが故なり。愚の自性の故なりとは、謂く纏に由るが故に、卽ち是れ忘失すること現在世に於いてし、隨眠に由るが故に、卽ち是れ當來忘失する法なり。愚の因緣の故なりとは、謂く五相の受の安立の中に於いて是れ無常なり等と覺了すること能はず、及び自體の初中後の位に偏する所有の惱亂をば皆な了せざるが故なり、當に知るべし卽ち是れ生老病及び死の法性に於いて覺了すること能はざるなりと。初の惱亂とは、謂く生に由るが故なり。中の惱亂とは、謂く病に由るが故なり。後の惱亂とは、謂く老死の二種の法に由るが故なり。愚の果の故なりとは、謂く愁等の苦、愛等の雜染なり。

【三】不愚を解す。

(三)復た次に、三種の相に由りて當に不愚を知るべし、一には自性の故に、二には礙に由るが故に、三には障に由るが故なり。不愚の自性とは、謂く五相の受の安立の中に於いて善能く自相共相を覺了し、此に由りて能く一切の煩惱を斷じ、能く聖諦を覺り、能く涅槃を證するなり。不愚の礙とは、四種の魔に由る、謂く蘊魔一切處に徧じ隨逐する義に由るが故に、彼の天魔時時の間に於いて能く數任持し障礙する義に由るが故に、死[魔]煩惱魔能く死生より生ずる所の衆苦の與めに器と作る義なる

が故なり。不愚の障とは、謂く現見せざる境を緣ずる煩惱及び現見せざるに非ざる境を緣ずる纒或は彼の隨眠なり。

(一四)復た次に、諸佛世尊佛の聖弟子は三種の相に由りて能く正しく諸の弟子衆に教授す。何等をか三と爲す。一には引導教授、二には其の所應に隨つて所緣の境に於いて安處する教授、三には所化をして自義を得せしむる教授なり。是の如き教授は其の次第の如く當に知るべし即ち是れ(一五)三種の神變なりと。

(一六)復た次に、二種の相に由り應に能く解脫を熟する妙慧を求むべし。一には如理の聞思、(一七)久遠相續の慧は能く有學の解脫を成熟す、二には有學の久遠相續の慧は能く無學の解脫を成熟す。

復た次に、略して二種の解脫の成熟あり、一には有學、二には無學なり。有學とは、謂く(一八)金剛喩三摩地と倶なり。無學とは、謂く彼れ已上なり。

復た次に、心淸淨行の比丘に五種の法ありて多く作す所あり。何等をか五と爲す。一には正しき教授、二には奢摩他支、三には毘鉢舍那支、四には無間殷重なる加行、五には出世間の慧なり。正し

【一四】教授を辨す。
【一五】三種の神變とは神通輪、記心輪、教誡輪なり。
【一六】解脫を解す。
【一七】久遠相續の慧とは修慧のこと。
【一八】金剛喩三摩地とは金剛定なり、金剛の能く一切の物を摧くが如く能く一切の煩惱を破する定を云ふ。此定は聲聞菩薩等が修行究竟して最後の煩惱を斷除する時に起すものにして此定を起し斷惑し了れば聲聞は無學果を、菩薩は佛果を證得す。

き教授とは、謂く三種の正友の顯はす所なり、一には大師、二には軌範尊重なるもの、三には同梵行者及び（二九）內法に住する在家の英叡なり。是の如きを名けて三種の正友と爲す。諸の有智の者は彼に從つて應に求めて善門の眞正の教授を積集すべし。奢摩他支とは、謂く一あるが如き尸羅を具へて住す、廣く說くこと應に知るべし聲聞地の如しと。是の如く尸羅具足して住し已つて便ち悔あること無し、悔無きが故に歡び廣く說かば乃至樂しむが故に心定なり。毗鉢舍那支とは、謂く三種の欲に隨ふ言教を得、一には聖正なる言教、二には厭離の言教、三には心をして蓋と〔見〕趣の愛とを離れしむる言教なり。云何んが聖正なる言教なる。謂く衆聖の五の無學蘊に依る所有の言教なり。卽ち是れ諸聖の成就せる（一）是の如き戒（二）是の如き定（三）是の如き慧（四）是の如き解脫（五）是の如き解脫知見を宣說するなり。云何んが厭離の言教なる、謂く（三〇）三種に依り少欲喜足を增さしむる言教及び斷を樂ひ修を樂ふに依つて憒鬧を離れしむる言教なり。云何んが心をして蓋と〔見〕趣の愛とを離れしむる言教なる。當に知るべし此の教に復た三門ありと。一には一切煩惱蓋〔に於て〕蓋と趣愛とを離るる言教、二には五蓋〔に於て〕蓋と趣愛とを離るる言教。三には無明蓋〔に於て〕蓋と趣愛とを離るる言教なり。當に知るべし此の中斷と離と滅との界を證得せんが爲めなるに依る所有の言說は、是れ初の言教なりと。卽ち彼に於いて勝れたる功德を見及び所治の蓋と蓋處と諸行とに於いて深く過患を見るに依る所

【二九】內法とは內道と同じ佛道なり、外法或は外道に對する言。

【三〇】三種とは前の三種の正友を云ふ。

有の言說は、當に知るべし是れを第二の言教と名づくと。是の如き緣性緣起に隨順する所有の言說を當に知るべし是れを第三の言教と名づくと。是の如き三種の言教を總じて毗鉢舍那支と名づく。又此の言教は略を以て之を言はゞ復た三種あり、一には能く樂欲を生ずる言教、二には能く正しく資糧を安處する言教、三には能く正しく作意を安處する言教なり。謂く聖正なる言教を能く樂欲を生ずる言教と名づけ、厭離の言教を正しく資糧を安處する言教と名づけ、心をして蓋と趣愛とを離れしむる言教を正しく作意を安處する言教と名づく。此の言教に依る勝れたる奢摩他に攝受する所の慧を毗鉢舍那支と名づく、是の故に此の言教を說いて毗鉢舍那支と名づく。云何んが無間殷重なる加行なる。謂く常に所作し、委悉に所作し、勤めて精進して住す、當に知るべし卽ち止觀に依りて加行すと。又勤めて精進するに應に五種を知るべし、一には被甲精進、二には加行精進、三には不下精進、四には無動精進、五には喜足無き精進なり。此の中最初は當に知るべし猛利なる樂欲を發起し、次は所欲に隨つて堅固勇悍なる方便を發起し、次は受くる所の諸法を證得せんが爲に自ら輕蔑せず亦た怯懼無く、次は能く寒熱等の苦を堪忍し、後の後の下劣に於いて喜足を生ぜず、後後の轉た勝れ轉た妙なる諸の功德を欣求して住するなりと。彼れ是の如く勤めて精進して住するに由りて諦現觀に入り、諸聖の出世間の慧を證得し、修道の中に於いて此の慧に依止し、若くは行じ若くは住し、能く正に所依の身の中の諸の隨煩惱を除遣して心をして清淨ならしむ。謂く聚落或は聚落の邊に住し、若くは少壯にして

端嚴美妙なる形色母邑を見、卽便ち作意して不淨なりと思惟す、彼を緣ずる貪を損害せんと欲するが爲めの故なり。若し他人の逼迫し惱亂するに遇はば、卽便ち作意して慈相を思惟す、他を緣ずる瞋を損害せんと欲するが爲めの故なり。是の如く行ずる時能く正しく諸の隨煩惱を除遣し、心をして淸淨ならしむ。若くは遠離處にて入出二種の〔三一〕息念を修習し、欲等の諸の尋思を除遣す。是の如く住する時能く正しく諸の隨煩惱を除遣し、心をして淸淨ならしむ。彼れ是の如くし已つて證得する所の〔三二〕出世間の慧に依つて一切の行に於いて〔三三〕無常の想を修し、能く正に所餘の我慢を蠲除す。是の如き善士を所依止と爲して復た無倒なる敎授の前行を得、此に由りて漸次に能く有學の圓滿なる解脫を證す、金剛喩三摩地を得るが故なり。亦た無學の圓滿なる解脫を證す、一切の煩惱をば皆な離繫するが故なり。

云何んが解脫なる。謂く〔三四〕畢竟の斷對治を起すが故に、一切煩惱の品類の麤重永へに息滅するが故に、〔三五〕轉依を證得し、諸の煩惱をして決定し究竟して不生法を成ぜしむ。是れを解脫と名づく。若くは聖弟子は無所有處にて已に欲を離るることを得、唯だ非想非非想處所有の諸行を餘し、復た能く勝れたる有頂定に安住し、爾の時無間に能く隨つて諸漏永へに盡くることを證得す。若くは所餘の位にて能く漸く彼彼の諸漏を斷ずと雖も、然も無

〔三一〕息念とは數息觀なり。
〔三二〕出世間の慧とは有漏の正智なり。
〔三三〕無常の想とは無常觀なり。
〔三四〕畢竟の斷對治とは煩惱を斷じ對治する無漏道のことなり。
〔三五〕轉依とは有漏を轉捨し無漏を轉得せる解脫身を云ふ。

間に能く隨つて諸漏永へに盡くることを證得するに非ず、是の如く乃至無所有處にて未だ欲を離るることを得ざるなり。

〔二六〕復た次に、諸の欲界繫の一切の煩惱の唯だ無明のみを除けるを說いて欲漏と名づけ、諸の色無色の二界の所繫の一切の煩惱の唯だ無明のみを除けるを說いて有漏と名づく。若くは諸の有情の或は未だ欲を離れず或は已に欲を離れたるものの、諸の外道の所有の邪僻なる分別の愚癡より生ずる所の惡見其の心を蔽覆し此の惡見に依りて彼の諸欲に於いて一分尋求すると一分欲を離れ、乃至非想非非想處〔に在る〕とを除いて、彼の三界に於ける所有の無智を總攝して一と爲して無明漏を立つ。

〔二七〕復た次に、九種の事あり、能く和合するが故に當に知るべし九結の差別を建立すと。云何んが九事なる。一には在家品の愛す可き有情非有情數の一切の境界に依る貪愛の纏の事、二には即ち〔二八〕此の品の惡むべき有情非有情數に依る憍慢の纏の事、若くは〔二九〕四五六は惡說の法の諸の出家品の三種の邪僻なる勝解に依る纏の事なり、謂く(一)〔三〇〕不正の法を聽聞するに依るが故に、(二)〔三一〕不如理の邪なる思惟に依るが故に、(三)非方便に攝する所の修に依るが故に、是の如き差別を即ち三種と爲す、七には善說の法律に於て勝解無き纏の事、八には出家品の智貧窮なるに依る事、九には在家品の財貧窮なるに依る事なり。

〔二六〕煩惱を解す。第一に三漏を明す。
〔二七〕第二に九結を明す。
〔二八〕此の品とは在家品なり。
〔二九〕是れ疑結なり。
〔三〇〕是れ見結即ち身見、邊見、邪見の三見なり。
〔三一〕是れ取結即ち見取見戒禁取見なり。

此の九事に由り其の所應の如く當る知るべし〔三二〕愛等の九結に配屬することを。此の中嫉に由りて心を變壞するが故に正法に於いて内に法慳を發起し、此に由りて當來に智慧貧乏なり。餘は所應に隨つて配屬することを應に知るべし。

〔三三〕復た次に、貪縛の爲めに纏縛せらるるに由るが故に、能く樂受に隨順する境界に於て心捨すると能はず、是の如く瞋縛に纏縛せらるるが故に、能く苦受に隨順する境界に於て心捨すると能はず。愚癡縛に纏縛せらるるに由るが故に、能く非苦樂受の中庸に隨順する境界に於いて心捨すること能はず。此の因緣に由るが故に三縛を立つ。

〔三四〕復た次に、煩惱品の所有の麤重の依身に隨附するを說いて〔三五〕隨眠と名づく、能く種子と爲りて一切の〔三六〕煩惱の纏を生起するが故なり。當に知るべし此に復た〔三七〕七種を建立すと。未離欲品の差別に由るが故に、已離欲品の差別に由るが故に、〔三八〕二俱品の差別に由るが故なり。未離欲品の差別に由るが故に(一)欲貪(二)瞋恚隨眠を建立し、已離欲品の差別に由るが故に(三)有貪隨眠を建立し、二俱品の差別に由るが故に(四)慢(五)無明(六)見(七)疑の隨眠を建立し、是の如く一切の煩惱を總攝す。

〔三九〕復た次に、〔四〇〕隨煩惱とは、謂く貪不善根、瞋不善根、癡不善根、若

【三二】愛等の九結とは(一)愛結(二)恚結(三)慢結(四)無明結(五)見結(六)取結(七)疑結(八)嫉結(九)慳結なり。

【三三】第三に三縛を明す。

【三四】第四に七隨眠を明す。

【三五】隨眠とは種子の異名なり。

【三六】煩惱の纏とは煩惱の現行なり。

【三七】七種。是れ七使なり文中に出づ。

【三八】二俱品とは未離欲品と已離欲品なり。

【三九】第五に隨煩惱を明す。

【四〇】隨煩惱の解釋に二說あり

くは忿、若くは恨、是の如く廣く說かば諸の雜穢の事なり。當に知るべし此の中能く一切の不善法を起す貪を貪不善根と名づく、瞋癡も亦爾なり。若くは瞋恚の纏の能く面貌を慘裂し奮發せしむるを說いて名づけて忿と爲し、內〔心〕に怨結を懷くが故に名づけて恨と爲し、衆惡を隱藏するが故に名づけて覆と爲し、染汙驚惶するが故に熱惱と名づけ、心に染汙を懷き他の榮を喜ばざるが故に名づけて嫉と爲し、資生の具に於いて深く鄙悋を懷くが故に名づけて慳と爲し、彼れを欺調せんが爲めに內〔心〕に異謀を懷き、外〔身〕に別相を現はすが故に名づけて誑心と爲し、正直にあらず、明ならず、顯ならず、解行邪曲なり、故に名づけて諂と爲し、作す所の罪に於いて己に望めて羞ぢざるが故に無慚と名づけ、作す所の罪に於いて他に望めて恥ぢざるが故に無愧と名づけ、他の下劣なるに於いて己を勝れり爲すと謂ひ、或は復た等しきに於いて己を等しと爲すと謂ひ、心をして高擧せしむるが故に名づけて慢と爲し、等しきに於いて勝れりと謂ひ、勝れるに於いて等しと謂ひ、心をして高擧せしむるが故に過慢と名づけ、勝れるに於いては勝れりと謂ひ、心をして高擧せしむるを慢過慢と名づけ、妄りに諸行を觀じて我我所と爲し、心をして高擧せしむるが故に我慢と名づけ。其の殊勝なる所證の法の中に於いて未だ得ざるを得たりと謂つて心をして高擧せしむるを增上慢と名づけ、多勝の中に於いて己は少しく劣れりと謂つて心をして高擧せしむるを下劣慢と名

(一)貪瞋癡等の根本煩惱に隨逐して起る忿恨等の枝末の煩惱を隨煩惱と云ふ、(二)煩惱は前後展轉相隨逐して起るが故に一切の煩惱を隨煩惱と云ふ、今文は第二說に依る。

づけ、實に其の徳無きに己に徳ありと謂つて心をして高擧せしむるが故に邪慢と名づけ、心に染汚を懷き、隨つて榮譽を恃み、形相踈誕なるが故に名づけて憍と爲し、諸の善品に於いて勤修することを樂はず、諸の惡品に於いて心に防護無きが故に放逸と名づけ、諸の尊重なるもの及び福田に於いて心謙敬せざるを說いて名づけて傲と爲し、若し煩惱の纏能く發起せしめ、刀杖を執持し、鬪訟違諍するが故に憤發と名づけ、心染汚を懷き、己が徳を顯はさんが爲めに假に威儀を現ずるが故に名づけて矯と爲し、心に染汚を懷き、己が徳を顯はさんが爲めに或は親事を現し或は輭語を行ずるが故に名づけて詐と爲し、心に染汚を懷き、所求あらんことを欲し、矯めて形儀を示すが故に現相と名づけ、現に遮逼を行じて乞匃する所あるが故に研求と名づけ、得る所の利に於いて喜足を生ぜず、他の利を獲ることを悅び更に勝利を求む、是の故に說いて利を以て利を求むと名づけ、自ら己が徳を現はし、謙恭を遠離し、尊重す可きに於いて、而も尊重せざるが故に不敬と名づけ、不順の言に於いて、性堪忍せざるが故に惡說と名づけ、諸有の朋疇引導して非利益の事を作さしむるを名づけて惡友と爲し、財利に耽著して不實の徳を顯はし、他をして知らしめんと欲するが故に惡欲と名づけ、大人の所に於て廣大なる利養恭敬を欲求するが故に大欲と名づけ、染汚心を懷いて不實の徳を顯はし、他をして知らしめんと欲するを自の希欲と名づけ、罵らるるに於いて反つて罵るを名づけて不忍と爲し、瞋に於て反つて瞋り、打たるるに於て反つて打ち、弄せらるるに於て反つて弄するも當に知るべし亦爾なり

と。自らの諸欲に於いて深く貪愛を生ずるを名づけて耽嗜と爲し、他の諸欲に於いて深く耽著を生ずるを遍耽嗜と名づけ、勝れたるに於いて劣れるに於て其の所應に隨つて當に知るべし亦た爾なりと。諸の境界に於いて深く耽著を起すを說いて名づけて貪と爲し、諸の惡行に於いて深く耽著を生ずるを非法貪と名づけ、自らの父母等の諸の財寶に於いて正しく受用せざるを名づけて執著と爲し、他の委寄せる所有の財物に於て規つて抵拒せんと欲するが故に惡貪と名づけ、妄りに諸行を觀じて我、我所と爲し、或は〔四一〕分別して起し、或は是れ〔四二〕倶生するを說いて名づけて〔我、我所〕見と爲し、薩迦耶見を所依止と爲して諸行の中に於いて常見を發起するを名づけて有見と爲し、斷見を發起するを無有見と名づく。當に知るべし五蓋は前の定地に已に說けるが如しと。其の相所欲の如くならず非時に睡纏に隨縛せらるるが故に甍瞢と名づけ、非處に思慕するを說いて不樂と名づけ、麤重剛强にして心調柔ならず、身を擧げて舒布す、故に頻申と曰ひ、飲食する所に於いて善く通達せず、若くは過ぎ若くは減ず、是の故に名づけて食に量を知らずと爲す。應に作すべき所に於て而も便ち作さず、應に作すべき所に非ざるに更に反つて作し、聞き思ひ修習する所の如き法の中に〔於て〕放逸を先と爲して功用を起さざるを作意せずと名づく、所緣の境に於て深く繫縛を生ずること、猶し美睡の其の心を隱翳するが如し、是の故に說いて理に應せずと名づく。轉た自ら輕懱するが故に心下劣なりと名づけ、

〔四一〕分別して起すを分別起の我見我所見と云ふ。
〔四二〕倶生するを倶生起の我見我所見と云ふ。

性となり他を惱ますが故に抵突すと名け、性となり好んで譏嫌するが故に誹謗すと名く。師長、尊重、福田及び同法の者を欺誑するを純直ならずと名づく。身語の二業皆な悉く高疎にして其の心剛勁にして又清潔ならざるを和輭ならずと名づく。諸の戒見、軌則、正命に於いて皆な同分ならざるを隨順せずと名づけ。同分にして轉た心に愛染を懷き、諸欲を攀緣し、意言を起發し隨順し隨轉するを欲尋思と名づけ、心に憎惡を懷き、他に於て不饒益の相を攀緣して意言を起發し隨順し隨轉するを恚尋思と名づけ、心に損害を懷き他に於て惱亂の相を攀緣し。意言を起發し、餘は前の如くなるを、說いて害尋思と名づけ。心に染汙を懷き、親戚を攀緣し、意言を起發す、餘は前に說けるが如し。是の故に說いて親里尋思と名づけ、心に染汙を懷き、國土を攀緣し、意言を起發す、餘は前に說けるが如し、是の故に說いて國土尋思と名づけ、心に染汙を懷き、自義を攀緣して推託し遷延し、後時に得んことを望んで意言を起發す、餘は前に說けるが如し、是の故に說いて不死尋思と名づけ、心に染汙を懷き、自他の若くは劣り若くは勝れるを攀緣し、意言を起發す、餘は前に說けるが如し、是れを輕懱と相應する尋思と名づけ。心に染汙を懷き、施主を攀緣して家勢に往還し意言を起發し隨順し隨轉す。是れを家勢と相應する尋思と名づく、愁歎等の事は前の如く應に知るべし。

【四三】第六に八纏を明す。

（四三）復た次に、一切の煩惱に皆な其の纏あり、現行する者を悉く纏と名づくるに由るが故なり。然

るに八種の諸の隨煩惱ありて(四四)四時の中に於いて數數現行す、是の故に唯だ(四五)八種を立てて纏と爲す。謂く增上戒を修學する時に於いては無慚、無愧數數現行して能く障礙を爲す。若くは增上心を修學する時に於いては惛沈、睡眠數數現行して能く障礙を爲す。若くは增上慧を修學する時に於いては法を揀擇するが故に掉擧、惡作數數現行して能く障礙を爲す。若くば同法の者展轉して財及び法を受用する時は嫉妬、慳悋數數現行して能く障礙を爲す。

(四六)復た次に、欲貪瞋等は欲界所繫の煩惱なり、行者欲界所繫の上品の煩惱の未だ斷ぜず未だ知らざるを欲暴流と名づく。有と見と無明との三種の暴流も其の所應の如く當に知るべし亦爾なりと。謂く欲界に於て未だ離欲を得ざるものにして諸の外道を除けるを欲暴流と名づけ、已に離欲を得たるを有暴流と名づく。若くは諸の外道には多「分」に從つて門を論ぜば當に知るべし餘の二種の暴流ありと。謂く諸の惡見を略攝して一と爲して見暴流と名づけ、惡見の因緣を略攝して一と爲して說いて第四の無明暴流と名づく。

(四七)復た次に、若くは諸の煩惱は等分行者には增さず減らず、即ち上に說ける所の一切の煩惱を說いて名づけて軛と爲す。

【四四】四時。文の中に出づ。
【四五】八種文の中に出づ。
【四六】第七に四暴流を明す。
【四七】第八に四軛を明す。四軛とは等分行の人に於て(一)欲界の煩惱の中見無明を除けるその餘の煩惱を欲軛と云ひ(二)上二界の煩惱の中見無明を除けるその餘の煩惱を有軛と云ひ(三)三界の無明を無明軛と云ひ(四)薄塵行の人の煩惱は軛に非ず。

（四八）復た次に、當に知るべし二品に依りて四種を建立す、一には在家品、二には外道法中の諸の出家品なりと。當に知るべし此の中若くは所取若しは能取若くは所爲取、是の如き一切を總じて說いて取と爲す。問ふ、何んが所取なる。答ふ、（四九）欲、（五〇）見、（五一）戒禁、（五二）我語是れ所取なり。問ふ、何んが能取なる。答ふ、（五三）四種の欲貪は是れ能取なり。問ふ、何んが所爲取なる。答ふ、諸欲を得んが爲め、及び受用せんが爲めの故に（五四）初の取を起し、利養及び恭敬を貪る增上力に由るが故に或は他の立つる所の論を詰責せんが爲め、或は他の徵する所の難を免脫せんが爲めに（五五）第二の取を起し、奢摩他支を所依止と爲し、所建立と爲し、世間の離欲乃至非想非非想處の三摩鉢底に往趣せんと欲するが爲めに（五六）第三の取を起し、分別して計する所の作業受果の所有る士夫を隨說せんと欲するが爲め、及び流轉還滅の士夫の相を隨說せんが爲めに我語取を起す、是の如き四取は二品に依る、謂はく欲を受用する諸の在家品及び惡說の法毘柰耶の中の諸の出家品なり。佛世尊每に自ら稱して「我れを諸取を徧く知り永へに斷ぜる正論の大師と爲す」と言へるに由るが故に、此の法に於いて誓つて修行する者は煩惱を帶して身壞し命終ると雖も而も彼に於て諸取を建立せず。所以は何ん、彼れ諸欲に於いて顧戀する所無く而も出家するが故に、見、戒禁及び我語に於いて執受

【四八】第九に四取を明す。
【四九】欲とは四欲なり次出。
【五〇】見とは身見等。
【五一】戒禁とは非因計因の雞狗等の戒。
【五二】我語とは我見。
【五三】四種の欲とは情欲、色欲、食欲、婬欲なり。
【五四】初の取とは欲取なり。
【五五】第二の取とは見取なり。
【五六】第三の取とは戒禁取なり。

無きが故なり。惡說法者に二の差別あり、一には見愛に於いて展轉して怨諍論を發起する者、二には能く世間定に證入する者なり。見愛に於いて展轉して怨諍論を發起する者に依つて見取を建立し、能く世間定に證入する者に依りて戒禁取を立て、(五七)二品を依と爲して我語に執著するが爲めの故に(五八)倶品に依りて我語取を立つ。此の中見とは、謂く六十二なり、前の如く應に知るべし。邪なる分別の見の受持する所の身護、語護を說いて名づけて戒と爲し、此れに隨つて受くる所の形服、飮食、威儀、行相を說いて名づけて禁と爲し、諦の故に、住の故に有我を論說するを名づけて我語「取」と爲す、實物ありと執するを說いて諦の故なりと名づけ、安立す可しと執するを說いて住の故なりと名づく。又此の中に於いて欲愛を緣と爲して欲取を建立し、智論に依止する利養恭敬等の愛を緣と爲して見取を建立し、定愛を緣と爲して禁戒取を立て、(五九)有無の有愛を緣と爲して我語取を立つ。

(六〇)復た次に、當に知るべし(六一)四繫は唯だ外道に依りて差別し建立すと、前の如く應に知るべし。

(六二)復た次に、五處に違背して當に知るべし五蓋の差別を建立すと。一には在家の諸欲の境界の爲めに漂淪せらるるが故に聖教に違背して貪欲蓋を立つ、二には諸の同法の者の訶諫驅擯教誡等に堪へざるが故に所有愛樂す可き法に違背して瞋恚蓋を立つ、三には奢摩他に違背するに由るが故に惛沈睡

【五七】二品とは見取と戒禁取なり。

【五八】倶品。同上。

【五九】有無の有愛とは計著する所の我に於て或は有り或は無しとし愛を起すを云ふ。

【六〇】第十に四繫を明す。

【六一】四繫。(一)三界の貪(二)欲界の瞋恚(三)三界の見取見(四)戒禁取見。

【六二】第十一に五蓋を明す。

眠蓋を立つ、四には毘鉢舍那に違背するに由るが故に掉擧惡作蓋を立つ、五には法に於いて論議し、無倒に決擇し、諸法を審察する大師の聖敎涅槃の勝解に違背するに由るが故に疑蓋を建立す。

(六三)復た次に、若くは貪瞋癡の纒に纒はるるが故に、或は彼の隨眠に隨眠せらるるが故に心調柔ならず、心極めて愚昧にして自義を得るに於いて能く衰損を作すが故に　(六四)株杌と名づく。

(六五)復た次に、弊下の境に於いて起す所の貪欲を名づけて　(六六)貪垢と爲し、瞋るべからざる所緣の境事に於いて起す所の瞋恚を名づけて瞋垢と爲し、極めて顯現し愚癡の衆生すら尙ほ能く了する事に於いて起す所の愚癡を名づけて癡垢と爲す。

(六七)復た次に、若くは貪瞋癡數數現行し、恆常に流溢し、身心を燒惱し極めて衰損を爲すを說いて　(六八)燒害と名づく。

(六九)復た次に、若し貪瞋癡は慚愧を遠離し、慚愧無きが故に一向無間に制伏す可らず、定んで傷損を爲すを說いて名づけて　(七〇)箭と爲す。

(七一)復た次に、若し貪瞋癡と慚愧と間雜して相續するに由るが故に、刹那に非ざるが故に、制伏す可

【六三】第十二に三種の株杌を明す。

【六四】株杌。貪等の三惑は破壞すべきこと難きが故に株杌と名く。

【六五】第十三に三種の垢を明す。

【六六】貪垢。貪等の三毒は不淨なるが故に垢と名く。

【六七】第十四に三種の燒害を明す。

【六八】燒害。貪等の三は永く生死の燒害となる故に燒害と名く。

【六九】第十五に三種の箭を明す。

【七〇】箭。貪等の三は能く損傷を爲すが故に箭と名く。

【七一】第十六に三種の所有を明す。

きあるを說いて（七二）所有と名づく、是は繫の所攝なり、極めて下穢なる義なり。
（七三）復た次に、一切の不善の身業を名づけて惡行と爲す。身業を說くが如く語業意業も當に知るべし亦た爾なりと。此の惡業數現行するに由るが故に諸の惡趣に於いて或は已に隨つて得たり、或は當に隨つて得べく、或は現に隨つて得、是の故に彼れを說いて名づけて惡行と爲す。此に由りて業雜染の義を示現す、煩惱雜染は前に已に顯了せり。
（七四）復た次に、二の業雜染を安立する論あり、一には邪論、二には正論なり。邪論と言ふは、謂く是の如く說く、若くは故思ありて凡そ造作する所の諸の不善業は一切決定して當に惡趣を受くべしと。此の論は便ち梵行を修行し、能く涅槃を證することを謗る。何となれば、諸の有情類は易く現法の中に於いて故思あること無くして不善業を造ることを得可らず、況んや餘生に在るをや。若し彼れ決定して惡趣を感ずといはば便ち應に解脫として得可きものあること無かるべし。是の故に當に知るべし此を邪論と爲すと。若くは是の如く說く、諸有故思は不善業を造る、此の業をば亦たは作し亦たは增長する者は定んで當來に於いて愛す可らざる惡趣の異熟を受く、若し作すと雖も增長せざることある者は彼彼の法受を依止と爲るが故に諸の造作する所或は樂、或は苦にして當に造時に於いて現法の中に於いて此の業決定して樂受に順じ、或は苦受に順ずることを成ず

【七二】所有。貪等の三あるが故に財物を蓄積す、故に所有と名く。
【七三】業を解す。第一に三惡行業を明す。三惡行業とは身語意の三惡業なり。
【七四】第二に邪正二論を明す。（イ）初に二論を辨す。

べし、諸有是の如き業を造作し已つて若し追悔すること無く對治を修せざる補特伽羅は彼れ此の業に於いて若くは更に増長し、若くは増長せず、此の業は定んで順現法受なりと雖も亦た轉じて順惡趣受を成ぜしめ、現法の中に於いて能く解脱を障ふ、諸有是の如き業を造作し已つて若し追悔を生じ、對治を修習する補特伽羅は彼れ此の業に於いて若くは増長せず、若くは更に増長す、此の業は是れ順惡趣受なりと雖も亦た轉じて順現法受を成ぜしめ、解脱を障へずと。是の故に此の論を梵行を修習し能く涅槃を證するを誹謗すと名づけず、當に知るべし此の論を是れ正論と名づくと。

【一七五】(ロ)重ねて廣く邪正二論を分別す。

(一七四)復た次に、十種の對治を闕くことあれば業雜染の爲めに染汙せられ、若し是の如き十種に會遇することあれば便ち清淨を得。一には若し是の如き對治に由れば業を作ることありと雖も而も増長すること無し、彼を當來に望むれば不定受を成す。二には若し是の如き對治に由れば未だ永へに斷ぜずと雖も而も更に受けず。三には若し是の如き對治に由れば永へに斷じ離繫す。四には諸の根門を守護するが故に善く其の身を修し、増上戒學を修習せんと欲することを爲す。五には増上戒を修習し已つて増上心學を修習せんと欲することを爲す。六には増上心を修習し已つて増上慧學を修習せんと欲することを爲す。七には増上慧を修習し已つて諸漏を斷ずることを爲す。八には猛利の意樂を修習す。九には長時に修習す。十には無量門の對治を修習す。若し是の如き十種の業對治に會はざることある者は業雜染の爲めに染汙せらる、此と相違す

るは當に知るべし清淨なりと。

復た次に、現法の中に於いて身語意業を防護せずして住する者は彼れ先に惡不善業を造作し亦た增長せしめ、當來世に於いて其をして雜染せしむ、若し善く身語意業を防護して住する者は彼れ雜染せず。云何んが現法の中に於いて善く身語意業を防護せずして住し、云何んが身語意業を防護して住するや。善く身語意業を防護せずして住すとは、謂く一あるが如き諸の不善の身語意業の纏の發起する所に於て能く誓つて遠離するも、然も能く不正なる作意を起すに於いて（七六）相應無明猶ほ故に發起し、又諸の善の身語意業に於いて受學し隨轉す。此の因緣に由りて現法の中に於いて諸の煩惱邪欲の尋求して作す所の衆苦に於いて差別あること無く、彼れ唯だ即ち此に於いて誓つて遠離を受け、便ち喜足を生ずるも、現法の中に於いて聖道を起さず、涅槃を證せず、彼れ是の如く防護して住し、現法の中に於いて暫時惡不善の業を作さずと雖も然も（七七）煩惱の隨眠の縛の爲に縛せられ既に沒し、沒し已つて後有續いて生じ、受くる所の身に隨つて先の業緣に依り廣く雜染を起す。若し善く身語意業を防護して住する者には此の差別あり、謂く此れ彼れ誓つて遠離を受け新業を造らざるに依るが故に業熟すと雖も暫く異熟に觸し尋で能く變吐す。彼れ唯だ此に於いて誓て遠離を受け、喜足を生ぜず、現法の中に於いて能く聖道を起し、亦た能く彼

【七六】相應無明。無明に相應無明と不共無明との二種あり。相應無明とは根本煩惱及隨煩惱と倶に起る無明にして第六意識に在り。

【七七】煩惱の隨眠とは煩惱の種子なり。

の果たる涅槃を證得す。彼れ爾の時に於いて乃至有識身相續して住し、恆に先業より感ずる所の諸受を受く。現法の中に於いて彼の有識身乃至壽量未だ滅盡せざる位は、常に相續して住し、壽量若し盡くれば有識身を捨て、後の命根に於いて更に成熟せず、是の因縁に由りて識と一切の諸受と倶に滅して後相續せず、彼の（七八）影の如き受と其の識の樹と皆な滅盡するが故に徧く一切に於いて施設す可からず、彼れ爾の時に於いて二の因縁に由りて先に作せる所の業は當來世に於いて染〔汙〕を爲すこと能はず。一には煩惱其の助伴と爲りて雜染せしむる者を餘す無く斷ずるに由るが故に、二には（七九）此の諸行相續し成熟するに依りて雜染餘す無く滅するに由るが故なり。彼れ爾の時に於いて諸の有情に善く友はるる意樂相續し轉ず、故に無怨心と名づけ、彼の所緣に於いて瞋恚斷ずるが故に無恚心と名づけ、業異熟に於いて深く過患を見る增上緣の力にて誓つて遠離す、故に無染心と名づけ、已に具に能く彼れを對治する諸の聖道を獲得す、故に顚倒無き善解脫心と名づく。彼れ是の如く能く具に（八〇）六種の恆住を證得するに由り、若し彼の多所に於いて住することある者は現法の中に於いて種種なる諸の惡不善の業緣間雜することありと雖も、此の遠離に由りて一向に善を成ず。是の因縁に由りて當に知るべし此れと先の防護して住すると其の差別ありと。

【七八】樹より影生ずる如く識より受生ず、識と受との本末關係は樹と影との本末關係の如し。
【七九】此の諸行とは前の斷惑の修行を云ふ。
【八〇】六種の恆住。第三十四卷に出づ。

復た次に、當に知るべし（八一）業異熟を領受する論を施設するに（八二）五種の相に由りて其の雜染を成じ（八三）五種の相に由りて不雜染を成ずと。云何んが名づけて五種の相に由り其の雜染を成ずと爲すや。謂く惡因論を施設するに由るが故に亦た無因論を施設するに由るが故に及び惡因無因に三過あるを施設するに由るが故なり。此の中惡因論を施設すとは、謂く一あるが如き是の如きの見を起し、是の如きの論を立つ、若くは士夫補特伽羅あり、諸の領受する所は一切皆な是れ宿因の作す所なり、是の如きは或は謂く（八四）自在變化等の因の作す所なりと。無因論を施設すとは、謂く一あるが如き是の如きの見を起し、是の如きの論を立つ、若くは士夫補特伽羅なり、諸の領受する所なりと。云何んが一切因無く縁無きや、云何んが惡因無因に三過あるを施設するや。謂く現法の中の不善と倶行する不善の（八五）諸受は、宿世の業を因と爲せば亦た過失あり、現法の業を因と爲せば亦た過失あり、若し此の受は宿世の惡業を以て因と爲すとは是れ則ち一あり、不善の諸の樂法受に依りて其の樂不善の受生ずることあらんに、此れ宿世の諸の（八六）不善の業を用て以て因と爲して生ずと言はば道理に應ぜず。何となれば彼の宿世の諸の不善の業に非ざるもの現法の中に於いて樂の異熟を感ずるは正道理に應ずればなり。

【八一】業異熟とは業果、善惡の業の結果たる無記法を云ふ。

【八二】五種の相。惡因論を施設し、無因論を施設し、惡因無因の三過を施設す、合して五種なり。

【八三】此の五種の相は下本文に出づ。

【八四】自在天を諸法の因となす。

【八五】諸受とは苦樂捨の三受なり。

【八六】不善業の果は是れ無記なるべきに不善なりとするは道理に應ぜず。

若し此の現法の中の惡業を受用して因と爲すと言はば、是れ則ち自意の立つる所の諸の惡因論及び無因論を退失す、謂く諸の受くる所は皆宿因の〔所〕作なりと、乃至廣く說けり、是れを初過と名づく。又若し說いて諸の不善の法は皆な宿世の惡業を用て因と爲すと言はば、是れ則ち決定して所有善法は亦宿世の善法を用て因と爲す、是の如く所有不善の對治と諸善の加行と俱に生ずれば精進皆な無用を成ず、是の如きを名づけて第二の過失と爲す。又若し現在に士用あること無くんば是れ則ち應に善不善に依り、審正に是は(八七)應に作すべき所應に作すべからざる所なりと觀察すると無かるべく、又如實の智應に無用を成ずべし。謂く了知し已つて(八八)此れ我れ應に轉ずべく、(八九)此れ我れ應に成ずべしと、彼れ有るに非ざるが故に、此も亦有るに非ざるが故に如實の智理として成就せず。智成せざるが故に念安住せず、念住せざるが故に三摩地無く、定あること無きが故に不正の尋思心をして迷亂せしめ、心迷亂するが故に便ち應に愚夫同意の所樂の諸根を欣慕すべく、彼に由りて愚夫同意の所樂の法を獲得するが故に、是れ則ち並に沙門の法及び沙門の論を退失す、是の如きを名づけて第三の過失と爲す。若し略して說かば此に三種の過あり、謂く(一)現在世の諸の不善受の因成ぜざる過と、(二)精進を謗ると、(三)正智を謗るとの過なり。云何んが一切の業異熟を領受する論を施設するは五種の相に由りて不雜染を成ずるや。謂く(一)若くは能く領受する者、(二)若くは此に由りて領受し、(三)若くは

【八七】善は應に作すべく、不善は應に作すべからずと觀察することなし。
【八八】惡をば應に轉ずべし。
【八九】善をば應に成ずべし。

是の如く領受し、(四)若くは領受する時、(五)是の如く雜染是の如く清淨なり。當に知るべし此の中五取蘊に依り假名の補特伽羅を施設して領受する者と爲すと。卽ち此の假者は六觸處に由るが故に能く領受す。母胎の中に於て四種の差別あり、謂く(一)精血と(二)大種所造と(三)〔九〇〕諸業と(四)〔九一〕煩惱との攝受せらるるに依りて結生し相續して〔九二〕取の識及び母腹の中の所有の孔穴あり、是の如きに由るが故に母胎に入ることを得。次に〔九三〕名色あり、次に〔九四〕六處あり、次に〔九五〕觸、次に〔九六〕受、是の如く次第して領受することあり。又卽ち此の受も亦た現在の觸を用て其の因と爲し、亦た宿世の業等を用て因と爲す。彼れ若し諸の不正なる法を聽聞して非理に作意するを以て因緣と爲し、便ち無明に觸し、觸より生ずる所は受なり、受を緣と爲るが故に復た受を生じ、愛を緣と爲るが故に復た取乃至當來の生老死等を生じ、衆苦差別す。是の如く諸の無明の觸より生ずる所の受を領受する時便ち〔九七〕雜染所攝の二諦あり。此れと相違し、正法を聽聞して如理に作意するを因緣と爲るが故に便ち能く明觸より生ずる所の諸受の差別を領受し、此の受を受くる時便ち〔九八〕清淨所攝の二諦あり。

〔九〇〕諸業とは十二緣起支の中の第二行支なり。
〔九一〕煩惱とは十二緣起支の中の第一無明支なり。
〔九二〕取の識とは結生托胎一念の識、卽ち阿賴耶識にして、十二緣起支の中の第三識支是なり。
〔九三〕名色。名とは心の種子、色とは色の種子なり、十二緣起の中の第四支なり。
〔九四〕六處は十二緣起支中の第五支なり。
〔九五〕觸は同上第六支なり。
〔九六〕受は同上第七支なり。
〔九七〕雜染所攝の二諦とは苦集二諦なり。
〔九八〕清淨所攝の二諦とは滅道二諦なり。

復た次に、當に知るべし(九九)邪業清淨及び邪行を施設する中に二の過患ありと。何等をか二と爲す。一には內證稽留する過患、二には他に譏毀せらるる過患なり。云何んが邪業清淨を施設する。謂く一あるが如き實に大師に非ざるに、妄りに分別し已つて自ら大師と稱し、是の如き邪に施設する論を宣說す。謂く現法の中の諸の受くる所の苦は一切皆是れ宿因の作す所なりと。彼れ宿世の諸の不善業を見て二種の因と爲す、謂く(一)現法の中の諸の不善業は皆な是れ宿業の串習より引く所なり、(二)諸の受くる所の苦も亦た是れ彼の業の造作する所なり。是の因緣に由りて自苦行を修して故の惡業より招く所の苦果をして皆な悉く變吐せしめ、更に當「來」の不善業を造作せず、現法の中に於いて又能く身語意を防護して住し、後當に一向の善業を勤修し、不善法をして轉じて(一〇〇)非漏を成ぜしむ。此の因緣に由り不善業盡き、彼れ盡くるに由るが故に衆苦も亦た盡きて苦の邊際を證す。云何んが邪行なりや。謂く一あるが如き自らの業雜染を了知すること能はず、彼の業を對治することを了知すること能はず、又前後の所證の差別に於いて如實に知らず、彼れ是の如き愚癡法を成ずるが故に其の師の所に於いて無根信を得、非信の處に於いて妄りに眞實なる聖教の勝解を生じ、彼れ、非實非理の邪論に墜墮し、他に朋黨して廻動する時疑ふ可き處に於いて而も疑を生ぜず、師を尋求し躬ら往いて請問し、能く正に記せんが爲めに、能く記せざらんが爲めに、能く疑を淨うせんが爲めに、能

【九九】邪業清淨。外道は苦行を以て過去の惡業を清淨にすと計す。

【一〇〇】非漏は無漏と同じ。

く淨ふせざらんが爲に、一切智非一切智の爲にせざるに由り、大師世を去れば所疑の處に於いて畢竟して隨轉す。何となれば大師世に住したまへば能く爲めに此の一切智と非一切智とを決了したまふ、大師の滅後は何れの所にか請問し、云何んが決了せん、是れを邪行と名づく。何に緣てか應に是の如き施設は業をして淸淨ならしむるは道理に應ぜずと知るべきや。二緣に由るが故なり、謂く(一)彼の苦行の宿因の作す所なるは理に應ぜざるが故に、(二)此に由りて能く宿「世」の不善業を盡すことは理に應ぜざるが故なり。所以は何ん、輭中上品の自苦行の緣に逼切せらるる時輭中上品の苦受生ずるが故に、即ち此の三品の逼緣を遠離し、逼切する所の三品の苦受生ずることを得ざるに由るが故に、謂ゆる因の作す所は道理に應ぜざるなり。又此の苦行は功能あること無く、宿「世」の所作をして能く苦受を感ぜしめ、諸の不善業は樂受に順ずることを成ず。是の故に彼れ是の如き定見を起す、自苦行に由りて宿「世」の所作の惡業をして變吐せしむと。若し是の事あらば彼の宿「世」の所作の能く苦受に順ずる諸の不善業能く現法の中に於いて自苦に逼切せらるる苦受の果を感得すと爲んや不や。若し此の苦受の果を感得すと言はば自苦行を修するは即ち唐捐なりと爲す、彼の果を受け已れば自然に變吐するなり。若し是の如くならば宿世の所作の諸の不善業は自苦行の能く變吐する所に非ず、又即ち此の業の一分をば吐く可し。謂く現法の中にて彼の果を受くる者は若くは餘の「一分」の能く(一〇一)後に順じて受くる所の業をば彼れ後世に於いて當に其の果

【一〇一】是れ順後受業なり。

を受くべく、自苦の行其の果をして悉く皆な變吐せしむべきに非ず。若し現在の逼切せらるる苦受は宿因の〔所〕作に非ずと言はば是の如く說く所の諸の領受する所の一切は皆な是れ宿因の所作なり、〔是れ〕道理に應ぜず。能く苦受に隨順する惡業をば其をして樂受に順ずることを成ぜしむ可らざるが如く、是の如く宿世の所作の能く樂受に順ずる善業をば其をして不苦不樂受に順ずる業を成ぜしむ可らず。或は彼の〔一〇二〕二種の順現法受は其をして順後受を成ぜしむ可らず、若くは順後受を成ぜしむ可らず。若くは順後受は其をして無所受を成ぜしむべからず、若くは未だ成熟せざるをば熟せしむ可らず、若くは已に成熟せるをば彼彼の方便をして轉せしむ可らず。此の中に說く所の要略の義をいはば所謂一切の善不善の業は自性決定し、時分決定し、品類決定するなり。若し是の如くならば業の決定に隨つて必ず能く是の如き類の果を攝受す、中に於いて更に自ら逼切せらるる苦を受くるも、復た何の所用かあらん。又若し此の受は宿業の因より感ずるは彼れ自ら許す所にして業の一分をして滅盡せしめ、少分の勝利を得可し。是の因緣に由りて此の如く許す所の少分の勝利亦た所有無し、是の如く則ち極めて自ら稽留する業の爲めに縛せらるるが故に終に解脫無し。此の道理に由りて是れを此の邪論邪行に於ける第一の過患と名づく。謂く內證の自義に於て稽留するなり。云何んが他に譏毀せらるる過患なりや。謂く彼れ二種の邪論に依止して三種の自ら苦惱する行を發起す、若くは是の說を作す、所有士夫補特伽羅の諸の領受する所の一切は

【一〇二】二種とは苦受に順ずると樂受に順ずるとの二種なり。

皆な是れ宿因の所作なりと、是れを第一の邪論と名づく、謂く惡因論なり。復た有ひは說いて言はく彼の最初の「領受する所の」如きは自在「天」變化す、是より已後諸の領受する所の一切は皆な是れ宿業の所作なりと、是れを第二の邪論と名づく、謂く惡因論なり。三種の自苦行とは、謂く身語意護なり。身護とは、謂く身を以て他の有情と共に相ひ雜住せず、唯だ山林阿練若處に往き、獨り閑靜に居り、都べて所見無くして苦行を修するなり。語護とは、謂く彼れ默無言の禁を受持するなり。意護とは、謂く心自ら逼切する苦を忍受し、彼れ是の如き欲樂の言說を起して他の爲めに顯示す。此の〔一〇三〕二種の所見圓滿するに由り、及び三種の苦行圓滿するに由り能く衆苦を越ゆるも、然も其の自苦をば越度すること能はず、是の故に他の爲めに譏毀せらる。若し諸の受くる所の一切は皆な是れ宿因の所作、亦た是れ自在「天」變化する因の「所」作、亦た是れ三種の苦行の能越の因の所作なり。是れ則ち三種に苦行を修し、倶に受くる所の衆苦は定んで是れ宿世の黑業より感ずる所、亦た是れ暴惡なる自在「天」の化する所にして、三種の苦行をば皆な越ゆること能はず。是の故に今に於いて斯の苦受を受く。若し彼れ復た內證稽留すと雖も而も他の爲めに稱讚せらるることあるすら猶ほ不可なり、況んや此れ他の爲めに稱讚せらるるをや。勝利亦た所有無し、是の故に名づけて第二の過患と爲す、此の分に由るが故に唯だ譏毀す可し。

復た次に、上と相違するは當に知るべし正業の染淨及び正行を施設する中に二の勝利ありと。一

【一〇三】二種の所見とは前の二種の邪論を云ふ。

には内證に滯ほり無き勝利。二には他に稱讃せらるる勝利なり。云何んが業雜染論を施設する。謂く二業あり。一には善業、二には不善業なり。過去世に於いて已に曾し善不善の業を造作し、現法の中にて愛非愛の異熟果等を受け、愛非愛果の差別を受くる時更に復た善不善業を造作し、此に由りて當來に愛非愛の異熟果等を受く、是の如きを名づけて業雜染論と爲す。云何んが業清淨論を施設する。謂く一あるが如き新業を造らず故業の觸已んで尋いで復た變吐し、對治力に由りて永へに斷じて餘す無きが故に清淨を得。是の如きを名づけて雜染の業をして清淨を得せしむる論と爲し、是の如く正業の染淨を施設するを無上論と名づく。云何んが正行なる。謂く一あるが如き正法の中に於いて多聞を成就し、業雜染及び清淨に於いて正に雜染清淨の相を知り已つて不善業を捨て善業を修習す。彼れ聞思に於いて如理に作意し、勤めて方便し已つて證の爲めに修するが故に空閑處に住し、淨く心を修治し、諸蓋及び衆苦の法を離れしむ。貪欲、瞋恚、掉擧、惡作を斷除せんと欲するが爲めに九種の行を以て其の心を安住せしめ、心をして止〔定〕の所對治の〔煩惱〕を棄捨せしめ、惛沈、睡眠及び疑蓋を斷除せんと欲するが爲めに〔一〇四〕六事を分析して如理に作意し、其の心を修飾し、心をして觀〔慧〕の所對治〔の煩惱〕を棄捨せしむ。彼の止觀の所〔對〕治より出で已つた能く正に修學して衆苦を消伏す、彼れ既に是の如く淨く其の心を修して諸蓋衆苦の法を離れしめ已つて復た衣服、飲食、臥具を受用する儀則に於いて淨く其の心を修す。若

【一〇四】六事とは地水火風空識の六大なり。

し是の如き衣服乃至臥具に習近すれば不善法增し善法退滅するに由りて卽便ち遠離す、寧ろ受用す可けんや。麤弊衣等の惙爾たるは自在にして衆苦を忍受し、正行を進修す。又二緣に由りて勝妙なる衣服等を受用し、因つて能く惡不善の法を生長せしむ。謂く諸の妄想不正の尋思なり。何等か二緣なる。一には諸善に於いて未だ長時に串ひ修習すること能はざるが故に心調柔ならず、二には衣服飮食等の事に於いて欲貪堅著す。是の因緣に由りて正行を修する者は其の心を調柔して所作に堪へしめ、衣服等の欲貪堅著及び諸の無常の衆の緣生の法に於て恆常に繫念して深く過患を見る。爾の時復た勝妙なる衣服等の事を受用すと雖も而も其の中に於いて雜染あること無く、是の如き行者は亦たは安樂を受け亦たは罪あると無し。奢摩他毗鉢舍那の修習力に由るが故に淨く其の心を修め、諸蓋を離れ已るも、思擇力に由りて衣服等に於て邪に受用するが故に爾の時に於て暫少く心一境性を成就すと雖も欲貪隨眠仍ほ未だ斷せざるが故に當來世に於て復た雜染を爲す。彼れ妙慧を以て是れに通達し已つて便ち加行を修し、畢竟斷を爲し、如法なる邊際の臥具を受用し、諸の貪著を離れ、先づ善く正定の資糧を修治し、漸次に乃至能く淸淨なる第四靜慮に入る。此れを以て所「依」と爲し、諦現觀を證し、隨つて「有」漏盡き心善く解脫することを得。一切の苦に於て離繫を得るが故に、究竟寂靜に攝受せらるるが故に、微妙淸淨なる一切の身心無間に滿ずるが故に、一切の煩惱永く離繫するが故に、普く能く諸の無漏受を領納す、是を正行と名づく。是の如く應に知るべし內證滯り無きと、及び彼の

(一〇五)相違する五種の差別は他に稱讃せらると。彼れ爾の時に於いて諸の蓋纏及び一切の苦をば心善く解脱するに從つて現法の中に於いて彼の諸の隨眠餘す無く永へに斷じ、前際後際の業及び異熟所有の雜染をば皆な善く解脱す、現法に於いて聖道及び道果を獲得するに由るが故なり。

復た次に、略して三種の補特伽羅あり、一には未だ聖教に入らざる異生、二には已に聖教に入れる有學、三には已に聖教に入れる異生なり。三種の相に由りて應に最初の補特伽羅を知るべく、第二第三も當に知るべし亦た爾なりと。云何んが三相にて應に最初の補特伽羅を知るべきや。謂く初に一の補特伽羅あり、已に世間の正見を成就することを得、施ありと了知するも、乃至廣く說かば彼れ異時に於いて不正法を聞きたるを因緣と爲るが故に、便ち非理なる作意を發起し、世間の正見の將に滅せんと欲するに臨んで、未だ一切悉く皆な已に滅せずと雖も而も能く滅するに堪へ、又彼の所[對]治の誹謗の邪見將に生ぜんと欲するに臨んで、未だ已に生ぜずと雖も而も能く生ずるに堪ふ。彼れ中間に於いて正法を聽聞するを因緣と爲るが故に遂に還つて如理なる作意を發生し、彼れ誹謗の邪見を生ぜんと欲するに臨んで現行せざるが故に說いて名づけて斷と爲す、然れども其の正見先づ成就するが故に名けて生と爲さず。第二に一の補特伽羅あり、正見及以び邪見を成ぜず、正法を聽聞して如理に作意するを因緣と爲るが故に爾れ乃ち世間の正見を發生し、彼れ邪見に於いて名づけて斷と爲さず、先に成ぜざるが故なり。第三に一の補特伽羅あ

【一〇五】前の二種の所見と三種の苦行とに相違する五種。

り、邪見を成就して正法を聽聞し、如理なる作意を因緣と爲るが故に邪見を斷滅し、正見を生起す。云何んが三相にて應に第二の補特伽羅を知るべきや。謂く佛等に於いて已に證淨を得、彼れ佛等に於いて先に現起せる所の一切の無智をば、當に諸諦に於て現觀を得べき時先に已に斷じ盡す。是の故に今に於いては名づけて斷と爲さざるも、而も佛等に於いて證淨と倶行する明［智］現前するが故に、說いて名づけて生と爲す。卽ち學道を以て修所斷の餘品の無明を斷ずるも、而も其の明［智］に於いては生起と名づけず、此の道と先［の滅］と種類同じきが故なり。彼の無學道將に現在前せんとし、修［所］斷の無明皆な悉く滅盡し、又能く諸の無學の明［智］を生起す。云何んが三相にて應に第三の補特伽羅を知るべきや。謂く無我と相應する正法を聞き、初め但だ聞に由りて信解を發生し、而も未だ悟入せず、彼れ無我に於いて信解を生ずるが故に能く我見を斷ずるも、未だ悟入せざるが故に名づけて無我の見を生ずと爲ることを得ず。聞く所の法の如く復た能く如理に正しく思惟する時、無我の理に於て能く悟入するが故に、乃ち名づけて無我の見を生ずと爲ることを得るも、彼の隨眠に於ては而も未だ斷ずること能はず。此より已後修道力に由り諦現觀を證して方に隨眠を斷じ無漏を發生す。

卷の第九十

攝事分中契經事處擇攝第二の二

(一)復た次に、嗢柁南に曰く、

(二)『五〔種〕の二〔業〕と十〔種〕の三〔業〕とにして、〔一種の〕四業を最後と爲す。』

(三)二種の業あり、一には重業、二には輕業なり。復た二業あり、一には增進業、二には不增進業なり。復た二業あり、一には故思して造る所の業、二には故思に非ずして造る所の業なり。復た二業あり、一には定所受業、二には不定所受業なり。復た二業あり、一には異熟已に熟せる業、二には異熟未だ熟せざる業なり。

(四)三種の業あり、謂く善業、不善業、無記業なり。復た三業あり、謂く順樂受業、順苦受業、順不苦不樂受業なり。復た三業あり、謂く順現法受業、順生受業、順後受業なり。復た三業あり、謂く見所斷業、修所斷業、無斷業なり。復た三業あり、謂く三曲業即ち(五)身曲等なり。復た三業あり、

【一】前卷の續き、業を辨ずる中第三に十六種業を明す。
【二】此の頌に十六種行を列す。五種と十種と一種と合して十六種なり。
【三】五種の二業を列擧す。
【四】十種の三業を列擧す。
【五】身曲業、語曲業、意曲業。

謂く三穢業卽ち（六）身穢等なり。復た三業あり、謂く三濁業卽ち（七）身濁等なり。復た三業あり、謂く三淨業卽ち（八）身淨等なり。復た三業あり、謂く三默然業卽ち（九）身默然等なり。

（一〇）四種の業あり、一には黑黑異熟業、二には白白異熟業、三には黑白黑白異熟業、四には不黑不白無異熟業なり、能く諸業を盡くす。

（一一）當に知るべし此の中三の因緣に由りて業をして重きを成ぜしむ、一には意樂に由るが故に、二には加行に由るが故に、三には田に由るが故なりと。意樂に由るとは、謂く猛利なる纏等の所作に由り、同法の者に於いて見已つて歡喜し、彼に於いて（一二）隨法し多く隨つて尋思し多く隨つて伺察す、是の如きを名づけて意樂に由るが故に業をして重きを成ぜしむと爲す。加行に由るとは、謂く彼の業に於いて無間に所作し、殷重に所作し、長時に積集し、又其の中に於いて他を勸めて作さしめ、又卽ち彼に於いて稱揚讃歎す、是の如きを名づけて加行に由るが故に業をして重きを成ぜしむと爲す。田に由るが故なりとは、謂く諸の有情已に（一三）恩ある「もの」に於いて若くは（一四）正行及び（一五）正行の果に住し、彼に於いて善作惡作を發起す、當に知るべし此の

【六】身穢業、語穢業、意穢業。
【七】身濁業、語濁業、意濁業。
【八】身淨業、語淨業、意淨業。
【九】身默然業、語默然業、意默然業。
【一〇】一種の四業を列擧す。
【一一】五種の二業を釋す。
【一二】隨法しとは隨つて法を聞くなり。
【一三】恩あるものとは父母等なり。
【一四】正行とは預流等の四向なり。
【一五】正行の果と預流等の四果及び佛果なり。

業を説いて名づけて重しと爲す。彼と相違するを説いて名づけて輕しと爲す。若くは業の是れ明了に非ざる所作、或は夢中の［所］作、或は無覆無記に由る所作、或は不善の［所］作をば尋いで復た追悔し對治し攝受し、又一切の清淨に於いて相續する所有の諸業、是の如きを皆な不增進業と名づく。當に知るべし此れに異なるを增進業と名づくと。此の中故思して造る所の業とは、謂く先づ思量し已り、隨つて尋思し已り、隨つて伺察し已りて作す所あるなり、彼れ或は錯亂し、或は錯亂せず。其の錯亂とは、謂く餘の［一］處に於いて思うて殺害せんと欲し、或は劫盜せんと欲し、或は別離せんと欲し、或は妄語及び欺誑せんと欲する等なり。是の如く思ひ已つて卽ち此の想を以て（一六）別處に成辦す、當に知るべし此の中（一七）意樂に由るが故に説いて名けて重しと爲し、（一八）事に由るが故に説いて名づけて重しと爲さず。錯亂せずとは、當に知るべし其の相此れと相違すと。若し此の業に異なるは是れを卽ち名づけて故思に非ずして造ると爲す。定受業とは、謂く故思して造る所の重業なり。不定受業とは、謂く故思して造る所の輕業なり。異熟已に熟せる業とは、謂く已に與果の業異にして熟せるなり。未だ熟せざる業とは、此と相違す。若し（一九）阿羅漢［果］を證得せんと欲する時

【一六】別處。最初甲者を殺さんと期し、錯つて別處の乙者を殺すが如し。

【一七】意樂とは故思して業を作さんとする動機を云ふ。

【一八】事とは殺盜等の事實結果を云ふ。

【一九】凡夫學人阿羅漢を證得せんと欲する時、先に造れる業は果を招生して凡夫身中障礙をなす、謂く女身を感する業、黄門の生を受くる業現前して障をなし阿羅漢果を得せしめず。何となれば女身、黄門は阿羅漢果を得ること能はざればなり。

先に造作せる所の決定受業は異熟果現在前するに由るが故に能く障礙を爲すも〔若し未だ果現前せざれば障礙を爲さず、業種子〕身に隨逐し相續するに由らざるが故なり。所以は何ん、但だ彼の業に由り〔四大〕不平等なる所依の身を生ずるが故に能く障礙を爲して阿羅漢果を得ること能はざらしむ。若し(二〇)生受無ければ而も(二一)後受あるも證得する所の阿羅漢果に於いて障を爲すこと能はず。然れども彼れは是の定受業ならざるに非ず。何となれば卽ち彼の(二二)煩惱の助伴に依り、及び卽ち(二三)彼の諸行の相續に依るに由り、此の業を施設して定受〔業〕と爲るが故なり。

(二四)復た次に、二の因緣に由りて善業を建立す、一には愛果を取るが故に、二には所緣の境に於いて如實に偏知し彼の果に反するが故なり。二の因緣に由りて不善業を立つ、一には非愛の果を取るが故に、二には所緣の境に於いて邪に執著するが故なり。善、不善の二種の行相に於て記す可らざるが故に無記業を立つるなり。順樂受業とは謂く初二三靜慮地の繫及び欲界繫の所有善業なり。順苦受業とは、謂く能く惡趣の生を招感する業なり、餓鬼及び傍生の中に生ず。先業を因として樂受を感得するを當に知るべし此の業を名けて順樂受業と爲すとを得。(二五)順不苦不樂受業とは、謂く第四靜慮及び(二六)上地等の諸の所有業なり、唯だ那落迦を除いて所餘の處に於い

〔二〇〕生受とは順生受業なり。
〔二一〕後受とは順後受業なり。
〔二二〕煩惱の助伴とは煩惱あるに由つて業のために助伴となるなり。
〔二三〕彼の諸行とは煩惱を云ふ。
〔二四〕十種の三業を釋す。
〔二五〕順不苦不樂受業とは順捨受業と同じ。
〔二六〕上地とは無色界なり。

ては當に知るべし皆な苦樂の雜受を得と。卽ち彼の業增上力に由るが故に此の依身をして苦樂雜住し、相妨礙せざらしむ。順現法受業とは、謂く是の如き相狀の意樂の作す所の諸業に由り、若くは是の如き相狀の加行、謂く（二七）事加行或は身加行或は語加行の作す所の諸業に由り、若くは是の如き相狀に由り、良に作す所の諸業に由り現法の中に於いて異熟〔果〕成熟す、是の如き名づけて順現法受業と爲す。若し作す所の業現法の中に於いて異熟〔果〕未だ熟せざれば、次の生の中に於いて當に異熟〔果〕を生ずべし、是の如きを名づけて順生受業と爲す。若し作す所の業現法と次生とに〔於て〕異熟〔果〕未だ熟せず、此より已後異熟〔果〕方に熟するを當に知るべし是れを順後受業と名づくと。有學業とは、謂く聖弟子時時の間に於て增上戒〔學〕に依り、增上心〔學〕に依り、增上慧〔學〕に依り無漏を修學し、及び此の後善有漏業を得るを有學業と名づく。無學業とは、謂く一切の阿羅漢等の身相續の中に於いて隨應する諸業なり。此の餘の諸業を是れを非學非無學業と名づく。若くは見〔道〕所斷の（二八）煩惱の相應〔法〕、若くは此れより發する所の（二九）思等の諸業、一切の能く諸の惡趣に往く業、此等を皆な見所斷業と名づく。若し修〔道〕所斷の煩惱の相應〔法〕及び此より發する所の思等の諸業、是の如きを皆な修所斷業と名づく。無斷業とは、所謂一切の有學無學の出世間業なり。當に知るべし此の中三種の相に由り故思して造る所の諸

【二七】事加行とは布施給與等をなすを云ふ。

【二八】煩惱の相應法。相應法とは心所のこと、煩惱の心所を云ふ。

【二九】思等とは思業・思已業なり。思業とは意業、思已業とは語業、身業なり。

の不善業は卽ち現法に於いて增長することを作し已つて還つて復た除斷すと。何等をか三と爲す。一には現法に斷するが故に、二には〔次〕生に斷ずるが故に、三には後〔生〕に斷ずるが故なり。現法に斷ずとは、謂く一あるが如き現法の中に於いて故思して業を造り、增長することを作し已つて尋いで復た【三〇】厭離するなり、其の所作に於いて厭離を受くるが故に、「現法の中に於て所造の業を厭ふと雖も」此れ是の異生未だ離欲を得ず、此に住して命終し、而も未だ能く次生の位に於いて彼の業を造らず異熟〔果〕を受けざらしめず、亦た未だ能く其の後位に於いて【三一】是の事あること無からしめず、現法の中に於いて「暫く所造の業を厭伏すと雖も」亦た未だ一向に能く造らざらしめず。〔次〕生に斷ずるが故なりとは、謂く復た一あり、厭離を受け已つて是の異生を離れ而も欲界に於いて已に離欲を得、此に住して命終す。彼れ現法に於いて更に造作せず、尚は次生に於いて異熟〔果〕を受けず、況んや復た生じ已つて當に所作あるべきや。然も未だ後位の作業を解脫せず及び異熟〔果〕を受く。後〔生〕に斷するが故なりとは、謂く復た一あり、是れ有學なりと雖も而も欲界に於いて未だ離欲を得ず、厭離を受け已つて最初或は復た【三二】第二の沙門果を獲得し、彼を證して是の念を作さく、凡そ我が所有は多くの麤重に由り、多くの熱惱に由る、唯だ應に棄捨すべく厭賤す可し、身の作す所の惡業をば願はくば現法に於いて一切皆な受け、或は我が所有の現法受業の若くは

【三〇】厭離とは煩惱を伏するなり、斷ずるにはあらず。
【三一】是の事とは造業の事なり。
【三二】第二の沙門果とは一來果なり。

苦、若くは樂は皆は願はくは彼と俱時にして受け、復た我をして當に〔次〕生の位に於いて、或は後位に於いて彼の異熟〔果〕を受けしむる勿からんことをと。是の如く正心に誓願を發し已つて彼を斷せんが爲めの故に復た（三三）〔四〕無量を修す、奢摩他品の定の所攝の正に起す加行を以て能く彼の業を起す因緣をして究竟して盡さしめんが爲めの故に。及び進趣し欲愛を離れんが爲めの故なり。當に知るべし此の中に或は（三四）瞋の意樂、或は（三五）害の意樂、或は（三六）嫉妬の性〔あり〕或は（三七）可愛の事に深く染著を生ずと。此を因と爲るに由りて、諸の有情に於いて邪行を發起す、謂く身語意より發する所の惡業、種種なる惡事なり。若し是の如く能く（三八）四種の惡業を起す因緣を對治せんと欲するが爲めに四無量の勝れたる三摩地を修することあるも、彼れ乃至少男少女の無處無容に於いて暫らく更に惡業を作る思を發起す、是の故に彼れ是の如き加行を修して能く所有惡業の因緣を盡くす。當に知るべし是の如く正に加行を修するに（三九）二の因緣に由りて其の作す所及び增長する所の一切の惡業に於いて皆な能く摧伏す、謂く（一）〔四〕無量と（二）定とを修習するに由るが故なりと。所以は何ん、作す所の惡業、但だ有量なる有情の境界に於いて不饒益を欲する意樂より起す所なり、修する所の〔四〕無量は乃ち無量なる有情の境界に於いて饒

（三三）四無量とは慈・悲・喜・捨の四無量なり。
（三四）瞋の意樂を斷ずるは慈無量なり。
（三五）害の意樂を斷ずるは悲無量なり。
（三六）嫉妬の性を斷ずるは喜無量なり。
（三七）可愛の事の染著を斷ずるは捨無量なり。
（三八）四種の惡業とは前の瞋の意樂等の四業なり。
（三九）二の因緣とは四無量を修すると定を修するとなり。

益を作さんと欲する意樂より起す所なればなり。又能く不善業を發起する心は下劣界の攝にして是れ所對治なり、修する所の〔四〕無量と倶行する心は勝妙界の攝にして是れ能對治なり。又心は是れ諸の所造の業に勝る、皆な心に屬するが故に世間は並に是れ心の胤なりと説く、心に繫屬するが故に、心に依つて轉ずるが故なり。是の如く行者先づ正願を發して所依止と爲して後善く〔四〕無量心と定とを修習し、當に進趣し（四〇）欲愛を離るる時に於いて便ち能く（四一）不還果に住することを獲得すべし。若くは但だ此に於いて暫らく喜足を生じ、現法の中に於いて上進することを求めず、彼れ現法の中に〔於て〕すら尚ほ業を造らず、況んや〔次〕生の位に於いて或は後〔生〕の位に於いてをや。又定んで能く當に〔次〕生の位後〔生〕の位の異熟〔果〕を受くべからず。又（四二）正法の外の邪見に墮する者、邪道を行ずる者の所有一切の善不善業は邪見より起す所、邪見の增上力より生ずる所なるが故に皆な曲業と名づく、猛利なる貪瞋より起す所の諸業をば皆な穢業と名づく。猛利なる癡者、上品なる鈍根にして念を忘失する者、極めて闇鈍なる者の癡より起す所の業は皆な是れ濁業なり。一切の能く善趣に往く妙行をば皆な淨業と名づけ、一切の能く涅槃に往く妙行をば默然業と名づく。

（四三）復た次に、能く各別の處所の那落迦を感ずる惡業を黑黑異熟業と名づけ、能く各別の處所の（四四）天

【四〇】欲愛とは欲界の貪愛の煩惱なり。
【四一】不還果とは四沙門果の中の第三果なり。
【四二】正法の外云云とは外道を指す。
【四三】一種の四業を釋す。
【四四】天趣とは他化自在天以上を云ふ。

趣を感ずる善業を白白異熟業と名づけ、能く〔四五〕餘處を感ずる所有諸業を黒白黒白異熟業と名づく。是の處所に於いて〔四六〕二の業果の現前に得可きあり、是の故に總じて說いて以て一業と爲す。若くは出世間の諸の無漏業をば皆な不黒不白無異熟業と名づく、能く諸業を盡くせり。若くは已に業を盡し、若くは當に業を盡すべし、〔此の〕二種を總じて能く諸業を盡すと名づく。未だ生ぜざる者をして當に生ぜざらしむるが故に、已に生ぜる者をして離繫を得せしむるが故に、可愛の因果異熟に約するに由るが故に不白と說く。當に知るべし各別の處所の天趣は一向に白なりとは、謂く〔四七〕他化自在天處を過ぎて欲界の中の魔王の都する所の衆魔の宮殿あり及び上梵世〔天〕乃至非想非非想處所有の善業を總じて說いて〔四八〕一と爲す、彼の處所の眼に見る所の色乃至意に知る所の法に由り一向可愛相續し、殊勝增上の義なるが故に、〔四九〕意門〔五〇〕意を引發し成ずる義なるが故なり。各別の處所の那落迦に四あり、一には大那落迦、二には別那落迦、三には寒那落迦、四には邊那落迦なり。此の處所に於いて各別に純ら順樂受業の諸の〔五一〕果異熟を受け、各別に純ら順苦受業の諸の果異熟を受く、是の故に說いて各別處所と名づく。又魔宮、初二靜慮に於いては純ら悅樂を受け、若くは第三靜慮已上に於いては純ら喜樂を受く。喜樂と言ふは、心をして調柔ならしめ、心をして安適ならし

【四五】餘處とは六欲天、人間處、餓鬼處、畜生處を云ふ。
【四六】二の業果とは黒白の二の業果なり。
【四七】他化自在天とは六欲天の第六天なり。
【四八】白白異熟業の一と爲す。
【四九】意門とは意根門なり。
【五〇】意とは意識なり。
【五一】果異熟は異熟果に同じ。

む、喜と相似するが故に名づけて喜と爲し、是の喜受に非ず樂と相似するを說いて名づけて樂と爲す。是の樂受に非ずして（五二）六觸處門に恆に領受する所の者を當に知るべし卽ち彼を六觸處及び各別の處所と名づく、因果相續する道理の義なるが故なり。

復た次に、嗢柁南に曰く、

（五三）『無智と智と定と、殊勝と障と學等と、
著と無我と聖道と、二海の不同分なり。』

（五四）若くは諸の邪見、若くは諸の我見、若くは卽ち無明は、前に說ける所の（五五）三有情染の無智を根［本］と爲るに依るが故に生起することを得。若し能く此の無義の根本たる一切染の中の能起の一切、雜染の一切を斷ずれば當に知るべし彼れ能く所解を正記すと。此の中（五六）第一に起す所の雜染は實事を損減し、（五七）第二の雜染は虛事を增益し、（五八）第三の雜染は其の如實に顯了する方便に於いて能く愚癡を作す、彼の二因に於いて愚癡あるが故に或は增益を起し、或は損減を起す。

（五九）復た次に、二種の如實智あり、一には（六〇）如理なる作意より發す所、二には（六一）三摩地より發す

【五二】六觸處門とは六根門なり

【五三】此れは總頌第二門智等を解する別頌なり、此中更に十門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【五四】無智を解す。

【五五】三有情染とは(一)邪見にして三曲業を起す者(二)貪瞋にして三穢業を起す者(三)愚癡にして三濁業を起す者なり。

【五六】第一に起す所の雜染とは邪見なり、邪見は因果の實事を撥無す。

【五七】第二の雜染とは我見なり、我見は虛假の事を實有なりと執著す。

【五八】第三の雜染とは無明なり、無明あるが故に法を如實に顯了する能はず。

【五九】彼の二因とは前の二の雜染を指す。

【六〇】智を解す。

【六一】是れ聞思二慧なり。

所なり。當に知るべし(六二)此の中正しき聞思より成ずる所の作意に由りて正法を聽聞する增上力の故に(六三)五種の分位に於いて轉變して起す所の過患をば如實に了知し、又卽ち此の分位に於いて轉變して如理に思惟するを不定地の如實なる正智と名づけ、此を依止と爲して能く隨つて修〔慧〕に入ると。云何んが名づけて分位に轉變して起す所の過患と爲すや。謂く苦樂の位の諸の無常の性なり。苦の分位の中に(六四)自性苦の性あり、樂の分位の中に(六五)變壞法の性あり。云何んが名づけて分位轉變と爲すや。謂く樂の分位と苦の分位と別異の性あり、若くは苦の分位と樂の分位と別異の性あるも是の如し、當に知るべし一切の分位展轉して別異なりと。此の別異に於いて如實に觀見し、此の分位に於いて無常想に住し、如實に別異の過患を觀見し、所有受は皆な是れ苦なりと知り已つて苦想に住して是の如き想あり。是の如き見あれば能く清淨を證す、是の故に亦た如實智と名くることを得。(六六)定に依りて發す所の如實智とは、謂く卽ち彼れに依りて行相轉ずる時輕安に攝せられ、清淨にして擾るること無く寂靜にして轉ず、當に知るべし此の行と前と差別すと。又無常性は是れ一切の行の共相なり、苦性は是れ一切の有漏法の共相なり。二の如實智を依止と爲るが故に當に知るべし如實に能く正に彼の法の二相を顯了すと。

【六二】是れ修慧なり。

【六三】五種とは憂喜苦樂捨の五受なり。

【六四】自性苦とは其れ自身苦なるを云ふ。

【六五】變壞法とは樂變壞して苦となるを云ふ。

【六六】是れ前の三摩地より發す所の如實智なり。

(六七)復た次に、(六八)内法に住する者は未だ定心を得ざるも尙ほ外道の定心と差別す、智勝るるに由るが故なり、何に況んや定心「ある」をや。何となれば彼の諸の外道は定心を得乃至極淨に非想非非想定を證得すと雖も然も猶ほ未だ(六九)六觸處に於いて其の(七〇)五轉を以てし、如實に了知して心正に離欲し、解脱を證得すること能はず、是の故に彼れと此の正法律とは猶ほし地空相去るが如く極めて遠し。内法に住する者は未だ定を得ずと雖も但だ無我の勝解を信聞するに由りて便ち能く三摩地心を證得し、六觸處に於いて能く斷じ能く知り、心に離欲を得及び解脱を修す。是の故に當に知るべし正法律に於いて彼には失壞あり、此には失壞無し、唯だ正しき勝解相續して轉ずる時六境界に於いて六根に依止す。略して五種の寂靜なる妙行あり、謂く(一)深く彼に於いて過患を見るが故に名づけて善調と爲し、(二)應に役すべからざる諸の境界の中に於いて而も役せざるが故に名づけて善覆と爲し、(三)應に役すべき所の諸の境界の中に於いて、或は卒爾に現前する境の上に於いて善く念に住するが故に名づけて善守と爲し、(四)一切の煩惱をば皆な斷ずるが故に名づけて善護と爲し、(五)已に善く修習し、道を圓滿するが故に名づけて善修と爲す。

(七一)復た次に、(七二)二の處所に於いて如來は勝れたる安立智を證得し、能く正に諸の苦樂を超ゆる

【六七】定を解す。
【六八】內法に住する者とは內道卽ち佛教者なり。
【六九】六觸處とは六根處なり。
【七〇】五轉とは(一)諸行の自性を觀ず(二)諸行の因緣を觀ず(三)雜染の因緣を觀ず(四)清淨の因を觀ず(五)清淨を觀す。
【七一】殊勝を解す。
【七二】二の處所とは生死及び涅槃の二なり、又曰く苦諦滅諦の二なり。

ことを顯說したまへり、勝れたる安立智を證得せざるには非ず。中に於いて若くは是の如き解を作すことあり、「此の〔七三〕大沙門喬答摩種は知無く解無し、諸の世間の一向に安樂なるに於いて弟子をして此の安樂は衆苦に間雜すと謂ひ深く怖畏せしめんが爲めの故に、苦樂間雜し依附する諸の世間を超えんが爲めの故に、諸の苦樂を超過せんと欲するが爲めの故に法要を宣說す」と。當に知るべし此の解を是れを邪想と爲し、是れ邪なる分別なり、是れ大邪見なりと。然れども其の如來は善く世間の或は一向樂、或は一向苦、或は雜苦樂、然も彼の一切は皆な是れ無常なりと知りたまへり、是の故に諸の弟子衆をして一切の無常なる世間を超過し、苦樂を超過せしめんが爲めに正しき法要を說きたまへり。三種の相に由り應に正に諸の可意の事を了知すべし、謂く(一)未來世の諸の可愛の事をば追求する所と名づけ、(二)若くは過去世の諸の可愛の事をば尋思する所と名づけ、(三)若くは現在世の可愛の外境をば受用する所と名づけ、若くは現在世の可愛の內受をば耽著する所と名づく。當に知るべし此の中三世に墮して四の行相ありと。一には未來に於いて、二には過去に於いて、三には現在に於いてす。此の行相に於いて能く隨つて悟入す、是れ(一)悅意の相と(二)意の樂ふ所の相と(三)可愛なる色相と(四)平安なる色相とにして、其の所應の如く當に知るべし卽ち是れ(一)可欣(二)可樂(三)可愛(四)可意の四種の行相なりと。

【七三】大沙門喬答摩種。釋種の大沙門卽ち釋尊のこと。

（七四）復た次に、定を勤修する者は略して（七五）二門、二時、二地の所有諸欲に由りて、引發する所の（七六）三種の等持に於いて能く障礙を爲す、是の如き障礙を斷除せんと欲するが爲めに正に勤めて（七七）五種の對治を修習す。（七八）當に知るべし此の中先に受用せる所の過去の諸欲は（七九）遠離處に於いて尋思門に由り心をして飄蕩せしむと。（八〇）復た現在の居家の所有利養恭敬と倶行する諸欲あり、尋思門に由り心をして散亂せしむ。（八一）此の中利養恭敬と倶行する所有の諸欲は其の行ずる時に於いて心をして飄蕩せしめ、（八二）先に受用せる所の居家の諸欲は其の住する時に於いて心をして散亂せしむ。即ち此の諸欲は（八三）異生地に於いて能く障礙を爲し、（八四）有學地に於いて亦障礙を爲す。又異生の修する所の「四」無量と倶行する等持に於いて能く障礙を爲し、亦た有學の能く善く一切の智事に通達する廣大の等持に於いて能く障礙を爲し、亦た無學の極めて善く修習する究竟の等持に於いて能く障礙を爲す。當に知るべし是の如き諸の生起する所の一切の等持は皆な喜と倶なりと。此の中第一には諸の有情に於いて利益し安樂にする意樂門の中にては喜と倶行し、第二には有學の解脱の喜を領受するが故に喜と倶行し、第三には無學の解脱の喜を領受するが故に喜と倶行す。彼れ眼「識」等の識る所の色「境」等の所緣の別に

【七四】障を解す。
【七五】二門等は本文に出づ。
【七六】三種の等持とは（一）異生凡夫位に於て修する所の四無量と倶行する定（二）有學位の定（三）無學位の定なり。
【七七】五種の對治とは前の五轉なり又五停心觀なり。
【七八】二門の中第一門。
【七九】遠離處とは禪定處なり。
【八〇】二門の中第二門。
【八一】二時の第一時。
【八二】二時の第二時。
【八三】二地の中の第一地。
【八四】二地の中の第二地。

由るが故に復た六種あり。又此の等持に諸相を具ふるが故に名づけて圓滿と爲す。又此の等持は究竟の邊際なり、謂く能く世間の離欲に往趣し、或は能く出世の離欲に往趣す、此を過ぎて更に能く趣く清淨なる等持の得可き無し、是の故に此を缺減あること無しと說く。若し速に沙門果を證せんと欲する者は身命等に於いて顧戀する所無く、恆常無間に殷重に加行し、熾然に精進し、諸欲の中に於いて自相を了知し、堅く正念を守り、過患を了知して希望する等無く、正知現前し、正念正知を所依と爲るが故に方便して(八五)四無放逸を勤修す。謂く晝分の若くは行、若くは坐に於いて、諸の正法に於いて淨く其の心を修す、乃至廣く說けり。是の如く勇猛なる精進を發起し、其の所證に於いて怯劣する所無し。(八六)九種の相に由りて其の心を安住せしめ、一向に奢摩他定を修習し、身に輕安を得、愛味等無きが故に染汚無く、惛沈及以び睡眠の二の隨煩惱の爲めに擾亂せられず、一向に〔四〕念住を所依止と爲して精勤して毘鉢舍那を修習し、堅く正念を守り、掉擧の隨煩惱を遠離するが故に愚癡あること無く、已に止觀雙び運轉する道に入り、其の心正定にして、卽ち此の二分一境に隨行し、彼の障を斷ぜんが爲めに是の如き五種の對治を修習するを所依止と爲るが故に彼の障に於いて徧知し永斷し、三等持に於いて(八七)六境事の所有差別に依り喜と倶行する定は能引を圓滿す。二の因緣に由りて諸佛世尊は諸の弟子の爲めに自己の能く

【八五】**四無放逸**とは晝分と夜分との行と坐とに於て放逸なきが故に四となる。

【八六】**九種の相**とは九種の住心なり。

【八七】**六境事**とは色境等の六なり。

引導する法を宣說したまへり、一には黒品の所有過失に於いて解を生ぜしむるが故に、二には白品の所有功德に於いて解を生ぜしむるが故なり。

〔八八〕復た次に、此の正法毗柰耶の中に於いて略して二種の補特伽羅あり、一には已に意を得たるもの、二には未だ意を得ざるものなり。已に意を得たるものとは、復た二種あり、一には已に諦を見已に有學の心解脫意を得たるもの、二には阿羅漢にして已に無學の心解脫意を得たるものなり。未だ意を得ざるものとは、謂く三學に於いて創めて事業を修する有學の異生は彼れ全く未だ一切の三種の心解脫意を得ず、是の故に異生の體の後の有餘依滅及び自體の後の無餘依滅涅槃界を希求する時三學の中に於いて多く修學して住す。若くは諸の無學は已に心解脫意を證得すと雖も而も或は失念し、縱逸を行ずる時便ち現法樂住を退失するとあり、彼れ此の現法樂住に於いて或は退し〔或は〕退せずと雖も然も堪能無くして解脫を退失す。若し不放逸を修行することある者は一切皆な解脫を證得することを爲す、然れども已に解脫を證得すれば退することと無し、不放逸を修するも復た何の所用あらん。若し現法樂住を證得せんが爲めに勤めて功用を作すは工業を造るが如し〔是れ〕不放逸に非ず〔や〕。若し諸の有學先に已に心解脫意を證得すれば彼れ亦た決定して三菩提に趣き、修する所の道に於いて他緣に由らず、自然に能く無放逸行を修し、現法の中に於て猶ほ未だ畢竟して放逸を息めざるが故に、若し一切の未だ意を得ざる者あらば彼れ應に決定し

【八八】學等を解す。

て不放逸を修すべし。又三相に由りて應に作すべき所を辨ず、一には諸根に集成せらるるに由るが故に資糧圓滿し、二には如法に隨順する諸の臥具に習近するに由るが故に心に安住を得、三には善士に依止し親近し、他の法音を聞き、如理に作意する衆の因緣に由るが故に乃至(八九)二の心解脫を獲得す。又卽ち此の不放逸に應ぜる所作轉ずる時に於いて二種の相に由りて應に彼の(九〇)六處の寂滅に於いて增上慢あり增上慢無きを知るべし。(九一)謂く未だ滅せざるに於いて邪なる分別を起し、妄りに執して滅せりと爲す、所緣に由るが故なり、及び未だ得ざるに於いて邪なる分別を起し、妄りに執して得たりと爲す　彼れ是の如く邪なる分別を起し、滅解脫なりと謂ふと雖も而も未だ身壞して已後壽命永く盡き六處永く滅せしむること能はず、亦た諸の境界の想を離るること能はず。又彼れ六處の寂滅に於て若くは緣じ若くは證し邪に領受するに由るが故に是の如き事あり。此の二種の相を應に知るべし說いて增上慢ありと名づくと。此と相違するを當に知るべし說いて增上慢無しと名づくと。

(九二)復た次に、內法に住する者は二種の著に於いて應に當に二種の過患を了知すべし。謂く諸の異生は(九三)二緣の識及び能依の受に於いて無我の性を了知すること能はざるが故に、未だ欲を離れざる者の利養恭敬增上の業緣より起す所の諸受に於いて第一の著あり、已に欲を離れたる者の諸の欲緣を

【八九】二の心解脫とは有學の心解脫と無學の心解脫なり。
【九〇】六處とは六根なり。
【九一】二種の相の中第一。
【九二】著を解す。
【九三】二緣の識。二緣に三釋あり(一)名色と識(二)根と境(三)利養恭敬と離欲なり、取捨任情。

離れて起す所の諸受に於いて第二の著あり、此の著を因と爲して當來生起するを説いて名づけて生と爲す。又諸の外道取著に由るが故に諸の繋縛を生ず、繋縛生ずるが故に能く一切の惡不善の法を生ず、當に知るべし是れを第一の過患と名づくと。又此の著の增上力に由るが故に當に正法毗柰耶に於いて沒し及び當來世の（九四）生等の衆苦差別して生ずべく、現法の中に於いて此の增上力を因緣と爲るが故に般涅槃せず、當に知るべし是れを第二の過患と名づくと。此と相違するは應に知るべし卽ち是れ白品の差別なりと。

（九五）復た次に、四の因緣に由りて法無我に於いて能く究竟に到る。謂く一切の法は皆な無我なりとは、（一）識の自性、識の諸の因緣、識の諸の助伴を除いて其の餘の所有は不可得なるが故に、（二）又識の自性は是れ無常なるが故に、（三）又此の因緣は是れ無常なるが故に、（四）又此の助伴は是れ無常なるが故なり。

復た次に、八聖支道の法に由るが故に、及び此の果の故に正法及び毗柰耶を顯發す。五種の相に由り當に八聖支道の法の最勝にして罪無きことを知るべし、謂く（一）現法の煩惱の有無に於いて善く分別するが故に名づけて現見すと爲し、（二）能く煩惱をして離繫を得せしむるが故に熾然無しと名づけ、（三）若くは行にまれ若くは住にまれ若くは坐にまれ若くは臥にまれ、一切時の中にて皆な修習し易く修習す可きが故に名づけて應時道と爲し、（四）涅槃するが故に名づけて引導と爲し、（五）一切の諸の外

【九四】生等とは生老病死なり。

【九五】無我を解す。

道に共せざるが故に唯と名づけ、此の見は、他を信じ、行相を欣樂し、周徧ねく尋思し、聞に隨つて起す所の見を遠離し、審察して（九六）忍し、唯だ自ら證す、故に內の所證と名づく。此の道果の法に亦た五相あり、當に知るべし已に（九七）攝異門分に其の相を分別せるが如しと。

（九八）復た次に、海に二種あり、一には水海、二には生死海なり。三種の相に由りて當に水海と生死海と同分にあらざることを知るべし。何等をか三と爲す。一には自性同分ならざるが故に、二には淪沒同分ならざるが故に、三には超度同分ならざるが故なり。此の中自性同分ならずとは、謂く水の大海は色の一分を用て自性と爲るが故に邊あり量あり、生死の大海は一切の行を用て自性と爲るが故に邊無く量無し。此の中淪沒同分ならずとは、謂く若くは所有淪沒、若くは此の淪沒に由り、若くは是の如く淪沒すること、皆な同分ならざるなり。謂く水の大海は或は傍生趣、或は人趣あり中に於いて淪沒す、生死の大海には諸天世間も亦た常に淪沒す。又水の大海は唯だ身に由るが故に中に於いて淪沒し、語に由らざるが故に、意に由らざるが故に、貪に由らざるが故に、瞋に由らざるが故に、癡に由らざるが故に、生等の衆苦の法に由らざるが故に中に於いて淪沒す。此の中諸の業と煩惱と彼の果との（九九）三分を宣說す、其の次第の如く應に彼の相を知るべし。生死の大海は亦た身に由るが故に、乃至亦た生等の苦に由るが故に中に於

【九六】忍は認に同じ、認識の意にして、耐忍の意にあらず。
【九七】第八十四卷。
【九八】二海の不同分を解す。
【九九】三分。文の中身語意は業なり、貪瞋癡は煩惱なり、生等の衆苦は果なり。

いて淪沒す。諸の出家の者は妄尋思に由り、妄觀察に由り、自ら起す所の諸の邪なる分別に由り、種種不正なる尋思を發起し、心をして擾亂せしめ生死の海に於いて恆常に淪沒す。又餘の外道は諸の煩惱の繫に纒繫せらるるが故に生死の海に於いて恆常に淪沒す。諸の在家の者は恆常に無間に衆苦逼切し煩惱燒然するも、而も厭ふこと能はず、故に淪沒と名づく、其の餘は諸の業煩惱に依止して諸の生處に於いて往還して絕ゆること無し、故に淪沒と名づく。其の水の大海は其の中に墮すと雖も暫時衰損す、或は傍生趣は業煩惱の一分の勢力に由りて其の中に生じ、暫時淪沒するも而も究竟するに非ず、當に知るべし是れを沒同分ならずと名づくと。此の中超度同分ならずとは、謂く水の大海をば、未だ欲貪を離れざる諸の異生類は越度すること能はず、何に況んや其の餘をや。生死の大海には三分を建立す、(一)未だ欲を離れざる者は〔一〇〇〕五の可愛の境の差別に由るが故に、(二)已に欲を離れたる者は意の識る所の可愛の諸の法境の差別に由るが故に、(三)諸の有學の者は內の六處に差別あるに由るが故なり。其の未だ欲を離れざる諸の異生類は五の可愛の境界の大海に於いて未だ超度すると能はず、其の已に欲を離れたる諸の異生類は內の各別の六處の大海に於いて未だ超度すること能はず。彼れ此に於いて未だ超度せざるに由るが故に〔一〇一〕前の二種の境界の大海に於いて亦た未だ超度せず。其の有學の者は普く六處に於いて徧知して苦と爲し、即ち所緣に於いて正道を修習す、彼れ是の

【一〇〇】五の可愛の境とは色聲等の五境なり。

【一〇一】前の二種とは五の可愛の境及び法境を云ふ。

如き住に安住するに由るが故に未離欲已離欲地の二種の境界に於ける所有の心意の所緣の境相明了に現前す。又猛利なる觀察の作意に由りて先に見たる所に於いて等しく隨つて憶念す、此の因緣に依り彼に於いて速疾に慧を以て通達し、亦た能く除遣し、又彼れ其の六處の大海に於いて速に能く超度す、能く超度するが故に前の二種の境界の大海に於いて畢竟して超度し、及び能く、能く所學を棄捨する煩惱を發し、能く尋思して心を亂す煩惱を發し、能く世間の利養恭敬に耽著する煩惱を發し、能く一切の惡業煩惱を發すを超度するなり。

嗢柁南に曰く、

〔一〇二〕『道と師との不同分と、王國と二の世間と、有爲と身行を遮すると、堅執と三の空性なり。』

〔一〇三〕略して二種の道不同分あり、一には自性不同分、二には行相不同分なり。若くは〔一〇四〕苦集に趣く行、若くは〔一〇五〕苦滅に趣く行、是れを自性不同分と名づく。當に知るべし初めの一は能く雜染に趣き、第二は能く清淨に趣くと、是れを此の中の不同分の義と名づく、卽ち此の滅に趣く行なり。或は〔一〇六〕有爲の共相の行轉ずるあり、或は〔一〇七〕有爲無爲の共相の行轉ずるあり、是れを行相不同分と名づく。當に知るべし此の中若し諸の有爲の共相の行

【一〇二】此は總頌第三門、同等を解する別頌なり。此の中更に十門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【一〇三】道不同分を解す。

【一〇四】苦集に趣く行とは煩惱業なり。

【一〇五】苦滅に趣く行とは無漏聖道なり。

【一〇六】有爲の共相の行。有爲の共相は無常なり、行とは觀なり、無常觀を云ふ。

【一〇七】有爲無爲の共相の行とは空無我觀なり。

相をば彼れを道果に望めて不同分と名づけ、若し有爲無爲の共相の行相をば彼れを道果に望めて亦た同分と名づく、何となれば道果たる涅槃は常に無我なるが故なり。

一〇八復た次に、正法の内に於て略して五種の師の假立の句あり、諸の外道の師の製したる所の論の中には都べて得可からず、謂く(一)(一〇九)諸取に趣く行、(二)(一一〇)諸取盡くるに趣く行、若くは(三)一切の法を徧知し(四)永斷し(五)苦の邊際を作すなり。若くは(一一一)五相受の建立處に於いて一一の相の中に(一一二)四相の薩迦耶見に依らず、彼を用て「所」依と爲して能く(一一三)四種の行相の憍慢を害す、若し慢を因と爲れば三の過患あり、慢を離るるを因と爲れば三の勝利あり。當に知るべし此の中憍慢を懷く者は涅槃界に於いて其の心退還す、怖畏するに由るが故なり、是れを第一の過患と名づくと。諸の惡行恆に現行する中に於いて、及び可愛の諸の雜染の事に於いて其の心趣入す、是れを第二の過患と名く。涅槃界に於て深く怖畏を生ずる增上力の故に、便ち能く當來の生等の生死の重病を生起し、怖畏の增上力に由るが故なるが如く、是の如く亦た諸の惡行に於て、及び可愛の諸の雜染の事に於て、其の心趣入する增上力に由るが故に、能く當來の生等の生死の重病を生起するに堪ふ。生等の病の如く眼等の處

【一〇八】師不同分を解す。
【一〇九】諸取に趣く行。取とは取生なり、流轉行を云ふ。
【一一〇】諸取盡くるに趣く行とは還滅行なり
【一一一】五相受とは五受なり、又曰く五蘊なり。
【一一二】四相の薩迦耶見。外道例へば一の色蘊に於て(一)色は是れ我なり(二)色は是れ我の瓔珞なり(三)色は是れ我の僮僕なり(四)色は是れ我の宅なり等と計するが如し。
【一一三】四種の行相の憍慢とは四相の薩迦耶見に依つて起る四種の我慢なり。

癰、貪等の毒箭も當に知るべし亦た爾なりと、是れを第三の過患と名づく。此と相違するは當に知るべし卽ち是れ慢を離るるを因と爲る三種の勝利なりと。若くは（二四）緣に隨つて起る增上力の故に現法の中に於いて後有の種子或は（二五）增し或は（二六）滅ず、此を因と爲るに由りて當來の後有或は生じ〔或は〕生ぜず、能く種子を攝受する煩惱或は（二七）集起し、或は（二八）滅沒することあるを以ての故に一切の（二九）世間及び（三〇）出世間の所有法敎をば實の如く建立す。唯だ內法に於てのみ此の大師あり、諸の弟子の爲めに正に宣說する所の師の假立の句は眞實に得可し、諸の外道には非ず。

（三一）復た次に、欲界の中に於ける諸の器世間は當に知るべし譬へば王所王國の如く、有情世間は譬へば臣民の如く、彼の惡天魔は譬へば君主の如しと。

（三二）復た次に、二の世間あり、一には有情世間、二には器世間なり。其の器世間は火災等の爲めに壞滅せられ、有情世間は刹那刹那に各各の內身任運に壞滅す。

（三三）復た次に、空に二種あり、一には有爲、二には無爲なり。此の中有爲空は常恆に久久安住して

【二四】緣に隨つて起るとは十二緣起なり。
【二五】增しとは十二緣起を順觀するに約す。
【二六】滅ずとは十二緣起を逆觀するに約す。
【二七】集起し。流轉門に約す。
【二八】滅沒す。還滅門に約す。
【二九】世間の法敎とは十二緣起の流轉門の法敎なり。
【三〇】出世間の法敎とは十二緣起の還滅門の法敎なり。
【三一】王國を解す。
【三二】二の世間を解す。
【三三】有爲を解す。

變易せざる法及び我我所無きなり。若くは諸の無爲は唯だ空にして我及び我所あること無し。又此の空性は諸の因縁を離れたる法性の所攝なり、法爾道理を所依趣と爲す。或は(二四)是の如く、或は(二五)異り、或は(二六)非なり、一切處に徧じて、同じく法爾道理に歸せざる無し。

(二七)復た次に、如來は能く一切の世間の邊際を得るを遮せず、唯だ身行隨往して能く世間の邊際を得るを遮す。此の中當に勝義の道理に依りて應に世間を知り、若くは世間の邊際の方便及び世の邊際を得べし。謂はく方處に於いて世間の想あり、假名を施設する增上力の故に、卽ち世間の若くは智、若くは想の增上力に由るが故に世間ありと說く。若くは想、若くは智の增上力の故に諸の世間に於いて廣く言說を起す。或は見聞、或は覺、或は知の增上力に由るが故に六觸處に於いて其の(二八)五轉に由り如實智を起すを世間の邊際の方便を得と名づく。未來の諸行の因永く盡くるが故に名づけて能く世間の邊際に到ると爲す。世の因果に於いて實の如く知るが故に世間解と名づけ、能く正に最後身を任持するが故に善く世間の邊際に運轉すと名づく。現法の中に於いて一切の境界の愛永く盡くるが故に、具に恆住するが故に說いて能く世間の愛を超ゆる者と名づく。是の如き等の所說の行相に由り當に知るべし世間の邊際を得と名づくと。

【二四】是の如くとは大乘の空を說けり、法に卽して空を辨ずるを大乘の空理とす。
【二五】異りとは、空は法に異りと計するなり。
【二六】非なりとは空と法とは非異非不異なりと計するなり。
【二七】身行を遮するを解す。
【二八】五轉とは六觸處の(一)自性(二)因緣(三)雜染の因緣(四)清淨の因緣(五)清淨を觀ずるなり。

〔二九〕復た次に、〔三〇〕善說法毘柰耶の中の諸の出家に非ざる者隨つて一の惡不善あり、尋思未だ生ぜざるも、生ずる時は一向に能く梵行の障礙を爲す、如し彼れ生じ已れば堅く執して捨せず。〔三一〕此の中行ぜざるを最も殊勝なりと爲す、設ひ行ある者も應に堅く執すべからず、相續の中に於いて應に居住を作す依止と爲すべからず。何となれば刹那の雜染は修する所の梵行を傾動すること能はざるも、要ず當に相續して能く傾動すべきが故なり。

〔三二〕復た次に、當に知るべし略して二種の空住あり、一には尊勝なる空住、二には彼の引く空住なり。諸の阿羅漢は無我を觀じて住す、是の如きを名づけて尊勝なる空住と爲す。阿羅漢の法爾の尊勝に由り無我を觀じて住するを諸住の中に於いて最も尊重と爲す、是の如く或は尊勝なる所住なり、或は卽ち尊勝に住す、此の因緣に由り是の故に說いて尊勝なる空住と名づく。彼を引く空住とは、謂く一あるが如き若くは行にまれ若くは住にまれ、如實に煩惱の有無を了知し、煩惱ありと知れば便ち斷ずる行を修し、煩惱無しと知れば便ち歡喜を生ず。歡喜を生ずるが故に乃至心をして三摩地を證せしむ。心に三摩地を證得するに由るが故に如實に諸法の無我を觀察し、晝夜に隨學し曾て懈廢すること無し、是の如きを名づけて彼を引く空住と爲す。當に知るべし此の中內の煩惱に於いて如實に了知し、知ることあるを有と爲し、知ること無きを無と爲す、是れを空

【二九】堅執を解す。
【三〇】善說乃至者とは外道の出家なり、先づ外道の出家に就て堅執を說く。
【三一】以下佛法の出家に就て堅執を說く。
【三二】三の空性の中、第一の二種の空住を解す。

性と名づく。

【一二三】復た次に、正見圓滿し、已に諦跡を見たる諸の聖弟子は皆な能く如實に彼の邪なる空を越え、亦た能く如實に正しき不空に入る。世間道及び出世道を以て空性を修習する其の義云何ん。謂く此の處に於いて【一二四】彼れ有に非ざるが故に正しく觀じて空と爲し、若くは此の處に於て【一二五】所餘は有なるが故に如實に有なりと知る。【一二六】譬へは【一二七】客舍の一時の間に於いて諸の人物無きを說いて名づけて空と爲し、一時の間に於いて諸の人物あるを說いて不空と名づけ、【一二八】或は卽ち此の舍をば一類無きに由り說いて名づけて空と爲す、謂く材木無く、或は覆苫無く、或は門戶無く、或は關鍵無く、或は隨つて一分所有無きが故なるも、然も此の舍卽ち舍の體空なるには非ざるが如し。是の如く自體の依止する所の身を亦は受趣と名づけ、亦たは想趣と名づけ、亦たは思趣と名づく。然も此の自體の依止する所の身に一時の間に於いて一類の或は受、或は想、或は復た思等の一切の煩惱隨煩惱等無きに由りて說いて名づけて空と爲し、一時の間に於いて一類あるに由りて說いて不空と名づく。或は卽ち自體の依止する所の身に一時の間に於いて一類の或は眼、或は耳、或は鼻、或は舌、或は身の一分、或は意の一分無きに由りて說いて名づけて空と爲す。然も自體の依止する所の身卽ち自

【一二三】此の空性の中、第二の邪正二空を解す。
【一二四】彼れとは遍計所執性を指す。
【一二五】所餘とは依他起性と圓成實性とを指す。
【一二六】茲に二喩あり。
【一二七】前後異時に空不空あるに喩ふ。
【一二八】同時に空不空あるに喩ふ。

身の體一切皆な空なるには非ず。當に知るべし此の中總略の義をいはば若し諸法の所有自性畢竟して皆な空なりと觀ずるを是れを空に於いて顚倒して趣入すと名づけ、亦た佛の善く說きたまへる所の法毘奈耶に違越すと名づくと。若し諸法は自相に由るが故に一類は是れ有なり、一類は有に非ず、此の有と非有とを畢竟して遠離すと觀じ、又有性は一時の間に於いて一分遠離し、一時の間に於いて一分離せずと觀ず、是の如きを名づけて彼の空性に於いて顚倒あること無く如實に趣入すと爲す。世間道を以て空性を修すとは、謂く聖弟子遠離處に住し、先に城邑聚落の人の想に於いて作意し思惟し、次に復た阿練若の想を思惟するなり。彼れ卽ち自身の中の此の想を觀察して空と爲す、謂く人邑等の想なり。此の想をば空せず、謂く阿練若の想なり。又餘をば空せず、謂く阿練若の想を緣と爲る阿練若の想と相應する諸の受思等なり。或は卽ち此の想は一類に由るが故に之を觀じて空と爲す、謂く麤重にして寂靜ならざる住及び〔三九〕熾然等無きなり。一類に由るが故に觀じて不空と爲す、謂く微細にして極めて寂靜なる住と熾然を離れたる等あるなり。又卽ち彼に於いて能く山林卉木禽獸等の阿練若の差別相の想を取りて復た思惟すること無く、但だ地に別相無き想を思惟す。又卽ち彼に於いて能く險惡高下不平にして諸の荊棘瓦礫等多き地の差別相の想を取りて復た思惟すること無く、但だ地の平坦細滑にして猶ほし掌中の如く別相無き想を思惟し、此より次第に色想等を除き、漸次に空處、識處、無所有處の差別相の想を思惟し、後非想

【三九】熾然とは煩惱盛なる狀態なり。

非非想處の所有相の想に於いて作意し思惟し、一切の處に於いて前に說ける所の如く空性を歷觀し、諸の下地には麤想ある等を觀じ、諸の上地には靜想ある等を觀ず、是の如きを名づけて諸の聖弟子世間道を以て空性を修習すと爲す。當に知るべし乃至上極の無所有處に趣かんが爲め、漸次に離欲し、斯より已後聖道の行を修し、漸次に無常の行等を除去し、能く非想非非想處に趣き、畢竟して離欲すと。彼れ爾の時に於いて自ら身中空にして諸想無しと觀ず、謂く一切の漏一向に寂靜にして永く熾然を離る。又身中に法ありて空ならずと觀ず、謂く此の依止を緣として六處展轉して互に相ひ任持し、乃至壽住を緣と爲る諸の清淨の法は壞滅することあること無し。當に知るべし世尊昔修習せる菩薩の行位に於いて多く空を修して住したまへるが故に能く速に阿耨多羅三藐三菩提を證したまへり、無常苦を思惟して住するが如きには非ずと。是の故に今は上妙菩提を證得し住し已つて昔串習し隨轉せる力に由るが故に多く空に依つて住したまふ。

(一四〇)復た次に、二種の空あり、一には(一四一)應に證すべき所の空、二には(一四二)應に修すべき所の空なり。若くは諸の苾芻は樂つて雜住に依り此の二種に於て成辦すること能はず、應に證すべき所の空を證すること能はざるが故なり、應に修すべき所の空を修すること能はざるが故なり。二種に於いて成辦せ

【一四〇】三の空性の中、第三證修の二空を解す。四段あり、此の中第一空性を明す。

【一四一】應に證すべき所の空とは理なり。

【一四二】應に修すべき所の空とは智なり。

ざるに因るが故に當に知るべし四種の妙樂を退失すと。謂く(一)〔一四三〕一切の惡事を攝受し、衆苦を遽務するに於て皆な悉く解脱する妙出離樂と、(二)〔一四四〕貪欲瞋恚等の事を解脱する初靜慮の中の妙遠離樂と(三)〔一四五〕尋伺止息する妙寂靜樂と、(四)〔一四六〕二解脱の攝にして造作する所無く恐怖無きと攝妙等覺樂となり。二解脱とは、一には時愛心解脱、二には不動心解脱なり。若し阿羅漢の根性鈍なるが故に、世間定に於いて是れ其の法を退す、未だ所有定障を解脱すること能はざるが故に時愛心解脱と名づけ、法を退するを以ての故に時時に退失し、時時に現前す、故に説いて時と名づけ、現法樂に於いて喜んで證住せんと欲するが故に説いて愛と名づく。不動心解脱とは、謂く阿羅漢の根性利なるが故に是れ法を退せず、一切皆な無漏の道力を以て解脱を得、一切種に於いて都べて退失すること無し、當に知るべし此の中決定の義是れ三昧耶の義なりと、餘は前に説くが如し。造作する所無く恐怖する無しとは、當に知るべし異類の得可きありて阿羅漢の心をして、中に於て彼に染「著」して變異するが故に愁歎を生ぜしむる等無し。應に證すべき所の空に略して二種あり、一には外空、二には内空なり。外空とは、謂く一切の〔一四七〕五種の色想則ち五妙欲の引發する所を超過し、欲貪を離るるに於いて正に能く證を作す。内空とは、謂く〔一四八〕内の諸行に於いて增上慢を斷じ、正に能く證を作すな

〔一四三〕是れ欲界の定地の樂なり。
〔一四四〕是れ初靜慮の樂なり。
〔一四五〕是れ第二靜慮以上の樂なり。
〔一四六〕是れ等覺及び妙覺佛果の樂なり。
〔一四七〕五種の色とは外色卽ち色聲香味觸の五境なり。
〔一四八〕内の諸行とは内色卽ち五根なり。

り。應に修すべき所の空に亦た二種あり、一には【一四九】內外の諸の境界の中に於いて無我の見を修し、二には卽ち彼に於いて無常の見を修するなり。

【一五〇】此の四種の空は、當に知るべし四行を所依止と爲すと。(一)【一五一】外空は【一五二】內住の心の增上緣の力を以て生ずる所の樂を離れ其の身を滋潤するを所依止と爲し、及び(二)【一五三】我慢なれば內空を徧知して內外空を以て內外の法に於いて無我の見を修するを所依止と爲し、(三)【一五四】無我の見は卽ち彼に於いて無常の見を修するを所依止と爲し、(四)【一五五】無常の見は正法を聞き如理に作意するを以て所依止と爲す。【一五六】又此の中に於いて【一五七】若し諸の惑屬欲貪を離れんが爲に精勤し修學し觀察し作意する增上力の故に、欲界繫の諸の不淨の相に於いて勉勵して思惟するも、彼れ外空に於いて未だ證を作さざるが故に、其の正道に於いて未だ善く修せざるが故に、染習に趣くが故に、外空の性に於いて心證入せず、愛樂せざるが故に便ち其の中に於いて我慢門に由り心流散せず等しく隨つて觀察す。【一五八】寂靜相を以て內空を思惟するも、彼れ我慢をば未だ永へに斷せざるに由るが故に、其の正道に於いて未だ善く修せざるが故に亦た此の中に於いて心證入せず。【一五九】遂

【一四九】內外の諸の境界とは五根及五境なり。
【一五〇】第二空の所依を明す。
【一五一】應に證すべき空の中の第一空の所依を述ぶ。
【一五二】內住の心とは定心なり、今は初靜慮なり。
【一五三】應に證すべき空の中の第二空の所依を述ぶ
【一五四】應に修すべき空の中の第一空の所依を述ぶ。
【一五五】應に修すべき空の中の第二空の所依を述ぶ。
【一五六】第三の空を修する位を明す。三位あり、第一位、見道以前の位。
【一五七】外空を修することを述ぶ。
【一五八】內空を觀することを述ぶ。
【一五九】無我の見を修することを述ぶ。

に內外の一切の行の中に於いて無我の見を修するも、無我の見に於いて未だ善修せざるが故に亦た其の中に於いて心證入せず。(二六〇)乃ち內外の一切の行の中に於いて無常の見を修し、心をして動ぜざらしめ、諸行の中に於いて無常を見るが故に、一切種の動皆は所有無きが故に無常の見を不動界と名づく。(二六一)是の處に於いて心に勝解無きに由るが故に正慧を以て如實に通達し、或は不淨を緣じ、或は慈悲を緣じ、或は(二六二)息念の所有境界を緣じ、或は諸行の無常なる境界を緣じ、三摩地に於いて極めて多く修習するを因緣と爲る故に心をして調柔せしめ、是に於いて漸次に一切處に於いて皆な能く證入す。(二六三)此の因緣に由りて所證の空に於いて能く證すること圓滿なり、所證に於いて圓滿なることを得るに因るが故に其の心一切の能く(二六四)順ずる下上分結を解脫す。此の因緣に由りて所修の空に於いて能く修すこと圓滿なり、所修に於いて圓滿なることを得るに因るが故に無學の正見等の法を成就す。若し是の時に於いて乃至空に於いて未だ證入すること能はざれば、當に知るべし此の時は此れ異生位なり、若し時に證入するは是れ有學の位なり、若し時に修習し已つて圓滿なることを得るは是れ無學の位なり。(二六五)此の修をして圓滿なることを得せしめんが爲の故に勤めて正行を修し、心をして證入せしめ、善き尋思を以て正に尋思し、別して其の中に

【二六〇】無常の見を修することを述ぶ。

【二六一】第二位、有學位。

【二六二】息念とは數息觀なり。

【二六三】第三位、無學位。

【二六四】順ずる下上分結とは五順下分結(一)身見(二)戒禁取(三)疑(四)欲界貪(五)欲界瞋と五順上分結(一)色貪(二)無色貪(三)掉擧(四)慢(五)無明なり。

【二六五】第四に空を修する方便を明す。

於いて能く善く量を知り、諸の雜染を離れて言說を起し、經行の處に於いては能く正に經行し、所坐の處に於いては能く正に安坐す。是の如き等の一切の處所に於いて皆な善く量を知り、是の如く行の時は清淨を先と爲し、其の住の時に於いても亦た清淨なることを得、其の間能く觀察する作意を以て、數數現行する煩惱を觀察し、淨く心を修治し、是の如く能く一向に諸の白淨の法を成就するに趣き、一切の魔怨も奪ふこと能はざる所にして彼の一切の惡不善の法たる四種の雜染に反す。謂く(一)後有の因性なるが故に、(二)現法の身心偏く燒惱するが故に、(三)惡趣の因性なるが故に、(四)生等の衆苦の因性なるが故なり。言說に二あり、一には音聲に隨逐して勝解する言說、二には法に隨逐して隨つて法を行ずる言說なり。第一の言說は是れ正法に於いて受持し讀誦し、請問し徵覈するより發起する所なり。第二の言說は是れ所緣に於いて心をして究竟解脫に安住せしめ、教授を施設するより發起する所なり。若くは(二六六)是の義の爲めに如來出世したまひ、諸の弟子衆は聖敎に隨入し、應に勤めて是の如き善法を修習すべし。若くは(二六七)彼の法の毗柰耶の中に於いては一切種の修する所の梵行無く、當に知るべし亦た梵行を修する者無しと。其の中に於いて梵行無きを以ての故に梵行と稱する者は皆な邪行を修し師弟展轉して互に相ひ觸惱し、各各自ら尊卑なる體式ありと許す、正法の中に於いては二俱に得可し。若し大果大利の應に證すべき所の空と應に修すべき所の空とを棄捨することあらば極めて下劣と爲し大罪過あり、利養恭敬

【二六六】是の義とは正法を指す。
【二六七】彼の法とは邪法を指す。

の愛味に漂されて多く邪行を習ふ、當に知るべし彼れ大梵行災の爲めに觸惱せらると。彼れ是の如く利養恭敬に耽嗜し愛著し、自ら逼惱するに由るが故に能く解脱に隨順する言教に於いては聽聞せんことを欲せず、爲めに宣說すと雖も耳を屬すること能はず。或は利養恭敬に貪著する增上力の爲めの故に而も强ひて聽聞すれども心に解を求むること無く、修行せんと欲せず、究竟して善く自ら調伏することを爲さず、乃至般涅槃を證することを爲さず。是の如き事に由りて大師を憎惡し、不平等を行じ、廣大なる現前の恩德に於いて報ゆること能はざるを以ての故なり。(一六八)當に知るべし此の中總略の義をいはば、謂く善說の法毗柰耶の中にて既に出家し已つて四の因緣に由り自己に於て正に應に行ずべき所の如きを而も行ずること能はず、大師の聖教に於いて出家の正に應に行ずべき所の如きをも亦た行ずること能はず、(一六九)謂く(一)相雜りて住することを樂ふが故に、(二)音聲に隨順し隨逐して勝解し言說するが故に、(三)利養恭敬に躭著するが故に、(四)此の耽著する增上緣の力に由り正法を聽聞すれども自利利地の行を修せざるが故なり。又佛世尊は自ら能く善く衆を御し徒衆を攝することを顯はすことを欲せず、唯だ深く諸の有情を哀愍するが故なり。是の因緣に由りて邪行を行ずる弟子衆の中に於いて能く護惜すること無くして分明に示語し、寧ろ弟子をして此の分明にして麤なる利益語に由りて現に正法及び毗柰耶を捨てて當に利益を獲せしめんや、此に住して廣く邪行を興さしむることなし。

【一六八】以下は上來の略義を明す。

【一六九】四の因緣を述ぶ。

卷の第九十一

攝事分中契經事處擇攝第二の三

復た次に、嗢柁南に曰く、

(一)『離欲未離欲と、問と因緣と染路と、保命と著處等なり、皆な廣く說くこと應に知るべし。』

(二)若し苾芻あり、其の欲界に於いて或は已に欲を離れ、或は未だ欲を離れず、五妙欲意所識の法、定地の三世に於いて(三)三種の纒及び(四)彼の根本の所有る隨眠に由り正に雜染する時現法の中に於いて究竟涅槃に趣證するに任せず。當に知るべし此の中過去世に由り彼に依りて識を取り、未來世に由り彼に屬して識を取り、現在世に由り彼に著して識を取る、彼の根本の所有る隨眠は相續に墮在して常に隨逐するに由るが故に彼を執して識を取る。此と相違して雜染無き時現法の中に於いて能く究竟涅槃に趣證するに堪ふるなり。

(五)復た次に、聖敎の中に於いて當に知るべし四の如理なる問者ありと。一には淨信あるもの若くは

【一】此は總頌第四門離欲等を解する別頌なり。此の中更に七門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【二】離欲未離欲を解す。

【三】三種の纒とは貪瞋癡なり。

【四】彼の根本の所有る隨眠とは(一)害伴隨眠(二)羸劣隨眠(三)微細隨眠の三隨眠なり。

【五】問を解す。

諸の長者、若くは長者の子、二には聰慧多聞を具ふる苾芻、三には是の大師親承の侍者、四には卽ち大師なり。(六)二の因緣ありて佛、弟子に於いて知りて而も故らに問ひたまふ、謂く弟子請問せんと欲すと雖も而も畏れ無きこと無く、或は其の義に於いて了知する所無しと觀じたまふ、(一)現在未來の過を遮せんが爲めの故に、(二)正法をして久住することを得せしめんが爲めの故なり。

(七)復た次に、二の因緣に由りて六識身を說く、(八)內の六〔根〕處を以て因と爲し、外の六〔境〕處を以て緣と爲す、謂く(一)內の六處は彼の種子の爲めに依附せらるるが故に、(九)又(二)內の六處は相續一類にして先に得たる所の如く畢竟して轉ずるが故なり。境界は爾らず、彼の種子の依附する所に非ざるが故に、又一類に相續して轉ずるに非ざるが故なり。

(一〇)復た次に、二種の相に由りて當に總じて一切の雜染を了知すべし、一には一切の雜染の自性、二には一切の雜染の行路なり。自性と言ふは、所謂欲貪なり、諸の雜染の與めに根本と爲るが故なり。(一一)行路と言ふは、謂く　(一二)內外處なり、能取所取差別あるが故なり。

(一三)復た次に、若くは諸の苾芻は二の處所に於いて等しく隨つて觀察す、若くは行にまれ若くは住

【六】四種の如理なる問者の中第四大師のみを明す。
【七】因緣を解す。
【八】內の六處を種子の依附處と云ふは六識說に隨轉して說くなり、尅實して論せば種子の依附處は阿賴耶識なり。
【九】內の六處。實は阿賴耶識は前後一類に相續して無始無終なり。
【一〇】染路を解す。
【一一】行路とは雜染の生じ轉ずる所依處なり。
【一二】內外處とは內の六根外の六境なり。
【一三】保命を解す。

にまれ、如理なる作意を所依止と爲し、二の雜染に於いて應に其の心を脫すべし。云何んが名づけて二處と爲すや。所謂(一)自らの保命忽然として夭喪し、(二)不善の心は殞て諸の惡趣に往く。云何んが名づけて如理なる作意を所依止と爲すと爲るや。復た何等の二種の雜染に於いて應に其の心を脫すべきや。謂く我れ寧ろ種種なる楚撻の損害に遭ふも己が諸處の身に於いて復た我をして不善心にして殞て諸の惡趣に生ぜしむること勿からんことを。又我れ應に當に喜樂と俱に如實に觀察し、現行せる不善を對治せんと欲するが爲めに懇勵して諸行無常「觀」を修習し、若し經行する時は〔一四〕(一)諸の境界に於いて諸相を執取し隨好を執取する所有の雜染に「於て」心をして解脫せしめ、遠離して住する時は〔一五〕(二)諸の不善、種種なる尋思の所有る雜染に於いて心をして解脫せしむべしと。當に知るべし此の中第一の雜染は是れ〔一六〕相似因なり、第二の雜染は是れ〔一七〕相似果なりと。又二の雜染現在に轉ずる時二處に生ず、謂く(一)自らの保命卽ち爾の時に於いて倏歸夭喪し、(二)不善心にして殞て諸の惡趣に往く。是の故に彼の二種の雜染に於いて一刹那の中にても深く過患を見、慚愧を發生するすら尙は妙善と爲す、況んや能く相續せんをや。

〔一八〕復た衆多なる魔の歸向する所の所有雜染の〔一九〕著の安足する處あり、智者は了知して應に當に遠

〔一四〕第一の雜染なり。
〔一五〕第二の雜染なり。
〔一六〕相似因。第一の雜染は第二の雜染の因なり、正因にはあらず、故に相似因と云ふ。
〔一七〕相似果。第二の雜染は第一の雜染の果なり、正果にあらず、故に相似果と云ふ。
〔一八〕著處を解す。
〔一九〕著の安足する處とは執著の所依處卽ち著處なり。

避すべし、謂く已に欲を離れたる諸の異生の類の繫屬する〔三〇〕定生喜樂の諸處の所有愛味の著の安足する處、未だ欲を離れざる者の妙五欲に於て愛を〔所〕依と爲るが故に、喜樂し諍競し貪愛し耽染する著の安足する處、恩に於いて怨に於いて諸の有情所の一切の愛恚の安足する處、廣大なる上品の能く境界の樂に順じ苦に順じ、求むる所、尋ぬる所、貪愛す可き所を引く所有三世の著の安足する處なり。當に知るべし此の中欣ぶべく樂ふべく愛すべく意すべき諸苦の差別は前に已に辯せるが如しと。欣ぶ可からずとは未來世に於て樂ふ可からざるが故なり。樂ふ可からずとは、過去世に於て隨つて憶念するに由つて樂ふ可からざるが故なり。愛す可からずとは、諸の境界に於て樂む可からざるが故なり。意す可からずとは、諸受に於いて樂む可からざるに由るが故なり。又苦と言ふは、卽ち境界に於て樂む可からざるが故なり。損惱と言ふは、卽ち諸受に於いて樂むべからざるが故なり。違背と言ふは、過去世に於いて樂むべからざるが故なり。逆意と言ふは、未來世に於て樂む可からざるが故なり。

〔三一〕復た次に、二の雜染あり、一には外境雜染、二には內受雜染なり。眼等を〔所〕依と爲し、色等の境に於いて諸の貪著を起すを外境雜染と名づけ、諸觸を〔所〕依と爲し、內受に貪著するを內受雜染と名づく。此の二の雜染は永へに寂滅なる般涅槃の中に於て皆な得可からず、諸の魔怨の能く遊履す

〔三〇〕定生喜樂の諸處とは色界第二禪天なり。

〔三一〕頌の七門の中第七門なり、頌の中の等の字を解す。

る所に非ず。
復た次に、十五相に由りて應に當に一切種類の愛見の雜染を了知すべし、謂く諸處に於いて諸纏に由るが故に藏と名づけ、隨眠に由るが故に護と名づけ、我見に由るが故に覆と名づく。所餘の差別は廣く說くこと前の（三二）攝異門分の如し。

（三三）復た次に、總の嗢柁南に曰く、

（三四）『同分に因る等と、唯だ緣と作る等と、上品の貪等と、後は多住等なり。』

別の嗢柁南に曰く、

（三五）『同分に因ると思と、縛の解脫と相と觸徧きと、勝解と根門を護ると、敎と愛相とを後と爲す。』

（三六）諸の聖弟子は（三七）同分識に因りて無我に隨入す、三種の相に由りて諸識の中に於て正觀して住す。云何んが同分識に因りて無我に隨入する。謂く現見する（三八）五有色處、（三九）四大種の身は若くは（三〇）增、若くは（三一）滅、若くは（三二）取、若くは（三三）捨

【三二】第八十四卷攝門分の下。

【三三】以上第八十九卷の總頌の四門を解釋し畢る。以下新に總頌を出す。

【三四】此總頌に四門を列す（一）同分に因る等（二）唯だ緣と作る等（三）上品の貪等（四）多住等なり。後此の四門に一一別頌を結ぶ。

【三五】此は總頌第一門同分に因る等を解する別頌なり、此中更に九門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【三六】同分に因るを解す。

【三七】同分識とは根及び境より同じく發せられたる識なるが故に亦根と識と同じく一境を取るが故に同分と云ふ。

【三八】五有色處とは五塵なり。

【三九】四大種の身とは地水火風の四大種より成る五色根なり。

【三〇】增とは五塵生起するなり。

【三一】滅とは五塵謝滅するなり。

【三二】取とは五根境を取るなり。

【三三】捨とは五根境を取らざるなり。

にして無常の性なるに由るが故に彼の識を緣ずるに於いて無常に隨入す。無常は則ち苦、苦は則ち無我なり、是の因緣に由りて無我に隨入す。云何んが無我の性に隨入し已つて三種の相に由りて諸識の中に於いて正觀して住するや。謂く(一)諸の邪見は一切皆な我見を以て根(本)と爲す、是の故に此の根(本)をば必ず應に先づ斷ずべし。又(二)正慧を以て卽ち彼の識を觀ずるに〔三四〕所依所緣差別して轉ずるが故に無量種あり。又(三)此の識を觀ずるに差別して轉ずる時刹那の量の如きすら安住し堅實なること尙ほ得可らず、何に況んや畢竟せんをや。

〔三五〕復た次に、〔三六〕六(根)處の滅究竟し、寂靜にして戲論無き中に於いて戲論と俱なる四種の行相に由りて應に思惟すべからず、應に分別すべからず、應に詰問すべからず、唯だ應に他に依りて覺慧を增長し、審諦に眞實なる意趣を觀察すべし。云何んが四と爲す。謂はく或は(一)有(二)無、或は(三)異(四)不異なり。彼の六處に生あり滅あるを以て展轉して異相あり、施設することを知るべし。生滅に由るが故に有無得可く、異相あるが故に他の種類に待して異性得可く、自らの種類に待して前後別無ければ不異得可し。六處永へに滅し、常に寂靜の相なり、是の故に彼の戲論と俱行する四種の行相に由りて思惟し觀察すること道理に應せず。當に知るべし此の中能く無義を引く思惟分別より發する所の語言を名づけて戲論と爲すと。何となれば是の如き事に於いて勤めて加行する時少分をも善法

【三四】所依とは五根、所緣とは五塵なり。
【三五】思を解す。
【三六】六根處の滅とは六根處に於て煩惱を斷じて得たる擇滅無爲を云ふ。

を增益し、不善法を損すること能はざればなり。是の故に彼を說いて名づけて戲論と爲す。

〔三七〕復た次に、內外處に於て若くは欲貪、境界現前し、或は現前せざるも而も其の諸根を棄捨すること能はざるあるが故に名づけて縛と爲し、若くは欲貪無ければ設ひ境界正に現在前するあるとも諸根をば彼に於いて尙ほ能く棄捨す、況んや現前せざるをや、故に解脫と名づく。

〔三八〕復た次に、能く梵行を修して諸の〔五〕蘊〔十二〕處に於いて我我所の見をば已に永へに斷ぜる者は若くは身を損し、乃至命を奪ふ苦受の爲めに觸せらるるも、終に色變心變得可き無し、是の如きを麤にして善く根を守る相と名づく。彼れ是の如く善く諸根を守り四苦を解脫する增上力に由るが故に四種の喜を得。一には當來の外緣の生苦に〔於いて〕解脫を得るに由るが故に、二には當來の內緣の生苦〔に於いて〕解脫を得るに由るが故に、三には現法に於いて般涅槃する時〔三九〕二種の〔所〕依に由りて作す所の衆苦に〔於いて〕解脫を得るが故に、四には命終し已つて世の見る所の草木と相似て一切の衆苦相續せざるが故なり。二種の相に由りて草木と相似す、一には六處有情想を離るるは世の見る所の草木と相似す、二には六處を所依止と爲る貪瞋癡の火乃ち燒然なることを得るは、世の見る所の草木と相似す。善く梵行を修する諸の聖弟子は當來の後有の苦生ぜざるが故に、諸の如來の成就せる明力と少分相似す、現法の〔四〇〕緣の苦は生ぜざるに非ざるが故に、設ひ暫く生じ已るも速疾に斷ず

〔三七〕縛の解脫を解す。
〔三八〕相を解す。
〔三九〕二種の所依とは煩惱依と果報依なり。
〔四〇〕緣の苦とは苦の緣なり。

るが故なり、然るに諸の如來は(四一)二種の明力をば皆な悉く成就す、是の故に說いて無上明特と名づく。

(四二)復た次に、一の沙門或は婆羅門あり、(四三)勝れたる現量を越ゆ、世間の愚夫すら尚ほ迷惑せず、況んや諸の智者をや。一切の愚癡の安足する所の處をば虛妄なる推度を以て依止と爲し、或は前際に依り、或は現法に依り堅固に執著して四種の苦樂の邪論を建立す。謂く(一)前際に依り虛妄に宿作因の故に諸の苦樂を立つと計度するは(四四)一向自作「論」なり。(二)虛妄に(四五)自在變化を以て因と爲すが故に諸の苦藥を立つと計度するは(四六)一向他作「論」なり。(三)虛妄に先には自在「天」の作なり、然も後には宿作因の作す所なるが故に諸の苦樂を立つと計度するは自作他作「論」なり。(五)虛妄に無因生の故に諸の苦樂を立つと計度するは自に非ず他に非ずして作す所の因より生ずるなり。或は現法に依り虛妄に計度し、若くは自の欲、自作の功用に隨つて生起する所の者を立てて自作と爲し、若くは欲に隨はず自ら覺知せずして、他に引かるる者を立てて他作と爲し、若くは所欲に隨ひ自ら覺知する所にして他に引かるる者を自他作と立て、若くは自他の功用を先と爲して生起する所の者但だ境界の現在前するに由

【四一】 二種の明力とは智と斷との二なり、又曰く無漏道と無漏力なり。
【四二】 觸徧きを解す。觸とは受の因、卽ち苦樂の二受の因なり、此の觸一切に徧れきが故に觸徧しと云ふ。
【四三】 勝れたる現量に違越し四種の邪論を立つ。
【四四】 苦樂の原因を唯だ自己の行爲にのみ歸する論。
【四五】 他の自在天を以て苦樂を變化する因なりとする論。
【四六】 苦樂の原因を唯だ他の自在天の作用に歸する論。

るが故に微細なる因觸を了達すること能はず、便ち邪執を起し、自他の作す所の因より生ずるに非ずと謂つて無因性を立つ。(四七)此の中唯だ諸の(四八)根境識の和合より生ずる所の苦樂の得可きありて、都べて前際或は現法の中の若くは自、若くは他の實有として得可き無し、唯だ卽ち此の(四九)三事の和合に於いて假に自他を立つ、是の故に當に知るべし唯だ其の觸のみありて一切に徧行して苦樂の因と爲ると。

(五〇)復た次に、四種の相に由り正に精進を發し、速に諸漏をして永く盡きて餘り無からしむ。何等をか四と爲すや。一には平等精進を發起す、謂く極めて掉擧せず、勤めて精進することを發し、其の身心をして疲倦し損惱せしめ、亦た極下せず、精進を發起し、身命を虛棄して所得無からしむ、是れを初相と名づく。又此に由らずして憍慢を生ず、謂く我れ獨り能く勤めて精進することを發す、餘は則ち爾らずと、是れ第二の相なり。又正に勤めて精進することを發せる果たる(五一)世間の安觸の證する所の差別に於いて愛味あること無く、此と倶行して不放逸を修す、是れ第三の相なり。又精進平等の相に於いて能く善く攝受して當來に於いて退失あること無からしむ、是れ第四の相なり。是の如く正に勤めて精進することを發すが故に永く諸漏を盡くして阿羅漢を成ず。若し彼の大師と有智の同梵行「者」との所

【四七】以上四種の邪論を述べ以下正論を明す。

【四八】根境識の和合。根と境と識と和合して觸を生じ、觸より苦樂の二受を生ず、是れ佛法の正義なり。

【四九】三事とは根境識なり。

【五〇】勝解を解す。

【五一】世間乃至差別とは世間の喜樂受のこと。

に於いて自己の證する所の差別を記別せんと欲せば、唯だ阿羅漢のみ六處の勝解にて能く正に記別す[べし]、謂く三學及以び五種の補特伽羅に依る。云何んが名づけて六處勝解と爲す。一には出離の勝解、二には無惱の勝解、三には遠離の勝解、四には愛盡きたる勝解、五には取盡きたる勝解、六には心忘失無き勝解なり。云何んが三學なる、一には增上戒學、二には增上心學、三には增上慧學なり。云何んが五種の補特伽羅なる。一には異生居家に處在して唯だ信に依りて出離を欣樂する勝解を發生し、境界の[束]縛より心に出離を求む、是れを第一の補特伽羅と名づく。二には異生既に出離し已つて唯だ戒に依り諸の有情に於いて身語意に由りて無惱行を行ず、是れを第二の補特伽羅と名づく。三には異生能く利養及び恭敬の愛を斷じ、現法の中に於いて欲界の欲を離る、是れを第三の補特伽羅と爲す。四には有學の已に諦跡を見たる、是れを第四の補特伽羅と名づく。五には無學の阿羅漢を得たる。是れを第五の補特伽羅と名づく。當に知るべし、此の中（五二）第一第二の處所の勝解は（五三）初學の所依なり、（五四）第三の處所の所起の勝解は（五五）第二學の與めに其の所依と作り、（五六）後の三の處所の所起の勝解は（五七）第三學の與めに其の所依と作ると。若し此の智に由りて能く煩惱を斷じ、及び煩惱斷ずるを當に知るべし是れを心忘失無しと名づくと。又當來に於ける後有の因斷ずるを說いて愛盡くと名づけ、現法の境界

【五二】第一第二の處所の勝解。第一出離の勝解、第二惱無き勝解。
【五三】初學とは增上戒學なり。
【五四】第三遠離の勝解。
【五五】第二學とは增上心學也。
【五六】六處勝解の後の三。
【五七】第三學とは增上慧學なり。

の諸の雜染斷ずるを說いて取盡くと名づく。又彼の第一の補特伽羅は正しく出離の勝解を信ずることありと雖も而も未だ決定せず當來に於いて彼をして一切悉く皆な棄捨し及與び變異せしむるに堪へたり、第二の「補特伽羅」には其の無惱の勝解あり、第三の「補特伽羅」には其の遠離の勝解あると、當に知るべし（五八）亦爾なりと。若くは（五九）諸の有學の六處の勝解は、能く當來に棄捨し及與び變異するに堪ゆること無しと雖も然も幼童の（六〇）等持念慧に似て皆な悉く羸劣なり。聖處に生ずと雖も未だ善く修せざるが故に貪瞋癡に於て遠離して除す無く永へに斷ずること能はず、慧劣れるに由るが故に、及び貪等をば未だ永へに斷ぜざるに由るが故に、若し勝妙なる境界現前するに遇はば時時に忘念す。此の因緣に由りて勤めて生起し、心解脫及び慧解脫を學し諸の煩惱を盡す、是の故に有學の補特伽羅には仍ほ所作あり、此の分に由るが故に減劣なりと名づく。若くは（六一）阿羅漢の六處勝解は尙は能く當來の變異に堪ふること無し、況んや棄捨することあらんや。善く道を修するが故に、貪瞋癡等永へに斷じて除す無く愛盡き取盡き勝解圓滿して已に（六二）盡智、（六三）無生智を得るが故に、（六四）六種の恆住に攝受せらるるが故に、所有智

【五八】亦爾なりとは第一の補特伽羅に例して當來に於て棄捨し變異せしむることを略顯す。

【五九】諸の有學とは五種の補特伽羅の中の第五なり。

【六〇】等持念慧とは定と念と慧なり。

【六一】阿羅漢は五種の補特伽羅の中の第六なり。

【六二】盡智。既に一切の煩惱を斷すれば我既に苦を知れり、集を斷ぜり、滅を證せり、道を修せりと知る自信の智なり。

【六三】無生智。是れ利根の羅漢に限りて有する智なり、既に知斷證修の事畢れば更に知斷證修の事なきを云ふ。

【六四】六種の恆住。第三十四卷に出づ。

慧有學の如く時時に忘念するに非ざるが故に阿羅漢の六處の勝解は第一義にして最も極めて圓滿なるに由り亦た最極なる淸淨を成就すと名く。(六五)餘の下位の補特伽羅は此の因緣に由るに非ず亦た自ら高かに所解を記別すること無く、三摩地の所行所緣に於いて散亂無きが故に(六六)內心に住すと名づく。即ち三摩地善く成滿するが故に狹小ならずと名づけ。一切の煩惱をば皆な離繫するが故に善く解脫すと名づけ、所有智慧をば善く積集するが故に說いて善く修すと名づけ、見滅盡するが故に愛味あること無く、其の心一向に善にして罪無し。

(六七)復た次に、略して二種の補特伽羅あり、一には(六八)根門を密護すること能はず、二には善く能く根門を密護す。云何んが名づけて根門を密護すること能はざる補特伽羅と爲すや。謂く一あるが如き諸の境界に於いて如理に作意し思惟すること能はず、可愛なる色に於いて貪欲の纏の爲めに纏縛せられ、不愛の色に於いて瞋恚の纏の爲めに纏縛せられ、又彼の境に於いて所有過患を隨念すること能はず、設ひ隨念することあるとも善く修習せず。是の因緣に由りて心諸纏の爲めに覆蔽せられ、諸纏を起し已つて制伏すること能はず。又是の異生は未だ有學の心慧の解脫を得ず、上無學の心慧の解脫に於いて如實に知らず、知らざるに由るが故に諸の有學の心慧の解脫に於いて亦た滿ずること能はず、彼れ爾の時に於いて未だ修力を以て所依止と爲さず、煩惱品の所有麤重に於いて未だ永へに害

【六五】餘の下位の補特伽羅とは五種補特伽羅の中、第五の阿羅漢無學を除ける其餘の四種なり。

【六六】內心に住すとは定心に住するなり。

【六七】根門を護るを解す。

【六八】根門とは六根門なり。

すること能はず、又先の善き（六九）思擇力に依らず、念成就せざるを因緣と爲るが故に當に知るべし根門を密護すること能はずと。此の三相に由りて補特伽羅は、應に知るべし根門を密護すること能はずと、一には纒に由るが故に、二には思擇［力］所攝の對治に缺減あるに由るが故に、三には修力所攝の對治に缺減あるに由るが故なり。此れと相違するは當に知るべし白品なり、諸根門に於いて善く能く密護すと。

（七〇）復た次に、二種の相に由りて諸の聖弟子は其の大師の所說の法敎に於いて能く正に記別し、能く善く宣說す、謂く能く眞實の義を辯釋するが故なり。云何んが二と爲すや。一には是の意趣に由りて宣說し善く能く是の如き意趣に悟入して而も正に記別す。二には如來無量の門を以て廣く聖敎を宣べ、無量品の補特伽羅の爲めに種種辯說したまはんに此の法敎に於いて法性に違はずして能く正に記別す。

（七一）復た次に、佛の善說の法毘柰耶に於いて深心に愛樂する新學の苾芻は二種の相に由りて應に正に了知すべし、一には身相に變異無きに由るが故に、二には心相に變異無きに由るが故なり。謂く形色極めて光淨なるに由るが故に、面貌熙怡として極めて鮮潔なるが故に、膚體充實して羸損せざるが故に、諸根適悅にして寂靜なるが故に身に變異無く、所得あるに隨つて喜足を生ずるが故に、貪樂し

【六九】思擇力とは慧の作用なり。
【七〇】敎を解す。
【七一】愛相を解す。

て資財を畜積し而も受用することを遠離するが故に、其の室家に於いて顧戀すること無きが故に心に變異無し。復た三種の婬貪の對治あり、能く婬貪をして未だ生ぜざるをば生ぜず、已に生ぜざるをば尋いて斷ぜしむ。一には應に行ずべからざるの想を思惟し、二には極めて不淨なるものの想を思惟し三には一切の根門を密護す。此の一切の根門を密護するに由る略〔說〕廣〔說〕は應に知るべし聲聞地の如しと。謂く能く諸の根門を密護すとは、母邑をして身を摩觸せしめざるが故に善く身を護ると名づけ、諸の母邑に於いて觀ず聽かず憶念せざるが故に善く根を守ると名づけ、設ひ見設ひ聞き設ひ隨つて憶念すとも卽ち能く長時正念を攝受し、猛利なる慧を以つて深く過を見るが故に善く念に住すと名づく。彼れ是の如く善く其の身を護り、善く諸根を守り、善く正念に住するに由りて便ち能く應に行ずべからざるの想を思惟し、此に由りて煩惱心を蔽うて暫らくも欣味せしむると能はず。又た能く極めて不淨なるものの想を思惟す。此に由りて煩惱心を蔽うて速に廻轉せしむると能はず。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(七三)『唯だ緣〔と作る〕と尋思と願と、一切種の律儀と、聖教に入りて護らざると、勝れたる資糧善く備はると、

所學を捨つると著處と、不善の義と流に隨ふと、菩薩餘乘に勝るるとにして、論の施設は最後

【七三】此は總頌第二門唯だ緣と作る等を解する別頌なり、此中更に十二門を列し、長行に於て次第に解釋す。

なり。」

「(七三)先に作れる所の(七四)諸の業煩惱及び自の種子相續して引く所に由りて諸受生起す、其の(七五)六觸處は唯だ爲に緣と作るのみ、心より起す所の功用の引く所の諸の(七六)取受の業の如し、手は唯だ能く取受を助くる緣と作るのみ、當に知るべし此の中の道理も亦た爾なりと。

(七七)復た次に、諸有る苾芻如法ある邊際の臥具を受用し、空閑に安住せんに若し能く尋思をして躁擾せしめ、勝妙なる境相心に來現することあらば當に知るべし是れ魔の品類の作す所なりと。此の中、苾芻は應に九相を以て其の心を安住せしむべし。(一)諸の境界と相應する尋思に從つて心を攝めて、住し、尋思の隨一更に起るべきこと無からしむ。(二)若し此の「所」依に由り、此の境界に由りて喰味する所あらば此の境界に於いて其の所得に隨ひ其の所住に隨つて能く自ら彼を遠離す。(三)爾の時に於いて可愛の事に於いて終に諸欲の尋思に依止せざるも而も所作あり、(四)恚の尋思及び(五)害の尋思に於いても亦た能く遠離し、(六)淨く其の心を修し、(七)現法の中に於いて能く涅槃を得。(八)涅槃を得已つて終に他と共に諍競して住せず、謂く諸の諍競は佛の聖法毗柰耶の中に於いて極めて衰損を作す。(九)是の如く愚癡より生ずる所の尋思も亦た尋思せざること餘の外道の如し。

【七三】唯だ緣と作るを解す。此の中緣とは增上緣なり。
【七四】諸の業煩惱及び自の種子は諸受の親因緣なり
【七五】六觸處とは六根にして諸受の增上緣なり。
【七六】取受とは物を取る感覺なり。
【七七】尋思を解す。

(七八)復た次に、若くは先世の後有の苦因に由り、現法の中に於て六觸處の果法ありて轉じ、六境界に由りて損惱せらるる時、若くは苾芻あり、後有を求めんが爲めに自ら誓願を發して梵行を修行す。彼れ爾の時に於いて其の(七九)第七の後有の苦因をして倍更に增長し、轉た損惱を爲さしめ、現法の中に於いて能く涅槃を障ふ。此の因緣に由りて能く當來の有暇の圓滿を得、決定せざるが故に此の後有の願は當に知るべし彼の微細の縛の中に於いて最も極めて微細なりと。何となれば彼の(八〇)三十三天宮の中に一の囹圄あるが如き、其の中に(八一)天或は非天を禁縛す、然も彼れ法爾として暫らくして解脫を得、天の妙欲を以て遊戲して住し、乃至未だ逃竄の心を起さず、此の心若し起れば便ち妙欲を失ひ、還つて自身縛の爲に縛せらるるを見、彼れ纔に心を起せば便ち微細なる縛の爲めに縛せらる、時分を以ての故に說いて微細と名づく、識り難きが故に而も微細と說くには非ず、彼の縛の時に由り能く自ら我れ今縛ありと解了す。若くは諸の苾芻は心に後有を願ふ、此の心若し起れば便即ち縛せられ、既に縛せられ已つて、自身に縛ありと了知すること能はず、是の故に此の縛は最も極めて微細なり。當に知るべし時分と及以び識り難きとは倶に微細なり、故に極めて微細なりと名づくと。

【七八】願を解す。

【七九】第七の後有とは第七生なり、欲界に生を受くるは七生を極限とす、今極限に約して第七生と云ふ。

【八〇】三十三天とは欲界の六天の中の第二忉利天の譯名なり。

【八一】天或は非天とは獄囚の人なり、非天は阿修羅卽ち鬼神なり。

（八二）復た次に、若し諸の苾芻は精勤し加行し、諸根を守護し、其の律儀及び非律儀に於いて應に當に了知すべく、輭中上の世間の有學無學の律儀に於いて應に當に了知すべし。云何んが律儀なる。謂く一あるが如き愛すべき境に於ける諸の雜染の心にて忍せず受けず執せず取らず、設令ひ暫らく起るとも尋いで還つて棄捨す、是れを律儀と名づく。云何んが非律儀なる。謂く一の苾芻の農を營む者の如きは、善士に親近し、正法を聽聞し如理に作意し、正に所緣の境界の良田を修して其をして善根の苗稼を生起せしむるも、然も其の種性猛利なる多貪にして未だ嘗て貪欲を對治する猛利なる慚愧を串習せず、亦た未だ、曾て若くは勝妙なる境界現前するに遇ふことあらざるも、彼れ本性猛利なる貪に由るが故に、未だ曾て貪を對治することを串習せざるが故に、所有慚愧皆な羸劣なるが故に便ち貪の纏を起し、堅く執して捨てず、心貪の纏に於いて防護すること能はず、而も自ら放縱にして非理なる作意と相應する心牛境界の田に入り、所有善根の苗稼を損壞す、是の因緣を以て非律儀と名づく。又一あるが如き能く速に作意し、諸の境界に於いて自ら攝斂するも然も未だ所有過患を觀じて再び起らざらしむること能はず、是れを輭の世間律儀と名づく。又一あるが如き能く速に作意し、諸の境界に於いて而も自ら攝斂し、亦た能く彼の所有過患を觀じ、再び起らざらしむ、是れを名づけて中の世間律儀と爲す。此を[所]依と爲るに由り（八三）四種の作意所攝の九相の心住を獲得すること、當に知るべし前の聲聞地に說

【八二】一切種の律儀を解す。
【八三】四種の作意は第二十八卷に出づ。

けるが如しと。此を得るに由るが故に欲貪を離れたる諸の異生類と名づく。彼れ先に加行の觀を修習する時農を營む者の如く、增上を得せしむること猶ほし大王の如し。先に得たる所の等至より生ずる所の勝妙なる諸受に於て能く正に是れ大放逸の安足する處なりと了知し已つて便ち臣の如くならしめ、正法を聽聞して增上して生ずる所の勝れたる奢摩他の攝護する所の毗鉢舍那、其をして彼の生ずる所の受の性は是れ緣生なり、緣生の性なるが故に體是れ無常なりと觀察せしむ。彼れ此に由るが故に便ち意地の諸の過患の相と倶行する作意を以て欲を離るることを得、既に欲を離れ已つて復た等至の所依の〔差〕別を觀ずるが故に十種差別し、時分別なるが故に多百差別す。此の中等至の所依別なるが故に十種差別すとは、謂く(一)[八四]有尋有伺と、(二)[八五]無尋唯伺と、(三)[八六]無尋無伺と、[八七]若くは(四)喜倶行すると、若くは(五)樂倶行すると、若くは(六)捨倶行すると、(七)[八八]退分と、(八)住分と、若くは(九)昇進分と、(十)順決擇分となり。時分別なるが故に多百別なりとは、謂く卽ち是の如き行相の、生住滅の時分に依りて作す所の差別の道理を觀察するに當に知るべし復た多百の差別ありと。是の如く彼の生ずる所の受は是れ無常の性なり、流轉し差別する種種なる性なりと了知

【八四】有尋有伺。尋伺の心所ある處、色界初靜慮の梵輔天以下を有尋有伺地と云ふ。

【八五】無尋唯伺地とは色界初靜慮の大梵天なり、此處には尋の心所なく、唯伺の心所のみなり。

【八六】無尋無伺地とは色界第二靜慮以上を云ふ、此處には尋伺の心所無し。

【八七】喜倶行する地は色界初二靜慮地、樂倶行する地は第三靜慮地、捨倶行する地は第四靜慮地なり。

【八八】退分等の四分は定の淺深差別なり。

し已つて略して三相に由りて復た審に彼は是れ無常の性なりと觀ず、謂く(一)所依の故に(二)現行の爲に、(三)因の故なり。所依の故なりとは、謂く極乃至第四靜慮の所有の色身は是れ受の所依なり。現行の故なりとは、謂く極乃至滅受想定の其の間の想受多分現行するなり。因の故なりと言ふは、謂く當來世の所有の受因卽ち思求する願なり。是の如き乃至有頂の所有の諸法は緣生の性なるが故に皆な是れ無常なりと觀察す、是の如く如理審正に觀察する諸の離欲地を是れを上品なる世間の律儀と名づく。當に知るべし此の中(八九)前の二律儀は思擇力の攝なり、(九〇)後の一の律儀は修習力の攝なりと。彼れ既に是の如き勝妙なる不放逸力を成就し、如實に聖諦の理に通達するが故に、便ち能く永く、我我所を執して以て前行と爲る一切の見道所斷の煩惱を斷じ、又能く有學の律儀を獲得す。彼れ卽ち有學の律儀を修習し、復た能く永く、妄りに我慢を執して以て前行と爲る一切の修道所斷の煩惱を斷じ、究意して無學の律儀を證得す。此の上に更に若くは過え若くは勝れたる所餘の律儀無し。

(九一)復た次に、若くは諸の苾芻は已に聖教に入りて諸根を護らず、彼れ便ち一向に衆苦を造作す、謂く後法の苦或は現法の苦なり。當に知るべし是の如く根を守らざる者は癩病の人の蘆荻の叢に入るが如し、其の葉の愛す可きが如き境界なるが爲めに其の身を破裂し、當來の微細に倶行する後有の

【八九】前の二律儀とは下中二品の律儀なり。
【九〇】後の一の律儀とは上品の律儀なり。
【九一】聖教に入りて護らざるを解す。護らずとは諸根を護らざるなり。

衆苦を攝受して而も覺ること能はず、是の如きを名づけて後法の苦に由ると爲し、衆苦を造ると說く。彼れ又此に於いて染を起し著を起し廣く毀犯を生じ、是の因緣に由りて空寂なる阿練若處に住すと雖も、而も追悔を現行して起す所の尋思の苦を受く、菅茅の刺其の足を傷害するが如し。淨仙衆の「所」に往くに畏れ無きこと能はず、設ひ强ひて淸淨僧の中に趣入すとも便ち有智の同梵行の人其の所犯を擧ぐるが爲めに、彼れ內に懷き意を覆藏するに由るが故に心鴆毒の如く能く擧ぐる邊に於いて憤を發し慘害す。又諸の有智の同梵行者は、其の鄙劣にして沙門を捨てんことを樂ふと知つて、即ち便ち遠避して與に若くは諸の村邑、若くは阿練若に同住せず、咸共に譏毀して言はく、「此の長老是の如く毀犯し、是の如く惡說し、是の如く惡作し、是の如く非法雜染にして住す」と。已に淨信なる者には其をして變退せしめ、未だ淨信ならざる者には信を生ぜざらしむ。是の故に彼の人現法の中に於いて此の如く追悔して作す所、發憤して作す所、遠避して作す所、譏毀して作す所の種種なる諸苦を領受す、此れ及び前に說ける後法所作の衆苦を領受するを總略して一と爲し、衆苦を受くと名づく。此の中云何んが非律儀と名づくるや。謂く是の如き現法後法に於いて衆の過患を具へ、境界に行處して不如理を起し、妄りに諸相隨好の邪想を執し、邪想を先と爲して其の住處に於いて彼に順ずる相應の尋思を發起し、此に由り前に說ける所の一切の過失に於いて如實に觀見すること能はず、復た所有過失を觀見すと雖も未だ數數多く修習すると能はざるが故に、所依の「身」中に於いて諸の煩惱品の所有

麤重をば未だ除遣すると能はず、身未だ輕安ならず、謂く色心の身なり。此の行相に由つて纏及び隨眠猶ほ尙ほ和合して能く思擇と修習との二力の對治に違背せしむるを非律儀と名づく。此と相違するは當に知るべし卽ち是れ律儀の行相なりと。又此の律儀は三の因緣の故に能く修習をして速に圓滿することを得せしむ。何等をか〔九二〕三と爲すや。所謂最初に善說の法毗柰耶の中に於いて淨信にして出家し、既に出家し已つて便ち神力と相應する聞慧を用て蟲獸と相似たる六根を攝持し、既に攝持し已つて復た如理なる作意の思慧を用て正審に過患を觀察し、方便して聞慧の上、修慧の下に在り、故に中間に繫縛す、中間の繫已つて彼の神力に於いて自在を得るや不やを試察せんと欲するが爲めに乃ち淨相を取り、諸の境界に於いて之を放縱し彼の神力に於いて未だ自存ならざるが故に、各各に別別の境界に馳散して然も其れ究竟して逃竄すると能はず、未だ善く彼の過患を觀見せざるが故に彼の蟲獸をして未だ善く調伏せざらしめ、又神力をして自在を得ざらしむ。是を了知し已つて復た多く如理なる思慧を修習し、究竟に到らしめ、作意を超過し、轉た更に勤修して身を修め念を正しうし、此の正念に於いて善く修習するが故に彼れ復た各各に別別の境界に馳散すること能はず、當に知るべし爾の時彼れ善く調伏し、神力彼に於いて自在を得るなりと。

〔九三〕復た次に、諸の苾芻あり、先に已に妙慧の資糧を修集し、復た善友に値遇することを得、圓滿

【九二】三とは聞思修の三慧なり、文の如く知るべし。

【九三】勝れたる資糧善く備はるを解す。

して諸行の三種の過患を聽聞す、謂く(一)現法の過患、(二)後法の過患、(三)現法後法の過患なり。當に知るべし此の中〔四〕大種互に違するを所依止と爲る一切の疾病を現法の過患と名づけ、(九四)惡趣の諸行常恆に隨逐して能く作し能く往くを後法の過患と名づけ、先に現法に於いて喜貪を成就するを以て所依と爲し、能く現法後法の老死を引くを現法後法の過患と名づくと。是の如く總略するに三種の苦あり、一には疾病の苦、二には惡趣の苦、三には老死の苦なり。謂く善趣に依り及び惡趣に依りて是の如き諸の過患を聽聞し已つて精進し修行し、法隨法行し、斯に因りて能く聖諦現觀に入り、次に善淨なる無我の眞智に由り、空室に入るが如く(九五)內外の六處皆な空なりと現觀す。彼れ爾の時に於いて慧を以て、諸の境界に依り妄念より生ずる所の諸の煩惱の纏能く損害を爲し、及び餘殘の煩惱の隨眠貪愛の隨眠あるに通達し、又自ら、相續中に有る諸の煩惱、有る諸の貪愛、有る諸の苦惱、有る諸の損害及び過、一切の煩惱貪愛に通達し、有餘依涅槃界を證し一向に寂靜なり、次に後に復た無有餘依般涅槃界を證す。彼の先の修習は(九六)譬へば草木の枝條莖葉の如く、正法の聞慧は聖道を積集し、法隨法行を所依の筏と爲し、修道の中に於いて正に勤めて修習し、漸次に心善く解脫することを證し、有餘依般涅槃界に住し、一切の災惱をば皆な解脫することを得旣に此に住す、當に知るべし究竟して衆

【九四】惡趣の諸行とは惡趣を招感する諸行なり。
【九五】內外の六處とは內の六根、外の六境なり。
【九六】正法の聞慧は草木の如く、法隨法行は筏の如し、正法の聞慧を以て法隨法行を起すこと、草木等を以て筏を成すが如し。

苦を越度して彼岸に到ると。

(九七)復た次に、七の因縁に由り、善説の法毗奈耶の中に於いて出家し已ると雖も復た還退して正に修學する所を捨つ。云何んが七と爲すや。謂く(一)諸の異生未だ諸の異生地を超度すること能はず、五取蘊の衆の苦惱の法に於いて如實に(九八)五轉を了知すること能はず。(二)或は復た異生諸の妙欲に於いて上品に其の過患を觀ること能はず。(四)又行く時に於いて及び住する時に於いて恆常に縱逸にして愛すべき境に於いて不如理なる所有の相貌を取り、繫念せざるが故に恆常に善品の惡剌を尋思し非理に尋思す。(四)又畏れ無きこと無し、若くは王、若くは餘のもの事に因りて呼逼せんに怖畏に由るが故に、則便ち隨從し、復た親愛あつて諸の親屬に於いて顧戀する所あり、彼れ若し招命すれば親愛に由るが故に、則便ち隨從す。(五)又境界に於いて或は貪に隨順し、或は瞋に隨順し、或は癡に隨順し、猛利なる諸の煩惱の纏を發起す。(六)又卽ち彼の心の相續の中に於いて常に隨縛あり。(七)又下劣なる勝解を成就するに由り、一切の廣大なる勝解あること無し。謂く出離、遠離、涅槃に於いて彼の劣れる勝解を成就するに由るが故に、諸の境界に於いて其の心趣入す、一切の父母等の事に於いて孑然として顧戀すること無きこと能はざるに由るが故に其の出離に於いて心趣入せず、八聖支に於いて勝解無きが故に其の遠離に於いて心趣入せず、彼の果たる煩惱斷ずる中に於いて勝解無きに由るが故に其の涅槃に於いて心趣

【九七】所學を捨つることを解す。

【九八】五轉は前卷に出づ。

入せず。略して二處に由りて一切の漏を攝す、一には見〔道〕所斷、二には修〔道〕所斷なり。當に知るべし此の中非理なる作意及び所緣の境を漏に順ずる法と名づくと。若しは諸の有學は能く發起する修〔道〕所斷の漏の非理なる作意の所緣の境界に於いて未だ永へに斷ぜずと雖も、而も妙慧に由りて正に通達するが故に說いて此の漏に順ずる法の中に於いて其の心寂靜なりと名づく。猶ほ失念の增上〔緣〕より生ずる所の微劣なる纏あるが故に未だ淸涼なりと名づけず、未だ宴默なりと名づけず。然も其の起す所の一切の見道所斷の諸漏皆な永へに斷ずるが故に亦た淸涼なりと名づけ、當來に於いて生ぜざる法なるを以ての故に亦た宴默なりと名づく。而も彼の異生にして下劣なる諸の勝解を成就する者徧く一切に於いて諸の漏法に順じ、心寂靜ならざれば淸涼なりと名づけず宴默なりと名づけず。當に知るべし是の七の因緣に由るが故に復た還退して正に修學する所を捨つと。此と相違する所有の白品の七の因緣の故に善說の法毘奈耶の中に於いて既に出家し已つて終に正に修學する所を退捨せず。

(九九)復た次に、若し苾芻ありて、四の著處に依れば當に知るべし彼れ四種の邪行を行ずるなりと。何等をか名づけて四種の著處と爲すや。謂く苾芻あり、內外處に於いて貪愛あるが故に能く後有を感じ、現法の中に於いて涅槃を樂はず、是れ初めの著處なり。復た苾芻あり、先に捨てたる所の外の諸の所有父母等の事に於いて顧戀する所ありて其の心を繫縛す、是の如きを名づけて第二の著處と爲す。

【九九】著處を解す。著處とは執著する處なり。

復た一あるが如き現法の中に於いて一切の利養恭敬を希求し、諸の所得の利養恭敬に於いて耽著して捨てず、是の如きを名づけて第三の著處と爲す。復た一あるが如き是れ有學の者にして已に（一〇〇）諦跡を見たるも、餘の我慢あり、少分の貪愛に隨逐せられ、修「道」に於いて縱逸を棄捨して住す、是の如きを名づけて第四の著處と爲す。云何んが名づけて四種の邪行と爲すや。謂く彼の最初の後有を愛樂する補特伽羅は現法の中に於いて涅槃を樂はず、若くは諸の有學「の者」縱逸を行じ、此の著處の增上力に由るが故に樂んで在家及び出家衆と共に相ひ雜住す、是の如きを名づけて最初の邪行と爲す。又復た卽ち前の後有を愛樂する補特伽羅は後有を愛樂する增上力の故に邪願を發起し梵行を行ず、是の如きを名づけて第二の邪行と爲す。又復た先に捨てたる所の外事に於いて顧戀する所あり、彼の著處の增上力に由るが故に能く正に修學する所を退捨せしむ、是の如きを名づけて第三の邪行と爲す。又明世に於いて利養及與び恭敬を希求し、諸の得る所の利養敬恭に於いて耽著して捨てざる補特伽羅は此の著處の增上力に由るが故に尸羅を毀犯し。廣く說かば乃至螺音狗行す、彼れ利養恭敬を顧戀するに由り所學を捨てざれども是の罪を見ず、公然戒を犯す、是の如きを名づけて第四の邪行と爲す。

（一〇一）復た次に、諸の苾芻あり、義の不善なる、他より聞く所の種種なる文字一義の言說に於いて便

【一〇〇】諦跡とは諦道卽ち諦理なり、見道に入りしを諦跡を見たりと云ふ。

【一〇一】不善の義を解す。

ち（一〇二）猶豫を懷き歡喜を生ぜず、今此の中に於いて何者をか實なりと爲すと。復た、四種の能く微妙清淨なる智見を生ずる無倒の觀門あり。何等をか四と爲すや。謂く（一）極めて精勤して苦を觀察する者の（一〇三）生受因に於ける如實なる妙智、（二）又（一〇四）依持及び（一〇五）所依の因に於ける如實なる妙智（三）又（一〇六）住因に於ける如實なる妙智、又（一〇七）依、（一〇八）緣、（一〇九）自性、（一一〇）助伴、（一一一）苦樂非苦樂に隨順する行に於ける如實なる妙智なり、又二緣の故に如來は義の不善に於いて補特伽羅の所有の猶豫を除滅したまふ、一には種種なる文詞の表す所の一義を顯示したまふ、文に差別あるも、義に差別無しと、是に由りて能く猶豫を斷除せしめたまふ。二には聖教の廣義を開顯し、此に由りて能く義に於いて通達せしめたまふ。云何んが名けて聖教の廣義と爲す。謂く（一一二）資糧地より乃至（一一三）漏盡くるを皆な說いて名けて聖教の廣義と爲す。此の中（一一四）邊際の根成熟して住し、（一一五）如來所化の無我相應する善受堅固にして聞思より成ずる所の正見成就し、（一一六）此を依止と爲し此を建立

【一〇二】猶豫とは疑惑なり。
【一〇三】生受因とは五蘊なり、五蘊能く三受を生ずるが故に。
【一〇四】依持因とは內の六根なり。
【一〇五】所依因とは外の六境なり。
【一〇六】住因とは四食なり、四食能く三受を住せしむるが故に。
【一〇七】依とは六根なり。
【一〇八】緣とは六境なり。
【一〇九】自性とは六識なり。
【一一〇】助伴とは相應の心所なり。
【一一一】苦等は觸受なり。
【一一二】資糧地とは順解脫分なり。
【一一三】漏盡くるとは無學位なり。
【一一四】邊際の根成熟して住しとは順解脫分の位なり。
【一一五】如來乃至成就しとは順解脫分滿ずるなり。
【一一六】是れより順解脫分卽ち資糧地を明す。

と爲し、獨り空閑に處し、內外處の　(二一七)四種の識住を縁じて諸有る取識を斷滅せんと欲するが爲めに(二一八)循身念を修する勝れたる奢摩他毘鉢舍那に攝受せられ、此の親近し修習する勢力に由りて、如實に(二一九)初識住を縁じ、現觀に隣逼する止觀雙行することを發生す。(二二〇)此より無間に聖諦の中に於いて能く現觀に入り、(二二一)復た更に修習し、得たる所の道の如く以て漸く進趣し、(二二二)能く一切の諸漏永へに盡くることを得。能く如實に初識住を縁ずるが如く、乃至如實に第四の識住を縁ずること當に知るべし亦た爾なりと。

(二二三)復た次に、先に說ける所の如く根門を護らざる補特伽羅、煩惱の諸纒現前するも捨てざるは世及び出世の思擇と修習との二力の對治に闕乏する所あり、煩惱生じ已つて性となり多く堅執せんに、魔既に性となり堅執なるを了知し已れば便ち其の所に往き、諸の境界を以て之を媚惑す、是の如く彼の魔、性となり煩惱諸纒に執著する補特伽羅に於て其の便を得、媚惑せんと欲するが爲に其の相續に於て　(二二四)所縁を安立す。又卽ち根門を護らざる補特伽羅は、般涅槃に於て欲樂劣れるが故に、親愛劣れるが故に、譬へば乾朽せる葦草の舍宅の如し、魔便ち彼の積集する愛すべき境界に於いて炬火もて之を焚燎す。二の因縁に由りて彼れ境界の爲めに常に蔽伏せらる、一には未だ生ぜざる纒は其をして生ぜしむるが故に、二には已に生ぜる纒をば相

【二一七】四種の識住とは色受想行の四蘊なり、是れ識蘊の依住するところなり。
【二一八】循身念とは循身觀なり。
【二一九】初識住とは色蘊なり。
【二二〇】此れ見道位を明す。
【二二一】此れ修道位を明す。
【二二二】此れ無學位を明す。
【二二三】流に隨ふを解す。
【二二四】魔が種種なる境界を變作するなり。

續せしむるが故なり。境界の愛の爲めに蔽伏せらるるに由り、廣く諸の境界を追覓する時に於いて多く種種なる惡不善の行を行じ、是の如き邪惡なる行を行ずる時に於いて復た種種なる惡不善の法の爲めに蔽伏せらるること前に說ける所の如し。邪行を行じ已つて路を失つて行き、流に沿うて去るを流に順ふ者と名づけ、此と相違する所有の白品を當に知るべし是れを流れに順ふ者に非ずと名づくと。

(二三五)復た次に、八種の相に由りて當に知るべし總じて後有の菩薩の(二三六)諸の正行の道及以び(二三七)道果を攝す、聲聞乘に勝るるを上ある無しと爲す。何等をか八と爲すや。謂く(一)哀愍するが故に、(二)內勇敢なるが故に、(三)諦察法忍の性現前するが故に、(四)能く出離するが故に、(五)自の內に諦「理」を觀ずる行を發起するが故に、(六)廣大に善く世間「道」を修し正見現在前するが故に、(七)無漏の菩提分法を獲るに由りて淸淨を得るが故に、(八)善く淸淨に(二三八)覺分を修するに由りて倶に進んで無上純淨なる修道を修し、六「根」處に依止して修習圓滿し、(二三九)六種の最勝無上圓滿なる德を獲得するが故なり。當に知るべし此の中諸の有情に於いて長時に哀愍し、其の心に熏修し、最後有に住する諸の大菩薩は、諸の愚夫の貪愛の河に墮し、流に順つて漂溺して五相の苦の爲めに逼切せらるるを見、既に觀見し已つて深く大悲を起すと。何等をか五と爲すや。一には彼れ貪愛の河に墮し正しく尋思せず、愛すべ

【二三五】菩薩餘乘に勝るるを解す。
【二三六】諸の正行の道とは道諦なり。
【二三七】道果とは滅諦卽ち涅槃なり。
【二三八】覺分とは三十七科の菩提分法なり。
【二三九】六種。本文下出。

からざる水に常に逼觸せらるるを見る。二には彼の（二三〇）內外の六處の三毒の火難（二三一）兩岸に住するを見る。三には彼の欲界に在る衆多なる憂苦種種なる災橫諸の惡毒刺其の下に徧布するを見る。四には彼れ色界に在りて（二三二）世間の慧眼に闕くる所あるが故に猶ほし盲冥其の中に處在するが如くなるを見る。五には彼れ無色界に在りて、世間の慧眼已に圓滿するが故に、諸の（二三三）聖慧眼に闕くる所あるが故に、猶し昏闇にして其の上に居在するが如くなるを見る。既に是の如く貪愛の河に墮する諸の有情類徧く一切に於いて皆な寂靜ならず、若くは「苦」觸、至くは「生死の兩」岸、若くは（二三四）下中上の苦の逼迫するを見已つて大悲を發起す、是れを哀愍と名づく。又卽ち此の哀愍を成就せる者は或は王家、或は帝師の家に生れ、未だ出家せずと雖も內「心」に勇悍を興し、我れ今定んで當に（二三五）妙跡に通達し、（二三六）梵行を歸修し、終に退轉無かるべしと、是の如きを名づけて內に勇悍を興すと爲す。又彼れ卽ち未だ出家せざる位に於いて（二三七）贍部「樹」の影に居り、獨坐思惟し、便ち能く最初の靜慮に證入し、後自他の老病死法に於いて正審に觀察し、能く定んで忍可す。是の如きを名づけて（二三八）諦察法忍內に自

【二三〇】內外の六處とは內の六根外の六境なり。

【二三一】兩岸とは生死の兩岸なり。

【二三二】世間の慧眼とは有漏の慧眼なり。

【二三三】聖慧眼とは無漏の慧眼なり

【二三四】下中上の苦とは次の如く欲界、色界、無色界の苦なり。

【二三五】妙跡とは見道なり。

【二三六】是れ修道の修行なり。

【二三七】贍部（ヂャンブー）樹の影は廣し、比丘多く影の中に住す。又此樹の下に贍部檀金を出すと云ふ。

【二三八】諦察法忍、又無生法忍、不起忍など云ふ、諦に眞理を觀察して無生の理に安住するを云ふ。

ら現前すと爲す。又彼の宿世に習ひし所の善根一切の善行に覺發せられ復た勇悍なる諦察法忍の增上力に由るが故に便ち能く廣大なる妙欲を棄捨し、淨信にして出家し施設すること無しと雖も正梵行者として而も能く自然に禁戒を受持す。此の禁戒を依止と爲るに由るが故に漸次に能く乃至非想非非想處を證す、是の如きを名づけて能く正に出離すと爲す。又彼れ世間道を棄て正に出離を求めんと欲するが爲めに先世に於いて正等覺し、獲得する所の無上究竟の出離に由り、正に聞き、勝解し、積集し熏修し、身相續するが故に世間道に於いて信樂すること無く、是の因緣に由り〔一三九〕菩提樹に往く。卽ち先時に老病死の假想の道を觀ずるに依つて諸諦の相に於いて次第に觀察し、是の思惟を作す、是の諸の世間の有情の類は種種なる艱險衆苦に墮在して生あり老あり病あり死あり、然も其れ老病死に於て究竟して出離すること能はず、如實に是の如き次第を了知し、〔一四〇〕老死を觀じ、〔一四一〕老死の集を觀じ、〔一四二〕老死の滅を觀じ、能く〔一四三〕老死に趣證する滅行を觀じ、如理なる作意を依止と爲るが故に、久しく已に大資糧を積集せるが故に倶生の慧を以て便ち能く一切の法性を覺悟し、諸法の法性法界に安住す、是の如きを名づけて自ら內に諦「理」を察觀する行を發起すと爲す。又彼れ復た上の漏盡くることを求めんと欲し、方便して〔一四四〕宿住念智を發起し、先世を憶念し、諸の如來の正等覺の所に

【一三九】菩提樹に往くとは正覺を成ずること。
【一四〇】老死とは苦諦なり。
【一四一】老死の集とは苦諦の因たる集諦なり。
【一四二】老死の滅とは滅諦なり。
【一四三】老死に趣證する滅行とは滅諦に到る道諦なり。
【一四四】宿住念智とは過去の記憶なり。

從ひ、(一四五)漏盡道に於いて聞思を積習す。是に由りて長時の積集を發起し、世間の正見を現在前せしめ然も此の正見たるや教授者の如きは此を以て「所」依と爲し、能く菩薩をして一坐に安處し、乃至究竟して漏盡くることを證得せしむ、是の如きを名づけて廣大に善く「世間道を」修し正見現前すと爲す。又卽ち彼の教授者の所有の正見の如きは、漸次に勝進するに由り、先に已に下地の諸欲を遠離し、乃至上無所有處を極め、當に聖諦に於いて現觀を得る時便ち無漏の四念住等乃至最後の八聖支道所有一切の菩提分法を證す、其の最後を擧ぐれば、當に知るべし亦た前位の一切を攝すと、彼を得るに由るが故に不還果を成じ無漏の菩提分法を得るを以て、是の故に說て清涼を獲得すと名く。彼れ是の如く世間の究竟の安樂を獲得し、出世無漏の安樂を獲得し、清涼を得るに由るが故に熾然を離ると名く。世間道に由り、乃至已に無所有處の所繫の煩惱を離れ、及び已に見道所斷の諸の煩惱を遠離するが故に熱惱を離ると名く。餘す無く永に有頂の所繫の煩惱を斷ぜんと欲するが爲の故に復純無漏道を勤修す、所謂無上の覺支を修習す、是を進んで無上の修道を修すと名く。此修に由るが故に無學地の中の六種の修法究竟圓滿す、一には聖神通を修すると究竟圓滿し、二には(一四六)淨五根を修するとを究竟圓滿し、三には煩惱並に諸の習氣に餘す無く離繫するを證得すると究竟圓滿し、四には(一四七)

【一四五】漏盡道とは煩惱を盡す修行なり。

【一四六】淨五根とは信、精進、念、定、慧の五根なり。

【一四七】四種の現法樂住。禪定七名中の一、禪定に一切の妄想を離れ法味の樂を受くるを現じ安住して動かざれば名づく、四種とは色界四靜慮なり。

四種の現法樂住を證得すること究竟圓滿し、五には世間の（二四八）靜慮、解脫、等持、等至を證得すること究竟圓滿し、六には（二四九）名身句身文身を證得し、欲する所に隨ふことを得、艱難無く正法を宣說するを得ること究竟圓滿するなり。當に知るべし此の中淨信根を修すること究竟〔圓〕滿すとは、謂く涅槃に於いて意樂淨きが故なり。精進根を修すると究竟〔圓〕滿すとは、謂く能く勇猛に一切有情の義利を造作すること善淸淨なるが故なり。念根を修習すること究竟〔圓〕滿すとは、謂く（二五〇）三念住に忘失の法無く善淸淨なるが故なり。定根を修習すること究竟〔圓〕滿すとは、謂く（二五一）聖天及以び（二五二）梵住に於いて善淸淨なるが故なり。慧根を修習すること究竟「圓」滿すとは、謂く（二五三）十智力善淸淨なるが故なり。彼れ是の如く能く六處に往き圓滿の因を修するに由り大王と爲ることを得、所謂法王是に由りて六種の圓滿を證得す。謂く（一）聖神通の增上力の故に大財富自在圓滿を得、（二）諸根淸淨の增上力の故に大舍宅自在圓滿を得、（三）諸の煩惱を斷ずる增上力の故に安樂の諸の坐臥の具を受くる自在圓滿を得、（四）現法樂住の增上力の故に其の舍宅に處し、其の中に坐臥し、第一の諸の損惱無き大安樂住の自在圓滿を證得し、（五）靜慮、解脫、等持、等至の增力上の故に能く一切有情の正しき利益の事を辦じ、遊戲喜樂する自在圓滿を證得し、（六）諸の名身句身文身に於いて欲する所に隨ふこ

【二四八】靜慮等は禪定の異名なり。

【二四九】名身等は說法の語言なり。

【二五〇】三念住。次卷の脚註參照。

【二五一】聖天及以び梵住は禪定の結果生ずる天界なり。

【二五二】梵住とは梵天なり。

【二五三】十智力とは如來の十智及び十力なり、前數數出づ。

とを得、艱難無く正法を宣說するとを得る增上力の故に法王と爲りて能く他の獲得する所に於いて分布し作用する自在圓滿を得。是の如きを名けて六處の修〔圓〕滿するを依止と爲るが故に六種の自在圓滿を證得すと爲す。

（二五四）復た次に、略して四種の我を尋求する論あり、此の論に由るが故に薩迦耶見をば未だ永へに斷ぜざる者の我を求むる尋思數數現行す。云何んが四と爲すや。一には我を尋求す、我は何を用ゐて以て（二五五）自性と爲るやと。二には我を尋求す、我は常なりと爲んや、是れ無常なりと爲んやと。三には云何んが我なりや、我は是れ常なりや、無常なりやと尋求す。四には我を尋求す、有る所の我は、何れの處に住在するやと。當に知るべし、此の中略して四種に我を尋求するありと。一には自性を尋求し、二には其の（二五六）轉を尋求し、三には其の因を尋求し、四には（二五七）窟宅を尋求す。此の中（二五八）三種は諸行の差別に施設することを得可し、又此の施設は顚倒に非ざるべし。（二五九）第四の一種は一切種に由るも終に〔諸行〕の差別に施設することを得可からず。當に知るべし我の自性を施設すとは、謂く卽ち（二六〇）十二種處に生ずる所の六識並に（二六一）受想思を施設して以て其の（二六二）我と爲す、此を過ぎて（二六三）餘の

【二五四】論の施設を解す。
【二五五】自性とは體なり。
【二五六】轉とは生起なり。
【二五七】窟宅とは存在する處を云ふ。
【二五八】假我の自體、轉、因等は諸法の上に施設し得べし。
【二五九】我の窟宅卽ち存在は成立せず、一切諸法の何れにも、我として認むべきなし、卽ち五蘊の中に實我を施設すべからず。
【二六〇】十二種處とは六根六境の十二處なり。
【二六一】受想思。思とは行なり、受想思は五蘊の中の三なり。
【二六二】我。五蘊和合の假我、是れ佛教所立の我なり。
【二六三】餘の我とは外道所立の實我なり。

我は得可からざるが故なり。又卽ち此の我體は是れ無常なり、生あるが故に、老の故に、死の故なり。又此の諸行は諸趣に於いて種種なる自體生起し差別し、成實ならざるを以ての故に幻事の如しと說き、想心見〔顚〕倒して性を迷亂するが故に陽燄の如しと說き、起盡〔生滅〕の法なるが故に增減ありと說き、刹那の性なるが故に名づけて暫時と曰ひ、數數壞し已つて速疾に餘あり、頻頻に續くが故に說いて速疾に現前し相續すと爲し、來るに所從無く、住くに所至無し、是の故に說いて本無くして今有り有り已つて散滅すと爲す。是の如きの相に由り略して生身の展轉無常及び(二六四)有因の刹那の展轉無常を說く。是の如き三種は如理に我の自性、若くは轉、若くは因を施設す、我の有る所の窟宅を施設するとは終に得可からず。諸行の中に諸行の性を離れて別に實我ありて諸行の中に住すること得可からざるに由るが故に、是の因緣に由り世俗諦の諸行に約するすら〔實我は〕尚空にして施設す可からず、何に況んや勝義〔諦に約する〕をや、是の故に一向に空に於て空を立つ。是の如く心の如理なる作意に由り、(二六五)聞いて解了するが故に、(二六六)思うて等了するが故に、(二六七)修して諦了するが故に、其の次第の如く差別して說いて言く、應に當に(二六八)歡喜すべく、應に當に(二六九)等喜すべく、應に當に(二七〇)徧喜すべしと。

【二六四】有因とは因あつて生ずる法なり。
【二六五】聞慧なり。
【二六六】思慧なり。
【二六七】修慧なり。
【二六八】歡喜は聞慧の結果。
【二六九】等喜は思慧の結果。
【二七〇】徧喜は修慧の結果。

巻の第九十二

攝事分中契經事處擇攝第二の四

復た次に、嗢柁南に曰く、

〔一〕『上の貪と敎授と及び苦住と、觀察と引發と應に供〔養〕すべからざると、明解脫と修と無我論と定と法見とにして苦を最も後と爲す。』

〔二〕三の因緣の故に補特伽羅は所緣の境に於いて上品の貪を行ず。何等をか三と爲すや。一には康强にして羸劣に非ず、二には端嚴にして醜陋に非ず、三には貪を習つて貪を捨つるに非ず。復た三種の對治に由りて攝受して尙ほ是の如く上品の貪を懷く補特伽羅をして善說の法毗奈耶の中に於いて梵行を勤修し、其の心を調伏せしめ、寂靜を得せしむ、何に況んや但だ中輭品の貪を懷く〔三〕微薄塵の者をや。何等をか三と爲す。一には根門を密護するを所依止と爲して一切の欲樂の邊を遠離するが故に、二には食に於いて量を知り、初夜にも後夜にも睡眠を減省するを所依止と爲して一切の自苦の邊を遠離するが故に、三には最勝なる正念正知を所依止と爲して中道の出離の行を行ずるが故な

〔一〕此は總頌第三門上品の貪等を解する別頌なり。此の中更に十二門を列し、長行に於て次第に解釋す。
〔二〕上の貪を解す。
〔三〕微薄塵。塵とは煩惱、煩惱微薄なるを云ふ。

り。當に知るべし此の中㈣四念住に於いて善く心を住せしむる者は、或は行の時に於いて境界現前せんに若くは相及與び隨好を取らず、如實に受の生、住、滅を了知し、若くは其の相及與び隨好を取り、如實に想の生、住、滅を了知し、或は住の時に於いて如實に彼の尋思に因る生住と滅とを了知す。是の如き相に由り正念正知にして一切時に於いて、一切種の所緣の境界に於いて能く正軌の如く其の心を守護す、是れを最勝なる正念正知と名づく。復た最勝なる正念正知あり、謂く已に滅盡定を獲得せる者、或は已に無想定を獲得せる者、或は已に㈤無尋伺〔定〕を獲得せる者は、當に知るべし、㈥聖住、㈦天住に依止する此の最勝なる正念知住を除いて、更に餘の能く過上せる者あること無し。或は滅〔盡〕定より起ち已つて住し、或は將に定に入らんとし、方便して住し、如實に受の生住滅を了知す、是れを最勝なる正念正知と名づく。滅〔盡〕定に依りて如實に受を知るが如く無想定に依りて如實に想を知り、無尋伺定に〔依りて〕如實に所有尋伺を了知するも當に知るべし亦た爾なりと。此の最勝なる正念正知に由りて唯だ法を取るが故に是の如き受、想、尋伺に於いて我我所の虛妄なる分別を起さず。若くは諸の愚夫は受、想、尋伺の差別生ずる時受等の法に於いて唯だ法のみある想を發起すること能はず、但だ是の念を作す、我れ能く領受すと、乃至廣く說けり。是の因緣に由りて彼れ尙ほ正念正知すらあること無し、何に況ん

【四】四念住とは身、受、心、法の四念住なり。
【五】色界第二禪已上は無尋伺を獲得す。
【六】聖住とは滅盡定と無想定なり。
【七】天住とは無尋伺定等なり。

や最勝なるをや。此の中後說の正念正知は或は不還果［の位］、或は阿羅漢［果の位にあり］、當に知るべし前說の正念正知は作意放逸あると無きを得たる諸の異生の位より一來果に至るなりと。

(八)復た次に、二の因緣に由りて如來自ら言はく、「其の年衰耄し、身力疲怠すれば諸聲聞を勸めて他の說法を請せしむ」と、一には其の少年なるを恃んで專ら憍傲を行じ、放逸に住する者をして自ら怖厭せしむるが故に、二には當來世に於いて諸有る苾芻、其の年衰老して勢力あること無く、疑悔を遠離すれば、少年の諸の苾芻等を勸請して正法を宣說せしめ、諸有る苾芻、其の年盛美にして勢力を具足し、疑悔を遠離すれば、恐懼する所無く、他の爲めに說法せしめんが爲めなり。當に知るべし此の中略して二種の大集會に處することありて正法を宣說す、一には決擇說、二には直言說なり。決擇說とは、謂く請問徵覈の方便を興し、正道理を說いて疑惑を滅除するなり。直言說とは、謂く諸の聽衆默然として住し、說の如く法師正法を宣說するなり。又四相に由りて能く教授教誡に隨順すと名づく、一には能く諸處の差別を分析し、諸行の中に於いて無我智を得て見清淨なるが故に、二には諸受幷に所依の滅に於いて增上慢を離れ、最も極めて寂靜にして見清淨なるが故に、三には能く未來の諸苦を超越して見清淨なるが故に、四には能く現在の諸苦を超越して見清淨なるが故なり。此の中內外の諸處の識、觸、受、想、思、愛の(九)衆別を分析して無我を顯示し、緣に依りて起る方便の道理に由りて能く最初の正見清淨を引くこ

【八】教授を解す。
【九】衆別とは差別に同じ。

と明の燈に依るが如く、影の樹に依るが如し、彼れ有に非ざるが故に此も亦有に非ず。內外の諸處の差別を因と爲る諸受は、彼の諸處餘す無く滅するに由るが故に〔一〇〕此も亦隨つて滅することを顯示し、增上慢を離れ、其の涅槃に於いて如實に了知し、最勝なる寂靜にして、能く第二の正見淸淨を引く。現法の中に於いて智慧の力を以て能く永く一切の煩惱を斷滅し、餘す無く當來の所有衆苦を超越することを顯示し、能く第三の正見淸淨を引く。徧く苦〔受〕に順じ樂〔受〕に順じ、〔一一〕非苦樂〔受〕に順ずる一切の法の中に於いて貪欲を起さず、瞋恚を起さず、愚癡を起さざることを顯示し、見道を顯示し、其の〔四〕念住に於いて善く其の心を住し、修道を顯示し、諸の覺分を修し、謂ゆる諸漏をして永く滅盡せしむるが故に現法の雜染の苦住を超越し、能く第四の正見淸淨を引く。

〔一二〕復た次に、諸の苾芻あり、〔一三〕根〔門〕を守らずして住し、諸の境界に於いて心に染愛多く、心に散亂多し。此の因緣に由りて二種の苦を受く、一には麤重の作す所の苦、二には諸法の中に於いて疑惑して作す所の苦なり。所以は何ん、彼の方便に由りて應に身を勤修すべく、身を勤修し已つて應に戒奢摩他支を勤修すべきに、身を修せず亦た戒奢摩他支を修せざるを以て因緣と爲るが故に身輕安ならず心輕安ならず、是の故に彼れ麤重の作す所の苦を受け、輕安闕くるが故に勝れたる三摩地を觸證すること能はず、是の因緣に由りて應に如實に知るべきを如實に知らずして多く疑惑を生じ、是の故

〔一〇〕此とは諸受なり。
〔一一〕非苦樂受とは捨受なり。
〔一二〕苦住を解す。
〔一三〕根門とは六根なり。

に彼れ諸法の中に於いて疑惑して作す所の苦を受くればなり。此の二種の苦惱に由りて住するが故に根〔門〕を守らざる增上緣の力より得る所の衆苦〔あり〕、不安隱にして住すと名づけ、是の如きを名づけて現法の中に於いて根〔門〕を守らざる者の所有の過患と爲す。此と相違するは當に知るべし卽ち是れ根〔門〕を守護する者の所有の功德なりと。

〔一四〕復た次に、諸の苾芻あり、欲貪を離れんが爲めに方便を勤修し、正に加行道を修習するに由るが故に諸の煩惱を伏し、是の思惟を作す、我れ諸欲に於いて欲貪ありて覺了せずと爲んや、あること無しと爲んやと。乃ち淨相作意を以て思惟し、斷と未斷とに於て方に決定することを得。觀察作意を依止と爲るが故に貪欲の生起する處所を尋求し、如實に了知し、憶念分別す、是れ諸の煩惱の勝れて〔一五〕安足する處なりと。彼の煩惱未だ永へに斷せざるに由るが故に、若し煩惱の爲めに心を漂漾せらるる時、能く下劣なる分に趣くを了知するが故に便卽ち制伏す、若し制伏せざれば先に得たる所の少三摩地に於てすら尙ほ還つて退失す、況んや能く勝品の功德に進趣するをや。整攝するに由るが故に能く退失せず、亦た勝品の功德に進趣す。若し觀察せざれば復た還つて增上慢を發起するが故に亦退失あり、觀察するに由るが故に能く證すること決定す　若し心漂漾せんに能く正しく了知して還つて復た整攝すれば是の故に退かず、方便を修し欲貪を離れんが爲めに餘の上位に於いて其の所應に隨ふが如きも當に知る

【一四】觀察を解す。
【一五】安足する處とは所依處のこと。

べし亦た爾なりと。若し猛利なる見もて審に觀察する時而も〔煩惱〕生起せず、彼れ便ち決定の勝解を獲得す、我れ諸處に於いて已に是れ勝伏す、謂く此の所緣の應に生ずべき煩惱をば我れ是の處に於いて已に勝伏せるが故に生起せざらしめたりと、學地を超過すること猶ほし大王の能く己心に隨つて自在にして轉ずるが如く、一切の〔二六〕魔羅の聚落を降伏し、究竟の盡〔智〕無生智を證得し、梵行圓滿するなり。

〔二七〕復た次に、其の六根に於て前に說ける所の〔二八〕五の寂靜の相、寂靜ならざるが故に當に知るべし三種の苦果を攝受すと。謂く〔一〕現法の中にて根の增上の雜染に依りて住し、諸の不善の現行を因と爲るに由りて或は他所に於いて其の退劣を成じ、或は譏呵せられ、或は殺害せられ、是の如き等の現法の衆苦を受け、〔二〕又當來の生老病死の種種なる諸苦を受け、〔三〕又當來に先の數習より引かるる〔二九〕等流〔果〕に由りて諸根を護らず諸の雜染を受くるが故に亦た名づけて苦と爲す。此れと相違するは其の六根に於いて五種の寂靜相あるに由るが故に、當に知るべし三苦の滅せる果を攝受すと。

〔三〇〕復た次に、略して二種の世俗の梵志の實に〔三一〕福田に非ざるに增上慢を懷き自ら福田なりと謂ひ、

〔二六〕魔羅（Māra）は略して魔と云ふ、能奪命、障礙、擾亂、破壞など譯す。
〔二七〕引發を解す。
〔二八〕五の寂靜の相とは六根の(一)自性(二)因緣(三)雜染の因緣(四)清淨(五)清淨の因緣なり。又曰く(一)善調(二)善覆(三)善守(四)善護(五)善修定なりと。
〔二九〕等流果。因と等同なる果、卽ち親因緣の引く結果なり。
〔三〇〕應に供養すべからざるを解す。
〔三一〕福田とは布施を植ゑて福を收穫する處の意にして、出家者に布施し供養すれば福德を得るが故に、出家者を福田と云ふ。

自ら我は是れ眞實の福田なりと稱するあり、當に知るべし非實なる福田の性及び相を成就するが故に應に供養すべからずと。一には他より得る所の利養恭敬の現前せんに猛利に耽著し、諸根饕餮にして性と爲り躁擾にして詐つて現前に離欲の行を示す。二には家產を攝受し、親屬と雜居し、鄙穢にして専ら自ら身を修し、凡そ行ずる所の行、既に自利に非ず亦た利他に非ず、尸羅の正法正行を遠離し、能く善趣に住する善行を遠離し、能く涅槃に住する妙行を遠離す。當に知るべし彼は一切の愚夫異生の類と差別あること無しと。正法に住する者は此れと相違す、當に知るべし是れを勝義なる梵志と名づくと。

〔三二〕復た次に、此の正法の外に諸の沙門婆羅門等あり、諸の弟子の爲めに法を宣說する時多分詰責する勝利を求め、及び他難を免脫する勝利を求めんが爲めにす。當に知るべし是の如く法を宣說する者は第一義に就いて義無く利無く、自らの利益に非ず他を利益するに非ずと。諸佛如來諸の弟子の爲めに正法を宣說したまふは唯だ明及び解脫の一果の勝利を證得せんが爲めなり。當に知るべし是の如く正法を說く者は大果大利自利利他圓滿せざること無く、三世に行じて忘失すること無く、最勝なる義に住するが故に、三種の所緣の境差別するが故に說いて〔三三〕三明と名づくと。若くは心解脫、若くは慧解脫を皆な解脫と名づく。是れ愛無明の根本雜染の勝れたる對治なるが故に未だ得ざりし明と解脫とを得と爲

【三二】明解脫を明す。明とは三明なり文の如し。
【三三】三明とは㈠宿命明㈡天眼明㈢漏盡明なり。第六十九卷參照。

す。當に知るべし略して〔二四〕四種の修道ありと、謂く根を修するが故に能く正に身を修す。身を修して引く所の善行を修するが故に能く正に戒を修す。戒を修して引く所の［四］念住［七］覺支を無倒に修するが故に能く心慧を修す。此の中根を修するに復た三種あり、一には世間修、二には有學修、三には無學修なり。若し思擇力を所依止と爲し、可愛不可愛の境と不如理なる相とを取ると雖も、而も煩惱の諸纏を發起せず、設令ひ暫らく起すとも尋いで復た除遣するは是れ世間修なり。若し聖諦に於いて已に現觀を得るも、失念に由るが故に或は適意、或は不適意を生じ、或は二意を兼ね、而も心纏縛の堅住と爲らず、速に雜染に於いて能く解脱を得るは是れ有學修なり。若し卽ち此の心堅固に安住すれば、前の如く內に於いて隘迮あること無く、善く脱し善く修し、都べて一切下至失念無く、諸の可意不可意等に於いて發心し親近し、彼の有德を計して之に趣向す、是れを無學善淨に根を修すと名づく。當に知るべし戒を修し心を修し慧を修する三種も亦た爾なりと。此の中〔二五〕最初は是れ〔二六〕初めの修根の引く所なり、〔二七〕第二は是れ〔二八〕第二の引く所なり、〔二九〕第三は是れ〔三〇〕第三の引く所なり。修戒修心修慧相望するに〔三一〕各三種の引く所あるも當に知るべし亦た爾なりと。此の

【二四】四種の修道とは(一)根を修す(二)戒を修す(三)心を修す(四)慧を修す、文の如く知るべし。

【二五】最初とは三學の中の第一戒學なり。

【二六】初めの修根。根を修するは四種の修道の第一なり。

【二七】第二とは三學の中の第二心學なり。

【二八】第二。此の第二は四種の修道の中の第二戒を修するを云ふ。

【二九】第三とは三學の中の第三慧學なり。

【三〇】第三。此の第三は四種の修道の中の第三心を修するを云ふ。

【三一】各三種の引く所とは(一)修

中可意と不可意との境界差別するが故に、恩あると怨あるとの有情差別するが故に、功徳と過失と相應する有情差別するが故に、所愛と非所愛との有情差別するが故に、當に知るべし一向に適意なると一向に不適意なると、適意不適意相雜するものと差別すと。可意と不可意との境界差別するが故なりとは、自ら境界の一向に可意なるあり、自ら境界の一向に不可意なるあり、自ら境界の其の類相雜り少分可意にして少分は不可意なるあり。是の如く有情には或は一向に恩あり、或は一向に怨あり、或は恩怨相雜る「あり」、或は一向に得あり、或は一向に失あり、或は得失倶に備はる「あり」。若くは有情に於いて愛して復た愛を生ずるは當に知るべし一向に是れ其の所愛なりと。若くは有情に於いて恚りて復た恚を生ずるは當に知るべし一向に其の所愛に非ずと。若くは有情に於いて愛し已つて恚を生じ、或は有情に於いて恚り已つて愛を生ずるは當に知るべし是れを所愛非所愛と名づくと。是の如き等の差別の因緣に由り、適意等の三に其の差別あり。又惡行に於いて現法に有る所の過患を觀じ、當來に有る所の過患を隨觀す、是の故に遠離して妙行を修習す。若くは六處に於て一切門に由りて皆な誹毀せらるるは是れを現法に有る所の過患と名づく。是の因緣に由りて惡趣に墮す、是れを當來所有の過患と名づく。此の中他の爲めに誹毀せらるるとは、謂く外道及び餘の世間の有る聰敏なる者其の鄙惡なる名

戒の三種とは、戒は是れ心の所引、心は是れ慧の所引。慧は是れ修根の所引、(二)修心の三種とは、心は是れ慧の所引、慧は是れ戒の所引、戒は是れ修根の所引。(三)修慧の三種とは、慧は是れ戒の所引、戒は是れ心の所引、心は是れ修根の所引なり。

稱聲頌を聞けるが爲めに咸く共に誹毀す、當に知るべし其の餘は卽ち說く所の如しと。又此の中〔四〕念住を修すと言ふは、謂く〔四〕念〔住七〕覺分の創始て發起するは異生地に在り、數修習するは有學地に在り、修圓滿するは無學地に在り。覺分を修習して未だ斷界を得ざるに其の斷界に於いて正に希求する時を遠離に依ると名づけ、未だ無欲界を得ざるに無欲界に於いて正に希求する時を離欲に依ると名づけ、未だ滅界を得ざるに其の滅界に於いて正に希求する時を滅に依ると名づけ、下劣を棄捨して覺分を修するが故に、勝妙を廻向して覺分を修するが故に棄捨し廻向すと名づく。又諸の苾芻諸根を守護して慚あり愧あり、是の因緣に由りて惡行を恥ぢ、妙行を修習す。妙行を修するが故に變悔すること無し。變悔無きが故に歡喜を發生す。此れを先と爲るが故に心正定を得。心正定なるが故に能く見ること如實なり。如實なるが故に明及び解脫皆な悉く圓滿す。當に知るべし是れを修行の次第と名づくと。

【三三】修を解す。

〔三三〕復た次に、一の沙門若くは婆羅門あり、自ら既に善く諸根を修むること能はず、而も不如理に他の爲めに善く根を修むる法を施設す、唯だ所有境界を棄背するを見て諸根を護ると名づく。然も其れ自ら諸の弟子衆に於いて深く染著を生じ、一分は愛を起し、一分は憎を生ず、謂く其の敎に於いて順と逆との因緣に〔由りて〕適と不適との意常に現行するが故に此の微細なる自己の雜染に於いて慧を以て如實に悟入すること能はず、而も自ら能く善く諸根を修むと謂つて增上慢を起し、諸有る是の

如き見に隨順する者は彼れ根をして諸の境界を離れしめ、獨り空閑に處すと雖も而も彼の境を縁じて種種なる尋思の雜染を發起し、然も智慧として自ら悟入すること無し、是れを亦た善く諸根を修むと名づけず。又亦た善く根を修むることを爲さざるが故に正行を勤修し、但だ他の言を信じて邪なる勝解及び邪慢を起す。諸佛如來の諸の弟子の爲めに如理に煩惱の斷を施設したまふが故に善く根を修むと名づく、唯だ一向に諸の境界に背くには非ず。又諸の如來は其の〔三三〕三種の不共の念住に於いて善く其の心を住するが故に諸の弟子衆に染著せず、正行の衆に於いては悅意を現行し、邪行の衆に於いては不悅意を行ず、此に由りて生ずる所の貪欲の雜染、瞋恚の雜染は都べて所有無し。是の因緣に由りて弟子と等しく煩惱を斷ずと雖も而も無上に善く諸根を修むと名づく。又此の根は五品の衆に依りて差別あるが故に當に知るべし亦た〔三四〕五轉の差別ありと。謂く佛世尊に（一）或は弟子の一向に正行にして亦〔三五〕畢竟するあり、（二）或は弟子の一向に放逸にして亦畢竟するあり、（三）或は弟子の正行を修行するも而も畢竟せざるあり、（四）或は弟子の邪行を行ずるも而も畢竟せざるあり、（五）或は弟子の多數の品類一行は正行、一行は放逸、一行の一分或時は放逸、或時は不放逸なるあり、是の如きを名けて第五

【三三】三種の不共の念住。（一）自性念住、これ身受心法の四念住の自性なり、慧及び念を自性念住と云ふ、（二）相雜念住、慧及び念の倶有の心心所法を云ふ、心心所法は慧及び念と倶有にして相雜るが故なり、（三）所緣念住、慧及び念の所緣の身受心法を云ふ。此三念住は如來の不共の念住なり。

【三四】五轉の差別とは五品の衆に對する佛意の起る差別なり、下文委出。

【三五】畢竟すとは終生相續するを云ふ。

品の衆と爲す。此の中如來可意と稱するは、謂く諸の弟子善說の法毘奈耶の中に於いて諸根を修めて圓滿することを得んが爲めに正行を修行するなり。又一類の不可意なる者あり、謂く邪行を行じ或は修行せざるなり。是の故に如來第一の衆生を觀ては悅意を起したまひ、第二の衆生を觀ては悅意したまはず、第三の衆生を觀ては悅意を起したまひ、［或は］不悅意を生じたまひ、第四の衆生を觀ては悅意したまはず［或は］悅意を生起したまひ、第五の衆生を觀ては悅意を起し不悅意を生じ、亦た復た悅不悅意を生起したまふ。如來は復た此の如き五衆に［於て］是の如き五轉の差別の悅不悅意を發起したまふと雖も、然も諸の如來は終に彼の愛恚行の相の爲めに染汙せられず、諸の煩惱並に其の習氣永く離繫するに由るが故に、善く根を修むるが故なり。是の故に如來一切の煩惱並に習［氣］永へに斷ずるを所依止と爲して能く善く念に住し、弟子衆に於いて諸の雜染無きを說いて五轉に無上に根を修むと名づく。又是の如き一切の五轉に於いて其の所應に隨つて當に正に三種の對治を思惟すべし、一には無常想、二には慈心、三には無想定なり。是の如き三種其の（三六）所應に隨つて當に其の相を知るべし。又佛世尊と所作已に辨せる無學の弟子とを已に根を修むと名く、彼れ長夜に涅槃を樂むに由るが故に前の如き諸の有情數の境相現前して或は純ら可愛なる、或は純ら非愛なる、或は多雜類の愛非愛に通ずるに遇ふと雖も、貪瞋癡を永へに

【三六】正行を行ずる衆生に對しては無常想を以て貪愛を起さず、邪行を行ずる衆生に對しては慈心を以て瞋恚を起さず、正行或は邪行を行ずる衆に對しては無想定を以て愛恚を行ぜず、其の宜しきに隨ふ。

遠離するに由るが故に、心解脱及び慧解脱の增上力に由るが故に、即ち無相に由り心をして彼に於いて速疾に棄捨せしめ、意樂に由るが故に諸の境界に於いて厭逆の想を起す。又涅槃に於いて寂靜の德を見、是の如く速に能く（三七）捨に安住す。此の因緣に由りて一刹那の頃も失念して作す所の雜染汙心も亦た起ることを得ず。當に知るべし此に齊りて善く修習するが故に善く根を修すと名づくと。若くは諸の有學は未だ速疾に捨に安住すること能はず、餘の煩惱ありて彼れに熏じて相續して雜穢を成ずるが故なり。又一切の（三八）三轉の境の中に於いて增惡して起す所の諸の煩惱の故に現行の煩惱に逼迫せらるる時則ち能く方便して厭逆の想及び過患の想に住す。是の如く修行して能く根を修めて速に圓滿することを得せしめむ、是の故に彼を說いて正行者と名づく。是の如く當に知るべし善說の法毗奈耶の中に於いて大師の美妙なる諸の弟子衆は所得の義を得て能く正行を修すと。

（三九）復た次に、無我論師に略して三種の正しき所作の事あり。何等をか三と爲すや。謂く苦集諦の所攝の行の自相共相に於いて應に正に顯了に無我を安立すべし。當に知るべし此の中各各別多衆の性を顯はすが故に（四〇）自相を顯了す、生滅相似の性を開示するが故に（四一）共相を顯了す、是れを第一の正しき所作の事と名づく。復た無我に於いて唯だ因行のみあり、其の所有

【三七】捨とは平等なり。
【三八】三轉の境とは前の五品衆を（一）一向正行者（二）一向邪行者（三）正邪俱行者の三人に略せるなり。
【三九】無我論を解す。
【四〇】自相とは個々の物の個有獨立の相なり、物それ自身のこと。
【四一】共相とは諸法の通有性共通性のこと、抽象的の概念是れなり。

の如く雜染淸淨をば如實に顯了す。當に知るべし此の中三種の受緣に於いて三種の煩惱隨眠を生じ、未だ永へに斷ずること能はずと。（一）其の見道に於いては我見の隨眠をば未だ除遣すること能はず、（二）其の修道に於いては我慢の隨眠をば未だ除遣すること能はず、（三）見慢品に於いては能く無明を起し亦た未だ永へに斷せず、未だ彼の〔能〕對治の明を生起すること能はず、是の故に苦の邊際を作すこと能はず、是の如きを名づけて雜染を顯示すと爲す。此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ淸淨を顯示するなりと、是れを第二の正しき所作の事と名づく。復た諸行に於いて我を增益する薩迦耶見を斷じ、能く實の無我の正見を取るに依りて淸淨相應の如く實に此の無我の見を顯了し、異生の位に在りて能く正に（四二）聖諦現觀を攝受す。又能く諸聖の慧眼を證得し、有學の位に在りて能く（四三）上位の盡無生智を得、無學の位に在りて能く一切の〔有〕學と無學とをして見修所斷の所有煩惱を餘す無く永へに斷せしむ、是の故に當に知るべし此の無我の見を能く淸淨ならしむるが故に應に顯了すべしと、是れを第三の正しき所作の事と名づく。

（四四）復た次に、其の世間の正見多聞を成就せるも、定ならずして正法に住する者と、卽ち此の世間の正見多聞を成就し、定を得て正法に住する者とに於いて當に知るべし略して五種の殊勝なる正しき加行の果の稱讚する利益ありと。何等をか五と爲すや。謂く（四五）彼の第一の正法に住する者は

【四二】聖諦現觀。聖諦とは眞如。眞如を直觀するを聖諦現觀と云ふ。

【四三】上位とは無學位なり。

【四四】定を解す。

【四五】彼の第一の正法に住する者とは、正見多聞を成就せる

先づ其の心に未だ定を得ざるが故に奢摩他支の或未だ清淨ならず、亦た未だ鮮白ならず、卽ち（四六）此の第二の正法に住する者は心に定を得るが故に清淨鮮白なり、當に知るべし是れを第一の殊勝なる正しき加行の果の稱讃する利益と名づくと。又後の第一の心に未だ定を得ざる補特伽羅は一切

も定ならずして正法に住する者を云ふ。

【四六】此の第二の正法に住する者とは正見多聞を成就し定を得て正法に住する者を云ふ。

の受幷に其の所依並に其の所緣幷に其の助伴並に其の隨轉に於いて如實に知らず、知らざるに由るが故に便ち三種の無智を因と爲る過患の爲めに觸せらる。何等をか三と爲す。一には受の雜染の作す所の過患、二には世の雜染の作す所の過患、三には現法後法の雜染の作す所の過患なり。當に知るべし此の中受の雜染の作す所の過患とは、謂く愚癡の者其の樂受並に彼の隨轉並に隨染する所に於いて貪愛の縛あり、苦受等に於いて瞋恚の縛あり、其の不苦不樂受等に於いて愚癡の縛及び隨眠の縛あり、愚癡の隨眠する所あるに由るが故なり。世の雜染の作す所の過患とは、謂く愚癡の者は現在世に於いて貪染の縛あり、過去世に於いて顧戀の縛あり、未來世に於いて繫心の縛あり。現法後法の雜染の作す所の過患とは、謂く彼の是の如き雜染心の者は世に於いて受に於いて雜染あるが故に便ち能く長く後有を感ずる業を生じ、此に由り後有の諸蘊を增益し、當に生ずることを得せしめ、又能く所有貪愛を增長す。謂く後有の愛及び資財の愛なり、後有の愛の故に能く當來の所有の自體を生じ、資財の愛の故に追求する時に於いて極めて疲怠を生じ、若し境界を得れば便ち染惱を生じ、若し獲得せざれば

欲する所を遂げず、便ち自ら燒然たり、若し得已れば失うて便ち愁惱の爲めに損害せらる、是の如きを名づけて現法の過患と爲す。若し卽ち彼の[所]作及び增長に由り能く後有を感ずる諸の業煩惱の增上力の故に當來の生老死等の衆苦の差別を起す、是の如きを名づけて後法の過患と爲す。第二の心定なる補特伽羅は應に知るべし一切上と相違すと、當に知るべし是れを第二の殊勝と名づく、餘は前に說くが如しと。又彼の第一の補特伽羅は心未だ定ならざるが故に其の無智より作す所の過患に於いて若くは自にまれ若くは他にまれ如實に知らず、第二の心定なる補特伽羅は彼に於いて皆な能く如實に了知す、當に知るべし是れを第三の殊勝と名づく、餘は前に說くが如しと。又彼の第二の心に已に定を得たる補特伽羅は諸の過患に於いて如實に了知し、已に（四七）修地に入る、卽ち前に得たる所の無我と相應する所有の正見は此の修に由るが故に二時の中に於いて其の斷界及び無欲界と彼の一切の菩提分法とに依りて皆な共に圓滿す、初めの定を得ざる補特伽羅は心未だ定ならざるが故に彼の一切に於いて皆な未だ圓滿せず、當に知るべし是れを第四の殊勝と名づく、餘は前に說けるが如しと。又彼の第二の心に已に定を得たる補特伽羅は所有の多聞、毗鉢舍那の助伴の支分もて彼れ能く勝れたる三摩地を攝受し、能く淨く毗鉢舍那を修治し、是の因緣に由りて止觀の二種平等に雙び轉ず。心に未だ定を得ざる補特伽羅は應に知るべし多聞と彼とを俱に闕ぐ。是の如く世間の正見多聞を成ずるも、定ならずして正法に住する補特伽羅と、卽ち此の

【四七】修地とは修道なり。

世間の正見多聞を成就し、定を得て正法に住する補特伽羅とに於いて當に知るべし此の第五の殊勝なる正しき加行の果、稱讚する利益ありと。是の如く卽ち彼れ已に勝れたる奢摩他毘鉢舍那を獲得するに由り、(四八)斷界に依りて(四九)應に徧く知るべき者をば能く正しく徧く知り、(五〇)應に永へに斷ずべき者をば能く正しく永へに斷じ、(五一)應に作證すべき者をば能く正に作證し、(五二)應に修習すべき者をば能く正に修習し、無欲界に依りて彼の一切に於いて已に知り已に斷じ已に證し已に修し、(五三)所依の色及び(五四)能依の名に於いて正に知り已に知り、所依の無明及び能依の有愛に於いて正に斷じ已に斷じ、所依の明淨智及び能依の解脫に於いて煩惱斷じ正に證し已に證し、所依の奢摩他及び能依の毘鉢舍那に於いて正に修し已に修す。

(五五)復た次に、二の法見あり、一には有爲法見、二には有爲法見なり。有爲法見とは、謂く一あるが如き諦の依處及び諦の自性に於いて皆な如實に知るなり。云何んが名づけて諦の依處と爲る。謂く(五六)名色及び人天等の有情數の物なり。云何んが諦と爲す。謂く世俗諦及び勝義諦なり。云何んが世俗諦なる。謂く卽ち彼の諦の所依處に於いて假想して我或は(五七)有情乃至命者及び生者等を安

【四八】斷界とは煩惱を斷ずること。
【四九】應に徧く知るべき者とは苦諦のこと。
【五〇】應に永へに斷ずべき者とは集諦のこと。
【五一】應に作證すべき者とは滅諦のこと。
【五二】應に修習すべき者とは道諦のこと。
【五三】所依の色。色とは身なり。
【五四】能依の名。名とは心なり。
【五五】法見を解す。
【五六】名色とは心身なり。
【五七】有情、命者、生者等は我の異名なり

立し、又自ら稱して我が眼〔根〕色を見、乃至我が意〔根〕法を知ると言ひ、又言說を起す、謂く是の如き名乃至是の如き壽量邊際と、廣く說くこと前の如し。當に知るべし此の中唯だ假想あり、唯だ假に自稱するのみ、唯だ假に言說する所有の性相作用の差別を世俗諦と名づく。云何んが勝義諦なる。謂く即ち彼の諦の所依處に於いて無常の性あり、廣く說かば、乃至緣生の性あり、前に廣く說けるが如し、無常の性の如く苦性等あるも當に知るべし亦た爾なりと。若し是の如き世俗勝義諦の所依の處に於いて其の世俗諦をば如實に是れ世俗諦なりと了知し、其の勝義諦をば如實に是れ勝義諦なりと了知す、是の如きを名づけて有爲法見と爲す。若し有爲法見を成就することあれば苾芻は此に齊つて言說滿足す。云何んが名づけて無爲法見と爲すや。謂く即ち彼の諦の所依の處に於いて已に（五八）二種の諦の（五九）善巧を得たる者は此の善巧の增上力に由るが故に（六〇）一切の〔所〕依等の盡きたる涅槃に於いて深く寂靜を見、其の心趣入し、前に廣く說けるが如く乃至解脫す、是の如きを名づけて無爲法見と爲す。若し無爲法見を成就することあれば苾芻は此に齊つて言說滿足す。又此の法見をば、當に知るべし、三種の補特伽羅皆な成就することを得と。一には異生の法隨法行して已に定心を得、博識聰敏にして能く正理の如く諸法を觀察するもの、二には有學の已に（六一）諦迹を見たるもの、三には無學の諸漏永へに盡きた

【五八】二種の諦とは世俗諦と勝義諦なり。
【五九】善巧とは智なり。
【六〇】一切の所依等の盡きたる涅槃。所依とは所依の身心なり、身心都滅の無餘涅槃を云ふ。
【六一】諦迹とは諦道卽ち眞如の大道なり。

るものなり。

（六二）復た次に、若し人天の盛事を希求し、自ら誓願を發して梵行を行ずることあれば當に知るべし彼を人天を稱讃する二種の過患と爲すと。何等をか二と爲す。一には煩惱より生ずる所の衆苦、二には無常より生ずる所の衆苦なり。云何んが煩惱より生ずる所の衆苦なる。謂く人天に於いては境界の（六三）愛に住し、現在世に依るが故に境界の（六四）樂に住し、過去世に依るが故に境界の（六五）欣に住し、現在世に於いては過去の境に依り愛樂を生ずるが故に境界の（六六）喜に住し、未來世に於いては現在の境に依り愛樂を生ずるが故なり。若し是の如き三世の境の中に於いて染汙に住すれば當に知るべし彼れを稱讃する所欲に匱乏ある苦及び生老等の所有衆苦と爲す、是れを煩惱を生起して作す所の衆苦の過患と名づく。云何んが無常より作る所の衆苦なりや。謂く樂に順ずる處に背失することあるが故に變壞の苦を起し、苦に隨順する處現在前するが故に厭離の苦を起し、一切の自體終沒する時に於いて皆な滅壞するが故に滅壞の苦あり、當に知るべし是れを三種の無常より作る所の衆苦と名づくと。此の中如來は是の如き二種の過患を超過して一向に樂に住したまふ、即ち此の樂に於いて應に如實に、此れに由るが故に樂なりと知り、復た應に如實に樂の方便を知りたまふ。云何が樂と爲す。謂く一切の境と相應するもの永へに盡きたる無上安隱、即ち有餘依般涅槃界な

【六二】苦を解す。
【六三】愛。阿含經の四阿賴耶の第一。
【六四】樂。同上第二。
【六五】欣。同上第三。
【六六】喜。同上第四。

り。云何んが方便なる、謂く前に說けるが如く、(六七)五種の受に於いて五轉の如實なる妙智を發起するなり。若し諸の聲聞、大師の所證の人天の妙樂に超過せるを棄捨し、下劣なる人天の樂を希求すれば當に知るべし彼れ諸の智者の所に於いて多く毀辱を受け、亦た自らを欺誑すと。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(六八)『一住と涅槃に遠きと、略說と內の所證と、一切を辯ずると相を知ると、所學を捨つると業等と、空と隨行と恆住と、師弟の二の圓滿なり。』

(六九)二の因緣に由り當に知るべし名づけて第二住ありと爲すと、謂く(一)愛あるが故に、(二)第二の自體を生起せんと欲するが爲めに其の因を受習し、此の自體滅して第二の自體次に生起するが故なり。云何んが愛ありや。謂く諸の愛すべき所緣の境界將に現前することを得んとするに、最初に生起する染汙の欣悅を喜樂ありと名づく。此より已後乃至未だ(七〇)彼を得ず、多く住し作意し思惟す、設ひ復た已に得るも而も未だ受用せず、其の中間に於いて卽ち喜樂の增上力に由るが故に染〔汙〕の欣悅に住するを歡喜ありと名づく。受用する時に於いて多く貪愛を生ずるを染著ありと名づくるが故に愛

【六七】五種の受とは憂苦喜樂捨の五受なり。

【六八】此は總頌第四門多住等を解する別頌なり。此の中更に十四門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【六九】一住を解す。總頌の中には多住と云ひ、別頌の中には一住と云ふ、有愛を斷ずれば第二住なきが故に一住なり。有愛斷ぜざれば第二住乃至多住あり。

【七〇】彼とは愛すべき所緣の境界を云ふ。

ありと名づく。又未來に於いて希求を起すが故に、及び已に得たるものに於いて領納を生ずるが故に喜樂ありと名づけ、過去世に於いて隨ひ憶念するが故に歡喜ありと名づけ、已に獲得し正に受用する時に於いて貪愛を生ずるが故に染著ありと名づく、是の如きを名づけて第二の差別と爲す。云何んが第二の自體を生起するや。謂く喜樂等を集因と爲るが故に當來世に於いて生老〔苦〕を根として衆苦生起するなり、此と相違するは當に知るべし是れを第二住無しと名づくと。

（七一）復た次に、二種の法あり、更互に相違す、一には煩惱、二には涅槃なり。是の故に雜染法に安住し已つて、即ち便ち（七二）後有に隨順して轉ず、若し後有に於いて隨順し轉ずる時を當に知るべし說いて涅槃を去ること遠しと名づくと。復た六種の鄙碎の士夫補特伽羅の鄙碎の行相あり、一には性となり忿恚多し、二には所作思はず、三には他を逼惱するとを樂む、四には若し苦に觸せらるれば便ち不實にして麤惡なる語言を發す、五には或は眞實なるも能く（七三）無義を引く麤惡なる語言を引く、六には此に因つて展轉して無量なる差別の惡言を發起す、但だ詞を少くして喜足を生ずるのみに非ず。二の因縁に由りて諸の出家の者は力め勵みて行を受け、速疾に能く沙門の義利を證し、諸の未信者には淨信を生ぜしめ、其の已に信ぜる者をば倍々增長せしむ。何等をか二と爲す、一には忍辱、二には柔和なり。忍辱と言ふは、謂く他の怨に於いて終に返し報ゆると無きなり。柔和と言ふは、謂く心

【七一】涅槃に違きを解す。
【七二】後有とは次生、後生のこと。
【七三】無義とは無義利、利益なきを無義と云ふ。

に憤性無く他を惱まさざるなり。

（七四）復た次に、要を以て之を言はば如來は、略して二種の處所に依りて、（七五）無界敎を說きたまふ、一には有餘依涅槃界敎を說き、二には無餘依涅槃界敎を說きたまふ。若くは是の如く煩惱斷ずるに由るが故に斷を成就すと名づけ、補特伽羅煩惱を成ぜざれば卽ち是の如くなるに由り彼の果たる後有の衆苦に住せず、當に知るべし是れを有餘依涅槃界敎を說きたまふと名くと。若くは是の如くなるに由り煩惱の後有の苦果に住せず、卽ち是の如くなるに由り乃至壽盡き既に滅沒し已つて一切の餘依都べて所有無く、此の身に住せず、餘身に住せず、中有に住せず、一切の衆苦の邊際を證得す、當に知るべし是れを無餘依涅槃界敎を說きたまふと名づくと。略して三種の念力強き因あり、一には其の年少壯なるに由る、二には前生の串習に由る、三には現法の數習に由る。

（七六）復た次に、五種の相に由りて當に知るべし涅槃は是れ內證法なりと、謂く信を離るるが故に、乃至見の審察忍を離るるが故なり。（七七）前の如く應に知るべし。謂く現法の中にて內の各別の（七八）內外增上〔緣〕より生ずる所の雜染に於いて如實に（七九）有及び（八〇）非有を了知するなり。

【七四】略說を解す。

【七五】無界敎。界とは有漏煩惱の種子、此の種子を斷滅する敎を無界敎と云ふ。

【七六】內の所證を解す。內とは內心なり。

【七七】第八十四卷、第九十卷。

【七八】內外とは十二處卽ち內の六根と外の六境なり。

【七九】有とは雜染未だ斷ぜざるなり。

【八〇】非有とは雜染已に斷ぜるなり。

（八一）復た次に、三の因緣によりて諸佛の無上菩提を顯示す、一には一切の境を覺了するが故に、二には有及び非有の如實の事を覺了するが故に、三には染淨の二品の一切の法を覺了するが故なり。是の故に他のもの是の如き三處に於いて世尊に請問したてまつるなり。

（八二）復た次に、諸の有爲の法倶にありて轉ずる時心をして迷亂せしめ、能く相に於いて邪に取り分別せしむ。是の故に如來は諸の弟子の爲めに分別し開示して彼の相に於いて決定して悟入せしめたまふ。眞實の相を了知せんと欲するが爲めの故に、又自らに於いて欺誑すること無からんが爲めの故に、又他に於いて坦然として畏れ無く正に記別せんが爲めの故なり。

（八三）復た次に、諸の出家の者所學を棄捨する增上力の故に、當に知るべし境界を顧戀することを安立すと。又出家の者尸羅を毀犯する增上力の故に、當に知るべし、未だ出家せざる者の趣入することを棄背する心の株覆の事を安立すと。慙愧を遠離するが故に、一向に愛味するが故に、若し堅く所緣の境界を執取するを當に知るべし、彼れを最極なる愛味と名づくと。是の因緣に由りて、上品の諸善を修する業の中に於いて心の株杌と爲り、是れ調柔ならず堪能する義無し。又卽ち此の增上力に由るが故に諸の惡行を行じ、内懷に造る所の衆惡を隱匿するが故に其の覆を生ず。是の如き一切を略攝して一と爲し、說いて境に於ける最極なる愛味の

【八一】一切を辨ずるを解す。一切とは染淨の二品なり、文の如し。
【八二】相を知ることを解す。
【八三】所學を捨つることを解す。

心の株覆の事と名づく。

(八四)復た次に、若し諸根に於いて護ること無き行者は樂つて不正法を聽聞するに由るが故に、便ち無明觸より生起する所の染汙の作意を生ず。即ち此の作意の增上力の故に當來世の諸處に生起する所有の過患に於いて如實に知らず、如實に彼の過患を知らざるが故に便ち希求を起し、彼を希求するが故に彼の相應の業を造作し增長し、相應の業を造作し增長するが故に當來世に於いて六處生起す、是の如きを名づけて順次の道理と爲す。逆の次第をいはば、謂く彼の六處は業を以て因と爲し、業は愛を因と爲し、愛は復た彼の無明を用つて因と爲し、無明は復た正理の如くならざる作意を用つて因と爲し、不正なる作意は復た無明觸を用つて其の因と爲す。又此の中に於いて先に造れる所の業は是れ(八五)現法受の六處の(八六)因なり、現法の造業は是れ(八七)次の生受の六處の緣なり、或は是れ(八八)後受の六處の由藉なり、愛等業等も其の所應に隨つて當に知るべし亦た爾なりと。

(八九)復た次に、二の因緣に由りて後有生起す、一には後有「を招く」業、二には後有「を招く」愛なり。而るに但だ說いて諸の有情類は業に隨つて行ずとのみ言つて愛に隨ふと言はず。何となれば略して三

【八四】業を解す。

【八五】現法受とは順現報受なり。

【八六】因と次の緣と由藉との區別は但だ三時の別を表はさんが爲めに別に用ゐたるのみ。

【八七】次の生受とは順次生受なり。

【八八】後受とは順後次受なり。

【八九】頌の等の字を解す。

愛なり、一には(九〇)欲愛、二には(九一)色愛、三には(九二)無色愛なり。此の中欲愛は是れ不善なる者にして異熟〔果を招くと〕ありと雖も、然も若し惡不善の業を起さざれば終に惡趣の異熟〔果〕を與ふること能はず。若し欲界の愛は無明觸より生ずる所の諸受に於て希求を起す時、愛すべき境に於いて貪欲を發生し、憎むべき境に於いて瞋恚を發生し、迷ふべき境に於いて愚癡を發生す。此の三種の增上力に由るが故に不善業を行じ、此の業に由るが故に諸の惡趣に生ず、(九三)但だ彼の貪瞋癡の纏のみに由りて定んで惡趣に墮するには非ず、然も此の愛は造る所の業の異熟生ずる時に於いて能く助伴と爲る。又愛すべき境界を希求する(九四)增上力に由るが故に、善行を修行する身語意業此れを因と爲るに由りて善趣に生ずることを得。此の中諸の異熟果は但だ應に業のみを用つて(九五)引生因と爲すべし、(九六)染性の愛には非ず。又若し此の愛の色無色〔界〕繫なるは不善に非ずと雖も然も是れ染汙なり、一切皆な異熟果あるに非ず。又卽ち此の色無色愛に由りて愛ありと名づくるは、彼れ正法を聽聞する因に由るが故に其の欲界に於いて麤鄙の相を觀じ、(九七)明觸より生ずる所の世間の如理なる作意と相應する諸受を證得し、欲界の貪瞋癡等を調伏し、修して成

【九〇】欲愛とは欲界の生を招く貪愛。
【九一】色愛とは色界の生を招く貪愛。
【九二】無色愛とは無色界の生を招く貪愛。
【九三】煩惱は果の遠緣にして業はその近因なり、故に業にして始めて果を引く力あり、煩惱は助伴助緣となるのみ。
【九四】增上力とは增上緣の力なり。
【九五】引生因とは果を引生する直接因のこと。
【九六】染性の愛は果の間接因にして直接因には非す。
【九七】明觸とは無明觸の反對、聞思と相應する觸なり、又曰く無漏慧と相應する觸なり。

ずる所の善有漏の業を造り、此の間に於いて彼の業を造るに由るが故に當に彼に生ずることを得べし、彼の染汙性の愛には由らず。然も卽ち此の愛より造る所の業に於いて異熟生ずる時能く助伴と爲る。是の故に但だ諸の有情類は業に隨つて行ずとのみ說いて、愛に隨ふと言はざるなり。

〔九八〕復た次に、〔九九〕外事の中に於いて世間の假名の增上力の故に亦た果あり及び受者ありと說く。彼れ或時は空なること世に現に得可く、或時は空ならず。果と〔一〇〇〕受者との如く因と〔一〇一〕作者も當に知るべし亦た爾なりと。是の如きを名づけて世俗諦空と爲す、勝義空には非ず。若し恆時に一切の諸行は唯だ因果のみあり、都べて受者及與び作者無しと說くは當に知るべし是れを勝義諦空と名づくと。應に知るべし此の空に復た七種あり、一には後際空、二には前際空、三には中際空、四には常空、五には我空、六には受者空、七には作者空なり。〔一〇二〕當に知るべし此の中諸行の未來世に於ける實に行聚の自性の安立ありて、諸行生ずる時彼より來ることあること無し、若し是の事あらば彼れ應に生ずべからず。未來世に於いて諸行の自性已に實有なるが故なりと。又應に無常として得可きことあるべからず、既に得可きことあれば是の故に當に知るべし諸行生ずる時從來する所無なしと。本無く今有る是れを後際空と名づく。又諸行は過去世に於いて實の行聚

【九八】空を解す。
【九九】外事とは外境なり。
【一〇〇】受者とは果を受くる主體、數論外道の立つる受者の如きを云ふ。
【一〇一】作者とは前の受者に對するもの、萬物を創造し萬物の因となるもの、數論外道の立つる作者の如きを云ふ。
【一〇二】以下三際の空を說くは薩婆多部の三世實有說を破するなり。

の自性の安立あり已に生じ已に滅し、諸行(一〇三)彼に往いて積集して住すること無し。若し此の事あらば諸行に滅ありと施設すべからず、過去の行聚の自性儼然として常に安住するが故なり、若し滅あること無くんば彼の無常の性をば應に知る可らざるべし。〔然かるに〕既にあること知んぬべし、是の故に諸行正に滅する時に於いて都べて往く所に積集して住すること無し、有り已つて散滅するに(一〇四)餘因を待たず、自然に壞滅す、是れを前際空と名づく。又刹那に生滅する行の中に於いて唯だ諸行の暫時得可きあるのみ、其の中都べて餘行の得可きこと無く、亦た別物無し、是れを中際空と名づく。(一〇五)當に知るべし亦た是れ常空我空なりと。(一〇六)無我なるを以ての故に果性の諸行空にして受者無く、因性の業行空にして作者無し、是の如きを名づけて受者、作者の二種皆な空なりと爲す、作者、受者所有無きが故なり。唯だ諸行あり、前生に於いて滅し、唯だ諸行あり、後生に於いて生ず、中に於いて都べて(一〇七)前生を捨つる者後生を取る者無し、是の故に說いて、唯だ諸法の衆緣により生ずるあつて能く諸法を生ずと言ふ。又一切の法は都べて(一〇八)作用無く、(一〇九)少かに法ありて能く少法を生ずること無し、是の故に說いて此れ有るが故に彼れ有なり、此れ生ずるが故に彼れ生ずと言

【一〇三】彼とは過去の行聚の自性を云ふ。

【一〇四】餘因を待たず。滅法は因を待たず。

【一〇五】常空我空を說くは通じて外道の我常論を破するなり。

【一〇六】受者空作者空を說くは數論外道の說を破するなり。

【一〇七】前生乃至取る者とは我を貫談す。

【一〇八】作用とは我の作用なり。

【一〇九】少法として實有の法ありて實有の法を生ずべきにあらず、少法とは實有なりとする我を云ふ。

ふ。(二〇)但だ唯だ彼の因果の法の中に於いて世俗諦に依り作用を假立し、此の法能く彼の法を生ずと宣說するなり。

(二一)復た次に、五種の相に由りて(一)能く喜に順ずる所緣の境界に於いて隨順して行じ(二)深心に喜樂して、正理の如くならずして其の相を執取して貪欲を發生し(三)多く尋思を起し(四)方便求覓し(五)此に因りて廣く福非福の行を行ず。能く喜に順ずる所緣の境界の如く、憂に順じ捨に順ずる所緣の境界も其の所應の如く當に知るべし亦爾なりと。其の差別をいはば能く憂に順ずる所緣の境界に於いては隨順して行じ、深心に厭惡して瞋恚を發生し、能く捨に順ずる所緣の境界に於いては隨順し行じ、深心に愚昧にして愚癡を發生す、餘は前に說けるが如し。

(二二)復た次に、諸の苾芻あり、阿羅漢[果]を證し諸漏永へに盡き、一切の境に於いて隨順して行じ、恆時に堪へず、乃至失念して諸の煩惱を生ず、是の故に恆に雜染なき住に住す、是の因緣に由りて說いて恆住と名づく。彼の行に隨ふ品の若くは喜、若くは憂、若くは欣、若くは戚は、諸の阿羅漢には皆な所有無し、乃至善の中に亦た是の事無し。又彼の恆住は極めて行じ難きが故に、及び罪無きが故に名づけて最勝なりと爲し、能く成就する者極めて得難きが故に說いて(二三)第一眞實なる福田と名づく、應に當に請し奉るべし。乃至廣く說くこと當に知るべし前の攝異門

【二〇】因果相續の中に於て假我を立つるのみ、是れ佛教の正說なり。
【二一】際行を解す。
【二二】恆住を解す。
【二三】布施供養すべき第一眞實なる福田。

分の如しと。

〔二四〕復た次に、善說の法毘奈耶の中に於いて應に知るべし大師及び弟子衆各二相に由りて其の德圓滿すと。云何んが二相に應に大師の其の德圓滿すと知るべきや。謂く利他の行に依り諸の所有受皆な是れ苦なりと悟入せしめんと欲するが故に受の所依を說き、彼の因緣を說き、能く雜染する所有の隨行を說き、所對治及び能對治の師句の安立を說き、一切種の究竟の出離を說く、是れを第一の師德の圓滿と名づく。又自利の行に依り不共の〔二五〕三種の念住、雜染無き住を宣說す、是れを第二の師德の圓滿と名づく。云何んが二相に應に弟子の其の德圓滿すと知るべきや。謂く如來の無量なる法敎に於いて、能く了知し已つて未だ聞の彼岸に到ることを得ず、若し以て其の彼岸に到ることを得るは要ず〔二六〕法隨法行を修行し、出離を證得するが爲めなり、是れを受持するが爲めには非ず、了知し已つて理の如く法隨法行を修行するなり、但だ隨說の音聲語言を以て究竟と爲るに非ず、是れを第一の諸の弟子衆の其の德圓滿すと名づく。此の如く法隨法行を修行し、下劣を以て喜足を生ぜず、要ず當に賢善なる丈夫の所趣の地に往趣すべく、定んで當に彼の應に得べき所を獲得すべし、是れを第二の諸弟子衆の其の德圓滿すと名づく。

〔二七〕復た次に、善說の法毘奈耶の中に於いて復た三相に由りて應に大師の其の德圓滿すと知るべく、

【二四】師弟の二の圓滿を解する前半なり。
【二五】三種の念住。此卷の脚註前に出づ。
【二六】法隨法行とは法に隨つて法を行ずること。
【二七】師弟の二の圓滿を解する後半なり。

又二相に由りて應に弟子の其の德圓滿すと知るべし。云何んが三相にて應に大師の其の德圓滿すと知るべきや。謂く佛世尊諸弟子の爲めに最初に〔二八〕二邊を遠離する中道の正行を施設したまふ、是れを第一の師德の圓滿と名づく。又聖教に於いて未だ信を生せざる者、毀犯ある者をば正しき方便を以て聖教に入り諸の毀犯を離れしむ、是れを第二の師德の圓滿と名づく。又聖教に於いて已に入ることを得たる者をば四の法攝に由りて正に之を攝受す、是れを第三の師德の圓滿と名づく。云何んが名づけて四種の法攝と爲るや。一には秘密に於いて其の如法閑靜なる教授を以て之に教授して非法を以てせず。二には違犯に於いて其の如法苦切なる語言を以て現前に呵擯す、如法ならざるには非ず。三には尋思の〔所〕依止たる耽嗜に於いて敎へて內に於いて寂靜を勤修せしむ。四には時時に正法を聽聞し、常に懈廢すること無からしめ、又相似の正法を遠離せしめ、及び正行を棄捨することを對治せしむ。當に知るべし卽ち是れ其の秘密に於いて能く如法閑靜なる教授を引き、實の毀犯に於いて若し正に了知すれば、要ず當に呵擯すべく、方に調伏する者をば如法なる言を以て現前に呵擯して心に雜染無く、尋思する者に於いては方便して其をして決了することを得易からしめ、諸の五妙欲に流蕩する者に於いては其の過患を示して厭離を生じ、漸次に修學して乃至第四靜慮に證入せしめ、所有尋思の〔所〕依止たる躭嗜方に能く內に於いて究竟して寂靜にして、惱無からしむるに由りて、他をして攝取せしむ、當に知るべし是れを時時の間に於いて正

【二八】二邊とは有空の二邊、斷常の二邊なり。

法を聽聞して常に懈廢すること無しと名づくと。云何んが二相にて諸弟子衆の其の德圓滿するや。謂く諸の弟子最初に大師の所見を忍受す、謂く諸法の中の空無我の見なり。是の因緣に由りて諸法の中に於いて我を增益し、邪なる執著を起さず、亦た世俗の道理を毀壞せず。勝れたる意樂の故に隨從する所無く、言說に隨ふが故に亦た遠離せず。是れを第一の諸の弟子衆の其の德圓滿すと名づく。又彼れ〔所〕見に於いて既に忍受し已つて能く正に法隨法行を修行し、四の法攝に由りて攝受せらるる時若し彼の諸法に苦あり害あらば、如實に了知して能く速に斷滅す。若し彼の諸法に苦無く害無ければ如實に了知して能く速に作證す。是れを第二の諸の弟子衆の其の德圓滿すと名づく。是の如く大師及び弟子衆の攝受する所の諸佛の聖教は當に知るべし一向に染〔汙〕無く淸淨にして、諸の聰慧なる者の歸趣する所なりと。

卷の第九十三

攝事分中契經事緣起食諦界擇攝第三の一

(一)是の如く已に處の擇攝を說けり、(二)緣起、食、諦、界の擇攝をば我れ今當に說くべし、總の嗢柁南に曰く、

(三)『立等と、二諦等と、觸を以つて緣と爲る等と、滅ある等と、食等とにして、如理等を最後とす。』

別の嗢柁南に曰く、

(四)『立と苦聚と諦觀と、聖敎を攝すると微智と、思量の際と觀察と、上慢とにして最深なるを後とす。』

略して三相に由りて應に[十二]緣起の差別を建立するとを知るべし、一には(五)前際より中際生ずることを得、二には(六)中際より後際生ずる

【一】上來、契經事に四釋ある中前の二釋訖る。以下第三に緣起、食、諦、界の擇攝を明す、四卷あり。

【二】緣起等。緣起とは十二緣起、食とは四食、諦とは四諦、界とは十八界なり。

【三】此の總三に六門を列す、(一)立等(二)二諦等(三)觸を以て緣と爲る等(四)滅ある等、此の四門は緣起を解す、(五)食等、此一門は食を解す、(六)如理等、此一門は諦を解す、第九十六卷に半頌を以て界を解す。

【四】此は總頌第一門立等を解する別頌なり。此の中更に十門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【五】前際過去の十因卽ち無明乃至有より中際現在の二果卽ち生老死を生す、因果合して十二緣起なり。

【六】中際現在の十因卽ち無明乃至有より後際未來の二果卽

ことを得、三には〔七〕中際に於いて生じ已つて隨轉し、及び淸淨に趣く。此の中云何んが其の前際より中際生ずることを得、及び中際に於いて生じ已つて隨轉するや。謂く一あるが如き〔八〕宿し聰慧に非ざる無明を緣と爲して罪福不動の身語意の〔二〕業を造作し增長し、此を緣と爲るに由り業に隨つて行識は乃至命終まで隨轉して絶えず、能く後世に續生する識の因と爲り、是の如く展轉して內外の愛ありて識果を生ずる時能く助伴と爲り、現前して起り、〔九〕既に命終し已つて前際の因に由りて現在世に於いて自體生ずることを得、生じ已つて漸次に母の腹中に於いて〔一〇〕因識を緣と爲して續いて〔一一〕果識を生じ、隨轉して絶えず、所有〔一二〕羯羅藍等の名色の分位を任持し、後後殊勝にして、始め胎藏より乃ち衰老に至る。〔一三〕又即ち此の識當に續生すべき時能く生を感ずる〔善或は惡の〕業〔一四〕異熟果を與ふ。〔一五〕異熟生の識は復た名色に依り相續して轉ず、謂く眼等の六根に依りて轉ずるが故に是に由りて說いて名色識に緣たりと言ふ。倶生の五根を說いて名づけて色と爲

ち生老死を生ず、因果合して十二緣起なり。

【七】現在に於て或は更に業を造りて未來に流轉し或は惑業を斷除して淸淨に趣く。

【八】前際の十因を辨す。

【九】中際生ずるを辨す。

【一〇】因識とは過去の識の種子なり。

【一一】果識とは現在の識の種子なり。

【一二】羯羅藍とは胎內五位の第一位托胎初七日の間なり。

【一三】中際に於て生じ已つて隨轉するを辨す。

【一四】異熟果とは善或は惡の業因より異りて熟したる無記の果なり、眞實理門八識說に從へば阿賴耶識及び無記の前六識を云ふ、今隨轉理門六識說に從つて無記の六識を異熟果と云ふ。

【一五】異熟生とは眞異熟(阿賴耶識)より生じたるもの、眞實理門に從へば阿賴耶識及び無記の前六識を云ふ、今隨轉理門に從つて無記の六識を異熟生と云ふ。

し、(二六)無間滅等を說いて名づけて名と爲す。其の所應に隨つて能く六識の與に所依止と作る、識彼れに依るが故に乃至命終まで數數隨轉す。又五色根の根は〔四〕大種に依り、根處の〔四〕大種所生の諸色及び諸餘の名は彼れ所有根等を執持するに由つて相續に墮在して流轉して絕えず、此の〔名色の〕二を總じて隨轉の依止と名づく。是れに由るが故に識は名色に緣たり、名色は識に緣たり、現在世に於いて猶ほし(二七)束蘆の相依るが如くにして轉ずと言ふ、乃至壽住する是の如きを名づけて其の前際より中際緣起して諸行生ずることを得と爲し、其の中際に於いて生じ已つて隨轉す。當に知るべし此の中胎生のものに依りて轉ずる次第を說く、卵生濕生〔に於ては〕母腹に在るを除くと。餘の差別の有色の有情あり、欲色界に在りて化生を受くる者は初生の時に於て諸根圓滿し、餘と差別す。無色界に在る諸の有情類の識は名及び色の種子に依り、名及び色の種〔子〕は識に依つて轉ず。彼の識の中に色の種〔子〕あるに由るが故に色間斷すと雖も後當に更に生ずべし、是の如きを名づけて、此の中の差別と爲す。福業に由るが故に欲界の人天の兩趣に生じ、罪業に由るが故に〔欲界の四〕惡趣の中に生じ、不動業に由りて色無色〔界〕に生ず。云何んが名づけて、其の中際より後際緣起して諸行生ずることを得と爲し、云何んが生せず、生せざるに由るが故に清淨を證得するや。謂はく彼れ是の如く中際に於いて補特伽羅を生じ、先業より得る所の二果を領受す、一には

【二六】無間滅とは前念に過去に滅せる等無間依の意根なり。

【二七】束蘆とは三本の蘆を三方より立てかくるに互に鼎立的關係を保ちて三本共倒れざるを云ふ。

〔一八〕内の異熟果を領受し、二には境界より生ずる所の受の增上果を領受す。彼れ不正の法を聽聞するに由るが故に、或は先世の串習力に由るが故に二種の果に於いて愚癡を發起す。彼れ内の異熟果の中に愚癡あるに由るが故に能く如實に當來後有の生苦を了知せず。此の前際後際の無明の增上力に由るが故に前の如く諸行を造作し增長す。此の新業に由りて識を熏變するが故に現法の中に於いて業に隨つて行ず。是の如く無明を以て緣と爲るが故に諸行生ずることを得、行を緣と爲るが故に識をして轉變せしむ。當に知るべし此の識は現法の中に於いては但だ是れ因性にして當に生ずべき諸識の果を攝受するが故に一切に就いて相續するに約して名と爲し六識身と說く。又卽ち此の識は當來後有の名色の種子の隨逐する所なり。名色の種子は復た當來後有の六處の種子と爲りて隨逐し、六處の種子は復た當來後有の諸觸の種子と爲りて隨逐し此の觸の種子は復た當來後有の諸受の種子と爲りて隨逐す。當に知るべし是れを其の中際に於ける後有の引因は識を先と爲し、受を最後と爲るに由ると名づくと、徧く能く諸の自體を牽引するが故なり。是の如く先の〔一九〕異熟果の愚に由り、復た第二の境界より生ずる所の增上果の愚に由り、境界の受を緣じて貪愛を發生し、此の愛に由るが故に或は諸欲を求め、或は諸有を求む。又〔二〇〕欲取を取り、或は見と戒禁と我語との取を取り、諸取を取り已つて愛取和合して先の引因を潤して轉ずるを名づけて

〔一八〕内の異熟果とは内の六處なり。

〔一九〕異熟果の愚とは異熟果を知らざる無智を云ふ。

〔二〇〕欲取・見取、戒禁取、我語取と共に四取と云ふ。四取とは貪緣なり、第八十七卷參照。

有と爲す。是れ當〔來〕の生起因の所攝なるが故に此の有の無間に既に命終し已つて其の引因の引く所の如く諸の行識を最初と爲し、受を最後と爲す。或は〔二一〕漸次に生じ、或は復た〔二二〕頓に生ず、是の如く應に知るべし。現前の中に於いて初めには無明觸より生ずる所の受を用つて緣と爲して愛を生じ、愛を緣と爲るが故に次に取を生じ、取を緣と爲るが故に其の有を轉成し、有を緣と爲るが故に當〔來〕の生、生ずるとを得、生を緣と爲るが故に老病死等の衆苦差別して次第に現前す。當に知るべし此の中或は處所の生處現前するあり、或は處所の種子隨逐するありと。是の如く中際の無明は行に緣たり、受は愛に緣たる等は能く後際緣起の諸行を生ず。若くは現法の中にては他より法を聞き、或は先世に於いて已に資糧を集め、彼を因と爲るに由りて能く〔二三〕二種の果性の諸行に於いて如理に思惟し、若くは〔二四〕彼の因に於いて、若くは〔二五〕彼の滅若くは〔二六〕滅に趣く行に於いて如理に作意し、彼を思惟するが故に正見を發生す。又諸諦に於いて漸次に有學無學の淸淨の智見を獲得す。彼れ是の如き智見の力に由るが故に能く餘す無く無明及び愛を斷ず。彼れ斷ずるに由るが故に、卽ち彼の所緣を如實に知らざる、諸の無明觸より生ずる所の諸受も亦た復た隨つて斷ず。此れ斷ずるに由るが故に現法の中に於いて無明を離るるに由りて

【二一】胎卵濕の三生の諸根は漸次に生ず。
【二二】化生の諸根は頓に生ず。
【二三】二種の果性とは三解あり(一)中際と後際(二)未來の生と老死(三)牽引因の果と生起因の果なり。私に曰く異熟果及び增上果なり。
【二四】彼の因とは二果の因、惑業の集諦を云ふ。
【二五】彼の滅とは二果の滅したる涅槃卽ち滅諦を云ふ。
【二六】滅に趣く行とは滅諦に趣く道諦を云ふ。

慧解脱を證す、又無明觸より生ずる所の諸受、心中に相應する所有の相應の貪愛煩惱は彼れ其の心に於いて亦た離繫を得、貪を離るるに由るが故に心解脱を證す。又即ち彼の無明滅するに由るが故に諸有る無明猶ほ未だ斷ぜざる時、後際に於いて應に生ずべき行識乃至諸受皆な生ずることを得ず、不生法を成ずるに依り、是の故に說いて言はく、「無明滅するが故に諸行隨つて滅し、次第に乃至異熟[因]より生ずる所の諸觸滅するが故に、異熟[因]より生ずる所の諸受隨つて滅す」と又現法の中の無明滅するが故に無明觸滅し、無明觸永へに滅するを得るに由るが故に無明觸より生ずる所の受滅し、無明觸より生ずる所の諸受永へに滅することを得るに由るが故に愛も亦た隨つて滅し、愛滅するに由るが故に前に說けるが如く名所有の取等乃至損惱するを以て後邊と爲す。諸行皆な滅して不生法を成じ、現法の中に於いて是の如く諸行皆な流轉せず、流轉せざるが故に現法の中に於いて有餘依涅槃界に住するを名づけて現法涅槃を證得すと爲す。彼れ爾の時に於いて識は名色に緣たり、名色は識に緣たり、有餘[依]未だ滅せざるを而も說いて清淨鮮白なりと名づくることを得、乃至有識身住して未だ滅せず、彼れ恆に離繫せる諸受を領受して繫縛あること無し。彼の有識身乃至先業より引く所の壽量恆に相續して住す、壽量若し盡れば能く識を執持して所執の身を捨て命根をも亦た捨つ、此より已後有る所の命根餘す無く永へに滅して都べて所有無し。又彼の諸識と一切の受とは此の位の中に於て任運にして滅し、先因滅するが故に餘更に續かず、亦た餘す無く滅す、此の道理に由りて無餘依般涅

槃界と名づく。究竟寂靜にして常に（二七）妙跡に住す、此の義の爲めの故に常に涅槃に隨ひ、常に涅槃を以て其の究竟と爲し、世尊の所に於いて熟梵行を修す。是れを廣く三種の相に由りて緣起を建立することを說くと名づく、謂く前際より中際流轉し、其の中際より後際流轉し、復た中際の流轉に於いて清淨なるなり。

（二八）復た次に、（二九）九相を安立して（三〇）後有の苦樹能く當有を生ず〔ることを說く〕、謂く世間の聰慧に非ざる者ありて現法の中にて造る所の（三一）新業の小苦樹の如くなるに於て、若くは彼の世間の聰慧に非ざる者能く諸漏に隨順する處所に於いて（三二）（一）現在世に依りて隨觀し愛味し、（二）過去世に依りて深く顧戀を生じ、（三）未來世に依りて專心に繫著し、（四）是の如く住し已らんに、先に未だ斷ぜざりし所の一切の貪愛は數習するに由るが故に轉た更に增長し、（五）此の聰慧に非ざる補特伽羅是の如き後有の小樹をして復た加滋茂せしめんと欲し（三三）（六）貪愛の水を以て恆に漑灌して前に說けるが如き能く當來を感ずる取の所得の果をして漸次に圓滿せしめ、（七）若くは多聞なる諸の聖弟

【二七】妙跡とは妙道と云ふに同じ。

【二八】苦聚を解す。

【二九】九相を安立して後有の苦樹當有を生ずることを述べ兼ねて苦樹斷ずることを說く。

【三〇】後有の苦樹。業を樹に譬ふ、業種能く當來の苦果を招くこと、樹種能く當來の果を生ずるが如し、過去の業の當來の苦果の因たるを後有の苦樹と云ふ。

【三一】新業の小苦樹とは現世に造れる業を云ふ、後有の業は種の時久しきを以て大苦樹と云ふに對し新業を小苦樹と云ふ。

【三二】以下九相を列述す。

【三三】貪愛の水。愛能く業を潤して果を生ぜしむること水能く種子を潤生するが如くなるが故に貪愛を水に譬へて貪愛の水と云ふ。

子あり、有漏の能く當來を感ずる諸業の小樹を造ると雖も、然も能く煩惱に順ずる諸行に於いて無倒に生滅の法性ありと隨觀し、(八)斷と無欲と及以び滅界とに於て無倒に是れ寂靜の性なりと隨觀し、(九)彼の業を損減して增長せしめず、其の愛水をして亦た皆な消散せしむるが故に聰慧する者は後有の小樹を滋榮することを欲せず、便ち其の愛を斷じ、愛取に緣たる等損壞す。是の如く後有の小樹すら尙ほ一切皆な所有無からしむ、何に況んや其をして後更に增長せしめんや。復た更に一の補特伽羅の已に自體を生ぜるあり、諸の先の所有造作し增長せる順後受業「に由りて」現法の中に於いて其の爲めに繫せらる。卽ち彼の自體及び先に造れる所の順後受業を總攝して一と爲し、說いて後有は大苦樹の如しと名づく。若くは能く諸の煩惱に順ずる法に於いて前の如く乃至專心に繫著す。是の如く住し已らんに彼の先に造れる所の順後受業は直下の根の樹をして鬱茂せしむるが如く、現法の中に於ける彼の愛煩惱は傍注の道の樹をして潤澤せしむるが如し。此を以て因と爲し、惑と業行と一切の種子識とに隨つて當來世に於いて正に續生せしむる時名色に住し、是の如き苦樹長時に安立す。當に知るべし是の如き補特伽羅は苦樹をして展轉して滋茂せしめんと欲するなりと。此の中(三四)白品は前の如く應に知るべし。

(三五)復た次に、世尊在昔菩薩爲りし時前に得たる所の諸の世俗道及び世の諸師を棄て菩提座に處し

【三四】白品とは善法、異生惑業苦を增長するを黑品と云ふに反し聖者惑業苦を除斷するを白品と云ふ。

【三五】諦觀を明す。

他の有情を悲愍し利せんと欲するを以て上首と爲るが爲めに自ら諸諦に於いて正しき觀察を起したまへり。爾の時苦諦を歴觀せんと欲するが爲めに、老死支は苦諦の所攝なるに由るが故に、〔十二〕緣起に於て逆に歴て觀察したまへり。當に知るべし此の中三種の相に由りて其の老死に於いて如理に觀察すと。一には細なる因緣を觀察するが故に、二には麤なる因緣を觀察するが故に、三には非不定を觀察するが故なり。(三六)生を感ずる因緣を亦は名づけて〔能〕生と爲し、即ち生の(三七)自體を亦は名づけて〔所〕生と爲す。(三八)前の生は是れ細なり、(三九)後の生を麤と爲す。此の中前は細生有るが故に、而も老死ありと觀じ、亦た後の麤生の緣に由るが故に老死あることを得と觀ず、當來の老死は細生を因と爲し、現法の老死は麤生を因と爲す。云何んが名づけて非不決定と爲すや。謂く即ち彼の生處の所攝なる(四〇)二種の生體を除いて、餘は定んで能く老死の果を與ふること無し。老死を觀ずるが如く生、有、取、愛も各二種に由りて如理に觀察すること當に知るべし亦た爾なりと。是の如きを名づけて老死より次第に逆に苦集二諦の緣起の道理を觀ずと爲す。應に知るべし此の中集諦に順ずる法は猶し燈炷の如しと。即ち此の集諦は膏油等の如く苦諦は燈に類す、諸の聰慧に非ざる補特伽羅を油を灌ぎ並に炷を集むる者に譬ふ、是の如くにして苦燈長世に燒然たり。當に知るべし白品は此れと

【三六】生を感ずる因緣とは能生の因緣たる愛取有三支を云ふ。
【三七】生の自體とは所生の生支なり。
【三八】前の生とは能生の業煩惱即ち愛取有のこと。
【三九】後の生とは所生の果報即ち生支なり。
【四〇】二種の生體とは前の麤細二種の生なり。

相違す、謂く善く方便して滅道諦を觀ずと。復た二種の補特伽羅あり、何等をか二と爲す。一には唯だ自[己のみ]に行じ利益の行に非ず、謂く但だ己が集灶に於いて油を灌ぎ、一の苦燈をして相續し久しく住せしむるなり。二には復た餘の補特伽羅あり、兼ねて自他の無量なる大衆に行ぜしむ、利益の行に非ず、自他を然く大苦火聚と爲り、邪法を攝受し聽聞せる邪法を先と爲し聞思修の[三]慧より引かれたる邪行は、譬へば乾薪、乾草及び乾牛糞を積集するが如し。是の因緣に由りて苦火聚をして長時に熾然ならしめ、斷絶することあること無し。

(四一)復た次に、世尊在昔菩薩爲りし時菩提座に處し、緣起門に依り逆次にして(四二)入りたまへり、先づ後際を緣じて老死の苦諦乃至(四三)其の愛を如理に思惟し、是の如く(四四)後際の苦諦及び(四五)後際の苦の所有の集諦を觀察し、未だ喜足を爲さず、遂に復た(四六)後際の集諦の因緣に攝する所の現在の樂苦を觀察したまへり、謂く徧く逆に受と觸と六處と色識とを觀じたまへり。當に知るべし此の中未來の苦は是れ當[來]の苦諦なりと觀じ、彼の集因は是れ當[來]の集諦なりと觀じ、未來世の苦の集諦は誰に由りて有るやと觀じ、(四七)先の集より生起する所の(四八)識を邊際と爲るに由ると知り、現法の苦有るは既に先の集より生起する所なりと知り

【四一】重ねて諦觀を辨す。
【四二】入るとは觀ずるなり。
【四三】其の愛とは集諦なり。
【四四】後際の苦諦とは老死支なり。
【四五】後際の苦の所有の集諦とは老死の因たる愛取有なり。
【四六】未來の愛取有の三は現在の五支の樂苦に依る。
【四七】先の集とは過去の行支と無明支とを云ふ。
【四八】識を邊際とするとは現在の受、觸、六處、名色、識を云ふ、是れ十二支の逆次にして識を最後とすればなり。

て、應に復た此れ云何にして有りやと觀ずべからずと。是の故に世尊昔し菩薩たりし時當來の所有苦集を觀せんが爲めに現在の苦乃至作意相應の心識を觀じて復た（四九）轉還したまへり。又漸次に彼の（五〇）後際の集諦の〔所〕依處を觀ずと爲す、後際の苦諦の所依止の處は當に知るべし後際の集諦なりと、故に乃ち識に至りて復た還つて（五一）上に順じたまへり。是の如く順逆に緣起の苦集を如理に觀察し、此より無間に滅諦を觀せんが爲め、始め老死より逆に次第して入り、乃ち無明に至る。何を以ての故に觀察すること是の如くなるや、現在の苦諦をば云何にして一切皆な悉く盡滅するや。謂く無明を緣と爲る新業の行を造作せざるが故なり。是の如く（五二）三聖諦を歷觀し已つて次に更に此の滅聖諦は何の道、何の行にして能く證得するやと尋求したまへり。前に說けるが如き宿住隨念に由り昔し諸漏永く盡くることを求めんが爲めにせし世間の正見を憶ひ。教授する者の如く現在前に是の思惟を作さしむ、「我れ今先舊の正道にして古昔の諸仙の同じく遊履せし所を證得せん」と、是の如く但だ世間の作意を以て四諦を歷觀し、又正見を以て諸諦の中に於いて現觀に入ることを得、次第に方便して無上正等菩提を證覺し、現見に方便して無漏の有學無學の善淨なる智見を獲得したまへり。此の義の爲めの故に三大劫阿僧企耶に於いて一切の難行の行を修行し、今此の義に於いて皆な已に證得し、利他の爲めの故に世間

【四九】轉還とは繰返し觀ずるを云ふ。
【五〇】後際の集諦の所依處は識等の五支なり。
【五一】上。愛取有三支を云ふ。十二緣起逆觀に依れば愛取有は上なり識等五支は下なり。
【五二】三聖諦とは苦集滅の三諦なり。

の諸の人天を哀愍するが故に、能く聖法に入るに堪へたる者あるに隨つて四聖諦を開き、等覺を生せしめたまへり。

（三三）復た次に、佛世尊の教は三處の所攝なり。何等をか三と爲す。一には善く諸の緣生の法を建立し作用無し［とする］が故に、二には彼れ利他の行に依るが故に、三には彼れ自利の行に依るが故なり。此の中善く諸の緣生の法を建立し作用無し［とする］が故なりとは、謂く後際の苦より逆に現法前際の苦集を觀ずるに名色は識に緣たり、識は名色に緣たり、譬へば束蘆の展轉して相依りて住立することを得るが如し。其の中間に於ける諸の緣生の法は皆な自作に非ず、亦た他作に非ず、自他作に非ず、無因生に非ず、是の如く施設するを善く諸の緣生の法を建立し作用無し［とする］が故なりと名づく。所以は何ん、無常の諸行は前際に無きが故に、後際に無きが故に、中際に有りと雖も唯だ刹那なるが故に作用動轉す、第一義に約するに都べて所有無し。但だ世俗に依りて暫らく假に施設す、是の如き施設は如實にして無倒なり。是の故に說いて此を善く建立すと名づく。卽ち是の如く善く性を建立するに依り、諸の緣起に依りて他の爲めに聖諦の法教を宣說するを、彼れ利他の行に依るが爲めの故なりと名づく。卽ち此を「所」依と爲し自ら能く聖諦現觀に趣入して法に隨つて法を行じ、又能く現法涅槃を證得す、當に知るべし是れを彼れ自利の行に依るが爲めの故なるを用ふと名づくと。又先に智慧の資糧を積集せる諸の弟子衆は猛利なる倶生の

【三三】聖教に攝することを解す。

慧を成就するが故に名づけて聰慧なりと爲し、教智を具ふるが故に名づけて明了なりと爲し、證智を具ふるが故に善く調伏すと名づけ、他緣に由らずして自ら法を覺るが故に畏るる所なしと名づく。涅槃に於いて如實に覺るに緣るが故に甘露を見ると名づけ、(五四)盡無生智を所依止と爲して有餘依涅槃界を證するが故に身證と名づけ、妙甘露界を得、具足して安住す。

(五五)復た次に、諸の愚夫外道の種類あり、能く四大種の身は麤なり無常の性なりと觀見すと雖も、此の身は久しく住立すと雖も而も增減あり、死する時、生るる時捨取あるが故なりと觀ずるに由り、便ち其の身に於いて能く厭ひ能く離れ能く勝解を起す。世間道を以て欲界の欲を離れ、色界の欲を離れて極めて(五六)有頂「天」に至るも、然も彼れ身に於いて當に知るべし仍ほ未だ解脱を得ずと名づくと。所以は何ん。彼彼の所得の定の中に於いて、其の識を瑩磨し執取して我と無し、雜染にして住するに由る。復た後時に於いて壽盡き業盡くれば還退して下に生ず、緣起に於いて「智」善巧ならざるを以ての故なり。諸の聖弟子は緣起に於いて已に善巧「智」を得て而も但だ四大種の身は細なり無常の性なりと隨觀すと雖も未だ即ち識は無常の性なりと觀察せず。(五七)所以は何ん、四大種の身は久時を經て住すれば常相は得可く、剎那相似し相續して隨轉するも其の無

【五四】盡無生智とは盡智及び無生智なり。
【五五】微智を解す。微智とは外道に對して佛弟子の微細の智を云ふ。
【五六】有頂天とは無色界の第四處非想非非想天のこと、是れ三界の最上なるが故に名づく、外道此天を涅槃界と執す。
【五七】先に四大種の無常を觀じて識の無常に悟入せんとするは難し、故に今先に識の無常を觀ずべき所以を述ぶ。

常性得可きこと難きが故なり、識に無常の相麁顯にして得可く、刹那刹那の所緣易脫し、其の相轉變して無量の品類差別あるが故なり。卽ち此の識は無常の性相にして無量の品類麁顯にして得易しと雖も、然も復た說いて最極微細なりと名づく。當に知るべし其の性識る可きこと難きが故に、入るべきこと難きが故なりと。所以は何ん、唯だ是れ慧眼の所見の境なるが故なり。四大種の身に增あり減あり捨あり取ありて其の無常の性すら尙ほ非理と爲す肉眼の境界[とするを]、況んや其の餘の眼の緣起善巧をや。諸の聖弟子は復た最も極めて微細なる識の無常の性に悟入せんと欲し、卽ち緣起に於いて如理に思惟す。能く自の相續に墮し觸より生起する所の諸受の分位差別の性を分別するに由るが故に便ち能く識の無常の性に悟入す。彼れ旣に是の如き智見を成就し、漸次に受の依止する所の身、因る所の諸觸及び餘の一切の名所攝の行に於いて皆な能く厭離して勝解を生じ、亦た解脫を得、解脫を得るが故に畢竟の若くは有餘依、若しく無餘依の二涅槃界に安住す。

【五八】思量の際を解す。
【五九】中際とは現在なり。

（五八）復た次に、緣起の法に於いて善巧なる苾芻は三種の相に由りて其の三際に於いて能く正に能く苦を盡す。云何んが三相なる。一には苦の依處、二には苦の因緣、三には苦の因緣の依處なり、是れを三相と名づく。云何んが三際なる。一には（五九）中際、二には過去際、三には未來際なり、是れを三際と名づく。當に知るべし此の中內身は苦の依[處]なり、是れ寒熱等及び病死等の衆苦の差別現法に

生起するの所依處なり。何となれば此あるに由るが故に、所依の身に於いて彼れ生ずることを得るが故なり。外の父母等の親屬、朋黨をば苦依に攝受す、是れ供侍等にして刀杖を執持するを以て後邊とするは憂愁歎等の衆苦の差別の所依處なり、何となれば(六〇)前に說けるが如くなるが故なり。此の(六一)二種の依は愛を攝受するを用て以て其の因と爲し、集愛を以て此の依生起するに由つて、苦の因緣と名づく。又卽ち此の愛は樂しむべき妙色の境界に依止するを以て依處と爲して、方に乃ち生ずることを得、彼を說いて苦の因緣の依處と名づく。又諸の所有現在の境界は貪瞋癡の火の熱惱を因と爲して焦渴を生ぜしめ、是に由りて遂に飲む、譬へば毒を雜へたるものの樂しむべきが如く、妙色の所緣の境界は甘美の飲なり。棄捨すること能はず轉た渴愛を增す、渴愛に由るが故に當來の依あり、當來の依の故に便ち衆苦あり。是の如く當に知るべし(六二)第一義に由りて名づけて(六三)死に趣くと爲すと。卽ち是の如き現在の道理に由りて應に當に去來の道理を了知すべし、當に知るべし是れを能く正に中去來際を思量すと名づく。又卽ち四種の言說に依止して應に一切の所依の三量を知るべし、二種の言說を若くは見、若くは知るは是れ(六四)現量に依り、若し言說を覺るは是れ(六五)比量に依り、若し言說を聞くは(六六)至敎量に依るなり。

【六〇】前の內身の苦の依處にて說けると同理なり。
【六一】二種の依とは內外の二種の苦の依處を云ふ。
【六二】第一義とは愛を指す。
【六三】未來の死苦を招く。
【六四】現量とは直覺なり。
【六五】比量とは推理なり。
【六六】至敎量とは又たは聖敎量と云ふ自己の宗とする聖敎なり。

(六七)復た次に、五種の相に由りて正に勤めて方便して縁起を觀察し、能く衆苦を盡し、能く(六八)苦の邊を作す。何等をか五と爲す。一には諸の縁生の法の生起する因縁を觀察し、二には彼の滅する因縁を觀察し、三には如實に能く彼の滅に趣く正行を了知し、四には法隨法行を修行し、五には證に於いて增上慢を離る。是の如きを名づけて善く觀察を起し、及び果成滿すと爲す。始め未來の因縁に依る苦より逆次に乃ち識名色に縁たるに至るまで四種の相に由りて觀察し通達し正行を修習す。謂く二相に由りて當來を觀察す、(一)(六九)因あるが故に果あり、(二)(七〇)因無きが故に果無しと。(七一)既に觀察し已つて因無きに通達し、正行を修するに由り、(七二)既に通達し已つて隨つて正に法隨法行を修行す。(七三)又正に現法の中に於いて無明を縁と爲る福及び非福、不動の新業の因法あるが故に福、非福、不動の業行に隨つて果識等あり、(七四)彼れ有るに非ざるが故に此も亦有るに非ずと觀察し、(七五)既に觀察し已つて前の如く通達し、及び正に修行し、(七六)正に修行する時無明を縁と爲る新業故業を造らず、觸し已れるをば速に能く變吐し、現法の中に於て前の如き現見の聖道、道果の涅槃を證得す。彼れ爾の時に於いて譬へば陶師の如し、煩惱の火を擧げ、隨眠蒸熱し、隨つて有識身の熟蒸せる熱瓮を極めて清涼なる涅槃の岸上に置き、一切の煩惱の蒸熱を離れしむ。又瓦の如き有識身をして攝依し

【六七】觀察を解す。
【六八】苦の邊を作す。苦の邊際を盡すなり。
【六九】第一相を釋す。
【七〇】第二相を釋す。
【七一】第三相を釋す。
【七二】第四相を釋す。
【七三】復た第一相を釋す。
【七四】復た第二相を釋す。
【七五】復た第三相を釋す。
【七六】復た第四相を解す。

て清涼を得せしむ。應に知るべし前の如く所有る身の邊際の受を領受し乃至廣く說かば未だ命を捨てざるより來た常に「六」恆住に處し、終に阿羅漢の果を退失せず、亦た無明の緣たる行を造ること能はず。（七七）云何んが證に於いて增上慢を離るるや。謂く彼れ爾の時能く緣起を緣ずる妙善清淨の智見を成就し、是の思惟を作す、勝義諦に依りて流轉する者無く、涅槃の者無し、唯だ彼彼の法ありて生ずるが故に彼彼の法をして生ぜしめ、彼彼の法滅するが故に彼彼の法をして滅せしむと。

（七八）復た次に、略して二種の增上慢の者あり、一には有學に於ける增上慢の者、二には無學に於ける增上慢の者なり。若くは有學に於ける增上慢の者は彼れ他に告げて言はく、「我れ已に疑を渡り、永く（七九）三結を斷じ、我れ所證の有學の解脫に於いて已に猶豫を離れ、已に毒箭を拔き、已に能く薩迦耶見を以て根本と爲る一切の見趣を永へに斷ぜり」と。若くは無學に於ける增上慢の者は彼れ他に告げて言く、「我れに上あること無し、應に作すべき所の事の所應の決擇をば我れ皆な已に作せり」と。是の如き二種は或は緣起に依り、或は涅槃に依る。又聖說に依りて說を起す時謂く、「甚深にして世間を出離せる空性と相應する緣性緣起の順逆等の事を說く」と。其の所說に於いて覺了すること能はず、隨つて悟入せず、此の二種の因及び緣に由るが故に如實なる覺に於いて孤疑を發起し、（八〇）自相續の煩惱永へに斷ずる涅槃の作證に於いて亦た猶豫を生ず。所以は何ん、有學に於ける增上慢の者

【七七】第五相を釋す。
【七八】上慢を解す。
【七九】三結とは貪瞋癡なり。
【八〇】自相續とは自身のこと。

は我我所を計して常に「我我所見に」隨逐せられ隨入し作意するも、微細なる我慢、間無間に轉ずるを了達すること能はず、又奢摩他を任持し相續して麁なる煩惱を防ぎて雜亂せざらしめ、是の因緣に由りて。彼れ未だ得ざるに於いて已に得たる想を生じ、未だ防護せざるに於いて已に護れるの想を生じ便ち他に告ぐるに由るなり。又無學に於ける增上慢の者は彼れ自ら謂つて言く、「我れ已に寂靜なり、我れ已に涅槃せり、我れ已に取を離れたり」と。此の未だ斷ぜず微細にして現行する諸の增上慢に於いて了達すること能はず、未だ得ざる所に於いて已に得たる想を生じ、未だ防護せざるに於いて已に護れる想を生じ、便ち他に告ぐ。又無學に於ける增上慢の者は當に知るべし決定して先づ有學に於いて增上慢を起し、實義あること無しと。諸の有學の者は上の無學に於て增上慢を起す、所以は何ん、彼の相續の煩惱現行して是の如く心を纏ふこと堅牢にして住し、此の因緣に由りて未だ得ざる所に於いて已に得たる想を生じ、增上慢を起して堅固に執著して多時を經て住し、或は他に告ぐるには非ず唯だ失念することあり、狹小に暫時煩惱現行し、尋いで復た通達して速に能く遠離するなり。又彼れ是の如く或は先時に未だ得ざる所に於いて得たりとする增上慢を起すに由るが故に、或は今時其の所得に於いて疑惑を生じ、猶豫して期心を壞するに由るが故に便ち憂慼を生じ是の思惟を作す、「若し、我が所證所有無くんば、他の所證も亦た應にあること無かるべし」と、是の如く便ち聖を謗る邪見を生じ、惡趣の因を受け、大衰損を獲るなり。云何んが前の如き聖說甚深なりや。謂く能く、甚深

なる縁起、究竟の涅槃、〔八一〕三相相應する有無爲の體相の差別、有爲は無常なり、無爲は常住なり、諸行は皆な苦なり、涅槃は寂靜なり、一切の有爲は總て唯だ是れ苦のみ及び唯だ苦因のみなり、一切の無爲は總て唯だ衆苦及び因永く滅せるなりと開示したまへるなり。若し諸の苾芻の現法の中に於いて涅槃を得る者は永へに後有の衆苦の因道を斷じて當來世の所有苦果をして究竟して轉ぜざらしめ、無餘依般涅槃に入る時後苦續かず、先因より引く所の現在の苦依は任運にして滅し、苦の邊際に至る。此の中都べて先の流轉する者無く、亦た今に於いて般涅槃する者も無し。若し能く是の如き義を開示する言をば當に知るべし名づけて前に說ける所の如き聖說甚深なりと爲すと。

〔八二〕復た次に、縁起の本性は最も極めて甚深にして而も一あり能く開示して淺く當に此を知るべからしむ、二の因緣に由るが故なり、一には大師善く開示したまふに由るが故に、二には卽ち此の補特伽羅微細に審悉なる聰敏博達の智を成就するに由るが故なり。若くは說き若くは聽く、是の諸の句義は應に知るべし前の攝異門分の如しと。當に知るべし此の中諸の緣起の法は略して四相に由りて最も極めて甚深なりと。何等をか四と爲すや。一には微細なる因果は了知し難きに由るが故に、二には無我は了知し難きに由るが故に、三には離繫せる有情にして而も繫縛ありて了知し難きに由るが故に、四には有繫の有情にして而も繫縛を離れて了知し難きに由るが故なり。

〔八一〕三相相應云云。生、住、滅異は有爲法の三相。無生、無滅、住異は無爲法の三相なり。

〔八二〕最最深なることを解す。

（八三）云何んが微細なる因果は了知す可きこと難きや。謂く「四」聖諦の道理を觀察するに依る、初め老死より乃至識名色に緣たる所有の有支に緣の體性あり。云何んが名づけて緣の體性ありと爲すや。謂く是の中に於いて因緣生あり、未だ永へに斷せざるが故に而も生の生ずるあり、生既に生じ已つて唯だ當に後時の老死に希待すべし。當に知るべし此の中生の因緣を亦は名けて生と爲し、因緣より起る所を亦は生と爲すと。（八四）前生あるが故に而も後生あり、（八五）後生あるが故に而も老死あり。此の中前生は是れ後生の因なり、亦老死の緣なり、後生は唯だ是れ老死の緣なり。是の如き一切を總攝して一と爲し、略して說いて名づけて生は老死に緣たりと爲す。當に知るべし是れを初めの老死支に緣の體性ありと名づくと。生支を說くが如く是の如く有支取支の安立も當に知るべし亦た爾なりと。取の差別をいはば、謂く（八六）無差別の欲貪を取と名づく。取の差別の安立に（八七）四あり、是の如きの愛支は或は（八八）求欲門に「於いて」諸業を發起し、或は（八九）求有門に「於いて」諸業を發起す。此の二業門の所有諸愛は當に知るべし愛非愛の愛に歸趣すと。又卽ち此の愛は六處門に生じ、起す所の無明觸より生ずる所の受を緣と爲るが故に轉ず。復餘受の此の愛の緣に非ざるあり、謂く明觸より

【八三】第一相を釋す。
【八四】前生とは能生の生支なり。
【八五】後生とは未來の生支なり。
【八六】無差別の欲貪。欲貪には四種の體無し境に隨つて四を分つ、故に無差別と云ふ。
【八七】四とは欲取・見取、戒取、我語取の四取なり。
【八八】求欲門とは外の五欲を求むるなり、又曰く欲界の生を求むるなり。
【八九】求有門とは內の有根を求むるなり、又曰く色界無色界の生を求むるなり。

生ずる所、及び（九〇）非明非無明觸より生ずる所なり。又卽ち此の受は當に知るべし一切皆な（九一）相似の觸を用て其の緣と爲すと。此れ復云何ん。謂く明無明相應するは是れ（九二）增語觸なり、（九三）此れと相違するは是れ（九四）有對觸なり。又此の明觸及び無明觸に隨ふ所の增語觸は、其の所應の如く當に知るべし彼れ正法或は不正の法を聽聞するを用て所緣の境に於いて、若くは正しき若くは邪なる聞思修の智と相應する諸の名を以て其の緣と爲し、非明非無明の觸に攝せらるる有對觸は、當に知るべし若くは內〔根〕若くは外〔塵〕の諸色を用て緣と爲すと、是の如きを總じて名色は觸に緣たりと名づく。又卽ち六處を略して二分と爲す、謂く名及び色なり、觸の與めに緣と爲る。當に知るべし此の中意處の非色と餘の非色の諸法と相應する是の如きの一分を說いて名づけて名と爲し、諸の餘の色處を總じて一分と爲し、說いて名づけて色と爲すと。又此の名色は現法の中に於いて續生する識を緣と爲すに由つて〔現法を〕牽引し、及び能く執持して散壞せざらしむ。又卽ち此の識續生し已つて後名色に依りて住し或は同時に於いて、或は無間に生じ、彼れに依りて轉ずるが故に現法に於いても此れ亦た彼の名色を用て緣と爲す。應に知るべし先業より引く所の名色と識と展轉して相依り、展轉して緣と爲ること是

【九〇】非明非無明觸とは中容なる觸なり。

【九一】相似の觸を用て云云。苦受は苦觸を以て緣となし、有漏の受は有漏の觸を以て緣と爲す等、受と觸とは相似す。

【九二】增語觸とは分別し言語を起す觸にして第六意識に在る觸なり。

【九三】此れと相違すとは非明非無明の中容なるを云ふ。

【九四】有對觸とは內根外塵等の對礙ある色法を緣とする觸にして前五識に在る觸なり。

の如しと。當に知るべし（九五）識名色に緣たるを以て後邊と爲し、所有の有支の老死に隨ふ相は前に説ける所の如く其の所應に隨つて緣の體性ありと、是の如きを名づけて微細なる因果了知す可きこと難しと名け、了知し難きが故に當に知るべし緣起を名づけて甚深なり最も極めて甚深なりと爲すと。（九六）云何んが無我は了知す可きこと難きや。謂く諸の因果に緣起を安立し、爾所の事に齊りて徧く一切の有情衆の中に於いて無差別なる有情の（九七）增語を起す、卽ち此の增語は應に知るべし是れ（九八）路なりと。此の處に依りて所有言辭轉じて各異の有情衆の別を施設す、謂く鳥、魚、蛇、蠍、人、天等の類なり。又各異の名字の差別を立つ、謂く鸚鵡、舍利、孔雀、鴻鴈、（九九）多聞、（一〇〇）持國、（一〇一）增長、（一〇二）醜目、（一〇三）舍利子、（一〇四）極賢善、（一〇五）給孤獨、（一〇六）一切義成等の名字の差別なり。爾所の事に齊りて諸の（一〇七）世俗の言說の士夫に於いて言論ありて轉ず、謂く諸の所有

【九五】識名色に緣たるを最後に觀ずるは十二緣起支の逆觀なり。

【九六】第二相を釋す。

【九七】增語とは語言なり、語言は假設なり、本來實無なるに假に有なりとし、無なるを有なりと增せるが故に增語と云ふ。

【九八】路とは所依なり、語言は名句の所依なり。

【九九】多聞は四天王の一、北方天王なり。

【一〇〇】持國も四天王の一、東方天王なり。

【一〇一】增長も四天王の一、南方天王なり。

【一〇二】醜目も四天王の一、西方天王なり。

【一〇三】舍利子は佛の十大弟子の一人、智慧第一なり。

【一〇四】極賢善とは梵に蘇跋陀羅(Subhadra)と云ふ、佛の最後の弟子の名。

【一〇五】給孤獨。佛の爲めに祇園精舍を建立せる須達多長者の號なり。

【一〇六】一切義成は梵語、薩婆悉達(Sarvārtha-Siddha)の譯、釋尊の太子時代の名なり。

【一〇七】世俗の言說の士夫とは假立せる名字ある人を云ふ。

受の若くは明觸より生ずる所、若くは無明觸より生ずる所、若くは非明非無明觸より生ずる所、是の如き一切は名色と俱なり。若し諸の名色餘す無く永へに滅すれば、所有諸の受生ずること得べきこと無し、當に知るべし是れを無我の緣起は了知す可きこと難しと名づくと。【一〇八】云何んが離繫せる有情にして而も繫縛ありて了知し難き性なりや。謂く外道の如く無明觸より生ずる所の受に觸對し、三門に由るが故に其の無我なる緣生の諸行に於いて我ありと分別して見を起し施設す。云何んが三門なりや。一には欲界に於いて未だ欲を離るることを得ず、欲界繫の【一〇九】三種の受の中に於いて妄りに一分を計して明我所と爲し、妄りに一分を計して受者の性と爲し、我ありと分別して見を起し施設す。二には欲界に於いて已に欲を離るることを得たるも第三靜慮に〔於いて〕未だ欲を離るることを得ず、唯だ樂受に於いて所得ありと計して卽ち妄りに此を計して明我所と爲し、此の受の外に別に實我あり、是れ能受者なりと計し、見を起して施設す、謂く卽ち此の我は是れ受法あり、卽ち彼の受を用つて其の受を領納すと。三には第三靜慮已上の不苦不樂の微細なる諸受に於いて通達すること能はずして我ありと分別す、謂く諸受の都べて受者に非ざるに於て見を起して施設す。是の如き一切の三種の門に由りて起す所の我見は皆な理に應ぜず、所以は何ん、三種の受は皆な無常なるを以ての故なり。其の計する所の我も應に亦た無常なるべし、是の故に彼の見の三受を我と爲するは道理に應ぜず。又第四靜慮已上の都べて樂受

【一〇八】第三相を釋す。
【一〇九】三種の受とは苦樂捨三受なり。

無きに於いては其の中亦た能く樂を受くる者無し、我は彼に於いて樂受に由るが故に受法ありと名づくと計するは道理に應せず。又第四靜慮已上の無色定等に於いては彼れの計する所の我には應に覺受無かるべし。彼れ寂靜なる定より生ずる所の[捨]受に由りて我慢を發起し、我れ寂靜なりと謂ふ、此の慢應に無かるべし、然るに此の慢あり、是の故に此の計も亦た道理に應せず。當に知るべし是の中若し諸の緣起は甚深に非ずといはば彼れ應にあること無かるべしと、是の如きは無智のもの妄りに計して內法を失壞するなり。多聞なる諸の聖弟子は明觸より生ずる所の受に觸對するが故に一切の起す所の我見は理に應せずと了知す。是の故に諸法の無我を觀見し、彼れ世俗及び勝義諦に於いて皆な善巧[智]を得、前に說けるが如き如來の滅後若くは有り若くは無き乃至非有非無なるに於いて皆な執著せず、是の如き事に於いて心に解脫を得。設ひ來りて是の如く有りと爲んやと問ふことあるも、其の所應の如く而も記別せず。是の如く無なり　(二〇)倶なり及び(二一)倶非なりと爲んやといふも、皆な所應の如くにして而も記別せず。是の如く彼れ妙智を先と爲るに由りて而も記別せず、或は謂つて是れ知ること無しと言ふことあらば、當に知るべし此は是れ極大なる無智なり、極大なる邪見なり。又彼の是の如き見行の外道現法の中に於いて前に說けるが如き(二二)三種の妄見に依りて、(二三)或は我は是れ其れ有色なりと施設し、(二四)或は我

【二〇】倶とは亦有亦無なり。
【二一】倶非とは非有非無なり。
【二二】三種の妄見とは前の三門の妄見を指す。
【二三】是れ卽蘊の我を計するなり。
【二四】是れ離蘊の我を計するなり。

は是れ其れ無色なりと施設し、（二五）或は我は以て狹小なりと爲すと施設し、（二六）或は我は以て無量なりと施設す。現法の中にて妄りに我は是れ眞に得可しと分別する見を起して施設するが如く、是の如く當來に分別して見を起して他の爲めに施設するも當に知るべし亦た爾なりと。多種に妄りに我を分別するありと雖も、然も唯だ一類の薩迦耶見の隨眠に繫せられて未だ彼れを斷せざるが故に、下劣なる諸の世俗道に由りて漸く繫縛を離れ、乃し有頂に至ると雖も當に知るべし卽ち彼れを猶ほ繫縛［あり］と名づくと。是の如きを名づけて諸の緣起に［於て］善巧なる妙智を以て能く隨つて悟入せんに、離繫せる有情にして而も繫縛ありて了知し難き性なりと爲す。（二七）云何んが名づけて繫［縛］ある有情にして、而も繫縛を離れて了知し難しと爲すや。謂く名聞ある諸の聖弟子は明觸より生ずる所の受に觸對するが故に現法の中に於いて實我を得ず亦た施設せず、身壞して已後亦に彼の（二八）七識住の中に於いて一切の有情衆を施設せず、已にして復た（二九）其の下の續生する識處に於いて、又復た（三〇）彼れの生起する識處に於い

【二五】是れ蘊中の我を計するなり。

【二六】是れ蘊外の我を計するなり。

【二七】第四相を釋す。

【二八】七識住とは欲界の人天を一識住とし、色界の下三靜慮と無色界の下三處とを六識住とし合して七識住と云ふ。此の七處は識の住する處なるが故なり。三惡趣には苦受あり、第四靜慮には無想定あり、無色界第四處有頂天には滅盡定ありて何れも識を壞するが故に識住と名づけず。

【二九】其の下の續生する識處とは三惡道なり、下とは七識住の下なり。

【三〇】彼れの生起する識處とは色界第四靜慮及び無色界有頂天なり。

て、彼れ〔七〕識住に於いて及び（二一）二處に於いて諸の縁起の聖諦の道理を以て如實に觀ずる時阿羅漢或は慧解脱或は倶解脱を成じ、八解脱、靜慮、等至を具ふ、彼れ現法に於いて現に見るに生老死あるべしと雖も、然も彼れに從つて離繫を得と名づく。復た現に見るに諸受を領納すと雖も然も受に於いて離繫を得と名づく、復た現に見るに識名色ありと雖も彼に於て離繫を得と名づく。是の如きを名づけて諸の縁起に〔於ける〕善巧なる妙智を以て如實に了知せんに、（二二）繫〔縛〕ある有情にして而も繫縛を離れて了知し難き性なりと爲す。此の四相に由りて應に知るべし縁起を名づけて甚深なり最も極めて甚深なりと爲すと。

復た次に、嗢柁南に曰く、

（二三）『異と世俗勝義と、法爾と此の作等と、大空と分別とにして、自作を其の後と爲す。』

（二四）此の正しき法毘柰耶の中に於いて復た愚と智と倶に前際より中際に至り茲に（二五）二種の根本煩惱に由り是の如き有識の身を集成し、此の身を縁として外の所有情非情數の名色の所攝たる所縁の境界に於いて三受を領納すと雖も、然も其の智者は彼の一切の前中後際に於いて彼の愚者と大に差別あり。當に知るべし此の中其の中際に於いて差別

【二一】二處とは㈠三惡道㈡第四靜慮及び有頂なり。

【二二】佛弟子資糧位に於て已に我見を伏す、故に繫縛を離ると云ひ、未だ隨眠を斷ぜざるが故に繫縛ありと云ふ。

【二三】此は總頌第二門二諦等を解する別頌なり、此中更に七門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【二四】異を解す。異とは愚と智と異なるを云ふ。

【二五】二種の根本煩惱とは無明及び愛なり。

ありとは、謂く二種の根本煩惱に由りて是の如き有識の身を集成し、現法の中に於いて此の二皆な斷ず。此の二を斷ずるが故に當來世に於いて復た彼の識に隨ふ所の身あること無し、是れを即ち名づけて後際の差別と爲す。問ふ、何に緣てか智者は智者の性を成ずるや。答ふ、現法の中の所有の集諦に於いて、及び後際の所有の苦諦に於いて皆な離繫するが故なり。問ふ、何に緣つてか愚者は愚者の性を成ずるや。答ふ、(二三六)彼の二を斷ずるに於いて力能無きが故なり。曾し聖教を習へるを名づけて智者と爲す、先に已に智の資糧を尋求し、諸の梵行を攝めたるが故なり。其の聖教に於いて曾て未だ修習せざりしを名づけて愚者と爲す、彼れと相違するが故なり。當に知るべし是れを智者愚者の前際の差別と名づくと。

(二三七)復た次に、諸の緣起に於いて善巧多聞なる諸の聖弟子は如實に世俗勝義の二諦の道理を了知し、如實に知るが故に現法の中の有識身等の所有諸法に於いて無我を了知して終に彼を執して我我所と爲さず、勝義に於て善巧を得るに由るが故に是の邪執無し。諸行に墮し、相續する自業の作す所の有情に於て如實に了知して展轉して(二三八)作す所の者あること無く、亦(二三九)作さざるに吉祥の義あること無しと了知し、是を了知し已つて遂に正しく勤修して煩惱を離繫し、世俗に於て善巧「智」を得るに由るが故に所有(二四〇)不

【二三六】彼の二とは集諦及び苦諦なり。

【二三七】世俗勝義を解す。

【二三八】自業以外に作者あるなしと了知す。

【二三九】善因を作さずして吉祥なる善果あること無しと了知す。

【二四〇】不實を增益す。無法を實有なりと執するを云ふ。

實を增益し（三一）實事を損減することを遠離す。彼の現法の中にて有識身に於いて先に造作せる所、思ひ祈願する所、思ひ建立する所は誓願に由るが故に、卽ち聞思より成ずる所の妙慧、緣起の善巧を以て所依止と爲して奢摩他毗鉢舍那の修より成ずる所の行を用て能く隨つて悟入す。（三二）又識觸受想思の身に於いて歷觀して苦と爲す。又愛身の差別に於て觀ずる時當に知るべし卽ち是れ集諦を觀察すと。彼れ（三三）二諦に於いて生滅の智あり、如實に了知す、因集に由るが故に其の集むる所の如く、因滅に由るが故に其の滅する所の如しと。謂く定地の世間の作意に由り、是の如き作意の因緣を修習して諦現觀に入る。彼れ先時に於いて世間の集〔諦〕及び世間の滅〔諦〕に於いて聞思の慧に由るを說いて善く見ると名づけ、亦たは善く知ると名づけ、修の慧に由るが故に善く思惟すと名づけ、今聖諦に於いて現觀に入る時を名づけて善く了知すと爲し、亦たは善く達すと名づく。（三四）盡所有（三五）如所有に由るが故に其の次第に隨つて彼れ爾の時に於いて聞思の慧に由るを正法に趣くと名づけ、修慧に由るが故に正法に近づくと名づけ、諦〔理〕に通達するに由るを正法を證すと名づく。又趣に由り正法に近づくに由るが故に源底に到ると名づけ、正法を證するに由るが故に偏く源底に到ると名づく。又有學の慧を世間に入りて出沒する妙慧と名づく、此れ無漏なるが故なり。（三六）聖の相續の中にして得

【三一】實事を損減す。有法を無なりと執するを云ふ。
【三二】以下は經中の諸句を釋す。
【三三】二諦とは世俗勝義の二諦なり。
【三四】盡所有。下出。
【三五】如所有。下出。
【三六】聖の相續とは聖者の身なり。

べきが故に名づけて聖慧と爲し、一切の煩惱及び諸の苦を能く盡し能く出づるが故に出離慧と名づけ、最極究竟して能く通達するが故に決擇慧と名づく。彼れ既に是の如き妙慧を成就し、復た是の思を作さく、我れ當に進んで後の諸の所有一切の煩惱を斷ずべしと。卽ち此の事に於いて多く修習するが故に修道の中に於いて餘の煩惱を出で、一切の苦を盡す。是の如く初業地より乃至阿羅漢果を獲得する所有の正道を顯示す。

（二三七）復た次に、二の因緣に由りて諸の（二三八）緣起及び（二三九）緣生の法に於いて（二四〇）二分の差別の道理を建立す。謂く（一）流轉する所なるが故に、及び（二）諸の流轉する所なるが故なり。當に知るべし此の中十二支の差別の流轉ありと。（二四一）彼れ復た其の所應の如く理に稱つて因果次第に流轉す。（二四二）又此の理に稱ふ因果、次第に無始の時より來た展轉して安立するを名づけて法性と爲し、現在世に由るを名づけて法住と爲し、過去世に由るを名づけて法定と爲し、未來世に由るを法如性と名づけ、無因の性に非ざるが故に如性と名づけ、如性ならざるに非ず如實の因性なるが故に實性と名づけ、如實の果性なるが故に諦性と名づけ、所知の實性なるが故に眞性と名づけ、如實智の依處の性なるに由るが故に無倒性と名づけ、顚倒の性に非ず彼の一切の緣起と相應する文字に由りて依處の性を建立するが故に此れを緣起の順次第の性と名づく。又

【二三七】法爾を解す。法爾とは緣起自然の道理を云ふ。
【二三八】緣起とは能生の因なり。
【二三九】緣生とは所生の果なり。
【二四〇】二分とは緣起と緣生なり。
【二四一】流轉する所の如きを釋す。
【二四二】諸の流轉する所を釋す。

（二四三）此の二種に善巧多聞なる諸の聖弟子は三世の中に於いて實の如く了知し、一切の非理なる作意を遠離し、諸の聖諦に於いて能く現觀に入り、諸の外道の諸の見趣の中に於いて能く離繫を得、前の趣等の如く廣く說くこと應に知るべし。又彼の緣起は無始の時より來た因果展轉し流轉相續す。如來は此の流轉の實性に於いて現に等覺し已つて微妙なる智を以て正しき言詞を起し、方便して生に非ず作に非ざることを開示したまふ。當に知るべし此の中無始の時より來た因果展轉する法住法、性彼と相應する名句文身に由りて解了せしめんが爲めに隨順して法住法界の種性の依處を建立すと。

（二四四）復た次に、二の因緣に由りて（二四五）此の作、（二四六）此の受、（二四七）餘の作、（二四八）餘の受をば應に記別すべからず。云何んが二と爲す。一には（二四九）因果を一に相ひ屬するが故に、（二五〇）諸行相續して前後異なるが故なり。二には所餘の作者受者は得べからざるが故なり。若し此の論に於いて不受不執にして中道の行を以て唯だ因果の如くにして而も正に記別するは亦た過失無きなり。

（二五一）復た次に、一切の無我にして差別あること無きを、總じて名づけて空と爲す、謂く補特伽羅無我及び法無我なり。補特伽羅無我とは、謂く一切の緣生の行を離れて外に

【二四三】此の二種とは因と果との二なり、又曰く眞俗二諦なり。
【二四四】此の作等を解す。
【二四五】此の作とは自己に屬する作者の我なり。
【二四六】此の受とは自己に屬する受者の我なり。
【二四七】餘の作とは自己以外にありとする他の作者の我なり。
【二四八】餘の受とは自己以外にありとする他の受者の我なり。
【二四九】餘の作者受者の我無きを釋す。因果は同一人の上に立つべく餘人に望めて立つべきにあらず。
【二五〇】此の作者受者の我無きことを釋す。
【二五一】大空を解す。

別に實我あること得べからざるが故なり。法無我とは、謂く即ち一切の緣生の諸行の性は實我に非ず是れ無常なるが故なり。是の如き二種を略攝して一と爲し、彼の處を說いて此れを名づけて大空と爲す。謂く若し（一五二）世俗の言說を離れたる妄見を〔所〕依と爲ることあれば是の如きの見を起し是の如きの論を立つ、謂く（一五三）別物の緣生の法に異なるあり、或は緣生の法（一五四）彼に異にして彼に屬すと、此れ妄見に依る梵行に住するには非ず、何となれば是の如き見は（一五五）初の空の所〔對〕治の〔妄〕見に依止して轉ずるに由る此の〔妄〕見に非ざる者は應に解脫すべきが故なり。或は復た即ち名色所攝の緣生の法の中に〔於いて〕前に說けるが如き（一五六）三種の妄見に依りて是の如きの見を起し、是の如きの論を立つ、命は即ち是れ身なりと乃至廣く說けり。是の如きは亦た梵行に安住するに非ず、何となれば是の如き見は（一五七）第二空の所〔對〕治の〔妄〕見に依つて轉ずるに由る、此の〔妄〕見に非ざる者は應に解脫すべきが故なり。是の如き二の邪見の邊を遠離し、唯だ因果を見るを中道の行と名づけ、知る所の眞如を如實性と名づけ。（一五八）能く眞如を知るを無倒性と名づく。諸行あるに於いて假に有を施設す、謂く是れ諸行なり、諸行彼に屬するなり。若し勝義に依つて有是の如くんば彼の一切の行の若くは滅し若くは斷ずるを云何んが此は是れ諸行なり或

【一五二】實我は無し唯だ假りに言說を設けて「我」等を立つ、然るに此の言說假立以外に實我ありとする妄見を起さば云云の意なり。
【一五三】別物とは「我」を指す。
【一五四】彼とは「我」を指す。
【一五五】初の空とは補特伽羅無我即ち人空を云ふ。
【一五六】三種の妄見とは此卷前に出づる三門の妄見を云ふ。
【一五七】第二空とは法無我即ち法空を云ふ。
【一五八】是れ無分別智なり。

は行彼に屬すと說く可けんや。爾の時に於いて是の如き（二五九）二種得べからざるに由るが故なり。

（二六〇）復た次に、二の因緣に由りて當に知るべし所有緣起の一切種の相を施設すと、謂く總じて標擧し、或は別して分別す。云何んが二と爲す。一には（二六一）如所有性の故に、二には（二六二）盡所有性の故なり。云何んが如所有性なりや。謂く無明等の諸の緣生の法漸次に因果體性に相ひ稱ひ、及び此の因あり未だ斷せざるが故に彼の果あり未だ斷せず、此れ未だ斷せす因生ずるが故に彼れ未だ斷せず果生ず、是の如きを名づけて如所有性と爲す。云何んが盡所有性なりや。謂く無明等の諸の緣性の行一切種の相、彼の無明の如きは是れ前際の無智なり、乃至廣く差別の體相を說き、廣く名を分別することは應に知るべし前の攝異門分の如しと。建立分別は前の如く應に知るべし、是の如きを名けて盡所有性と爲す。卽ち是の如き如所有性盡所有性に依り若くは總じて標擧し、若くは別して分別す、先づ總じて標擧するを說いて名づけて初後と爲し、卽ち此に於いて復た廣く開示するを說いて分別と名づく。

（二六三）復た次に、二の因緣に由りて自作の苦樂をば施設す可からず記別す可からず、是の如く他作、（二六四）俱作俱非所作、無因生も當に知るべし亦爾なりと。云何んが二と爲すや。一には諸行は前に說ける所

【二五九】二種とは滅及び斷なり。
【二六〇】分別を解す。
【二六一】如所有性とは眞如平等の理なり　今は因果相稱の理を云ふ
【二六二】盡所有性とは一切差別の事なり
【二六三】自作を解す。
【二六四】俱作俱非所作とは自他俱作、非自作非他作なり。

の如く作用無きが故に、二には有餘の作者の有情得べからざるが故なり。此の中諸行は作用無きが故に自作の苦樂を此れ受け此れ領することは道理に應ぜず、又彼の有餘の作者の有情得べからざるが故に餘の受け餘の領することは道理に應ぜず、受の渇愛する所他の受を攝受するも亦た理に應ぜず。諸の緣あるが故に諸受生ずることを得るが故に無因生も亦た理に應ぜず。是の故に前の（一六五）三種の惡因論の邊、後の（一六六）一種の無因論の邊を遠離し、前の如き中道行の敎を覺了し、正行を勤修し能く衆苦を盡す。

【一六五】三種の惡因論とは㈠自作㈡他作㈢倶作倶非所作なり。

【一六六】一種の無因論とは前の無因生論なり。

巻の第九十四

攝事分中契經事緣起食諦界擇攝第三の二

復た次に、嗢柁南に曰く、

(一)『觸緣たると見の圓滿と、實と解と愛樂せざると、法住智と精進とにして、生處等を後と爲す。』(二)

(三)一切の觸受有に緣たる中に於て若くは諸の沙門或は婆羅門にして無因〔論〕惡因論を宣說する者は前の如く請問す、此れ作〔者〕なりや此れ受〔者〕なりやと、乃至廣く說けり。正法に安住する大師の弟子は若くは勝れたるにまれ若くは劣れるにまれ略して三種の無倒なる(四)記別あり、一には自宗を開〔示〕する記〔別〕、二には他宗を〔折〕伏する別〔別〕、三には有執無執雜染清淨の記〔別〕なり。當に知るべし此の中彼の問ふ所に於いて差別無く記すとは、謂く諸の苦樂は皆な緣より生ずる是れ我が宗致なりと、斯れを則ち名づけて自宗を開〔示〕する記〔別〕と爲す。若くは彼の問に於いて是の如き記〔別〕を作す、諸計の苦樂は自作なり他作なり(五)俱非俱作な

【一】此は前巻の總頌第三門觸を以て緣と爲る等を解する別頌なり。此の中更に十門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【二】等の字に猶預、苦樂の二門を略攝す。

【三】觸緣たるを解す。

【四】記別。此處にては教說教授と云ふ程の意なり。

【五】俱非俱作とは具に自他俱作と非自他俱作なり。

り無因にして生ずとするも一切の處に於いて觸に由りて受を生ず。何んぞ妄りに自他作等を計することを用ゐんや。若し觸の受に因たると現に得可からずして更に餘因を求めば巧妙なりと爲す可し、然れども觸の受に因たること既に現に得可きが故に、餘因を求むるを巧妙なりと爲すに非ずと、是の如く記「別」する者を是れを則ち名づけて他宗を「折」伏する記「別」と爲す。所以は何ん、二の因縁に由りて彼れ摧伏せらる、一には唯だ（六）根境識の「和」合を除いて餘の作者を顯示すること能はざるが故に、二には一切世間の現量「智」の如理に得る所の觸の因縁を誹撥すること能はざるが故なり。又彼れ自宗を立つること能はざるが故に、亦た復た他宗を破すること能はざるが故に摧伏せらると名づく。若くは彼の問に於いて是の如き記「別」を作す、我れ亦た唯だ根境界識に依りて假に自作、他作、倶作にして若くは苦、若くは樂なりと名づく、而も實我に於いて都べて執する所無し、汝此の中に邪なる執著あるが故に「我れ」隨ひ許さず、所以は何ん、若し執著あれば卽ち雜染なりと爲し、若し執著無ければ卽ち淸淨なりと爲せばなり。云何んが名づけて若し執著あれば卽ち雜染なりと爲すと爲すや。謂く彼の世間の聰慧ならざる者若し前際に於いて執著する所あれば、無明は行に縁たり、廣く說くこと前の如し、便ち中際の苦樂雜染に於いて、若くは中際に執著する所あるに於いても彼亦た前の如し、當に後際の苦樂雜染に於いても「亦た前の如し」。云何んが名づけて若し執著無ければ卽ち淸淨なりと爲すと爲すや。

【六】根境識の三和合して觸を生ず、別に作者ありて觸を生ずるに非ず。

謂く聰慧なる者若くは前際に於いて或は中際に於いて諸行に於いて我我所を執せず、彼れ前際に於いて諸受の因滅し已つて般涅槃し、或は後際に於いて諸受の因滅して當に般涅槃すべし。是れを第三の有執無執雜染清淨の記「別」と名づく。

(七)復た次に、若し無因惡因を棄捨し、因生の法の五種の因の中に於いて正見を獲得することあれば見圓滿すと名づく。(一)此の正しき法毘奈耶に於いて轉ず可からざるが故に、(二)亦た名づけて正直の見を成ずと爲すを得、涅槃に於いて意樂淨きに由るが故に、(三)亦た佛の證淨を成就すと名づく、所知の境に於いて智清淨なるが故なり、此の三緣に由り其の次第の如く正法に於いて趣向し親近し及與び正證すと名づく。云何んが名づけて因より生ずる法の五種の因と爲るや。一には惡趣の因、謂く諸の不善及び不善根なり。二には善趣の因、謂く一切の善及び諸の善根なり。三には(八)識住に於いて識をして住せしむる因、謂く(九)四種の食なり。四には現法後法の雜染の因、謂く一切の漏なり。五には清淨の因、謂く(一〇)諦緣起なり。若し此の(一一)諸因の自性に於いて如實に是れ其の自性なりと了知し、(一二)此の因緣に於いて如實に是れ其の因緣なりと了知し、(一三)因緣の滅に於いては如實に眞實に是れ滅なりと了知し、(一四)滅に趣く道に於いて如實に眞實に是れ

【七】見の圓滿を解す。
【八】識住。色、受、想、行の四蘊は第五蘊識の所住なれば識住と云ふ。
【九】四種の食。下出。
【一〇】諦緣起とは四諦十二緣起の能緣の智なり。
【一一】諸因の自性とは苦諦なり。
【一二】此の因緣とは集諦なり。
【一三】因緣の滅とは滅諦なり。
【一四】滅に趣く道とは道諦なり。

道なりと了知するを見聞滿すと名づく。緣生の事乃至無明を邊際と爲すが故に此を過ぎて更に緣生の因無く、唯だ此に由ると觀じ自義を觀ずること究竟す。

(二五)復た次に、略して三種ありて現法の中に於いて眞實に寂滅し、乃至壽量未だ永く止息せずして恆に相續して所知の境事に轉ず。彼の有學の正に修行する時に於いては學性を施設し、彼の無學に於いては是の思惟を作す、我れ一切をば盡して復た當に盡くさざるべしと、(二六)盡無生智の思擇する所なるが故に思擇法と名づく。云何んが三と爲す、一には六處、二には六處觸に緣たり、三には觸受に緣たるなり。當に知るべし此の中所有る多聞なる諸の聖弟子は領受する所に隨つて卽ち彼の受に於いて如實に徧く知ると。又卽ち彼に於いて厭離し、滅せんと欲して正行を勤修す。又能く如實に彼の受は觸に引生せられ、觸は復た彼の六處に由りて引生せられ、卽ち彼の觸の引因たる六處を了知し、厭離し滅せんと欲して正行を勤修す。又彼の受と觸と及び六處とに於ける一切の實事を略攝して一と爲し、一切は無常に由つて滅すれば滅法と名づくと了知し、已に現法の中に於いて此の一切の三種の實事無常滅法なるに於いて前の如く修行し遠離し滅せんと欲す、此の正行に由りて學常委なりと名づく。又此の正行を修行するに由るが故に造作する所無く究竟して解脫す、是の故に說いて擇法常委なりと名づく。曾て未だ得ざる所、曾て未だ證せざる所を證得せんと欲するが爲めに無間殷重なる方便を修行するを學常委なり

【二五】實を解す。
【二六】盡無生智とは盡智及び無生智なり。

と名づく。所有現法樂住に於いて退失あると無きが爲に無間に作す所、殷重に作す所、是れに由りて說いて擇法常委なり等と名づく。一切の事法を說く增上なる名句文身を名づけて（一七）法界と爲す。

（一八）諸有る無礙解を獲得するが故に名句文身は欲するに隨つて自在なり、是の故に說いて善く法界に達すと名づく。法界に於いて善く通達するに由るが故に即ち是の如き眞實なる想義に於いて更に餘名を以て其の樂ふ所に隨つて差別して宣說し、乃至能く七日七夜或は彼の量を過ぐるに於いて辭辯竭むこと無し。復た是の如き差別の種類を以て如實に宣說す、彼は是れ有爲の思の造作する所にして動轉し、羸頓にして病の如く癰の如しと、乃至廣く說けり。

（一九）復た次に、當に知るべし具に諸の阿羅漢を解するに、略して六種の記別の所解あり、一には有異門の記別、二には無異門の記別、三には智の記別、四には斷の記別、五には總の記別、六には別の記別なり。有異門の記別とは、謂く一あるが如き或は他のもの請問し、或は復た自然に他をして佛の聖教に於いて多く恭敬を起さしめんと欲するが爲めの故に是の如く記す、我れ今に於いては一の疑惑無しと。無異門の記別とは、謂く是の記を作す、我が生已に盡きぬと、乃至廣く說けり。智の記別とは、謂く有るが問うて言はく、云何にして知るが故に、云何にして見るが故なりやと、彼の生已

【一七】名句文身を法界と名づくるに三說あり(一)名句文は淸淨なる法界より等流するが故に能生の因に從つて所生の名句文を法界と名く、(二)名句文に依つて能く法界を證す、故に名句文を法界と名く、(三)名句文は法界を詮顯するが故に名句文を法界と名く。

【一八】諸有る無礙解とは法義詞辯の四無礙解なり。

【一九】智を解す。

に盡くれば便ち記別して言はく（一〇）生の緣盡くるが故に彼の生已に盡くと、是の如き相を以て自己の善解脫智の所攝の盡智を記別するを智の記別と名づく。又卽ち此に於ける別の記別とは、謂く卽ち彼の（一一）因緣の有を記別し、又復た（一二）彼の生の因緣の因緣の諸取を記別し、又復た此の所取の相を記別し、如實に知るが故に、如實に見るが故に取をしてあること無からしむ。總の記別とは、謂く卽ち此の一切の所說に於いて、所有る諸受は皆な苦なりと了知し、既に了知し已つて彼の生をして盡くさしむ、是の如く記する者を總の記別と名づく。斷の記別とは、謂く卽ち彼の內の解脫に由るが故に一切の貪愛の因緣皆な盡くと、是の如く記する者を斷の記別と名づく。此の斷の記別は卽ち前に說いて別の記別と名づくるが如し。此の總の記別は當に知るべし略して三種の行相に由ると。謂く薄伽梵の說きたまへる所の諸結は我れには皆なあること無しと、是れを最初の斷の總の記別と名づく、謂く諸有る結皆な永へに斷ずるが故なり。又我れ是の如き正念に安住す、我れ此の正念に安住するに由るが故に一切の貪愛惡不善法をば能く畢竟して（一三）心に漏さざらしむと、是れを第二の斷の總の記別と名づく、謂く恒住の故なり。又此の中に於いて自ら憍慢無し、是れを第三の斷の總の記別と名づく、謂く餘の增上慢あること無きが故なり。是の如く總じて說くに六の記別あり。

【一〇】生の緣とは生支の因緣たる有支を云ふ。
【一一】因緣の有とは有支なり。
【一二】生支の因緣は有支、有支の因緣は取支なり。
【一三】心に漏さず。煩惱生ずるを漏と云ふ、今貪愛等を心に生ぜしめざるを云ふ。

(二四)復た次に、三種の法あり、是れ諸の世間の愛する所、樂ふ所なり、内に依りて說く、一には勢力、二には妙色、三には壽命なり。復た是の如き三法を違害して能く所[對]治の愛樂すべからざる三種の別法を引くあり、一には疾病、二には衰老、三には夭歿なり。若し三學に於いて邪行を起す時は便ち疾病、衰老、夭歿を超越するに堪任せず、若し三學に於いて正行を起す時は便ち能く是の如き三事を超越す。云何んが三學なる。一には增上戒學、二には增上心學、三には增上慧學なり。云何んが名づけて所有の增上戒學に依止して諸の邪行を起すと爲すや。謂く一あるが如き(二五)初の學の中に於いて毀犯する所あり、或は自を觀、或は他を觀て羞恥することあること無く、既に自ら羞恥無きに安住し已つて便ち一切の惡不善法に於いて自ら防護せず、既に彼の法に於いて自ら護らず、已に佛法僧に於いて恭敬を起さず、諸の所學の教授教誡に於いて都べて敬忌すること無し。是の因緣に由りて若し此の事に於いて他のもの正に諫擧すれば便ち彼に於いて忍受すること能はずと言ひ、自ら亦た彼に於いて默して與に語らず。處非處に於いて能く正に諫擧する補特伽羅をば憎背し違避し、邪行を行じ己が法に同じき者に於いては親近し交遊し、好んで共に安止す。惡友と共に安止するに由るが故に諸の聖賢に於いてすら尚ほ憎背を生ず、況んや當に彼れに詣りて躬ら敬覲を申ぶべけんや。設ひ復た彼に住せんに爲めに正法を說くとも聖に憎背するが故に而も聞かんことを欲せず、設ひ耳を屬すれども心に敬順すること

【二四】愛樂せざるを解す。
【二五】初の學とは增上戒學なり。

無く、唯だ違諍を懷くのみにして知解の爲めにせず、而も聽聞することあるとも處非處に正行を分別する諸の智論の中に於いて安住することを樂はず、彼れ内に違諍の心を懷くに由るが故に聽聞することありと雖も而も信受せず、亦た依行せず。又諸の賢聖默して與に語らず、是の思惟を作す、是の如き行者は與に教授教誡を語るに堪へず、彼れ既に自然に法として自ら制する無しと。又賢聖の爲めに棄捨せられ、其の内心に於いて恆に寂靜ならず、外の身語意猥雜にして住し、勃惡貪婪にして彊口憍傲す。是の如き事に於いて罪過を見ず、多く毀犯する所をば如法に悔いず、數習するに由るが故に漸次に一切の尸羅を毀犯す。當に知るべし是れを所有の增上戒學に依止して諸の邪行を起すと名づくと。此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ所有の增上戒學に依止して起す所の正行なりと。云何んが名づけて所有の增上心學に依止して諸の邪行を起すと爲すや。謂く行ずる時に於いて正理の如くならず、境界の諸相隨好を執取し是の因緣に由りて妄念を發起し、卽ち其の中に於いて過患を觀ず、煩惱を生じ已つて堅く執して捨てず、是の因緣に由りて正知に住せず、或は住する時に於いて遠離處に居りて第二あること無し、卽ち念妄を以て正知にして住せざるを所依止と爲して心外に馳散す。是の如きを名づけて所有の增上心學に依止して諸の邪行を起すと爲す。此れと相違するは當に知るべし卽ち是れ所有の增上心學に依止して起す所の正行なりと。云何んが名づけて所有の增上慧學に依止して諸の邪行を起すと爲すや。謂く一あるが如き近き聖賢を離れ、近き惡友に依りて不正の法を聞き

勝解を因と爲して正理の如く諸法を思擇せず、諸の惡欲及び諸の惡見に於いて喜樂して受行し、或は廣大なる所覺所得の微妙の法の中に於いて而も自ら矜慢す。是の如きを名づけて所有の増上慧學に依止して諸の邪行を起すと爲す。此れと相違するは當に知るべし即ち是れ所有の増上慧學に依止して起す所の正行なりと。此の中異生の補特伽羅は是の如き三種の學の中に依止して起す所の邪行[のために]能く異生地を超ゆるに堪ふることあること無し。無倒に（二六）正性離生に趣入すれば永へに（二七）三結を斷ずるも、永へに三種の結を斷ぜざるに由るが故に能く修道に依止して阿羅漢[果]を得、現法の中に於いて餘す無く永へに貪瞋癡等の一切の煩惱を斷じ、當來の疾病、衰老及以び夭歿を超越するに堪ふることあること無し。此れと相違するは當に知るべし即ち是れ三學の中に於いて如實に正に一切の白品を行じ、廣く說かば乃至當來の疾病、衰老及以び夭歿を超越すと。

（二八）復た次に、若し苾芻あり、淨尸羅を具へ、（二九）別解脫清淨の律儀に住し、増上心學の増上力の故に初靜慮の（三〇）近分の所攝の勝れたる三摩地を得て以て依止と爲し、増上慧學の増上力の故に法住智及び涅槃智を得、此の二智を用つて以て依止と爲し、先の（三一）四種の圓滿

【二六】正性離生とは見道なり。正性とは眞知、離生とは欲界の生を離る、見道にては欲界の生を離れ眞知を見る。
【二七】三結とは貪瞋癡なり。
【二八】法住智を解す。
【二九】別解脫戒なり、一戒を持つ毎に解脫あるが故に名づく。
【三〇】靜慮に近分と根本とあり、根本定とは正しき定なり、近分定とは根本に近き定即ち根本定に入る前の加行方便の定なり。
【三一】四種の圓滿は次に出づ。

に由りて遠離受學し轉ずる時心をして一切の煩惱を解脫し、阿羅漢〔果〕を得、(三一)慧解脫を成ぜしむ。

此の中云何んが(三二)法住智と名づくるや。謂く一あるが如き緣性緣起の無倒なる敎を聽聞し隨順し已つて緣生の行因果の分位に於いて異生地に住し、便ち能く如實に聞思修より成ずる所の作意を以て如理に思惟し、能く妙慧を以て苦は眞に是れ苦なり、集は眞に是れ集なり、滅は眞に是れ滅なり、道は眞に是れ道なりと悟入し信解す、是の如き等の其れの如き因果安立の法の中の所有の妙智を法住智と名づく。又復た云何なるを涅槃智と名づくるや。謂く彼れ法爾として若くは苦集滅道に於いては其の妙慧を以て是れ眞に苦集〔二諦〕に於いては厭逆の想に住し、滅涅槃に於いては寂靜の想を起す、所謂究竟、寂靜、微妙にして一切の(三四)生死の所依を棄捨すと、乃至廣く說けり。是の如く彼の法住智に依止し、及び苦若くは苦の因緣に於いては厭逆の想に住し、便ち涅槃に於いては能く妙慧を以て悟入し信解し、寂靜等なりと爲すに因りて、是の如き妙智を涅槃智と名づく。

(三五)復た次に、善說の法毗奈耶の中に於いて諸の聰慧なる者は正に六種の圓備を觀じ、現前に能く勤めて精進して住することを發起するに足れり。云何なるを名づけて六種の圓備と爲すや。一には大師圓備、二には聖敎圓備、三には聖敎に入り易き圓備、四には自義を證得するに無上ある圓備、五に

【三一】慧解脫とは觀慧を以て煩惱障より解脫す。
【三二】法住智とは四諦を觀ずる智なり。
【三四】生死の所依とは生死流轉する所依の身なり。
【三五】精進を解す。

は一切如理無間なる宣說の圓備、六には聖の言將ある圓備なり。云何なるを名づけて大師圓備と爲すや。謂く諸の如來にして十力四無所畏、是の如き等を成就したまふを大師圓備と名づく。云何なるを名づけて聖教圓備と爲すや。謂く自ら稱して言はく、「我れ今已に〔三六〕大仙の尊位に處し、能く〔三七〕梵輪を轉ず」と、大衆の中に於いて正に師子吼し、一切の順逆の緣起寂滅涅槃、是の如き等を開示したまふを聖教圓備と名づく。云何なるを名づけて聖教に入り易き圓備と爲すや。謂く此の聖教の所有文句其の性明顯にして其の義甚深なり、此の聖教能く正に諸の甚深の義を開發するに由るが故に文句を說くこと其の性明顯にして其の義甚深なり、是の如きを名づけて聖教に入り易き圓備と爲す。云何なるを名づけて自義を證得するに無上なる圓備と爲すや。謂く沙門或は婆羅門無く、如來の所に於いて能く正に通慧を開覺するを勝れたりと爲す、是の故に他のもの〔三八〕自義の應に得べき所の義、應に覺るべき所の義を證得するに唯だ如來所說の法教のみありて妙と爲し上と爲す、若し此れを過ぎては言辭の路絕す、是の如きを名づけて自義を證得するに無上なる圓備と爲す。云何なるを名づけて一切如理無間なる宣說の圓備と爲すや。謂く諸の如來所說の法教は普く一切の人天の爲めに無倒〔なる教〕を開示し一切の法を開示し、師捲を作さず遺〔漏〕無く開示したまふ、是の如きを名づけて一切如理無間なる宣說の圓備と爲す。云何なるを名づけて聖の〔三九〕言將なる圓備と爲す。謂く能く一切

〔三六〕大仙とは佛を云ふ。
〔三七〕梵輪とは法輪と同じ、佛の說法を云ふ。
〔三八〕自義とは自利に同じ。
〔三九〕言將、將とは嚴正數。

の疑惑を斷じ、及び能く一切の善根、一切の善法の所依たる大信を生起し、現量の（四〇）安足の所を得可き大師現前するとあり。是の如きを名づけて聖の言將ある圓備と爲す。諸の聰慧の者は正に此の六圓備を觀じ、現前に能く勤めて精進して住することを發起するに足り、三學の中に於いて增上戒に依りて瑜伽を修習し、增上心に依りて不放逸を修し、增上慧に依りて大師の教に於いて瑜伽の行を修す。若し懈怠心に安住することある者は當に知るべし二種の過患を希求すと。一には現法當來に能く衆苦を生ずる一切の煩惱を希求し憂苦して安隱に住せず、二には希求して所有未だ證せざると已に證せるとの一切の善法を退失し、能く能く善趣涅槃に往く（四一）大義〔利〕を引くことを退失す。此れと相違して勤めて精進する者は當に知るべし二種の勝利を希求すと。此の精進は諸の善法に於いて未だ證せざるをば能く證して退失すること無き時能く（四二）自義、（四三）他義、（四四）倶義を辨ず。云何なるを名づけて能く自義を辨ずと爲すや。謂く出家し已つて其の二相に由りて說いて果ありと名づく。一には煩惱の離繫を證得する究竟の涅槃なり、謂く（四五）離繫果なり。二には能く世間の勝れたる樂を起す、謂く善趣に往く樂の異熟果なり。云何なるを名づけて能く他義を辨ずと爲すや。謂く廣く他の爲めに法要を宣說し、其をして能く世間の善趣に往き、涅槃を究竟せしむ。云何なるを名づけて能く

【四〇】安足の所とは所依の義根據の意なり。
【四一】大義利とは大なる利益なり。
【四二】自義とは自利なり。
【四三】他義とは利他なり。
【四四】倶義とは自利利他の二利なり。
【四五】離繫果とは煩惱の繫縛を離れて證得する涅槃の妙果なり。

倶義を辦ずと爲すや。謂く自ら淨き〔四六〕福田を修治し、性となり淨信の邊より得る所の如法なる衣服等の事を受用するに堪任し、此の受用に由りて己が身を攝養し、其をして能く一切の善品に順ぜしめ、又能く他をして已に作せる所に於て大果報を得せしむ。謂く當來に於いて善趣に往くが故に大勝利を得。謂く當に財寶僕從皆に圓滿することを獲得するが故に大榮盛を得べし。謂く當に壽命、色力、樂、辯才等自ら圓滿することを獲得するが故に〔四七〕大修廣を得べし。謂く卽ち上に得る所の〔四八〕三處に於いて長時に隨逐して間斷無きが故に、四種の相に由りて應に世尊の所說の聖教を善說の法と名づくるを知るべし、一には能く寂靜に趣き、能く有餘依涅槃界を證得せしむるが故に、二には能く般涅槃し能く無餘依涅槃界を證得せしむるが故に、三には能く菩提に趣き能く聲聞「の果」、獨覺「の果」、菩薩の「無上正等三菩提を證得せしむるが故に、四には〔四九〕善逝の〔五〇〕分別最も極めて究竟して現量に顯はす所、無上なる大師の開示したまふ所なるが故なり。

〔五一〕復た次に、四の圓滿を具へて能く聖處に生ず、若くは一あるに隨つて此の圓滿を成ず、善說の法毘柰耶の中に於いて正に修行する時を名づけて善く來り善く出家する者と曰ふ。云何なるを名づけ

〔四六〕福田とは布施等の善根を云ふ、此の善根より諸の功德福業を生ずること田の能く穀を生ずるが如くなればなり。

〔四七〕大修廣とは廣大なる修行なり。

〔四八〕三處とは(一)大勝利を得ること(二)大榮盛を得ること(三)大修廣を得ることなり。

〔四九〕善逝とは佛の十號の一、妙往の義、無量なる智慧を以て能く諸惑を斷じ、世間を出過せるものを云ふ。

〔五〇〕分別とは佛の分別智なり。

〔五一〕生處を解す。

て四種の圓滿と爲すや、一には增上なる意樂の圓滿、二には根の圓滿、三には智の圓滿、四には卽ち聖處に於いて佛の出世あるに値ひたてまつることを得る圓滿なり。增上なる意樂の圓滿とは、謂く一あるが如き般涅槃に於いて極めて淨く修治する增上なる意樂にして方に乃ち出家し、債主及び諸の怖畏の爲めに逼迫せらるるに非ず、乃至廣く說けり。當に知るべし是の如くにして出家する者を善出家と名づけ、聖處に生ずと。根の圓滿とは、謂く一あるが如き眼耳缺くること無く、半擇迦に非ず、(五三)支分を缺かず、是の如く根に缺くること無きことを得るに由るが故に善說の法毗奈耶の中に於いて出家し正法を說くに堪任し、時に能く聽受するに堪ふ。智の圓滿とは、謂く一あるが如き性となり愚戇ならず、下品の愚癡の障あること無きが故なり、亦た瘖瘂ならず、中品の愚癡の障あること無きが故なり、手を言に代ふるに非ず、上品の愚癡の障あること無きが故なり、三種の智の愚癡の障を離るるが故に力能ありて善說惡說の所有法義を解するなり。卽ち聖處に於いて佛の出世あるに値ひたてまつることを得る圓滿とは、謂く今の時薄伽梵釋迦牟尼世に出現したまふ、是れを如來應正等覺と爲す、乃至廣く說けり。若し廣く解釋することは應に知るべし前の攝異門分の如く、正法を宣說し、寂靜に趣く等も廣く說くこと前の如しと。當に知るべし此の中聖處に生ずるが故に名づけて善く來り、善く出家を得と爲し、根缺くること無きが故に、愚戇ならざるが故に、瘖瘂ならざるが故に、亦た手を以て其の言に代へざるが故に、善く人身を具足

【五三】支分とは四支等なり。

することを獲得すと名づく。

(五三)復た次に、其れ緣生の諸行の流轉に於いて觀行を修する者に略して二種の(五四)猶豫を作す法あり。云何なるを名づけて二と爲すや、一には無因を說く論を承習し、二には惡因を說く論を承習す。此の中無因論を承習する者は一切種皆な所因無しと觀じ、便ち疑惑を生ず、云何んが諸法因無くして轉ずやと。其の(五五)惡因論を承習することある者も亦た疑惑を生ず、云何んが彼の(五六)相似せざる因理に稱はざる因に由りて諸法の轉ずることありやと。若し多聞なる諸の聖弟子ありて(五七)二種の非眞實論を遠離し、正に流轉は是の因緣に由ると觀じて善く決定することを得れば疑惑あること無く、內に眞實を證す。若し是の處に於いて多聞なる諸の聖弟子ありと說かば當に知るべし此の中には是れ(五八)諸の異生なりと。若し是の處に於いて唯だ其の諸の聖弟子あるのみなりと說かば、當に知るべし此の中には(五九)已に諦理を見たりと說くと。

(六〇)復た次に、正法の中に於いて略して三種の補特伽羅ありて猶ほ苦惱ありて安隱に住せず。云何んが三と爲すや。謂く、一あるが如き善說の法毗柰耶の中に於いて涅槃を求めんが爲めに涅槃に趣向

【五三】猶豫を解す。
【五四】猶豫とは疑惑なり。
【五五】惡因論とは因果相應せざる不正なる因果を說く論なり。
【五六】相似せざる因とは果と相應せざる因、自在天等を諸法の因とするが如き也。
【五七】二種の非眞實論とは無因論と惡因論なり。
【五八】多聞あるが故に尙是れ凡夫異生の分際なりとす。
【五九】已に諦理を見たるは眞實人なり。
【六〇】苦惱を解す。

し、家法を棄捨し、非家に趣き、既に出家し已つて唯だ能く所有禁戒を受持し、便ち喜足して住し、時時に於いて轉せず、進んで增上心學、增上慧學を修習し、彼れ先時の居家の所有受用せし境界を捨つるも、未だ無上なる安隱を隨得し涅槃道を證する能はず。中間に處在して猶ほ苦惱ありて安隱に住せず、是れを第一の補特伽羅と名づく。復た一あるが如き唯だ受くる所の禁戒に於いて喜足し安住せざるのみならず。然も其れ未だ異生地を超ゆることを能はざるに由るが故に、一切の法に於いて他に緣藉するが故に常に他の面を視、常に他の口を觀る、何ぞ當に如實に所知を知り所見を見るべけんや、恆に他の所に於いて正法の敎授敎誡を聞くことを求むと雖も然も其の自心に疑あり惑あり、猶ほ苦惱ありて安隱に住せず、是れを第二の補特伽羅と名づく。復た一あるが如き是れ（六一）學迹を見たるも、放逸にして住し、現法の中に於いて究竟の涅槃を證得するに堪へず、能く（六二）第二の有體生起の因を攝受するあり、（六三）第二住あれば猶ほ苦惱ありて安隱に住せず、是れを第三の補特伽羅と名づく。是の如き三種の補特伽羅に復た（六四）三異の補特伽羅あり、諸の快樂ありて善く安隱に住す。謂く阿羅漢は一向に樂住するなり。

復た次に、嗢柁南に曰く、

【六一】學迹を見たりとは學道を見證せるなり即ち見道に入りたるなり。

【六二】第二の有體生起の因とは次生尙ほ欲界に生を受くる因を云ふ。

【六三】第二住とは次生欲界に生住すること。

【六四】三異の補特伽羅とは前の三種の補特伽羅と異れる者を云ふ。

（六五）『滅あると若くは沙門、婆羅門の受智と、流轉と來往とにして、佛の順逆を後と爲す。』

（六六）諸の學迹を見、（六七）滅ある寂靜なる涅槃に於いて他に隨はず、内の聖慧眼を信じて自ら能く觀見すと雖も、然も猶ほ未だ身を以て觸證すること能はず。譬へば人あり熱渇に逼められ、馳せて深井に詣り、肉眼を以て井中の諸の塵穢を離れたる清冷なる美水を現見し並に水器に給すと雖も、而も此の水に於いて身未だ觸證せざるが如し。是の如く有學［の者］聖慧眼［もて］求むる所の後の煩惱斷じ、最も極めて寂靜なるを現見すと雖も、而も此の斷に於いて身未だ觸證せざるなり。

（六八）復た次に、諸の沙門若くは婆羅門あり、貪瞋癡に於いて餘す無く斷滅するもの眞の沙門の義、婆羅門の義をば全く未だ證得せず、而も諸の世間のもの沙門の想、婆羅門の想を起し、彼も亦た自ら是れ眞の沙門なり眞の婆羅門なりと稱す。世間のもの彼れに於いて是の想を起すと雖も然も彼は但だ是れ世俗の沙門及び婆羅門にして第一義には非ず、若くは第一義の諸有る沙門及び婆羅門は皆な彼を許して［眞の］沙門及び婆羅門なりと爲るに忍びず。所以は何ん、彼れ如實に諸の（六九）雜染の法と（七〇）雜染の法の因とを了知すること能はず、亦た如實に（七一）彼の滅、（七二）彼

【六五】此は前卷の總頌第四門滅ある等を解する別頌なり。此の中更に六門を列し、長行に於て次第に解釋す。
【六六】滅あるを解す。
【六七】滅とは修道の惑滅せるを云ふ。
【六八】沙門婆羅門を解す。
【六九】雜染の法とは苦諦なり。
【七〇】雜染の法の因とは集諦なり。
【七一】彼の滅とは雜染の法の滅したる滅諦なり。
【七二】彼の滅に趣く行とは道諦なり。

の滅に趣く行を了知すること能はざるに由ればなり。雜染の法とは、謂く老死支の所攝の衆苦及以び生支なり。雜染の法の因に復た二種あり、一には愛の所作、二には業の所作なり。愛の所作とは、謂く緣起の逆次の道理に由る有、取、愛支なり、若くは無明觸より生ずる所の諸の受〔支〕。若くは無明觸及び無明界に隨ふ所の六處〔支〕なり。業の所作とは、謂く緣起の逆次の道理に由る名色、識、行〔支〕及び卽ち彼れに於いて如實に知らざるなり、(七三)法住智の如く尙ほ未だ了すること能はず、況んや當に彼の(七四)諦現觀の時の如く能く偏く了知すべけんや。或は修道の如く未だ偏く了知せず、無學地の如く未だ超越すること能はざるなり。

(七五)復た次に、略して二種の明觸より生ずる法に由りて其の緣生の一切の行の中に於いて四諦の理に依り現觀に趣入す。云何んが二と爲す。一には所緣を領納するを性と爲るに由りて明觸より受を生ず、二には所緣を揀擇するを性と爲るに由りて明觸より慧を生ず。當に知るべし此の中(七六)十一支に於て四諦を安立し、此の一一の支諦に依りて(七七)四十四事を建立す、卽ち明觸より生ずる所の諸受に依りて是の如き四十四種の受事の差別を宣說し、卽ち明觸より生ずる所の諸慧に依りて是の如き四十四種の智事の差別を宣說す。此の中(七八)苦際に作す所の老死〔支〕は唯だ果なるのみにして因に

【七三】法住智とは四諦を知る智なり。
【七四】諦現觀の時の如きとは眞如を證知する如實智を指す。
【七五】受智を解す。
【七六】十一支とは十二因緣の中無明を除ける自餘の十一支なり。
【七七】四十四事。十一支に各四諦を立つるが故に四十四諦を得。
【七八】苦際とは苦果の位なり。

は非ず、其の前際に於いて發す所の無明「支」は唯だ因なるのみにして果には非ず、其の餘の有支は亦たは因、亦たは果なり。(七九)三時の(八〇)徧智に差別あるが故に、前に說ける所の如き「三時の」(八一)決定の徧智に差別あるが故に、法住智所攝の能取の智の無常の性に差別あるに由るが故に當に知るべし(八二)七十七種の智事の差別を建立すと。是の如く諸諦の一切の行相を歷觀し、此より無間に(八三)諦現觀に入り、漸次に修習し、乃至阿羅漢果を獲得することを顯示す。

(八四)復た次に、三種の相に由りて(八五)緣生の行に於いて應に正に流轉の(八六)漸次を了知すべし。何等をか三と爲す。一には(八七)因增益するが故に、二には(八八)果生起するが故に、三には(八九)果增集するが故なり。是の如き一切を略攝して一と爲し、總じて諸法と名づく、(九〇)若くは增し、若くは生じ、若くは集る。(九一)因果滅するに依りて其の所應の如く當に知るべし說いて若くは減じ、若くは滅し、若くは沒すと名づくと。是の如き意趣の差

【七九】三時とは過去、現在、未來なり。

【八〇】徧智とは推因觀の智。生は老死に緣たり、乃至無明は行に緣たり等と觀ずる智なり。

【八一】決定の徧智とは審因觀の智。卽ち生は老死に緣たるに非ず、乃至無明は行に緣たるにあらざるに非ず等と觀ずる智なり。

【八二】七十七種の智。十一支各各に四諦智と徧智と決定の徧智と法住智との七智を立つるが故に七十七智を成ず。

【八三】諦現觀とは諦理を證知する見道を云ふ。

【八四】流轉を解す。

【八五】緣生の行とは緣より生ずる法なり。

【八六】漸次とは次第と同じ。

【八七】是れ牽引因なり。

【八八】是れ生起因なり。

【八九】是れ牽引生起の二因なり。

【九〇】前の三相を牒し結ぶ、是れ流轉門に約して說く。

【九一】因果滅云云。因滅するが故に果滅す、是れ還滅門に約して說く。

別の道理は法性に違はず。復た別義あり、(九二)初中後際時差別するが故に、欲色無色界差別するが故に其の次第の如く若くは増し、若くは減じ、若くは生じ、若くは滅し、若くは集り、若くは沒す、應に正に了知すべし。

(九三)復た次に、當に知るべし略して二種の雜染ありと、一には業愛の雜染、二には妄見の雜染なり。此の二の雜染は二品に依る、一には在家品、二には出家品なり。應に知るべし此の中業愛の雜染より造作する所なるが故に(九四)思の所作と名づけ、妄見の雜染の邪計起るが故に計の所執と名づくと。此の中異生の若くは在家品、若くは出家品は二の雜染を具へ、諸纒に由るが故に、及び隨眠の故に、彼の所縁に因り四識住に於いて心をして諸の雜染を生ぜしめ已つて後有を招集し、循環往來して解脱を得ず。有學は(九五)迹を見て妄見雜染をば已に永へに斷ぜるが故に唯だ我慢の依處たる習氣のみありて尙ほ餘すあるが故に新業を造らず、後有の業愛の雜染を欣ばず、諸纒の能く雜染を爲すあること無きも、唯だ隨眠依附し相續して能く雜染を爲すのみあり、彼の所縁に因り諸の識住に於いて其の心を雜染し、後有を招集す。若くは諸の無學は(九六)二種の雜染の纒及び隨眠をば皆な永へに斷ずるが故に卽ち現法の中諸の識住に於ける其の心の雜染及與び當來招く所の後有の一切「の雜染」

【九二】初中後際とは過去、現在、未來の三際なり。

【九三】來往を解す。來往とは循環輪廻するを云ふ。

【九四】思の所作。業の體は思の心所なり、故に業の所作を思の所作と云ふ。

【九五】迹とは諦迹、諦理なり。

【九六】二種の雜染とは前の業愛の雜染と妄見の雜染なり。

皆な無し。

(九七)復た次に、過去の諸佛は菩薩たりし時如理に縁起の法を思惟し已つて無上正等菩提を證覺し、今の薄伽梵も亦た縁起に於いて正に思惟し已つて無上正等菩提を證覺す。過去の佛の如きは菩提を得已つて卽ち縁起の作意順逆の道理を攀縁するに於いて方便し隨修し、現法樂住し已つて安樂に住したまへり、今の薄伽梵も亦た復た是の如し。(九八)彼れ無量なりと雖も(九九)世間の七劫と相似するを說くが如くなるが故に唯だ七〔佛〕と說く、是の如き無上正等菩提すら尙ほ猶ほ如實に縁起を知るが故に未だ證せざるを能く證し、證し已つて現法樂住を獲得す、況んや(一〇〇)餘の下劣なる所有の菩提をや。又如實に縁起に攝受する(一〇一)五支を等覺せんが爲めに斷の方便を爲す、前の如く應に知るべし。又此の縁起の總略の義をいはば、謂く(一〇二)轉品に依りて(一〇三)因の諸苦あり、又(一〇四)還品に依りて(一〇五)因の無漏の所有の諸法あり、又(一〇六)因苦の因縁の諸漏又(一〇七)彼の諸漏の所依

【九七】佛の順逆を解す。順逆とは十二縁起の順逆の道理なり。

【九八】彼れとは過去の諸佛なり。

【九九】世間の七劫。世界の壞劫期に更に水災劫火災劫等の七時期あり、之れを七劫と云ふ。此七劫に例同して過去七佛を說く。

【一〇〇】餘の下劣なる所有の菩提とは二乘の菩提なり。

【一〇一】五支とは(一)縁起の自性(二)縁起の因縁(三)雜染の因縁(四)清淨の因縁(五)清淨なり。

【一〇二】轉品とは流轉門なり。

【一〇三】因の諸苦とは流轉の因縁なり。

【一〇四】還品とは還滅門なり。

【一〇五】因の無漏の所有の諸法とは智斷の諸法なり。

【一〇六】因苦の因縁の諸漏とは流轉の因縁の愛取二支なり。

【一〇七】彼の諸漏とは愛取二支なり。

止の性にして無明觸より生ずる所の諸受あり、又因法住立する因緣あり、即ち現法の中に(一〇八)煩惱斷ずる者には唯だ(一〇九)依緣のみあり。又復た七種の淸淨に於いて漸次に修集するに依りて無造究竟の涅槃を得と爲す、應に知るべし是の如き緣生緣起に隨順する甚深の言敎を宣說するなりと。云何なるを名づけて七種の淸淨と爲すや。一には(一一〇)戒淸淨、二には(一一一)心淸淨、三には(一一二)見淸淨、四には(一一三)度疑淸淨、五には(一一四)道非道智見淸淨、六には(一一五)行智見淸淨、七には(一一六)行斷智見淸淨なり。云何なるを名づけて是の如き淸淨を漸次に修集すと爲すや。(一一七)謂く苾芻あり、(一一八)具足尸羅に安住し、別解脫律儀を守護す、廣く說くこと應に知るべし聲聞地の如しと。(一一九)彼れ是の如き具尸羅に由るが故に便ち能く悔ゆること無く、廣く說かば乃至心に正定を得、漸次に乃至具足して第四靜慮に安住す。(一二〇)彼れ既に是の如き定心を獲得し、漸次に乃至質直調柔にして安住し動ぜず、漏盡智通を證得せんが爲めに必定、四聖諦に趣向して現觀に證入し、見所斷の一切の煩惱を斷じて、無漏の有學の正見を獲得す。(一二一)正見を得る

【一〇八】煩惱斷ずる者とは阿羅漢なり。
【一〇九】依緣とは六依六緣なり。
【一一〇】戒淸淨は見道以前に在り。
【一一一】心淸淨。同上。
【一一二】見淸淨は見道に在り。
【一一三】度疑淸淨。同上。
【一一四】道非道智見淸淨は修道に在り。
【一一五】行智見淸淨。同上。
【一一六】行斷智見淸淨は無學道に在り。
【一一七】具足尸羅とは具足戒なり。
【一一八】戒淸淨を修集するを說く。
【一一九】次に心淸淨を修集するを說く。
【一二〇】次に見淸淨を修集するを說く。
【一二一】次に度疑淸淨を修集するを說く。

が故に、能く一切の苦集滅道及び佛法僧に於いて永へに疑惑を斷じ、畢竟斷ずるに由りて猶豫を超度するが故に度疑と名づく。（一二二）又正見の前行の道に於いて如實に了知して是れを正道と爲す、此に由りて能く見所斷と後の修所斷との惑を斷じ、又邪見の前行の非道に於いて實の如く了知する、是れを邪道と爲す。（一二三）道非道に於いて善巧「智」を得已つて非道を遠離して正道に遊び、又道に隨つて四種の行迹に於いて如實に了知す。何等をか四と爲すや。一には苦遲通、二には苦速通、三には樂遲通、四には樂速通なり、是の如き行迹をば廣く辯ずること應に知るべし聲聞地の如しと。（一二四）此の行迹に於いて如實に最初の行迹は一切應に斷ずべし、超越の義の故なり、煩惱の纏縛の義に由るが故には非ずと了知し、如實に第二第三の苦速樂遲の二種の行迹の（一二五）一分は應に斷ずべしと了知し、是の如く如實に初の全と及び（一二六）二の一分とを應に當に斷じ已つて樂速通に依るべしと了知し、正に勤めて修集して此より無間に永へに諸漏を盡し、現法の中に於いて無造究竟の涅槃を獲得し、身壞して已後無餘依般涅槃界を證す。是の如き七種の清淨を「所」依と爲して漸次に修集し、乃至諸漏永へに盡きたる無造涅槃を獲得す。當に知るべし此の中是の如き七種の清淨に於いて一切具足し、漸次に修集するに由りて方に乃ち無造涅槃を證得す、隨つて一を闕くに非ずと。是の故に應に、是の如

【一二二】次に道非道智見清淨を修集するを說く。

【一二三】次に行智見清淨を修集するを說く。

【一二四】次に行斷智見清淨を修集するを說く。

【一二五】一分とは苦の義と遲の義なり。

【一二六】二の一分とは第二の苦速と第二の樂遲との一分たる苦遲を云ふ。

き一切を求め、世尊の所に於いて熟ら梵行を修し、隨つて一を求むるに非ざるべし。又佛世尊は此の因緣に由りて、亦た具さに是の如き一切を施設したまへり、無造涅槃を證得せしめんが爲めにして、隨つて一をも捨つるに非ず。又此の中に於いて一一の說に依る、唯だ此のみに由るに非ず。亦た此を離るるに非ずして能く無造究竟の涅槃を獲るなり。是の如く應に此の中の緣性緣起の甚深なるを知るべし。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(二二七)『安立と因緣と、食の義を觀察すると、極て多き諸の過患とにして、雜染等を後と爲す。』

(二二八)四種の法ありて現法の中に於て最も能く諸根大種を長養す。云何んが四と爲すや。一には氣力、二には喜樂、三には愛すべき事に於いて專注し希望す。四には氣力、喜樂、專注、希望の依止する所の諸根大種並に壽並に煖安住して壞せず、是の如き四法をば其の次第に隨つて當に知るべし。別に四法を用て食と爲す、一には段「食」、二には樂受に順ずる觸「食」、三には有漏意會思「食」、四には能く諸根大種を執する識「食」なり。當に知るべし此の中段「食」は現法の氣力の與めに食と爲り、氣力に由るが故に便ち能く諸根大種を長養す。能く樂受に順する諸の有漏の觸は能く喜樂の與めに食と爲り、喜樂に由るが故に便ち能く諸根大種を長養す。若くは(二二九)意地に在りて

【二二七】此は前卷總頌第五門食等を解する別頌なり。此の中更に六門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【二二八】安立を解す。

【二二九】意地とは意識なり。

能く境に會する思を意會思と名づく。能く一切の愛すべき境に於いて專注し希望するが與めに食と爲り、專注希望に由るが故に便ち能く諸根大種を長養す。能く諸根大種を執受する識に由るが故に彼の諸根大種並に壽並に煖と識とをして身を離れざらしむるを因と爲して住す、是の故に識を說いて彼の住する因と名づく。彼れ住するに由るが故に氣力、喜樂、專注、希望は彼に依つて轉ず。是の如き四食能く已生の有情をして安住せしむ。又段〔食〕に由るが故に而も氣力あり、氣力あるが故に諸根大種皆な增長することを得。是の因緣に由りて諸有る身命を顧戀する愚夫は此の義の爲の故に、追求する時に於いて種種新なる善惡の業を造作し亦た增長せしめ、又能く種種の煩惱を增長す。段を說くが如く觸と意會思も其の所應に隨つて當に知るべし亦た爾なりと。此の〔三〇〕三門に由りて能く後有の業煩惱の識を集む、此れ現法に於いて業煩惱ありて隨逐する所なるが故に其の〔三一〕有取を成じ、便ち能く當來の後有を攝受す。是の如く四食は後有を求め後有を愛樂せしめ、其の後有に於いて未だ能く斷せざる者は能く後有を攝し、後有を隨攝す。又諸の段食は欲界の天に在りては之を名づけて細〔食〕と爲す、或は中有と母腹と卵殼とに處する〔ものの段食〕も當に知るべし亦た爾なりと。欲界の餘位の段食を麤〔食〕と名づく。觸〔食〕と意會思〔食〕と及以び識食との無色界に在るは當に知るべし細〔食〕と名づけ、餘處〔に在る〕を麤〔食〕と名づく、と。有色を〔所〕依と爲るは分別し易きが故に、無色を〔所〕依と爲るは分別し難

【三〇】三門とは前三食なり。
【三一】有取とは十二因緣の有支及び取支なり。

きが故なり。又此の諸食は當は知るべし異れる麤細の義門ありと、謂く若し能く已に生ぜる有情をして安住することを得せしむる者をば說いて名づけて麤〔食〕と爲し、有を求むる諸の有情を攝益する者は當に知るべし是れ細〔食〕なりと。是の如く應に四食を安立することを知るべし。

〔一三一〕復た次に、上に說ける所の如き諸根大種は集諦の攝に由り愛を先として生じ、彼をして增長することを得せしめんと欲するが爲めの故に四食を追求す。此の道理に由りて已に生ぜる有情は四食に由りて安住することを得と雖も然も本と愛を緣と爲るに藉るが故にあり。又愛あるが故に現法の中に於いて諸の食身に依り〔一三二〕三種の門に由りて業惑を滋長し、能く業惑の常に隨逐する所の有取の識を辨じ、現法の中に於いて後有を攝受す。是の故に一切の有を求むる有情は四食の攝益する所に由ると雖も、然も復た愛を緣と爲るに藉るが故にあり。又卽ち此の愛は現法の中に於いて無明觸より生ずる所の諸受を緣と爲るに由るが故に起り、此の無明觸より生ずる所の諸受は無明觸を緣と爲るに由るが故に起り、此の無明觸は先に串習せる諸の〔一三四〕無明界に隨ふ所の六處を緣と爲るに由るが故に起る。此の六處の後更に餘の因無く、現法の中に於いて唯だ此の六處展轉して相依る、有色の諸根は識に依止し、識は亦た識の執受する所の有色の諸根に依止す。此の因緣に由り六處已後更に所說無し。〔一三五〕或は復たある時は正法を聽聞するを

【一三一】因緣を解す。
【一三二】三種の門とは四食の中前三食なり。
【一三四】無明界とは無明の種子。界とは種子の義。
【一三五】前は流轉門に約して說き、以下還滅門に約して說く。

(一三六)外の支力と爲し、如理に作意し、正に勤めて修習するを内の支力と爲し、是の因緣に由りて正見生起し、正見生ずるが故に能く無明を斷じ、能く明を生じ、彼の現法の中の諸の無明界に隨ふ所の六處をば皆な除滅することを得。明界に隨ふ所の六處生ずることを得るを名づけて轉依と爲す。彼の品の (一三七)麤重皆な止息するが故に六處既に滅し、漸次に乃至愛亦た隨つて滅し、愛滅するに由るが故に諸食亦た滅し、能く後有を取る (一三八)諸法滅するが故に當に知るべし後有も亦た復た隨つて滅すと。是の故に應に知るべし明に處する者は後有を求めずと。

(一三九)復た次に、少法として生じ已つて安住することあること無し、亦た(一四〇)我の能食所食あること無し。此の因緣に由つて彼の何をか食と爲るや。然も唯だ未だ生ぜざる諸法の與めに生ずる緣と作る理に約し、唯だ法「能く」法を引くを說いて食の義と爲す。但だ法に由りて假に其の識の上に於いて假想に補特伽羅を施設し、此の四食に望めて說いて食者と爲す。世間の言說に隨順せんと欲するが爲に、世俗諦に約して是の如き補特伽羅あり、能く四食を食すと說くも、(一四一)勝義「諦」に約するに非ず。所以は何ん、若し、識あり生じ已つて安住す、體是れ (一四二)眞實の補特伽羅にして能食者と名くと說かば、應に識を立てて其の食性と爲すべ

【一三六】外の支力とは外の増上緣の義。
【一三七】麤重とは煩惱の種子なり。
【一三八】諸法は業煩惱を云ふ。
【一三九】食の義を觀察するを解す。
【一四〇】能食の我、所食の我あることなし。
【一四一】勝義諦に約せば補特伽羅も無く食者も無し。
【一四二】眞實の補特伽羅とは實我のこと、假立にあらざる有情を云ふ。

からず。未だ曾て補特伽羅あり、還つて自ら能く補特伽羅を食するを見ず、一相續の中に定んで二識同時に安住すること無し。是の故に識を立てて、體是れ眞實の補特伽羅にして能食者と爲るは道理に應ぜず。是の如く理に應ぜざることあるに由るが故に若し是の問を作さく、〔一四三〕誰れか識食を食するやと。當に知るべし此の問を非理なる問と爲す、と。若し是の問を作さく、〔一四四〕誰れか是れ能く識食を食する因緣なりやと。當に知るべし此の問を如理なる問と爲すと。能く緣起の理に悟入せしむるが故に復た二有あり、一には生有、二には業有なり。若し當來の後有性起する爲めに、今の現法の中の諸の業煩惱の隨逐する所の識を因と爲して能く當來の生有を引く、卽ち彼れ曾て前行の業性ありしを說いて業有と名づく。現法の中に於いて此の有あるが故に能く當來の生有に攝する所の後有をして生起せしめ、命終する時に於いて前際の六處纔かに無常にして滅すれば後際の六處尋いで復た續生す、卽ち此の六處識をば先時に於いては能引緣と爲し、復た今時に於いては結生緣と爲す。是の如く識母胎に入るに由るが故に名色あることを得、名色を緣として便ち六處あり。無明界に隨ふ所の六處を以て緣と爲るに由るが故に〔一四五〕相似の觸あり、漸次に乃至取を緣と爲るが故に後際に業をして轉じて其の有を成ぜしむ。是の如き諸法は先に未だ曾て有らず、一切新に別別の緣より起る、當に知るべし此の中都べて「眞實の」

【一四三】是れ非因緣の實我を認めて食者として問をなすが故に非理なり。

【一四四】因緣の假我を食者として問をなすが故に如理なり。

【一四五】相似の觸とは無明と相似する觸なり、是れ無明より生ぜられたる觸なれば無明と相似す。

觸者乃至有者無しと。能く所觸あり乃至有あるは唯だ諸法あるのみ、別して所食に名づけ、別して能食に名づく。是の故に因果は諸行に墮在し、相續し流轉して斷絕あること無し。(一四六)其の先際の業有に由りて後際の生有に往趣し、復た後際の業有に由りて還つて先際の生有に趣く。是の如く緣起轉廻して絕えず、此の世間より彼の世間に往き、彼の世間より此の世間に還る。是の故に唯だ法能く法を引く義なるを當に知るべし此の中に說いて食の義と爲すと。

(一四七)復た次に、三食を因と爲して能く三種の內苦をして生起せしむ、一には(一四八)界不平等より生ずる所の病苦、二には欲し希求する苦、三には求めて允らざる苦なり。初めの苦は段食を因と爲し、第二の苦は觸食を因と爲し、第三の苦は意會思食を因と爲すなり。段食の因緣は內の病苦を生ず、是の故に苾芻は當に段食は子の肉の如しとの想を觀ずべく、應に貪著すべからず。樂受に隨順する觸食の因緣は能く內の欲し希求する苦を生ず、是の故に苾芻は當に彼の(一四九)六種の觸處に順ずるは皮無き牛の如しと觀ずべし。應に是の觀を作すべし、若くは我れ六種の觸處に依り種種なる欲し希求する貪を發起し、便ち諸色に依止して住することを爲す、色に依止するが故に我れをして種種なる諸惡不善の尋思を發

【一四六】是は生處に約して說く、三世に約して說くにあらず。先際の閻浮提洲の身にて業を造り後際の西瞿陀尼洲に生じ、後際の西瞿陀尼洲の身にて業を造り復た先際の閻浮提洲に生ずるが如し。

【一四七】極めて多き諸の過患を解す。

【一四八】界不平等。界と四大種なり、四大不調和を界不平等と云ふ。

【一四九】六種の觸とは六根處の觸なり。

起せしむること皮無き牛の觸處の諸蟲に唼食せられて多く衆苦を生じ、安隱に住せざるが如しと、是の如く觀じ已つて初の觸處に於いて深く過患を見、無染にして住す。色に依るが如く是の如く、聲香味觸法に依るも當に知るべし亦た爾なりと。初の觸處に於いて深く過患を見、無染にして住するが如く、是の如く乃至第六の觸處に於いても當に知るべし亦た爾なりと。有漏の意會思食の因緣は能く內に求めて允らざる苦を生ず、是の故に苾芻は當に有漏の意會思食は一分の火の如しと觀じ、是の如く求むる所允らざれば能く身心の大熱惱を引くが故なりと觀察すべし。彼れ是の如き正しき觀察を作し已つて終に衣食等の事を希望して他家に往詣せず、是の故に求むる所允らざるより生ずる所の苦の爲めに觸せられず、其の心坦然として安樂に住す。是の因緣に由りて應に正に是の如き三食を觀察すべし、所謂段と觸と意會思との食なり。卽ち是の如き三食の因緣に由りて說く所の如き識に依る內苦を生ず、是の故に苾芻は當に識食は三百の鉾の鑽刺する所なるが如しと觀ずべし。所以は何ん、段食の因緣は能く非一種種衆多なる品類の病苦をして識に依りて起らしめ、樂受に隨順する觸食の因緣は能く倍增欲し希求する苦をして識に依りて起らしめ、有漏の意會思食の因緣は能く種種の求めて允らざる苦をして識に依りて起らしめ、是の因緣に由りて身命を顧みざればなり。是の如く如理に四種の食に於いて審正に觀察し、審觀を[所]依と爲して能く現法に於いて永へに諸食を斷じ、食永へに斷ずるが故に當來後有の〔一五〇〕苦際に至ることを得る

【一五〇】苦際とは苦の際限なり、苦盡き果つるを云ふ。

なり。

〔一五一〕復た次に、若し如實に此の四食を觀せざれば便ち喜貪の爲めに染汚せらる。若し是の二の爲めに染汚せらるる者は當に知るべし二種の過患を希求すと、一には當來、二には現法なり。四食の中に於いて有漏の意會思食の因緣にて專注し希望すると倶行する喜染を喜と名づけ、樂受に隨順する觸食の因緣にて能く喜樂に隨順する諸食に於いて多く染著を生ずるを貪と名づく。此の二の煩惱は現法の中に於いて能く識を染〔汚〕し、其をして四種の識住に安止せしめ、當來後有の種子を增長す。既に增長し已に後有の〔一五二〕生等の衆苦を生起す。當に知るべし是れを喜貪の二種の煩惱の作す所の當來の過患と名づくと。彼れ是の如く四食の中に於て喜貪の二種、煩惱に安住するに由りて、便ち現法に於いて諸の塵染あり、塵染に由るが故に貪著し變壞すれば現法の中に於いて便ち悲歎愁憂を生じ、萎頓懷感して住す、當に知るべし是れを喜貪の二種の煩惱の作す所の現法の過患と名づくと。

〔一五三〕復た次に、諸有る此の四種の識の中に於ける喜貪をば未だ斷せず、彼の六〔根〕處に有識身を攝すること猶ほし〔一五四〕臺觀の六處の窻牖の如し能く境を緣ずる〔一五五〕煩惱の日光の與めに入る依處と作る、是の光は此に於いて〔一五六〕或は上地に住し、或は下地に住す。既に住することを得已つて前に說け

〔一五一〕雜染を解す。
〔一五二〕生等の衆苦とは生老病死の苦なり。
〔一五三〕頌の等の字に略攝する所を解す。
〔一五四〕臺觀とは觀望臺なり。
〔一五五〕煩惱の日光。喜貪の煩惱を日光に例す。
〔一五六〕喜貪の煩惱或は上地を緣じ或は下地を緣ずるに例す。

る所の如く四識住に於いて能く識を染［汙］し當來後有の衆苦を生起す。若し能く是の如き喜貪の二種の煩惱を斷ずることあれば彼れと相違して境を緣ずる煩惱すら尙ほ起ることを得ず、況んや此に依りて入りて當に住することを得べけんや。又復た若し補特伽羅にして喜貪をば未だ斷ぜざるあれば、便ち（一三七）魔羅其の所に來詣するが爲めに、其の種種の猶ほし彩色せるが如き愛すべき境界を以て是の如き補特伽羅を彩畫して其をして種種なる煩惱の相貌を變生し顯現せしむ。當に知るべし是の如き補特伽羅は喜貪をば未だ斷ぜず、譬へば其の地の能く種種の煩惱の彩畫の爲めに所依處と作るが如しと。已に喜貪を斷ぜる補特伽羅は魔其の所に詣るとも［其の便を得ざること］前に廣く說けるが如し。當に知るべし是の如き補特伽羅は喜貪をば已に斷じ、猶ほし虛空の若く種種なる煩惱の彩畫の爲めに所依處と作るに非ずと。當に知るべし是れを諸食の中に於いて喜貪をば未だ斷ぜざるものの其の次第の如き所有の過患と名づくと。當に知るべし是れを諸食の中に於いて喜貪をば已に斷ぜるものの其の次第の如き所有の功德と名づくと。

【一三七】魔羅とは魔なり。

卷の第九十五

攝事分中契經事緣起食諦界擇攝第三の三

復た次に、嗢拕南に曰く、

(一)『如理と攝と集諦と、得と相と處と業と障と、過と黑の異熟等と、大義とにして得難きを後と爲す。』

(二)若くは諦智の增上に於ける如理及び不如理を如實に知らざれば漏を盡くすこと能はず、此れと相違して如實に知るが故に諸漏を盡くす。當に知るべし此の中不正法を聞き、寂靜の爲めにせず、調伏の爲めにせず、涅槃の爲めにせずして、起す所の諸智を不如理と名づけ、正法を聽聞し、上と相違するは當に知るべし如理なりと。又此の中に於いて惡說の法に住する補特伽羅は此の正法の佛、佛弟子の眞善なる丈夫に於いて瞻仰することを樂はず。別解脫の尸羅律儀にて根門を密護して正知にして住する是の如き等の類の賢聖の法の中に於いて自ら調伏せず、受學し轉せず、諸の聖諦に於いて聞思修の〔意もて〕照了し通達すること無し。又卽ち彼の諸の惡說の法毗柰耶の中に於いて不正法を聞き、邪なる勝解を起し、不

【一】此は第九十卷の總頌の中の第六門、如理等を解する別頌なり。此の中、更に十二門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【二】如理を解す。

如理に於いて如理[なりとする]顛倒妄想を生起し、不如理に於いて如實に是れ不如理なりと知らず。又正法の如理なるを聽聞するに於いて如實に是れ其の如理なりと知らず、知らざるに由るが故に諸の所有惡說、惡解の縛あり[解]脫無く、應に思惟すべからざる顚倒の法の中に於いて解了すること能はず、而も故に思惟し、諸の所有善說、善解の[解]脫あり縛無く、應に思惟すべき顚倒無き法、所謂契經及び應頌等乃至廣說に於いて解了すること能はず、而も思惟せず、是の如きを亦た非理なる作意と名づく。此の作意に由るが故に寂靜の爲めにせず、調伏の爲めにせず、涅槃の爲めにせざるが故に非理と名づく。又復た不正法を聽聞するが故に(三)三言事の增上緣の力に依りて過去未來現在の我を計する品類を顯示す。卽ち是の如き增上力に由るが故に三世の境に於いて不如理なる作意思惟を起す、謂く過去に於いて分別して我は或は有なり、或は無なりと計す。未來現在も當に知るべし亦た爾なりと。彼れ既に是の如く正理の如くならずして作意し思惟し、或は所取の事を緣じ、或は能取の事を緣ず、此れ不如理なる作意思惟なり。或は(四)卽ち諸行に我なりと分別し、或は(五)諸行を離れて我ありと分別す。彼れ計する所に於いて決定を得る時若くは所取の事を緣じて分別して我と爲し、或は常見を成じ、此の見に由るが故に是の思惟を作さく、我は有なり、其の我は現法の中に於て是れ實なり是れ常なりと。或は斷見を成じ、此の見に由るが故に是の思惟を作さく、我は無なり、其の我は現

【三】三言事とは三世の法に於ける言說の事なり。
【四】卽蘊の我を分別す。
【五】離蘊の我を分別す。

法の中に於いて是れ實なり是れ常なりと。若くは能取の事を緣じて有我の見を計して分別して我と爲し、是の思惟を作さく、彼れ今我を以て我を觀察すと、或は謂く我が我は先には有なり、今は無なりと。是の思惟を作さく、我れ今我を以て無我を觀察すと。或は復た卽ち能取の事を緣じて無我の見を計して現法の中に於いて其の無我を以て分別して我と爲し、是の思惟を作さく、我れ今其の無我を以て昔曾の有我を隨觀すと。是の如く且らく所取能取の差別の五相をば正理の如くならずして作意思惟する（六）五種の見處を說く、謂く卽ち三世の所有諸行に有我を分別す。又復た正理の如くならざる比度作意に由りて諸行を離れて有我を分別し、彼れ謂く、是の如く計する所の實我にして或は自ら能く後有を感ずる業を作るを能作者と名づけ、或は（七）他の作さしむるを等作者と名づけ、或は自ら能く現法の（八）士用を起すを能起者と名づけ、或は他の起さしむるを等起者と名づけ、或は自己後有の業を作るが故に、或は他のもの後有の業を作らしむるが故に（九）果異熟を感ずるを能生者と名づけ或は自ら能く現の士用を起すが故に、或は他のもの現の士用を等起するが故に士用果を得るを等生者と名づけ、或は自見に由り、或は他見に由りて隨つて言說を起し、是の如く或は自の聞覺知に由り、或は他の聞覺知に由りて隨つて言說を起すを能說者と名づけ、或は妻子及び奴婢等の所有家屬に於い

【六】五種の見處とは所取を計する二見と、能取を計する三見とを云ふ。文の如く知るべし。

【七】他とは自在天等を指す。

【八】士用に二あり(一)法士用、法の作用なり、(二)人士用、人の作用なり。今は人士用の義なり。

【九】果異熟とは異熟果と同じ。

て其の所應に隨つて教敕を施設し、其の處に住せしむ、是の如きを亦た復た能説者と名づけ、或は復た當來の業果已に生ぜるを能受者と名づけ、或は現法に於いて諸の士夫の果已に現に等生するを等受者と名づけ、或は過去の彼彼の生の中に於いて種種なる善不善の業を造作し、今現法に於いて種種なる彼の果異熟を領受するを領受者と名づけ、或は乃至壽量滅盡して便ち夭喪し、能く此の〔一〇〕蘊を捨て能く餘蘊を續くるあり、若し此れに異る者には既に我あること無し、云何んぞ上に說ける所の如き諸の所作の事を成ずることを得んと、是れを〔一一〕第六の正理の如くならざる作意思惟の所攝の見處と名づく。是の如き諸見は且らく說かば皆な薩迦耶見を以て其の自性と爲し、能く其の餘を生ず。薩迦耶見を以て根本と爲る所有の見趣なるが故に見處と名づけ、能く能取の眞實微妙なる慧を障礙するに由るが故に見稠林と名づけ、善法を損するが故に見曠野と名づけ、他を勞役するが故に見厭背と名づけ、求めんと欲して求むることあり、行歷する所なるが故に見行歷と名け、他の論を詰責し、己が論を免脱せんとして動搖するが故に見動搖と名づけ、能く善く後有の苦を結構するが故に名づけて見結と爲す、是の如き諸の邪行を習行する者は現法の中に於いて未だ現前せざる漏を起し現前せしめ、既に現前し已れば下品に依りて其の中品に趣かしめ、中品に依りて其の上品に趣かしめ、此れを因と爲るに由りて當來の老病死等の一切の苦法を生起す。是の如く當に知るべし如理及び不如理なるに於いて實に知らざるに由る

【一〇】蘊とは五蘊即ち身なり。
【一一】第六。前の五種の見處に次で第六と數ふ。

が故に苦諦集諦の雜染を造作すと。此れと相違して生法を聽聞し、正しき勝解を起し、其の如理なるに於いては不如理なる顚倒妄想無く、其の如理なるに於いて如實に是れ其れ如理なりと了知し、廣く説かば乃至應に思惟すべきに於いては顚倒の法無く能く正に思惟す。此の因緣に由りて三世の行幷に其の所取及以び能取に於いて如實に我我所無しと隨觀し、當に聖諦に於いて現觀に入る時見所斷の所有諸漏に於いて皆な解脱を得。此の事を得已つて上の修道所斷の諸漏に於て、餘す無く永へに斷滅せしめんが爲の故に精勤して四種の因緣を修習す。何等をか四と爲すや。一には善く身を護るが故に、二には善く根を守るが故に、三には善く念に住するが故に、四には先に得たる所の如き出世間道をば世間の出沒に達せる妙慧を以て多く修習するが故なり。善く身を護るとは、謂く正しく安住して惡象を遠避す、乃至廣く説かば聲聞地の如し、遠避するに由るが故に諸漏を盡くすに於いて障礙あること無し。善く根を守るとは、謂く正しく安住して諸の愛すべき現前の境界の非理なる淨相に於て、能く正に遠離して彼の不淨の相を思惟するなり。善く念に住するとは、謂く四處に住するなり。一には受用する衣服等を思擇する處に安住す。二には能く正に、靜に處するに現行する惡尋思を除遣する處に安住す。三には能く正に、發勤して精進することを發して、生ずる所の疲倦、麁惡不正の淋漏等の苦、他の麤惡なる言より生ずる所の諸の苦、界不平等なるより生ずる所の苦を忍受する處に安住す。四には修むる所の道に於いて不放逸に依り維住すること無き處に安住す。正に是の如き四處に安住す

るを善く念に住すと名づく。彼れ是の如く善く身を護るに由るが故に、善く根を守るが故に、善く念に住するが故に、先に得たる所の如き出世間の道を善く修習するが故に修所斷の所有諸漏に於いて皆な能く解脫し、及び隨つて最極究竟を證得す。

(二)復た次に、若し說いて此の四聖諦唯だ是れ境界なり、或は其の我あり、或は有情ありて此の聖諦を緣じて諸の善法を修すと言ふことあらば應に彼に告げて言ふべし、是の說を作すこと勿れと。所以は何ん、諸有る無量の世出世間の善法の生起するは一切皆な四聖諦の攝に歸すればなり。當に知るべし諸法に略して二種あり、一には能知の智、二には所知の境なり。其の能知の智は亦た所知の境なり。是の故は諸智と倶行する善法は四聖諦の中に攝在せざること無し。彼れ復た(三)循身念を修習するが故に觀品と止品との所有の善法と(四)始修業地と(五)已作辦地と總じて生起することを得。云何なるを名づけて循身念を修すと爲すや。謂く若くは始修業地に住し、如理に若くは內、若くは外の諸の大種[所造の]色を攀緣して境と爲して正念し、或は復た他の愛と非愛との增語有對の觸現行する時に由り、如理に觸受想行及與び諸識を攀緣して境と爲して正念し、或は若くは已作辦地に如理に諸の所造の色を攀緣して境と爲して正念し、或は復た如理に作意及び彼より生ずる所の受想行識を攀緣して境と爲して正念す、是の如き一切を略攝して名づけて循身念を

【二】攝を解す。
【三】循身念とは循身觀なり。
【四】始修業地とは順解脫分なり。
【五】已作辦地とは無學地なり。

修すと爲す、當に知るべし此の念或は（一六）色身を緣じ、或は（一七）名身を緣ずと。云何なるを觀と名づけ、云何んが觀品の善法を生起するや。謂く內外の諸の大種〔所造の〕色及び所餘の蘊に於いて正しく決擇する慧を說いて名づけて觀と爲す。若くは有は初め無倒に聚を分析する想を修習するより、外の大種に於いて（一八）劫盡くるを觀ずるに由りて無常想を修し、內の大種の合成する所の身に於いて唯だ食の漸漸に不淨なるを觀ずる由りて不淨想を修し、身に從つて生長する所の性及び後際に於て、老死する法性を觀ずるに由りて無常想及與び苦無我〔想〕を修す。此の身に於いて一切の愚夫は如實に體是れ無常苦なりと了知すると能はざるが故に、或は執して我と爲し、或は我所を執するなり。卽ち此の身に於いて多聞を具足せる諸の聖弟子は如實に知るが故に所執あると無し、是れ卽ち能く苦無我想を修するなり。此の無我想は其の身に於いて唯だ（一九）界のみありとする想に由る、此の想あるが故に若くは復た他愛と非愛との增語有對の諸觸現行するに由る。非愛と言ふは卽ち是れ手足杖塊等彼に觸るれば則ち此れ及び此れを緣と爲る所有の受等の（二〇）無色の諸行に於いて正に無常を觀じ、愛を離れ恚を離れ、唯だ界のみなりと觀じ、心此の身を緣じて正しく安住するが故なり、是の如きを亦たは愚癡を遠離すと名づく。是の如く所有聚を分析する想は外の大種に於いて無常想を修し、內の大種に於いて不淨想若くは無常想、無常苦想、苦無我想を修す。生起する所の受等の諸法に於いて大種

【一六】色身とは肉身なり。
【一七】名身とは心なり。
【一八】劫盡くとは空劫なり。
【一九】界とは六根界なり。
【二〇】無色とは心なり。

「所造の」身に依りて無常想を修し、貪瞋癡を離る。是の如き觀品の無量なる善法は始修業地にて正に循身念を修習するに由るが故に皆な生起することを得。云何なるを止と名づけ、云何んが止品の善法を生起するや。謂く循身念を修習するに由るが故に觀を以て依と爲して如理に止を修す。又言はく、止とは、謂く其の內に於て正しく安住する心なり。止品の善法とは、謂く是の如き正しき思擇力を得て攀緣するなり。(二)鋸を沙門の教授、怨家の所に於いて正に忍辱を修するに喩ふ。又卽ち彼を緣じて無倒に慈を修し、旣に忍慈に攝受せらるるに由るが故に戒清淨なることを得、戒の淨なるを觀ずるが故に是の思惟を作す、我れ今已に大師の聖教に於いて微かに作す所ありと。是の因緣に由りて憂悔する所無く憂悔無きが故に深く觀喜を生ず、廣く說かば乃至三摩地を得。彼れ爾の時に於いて靜定心に由り、乃至第四靜慮を獲得す。此の三摩地の行拘執するが故に未だ(三)雙運して無功用に轉ずること能はず、未だ善清淨ならず。其をして善清淨ならじめんと欲するが爲めの故に前に說くが如き、(三)四支所攝の不放逸行を修し、勤めて精進することを發して怯弱あること無し、乃至廣く說かば彼れ後時に於いて第四靜慮清淨鮮白なり。若くは復た其の靜定の愛味の爲めに其の心を漂轉せられ、定

【二】鋸の喩に兩釋あり、(一)行者縱に便ち鋸を用ふれば其身を鋸るを猶ほし能く思うて怨を報ぜざるが如し(二)鋸には木を斷る用あつて齒を挫かざる無し刀劍に同じからず、忍を修する時亦復た是の如し怨を以て忍辱の齒を挫くべからざるなり。

【三】雙運してとは止觀雙運するなり。

【三】四支所攝の不放逸行とは(一)善く身を護る(二)善く根を守る(三)善く念に住す(四)出世間道を得るなり。

に於いて〔二四〕正捨にして住すること能はず、滅涅槃に於て寂靜を觀せず、彼れ乃ち佛、或は法、或は僧に〔於いて〕深く厭恥を生ずるに依りて是の念言を作さく、我れ如來大師の佛寶、法毗奈耶の善說の法寶、無倒に善行を修習する僧寶に依るに所得無しと爲すと。所得あるに非ざるは是れ其の惡得にして善得と爲すに非ず、薩迦耶に於いて愛藏して住し、滅涅槃に於いて寂靜を觀せざるも、彼れ內心善く調柔なるに由るが故に纔かに厭恥を生じ、便ち能く沙門の義を引く平等妙捨に安住す。滅涅槃に於いて能く寂靜を觀じ、是の如き止品の善法を生起す。所謂忍慈、尸羅淸淨、無悔、歡喜にして、廣く說かば乃至三摩地の四支の所攝の不放逸行を得、沙門の義を引く平等善捨にして、滅涅槃の寂靜の功德を觀ず、彼れ爾の時に於いて二の因緣に由りて多く作す所あり、一には其の妙慧に由りて大師の敎に於いて諸漏を盡さんが爲めに能く淨く第四靜慮を修治するが故に、二には薩迦耶に於いて心增上にして捨するが故なり。此に齊りて名づけて始修業地究竟成滿すと爲す。是より已後修習する所に於いて喜足を生せず、已作辦地に趣入せんと欲するが爲めに循身念を修し、〔二五〕造色の身は草木泥の如しと觀じ、及び彼れより生ずる所の餘の〔二六〕非色の法に〔於いて〕、如實なる慧を以て緣起に通達し、能く隨つて如實諦に趣入し、智既に入ることを得已つて上の修道に依りて去來今の諸根の境界に於いて能く厭患を起し、乃至解脫し、能く如實に我れ已に解脫すと知る、是の如きを名づけて已

【二四】正捨とは中正中庸なり。
【二五】造色の身とは四大種所造の假和合の身なり。
【二六】非色の法とは心法なり。

作辧地と爲す。循身念を修して生ずる所の善法は、謂く色身は草木泥の如しと觀じ、想是の如くして(二七)無色の諸法を觀察し、眞實なる妙慧もて緣起に通達し、能く隨つて四聖諦に趣入し、智、修道の中に於いて能く厭患と離欲と解脫と解脫知見とを起す。是に齊りて名づけて大師の敎に於いて其の妙慧を以て應に作すべき所の事をば皆な已に作し訖ると爲す。所以は何ん、一切の(二八)自義皆な已に究竟し、此より已後更に作す所無し、作し已れるに於いて復た分別すべきに非ず。若し作し已つて餘時に退失して當に更に作すあるとあらば此の作は作なりと雖も畢竟作に非ず、諸の異生の世間道を以て解脫を得るが如し。此の中若くは先の始修業地は有漏の善法なり、若くは後に有る所の已作辧地は無漏の善法なり。是の如き一切は其の所應に隨つて當に知るべし皆な四聖諦の攝に入ると。

(二九)復た次に、四の因緣に由りて應に正に集諦の所攝の(三〇)百八の愛行を了知すべし。一には內外の差別に由るが故に、二には所依の差別に由るが故に、三には自性の差別に由るが故に、四には時分の差別に由るが故なり。云何なるを名づけて內外の差別と爲すや。謂く(三一)內外の六處を〔所〕依と爲るに由りて諸の愛行を起す。云何なるを名づけて所依の差別と爲すや。謂く愛は五種の我慢に依止す。何等をか名づけて(三二)五種の我慢と爲すや。謂く(一)我見に於いて未だ永

〔二七〕無色の諸法とは諸の心法なり。
〔二八〕自義とは自利なり。
〔二九〕集諦を解す。
〔三〇〕百八の愛行は本文下に出づ。
〔三一〕內外の六處とは內の六根處及び外の六境處なり。
〔三二〕五種の我慢とは倫記に三釋あり、今且く第一釋、景師の說に依る。

へに斷せざるが故に是の如き我慢現行するとあるを得、其の六〔根〕處に於いて我を計して慢を起す。〔二〕乃至未だ衰老の爲めに損せられず、諸行相似相續して轉ず、是の思惟を作さく、是の我昔の如しと。〔三〕彼れ若し復た衰老の爲めに損せられ、或は一時に於いて好色を成就し、或は一時に於いて惡色を成就し、或は一時に於いて大力、安樂、辯才を成就し、或は一時に於いて乃至辯〔才〕無し。彼れ若し好色、大力、安樂、辯〔才〕を成就する時は是の思惟を作さく、我れ今美妙なりと。〔四〕若し此れに違へば是の思惟を作さく、我れ美妙なるに非ずと。〔五〕若し衰老の爲めに損敗せらるる時は是の思惟を作さく、我れ今變異すと。云何なるを名づけて自性の差別と爲すや。謂く此の五種の我慢を〔所〕依と爲して有愛及び無有愛を發起す。又彼の有愛は輭中上品差別して轉じ、其の無有に於いては審かに思擇するに由りて方に能く愛を起す、意樂に由りて任運にして住するに非ず、是の故に中に於いて三品の差別の建立あること無し。當に知るべし此の中輭の有愛とは、謂く當來に於いて我が當有を願ふ、卽ち六〔根〕處に於いて我が當有を願ふと。卽ち是の如き類にして我が當有を願ひ、同類の生有に於いて希求するが故なり、是の如き類に異りて我が當有を願ひ、異類の生有に於いて希求するが故なり。若し〔三〕先の自體是れ愛すべき者なれば彼れと相應することを願ふが故に善業を造り是の思惟を作さく、我が當有是の如き種類にして今の所有の如くならんことを願ふと。若し先の自體愛すべからざる者なれば彼れと離隔することを願ふが故に善業

【三】先の自體とは今の自體を未來に望めて云ふ。

を造り是の思惟を作さく、我が當有是の如き種類にして今の所有に異らんことを願ふと。中の有愛とは、謂く無有に於いて希欲を生ぜず、彼れを治せんが爲めの故に我れ有ることを得んと願ひ、即ち六處に於いて我れ有ることを得んと願ふなり。前に說ける所の如し。即ち是の如き類は我れ有ることを得んと願ひ、〔或は〕是の如き類に異りて我れ有ることを得んと願ふなり。是の如き一切は應に知るべし皆な中品の有愛と名づくと。上の有愛とは、謂く即ち是の如き行相差別に〔於いて〕是の念言を作さく、願くは我れ定んで有らんと。猛利に思求する(二四)四種の相の愛を、應に知るべし、說いて上品の有愛と名づくと。此の(二五)五種の愛の自性の差別は所依の內〔の六根〕處の別あるに由るが故に(二六)十八種の愛行の差別を說く、其の外〔の六境〕處に於いても當に知るべし亦た爾なりと。此の差別をいはば、謂く彼の內の六〔根〕處の中に於いて我を計し慢を起すが如く是の如く、色に於いても計して(二七)我所と爲して慢を起す、謂く此の色に於いて我れ自在に轉ずと。是の如く(二八)乃至諸法の中に於いて計して我所と爲して慢を起す、謂く此の法に於いて我れ自在に轉ずと。餘は所應に隨つて前の如く應に知るべし。是の如き〔外の六境處〕の十八幷に前の〔內の六根處の十八の〕愛行を合して說かば總じて三十六

(二四) 四種の相の愛とは (一)當來に於て我が當有を願ふ (二)六處に於て我が當有を願ふ (三)是の如き類にして我が當有を願ふ (四)是の如き類に異りて我が當有を願ふなり。

(二五) 五種の愛とは前の五慢に依つて起る愛なり。

(二六) 十八種の愛行。內の六根處に各各輙中上三品の愛あるが故に十八種の愛行あり。

(二七) 我所とは我所有の見、即ち我が所有なりと執する見なり。

(二八) 乃至諸法とは聲、香、味、觸及び法なり。

種の愛行の差別あり。云何なるを名づけて時分の差別と爲すや。謂く卽ち是の如き三十六行に各過去、未來、現在の三世の差別あり。是の如きを名づけて四の因緣に由りて差別あるが故に愛行に合して一百八種ありと爲す。又此の中に於いて差別の相無く凡そ諸の所有る染汙し希求するを皆な名づけて愛と爲す。又卽ち此の愛は集諦の〔所〕攝なるが故に說いて名づけて因と爲す。津潤する性なるが故に、生死の流に順つて漂轉するが故に名づけて流潤と爲す。諸の境界に於いて執著する性なるが故に名づけて著境と爲す。能く生じ已つて五取蘊に依ること癰病等の如くにして所有衆苦の與めに因緣と爲るが故に說いて癰根と名づく。制伏し難きが故に說いて流溢と名づく。微細に現行して魔に縛せらるるが故に說いて纖繳と名づく。上〔三九〕有頂〔天〕に至り高く標出するが故に說いて條幹と名づく。飽くこと無からしむるが故に說いて枯渇と名づく。又卽ち是の如く說く所の相の愛は衆生を纏ふが故に說いて名づけて礙と爲し、隨眠に由るが故に說いて名づけて覆と爲す。卽ち是の如き纏及び隨眠に由りて上品を成ずるが故に說いて上聳と名づけ。其の中品及び下品を成ずるが故に說いて發起と名づく。若くは欲界の愛は所知の境に於いて迷惑せしむるが故に說いて冥闇と爲し、若くは色界の愛は所知の境に於いて迷惑せしむるが故に說いて昏昧と爲し、若くは無色〔界〕の愛の所知の境に於いて迷惑せしむるが故に說いて瞖瞙と爲す。三人あるが如し、第一は盲瞽、第二は闇目、第三は瞖瞙微かに其の眼を覆ふ。此

【三九】有頂天とは無色界第四非想非非想處なり、是れ三界の最頂上なるが故に名づく。

の中第一は全く所見無く、第二は少分所見あるに似たり、第三は見ると雖も眼淨かならざるが故に眞色を見ず。是の如き〔欲、色、無色の〕三愛は其の次第に隨ふ、冥闇と昏昧と及與び瞖瞙も當に知るべし亦た爾なりと。

〔四〇〕復た次に、五種の相に由りて法輪を轉ずる者を當に知るべし名づけて善く法輪を轉ずと爲すと。一には世尊菩薩たりし時所得の所緣の境界を得んが爲めに、二には所得の方便を得んが爲めに、三には自らの應に得べき所を證得し、四には得已つて他の相續を樹て、自證に於いて深く信解を生ぜしめ、五には他をして他の所證に於いて信解を生ぜしむ。當に知るべし此の中所緣の境とは、謂く四聖諦なり、此の四聖諦の安立する體相は前の如く應に知るべし、若くは略〔義〕若くは廣〔義〕は聲聞地の如し。方便を得とは、謂く卽ち此の四聖諦の中に於いて〔四一〕三周に正に〔四二〕十二相智を轉ず。最初の轉とは、謂く昔し菩薩現觀に入る時如實に是れ苦聖諦なり、廣く說かば乃至是れ道聖諦なりと了知し、中に於ける所有の現量の聖智は能く見道所斷の煩惱を斷ず、爾の時を說いて聖慧眼を生ずと名づく。卽ち此れは去來今世に依りて差別あるに由るが故に其の次第の如く〔四三〕智、明、覺と名づく。第二の轉とは、謂く是の有學は其の妙慧を以て如實に我れ當に後に於いて猶ほ作す所あるべく

〔四〇〕得を解す。此中三段、今第一段に五相に由つて得を證することを明す。

〔四一〕三周とは、見道、修道、無學道なり。

〔四二〕十二相智。三周に四諦を觀ずる智を十二相智と云ふ。

〔四三〕智明覺。過去の慧を智、未來の慧を明、現在の慧を覺と名づく。

應に當に未だ知らざりし苦諦をば徧知すべく、應に當に未だ斷せざりし集諦をば永斷すべく、應に當に證せざりし滅諦をば作證すべく、應に當に未だ修せざりし道諦をば修すべしと通達す。是の如く亦た〔四四〕四種の行相あり、前の如く應に知るべし。第三の轉とは、謂く是の無學は已に盡智無生智を得たるが故に言く、應に作すべき所をば我れ皆な已に作せりと。是の如く亦た四種の行相あり、前の如く應に知るべし。此の差別をいはば、謂く前の二轉の四種の行相は是れ其の有學の眞の聖慧眼なり、最後の一轉は是れ其の無學の眞の聖慧眼なり。所得を得とは、謂く無上正等菩提を得るなり。他の相續を樹て自證に於いて信解を生ぜしむとは、謂く長老〔四五〕阿若憍陳「如」の如き世尊の所より正法を聞き已つて最初に四聖諦の法を悟解し、又問に答へて言はく、我れ已に法を解せりと、此より已後前に説ける所の如く「四種の」行相を究竟す。五に皆な阿羅漢果を證得し、解脱處に生じ、最後に他をして他の所證に於いて信解を生ぜしむとは、謂く長老阿若憍陳「如」の如き世間の心を起し、我れ已に法を解し、如來知り已つて世間の心を起し、阿若憍陳「如」已に我が法を解すと、地神知り已つて聲を擧げて傳告し、刹那、瞬息、須臾を經て其の聲展轉して乃ち〔四六〕梵世に至る。當に知るべし、世尊解したまへる所の法を轉じて阿若憍陳「如」の身中に置き、〔四七〕此れ復た隨つて轉じて餘の身中に置き、〔四八〕彼れ復た隨つて轉じて餘の身中に置くと。是の

〔四四〕四種の行相とは四諦の觀行なり。
〔四五〕阿若憍陳如は五比丘の隨一なり。
〔四六〕梵世とは梵天なり。
〔四七〕此れとは阿若憍陳如を指す。
〔四八〕彼れとは地神を指す。

展轉し隨轉する義を以て說いて名づけて轉と爲し、正見等の法より成ずる所の性なるが故に說いて法輪と名づけ、(四九)如來應供は是れ梵の增語もて彼れ轉ずる所なるが故に亦た梵輪と名づく。

(五〇)復た次に、四聖諦に於いて未だ現觀に入らざるもの、能く現觀に入るに當に知るべし略して(五一)四種の瑜伽あり、謂く未だ得ざりし所の法を證得せんが爲めに(一)淨信增上し、(二)厚欲を發生し、(三)厚欲增上し、(四)精進熾然なり、熾然なる精進に善方便あり。淨信と言ふは、謂く正しき信解なり。言ふ所の欲とは、謂く所得を欲するなり。精進は前の如く略して五種あり、(一)勢あり(二)勤あり(三)勇あり(四)堅猛にして、其の軛を捨てざるなり。善方便とは、謂く不放逸を修習するが爲めの故なり。忘失する相無きを說いて名づけて念と爲し、諸の放逸の所有の過患に於いて了別する智相を說いて正知と爲し、此の二に攝せらるるを不放逸と名づく、諸の染法に於いて心を防守するが故に、常に能く諸の善法を修習するが故なり。

(五二)復た次に、苦諦は諸の疾病の如く、集諦は病を起す因の如く、滅諦は病生じ已つて除愈することを得るが如く、道諦は病を除き已つて後に生ぜざらしむるが如し。諸有る(五三)病者(五四)良醫の所に詣り、但だ應に(五五)爾所の正法を尋求すべく、諸有る良醫も亦た但だ應に爾所の正法を授くべし、

【四九】如來應供、共に佛十號の一、應供とは供養に應ずる資格あるを云ふ。
【五〇】第二段、得の方便を明す。
【五一】四種の瑜珈は通常に談ずる四瑜伽に同からず。文に出づるもの是なり。
【五二】第三段、諦相を明す。
【五三】病者とは心病ある凡夫異生に喩ふ。
【五四】良醫とは凡夫の心病に隨つて藥法を說く佛に喩ふ。
【五五】爾所の法とは四諦の法なり。

是の故に更に第五の聖諦無し。諸佛如來は大愛の箭を拔く無上の良醫なり、亦た但だ爾所の正法を宣説したまふ。

(五六)復た次に、聖諦智に背いて現觀を成ぜざる諸有る沙門若くは婆羅門は當に知るべし略して十相の過患ありと。謂く(一)勝義ある諸の沙門等の意に彼を許して沙門等と爲さず、(二)言にも亦た數へて沙門等と爲さず、(三)諸の後有の(五七)生等の衆苦に於いて皆な未だ解脱せず、(四)諸の惡趣に於いて亦た未だ解脱せず、(五)能く正しき所學の處を棄捨するに堪へ、(六)能く諸の出世間の人に過ぎたる勝法を證するに堪へず、所謂聖道の道果涅槃なり、(七)善趣に向ふが故に能く學無學を除ける餘外の福田を尋訪するに堪へ、(八)苦苦を超えて更に(五八)還らざる果に於いて堪能する所無く、現法の中にて(九)悟解を究竟し、(十)一切の有餘依の苦を解脱するに於いては堪能する所無し。此れと相違するは當に知るべし即ち是れ諦智に背かずして現觀を成就する所有の沙門若くは婆羅門の十相の功德なりと。

(五九)復た次に、諦智に趣向し、正覺を樂ふ者は應に當に了知すべし四聖諦の增上緣の力に依りて所依の處を得、彼の方便を得ることを。應に是の處を知るべし、善說の法毘柰耶の中に於て淨信に出家するを依處を得と名づくと。若くは(六〇)四沙門「果」に攝受する所の聲聞の菩提、若くは諸の獨覺の所

【五六】相を解す
【五七】生等の衆苦とは生老病死の苦なり。
【五八】還らざる果とは四果の中の第三不還果なり。
【五九】處を解す。
【六〇】四沙門果とは預流、一來、不還、阿羅漢の四果なり。

有の菩提、若くは諸の如來の無上菩提、是の如き三種を當に知るべし前に説ける所の如き三周の正轉を得と名づくと。其の次第に隨つて智、見、現觀を方便を得と名づく。應に知るべし諦現觀に入る時に於いて如實に是れ苦聖諦なり乃至廣く説かば是れ道聖諦なりと了知するを説いて(六一)智位と名づくと。此より已後諸諦の中に於いて復た作す所あり、應に當に偏知すべく、廣く説かば乃至應に當に修習すべく、此に由りて觀ずるが故に説いて(六二)見位と名づく。無學地に於て如實に我れ已に偏知し、我れ已に永斷し、我れ已に作證し、我れ已に修習すと解了するを現觀の位と名づく。復た差別あり、謂く諸の無學の盡〔智〕無生智に攝する所の一切の極解脱智を説いて智位と名づけ、即ち此の無學の極解脱智より引く所の正見を説いて見位と名づけ、預流果より乃ち(六三)究竟に至る、當に知るべし、一切の學慧を現觀の位と名づくと。

(六四)復た次に、應に知るべし諦智に略して六種の作業及び相ありと。謂く此の諦智は是れ能く永へに衆苦の前行を滅す、日將に出でんとするに先づ明相を現ずるが如し。正に苦を盡すとは、謂く初の見諦所斷の衆苦に〔於て〕(六五)苦邊を作す者なり、謂く阿羅漢の斷ずる所の衆苦なり。又此の諦智は是れ能く大無明の闇を對治すること日の光明の能く世間の所有大闇を破るが如し。又一あるが如き、已に諦智を證し、永へに(六六)三結を斷じ、此れより無間に失念に由るが故に暫く欲貪瞋恚の爲めに染

(六一)智位とは見道なり。
(六二)見位とは修道なり。
(六三)究竟とは無學果なり。
(六四)業を解す。
(六五)苦邊とは苦見なり。
(六六)三結とは貪瞋癡なり。

〔汗〕せらる。彼れ爾の時に於いて不放逸に依りて初靜慮に入り、諦智を觸〔證〕するに由りて不還果を得。是の如く漸次に非想非非想定に入ると雖も而も外凡と其の差別あり、已に不退法を證得するに由るが故なり。是の如く諦智には廣大の用あり、廣大の果あり。此の中所有過去の諸行を說いて已生と名づけ、現在の諸行を說いて正生と名づけ、未來の諸行を說いて當生と名づけ、是の如き一切を總じて集法と名づく。卽ち此の一切の無常滅、或は已に滅するあり、或は滅に向ふあり、或は當に滅すべきあるに由つて總じて滅法と名づく。又諦智に於いて已に證得せる者は大なる石樓の已に善く雕飾せるは八方の猛風も傾動すること能はざるが如く、一切の異論も移轉すること能はず、所有悟解は他の緣を假らず、他の面を視ず、彼れ將に何と說かんとするか、我れ當に聽受すべしと。他の口を觀ず、適つて語を出し已れば尋いで我れ聽聞し、思惟し、籌量し、審諦に觀察す、諸の沙門婆羅門の者は當に知るべし卽ち是れ諸の外道の輩なりと。又卽ち一切の四聖諦の智漸次に集成するを諦現觀と名づく、隨つて一を闕くに非ず。此の諦現觀は猶ほし餚饌の如し、諸の聖弟子の無上の慧命は皆な此に依りて活す、欲を受くる者餚饌を食用するが如し。苦等の諦智にして(六七)餘の三智を闕くは(六八)贍彌葉の如し、常に知るべし餘は(六九)婆羅枝葉に似たりと。四聖諦

【六七】餘の三智とは集滅道の三諦の智なり。

【六八】贍彌葉。天竺に贍彌樹あり、枝葉參差して一一相當らず、或は一、或は二乃至六七葉なり、四諦の相隨つて一を缺き二を缺き三を缺くに喩ふ。又云く贍彌葉は缺減して正しからず。

【六九】婆羅枝葉は四四相當る四諦智集成圓滿なるに喩ふ。又曰く婆羅枝葉は圓滿具足す。

の智は漸次に集成して一切圓滿す。又諸の諦智と喜樂と倶に眞義を覺するが故に、能く身心をして極めて輕安ならしむるが故に諦現觀と名づく。那落迦の中に生ずるに略して二苦あり、一には燒然の苦、二には治罰の苦なり。諦智を闕くに由りて斯の二苦を獲、此れ無量に猛利なる大苦を生す。聖諦智に由りて皆な能く超越す。是の如き諦智は假使其の燒然と治罰との猛利なる大苦に因りて、現法の中に於いて一身滅壞すること而も得可き者なるも應に踊躍歡喜を生じて忍受すべく、縱ひ百身を毀つすら尚ほ應に歡喜すべし、況んや乃ち唯だ一なるをや。

〔七〇〕復た次に、若くは有るが聖諦現觀を修する爲めには當に知るべし略して四種の障礙ありと。何等をか四と爲すや。一には不信、二には上慢、三には待時、四には放逸なる言なり。不信とは復た三種あり、一には諦現觀に於いて信解を生ぜず、二には僧の善行に於いて信解を生ぜず、三には佛の菩提に於いて信解を生ぜず。初の不信を斷除せんと欲するが爲めの故に世尊自ら現量に證する所の聖諦現觀を引いて、諸の弟子に告げて言はく、「我れ已に四聖諦の理に於て現觀を得たるが故に無上正等菩提を證覺す」と。第二の不信を斷除せんと欲するが爲めの故に復た說いて言はく、「我れ昔汝が輩と長世に久しく流轉す、未だ正しく思惟し眞諦を覺悟せざるに由る、我れ今汝等と正見に由りて通達し、通達するを以つて因と爲し生死流轉を盡すこと。彼の因緣盡くるが故に。今より後有無く、唯だ最後身のみを餘して住持して滅せざらしむ。第

【七〇】障を解す。

三に佛の菩提を信ぜざれば、是の如き相轉す、謂く若し沙門喬答摩種は是れ一切智〔者〕ならば何故に問ふことあるに一類には能く記し、一類には記せざると。是の如き不信を斷除せんと欲するが爲めの故に復た說いて言はく、「我が覺る所の法は無量無邊なり、譬へば大地の諸の草木の葉の如し、他の爲めに說く者は少くして言ふに足らず、譬へば手中の〔七二〕升攝波葉の如し、多分は能く無義利を引くが故に、少分は有義利を引くが故なり」と。當に知るべし此の中知らざるが故に而も記別せざるに非ず、但だ能く無義利を引くに由るが故に而も記別せざるなり。上慢とは、謂く即ち彼の諦現觀の中に於いて增上慢を起す、是の如き上慢を斷除せんと欲するが爲めの故に復た說いて言はく、「人遠きに在り、箭を以て箭筈を射るに筈に遺す無きを甚だ希有なりと爲すが如し、或は復た一毛を析きて百分と爲し、毛を以て毛の端を贊すに端落ちず、極細なるを以ての故に是の事復た難し、聖諦に通達すること轉た彼よりも難し、所以は何ん、即ち其の能取の作意を以て還つて即ち能取の作意に通達するに由る」と。是の如くにして方に能緣所緣平等平等にして無漏智生ずることありて諦理に通達す。是の故に此の事最も細にして最も難し。箭箭筈を射、毛毛端を贊すも則ち是の如くならず。待時と言ふは、謂く所作に於いて推して後時を待つなり、是の如く時を待つことを斷滅せんと欲するが爲めの故に世尊、「墜つること無き人身は甚だ得難しと爲す」と說きたまひ、復た盲龜を引き以て其の事に〔此〕況す。云何んが放逸

【七二】升攝波葉は天竺の樹名、此方の胡桃樹に類たり、如來の願智無盡なるに喩ふ。

なるや、謂く略して言はば。若くは邪なる思惟、若くは邪なる尋思、若くは邪なる戲論、是れを放逸と名づく。當に知るべし若くは應に思ふべからざる處に於いて彊ひて思惟するを邪なる思惟と名づくと。謂く或は我れ過去世に於いて曾て有りしと爲んや、乃至廣く說かば未來世に於いて內に於いて猶豫して我れ是れ誰とかせん、誰れか當に是れ我れなるべき、今此の有情何れより來り、是より沒し已つて當に何れの處にか往くべきと思惟す。或は世間を思ふ、謂く世間は常なりと、乃至廣く說けり。是の如く或は謂く世間は有邊なりと、乃至廣く說けり。或は有情を思ふ、謂く命卽ち身なりと、乃至廣く說けり。或は有情の業果異熟を思ふ、謂く妄りに此れ作「者」なり此れ受「者」なりと思惟す、乃至廣く說けり。或は復た諸の靜慮者は靜慮の境界を思惟し。或は諸佛、諸佛の境界、如來の滅後の若くは有り若くは無きを思ふ、乃至廣く說けり、彼れ世俗勝義「二諦」の善巧に由り。是の一切に於いて二の因緣の故に應に思惟すべからず、一には思惟する所緣の境に非ざるが故に、二には其の事に所有無きに由るが故なり。若くは思ふ境事に非ざるを思求することあり、或は所有無き事を思求するとあらば是の如き一切は皆な所得無し、唯だ心をして轉た迷亂を增することあるのみ。若し此の中に於いて正理の如くならず、彊ひて思惟する者は一類の宿因の力に由り、或は厭離を起し、或は厭離と相應する作意を起し、實の境界を緣じて其の中間に於いて暫爾現行することありと雖も、而も復た彼に於いて見て過患なりと爲して不實の想を生ず。是の如く世間等の法を思惟し、能く無義を引く。邪なる尋思

とは、當に知るべし即ち是れ欲等の尋思なりと。邪なる戲論とは、復た六種あり、謂く(一)顚倒の戲論(二)唐捐なる戲論(三)諍競する戲論(四)他に於いて勝劣を分別する戲論(五)工巧養命を分別する戲論(六)世間の財食に耽染する戲論なり、是の如き一切を總じて放逸と名づく。此の放逸を斷除せんと欲するが爲めの故に如來親しく自ら敎誨する者の爲め、化を受くるに堪へたる補特伽羅にして聞き已つて速に能く諸の放逸を斷ずるが爲め、世尊の弟子是の如き聖諦現觀の四種の障礙を斷ずるが爲めに、三の行相に由りて聖諦を任持す。何等をか三と爲す。一には聞慧に由りて其の文を任持し、二には思慧に由りて其の義を任持し、三には修慧に由りて其の證を任持す。此の中聞慧は其の聞く所の如く能く正に是れ苦聖諦なりと任持す、乃至廣く說けり。又思慧に由りて其の義を任持す、謂く諸の聖者は其れ是の諦を知るが故に聖諦と名づく。當に知るべし此の中二緣に由るが故に名づけて諦と爲るとを得。一には法性の故に、眞實の義に由りて說いて名づけて諦と爲す、二には勝解の故に、即ち此の眞實の義の中に於いて諦の勝解を起すに由りて說いて名づけて諦と爲す。一切の愚夫は但だ法性に由りて名づけて諦と爲るとを得るも、勝解には非ざるが故なり。若し諸の聖者は倶に二種に由りて名づけて諦と爲ることを得るが故に偏に此を說いて名づけて聖諦と爲す。又修慧に由りて諸諦の中に於いて內證の現量の諦智を獲得し、亦た證淨なることを得。是の因緣に由りて諸諦に於いて實に疑惑を遠離し、諦智と證淨なると更互に相依り、若し一ある處には必ず第二あるなり。

（七二）復た次に、若くは沙門或は婆羅門あり、聖諦智に於いて而も未だ相應せず、諸の聖諦に於いて未だ現觀を成ぜざるは當に知るべし略して四種の過患ありと。何等をか四と爲すや。謂く（一）能く下分の惡趣に往いて生ずる本行の中に於いて深く愛樂を起し、彼の相應の業を造作し增長し、此に由りて顚墜して惡趣の坑に生ず。（二）又人天の兩趣を纒はんと欲する衆多の煩惱の〔ために〕常に燒煮せられて生ずる本行の中に於いて深く愛樂を起し、彼の相應の業を造作し增長し、此の因緣に由りて既に彼に生じ已つて大に熱惱を生じ、常に燒然せらる。（三）又た此の上の色〔界〕無色〔界〕纒の所有相應、前に說ける所の如き無明昏闇及び諸の瞖瞙より生ずる本行の中に於いて廣く說かば乃至生闇に墮す。（四）又境界を受用する涅槃の道を退失するに由るが故に其の中間に於いて（七三）三種の世界に生ずるが如く中間に三種の妄見の黑闇に墮在す。一には常見、二には斷見、三には現法涅槃の見なり、此の因緣に由り三界に墜墮し、黑闇處に生ず。是の如き自らの妄見を攝受するが故に、邪なる無明の闇に覆障せらるるが故に、如實に前の如き五支に攝受する所の斷を觀じ、是の因緣に由りて應に知るべし如實に諸諦を顯示すと。

（七四）復た次に、或は一類あり、諸の聖諦に於いて善巧〔智〕を得ず、（七五）黑黑の異熟業を造作し增長し已つて能く那落迦、傍生、鬼趣を感ず。此の業に由るが故に譬へば杖根を擲つが如く那落迦の中に墮

【七二】過を解す。
【七三】三種の世界とは三界なり。
【七四】黑の異熟等を解す。
【七五】黑黑の異熟業とは惡業なり。

し、傍生趣の端に墮し、餓鬼界に墮す。是の如き一類は（七六）黒白黒白の異熟業を造作し增長し已つて此の雜業に由りて譬へば杖を擲つが如く或は惡趣不淸淨の處に墮し、或は善趣の少淸淨の處に墮す。是の如き一類は（七七）白白の異熟業を造作し增長し已つて此の業に由るが故に五趣の生死の諸業に隨逐せらるる處に生在し、壽盡き業盡きて、卽ち還つて彼の色無色界より沒し已つて五趣の生死に退墮すること五輻輪の旋轉して住せざるが如し。若し有ひは他の爲めに世間道を說き、乃至能く有頂〔天〕に上昇すと雖も、當に知るべし此の說は第一義に上昇せしむる敎に非ず。何となれば是の如き上昇は畢竟に非ざるが故なり。若くは諸の如來の說きたまへる所の聖諦と相應する言敎は當に知るべし此の敎は是れ第一義に上昇せしむる敎なりと。何となれば是の如き上昇は是れ畢竟なるが故なり。又若し諸の世俗智を得、乃ち有頂〔天〕に至るに由りて聰慧と名づくる者は、第一義に說いて聰慧と名づくるに非ず、前に說けるが如くなるが故なり。若くは諦智に由りて聰慧と名づくる者は是れ第一義に名づけて聰慧と爲す、前に說けるが如くなるが故なり。

（七八）復た次に、其の（七九）四種の聖諦智の中に於いて初の聖諦智の能く聖諦に入り、漸次に現觀するは譬へば（八〇）本足の如く、第二の諦智は譬へば（八一）牆壁の如く、第三の諦智は下の層級の如く、第四の諦

【七六】黒白黒白の異熟業とは善惡雜業なり。
【七七】白白の異熟業とは純善業なり。
【七八】大義を解す。
【七九】四種の聖諦智とは四諦を觀ずる智なり。
【八〇】本足とは初の苦諦を觀ずる智は最初に得るが故なり。
【八一】牆壁の能く賊を障ふるが如し。

智は上の寶臺の如し。又卽ち是の如き四聖諦の智は四階陛の如く能く大智慧殿に上昇せしむ。又卽ち是の如き四聖諦の智は四桄梯の如く能く解脱寂滅に陞上せしむ。當に知るべし此の中（八二）三種の愛あり、譬へば三槍の如し、諸の（八三）惡魔羅［槍を］執持して生死の大海を撓攪し、彼の生を受くる諸の有情類をして隨つて廻轉せしむ。是の如き三種の魔羅の愛槍も彼の三種の有情をして隨つて廻轉せしむること能はず。一には勁鋭、卽ち是れ預流なり、二には處中、卽ち餘の有學なり、三には逆流、道行圓滿なり。其の所欲に隨つて皆な能く造作し、已に聖諦を見たる、補特伽羅は永へに所有の慢より作す所の苦、慢より成ずる所の苦を斷ず。是の因縁に由り諸苦少かに在りて多分は已に斷ず、謂く諸の有學及び阿羅漢なり。慢より作す所、成ずる所の衆苦の如く是の如く、諸の愛の身語意業貪瞋癡等より生ずる所の衆苦も當に知るべし一切皆は少分ありて多分は已に斷せること、譬へば（八四）礫石及び大雪山の如しと。是の如き諸の慢より作す、所成ずる所の所有衆苦を若くは餘り若くは斷ずるも當に知るべし亦た爾なりと。大池沼の其の水、中に盈滿せるに二滴三滴を沾し引くに、大池沼に依る水尙ほ甚だ多きが如く、是の如く無色［界］の愛より生ずる所の苦の若くは餘り若くは斷ずるも當に知るべし亦た爾なりと。大陂湖の如く、餘は前に說けるが如く、是の如く色界の愛より生ずる所の苦の若くは餘り、若くは斷ずるも當に知るべし亦た爾なりと。又大海の

【八二】三種の愛とは三界の愛なり。
【八三】惡魔羅。魔羅は略して魔とも云ふ。
【八四】少分を礫石に譬へ、多分を大雪山に譬ふ。

如く、餘は前に說くが如く、是の如く欲界の愛より生ずる所の苦の若くは餘り、若くは斷ずるも當に知るべし亦た爾なりと。又（八五）大雪山若くは（八六）諸の金山、若くは（八七）蘇迷盧及び（八八）大地の喩、又（八九）六種の礫石の喩、又（九〇）泥團の喩あり、餘は前に說けるが如し。是の如く身業語業意業、貪瞋癡等より生ずる所の衆苦の若くは餘り、若くは斷ずるも當に知るべし亦た爾なりと。是の如く多苦已に遠離せるが故に、少苦在るが故に當に知るべし聖諦の如實の現觀には大義利ありと。謂く諸の有學は最も極めて七たび人天に生ずる苦、諸の惡趣に在る苦をば皆な已に越度し、若くは諸の無學は唯だ現法の所依「の身」の苦の在るありて餘の一切の苦をば皆な已に越度す。

（九一）復た次に、若し是の身に住して諦現觀に入るは當に知るべし此の身を最も得難しと爲すと。又聖「者」は明眼にて諦を見、有學は轉た甚だ得難し。又聞思修より成ずる所の妙慧を亦た得難しと爲す、此の慧に由るが故に善說の法毗奈耶の中に於いて其の次第の如く（九二）解了し、（九三）勝了し及以び（九四）決了す。解了する時に於いて能く審に分別し、勝了する時に於いて能く勝解を生じ、決了する

【八五】大雪山は慢より生ずる所の苦を斷ずるに喩ふ。
【八六】諸の金山は無色界の愛より生ずる所の苦を斷ずるに喩ふ。
【八七】蘇迷盧は須彌山と同じ、是れ色界の愛より生ずる所の苦を斷ずるに喩ふ。
【八八】大地は欲界の愛より生ずる所の苦を斷ずるに喩ふ。
【八九】六種の礫石は三業三毒より生ずる苦を斷ずるに喩ふ。
【九〇】泥團は聖身の苦を斷ずるに喩ふ、未だ斷ぜざる苦は少泥團の如く、已に斷ぜざる苦は大地の如し。
【九一】得難きを解す。
【九二】聞慧にて解了す。
【九三】思慧にて勝了す。
【九四】修慧にて決了す。

時に於いて法に於いて入證す。又諦現觀の所有の資糧の善有漏の法を亦た得難しと爲す、謂く父母に於いて恩養を識る等の諸の善業道の有暇の圓滿を亦た得難しと爲す。又世間の初の正見等乃至解脫「正」智を後邊と爲る（五五）十種の正法あること亦た得難しと爲す。是の如き諸法は即ち是れ有學、即ち是れ無學「の法」なり。當に知るべし此の中善く恩養を知る所有の士夫補特伽羅は如實に一切の父母には皆な應に孝養すべしと了知し、是の如く知り已つて其の父母に於いて勤めて孝養を修す、是れを善く父母の恩養を識ると名づく。又己利を樂ふ所有の士夫補特伽羅は他の有德の一切の沙門及び婆羅門に於いて如實に是れ福田なりと了知し已つて其の所應の如く勤めて供養を修す、是れを善く所有沙門若くは婆羅門を知ると名づく。又貪惰無き所有の士夫補特伽羅は諸の妻子及び奴婢等の一切の親屬に於いて如實に彼れ既に我れを以て室と爲し歸と爲す、我れ若し樂あれば彼も亦た隨つて樂しみ、我れ若し苦あれば彼れも亦た隨つて苦しむと了知し、是の如く知り已つて時時の間に於いて正に飲食衣服を以て給賜し、復た病緣の醫藥を以て攝受し、彼の義利に於いて自然に勇勵にして爲めに施造し、一切に於いて彼の憶念を求むるに非ず、稟となり忠平にして好んで等しく分布し、亦た婬佚して財寶を損費せず、非處に於いて毗柰耶を生ぜず、亦た非處にして憤發を興さず、諸の耆長及び尊重「なる者」の處に於いて正に善く隨つて轉ず、是の如きを名づけて善く家長を御し、善く能く自他の義利を造作すと爲す。諸の施爲する所皆な正法を以て

【五五】十種の正法とは八正道及び解脫・正智なり。

し、非法を以てせす、現法の中にて他の惡行を作すに於いて深く過患を見る、謂く或は殺し、或は縛し、或は罰し、或は退き、或は譏毀せられんに正しく思擇し已つて終に現行せず、是の如ぎを名づけて此の世の罪に於いて深く怖畏を見ると爲す。又正しく惡行を造り已れば其の後世に於いて惡趣の苦を感じ、及び所餘の匱乏等の苦を感ずと觀見し、正しく思擇し已つて終に現行せず、是の如きを名づけて他世の罪に於いて深く怖畏を見ると爲す。又時時の間に能く正に受學し、福業の事を施し、種種なる差別の福行を造作す、所謂看病し、佛法僧に事へて躬ら執當を爲す、是の如き等の類を福行を作すと名づく。一日夜に於いて乃至壽を盡すまで所有尸羅をば能く正に受學す、是の如きを總じて惠施し福を作し齋を受け戒を學すと名づく。十業道とは、謂く（九六）二三等の差別なり、宣說すれば乃至聞思の慧に由りて彼れと相應する所有の作意に於いて正に多く修習せしめんが爲めなり。又諸の有情は惡趣に生じ已つて解脫すべきこと難く、善趣に生じ已つて速疾に乖離す、當に知るべし。是れを有暇の圓滿甚た得難しと爲すと名づくと。又諦理を見るが故に差別あること無き正見生起す、過去世に於いては已に生起せりと名づけ、現在世に於いては今生起すと名づけ、未來世に於いては當に生起すべしと名づく、前に說ける所の如く若くは習ひ若くは修し若くは多く修習す、其の義應に知るべし。若くは世間の正見をば應に隨つて防護すべく若くは有學の正見

【九六】 二三等、倫記に二釋あり、㈠二とは作無作の二業、三とは身口意の三業なり、㈡二三とは二種の三業の義、身口意の三業と福、非福、不動の三業との二種なり。

並に其の斷果をば應に隨つて觸證すべく、若くは無學の正見並に自の離繫果をば應に隨つて作證すべし。正見を說くが如く是の如く乃至解脫「正」智も應に知るべし亦た爾なりと。

巻の第九十六

攝事分中契經事緣起食諦界擇攝第三の四

復た次に、總の嗢柁南に曰く、

(一)『總義等と光等とにして、受等を最も後と爲す。』

別の嗢柁南に曰く、

(二)『總義と自類の別と、似て轉ずるとにして三求を後とす。』

(三)當に知るべし諸界に略して二種ありと、一には自性に住する界、二には習ひ增長せる界なり。(四)自性に住する界とは、謂く十八界自相續に墮し、各各決定する差別の種子なり。(五)習ひ增長せる界とは、謂く則ち諸法の或は是れ其の善、或は是れ不善「なるもの」餘生の中に於て先に已に數習して彼をして現行せしむるが故に今時に於いて種子彊盛に依附し相續す。是を因と爲るに由り暫らく小緣に遇ふも便ち能く現起して定んで轉ず可からず。

【一】上來緣起食諦を解し訖る。今此の半總頌に於て界を解するに三門を列す、(一)總義等(二)光等(三)受等なり。

【二】此は總頌第一門總義等を解する別頌なり、此の中更に四門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【三】總義を解す。

【四】是れ十八界の無記法の種子なり。

【五】是れ十八界の善惡の種子なり。

（六）復た次に、要を以て之を言はば界の種類十八得可しと雖も然も一一の界の業趣有情の種種なる品類に差別あるが故に當に知るべし無量なりと。譬へば世間の（七）大惡叉聚の如し、此の聚の中に於いて多くの品類あり、種類一なるが故に說いて一なりと爲すと雖も而も無量あり。是の如く其の一一の界の中に於いて各無量なる品類差別あり、種類一なるが故に各一なりと說くと雖も而も實には無量なり。

（八）復た次に、是の如き諸界は勝解力の集成する所に由る。先の惡なる勝解は惡解を集成し、先の善なる勝解は善界を集成す。集成する所に隨つて還つて是の如き相似の有情と法を同じうして轉ず、謂く相ひ往來し、聚を同じうし住を同じうし見を同じうし意を同じうし勝解相似す。是に由るが故に有情の諸界共に相ひ滋潤し、相似して轉ずと言ふ。

（九）復た次に、（一〇）梵行求の增上力に由るが故に先づ說に信を起し、次に尸羅に於いて受學して轉じ、次に現行の所有過罪に於いて自を觀じ他を觀じて羞恥を生じ、次に善法に於いて無間に修習し、發勤して精進することを發し、久しき所作及び久しき所說に於いて能く忘失すること無く、（一一）是の二を〔所〕依と爲して心をして定を得せしめ、心の定に由るが故に如實智を得。是の如きは且らく信の增上力を說けり、漸次に三種の所學を修習す、一には

【六】自類の別を解す。
【七】大惡叉聚。惡叉(Akṣa)は果實の名、形無食子に似、地に落つれば多く一處に聚る。
【八】似て轉ずるを解す。
【九】三求を解す。先づ第一梵行求を明す。
【一〇】梵行求。梵行とは清淨行なり。
【一一】是の二とは(一)久しき所作(二)久しき所說に忘失すること無きを云ふ。

增上戒、二には增上心、三には增上慧なり。是の如き三學は勝れたる資糧道なり、謂く世の正見と好んで惠捨を行ずると、養ひ易きと滿し易きと、少欲と(二二)喜足と及び(二三)四攝事なり。其の養ひ易き等の句義の差別は聲聞地に已に其の相を說けるが如し。是の如きを當に知るべし梵行求已に圓滿なることを得たりと名づくと。是の如き梵行求を成就せる者は還つて此の界の諸の有情類と共に相滋潤し相似して轉ず。此の界を離れたる者は還つて此の界を遠離せる有情と共に相滋潤し相似して轉ず。當に知るべし此の中果は因に依り、因は果に依るに非ざるが故なりと。(二四)無明界に隨ふ所の六處の諸界を緣と爲るに所依別なるが故に無明觸の種種なる品類を起し、其の無明觸の種種なる品類を以て緣と爲るが故に無明觸より生ずる所の諸受の種種なる品類を起し、其の無明觸より生ずる所の諸受の種種なる品類を以て緣と爲るが故に無明觸より生ずる所の諸受を緣とする貪愛を起し、愛を緣と爲るが故に而も其の取、廣く說かば乃至大苦蘊の集あり。當に知るべし是れを有求に依るが故に諸界を建立すと名づくと。(二五)又無明界に隨ふ所の六處の諸界を緣と爲して無明觸を起し、此の無明觸を以て緣と爲るが故に諸の境界に於いて不如理に相好を執取する所有諸想を起し、此の想を緣と爲て諸の境界に於いて希欲を發起し、希欲を緣と爲して彼の法に隨ひ多く隨ふ尋思を起し、彼の法に隨ひ多く隨ふ尋思を以て緣と爲るに由るが故に思惡愁憂して作す所の身心の熱惱を發起し、身心の熱惱を以

(二二) 喜足とは知足なり。
(二三) 四攝事とは布施、愛語、利行、同事なり。
(二四) 次に第二有求を明す。
(二五) 後に第三無明求を明す。

て緣と爲るが故に諸の境界に於いて種種なる品類の思求差別す、皆な了知すべし。是の如きは當に知るべし欲求に依るが故に諸界を安立するなりと。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(二六)『三七界の相攝と、見想と希奇と、差別の性と安立とにして、寂靜と愚夫とは後なり。』

(二七)界に三種あり、一には色界、二には無色界、三には滅界なり。復た七界あり、一には(二八)光明界、二には(二九)清淨界、三には(三〇)空處界、四には識處界、五には無所有處界、六には非想非非想處界、七には(三一)滅界なり。當に知るべし此の中其の色界に由りて光明界及び清淨界を攝し、無色界に由りて(三二)四無色を攝し、其の(三三)滅界に由りて還つて滅界を攝す。又諸の(三四)色貪は見に由り受に由りて顯發する所なるが故に徧く一切の色界地の中に於いて(三五)光明及び(三六)清淨界を安立す。又是の如き七界の徧知に於いて應に當に了知すべく、得の方便に於いて應に當に了知すべく、卽ち其の得に於いて應に當に了知すべく、得の所爲に於いて應

【二六】此は總頌第二門、光等を解する別頌なり、此の中更に七門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【二七】三七界の相攝を解す。

【二八】光明界は色界初靜慮なり。

【二九】清淨界は色界第二乃至第四靜慮なり。

【三〇】以下四界は無色界なり。

【三一】滅界は涅槃界なり。

【三二】四無色とは空處乃至非想非非想處なり。

【三三】滅界とは涅槃界なり、三界の攝にあらず三界超越の法り、故に只だ是れ滅界の攝なりと云ふ。

【三四】色貪とは色界の貪なり。

【三五】見に由る色貪を對治せんが爲めに光明界を立つ。

【三六】受に由る色貪を對治せんが爲めに清淨界を立つ。

に當に了知すべし。【二七】是の如き諸界の所有の徧知をば四の因緣に由りて應に當に了知すべし、謂く相違ある所治と能治と而も相待するが故に、狹小と無量と而も相待するが故に、有及び非有而も相待するが故に、有上と無上と而も相待するが故なり。【二八】黑闇を緣として光明を施設し、【二九】不淨を緣として淸淨を施設し、色趣を緣として【三〇】虛空を施設す、是の如きを名けて相違ありと爲すが故に【三一】彼の所治に待して【三二】能治を施設し、彼に待するに由るが故に能く此の中に於て正覺の慧轉ず。有量狹小なる境を緣ずる識を以て緣と爲るに由るが故に識無邊處を施設し、少所有を以て緣と爲るに由るが故に無所有處を施設し、【三三】一切の有の最勝現前するを以て緣と爲るに由るが故に非想非非想處を施設して【三四】有の無上と爲し、薩迦耶〔見〕の所有の相應の諸の煩惱斷ずるを以て緣と爲るに由るが故に滅界を施設して滅の無上と爲す。當に知るべし有頂は是れ有の無上なり、滅は諸法に於て皆是れ無上なりと。【三五】又有想定を名づけて有行と爲す、七界の中に於て次第して乃ち無所有處に至るまでの一切皆な是れ有想定なるが故なり。皆定を行ずるに由つて隨順して獲得す、謂く明相と光明想とを取り倶に三摩地を修し、隨順して、光明想定を獲得す。是の如く淸淨と虛空と識無邊との想、

【二七】以下七界の偏知を了知すべきことを明す。
【二八】黑闇とは受に由る色貪なり。
【二九】不淨とは受に由る色貪なり。
【三〇】虛空とは空無邊處なり。
【三一】彼の所治とは黑闇、不淨、色趣等なり。
【三二】能治とは光明、淸淨、虛空等の界なり。
【三三】一切の有とは三有卽ち三界なり。
【三四】有の無上とは三界の最上なるを云ふ。
【三五】以下得の方便を了知すべきことを明す。

無所有の想を取るに由るも當に知るべし亦た爾なりと。非想非非想處は無相作意の方便に由りて想の極細に趣入するが故に取りて第一と爲す。諸有る寂靜に勝解を起す時隨順して(三六)第一有定を獲得し、一切の相に於いて思惟せざるが故に、無相界に於いて正しく思惟するが故に、薩迦耶〔見〕滅して無相に由るが故に隨順して(三七)滅定滅界を獲得す、是の如き(三八)二種は〔有想〕定を行ずるに由りて隨順し獲得せず。

(三九)又永へに色無色界の所有貪を害するに由るが故に、下屈せざるが故に、高擧せざるが故に、解脫し住するが故に、解脫に住するが故に、是の如き諸定は所欲に隨つて力あつて調柔自在にして轉ずることを得、是の如きを名づけて隨つて諸界を得ると爲す。(四〇)又此の諸界能く隨つて(四一)八解脫定を獲得す、當に知るべし初界は能く隨つて第一第二の二解脫定を獲得し、其の第二界は能く隨つて第三の解脫勝靜慮定を獲得し、其の餘の五界は其の次第の如く能く隨つて五解脫定を獲得すと。

(四二)復た次に、諸の外道の輩は弟子をして三處の中に於いて昇進することを得せしめんと欲するが故に略して法要を說く。謂く(一)一類あり、劣れる欲界に於いて人中の快樂乃至(四三)他化自在天の生を獲得せしめんが爲めに能く彼の果を感ずる諸行を宣說す。(二)復た一類あり、中の色界に於いて

【三六】第一有定とは第六界非想非非想處なり。
【三七】滅定とは滅盡定なり。
【三八】二種とは滅定及び滅界なり。
【三九】以下得を了知すべきことを明す。
【四〇】以下得の所爲を了知すべきことを明す。
【四一】八解脫定。前出。
【四二】見想を解す、三段あり、今第一段なり。
【四三】他化自在天は欲界第六天にして欲界の最上なり。

(四四)梵世間等の衆同分の生を獲得せしめんが爲めに能く彼の果を感ずる諸行を宣說す。(三)復た一類あり、妙なる無色に於いて乃至非想非非想處の衆同分の生を獲得せしめんが爲めに能く彼の果を感ずる諸行を宣說す。是の如く彼れ劣界を緣と爲すと說くを名づけて劣語と爲し、中界を緣と爲すを名づけて中語と爲し、妙界を緣と爲すを名づけて妙語と爲す。彼の諸の弟子是の法を聞き已つて還つて是の如き差別の想解を起す、是の如き想解を亦たは劣想、中想、妙想と名づく。如如其の想は是の如く是の如く(四五)忍樂を發生し、是の如く忍樂は劣見、中見、妙見を發生す。彼れ是の如き諸の忍樂と見とに由りて便ち彼彼の差別の生處に於いて信解し忍可し、執して最勝なりと爲し、彼れと相應する業を造作し增長す、是の如き信解を名づけて劣願、中願、妙願と爲す。當に知るべし此の三の說者行者を亦た說いて名づけて劣中妙品の補特伽羅と爲す。又彼の說者及び行者亦た便ち他の爲めに是の如き劣中妙の法と彼れ亦た是の如き類の生を獲得することとを宣說す。又卽ち此の生に前後相待して差別あるが故に諸界の劣中妙の別を安立す。是の如き三種を若し涅槃に待すれば一切皆な是れ劣界の所攝なり。若くは諸の如來は勝義に由るが故に妙界を緣と爲して但だ妙語を說きたまふ、餘法の差別は應ずるが如く當に知るべし。若くは諸の聖者の所有の行趣は應に知るべし皆な現法涅槃の爲めにすと。先に外道あり、彼れ命終し已つて此の間に來生し、因增長するが故に衆緣和合し、善說の法毗奈耶の中に於いて暫らく出

【四四】梵世間とは梵天なり。
【四五】忍樂とは認可樂欲の意なり。

家することを得るも、彼れ先世に外道の妄見に迷亂せられたるに由るが故に今時の大無明界を集成し、此を因と爲るに由りて其の涅槃及び大師の所に於いて疑惑を生起し、正しき法及び毗奈耶を退失し、還つて外道の諸の惡說の法に歸す。彼れ先世に數習する因力に由りて還つて復た是の如き劣語を宣說す、乃至廣く說くこと前に說ける所の如し一切應に知るべし。

【四六】見想を解する第二段。

（四六）復た次に、外道、外道の弟子の各別の見趣に處して廣く施設する中に於いて、略して三種の忍見の〔所〕依に由る差別得可きあり。此の正法に依りて能く永へに纏及び隨眠を捨てしむるが故に彼をも亦た隨つて捨て、餘も亦た執無く、彼れ現法の中に於いて他と違諍忿競して住するに由りて能く自他の一切の無義を引くと了知し、既に是れを知り已つて彼の隨眠を捨つ。此を捨つるに由るが故に所餘の隨眠及び餘の此に因る所有の諸纏畢竟して執無し。外道各別の見趣に處して廣く施設するに於てとは、謂く世間の若くは常、無常、廣く說かば乃至如來の滅後の非有非無を執する中に於て、一類の外道の弟子性と爲り遲鈍にして、如如の自師或は他の敎導是の如く是の如く審に思量せず、唯だ此のみ諦實にして餘は皆な愚妄なりと取執し堅著せんに、彼れ一切の各別の見趣に於いて悉く皆な忍受す、是れを第一の忍見の〔所〕依に由ると名づく。復一類の外道の弟子あり、性となり是れ中根にして遲鈍に非ざるも、自然に法に於て猛利に推尋し觀察すること能はず、亦た言に隨つて便ち信解を生せず、而も展轉して相違する見趣に於いて隨つ

て一を喜樂し、彼れ一類の見趣に於いては忍受し、餘の一類に於いては而も忍受せず、是れを第二の忍見の〔所〕依に由ると名く。復一類の外道の弟子あり、性となり是れ利根にして彼れ能く自然に法に於いて猛利に推尋し觀察し、諸の見趣の惡施設に由るが故に彼れ一切は皆な理に應せずと見、見已つて一切都べて喜樂せず。是の因緣に由て諸の見趣に於て皆な忍受せず。此に復二の補特伽羅あり、一には邪見行、性となり堪能無く、解を求むる意無し、二には正見行、性となり堪能あり、解を求むる意あり。此の中第一の一切忍〔受〕せざる補特伽羅は卽ち是の如き非理の比量に由り、善説の法毗奈耶の中に於いて審に思量せず、執して非理と爲し、賢聖を誹謗し、(四七)無有の見を起し、又一切の各別の見趣に於いて皆な忍受せず、方便して彼をして依仗する所無からしめ、亦た滅壞せしめ、宗承する所無く而も妄りに分別計度して、依仗する所無くして、引く所の見趣を顯示し、常に一切の各別の見者と共に違諍を興し、互に相惱害す。是れを第三の忍見の〔所〕依に由ると名づく。此の中第二の一切忍〔受〕せざる補特伽羅は前の一切の忍〔受〕せざる者に於て見て亦た喜樂せず、解を求むる心に住し、他所、謂く善説の法毗奈耶の中の佛、佛の弟子に往詣し、如實に己を顯はして言はく、我れ一切皆な忍受せずと。佛、佛の弟子は彼の人解を求むる意ありて覺慧猛利にして堪任の性を具せりと了知し、卽ち其の心を以て彼の心を念じ已つて、遂に前の補特伽羅に依りて反詰して曰く、汝卽ち此に於いて都べて忍見せず亦た忍〔受〕せざるやと。彼れ便

【四七】無有の見とは空有の二見斷常の二見なり。

ち如實に唯だ然りとして答ふ。如來遂に此の正法の中の諸の弟子衆に擧げて彼を讃勵して告げて言はく、汝多人と相似す、我等一切は諸の見趣に於いて並に忍見せず皆な忍受せず。汝若し爾らば此の如き人は衆の纏と隨眠との一切の見の〔所〕依皆な永へに斷ずるが故に當來世に於いて諸見雜染堪能する所無し、汝今彼れと竟に差別無し、是の如き輩流は極めて尠少と爲す、汝は此よりも少し、轉た更に少しと爲す、若し一切の纏及び隨眠に於いて都べて忍見せず能く永へに斷ずる者は彼れ一切に於いて畢竟して執無しと。是の如く如來、如來の弟子は方便して彼の外道の弟子をして正智見に於いて希欲を發生せしむ。竊に是の念を作さく、我れ竟に如來の弟子能く是の如き纏及び隨眠を斷ぜることを知らずと。如來は彼れ正智見に於いて希欲を生ずと知り已つて更に復た彼の希欲の心を策發したまふに其れ遂に承受す。如來彼をして思擇と修習との二の對治力に依止して永へに一切の纏及び隨眠を斷ぜしめんと欲するが爲めに法要を宣說し、其をして無倒なる智見を獲得し、餘の此の正法に安住する者の如く能く一切の纏及び隨眠を捨てしめたまふ、所謂彼の諸見の〔所〕依を思擇し、能く展轉して互に相ひ乖背せしむ、是の因緣に由り違諍惱害し、能く自他の一切の無義を引く。諸の聖弟子は彼の一切に於いて皆な執取無し、設ひ來つて問ふことあるも亦た記別せず、是の如き諸の過患を觀察し已つて思擇力に依つて諸纏を捨離す。此の因緣に由りて彼の見の〔所〕依に於いて能く永く捐棄し、餘の見の〔所〕依に於いて正見に由るが故に亦たあること無からしむ。是の如く永へに諸纏を斷じ、隨眠を拔か

んと欲するが爲めの故に循身念を修し、有色身に於いて無常の性を觀じ、身の染著に於いて淨く其の心を修め、自身に隨ふ諸受の分位に於いて無常門に由りて無常の性を觀ず。如實に諸の名色を了知するが故に便ち諸漏に於いて心解脱を得、身壞し已つて當來の諸受皆な悉く斷滅すと觀ず。又其の身に於いて當に壞すべき想に住し、乃至命在らんには常に能く離繫せる諸受を領受す。此の如きを名づけて修習力に依りて隨眠を捨離すと爲す。當に知るべし此の中貪恚癡等は當來世の〔四八〕生等の諸苦をして和合し繫縛せしめ、亦た現法に業雜染を起らしめ、亦た未來の染事を欣求し、過去に已に捨てたる所の事を執取し、現在に正に現前する事に耽著せしむ。意の很るを違と名づけ、言の很るを諍と名づけ、〔四九〕三に由りて損惱するを說いて名づけて害と爲す。無常を觀ずる等は聲聞地に已に其の相を說けるが如し。

〔五〇〕復た次に、〔五一〕不淨、慈悲修の所對治の〔五二〕欲貪、〔五三〕恚害未だ永へに斷ぜざるが故に諸の依止の中の彼の品の麤重は猶ほし種子の如く能く彼を生ずるが故に、其の所應の如く說いて欲貪及び恚害界と名づく。此あるに由るが故に欲〔貪〕、恚害に順ずる境現前する時不如理なる作意の思惟に依りて三種の境に於て能く非理なる相好を取る想生ず。此の想生じ已つて堅く執するに由るが故に當に知るべし二種の過患を發起すと、一には現法、二には後法なり。此の中云何なるを名づけて堅く執すと爲し、云

〔四八〕生等とは生老病死なり。
〔四九〕三とは身語意なり。
〔五〇〕見想を解する第三段なり。
〔五一〕不淨慈悲修とは不淨觀と慈悲觀なり。
〔五二〕欲貪は不淨觀の所對治。
〔五三〕恚害は慈悲觀の所對治。

何なるを名づけて現法の過患と爲し、云何なるを名づけて後法の過患と爲すや。若くは已生の増上力に由り前の如く相似して欣欲し分別する所有の煩惱の尋求生起す、是の因緣に由りて堅く想を執すと名づく。又尋求する時其の三處に於て諸の有情に於いて邪行を發起し此を因と爲るに由り或は堪能ありて能く現法の所有憂苦を生ず、此の因緣に由りて說いて苦ありと名づく。或は堪能無く、然も卽ち彼れ現在前するに由るが故に匱乏ありと名づく。又此の苦あり及び匱乏あるは二を用て緣と爲す。一には他の手、塊、刀、杖及び麤言等を用て增上緣と爲す、是の緣に由るが故に災害ありと名づく。二には內の雜染にして住するを用て增上緣と爲す、是の緣に由るが故に燒惱ありと名づく。是の如きを名づけて現法の過患と爲す。卽ち此の因に由りて當來世に於いて諸の惡趣に生ず、是の如きを名づけて後法の過患と爲す。又若し其の受る所の學處に於いて堅固に執することあれば當に知るべし彼に於いて(五四)乾ける葦舍の如く、(五五)所依止の中の所有の(五六)能依は蟲の如しと。善法は邪想の火を其の中に擲置するに由りて、能く焚滅するが故に、當に知るべし卽ち此の補特伽羅の所有の蟲の如き一切の善法皆な燒害せらると。此れと相違するは〔聞思修の三慧を〕堅く執すること無きが故に當に知るべし功德善法を退失すと。此れと相違するは其の所應の如く當に知るべし〔邪想を〕出離し無恚の想等差別すと。又是の中に於いて聞思修の慧は能

【五四】乾ける葦舍は堅固に執する人に喩ふ。

【五五】所依止は葦舍なり、次の能依に相待す。

【五六】能依とは堅固に執する人に在る所の少なる善法を云ふ、此少善法を葦舍の中に居る小蟲に喩ふ。

く黒品に堅固なる執〔著〕無からしめ、能く白品に堅固なる執〔著〕あらしむ。若し此の三種の妙慧闕くることあれば能く黒品に堅固なる執〔著〕あらしめ、能く白品に堅固なる執〔著〕無からしむ。

（五七）復た次に、如來に二の甚だ希奇なる法あり、一には一切諸法には皆な我あること無しと顯示し、二には一切の有情の（五八）自作他作には皆な失壞無しと顯示したまふ。此の中略して二種の有情あり、一には在家品、二には出家品なり。在家の有情財寶を求めんが爲めに初めて加行を興すを發起界と名づく。即ち此の中に於いて若し未だ獲得せざれば精進に順ずるに由つて、障礙の因緣〔に於いて〕諸心勇悍にして即ち彼を望むを勢力界と名づく。若し已に獲得せば、蚊虻等の所有災害に〔於て〕精進に順ずるに由りて障も轉ぜしむること能はざるを任持界と名づく。即ち此の諸界にして自らの方所より餘の方所に至り、未だ（五九）擯捨せざるより已に擯捨せるに至るを出離界と名づく。即ち彼の有情にして財寶の爲めの故に俱に（六〇）二處に於いて無間殷重なる加行無緩なる加行を起すに由るを勇猛界と名づく。出家の有情にして先づ出家を樂ひ出家を求むるが故に決定欲を生ずるを發起界と名づく。出家品に依り應に得べき所の廣大なる善法に於いて怯劣あること無きを勢力界と名づく。種種なる淋漏より生ずる所の衆苦、勤めて精進することを發して生ずる所の衆苦、（六一）界相違する等より生

【五七】希奇を解す。
【五八】自作他作とは自業他業なり。
【五九】擯捨とは家及び妻子を擯捨するなり。
【六〇】二處とは未得處と已得處なり。
【六一】界相違。界とは種子、四大種不平等不調なるを界相違すと云ふ。

ずる所の衆苦も敗壞すること能はざるを任持界と名づく。若し下劣に於いて喜足を生ぜざれば出離界と名づく。乃至命在らんに常に無間殷重なる加行を修するを勇猛界と名づく。是の如き一切をば應に當に了知すべし、謂く彼の諸界及び（六二）盡所有の諸の品類界なり。

（六三）復た次に、諸界の中に於いて略して二種の界の差別の性あり。云何なるを二と爲すや、一には他類の差別の性、二には自類の差別の性なり。他類の差別の性とは、謂く眼界の異り、色界の異り、眼識界の異り、是の如く乃至意識界の異りなり。自類の差別の性とは、謂く卽ち彼の界の或は苦受に順じ、或は樂受に順じ、或は（六四）不苦不樂受に順ずるなり、是を緣と爲るに由り、能く三受を生ず。

（六五）復た次に、四の因緣に由りて當に知るべし（六六）三種の三界、（六七）二〔種〕の出離界を建立すと。云何なるを四と爲すや。一には外を出離せず而も出離するが故に、二には內を出離せず而も出離するが故に、三には畢竟の出離に非ず而も出離するが故に、四には增上慢無きが故なり。當に知るべし此の中外の（六八）五妙欲の貪を用て緣として欲界を建立すと。卽ち此の界を出離する義に由るが故に色界の最初の靜慮を建立し、（六九）尋〔伺〕喜樂を出離

【六二】盡所有とは一切諸法のこと。

【六三】差別の性を解す。

【六四】不苦不樂受とは捨受なり。

【六五】安立を解す。

【六六】三種の三界とは(一)欲、色、無色の三界、(二)色界、無色界、滅界、(三)斷界、滅界、無欲界なり。

【六七】二種の出離界とは五種の出離界と六種界なり、第十一卷の如し。

【六八】五妙欲とは財、色、食、名、睡の五欲なり。

【六九】尋伺を出離するが故に第二靜慮を建立し、喜を出離するが故に第三靜慮を建立し、樂を出離するが故に第四靜慮

する義に由るが故に此の上の三種の靜慮を建立し、（七〇）色有對の種種なる性の想を出離する義に由るが故に空無邊處所攝の無色界を建立し、空識無所有の想を出離する義に由るが故に（七一）此の上の所攝の無色界を建立す。是の如く（七二）外處を（七三）出離せず出離する義なるが故に當に知るべし（七四）三界の差別を建立すと。又色界の中には六〔根〕處を具足し（七五）內處圓滿し、無色界の中には（七六）五有色處をば皆な已に超越して唯だ餘の意〔根〕處のみなり、滅界の中に於いては一切の六〔根〕處皆な已に超越せり。是の如く內處を出離せず出離する義なるが故に當に知るべし（七七）餘の三種の界を建立すと。又色界の中は是れ畢竟の出離に非ず、欲界無色界の中を色界に望むも當に知るべし亦た爾なりと。若し諸の有爲皆な悉く寂滅なれば、當に知るべし是れを畢竟の出離と名づくと。是の如く畢竟の出離に非ず出離する義なるが故に當に知るべし（七八）三界の差別を建立すと。增上慢無しとは、謂く徧知に由りて當に知るべし五種六種諸の出離界を建立すと、（七九）三摩呬多地に已に其の相を辨せるが如し。

（八〇）復た次に、若し諸の苾芻專ら寂靜を樂ひ止觀を勤修すれば略して

を建立す。

【七〇】 色有對。色とは青黃等、有對とは長短等。

【七一】 此の上の所攝の無色界とは無色界の上三處を云ふ。

【七二】 外處とは外境卽ち五妙欲、尋伺喜樂、色、有對等の想なり。

【七三】 出離せず或は出離する義なるが故にの意なり。

【七四】 三界。第一種の三界卽ち欲、色、無色の三界なり。

【七五】 內處とは六根なり。

【七六】 五有色處とは眼、耳、鼻、舌、身の五色根なり。

【七七】 餘の三種の三界とは第二種の三界卽ち色界、無色界、滅界なり。

【七八】 三界とは第三種の三界卽ち斷界、滅界、無欲界なり。

【七九】 第十一卷。

【八〇】 寂靜を攝す。

五相に由りて當に知るべし其の心解脫を得と名づくと。一には奢摩他にて其の心を熏修し、毗鉢舍那に依りて奢摩他品の諸の隨煩惱を解脫す。二には毗鉢舍那にて其の心を熏修し奢摩他に依りて毗鉢舍那品の諸の隨煩惱を解脫す。三には二種等しく運んで心の隨惑を離れ、一切の見道所斷の所有諸行を解脫す。四には卽ち此れに由るが故に一切の修道所斷の所有諸行を解脫し、有餘依涅槃界に住す。五には一切の〔八一〕苦依の諸行を解脫し、無餘依涅槃界に住す。善說の法毗柰耶の中に於いて略して二種の師及び弟子の甚だ希奇なる法あり、一には平等の見に隨起する言說、二には最勝の見に隨起する言說なり。是の如き二種は外道の法の中に都べて得可からず、所作差別するが故に、涅槃を遠離するが故なり。

復た次に、世間の愚夫に略して二種の愚夫の相あり、一には樂習せる行能く自他の義利無き行を引く、二には四處に於いて善巧〔智〕を得ず。當に知るべし能く義利無き行を引くに四種の相ありと。云何んが四と爲すや。謂く能く四種の苦を生起するが故なり、一には他の差別の苦、二には內の差別の苦、三には時の差別の苦、四には身の差別の苦なり。他の差別の苦とは、或は疫癘あり、謂く非人の作す〔所〕なり、或は災害あり、謂く人の作す所なり、或は已に遭へる、或は當に遭ふべきを恐れて未だ遭はざる所に於いて而も怖畏を生ずあり。是の如きを名づけて他の增上〔緣〕に由りて生ずる所の衆苦と爲す。內の差別の苦とは。謂く界相違する疾病の因緣を名づけて災患と爲し、所愛の變壞所欲の

【八一】苦依とは苦の所依なり。

匱乏に染〔著〕を生じて心を惱ますを名づけて擾惱と爲す。是の如きを名づけて內の增上〔緣〕に由りて生ずる所の衆苦と爲す。此れ復た前の如く應に知るべし或は已に遭へる所の苦、或は當に遭ふべきを恐れて怖畏を生ずる苦ありと。時の差別の苦とは、謂く卽ち是の如き諸の品類の苦の過去の已有、未來の當有、現在の今有、是の如きを總じて時の差別の苦と名づく。身の差別の苦とは、謂く自ら邪行を習行するを因と爲し、能く己をして苦しましめ、是の因緣に由りて他正行すと雖も亦た能く苦しましむ、是の如きを名づけて身の差別の苦と爲す。當に知るべし此の中前の三を名づけて唯だ能く自らの義利無き行を引くと爲し、後の一を名づけて亦た能く他の義利無き行を引くと爲すと。云何んが四處に善巧〔智〕を得ざるや。謂く(八二)(一)諸界(二)諸處(三)緣起(四)處非處の中に於いて皆な了達せず。上と相違するは當に知るべし卽ち是れ聰慧の二相なりと。又無色〔界〕の意處の所依所緣の自類の流轉する差別に由りて當に知るべし建立するに十八界あり、(八三)五色處に由りて運轉し驅役する所依の體性の差別を安立すと。當に知るべし有餘の(八四)六界を建立し、所依の體性の差別を安立すと、謂く(八五)地等の四なり。運轉する所依の體性の差別は卽ち是れ空界なり、驅役する所依の體性の差別は卽ち是れ識界なり。(八六)染淨品の想及び尋思の所依の義に由るが故に當に

【八二】諸界とは十八界、諸處とは十二處、緣起とは十二緣起なり。

【八三】五色處とは五境なり。

【八四】六界とは地水火風空識なり。

【八五】地等とは地水火風なり。

【八六】染品の想及び尋思に由りて欲、恚、害の三界を立て、淨品の想及び尋思に由りて無欲、無恚、無害の三界を立つ。

知るべし有餘の六界を建立すと、謂く欲、恚、害並に（八七）彼の〔能〕對治なり。貪瞋癡縛の所依の義なるが故に當に知るべし有餘の六界を建立すと、謂く苦、樂、憂、喜、捨、無明なり。若し非理なる作意思惟有れば卽便ち邪なる想と尋思とを生起し、若し如理なる作意思惟あれば卽ち便ち正しき想と尋思とを生起す。又（八八）三界と染淨の二品とに徧く行ずる義に由るが故に當に知るべし有餘の四界を建立すと、謂く（八九）名に攝受する所等の四蘊なり。又所染所淨に由り淸淨卽ち此れ不淨なり、淸淨の增上は前に說ける所の如し。外〔處〕を出離せず出離する義なるが故に當に知るべし有餘の三界を建立すと、謂く欲界、色界、無色界なり、前に說ける所の如し。內〔處〕を出離せず出離する義なるが故に當に知るべし有餘の三界を建立すと、謂く色界、無色界、滅界なり。又卽ち此の內外の二事の出離の增上〔緣〕に由りて正法或は不正法を聽聞し、如理に思惟し、或は不如理に思惟す。依處の三種の言事差別する義なるが故に當に知るべし有餘の三界を建立すと、謂く過去界、未來界、現在界なり。又所知の諸苦煩惱の多中少の義に由りて當に知るべし有餘の三界を建立すと、謂く劣界、中界、妙界なり。若し上苦及び上煩惱あれば是れを劣界と名づけ、若し中苦及び中煩惱あれば是れを中界と名づけ、若し少苦及び少煩惱あれば是れを妙界と名づけ、是の如く徧く劣中妙界を知る。又此の因緣を遠離する義に由

【八七】彼の能對治とは無欲、無恚、無害の三界なり。

【八八】三界とは欲、色、無色の三界なり。染淨とは有漏と無漏なり。四蘊は遍ねく三界に通じ有漏無漏に通ず、色蘊は爾らず唯だ欲・色二界に局る。

【八九】名とは心法のこと。

り、及び此の對治〔道〕を修習する義に由りて當に知るべし有餘の三界を建立すと、謂く善界、不善界、無記界なり。又善淸淨を修する差別に由り缺縛の義なるが故に、無縛の義なるが故に、具縛の義なるが故に當に知るべし有餘の三界を建立すと。謂く學界、無學界、非學無非學界なり。又即ち彼の有學無學と諸の愚夫と若くは共じ共せざる世出世の法を成就する義に由るが故に當に知るべし有餘の二界を建立すと、謂く有漏界、無漏界なり。又即ち彼の世出世間の若くは常無常、有上無上の差別の義に由るが故に當に知るべし有餘の二界を建立すと、謂く有爲界、無爲界なり。一切皆な涅槃に趣向せんが爲めに悉く涅槃を以て其の後際と爲し、熟ら梵行を修す、是の故に此れを過ぎて復た界を立つること無し。(九〇)諸處、(九一)緣起及び (九二)處非處の所有の善巧〔智〕は聲聞地に已に其の相を辯ぜるが如し。又若し略して處及び非處の善巧の相を說かば、謂く或は(九三)五趣に趣く行に依止し、或は復た(九四)涅槃に趣く行に依止するなり。此の一切の行に略して三種あり、謂く劣中勝なり。(九五)惡趣に趣く行を說いて名づけて劣と爲し、(九六)善趣に趣く行を說いて名づけて中と爲し、(九七)涅槃に趣く行を說いて名づけて勝と爲す。所以は何ん、善趣に趣く行は此を最

【九〇】諸處とは十二處なり。
【九一】緣起とは十二緣起なり。
【九二】處とは理即ち正法、非處とは非理即ち不正法なり。更に云はば處とは還滅の因緣、非處とは流轉の因緣なり。
【九三】五趣に趣く行とは地獄、餓鬼、畜生、人間、天上の五趣に輪廻する流轉の行即ち煩惱業の集諦なり。
【九四】涅槃に趣く行とは還滅の行、即ち三學八正道等の道諦なり。
【九五】惡趣とは地獄、餓鬼、畜生の三惡趣なり。
【九六】善趣とは人天の善趣なり。
【九七】涅槃は無學果或は佛界なり。

も極「上」と爲す、更に餘行無く、唯だ此れ能く所有世間の最極圓滿なるを感ずればなり。謂く能く轉輪王の身、或に帝釋の身、或は魔羅の身、或は大梵の身を感得し、彼に第二無く、更に餘の補特伽羅の或は男或は女の其れと等しき者あること無し。涅槃に趣く行は當に知るべし能く一切の有情の最勝なる法性を證すと、謂く聲聞の菩提、獨覺の菩提、(九八)無上の菩提なり。諸佛如來を彼の一切に於いて最も殊勝なりと爲す、一切の三千大千世界の補特伽羅に與し等しき者無し。又餘の所有の菩提の劣れる功德に安住する者 諸 の世間に於いて增上なる位を得るすら尙ほ殊勝なりと爲す、何に況んや如來「の位を得る」をや。彼れ復た云何ん、謂く是の處に於いて正見具足せる補特伽羅は現行すること能はず、諸の異生類は現行するに堪任す、當に知るべし一切は經に廣く說けるが如しと。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(九九)「自性と因緣と、見と染と數取趣と、轉の差別と道理と、寂靜とにして後は觀察なり。」

(一〇〇)諸受の自性をば應に當に了知すべく、諸受の因緣をば應に當に了知すべく、受に於ける正見をば應に當に了知すべく、受に於ける雜染をば應に當に了知すべく、能く受を受くる補特伽羅の思擇と不思擇との二力の差別に於いて應に當に了知すべく、是の如く受に於いて解脫し解脫せざる流轉の品

【九八】無上の菩提とは諸佛菩薩の菩提なり。

【九九】此は總頌第三門受等を解する別頌に二頌ある中の第一頌なり。此の中更に九門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【一〇〇】頌の九門を列す。

別を應に當に了知すべく、諸有る所受皆な苦なる道理をば應に當に了知すべく、諸受の寂靜にして止息する差別をば應に當に了知すべく、受に於いて一切の受想を觀察することを應に當に了知すべし。

(一〇一)略して(一〇二)三受を說く、是れ受の自性なり。(一〇三)三の品類の觸は是れ受の因緣なり。(一〇四)又諸の樂受は變壞する法なるが故に、貪の依處なるが故に、貪は是れ當來の衆苦の因なるが故に、此に因りて應に樂受を觀じて苦なりと爲すべし。若くは諸の苦受は現在前する時惱害する性なるが故に毒箭に中りて未だ拔くことを得ざるが如し、此に由りて應に苦受は箭の如しと觀ずべし。非苦樂受の已に滅壞せる者は是れ無常なるが故に、正に現前する者は是れ滅法なるが故に、(一〇五)二に於いて更に續いて能く隨順するが故に、此に由りて應に非苦樂受は性是れ無常なり性是れ滅法なりと觀ずべし。是の如く受に於いて生ずる所の正見にて能く隨つて諸有る所受は皆な悉く是れ苦なりと悟入す。(一〇六)樂受の中に於いては貪の隨眠あり、苦受の中に於いては瞋の隨眠あり、非苦樂「受」に於いては無明の隨眠「ある」なり、是れを受に於いて起す所の雜染と名づく。樂等の所有諸受現前する分位に於いて一切未だ煩惱隨眠の隨眠する所を斷ぜずと雖も、然も彼の各別の所行の諸纏を緣ずるに由りて生起する此の後の睡眠煩惱の隨縛を卽ち彼の相續に於ける隨眠と名づく。永く諸の隨眠「卽ち種子」を害せんと欲するが爲めの故に熟

【一〇一】受の自性を解す。
【一〇二】三受とは苦受、樂受、非苦非樂受なり。
【一〇三】受の因緣を解す。文の中三の品類の觸とは苦觸、樂觸、非苦非樂觸なり。
【一〇四】受の見を解す。
【一〇五】二とは苦樂二受なり。
【一〇六】受の染を解す。

ら梵行を修す、唯だ諸の「現行」の纒を遣るが爲めのみの因縁には非ず。〔一〇七〕思擇力無き補特伽羅は苦受を受くる時心極めて憂悴す、即ち此の苦受若くは身若くは心に現前し領納すれば所餘の樂受、非苦樂受未だ斷ぜざるに由るが故に而も相應すと說き、是の故に名づけて圓滿なる冥闇の受坑を現見するに其の底を得難しと爲す。思擇力ある補特伽羅は應に知るべし一切上と相違すと。〔一〇八〕又諸受に於いて心未だ解脫せざる補特伽羅は但だ苦受に於いて圓滿に領納すること猶ほし一人の二の毒箭に中るが如し、二の毒箭とは即ち三受に喩ふ。或は染心に領納す、謂く貪瞋癡の惑に由る、或は相應し領納す、謂く生等の苦に由るなり。是の如く彼れ現法の所有上品の苦に由るが故に、及び現法の諸の雜染に由るが故に、亦後法の所有苦に由るが故に、是の諸受に由りて其の染惱を受く。心解脫する者は應に知るべし一切上と相違すと。此の差別をいはば具に三受を領「納」す。又若し受あり、依止の中に於いて生じ已つて破壞し消散して住せず、速に遷謝に歸して多時を經ず、相似し相續して流轉すれば應に此の受は猶ほし旋風の若しと觀ずべし。若し諸受あり少時經停し、相似し相續して速に變壞せずして流轉すれば應に此の受は客舍の中の羈旅の色類の如しと觀ずべし。又彼の諸受の自性の所依の染淨の品別を當に知るべし受の品類の差別と名づくと。「愛」味ある受は諸の世間の受なり、「愛」味無き受は諸の出世の受なり、耽嗜に依る受は妙五欲に於ける諸の染汙受なり、出離に依る受は即ち是れ一

〔一〇七〕數取趣を解す。數取趣は補特伽羅の譯、有情は數數三界五趣に輪廻するが故に有情を數取趣と云ふ。

〔一〇八〕轉の差別を解す。

切の出離遠離より生ずる所の諸の善の定「地」不定地と倶行する諸受なり。(一〇九)又諸の苦受は一切衆生現に是れ苦なりと知り、(一一〇)成立することを假らず、所餘の二受は二の因縁に由りて應に是れ苦なりと知るべし。非苦樂受及び能く此の受に隨順する諸行は無常に由るが故に應に是れ苦なりと知るべし、所有樂受及び能く此の受に隨順する諸行は變壞する法なるが故に應に是れ苦なりと知るべし。此の道理に由りて當に諸受は皆な悉く是れ苦なりと知るべし。(一一一)又彼の諸受に應に知るべし略して三種の寂靜ありと。一には上の定地に依止するに由るが故に下地の諸受皆な寂靜なることを得、二には暫時現行せざるに由るが故に寂靜なることを得、三には當來究竟して轉せざるに由りて寂靜なることを得るなり。當に知るべし此の中暫時行せざるを名づけて寂靜と爲し、其をして究竟して行せざる法を成せしむるを名づけて止息と爲すと。(一一二)言論を樂ふ者は廣く言論を生じ、染汙なる樂欲展轉して種種なる論を發起するを說いて名づけて語言と爲す。卽ち此の語言は、若し正に(一一三)初靜慮定に證入すれば卽ち便ち寂靜なり。又麤なる尋伺能く語言を發す、(一一四)諸の未だ「根本」定を得ず、或は已に得て還つて定より起ちて能く語言を發するあり、正しく「根本」定に在るに非ず。正しく「根本」定に在る者は微細なる尋伺隨つて轉ずるとありと雖も而も所有語

【一〇九】受の道理を解す。

【一一〇】苦受の苦なる道理を成立する要なし。

【一一一】寂靜を解す。

【一一二】言論を樂ふは方便定中に於ける麤なる尋伺の心所の作用なり。

【一一三】是れ初靜慮根本定なり、此の定中麤なる尋伺無きも細の尋伺なきに非ず。

【一一四】方便定にあるを云ふ。

言を發すること能はず、是の故に此の位を說いて一切の語言寂靜なりと名づけ、是れを第二の義門の差別と名づく。又〔二五〕瑜伽師は貪瞋癡に於いて深く過患を見、貪瞋癡等の離繫せる諸受に安住し領納し、貪瞋癡等を數數徧知し、數數斷滅するが故に其の心貪瞋癡に於いて染〔汙〕を離れ解脫すと說く。又七行に由りて諸受の中に於いて受の七相を觀ず、謂く(一)諸受の自性の故に、(二)現在の流轉還滅の因緣の故に、(三)當來の流轉の因緣の故に、(四)當來の還滅の因緣の故に、(五)雜染の因緣の故に、(六)清淨の因緣の故に、及び(七)清淨の故なりと觀ずるなり。

〔二六〕復た次に、嗢柁南に曰く、

『受の生起と劣等と、諸受の相の差別と、見等を最勝なりと爲すと、
差別を知ると問と記となり。』

〔二七〕一切の有情の應に斷ずべき諸受は略して三緣に由りて生起することを得。一には欲緣、謂く未來世に於いてす、二には尋緣、謂く過去世に於いてす、三には觸緣、謂く現在世に於いて現前する境界なり。云何んが名づけて一切の有情と爲すや。謂く有情衆に略して八種あり、一には在家衆、二には出家衆、三には諸欲に於いて未だ貪を離れざる衆、四には諸欲に於いて已に貪を離れたる衆、五には初靜慮に於いて未だ貪を離れざる衆、六には初靜慮に於いて已に貪を離れたる衆、七には此より已

【二五】瑜伽(Yoga)師とは觀行者のこと、解題に委出す。

【二六】此は總頌第三門受等を解する別頌に二頌ある中の第二頌なり、此の中更に七門を列し、長行に於いて次第に解釋す。

【二七】受の生起を解す。

上乃至非想非非想處に[於て]未だ貪を離るることを得ざる諸の外道衆の能く世間の定に入り、邪見乃至邪解脱の智を具足せる者、八には（二八）內法に住する衆にして能く世間の定に入り、正見乃至正解脱の智を具足せる者、及び內法に住する衆にして能く出世の定に入る者なり。此の八衆能く諸受を領納するに依りて徧知するに由りて應に知るべし普く諸の有情衆を攝すと。又在家衆、或は出家衆にして諸欲の中に於いて未だ貪を離れざる者は三の因緣に由りて諸の染汙の受生起することを得、一には染著力に由り、二には作意力に由り、三には境界力に由る。當に知るべし此の中諸の在家の者は諸欲を追求し、受用の爲めの故に欲樂を發生するは染著力に由り、卽ち此の非理に先時に曾て領受せる所を思惟するは作意力に由り、現前の境に於いて現在に受用するは境界力に由る。應に知るべし是の如き補特伽羅の欲尋觸の緣は現行するに由るが故に皆な寂靜ならず、此を以て緣と爲して三受を發生すと。又最初の染汙の欲尋觸現行するに由るが故に彼の緣より生ずる所の諸受を領納す。若し彼れ生じ已らんに染著して捨せず、亦た除遣せざれば、是の如く彼の受は長時に相續し隨轉して絕えず寂靜ならず、寂靜ならざる緣長時に相續して諸受を領納す。又彼の欲等は其の最初より長時に相續し恆に現行するに由るが故に、彼の緣、彼の品所有の煩惱は相續に隨在して未だ永へに斷せざるが故に卽ち說いて寂靜ならざる緣と爲す、是れを第二の義門の差別と名づく。若くは諸の出家にして未だ貪を離れざる者は諸欲に於いて能く棄捨するに由る

【二八】內法とは佛法なり。

が故に其の染著力に攝受する所の欲は寂靜なることを得と雖も作意と境界との力に攝受する所の若くは尋、若くは觸而も未だ寂靜ならず。是の因緣に由りて彼れ獨處に於いて尋の對治に於いて未だ善く修せざるが故に、一切の離欲皆な未だ作さざるが故に、曾て受けし境に於いて非理に作意し、尋思現行し、諸の勝妙なる現前の境界に於いて觸の現行するあり。若くは尋思に於いて深く過失を見、彼の對治に於いて已に善く修せるが故に、一切の離欲未だ盡くし作さざるが故に欲は前に說けるが如くにして已に寂靜なることを得、是の因緣に由りて尋も亦た寂靜なり、唯だ觸のみ獨一未だ寂靜なることを得ず。若し勝妙なる境現在前する時は諸の染汙の觸便ち復た生起す。若し諸欲に於いて已に貪を離れたる者は當に知るべし一切皆な寂靜なることを得と、是れを一種の義門の差別と名づく。復た一類あり、諸欲の中に於いて未だ貪を離れざる者は諸欲の所有の貪欲に於いて未だ永へに斷せざるに由るが故に、諸の尋、染〔汙〕の觸未だ永へに斷せざるが故に、是に由りて一切皆な未だ寂靜ならず。若し諸欲の貪欲に於いて已に斷じて初靜慮を證すれば欲已に寂靜にして尋未だ寂靜ならず。初靜慮に於いて已に貪を離れたる者乃至非想非非想處に〔於いて〕未だ貪を離れざる者は（二九）二已に寂靜にして觸未だ寂靜ならず。有頂〔天〕を超過すれば一切寂靜なり、是れを第二の義門の差別と名づく。若し諸の外道にして能く世間の定に入り、邪見乃至邪解脫の智を具足せる者は彼れを緣と爲るに由りて諸受を生起し、彼に於いて染著し、又彼の品の煩惱

【二九】二とは欲と尋との二なり。

隨縛に由り、卽ち是の如き寂靜ならざる緣に由りて諸受生起す。若し內法に住し能く世間の定に入り、正見乃至正解脫の智を具足せる者は彼を緣と爲るに由りて諸受を生起し、彼に於いて染著し、又彼の品の煩惱隨縛に由り、卽ち是の如き寂靜ならざる緣に由りて諸受生起す。又內法に住し、能く出世の定に入る者若し〔三〇〕向道に依りて轉じ、自事未だ究竟せざるに、所有の諸欲「に由りて」未だ得ざるを得たりと爲し、未だ證せざるを證せりと爲し、未だ觸せざるを觸せりと爲し、是の希望を作す、我れ是の處に於いて何れの時か當に得べしと、廣く說くこと前の如し。彼れ未だ寂靜ならず、是れを緣と爲るに由りて彼れ爾の時に於いて諸受生起す。若し自事に於いて已に究竟することを得れば彼の欲寂靜なり、寂靜の緣に由りて便ち第一の寂靜無上の諸受生起することあり、彼れ一切の所有諸受の出離の方便に於いて如實に了知す。是の故に前の如く第一義の諸の沙門の中に於いて許して沙門と爲し、諸の梵志の中に「於いて」許して梵志と爲す。若し了知せざれば彼の一切に於いて皆な忍許せず。當に知るべし此の中一切の諸受差別あること無く皆な觸を緣と爲し、又卽ち此れ欲を緣じ、亦たは尋を緣ずと爲し、亦たは境界を緣ずと爲し、愚癡所攝の無明を亦た其の緣と爲す。是の如き一切の不正なる思惟及び相續に墮する彼の品の煩惱を以て其の集と爲し、〔三一〕此れ滅するに由るが故に、〔三二〕彼れも亦た隨つて滅す、正見等の道を當に知るべし說いて能く〔三三〕

【三〇】向道とは預流向等の四向なり。
【三一】此れとは集因なり。
【三二】彼れとは苦果なり。
【三三】滅に趣く行とは滅諦の涅槃に趣く道諦を云ふ。

滅に趣く行と名づくと。

(二三四)復た次に、(二三五)遠離の喜に於いて身に作證し住する諸の聖弟子は能く(二三六)五法を斷じ、能く(二三七)五法を修して圓滿することを得せしむ、應に知るべし(二三八)前の三摩呬多地に廣く其の相を辯ぜるが如しと。又(二三九)喜樂捨の劣中勝品は、謂く欲界及び四靜慮に在り、其の所應の如く當に其の相を知るべし。又第四靜慮地に在りては一切の過患を捨て皆な遠離するが故に善清淨なりと名づく。若し此の上の捨〔受〕は復た立てて勝れて愛味無しと爲すべし。

(二四〇)復た次に、十種の相に由りて當に諸受の所有差別を知るべし、一には勝義の差別、二には流轉の所依の差別、三には自相の差別、四には盡所有性の差別、五には自相の品類の差別、六には流轉門の差別、七には雜染門の差別、八には所治能治の差別、九には時の差別、十には刹那に展轉して生起する差別なり。此の中或は開覺すること無き者ありて是の如きの言を作さく、受は唯だ二ある

【二三四】劣等を解す。
【二三五】遠離の喜とは離生喜樂なり。
【二三六】五法を斷ずとは倫記に二義あり、一に曰く欲惡不善法等を斷ず、二に曰く欲所引の喜と欲所引の憂と不善所引の喜と不善所引の憂と不善所引の捨とを斷ずるなり。
【二三七】五法を修すとは倫記に二義あり、一に曰く初靜慮の中の五支、(一)尋、(二)伺、(三)喜、(四)樂、(五)心一境性を修す、二に曰く歡喜安樂及び三摩地を修するなり。

【二三八】第十一卷。
【二三九】喜樂捨云云。喜の欲界に在るを劣、初禪に在るを中、第二禪に在るを勝と云ひ、樂の欲界と初禪とに在るを劣、第二禪に在るを中、第三禪に在るを勝と云ひ、捨の第二禪已下に在るを劣、第三禪に在るを中、第四禪に在るを勝と云ふ。
【二四〇】諸受の相の差別を解す。

のみ、一には苦、二には樂なりと。復た不苦不樂ありと說くと雖も然も唯だ苦樂のみなり、(三一)性として顯はす所無し、是の故に世尊卽ち是の如き苦樂寂靜なるに依りて假設して「不苦樂」有りと爲したまへり。世尊彼を開曉せんと欲するが爲めの故に是の如き言を說きたまへり、樂に二種あり、所謂欲樂及び遠離の樂なり。此の遠離の樂に復た三種あり、一には劣樂、二には中樂、三には勝樂なり。劣樂とは、謂く無所有處已下「に在る」なり、中樂とは、謂く(三二)第一有「に在る」なり、勝樂とは、謂く(三三)想受滅に「在る」なり。既に是の理あれば樂受を亦たは說いて寂靜と爲すことを得、謂く初、二、三靜慮の中に在り。非苦樂受を亦たは寂靜と名づく、謂く第四靜慮已上乃至有頂「天」に在り。一切の受無きを亦たは寂靜と名づく、謂く滅「盡」定に在り。然るに佛世尊は第一義に約して三種の最も寂靜なる樂ありと說きたまへり。謂く諸の苾芻の心(一)其の貪に於いて染「著」を離れて解脫し、其の貪に於けるが如く、(二)瞋に於いても(三)癡に於いても當に知るべし亦た爾なりと。是の如き一切を總じて三樂と爲す、一には應に遠離すべき樂、二には應に修習すべき有上住の樂、三には最極究竟解脫無上住の樂なり。應に遠離すべき樂とは、謂く諸の(三四)欲樂なり。應に修習すべき樂とは、謂く初靜慮乃至有頂「天」の諸の所有樂なり。有上住の樂とは、謂く滅盡定なり此れを亦たは名づ

【三一】苦樂無きに據つて不苦樂と名づく、別に不苦樂卽ち捨受の自性として顯はすべきものあることなしとの意。

【三二】第一有とは非想非非想處なり、是れ有頂天にして三界の最頂なるを以て第一有と云ふ。

【三三】想受滅とは滅盡定なり。

【三四】欲樂とは欲界の樂なり。

けて應に修習すべき樂と爲す。最極究竟解脫無上住の樂とは、謂く前に說けるが如き（一三五）三の最勝なる樂なり、樂を受くるに據りに說くに非ず、滅盡定を以て樂ありと爲す、然るに佛は樂を受くるを說いて名づけて樂と爲したまへり。又（一三六）勝住の樂と樂と相似たり。又卽ち（一三七）此れに依りて樂の得可きあるを說いて名づけて樂と爲す、謂く一あるが如き（一三八）此の定より起ちて領受する所ありて是の如きの言を作さく、我れ已に多く是の如き是の如き色類の最勝なる寂靜の樂住に住すと。此れに依るに由るが故に說いて樂ありと名づく。

（一三九）復た次に、若くは苾芻ありて是の如き色類の見、聞及び樂、想、有に依止して無間に諸漏永へに盡くることを隨得す。當に知るべし此の見を最勝なる見と名づけ、乃至此の有を最勝なる有と名づくと。無我の見に從つて更に其の餘の勝れたる見、謂く無常の見を尋求せず、卽ち此の無間に漏盡くることを隨得す、是の故に此の見を最勝なる見と名づく。此の見に依止して復た四門に由りて方に能く諸漏永へに盡くることを隨得す、一には或は他より正法を聽聞す、二には或は（一四〇）四の現法樂住に依る、三には或は三種の想定に依止するなり、謂く空無邊處より乃ち無所有處に至る、四には（一四一）或は天有、或は人有に在り。是の故に此の聞を其の餘の聞に於いて、

【一三五】前の三種の最も寂靜なる樂。
【一三六】勝住とは九次第定滅盡定を云ふ。
【一三七】此れとは勝住なり。
【一三八】此の定とは勝住なり。
【一三九】見等を最勝なりと爲すを解す。
【一四〇】四の現法樂住。現法樂住とは禪定のこと、色界四禪を四の現法樂住と云ふ。
【一四一】天生人生に一往來して而して漏盡くることを得る聖者なり。

此の樂を其の餘の樂に於いて、此の想を其の餘の想に於いて、此の有を其の餘の有に於いて說いて最勝なりと爲す。

(一四二)復た次に、徧く、(一四三)應に徧く知るべき事を了知するに由りて其の苦諦に於いて徧き解脫を得、其の集諦に於いて勝れたる解脫を得、其の滅諦に於いて能く正に作證し、其の道諦に於いて能く正に修習す。正に苦邊に於いて能く隨得すとは、謂く苦諦に於いて徧き解脫を得るなり。諸漏盡くるに於いて能く隨得すとは、謂く集諦に於いて勝れたる解脫を得るなり。應に厭ふべく應に離るべく應に解脫すべしとは、謂く滅諦に於いて能く正に作證するなり。無常等に於いて隨觀して住すとは、謂く道諦に於いて能く正に修習するなり。又十相に由りて應に當に境事の差別を了知すべし、一には已に生ぜる諸行命根に繫屬して住する因の差別、二には(一四四)有色無色の諸行展轉して相依り住立し流轉する差別、三には無色の諸行無常の法性の入門の差別、四には心の諸の雜染の依處の差別、五には一切の諸行一切の品類は總て皆な是れ苦なる差別、六には淨不淨の業果を受用する門の差別、七には(一四五)喜樂ある識の所行の邊際の差別、八には愛恚の依處の差別、九には(一四六)喜樂を執藏する有情の生處に安住する邊際の差別、十には惡趣に墮し往く依處の邊際の差別なり。又清淨品の應に得べき應に修すべき事增上なるが故に當に知るべし

【一四二】差別を知るを解す。
【一四三】應に徧く知るべき事とは四諦の事なり。
【一四四】有色とは色法、無色とは心法なり。
【一四五】是れ七識住なり。
【一四六】是れ九有情居なり。

餘の十種の差別ありと。一には善法を無間に修習し增上無邊なる差別、二には心慧解脫の依止の差別、三には勝れたる三摩地の邊際の差別、四には一切境其の心を繫縛する邊際の差別、五には解脫の方便の差別、六には解脫の差別、七には眞義を等覺する差別、八には現等覺の後三學の中に於いて受學する差別、九には正學已學の現法樂住の差別、十には聖神通を證し廣く行ずる差別なり。

(四七)復た次に、卽ち上に說ける所の如き差別に依りて應に問論を生ずべし。標擧とは、謂く未だ了せざる義理に由り、記別とは、謂く已に了せる義理に由る。當に知るべし此の中四の因緣に由りて能く請問する者に應に與に言ふべからず、四の因緣に由りて能く記別する者に應に與に言ふべからず。前の四種とは、一には現量に於いて、二には理に應ずるに於いて、三には其の因に於いて、四には非因に於いてす。謂く(四八)等しく示現する時而も領解せず、(四九)比度分別し正に施設する時而も領解せず、(五〇)汝自ら修行して自然に當に了ずべしと[言ふも]而も領解せず、(五一)正智の論者親しく自ら演說するに此の至教に由るも亦た領解せず、是の故に此の能く請問する者に於いては應に與に言ふべからず。(五二)後の四種とは、謂く(五三)一切の行は皆な是れ無常なり、一切の諸法は皆な我あると無し、一切の生處は皆な樂ふ可からず、淨不淨

【四七】問を解す。問とは請問なり。
【四八】第一の因緣を出す。
【四九】第二の因緣を出す。
【五〇】第三の因緣を出す。
【五一】第四の因緣を出す。
【五二】後の四種は卽ち四記答なり、四記答とは一向記、分別記、反問記、捨置記なり。
【五三】以下一向記を明す。

の業は終に失壞すること無しと、是れ一向記なり。（一五四）故思して業を造れば當に苦を受くべし、此は（一五五）一向〔記〕に非ず、捨を獲得すれば、現法の中に於いて定んで般涅槃す、亦た（一五六）一向〔記〕に非ず。（一五七）若し問うて業を造作し已つて善趣に往くや不やと言ふことあらば應に反詰して汝何れの業を問ふやと云ふべし。若し問うて道を修習し已つて涅槃を得るや不やと言ふことあらば應に反詰して汝何れの道を問ふや、是れ世間〔道〕と爲んや出世間〔道〕と爲んやと云ふべし。（一五八）置記論とは、謂く一切の所有見趣に依る。是の如き四種にて正しく問者に答ふるを善く能く記すと名づく、應に與に言ふ可し、此れと相違するは應に與に言ふべからず。

（一五九）復た次に、諸佛如來に二の記別あり、一には外道に共じ、二には共せず。外道に共ずとは、諸の弟子の當に生ずべき處等を記するなり。共せすと言ふは、終に記別せざるなり。生ある者には等しく二の識火の熾然なる所依あり、一には微細なる愛、二には麤なる（一六〇）名色なり。欲色二界の愛より生ずる所の識は名色を〔所〕依と爲し、愛若し止息すれば乃ち壽量に至るまで其の識相續し隨轉して住す〔るのみなり〕。若くは無色界の愛より生ずる所の識は但だ其の名を緣として住立することを得、愛若し斷滅すれば乃ち壽量に至るまで其の識相續し隨轉して住す〔るのみなり〕。又色界に於いては此の愛を〔所〕依として中有の識を生ず、即ち愛を〔所〕依と爲して中有に於いて般涅槃する者をして

【一五四】以下分別記を明す。
【一五五】分別記なり。
【一五六】同上。
【一五七】以下反問記を明す。
【一五八】以下捨置記を明す。
【一五九】記を解す。記とは記別なり。
【一六〇】名色とは心身なり。

暫爾安住せしむ、此の愛若し斷ずれば卽ち爾の時に於いて其の識謝滅す。復た二種の意より生ずる所の身あり、一には色界の意より生ずる所の身、二には無色界の意より生ずる所の身なり、謂く定地の意門の方便に由りて能く集成す、二の生身を集成するが故なり。又諸の如來に略して二種の善く他論を避くる論あり、一には〔一六二〕能く、定んで應に記すべからず不定論を作すを避け、二には〔一六三〕能く決定して應に記すべく不定の論を作すを避く。喜樂と色等との義別を說くが如く是の如く喜樂と取等との義別も、應に知るべし亦た爾なりと。

【一六二】神我は身と一なりと爲んや、異なりと爲せんやとの如き不定の問論をなさば、如來は避けて答へたまはず、神我を認めざるが故に一異の論に及ばざればなり。

【一六三】喜樂と色等と一なりや異なりやとの如き問論をなさば如來は避けて答へたまはず、喜樂と色等とは一なり異なること決定せるが故に答ふるに及ばざればなり。

卷の第九十七

攝事分中契經事菩提分法擇攝第四の一

(一)是の如く已に緣起、食、諦、界の擇攝を說けり、菩提分法の擇攝をば我れ今當に說くべし總の嗢柁南に曰く、

(二)『念住と正斷と、神足及び根と力と、覺と道支と息念とにして、學と證淨とを後と爲す。』

(三)別の嗢柁南に曰く、

『沙門と沙門の義と、喜樂と一切の法と梵行と數取趣とにして、超と二染とを後と爲す。』

(四)四念住の修習の增上に依り、四の因緣に由りて應に知るべし(五)內法に沙門の道あり、及び究竟あり、(六)外法には決定して沙門の道無く、亦た究竟も無しと。當に知るべし他論の諸の沙門の道及以

【一】上來契經事に四釋ある中前三釋訖る、以下第四に菩提分法を明す二卷あり。

【二】此の總頌に於て菩提分法を解するにに十門を列す。(一)念住、四念住なり、(二)正斷、四正斷なり、(三)神足、四神足なり、(四)根、五根なり、(五)力、五力なり、(六)覺、七覺支なり、(七)道支、八正道支なり、以上を三十七種の菩提分法と云ふ、(八)息念、(九)學、(十)證淨なり。

【三】總頌の第一門念住を解する別頌四あり、今第一頌なり、此の中更に八門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【四】沙門を解す。文の中四念住とは身、受、心、法の四念住觀なり。第二十八卷に出づ。

【五】內法とは佛法なり。

【六】外法とは外道なり。

び究竟は一切皆な空なりと。云何なるを名づけて四種の因縁と爲すや。一には（七）四處に依止して（八）四證智を得るが故に、二には（九）四種の外の隨煩惱を解脫するが故に、三には內法の弟子と外道の弟子と品類を同じうせざるが故に、四には內法の大師と外道の師と品類を同じうせざるが故なり。云何なるを名づけて內法の沙門と爲すや。謂く諸の沙門に略して四種あり、一には勝道の沙門、二には論道の沙門、三には命道の沙門、四には汙道の沙門なり。是の四沙門の若くは略〔義〕若くは廣〔義〕は（一〇）聲聞地に已に其の相を辯ぜるが如し。內法の道とは云何なるを道と爲すや。謂く八支聖道なり、若の處には八支聖道を施設し、是の處には汙道を施設し、後の四種の沙門と爲す、若し其の道ありて自ら邪行を行ずるは道を生ずる器に非ず、是の因緣に由りて汙道あるべし、是の故に外法には尙ほ汙道すら無し、況んや餘あることを得んや。內法の究竟とは云何んが究竟なりや。謂く（一一）諸取を斷じ、諸取斷じ已つて當來畢竟して復た相續すること無きなり。云何なるを名て四處に依止すと爲し、云何なるを復た四證智を得と名くるや。謂く四處とは、一には（一二）三結永へに斷ぜる蘇息の處、二には（一三）退墮する無き法の勢力の處、三には（一四）定んで菩提に趣く種類の處、四には（一五）極七反

【七】四處。下出。
【八】四證智。下出。
【九】四種の外の隨煩惱。下出。
【一〇】第二十九卷。
【一一】諸取。取とは煩惱の異名也。取に執取、執持の二義あり、三世の苦果を執取し、後世の果を引く業を執持すればなり。
【一二】三結とは貪瞋癡の三毒なり、三結永へに斷ぜる蘇息の處とは阿羅漢果なり。
【一三】是れ不還果なり。
【一四】是れ一來果なり。
【一五】是れ預流果なり。極七反

有の隨行する處なり。此の四處に依り佛法僧に於いて及び淨戒に於いて　(一六)證淨智を得。云何なるを名けて四種の外の隨煩惱を解脱すと爲すや。一には現法の外の隨煩惱を解脱し、二には後法の外の隨煩惱を解脱し、三には展轉して互に相違戾して作す所の外の隨煩惱を解脱し、四には諸の聖諦に於て宣說すること能はず覺悟すること能はずして作す所の外の隨煩惱を解脱す。當に知るべし此の中諸の外道類は〔四〕念住を闕くが故に其の念忘失して正知にして住せずと。諸受の或は樂、或は苦、或は非苦樂を領納して樂に於いては　(一七)染〔著〕を起し、苦に於いては〔瞋〕恚を起し、非苦樂に於いては愚癡を發起す、是の如きを名づけて第一の現法の外の隨煩惱と爲す。彼れ是の如き染〔著、瞋〕恚〔愚〕癡に由るが故に　(一八)受を以て緣と爲して後有の　(一九)愛を生じ、愛を以て緣と爲して　(二〇)諸取を發生し、愛取あるが故に取を以て緣と爲して　(二一)有を成辦し、廣く說かば乃至純大なる苦聚積集し增長す、是の如きを名づけて第二の後法の外の隨煩惱と爲す。又諸の外道の薩迦耶見を以て根本と爲る種種なる見趣の意各別なるが故に彼此展轉して互に相ひ違戾す、是れを第三の外の

有とは七生の人なり。卽ち小乘預流果の聖者見惑を斷じたるも未だ一品の修惑をも斷ぜざる時は極多の者にして欲界人天の間に七往返の生有を受くるが故に云ふ。但し已に無漏道を成じたる人なるが故に七往返の間には自ら修惑を滅して入涅槃し必ず第八返に及ばざるものなり。

【一六】證淨智。見れ四證淨なり、(一)佛、(二)法、(三)僧、(四)淨戒を信ずるを證淨と云ふ。

【一七】染著とは三毒の一なる貪欲なり。

【一八】受とは十二因緣の受支なり。

【一九】愛とは同じく愛支なり。

【二〇】諸取。取とは同じく取支なり。

【二一】有とは同じく有支なり。

隨煩惱と名づく。又諸の外道徧く一切の四聖諦の中に於いてすら尙ほ能く其の敎を施設することあること無し、況んや當に覺悟すべきをや。是の故に彼れ自師の宗に於いて智增上なることを得と雖も而も實には知ること無く無明趣に墮す、是れを第四の外の隨煩惱と名く。

內法に住する者は是の一切に於いて皆な能く解脫す。云何んが內法の弟子と外道の弟子と品類を同うせざるや。謂く外道の弟子は或は（三二）有見常邊に墮し、或は（三三）無見斷邊に墮し、長夜に積集し、深く藏護を起し、聞に由りて親近し、思に由りて染著し、修に由りて染著す。內法の弟子は（三四）處中の行を行じて（三五）二邊を遠離す。云何んが內法の大師と外道の師と品類を同じうせざるや。謂く外道の師は一切の取に於いて同じく（三六）斷徧知論を宣說すと雖も而も諸取に於いて正しき斷徧知を施設すること能はず、彼れ本出家し欲を捨つるを契ふに由るが故に（三七）欲取に於いて斷徧知を立つるも、（三八）自見と（三九）自戒と（三〇）我語とには非ず。若くは他の諸餘の沙門婆羅門と等しきことあるも見「取見」は同分にあらず、戒禁「取見」は同分なり。彼れ見取「見」に於いて亦た能く分に隨つて斷徧知を立つるも、戒禁「取見」と我語「取見」との二取「見」には非ず。若くは戒禁「取見」ありて亦た同分にあらず、禁戒取「見」に於いては亦た能く分に隨つて斷

【三二】有見常邊とは有見常見なり、邊とは偏見なり。
【三三】無見斷邊とは無見斷見なり。
【三四】處中の行とは中道行なり。
【三五】二邊とは斷常の二の偏見なり。
【三六】斷徧知論とは煩惱を徧く知り斷ずべき論なり。
【三七】欲取とは貪欲の煩惱なり。
【三八】自見とは見取見なり。
【三九】自戒とは戒禁取見なり。
【三〇】我語とは我語取見なり。

徧知を立つるも、其の我語取〔見〕は一切時に於いて一切の外道に悉く皆な共にあり、是の故に外道は自に於いても他に於いても我語取〔見〕の中に皆な斷徧知論を施設せず。又彼れ能く分に諸取を捨つと雖も而も當來に於いて還つて復た能く〔諸取〕を取る、未だ永へに斷ぜざるが故なり。是の如き外道は諸取の中に於いて未だ全く斷ぜざるが故に、未だ永へに斷ぜざるが故に究竟することを得ず。內法の大師は當に知るべし一切上と相違すと。是の如く應に知るべし內法の大師と外道師と品類を同じうせざることを。

〔三一〕復た次に、四念住の修習の增上に依り略して三處、三地、三種の補特伽羅に由り當に知るべし、普く諸の沙門の義を攝すと。云何んが三處なりや、一には境、二には智、三には證なり。云何んが三地なりや、一には正しき加行に攝する異生地、二には有學地、三には無學地なり。云何んが三種の補特伽羅なりや、一には正しく加行する異生の補特伽羅、二には有學の補特伽羅、三には無學の補特伽羅なり。云何なるを境と名くるや。謂く〔三二〕地等の六界は〔三三〕六觸處の與に所依の體と爲り、此の六觸處は〔三四〕十八の意行の與に所依の體と爲り、十八の意行は能く心を雜染す。云何なるを智と名くるや。謂く心清淨は增上の慧の依處なり。云何なるを證と名くるや。謂く卽ち慧の依處の增上若くは諦の依處、若くは捨の依處、若くは寂〔靜〕の

〔三一〕沙門の義を解す。
〔三二〕地等の六界とは地、水、火、風、空、識の六大なり。此の中前五大は眼等の五觸處の與めに所依となり、識大は意觸處の與めに所依となる。
〔三三〕六觸處とは眼耳鼻舌身意の六根處なり。
〔三四〕十八の意行。六憂、六喜、六捨なり、六觸處に各各憂喜捨の三受あるが故に十八意行となる。

依處なりや。謂く慧を依處と爲して正しく加行する異生地の中に於て正に善法を修するを因緣と爲るが故に能く放逸なると無く有學地に入る、若くは慧を依處と爲して阿羅漢を證し、無學地の中に盡智を得るが故に如實に我が生盡くる等を了知し、若くは學無學の〔三五〕出世智の〔三六〕後の諸の世間慧〔を成ずる〕なり。云何んが諦の依處なりや。謂く已に八支聖道を獲得し、諸の煩惱を斷じ、此の依處に由りて當來の衆苦畢竟して生ぜず、此に由りて畢竟して忘失すると無きが故に諦の依處と名く。云何んが捨の依處なりや。謂く〔三七〕彼の事を斷じ、此の依處に由りて已に斷ぜる事に於て雜染の行無く現法樂住するなり。云何んが寂〔靜〕の依處なりや。謂く所餘の結事を斷滅せんが爲に方便勤修し、已に得たる如き道を此を依處と爲して所餘の結及び所餘の事に於いて能く捨てて餘す無し。是の如き一切は要を以て言はば證を得んと欲するが爲の故に其の智を修し、既に證を得已つて便ち聖道及び聖道の果を獲るなり。果に二種あり謂く煩惱斷及び事斷なり。此の中〔第〕一種〔の依處〕は未だ證せざる所を證し、第二の依處は未來の苦を捨て、第三の依處は能く隨つて習近し現法樂住し、第四の依處は斷の未だ圓滿せざるを能く圓滿せしむ。爾所の處に齊つて諸の瑜伽師は應に作すべき所に於いて皆な究竟するとを得、謂く未だ證せざるに於ては初め〔の依處〕に由て能く證し、未來の苦に於ては第二〔の依處〕にて能く捨て、

〔三五〕出世智とは根本智正體無分別智なり。

〔三六〕後の諸の世間慧とは根本智の後に生ずる後得智有分別智なり。

〔三七〕彼の事とは煩惱の體事即ち業果なり。

現法樂に於いては第三「の依處」にて能く住し、上の斷滅の未だ圓滿せざる所に於いては第四「の依處」にて能く滿ず、是の如く一切四の依處に由りて應に當に了知すべし。此の中先に獲得せる所の聖道を寂靜道と名づく、上位の煩惱の事を斷ぜんが爲めの故なり。正に修習する時其の事斷に於いて倍倍趣かに增益し、煩惱斷に於いて防ぎて未だ退くことを得ず。此の中云何んが智に由りて所知の境界を觀察し、應に證すべき所を證するや。謂く正しく加行する異生地の中にて正行する異生の補特伽羅は內外の別に由りて〔三八〕五界を觀察し、所有の身に於いて〔三九〕循身觀に住す、謂く心解脫及び慧解脫を增上せんが爲めの故に、彼れ是の如き如理なる加行を起し、諸界の中に於いて唯界想觀に住し唯だ界のみありて都べて我あること無し「とし」、思擇力に依りて諸の色界に於いて已に貪を遠離したるも、而も所緣に於いては猶ほ未だ斷ずること能はず。未來世に於いて希望せざるが故に、現在世に於いて耽著せざるが故に已に貪を離れたりと名づけ、未だ彼の隨眠を永へに害すること能はざるが故に所緣に於いては猶ほ未だ斷ずること能はずと名づく。彼れ其の貪に於て已に遠離せるが故に由つて心解脫し、增上力の爲めに貪を遠離するが故に心淸淨なることを得るも、而も所緣に於ては未だ斷ずること能はざるが故に餘の上位の應に更に修治すべきあり。此より已後〔四〇〕六觸處の所攝の境界に於て無倒に觀察し、諸受の中に於て〔四一〕循受

【三八】五界とは地水火風空の五大なり。

【三九】循身觀とは四念住觀の第一身念住觀なり。

【四〇】六觸處の所攝の境界とは身なり。

【四一】循受觀とは四念住觀の第二受念住觀なり。

觀に住す。彼れ前に說けるが如く思擇力に依りて（四二）諸受界に於いて亦た貪を遠離し、緣生は無常の性なるが故なりと歷觀す。卽ち前に說けるが如く所緣に於いては猶ほ未だ斷ずること能はず。彼れ無明に於いて已に遠離するが故に、由つて慧解脫し、增上力の爲めに諸の明觸より生ずる所の如理なる作意と相應する所有の善受に依りて一切の受より生ずる所の雜染に於いて厭捨して住し、無明觸より生ずる所の受を緣と爲して起る貪に於いて已に遠離せるに由るが故に清淨なることを得と名づくるも、而も隨眠に於いて未だ永へに斷ぜざるが故に餘の上位の應に更に修治すべきあり。此れより已後十八意行に於いて無倒に觀察し、倶に心所に於いて同時に（四三）循心所觀に安住し、彼れ是の思を作さく、此の十八意行の最も第一なる者は、謂く諸の所有寂靜解脫なり、諸色を超過して（四四）無色「の捨受」に在りと。能く捨に順じて起る諸の意行に於いて、復た是の思を作さく、若し我れ此の勝妙なる意行に依りて清淨なる捨若くは定に於いて若し耽著を生じ係憶せば此に因りて我が心便ち雜染を成せんと。是の如く知り已つて捨てて憶せず、是れを心に於いて循心觀に住すと名く。復た諸處に於て無常の性なりと觀ず、是を法に於て（四五）循法觀に住すと名く。彼れ爾の時に於て（四六）三想定及び非想非非想處所有の諸行餘の第一有に於て已に貪を離るるが故に（四七）想界及び（四八）行

【四二】諸受とは染汙の受なり。
【四三】循心所觀とは四念住觀の第三心念住觀なり。
【四四】無色界は唯捨受のみ相應す。
【四五】循法觀とは四念住觀の第四法念住觀なり。
【四六】三想定とは無色界の下三定なり。
【四七】想界とは五蘊の中の想蘊なり。
【四八】行界とは五蘊の中の行蘊

界の貪に於いて亦た遠離することを得と名づく、餘は前に說けるが如し。

是の如く彼れ正しき加行に攝する異生地の中に於いて淨く心を修し已つて證會せんと欲するが爲めに心解脫を學し、復た一切の身受心法に於いて唯だ法のみありて都べて我あること無しと觀じ、深心に厭捨して加行を起さず、謂く我當に有るべし、或は我當に無かるべしと、如實に此の中に有者無者あること無しと了知す。彼れ是の如く如實に知るに由るが故に漸く見修所斷の〔四九〕三漏に於いて心に解脫を得、盡智を得るが故に一切の當來の諸受復た流轉せず、此れ流轉せざるは身の滅するに由るが故なりと觀察す。彼れ爾の時に於いて諸漏盡くるに依りて獲る所の盡智を最も第一と爲す、有學異生の諸の慧の依處は猶は垢あるが故に、今此の得る所の定は垢無きが故なり。又即ち此の慧にして諸の煩惱斷せる滅諦の中に於いて寂靜の行を以て攀緣して住すれば暫時失念するも亦た動ずると能はず。是の如き所有の心慧の解脫は忘念の爲めに陵雜せられず、前の異生及び有學の位の如きは彼れ尙ほ忘失の法あるを以ての故に諦圓滿せず、無學の位に在りては一切時に於いて如實の性なるが故に其の諦圓滿す、故に諦の依處成就して第一なり、能く一切の依事を棄捨するに由るが故に捨の依處成就して第一なり、一切の道果集成する所なるが故に善き修道と名づく。異生及び諸の有學の如きに非ざるが故に寂「靜」の依處成就して第一なり。問ふ、何の因緣の故に唯無學に在りて四種の依處

【四九】三漏とは㈠欲漏、欲界の煩惱中無明を除けるもの、㈡有漏、色無色界の煩惱中無明を除けるもの、㈢無明漏、三界の無明なり。

を說いて第一と爲し、異生及び有學の位に在るには非ずや。答ふ、此の位の中に在りては微細なる淋漏をも亦知る可からず、況んや中上なるあるをや。異生地に在りては淋漏彌多く、有學の位の中には少しくありと知るべし。此の中何等をか名づけて淋漏と爲すや。應に知るべし前の如き諸の（五〇）動擧等を說いて淋漏と名づくと。彼の一切に於いて皆な永へに斷ぜるが故に、（五一）圓滿なる牟尼の性に趣向するが故に、牟尼なり最も極めて寂靜なりと名づく。又已に當來の因を永へに害せるが故に、初中後の生老死苦に於いて永へに止息せるが故に、現法の（五二）行ずる時は諸の世法に於て（五三）四種の貪愛永へに寂靜なるが故に（五四）四種の瞋恚永へに寂靜なるが故に、（五五）又住する時に於ては不悅喧雜永へに寂止するが故なり。

（五六）復た次に、所有菩提分法を修し圓滿增上するに依り七の因緣に由りて當に知るべし（五七）七種の正法を建立すと。何等をか七と爲す。（五八）一には聞より成ずる所の作意の所緣なるが故に、（五九）二には思より成ずる所及び修より成ずる所の作意の所緣なるが故に、（六〇）三には卽ち此の三種の作意の加行の時差

【五〇】動擧等とは不寂靜性の煩惱なり。

【五一】圓滿なる牟尼の性。牟尼(muni)は寂默・寂靜と譯す。

【五二】行ずるとは四威儀の中の行なり。

【五三】四種の貪愛とは利、養、稱、樂の貪なり。

【五四】四種の瞋恚とは衰、毀、譏、苦の瞋なり。

【五五】住するとは四威儀中の住なり。

【五六】喜樂を解す。

【五七】七種の正法を建立することは本文及び脚註を照合して知るべし。

【五八】是れに由りて法を知ることを立つ。

【五九】是れに由りて義を知ることを立つ。

【六〇】是れに由りて時を知ることを立つ。若し掉擧を起す時は卽ち止定を以て能く調伏し、若し惛沈を起す時は卽ち慧擧を以て能く之を調伏し、若し無明を起す時は捨を以て能く之れを伏すが故に。

別するが故に、(六一)四には財を受用し徧く財を受用するに於いて善く通達するが故に、(六二)五には受用する財法をば時時の間に於いて他より得るが故に、(六三)六には究竟する時に於いて内に上慢を離れて失壊すること無きが故に、(六四)七には亦た他所に於いて増上慢を離れて失壊すること無きが故なり。(六五)此の中(六六)諸の止と擧と捨との相に依りて修習し時を知ることは聲聞地及び三摩呬多地に已に其の相を辯ぜるが如し、(六七)食飲等の義は聲聞地の如く應に差別を知るべし。(六八)又此の中に於いて受用する財とは、謂く刹帝利婆羅門長者等の衆に於て「得る」なり。受用する法とは、謂く沙門衆に於て「得る」なり。(六九)我れ應に是の如く行ずべしとは、謂く善く身を護り、善く諸根を守り、善く正念に住するなり。應に是の如く住すべしとは、謂く門首に至らんに若し聽許せざれば則ち應に入るべからず、或は入ることを得已つて若し聽許せざれば應に自ら專ら座に就きて坐すべからず。應に是の如く坐すべしとは、謂く應に一切の身分を寬縱にすべからず、乃至廣く説けり。應に是の如く語るべしとは、謂く五種の語なり。一には時に應ずる語、二には理に應ずる語、三には量に應ずる語、四には寂靜なる語、五には正直なる語なり。應に是の如く默すべしとは、謂く五時に於いて應に當に宴默すべし、謂く(一)或は紛擾するが故に、(二)或は相誹

【六一】是れに由りて量を知ることを立つ。
【六二】是れに由りて衆を知ることを立つ。
【六三】是れに由りて自らを知ることを立つ。
【六四】是れに由りて尊卑を知ることを立つ。
【六五】以下七因緣の中初二を除ける其餘を釋す。
【六六】是れ第三の因緣なり。
【六七】是れ第四の因緣なり。
【六八】以下第五の因緣を釋す。
【六九】以下第六の因緣を釋す。

撥するが故に、(三)或は違諍して住するが故に、(四)或は延請するが故に、(五)或は談論するが故に、言所有を終るを待つが爲めに宴默す。云何んが時に應ずる語なる。謂く紛擾し或は遽に尋思し或は聞くことを樂はず或は正しき威儀に安住せざるに非ざる時而も所說あるなり。又應に先づ初時に作す所を序し、然して後に讃勵して正しく言說を起すべし、又應に他の語論の終に已るを待ちて方に言說を起すべし、是の如き等の類の一切を當に知るべし時に應ずる語と名づくと。云何んが理に應ずる語なる。謂く(七〇)四の道理に依りて能く義利を引き、實に稱つて語るを理に應ずる語と名づく。云何んが量に應ずる語なる。謂く文句周圓し、爾所の語に齊りて決〔定〕して所須あらんに但だ爾所のみを說いて增さず減らず、雜亂し無義なる文辭を說くに非ず、是の如き等の類を量に應ずる語と名づく。云何んが寂靜なる語なる。謂く言高疎ならず、亦た諠動ならず、身奮發すること無く、口に咆勃せずして而も所說あるを寂靜なる語と名づく。云何んが正直なる語なる。謂く言に詭詐無く、虛構に因らずして而も所說あり、諂曲を離るるが故に言を發すること純質なり、是の如きを當に知るべし正直なる語と名づくと。己が信等の善法無き所に於いて上慢を起さず、謂く自らの有の爲めに其の狹小なるに於いて亦た增益して以て廣大と爲さず、唯だ實に有り乃至所有に於いて如實に了知して自ら稱して有りと言ふが故に自らを知ると名づく。(七一)又

【七〇】四の道理とは(一)觀待道理、相待の理なり、(二)作用道理、因果の作用なり、(三)證成道理、現量比量聖教量にて證成せられたる道理なり、(四)法爾道理法爾自然の理なり。

【七一】以下第七の因緣を釋す。

(一)信を先と爲して淨戒を受持し、(二)持戒を先と爲して多く法を聞くことを求め、(三)此を先と爲るに由りて諸の過失を捨て、普く一切の資財身命に於いて顧戀する所無く、(四)此を先と爲るに由りて心に靜定を得、(五)如實智を證す。(七二)是の如き五法は四の因緣の顯發する所に由る、一には他敎に由るが故に、二には敎の增上力「に由りて」自ら內に證するが故に、三には俱生する尋思勝れたる辯才の故に、四には先に串習せるに由り俱生の功德と相應することを獲得する善男子なるが故なり。略して二種の補特伽羅ありとは、雙べて(七三)二種を標し、是の如き二種の者に「更に尊卑の」二種を分別して(七四)此の二を勝者と爲す、當に知るべし「前の」二種の差別を簡擇すと。(七五)七の善法を修して二の勝利を得。謂く(一)現法の中にて輕安の樂を得、境の實性を覺り、勝れたる喜を發生し、(二)是の因緣に由りて多く喜樂に住し、是に安住し已つて能く如理に思ひ、速疾に諸漏永へに盡くることを證得す。

(七六)復た次に、菩提分法を修する增上に依りて善說の法毗柰耶の中に於いて略して諸學及び諸學の果に由りて一切の法を攝す。云何んが諸學なる。謂く三種の學なり、一には增上戒、二には增上心、三には增上慧なり。云何んが學の果なる。謂く有餘依及び無餘依の二涅槃界なり。當に知るべし此の中一切の法とは、謂く善法欲「ある」淸淨なる出家「者」涅槃を證せんが爲めに先に戒を受持し、是に

【七二】是の如き五法とは信を先きと爲して淨戒を受持し等の五法なり。
【七三】二種とは尊卑なり。
【七四】此の二とは前の尊卑の二種を云ふ。
【七五】七の善法とは前の七の正法を指す。
【七六】一切の法を解す。

由りて漸次に乃至究竟の涅槃を獲得す、是の故に一切の諸法は欲を根本と爲すと宣說す。又淨戒に依りて正法を引求し、多聞を攝受し、正法を聞く增上力に由るが故に能く速に增語を證する（七七）明觸を集む、是の故に彼を說いて以て觸集と爲す。又彼れ皆な明觸より生ずる所の諸受に流趣し、乃至有餘般涅槃界を其の後際と爲るが爲め、安樂を求めて發起するが爲めの故に、此の樂は一向無罪の性なるが故に、是の故に彼の學の所攝の法を說いて受流趣と爲す。又彼れ所有明觸及び明觸に依りて生ずる所の諸受を求むるが爲めに聞思修所成の作意を起す、是の故に彼を說いて作意生と爲す。又爾の時に於いて（七八）四念住に於いて觀品の念に由りて觀を以て依と爲し、內心の（七九）止の與に其の增上［緣］と爲る、是の故に彼の念を說いて增上と爲す。又念增上して奢摩他を起し、後の（八〇）聖諦現觀の妙智の與に上首と爲りて轉ず、是の故に彼の定を說いて上首と爲す。又聖諦の諸の現觀の中に於いて慧を最勝と爲す、謂く能く餘す無く永へに諸漏を盡す、是の故に彼の慧を說いて最勝と爲す。又一切の漏永へに盡くるに由るが故に究竟の明觸より生ずる受と俱行する解脫を獲得す。卽ち此の解脫は一切の學に攝する所の法に由りて數數隨得するに非ず、唯だ頓に得るに由る。此の解脫を一切の樂の中にて最も第一なりと爲るに由り、無罪の性なるが故に、是の故に彼を說いて卽ち解脫を用て以て堅固と爲す。又彼の是の如き（八一）善解脫の心、

【七七】明觸とは無漏の觸なり、又曰く明觸は有漏無漏に通ずと。
【七八】身受心法の四念住觀。
【七九】止とは奢摩他なり。
【八〇】聖諦とは四聖諦なり。
【八一】善解脫。是れ有餘依涅槃なり。

若くは諸の明觸より生ずる所の受等、若しは學に攝むる所の所有諸法幷に所依の身は無餘依般涅槃界に於いて任運自然に究竟寂滅す、是の故に彼を說いて皆な涅槃を以て其の後際と爲す。應に知るべし此の中增上を爲さんと欲して淨戒を受持するを增上戒學と名づけ、觸受の增上なる心慧に依止して方便の所有作意若くは念若くは定幷に其の加行を任持するを增上心學と名づけ、慧を最勝と爲るを增上慧學と名づくと。是の如きを應に知るべし名づけて三學と爲し、及び彼の依持する解脫堅固是れ有餘依般涅槃界第一の學果なり、涅槃の後際は是れ無餘依般涅槃界第二の學果なりと。是の如く略して學及び學の果に一切の法を攝することを說けり。又此の諸の學及び諸の學の果の能證の資糧は、當に知るべし(八二)八種の過患を對治し九想を修習するなりと。云何なるを名づけて八種の過患と爲すや。所謂(一)利養恭敬に耽著すると、(二)一切の後有の諸行を愛藏すると、(三)懈怠懶惰と、(四)薩迦耶見と、(五)美味に貪著すると、(六)諸の世間の種種なる妙事に於いて欣欲する貪愛と、(七)放逸に依止する惡行の方便と、(八)邪願に依止して梵行を修習するなり。云何んが名づけて九想を修習すと爲すや。一には出家の想を修習し、二には無常を修習し、三には無常苦の想を修習し、四には苦無我の想を修習し、五には食を厭逆する想を修習し、六には一切の世間は樂しむべからざる想を修習し、七には死想を修習し、八には世間の平等不平等の想を修習し、九には有無出沒過患出離の想を修習す。(八三)應に

【八二】八種の過患は所治、九想は能治なり。

【八三】此れは特に第八想を釋す。

知るべし此の中所有如法平等なる行に、能く善趣に往く善の身語意業を攝するを說いて平等と名づけ、所有非法不平等なる行に、能く惡趣に往く不善の身語意業を攝するを不平等と名づくと。(八四)又此に住して若くは生じ、若くは長じ能く後際の所有衆苦を生ずるを說いて名づけて有と爲し、其の前際より現法の中に於いて死滅の苦あるを說いて名づけて無と爲す。餘の出沒等は應に知るべし前に已に廣く分別せるが如しと。

(八五)復た次に、諸の外道の輩は不正法を聞きて增上して生ずる所の不如理なる想を依止と爲るが故に無明より生ずる所の諸受を發起し、此れを依「止」と爲るに由りて諸漏を發生し、而も諸の外道は是の諸漏に於いて如實に知らず、亦た無明觸より生ずる所の受に於いて如實に知らず、亦た諸の不正法を聽聞し、增上して生ずる所の所有邪想に於いて如實に知らず。是の(八六)三處に於いて實に知らざるが故に欲求を發起し、有求を發起し、亦た復た邪なる梵行求及び無有求を發起し、彼れ諸欲に於いて如實に知らず、後有の業に於いて如實に知らず、其の衆苦に於いて如實に知らず。此の中(八七)前の五は是れ集諦處なり、(八八)最後の一種は是れ苦諦處なり。是の如き外道は此の集諦及以び苦諦に於いて如實に知らず。又即ち此の集諦苦諦に於いて略して二相に由りて如實に知らず、一には雜染の故に、二には清淨

【八四】此れは特に第九想を釋す。

【八五】梵行を解す。

【八六】三處とは、(一)諸漏・(二)無明受邪想なり。

【八七】前の五とは(一)諸漏、(二)無明受・(三)邪想、(四)諸欲、(五)後有の業なり。

【八八】最後の一種とは衆苦なり。

の故なり。此の中雜染に復た四相あり、一には自性の故に、二には因の故に、三には果の故に、四には因果の差別の故なり。此の中淸淨に復た二種あり、一には〔八九〕集苦滅す、二には〔九〇〕滅に趣く行なり。〔九一〕彼れ是の如き四聖諦の中に於いて正智を闕乏して菩提分法を修習すること能はず。是の因緣に由りて彼れの修行する所の所有梵行を名づけて最も極て究竟すと爲すことを得ず、卽ち此の「因」緣に由りて究達と名づけず、漏を盡さざるが故なり。〔九二〕内法に住する者は彼れと相違し、修する所の梵行最も極て究竟すれば名づけて究達と爲す、諸漏を盡すが故なり。

〔九三〕復た次に、其の六種の補特伽羅に於いて染淨の法に依り如來所有の大士の根智と及び當來法の生起する智轉ず。云何なるを六の補特伽羅と名づくるや。謂く一類の補特伽羅あり、先に餘生の中にて佛の善說の法毘柰耶に於いて淨信を獲得し、廣く說かば乃至正直の見を得たるも、彼れ今生に於いて惡說の法毘柰耶の中に於いて不善士に近づき不正法を聞き非理に作意し、現法の中に於いて最初に諸の邪見を生起し、諸の業雜染を受く。彼れ爾の時に於いて前生の所有善法及び現法の中の諸の不善法を成就す。復た後時に於いて善說の法毘柰耶の中に於いて善士に親近し、正法を聽聞し如理に作意し、卽ち先の因に由りて惡說の法毘柰耶を棄捨し、惡說の想諸の不善法に於いて染著を

【八九】集苦滅す。是れ滅諦なり。
【九〇】滅に趣く行。是れ道諦なり。
【九一】彼れとは外道を指す。
【九二】内法に住する者とは内道者卽ち佛教者なり。
【九三】數取趣を解す。數取趣は補特伽羅の譯名なり。

生せず、速に能く遣滅し、此れ當來に於いて清淨の法を成ず、是れを第一の補特伽羅と爲す。復た一類の補特伽羅あり、先に餘生の中にて倶に〔九四〕二の法毗奈耶の行を行じ、彼れを因と爲るに由りて現法の中に於いて善法及び不善法を成就し、彼れ今生に於いて最初に前の如く善説の法に於いて乃至如理なる作意を獲得し、現法の中の諸の不善法に於いて舊をして滅沒し新を復た生ぜざらしめ、諸有る善法に「於て」舊をして增長し、新を復た更に生ぜしむ。諸の先の所有不善未だ斷ぜず、隨眠隨逐するも、今一切に於いて皆な能く斷除し、無放逸にして住し、此れ當來に於いて清淨法を成ず「是れを第二の補特伽羅と爲す」。復た一類の補特伽羅あり、先に餘生の中にて唯だ外の行を行じ、彼れ今生に於いて是れを因と爲るに由り出家を串習するが故に、邪見を串習するが故に善説の法毗奈耶の中に於いて緣の和合するに遇うて出家を得。既に出家し已つて復た邪見を生じ、自らの見取に住し無間の業を造り、亦た善根を斷じ、一向に諸の不善法を成就し惡趣決定す、是れを第三の補特伽羅と名づく。是の如き三種の補特伽羅は當に知るべし第一は先に內法に於いて純ら因行を習ひ、現法の中に於いて先づ放逸を行じ、後に放逸ならずと。第二の補特伽羅は先に內外に於いて倶に因行を習ひ、現法の中に於いて當に知るべし一向に不放逸を行ずと。第三の補特伽羅は先に外法に於いて純ら因行を習行し、現法の中に於いて當に知るべし一向に多く放逸を行ずと。是の如き三種の補特伽羅「の外」復た餘の三つ補特伽羅あり、上と相違して應に

〔九四〕二とは善説と惡説との二なり。

其の相を知るべし。此の中第一の補特伽羅は先に外法に於いて純ら因行を習ひ、現法の中に於いて先づ放逸ならず、後放逸を行ず。第二の補特伽羅は先に內外に於いて俱に因行を習ひ、現法の中に於いて專ら放逸を行ず。第三の補特伽羅は先に內法に於いて純ら因行を習ひ、現法の中に於いて當に知るべし一向に不放逸を修すと。又此の中に於いて先世に習ひし所の善不善の因は猶ほし種子の如し、今世の善說の法毗柰耶は其の先世の諸善の種子に於いて猶ほし良田の如く、彼の先世の不善の種子に於いては猶ほし瘠田の如し。是れと相違して今世の惡說の法毗柰耶は其の先世の不善の種子に於いては猶ほし良田の如く、彼の先世の諸善の種子に於いては猶ほし瘠田の如し。

又彼の先世の因の增上力にて今の善法の起ること猶ほし光明の如し、彼の一切の無明の闇の如き諸の不善法の與に能對治と爲り、彼の不善法は彼の一切の猶ほし光明の如き所有の善法の與に所對治と爲る。是の如く先世の諸の不善法は熱ある炭の如し、能く身心を燒く義あるに由るが故なり、今世の惡說の法毗柰耶は乾ける葦舍の如し。又彼の先世の所有善法は熱ある炭の如し、能く燒く義あるが故なり。今世の善說の法毗柰耶は乾ける葦舍の如し。又彼の先世の所有善法を今の惡說の法毗柰耶に處すれば損減するに由るが故に(九五)猶ほし冷地「或は」石器に置在して熱無き炭の如くなるが如し。又彼の先世の諸の不善法を今の善說の法毗柰耶に處すれば斷滅するに由るが故に猶ほし冷地「或は」石器に置在して熱無き炭の如くなるが如し。

【九五】熱炭を以て冷地或は石器の中に置けば其炭をして熱無からしむるが如しとの意。

此の中諸の如來は大士の無上なる根勝劣智力に由り其の先世の善不善の因より習成する所の根に於いて其の所應に隨つて如實に了知し、又現法の染淨門に於いて轉じ、當來染淨の諸法を生起するを亦た所應に隨つて如實に了知したまふが故に甚奇希有を成就すと言ふ。

(九六)復た次に、惡趣に往く行、善趣に往く行の超度差別に當に知るべし略して五門の不同ありと。此の五門に由りて自らの超度に於いて如實に了知し、他の超度に於いて亦た正に徧知す、所謂諸佛及び佛弟子なり。云何なるを名づけて惡趣に往く行と爲るや。謂く諸の外道の所有の一切の薩迦耶見を以て根本と爲し、諸の惡見趣並に彼の所緣並に彼の所依を以て依止と爲して發生する種種なる惡欲及び害若くは殺生等の所有無量の惡不善の法なり、經に廣く說くが如し、乃至所有諸の非法なる行不平等なる行を以て最後と爲す。能く險惡處に往き、能く那落迦に往き、能く諸の惡趣に住する差別生起し、若くは彼れに住するを惡趣に生ずと名づけ、彼の因より感ずる所の非愛の諸の果異熟を領受する、是の如きを名づけて惡趣に往く行と爲す。此に於いて多聞なる諸の聖弟子は若くは彼の所緣に諸の見趣を生じ、若くは自らの所依に執著を起さしめ、若くは諸の所有能く一切の險惡趣に往く等の諸の惡欲等、廣く說かば乃至諸の非法なる行不平等なる行を以て最後と爲し、若くは彼に住し、非愛の險惡等の果を領受す。是の如く一切如實に我我所に非ずと隨觀す、謂く是の中に於いて決定して我無く亦た我所無しと。是の如く觀

【九六】超を解す。

じ已つて當に聖諦に於いて現觀を得る時彼の諸の見趣の隨眠の根本皆な永く拔くが故に說いて名づけて斷と爲す、其の餘の一切畢竟して續かず。此の聖弟子は彼の見趣を以つて根本と爲る所有の能く險惡處に往く等に於いて定んで作すこと能はず、定んで險惡處等に往くこと能はず、是れを第一の惡趣に往く行をば永へに損害する門と名づく。是の因緣に由りて能く自內に於いて如實に我を離れて聖に等しと了知す。所餘の異生は復た能く世間道を以て能く惡趣に往く不善及び惡趣等を超度して（九七）四種の現法樂住を獲得し、或は諸色を超過せる無色の寂靜解脫を得ることありと雖も、然も其れ究竟して諸の惡趣等の後相應す可きを損害すること能はず。是の故に彼の流「類」極めて能く欲色界の愛を離れて暫時勝上なる樂住を獲得すと雖も、而も復た當來に更に還つて殺生等の事を造作し、諸の惡趣に往く、「而して復た曰はく」我等定んで當に能く殺生等の事を造作せざるべし、乃至廣く說かば諸の非法なる行不平等なる行をば我等は定んで當に能く造作せざるべしと、是れを聖法毗柰耶の中の永へに損害する門と名く、謂く能く惡趣に往く行を損害す。是の如く諸佛及び佛弟子は能く實に徧く永へに損害する門の所有差別を知るなり。

又卽ち是の如き諸の聖弟子は所餘の未だ斷せざる善趣に往く行を超度せんと欲するが爲めに此の聖弟子は先に作す所に於いて喜足を生せず、上の漏盡くるに於いて欣樂欲を起し、正願心を發し、彼の得る所の諸の世俗の道に於いて審に過患を觀る、謂く彼は究竟して苦を離るること能はずと、是

【九七】四種の現法樂住とは色界四靜慮なり。

れを第一の善趣に往く行を超度せんと欲するが爲めに心願を發す門と名づく。心願を發し已つて普く一切の善趣の後有に生ずる所の愛味に於いて、深く過患を觀ること險惡の道「に於いて」心に厭離を生ずるが如し、寂靜なる現法涅槃を欣慕し、正に方便を修し、是に由りて先に得る所の如き涅槃に趣く行に進趣す、是の如きを名づけて能く進趣する門と爲す。彼れ修道に由り漸次に離欲し、乃至能く(九八)第一有の定に入る。若し上の捨に於いて多く愛味放逸の因緣を生ぜば現法の中に於いて般涅槃せず、但だ上行不還果の者と名づく、是の如きを名づけて後の上行門と爲す。若し復た彼に於いて深く過患を觀、上の捨の中に於いて愛味を生ぜざれば彼れ現法に於いて能く涅槃を證し、有餘依般涅槃に依る、是の如きを說いて名づけて般涅槃門と爲す。是の門に由るが故に如實に自ら般涅槃し、一切の善趣に往く行を超度すと了知し、他の超度するに於いて亦た正に徧知す、所謂諸佛及び佛弟子なり。此の中初の一の永く損害する門は當に知るべし惡趣に往く行を超度すと。後の心願を發すと進趣と上行と涅槃との四門は當に知るべし善趣に往く行を超度すと。

(九九)復た次に、諸の聖弟子の已に(一〇〇)諦跡を見たるも、未だ欲を離れざる者に應に知るべし略して二種の雜染ありと、謂く欲雜染と後有の雜染なり。此の二種に於いて諸の聖弟子は應に勤めて加行

【九八】第一有の定とは非想非非想處の定なり。
【九九】二染を解す。
【一〇〇】諦跡とは諦道諦理なり。
【一〇一】無動とは色界四禪及び無色界の空識二無邊處定のこと、これに趣く行とは九無礙八解脫なり。

し、淨く其の心を修すべし。諸の聖弟子欲雜染を斷除せんと欲するが爲めの故に方便を勤むる時漸く三行に依る、謂く(一)(一〇一)無動に趣く行、(二)無所有處に趣く行、(三)(一〇二)無動無所有非想非非想處定に證入するなり。此れ(一〇三)斷對治に由るが故に、及び(一〇四)遠分對治の故なり。欲雜染を超度し、或は後有の雜染を斷除せんが爲めに方便を勤むる時已に欲界の愛を離れたるも、未だ色界の愛を離れず、謂く(一〇五)我所何ぞ當に有らざるべき、我何ぞ當に有らざるべき、我當に有らざるべし、我所當にあらざるべし、若くは(一〇六)今の所有、若くは(一〇七)昔の所有の是の如き一切をば我れ皆な棄捨すと。彼れ正に能く後有を斷ずる所有の差別の對治道を修習し已つて色界の愛を離れ、乃至能く非想非非想處定に入る。若し現法の中にて其の上の捨に於いて多く愛味を生ずれば般涅槃せず、彼れ現法に於いて全く一切の所有後有の雜染を解脫せず。若し上の捨に於いて愛味を生ぜざれば彼れ現法の中にて能く般涅槃し、能く全く所有一切の後有の雜染を解脫す。當に知るべし此の中若くは欲雜染を對治せんが爲めの故に對治道を修し、漸次に乃至能く(一〇八)第一有定に入り、若くは後有の雜染を對治せんが爲めに對治道を修し、漸次に乃至能く第一有定に入る、是の如き二種を共解脫と名づくと。諸の聖者、非聖の異生に皆な有るべきに由る、是の故に此の解脫を聖解脫と名づけず。

【一〇二】是れを證するは第九解脫なり。

【一〇三】斷對治。初禪にて欲雜染を對治するを云ふ。

【一〇四】遠分對治。第二禪以上にて雜染を對治するを云ふ。

【一〇五】我所とは我所有卽ち自我の所有或は所屬なり。

【一〇六】今の所有とは現に造る新業なり。

【一〇七】昔の所有とは故業なり。

【一〇八】第一有定とは非想非非想處定なり。

若し一切の乃至有頂〔天〕の薩迦耶の苦に於いて如實に知り已つて有頂〔天〕を超度し、現法の中に於いて永へに一切の所有雜染を斷ずれば、是の如き解脱は唯だ諸の聖者のみ方に能く獲得す、故に此の解脱を聖解脱と名づく。是の如き一切に總じて五處あり、一には無動に趣く行、二には無所有處に趣く行、三には非想非非想處に趣く行、四には現法涅槃、五には聖解脱なり。復た三種の諸欲の過患あり、一には諸欲の能く樂受に順ずる境界の爲めに生ずる所の貪欲の因縁、二には諸欲の能く苦受に順ずる境界の爲めに生ずる所の瞋恚の因縁、三には諸欲の能く不苦不樂受に順ずる境界の爲めに生ずる所の無明憤發の因縁なり。又た此の諸欲をば當に三處に於いて應に過患を觀ずべし、一には自性の故に、二には所縁の故に、三には助伴の故なり。

【一〇九】内の五根及び外の五境。

自性の故なりとは、虛妄なる分別より生ずる所の貪愛なり。所縁の故なりとは、謂く若くは〔一〇九〕内若くは外の五種の色境なり。助伴の故なりとは、謂く非理なる作意に相應する倒想なり。又上の欲を離るる勝れたる方便の心を説いて廣大と名づく、何となれば彼の上地は轉た上り轉た勝るるに由るが故に彼の心を修するを説いて廣大と名づく。若し能く下地の世間を厭離するは當に知るべし定んで無常等の行を以て厭壞し制伏すと。其の上地の應に得べき所の處に於いては當に知るべし亦た暫時の方便を以て寂靜の想を起して其の心を任持すと。又我れ已に是の處所に於いて具足して安住することを得たりと信解を生ずる者は當に知るべし彼れ加行道の中に於いて淨信を修習し、是の處所に於いて淨

信心を生ずと。此の淨信の增上力に由るが故に精進、念、定、慧等を修習し、初靜慮より漸次に乃至識無邊處の諸の無動定皆な能く證入す。又其の慧に由りて是の勝解を起す、謂く我れ已に能く是の如き定に入る、此れ即ち能く識無動處の所有の生果を感ずと。若し現法の中にて般涅槃せず、或は進求して上地に往かざれば彼れ當來に於いて決定して應に此の無動處に往くべし。又三緣に由りて是の諸地に於いて當に知るべし建立して無動處と爲すと。謂く(一)外の欲等の散動斷ずるが故に初靜慮を立てて無動處と爲す。(二)尋伺喜樂の色界地の中の諸動斷ずるが故に第四靜慮を立てて無動處と爲す。(三)有色有對の種種なる別異の想動斷ずるが故に空無邊處識無邊處を立てて無動處と爲す。(二〇)第二第三靜慮の中の後後の所有諸動斷ずるが故に當に知るべし亦た無動處と名づくることを得と。識無邊處は空無邊處の外門の緣動[に於いて]遠離することを得るに由るが故に當に知るべし建立して無動處と爲すと。要を以て之を言はば、所有定に[於て]動搖無きに緣るが故に皆な無動と名づく。此の定の(二一)邊際は極めて識無邊處に至る、是の故に當に知るべし、乃至此の處に無動を建立すと。即ち(二二)此の一切所有を緣ずる定を皆な有上想定と名づけ、(二三)此れより已上無所有を緣ずる定を當に知るべし名づけて無上想定と爲し、此れより已上を復た非想非非想處定と名づく。故に(二四)三分に由りて(二五)三行を宣說し、

【二〇】是れ三緣の中の第二緣に攝むべし。
【二一】邊際とは限界なり。
【二二】色界初靜慮より乃至無色界の識無邊處までを有上想定と云ふ。
【二三】無所有處定を無上想定と名づく。
【二四】三分とは三種の因即ち無動定、無所有處定、非想非非

（二六）三種の門に由りて諸の聖弟子は欲等を厭壞し、既に厭壞し已つて漸次に能く乃至識無邊處定に入る。是の故に能く三種の無動處に趣く行を建立す。又若くは（二七）色想、若くは（二八）無動想にて諸の（二九）下地に於いて深く厭壞し已つて能く無所有處定に入る、是れを第一の能く無所有處に趣く行と名づく。又卽ち此の處は是れ無漏道を修習する邊際なり。此の無漏道に復た二種あり、一には有上、二には無上なり。（三〇）有想定の其の有上の者の如きは無常行と倶なり、（三一）其の無上の者は無我行と倶なり。有上行に由りて其の下地に於いて深く厭壞し已つて此の處の定に入り、無上行に由りて下に於いて上に於いて一切の法の中に無我を思惟して能く無漏の無所有處定に入る。此の無上行を當に知るべし名づけて第二の趣行と爲すと。此の第二の趣行に、復た二行に由りて差別あるが故に二種を建立す。云何なるか二行なる、謂く能依所依の智差別するが故なり。此の中能依の無我智とは、謂く諸の所有若くは有情界にまれ若くは我が己身にまれ中に於て都べて我の所屬の處「等」無し「とするなり、我の所屬の處は」、謂はく地の方域なり、我の所屬の者は、謂はく諸の有情なり、我の所屬の事は謂はく或は父、或は母、或は伴、或は主、是の如き等の類なり。彼れ我に於て所屬の處に非ず、所屬の者に非ず、所屬の事に非ざるが如く、

想處定を云ふ。

【二五】三行とは三無動處に趣く行なり。

【二六】三種の門とは前の三縁なり。

【二七】色想とは色界の想なり。

【二八】無動想とは空識二無邊處の想なり。

【二九】上地の想にて下地に厭壞を生ず。

【三〇】有想定の其の有上の者とは前述有上想定なり。

【三一】其の無上の者とは無上想定なり。

是の如く我れも亦た彼れに於いて所屬の處に非ず、所屬の者に非ず、所屬の事に非ざるなり。此の中所依の無我智とは、謂く諸の世間は空にして常及び我、我所あること無く、此の中都べて常、我、我所として眞實に得可き無し、唯だ諸法のみあり〔とするなり〕。是の如く世間旣に悉く是れ空なり、當に復た誰あつて所屬の處あり、所屬の者あり、所屬の事あるべきや。是の故に當に知るべし前の無我智は是れ其の能依なり、後の無我智は是れ其の所依なりと。非想非非想處には無漏道無し、唯だ無所有處を厭壞する想に由るが故に能く此の處の定に入る、中に於て唯だ此の一の趣行あり、又此の中に於て我所何ぞ當に有らざるべきとは、謂く生等の苦に由るが故に我に苦ありと說く。我何ぞ當に有らざるべきとは、謂く卽ち生等の苦を以て我と爲るなり。是の如き樂欲心を發生し已つて正に勤めて加行し、正に加行し已つて前後の所有差別を獲得す。是の因緣に由りて復た決定を得、謂く我は當に有らざるべし、我所當にあらざるべしと。若くは今の所有とは、謂く今の現法に造作し增長する所有の新業なり。若くは昔の所有とは、謂く諸の故業なり。彼れ此の一切の所有異熟果に於て皆な願求せず、一切棄捨して顧戀すると無きが故なり。

【三三】此は總頌第一門念住を解する四頌の中の第二頌なり。此の中更に五門を列し、長行に於て次第に解釋す。五門とは(一)安立と邊際と純(二)如理なる緣起(三)修持障の自性(四)斷を說く(五)修を起す。

復た次に、嗢柁南に曰く、

〔三三〕『安立に邊際と純と、及び如理なる緣起と、修持障の自性と、斷を說くと修を起すとは後な

り。』

(二三三)此の中四念住を初と爲し、「八正」道支を最後と爲る三十七種の菩提分法を安立す。若くは略「說」若くは廣「說」は聲聞地の如く應に其の相を知るべし。(二三四)又四念住に由りて應に一切の所知の事の邊際を知るべく、所知の事の邊際に由るが故に復た應に(二三五)智の事の邊際を了知すべし。(二三六)又四念住は欲精進等に由りて加行を修習して方に圓滿することを得、應に知るべし此の四種の念住を除いて更に(二三七)餘の不同分の道或は所緣の境あること無しと。此の道此の境に由りて能く諸漏を盡し、涅槃を獲得す。第二の清淨道無きに由るが故に純ら一の能趣の正道あるのみなりと說く。又此の純一の能趣の正道は二の因緣に由りて能く有情をして究竟清淨ならしむ、一には思擇力に由るが故に、二には修習力に由るが故なり。(二三八)此の中愁とは、謂く染汙憂なり。言ふ所の泆とは、謂く悼と俱行する欲界の染喜なり。愁は(二三九)四種の世法を以て所依處と爲し、泆は餘の四の世法を以て所依處と爲し、四念住に於いて加行を勤修し、思擇力に依りて愁泆を超度す。世間の修習力に依るが故に欲愛を離れ憂苦を棄捨するとを得、出世間の修習力に依るが故に一切の薩迦耶の苦を超度するに由りて亦た能く(二三〇)八支聖道

【二三三】第一門安立と邊際と純とを解す。初に安立を解す。
【二三四】次に邊際を解す。
【二三五】智の事。能知の智なり。
【二三六】後に純を解す。
【二三七】外道の計する道或は所觀の境なり、外道の立つる道は佛法に異るが故に不同分の道と云ふ。
【二三八】以下經中の句義を散釋す。
【二三九】四種の世法とは毀、衰、譏、苦なり。
【二三〇】八支聖道乃至妙法とは涅槃なり。

の果の眞實の妙法を證得す。一切の有情は、當に知るべし、皆な思擇修習の二種の力に由るが故に一切種の究竟清淨を得と。

（三一）復た次に、若し（三二）身等の四種の所緣に於いて種種の非理なる作意を發起し、即ち便ち四種の念住に違背す。此に違背するが故に即ち便ち如理なる作意に違背す、謂く聖「者」は如理に無間に能く（三三）正見支等の所有聖道を生ず。此に違背するが故に即ち便ち一切の聖道に違背し、道に違背するが故に便ち道果の甘露究竟の涅槃に違背すと爲す。又瑜伽師は身等は因緣より生ずと了知し已つて復た三世の身等の諸法に於いて無常觀に住す。是の如き無常觀に住するに由るが故に諸の後有に於いて終に後有愛に依止して住せず。又現法の中一切行の若くは內若くは外に於いて都べて我及び我所を執取せず。又未來に於いては當に知るべし集法に安住して隨觀すと、過去世に於いては當に知るべし滅法に安住して隨觀すと、現在世に於いては生じ已るや無間に盡滅する法なるが故に當に知るべし集滅法に安住して隨觀すと。彼れ最初に身等の法に於いて緣生の性なりと觀ずるに由りて無常に悟入す。是の如き無常の性に悟入し已つて諸の愛見の雜染等の處に於いて多く修習して住し、淨く其の心を治し、是の如く作意して方に圓滿することを得。此を「所」依と爲るに由りて能く隨つて究竟して漏盡くることを獲得す。又一切の法は要を以て之を言はば、謂く善不善若くは雜染品若くは淸淨品

【三一】第二門、如理なる緣起を解す。
【三二】身等。身、受、心、法。
【三三】八見支等とは八正道支なり。

なり。當に知るべし此の中諸の雜染品は皆な非理なる作意を用て（二三四）集と爲し、諸の清淨品は皆な如理なる作意を用て集と爲し。是の如き一切を總略して說いて作意を名けて集と爲す。

（二三五）復た次に、諸の念住を修する若くは略〔說〕若くは廣〔說〕は聲聞地の如く應に其の相を知るべし。又此の念住を修習する道理は今の世尊世に出現したまひて方に始めて宣說したまひ聖弟子をして適初めて修習せしめたまへるには非ず、然も過去無始時より來た諸の念住に於いて修習し流轉し、未來世に於ても當に知るべし修習すること亦た窮盡すること無しと。又是れ過去未來現在の世出世間の無量なる善法の生起する〔所〕依處なるが故に是の如き四種の念住を說いて名づけて善聚と爲す。又能く是の如き善聚を障礙するが故に（二三六）五蓋を說いて不善聚と名づく。又身等の四の所知の法の無邊の別に由るが故に如來の智慧の彼に於いて無礙なるも亦た邊あること無く、邊無きが故に如來の說きたまふ所の無上の法敎も亦た邊あること無し。是の如き法敎は二緣の顯はす所なり、一には文に由るが故に、二には義に由るが故なり。義の差別門に數量あること無く、法敎の文句開顯する義門も亦た數量無し。此の文句に於いて重ねて宣說せず、無邊に展轉して辯才盡くること無し。是の故に如來は希奇未曾有の法を成就し、善く能く所有法敎を宣說し、一義の中に於いて能く無量の巧妙なる文句を以て方便開示して而も重說せず。又聖敎に於いて宗義趣の智をば善く成就するが故に名づけて趣

【二三四】集とは因なり。
【二三五】第三門修持障の自性を解す。
【二三六】五蓋とは貪欲、瞋恚、愚癡、睡眠、掉擧。

有りと爲し、倶生の聞思より成ずる所の妙慧をば善く成就するが故に名づけて意有りと爲し、定を成就するが故に名づけて念有りと爲し、諦に通達するが故に名づけて慧有りと爲す。當に知るべし此の中〔二三七〕初の一は總標なり、〔二三八〕後の三は別釋なりと。

〔二三九〕復た次に、諸の苾芻ありて〔二四〇〕身等の法に於いて先づ聞思に由りて如理に作意し、唯だ身等の法のみある觀に安住し、一切の法は無我の性なりと知り已つて唯だ此の聞思の作意のみに於いて喜足を生ぜず、唯だ上定心解脱を希求す。定を求めんが爲の故に遠離處に住し、唯だ身等を緣ずるのみ。九の行相を以て其の心を安住せしめ、心內をして寂「靜」ならしむ。二の因緣に由りて四念住を起すを善く發起すと名づく、一には如理に作意する如實智に由るが故に、二には三摩地の如實智に由るが故なり。此の慧無間に如實智に由りて當に究竟することを得べし。

〔二四一〕復た次に、諸の苾芻あり、三の對治に於いて所欲に隨ふことを得、艱難無きことを得、阻礙無きことを得、謂く(一)無常相若くは(二)仁慈觀、若くは(三)無相定なり。彼れ是の如き三種の對治に由りて其の所應に隨つて前に說ける所の如く〔二四二〕可意等の身等の境界に於いて厭逆の想厭逆せざる想に住し、〔二四三〕彼の二種を棄てて捨念にして正知す。

【二三七】宗義趣の智。
【二三八】倶生の聞思より成ずる所の妙慧等の三。
【二三九】第四門斷を解す。
【二四〇】身等。身受心法。
【二四一】修を起すを解す。
【二四二】可意等。可意、不可意、倶相違。無常想は可意の境に於いて厭逆の想に住し、仁慈觀は不可意の境に於いて厭逆せざる想に住し、無相定は倶相違の境に於いて捨念にして正知す。
【二四三】厭逆の想と厭逆せざる想との二種に非ざる平等なる想を捨念にして正知すと云ふ。

此の因縁に由りて當に知るべし名づけて善く念住を修すと爲すと。

復た次に、嗢柁南に曰く、

（一四四）『先には諸根と愛味と、前後に差別あると、相を取ると及び諸の纏とにして、大果利を後と爲す。』

（一四五）三種の根ありて諸の念住の一切の善聚に於いて障礙を爲すが故に當に知るべし説いて不善法聚と名づくと。何等をか三〔根〕と爲すや。一には惡行根、能く當來に惡趣の苦に住せしむ。二には尋思根、能く現法をして不安の苦に住せしむ。三には根根、惡行根及び尋思根の與に根本と爲るが故に説いて根根と名づく。應に知るべし此の中諸の貪瞋癡の三不善根は能く身等の惡行の與に根と爲り、（一四六）欲等の三想は能く（一四七）欲等の尋思の與に根と爲り、（一四八）欲等の三界は當に知るべし能く貪等の三〔不善〕根及び（一四九）欲想等の三根の與に根と爲るなり。

（一五〇）復た次に、諸の苾芻あり、四念住に於いて加行を勤修し、世間道を以て欲界の愛を離れ、廣く説かば乃至（一五一）第一有定に具足して安住し、即ち此の定に於いて多く愛味を生じ、即ち此の定に於いて喜足の想を生ず。上勤めて未だ得ざる所を求め得ざれば此れを聖法毗奈

【一四四】此は總頌第一門念住を解する四頌の中の第三頌なり、此の中更に六門を列し、長行に於いて次第に解釋す。

【一四五】諸根を解す。

【一四六】欲等の三想とは欲、恚、害の三想なり。

【一四七】欲等の尋思とは欲、恚、害の三尋思なり。

【一四八】欲等の三界とは欲、恚、害の三界なり。

【一四九】欲想等の三根とは欲想、恚想、害想の三根なり。

【一五〇】愛味を解す。

【一五一】第一有定とは非想非非想定なり。

耶の中に於いて大士と名づけず、何となれば其の心未だ善解脱を得ざるが故なり、此れと相違すれば大士と名づくることを得。

（一五二）復た次に、諸の苾芻あり、身等の境に於いて精勤して（一五三）循身等の觀に安住せしめ、心をして内聚せしむ。當に知るべし此の心、奢摩他の所治の身心の惛沈下劣なるに於いて解脱を得ず、解脱せざるが故に此の聚心に依りて身中の諸の惛沈の性を生起し、心中の諸の下劣の性を生起す。若し念住に於いて善く心を安住せしめ、如實に此の生起する所の隨煩惱を了知し已つて便ち内聚より還つて其の心を收めて外に在る淨妙なる境相に安置す、謂く佛等の功德行緣に於いて心を持して住せしむ。此れを緣ずるに由るが故に歡喜を發生し、廣く說かば乃至妙[illegible]門に由り所緣の境に於いて心をして定を得せしめ、奢摩他の所對治の諸の隨煩惱より解脱することを得。此れより已後如實に了知し、隨煩惱に於いて心に解脱を得。此の義の爲めの故に祈願し、外に於いて此の義を得已つて還つて復た前の如く心を内聚に攝めて而も其の諸の隨煩惱の爲めに惱亂せられず。心内聚し已つて祈願に由らずして、自然に如實に了知し、外心に於いて解脱を得、彼れ（一五四）外緣の行相の尋思に於いて制伏する所あり。其の加行ありて運轉す可きこと難きも、皆な自在に解脱することを得て棄捨して安樂にして住し、已に勝奢摩他を成辦することを得。

【一五二】前後差別あるを解す。是れ解脱心前後差別するを解す。

【一五三】循身等の觀。循身觀、循受觀、循心觀、循法觀の四念住觀なり。

【一五四】能く外を緣ずる行相たる尋思。

是の如く彼れ四種の念住に於いて善く心を安住せしめ、能く正に前後の差別を了知す。又應に知るべし此の補特伽羅先に已に毘鉢舍那を修行して以て依止と爲し、奢摩他に於いて瑜伽の行を修すと。

（一五五）復た次に、諸の苾芻あり、諸の念住に於いて加行を勤修し、毘鉢舍那を以て依止と爲し、奢摩他に於いて樂つて觀行を修す。彼れ卽ち應に內の奢摩他に攝むる所の自心に於いて是の如き相を取るべし、謂く我れ今者何をか思惟する所ぞ、云何んが思惟するやと、奢摩他に攝受する所の心をして奢摩他の所治の身心の惛沈下劣〔性〕の爲めに惱亂せしめられ、復た我れ今者何をか思惟する所ぞ、云何んが思惟すと、奢摩他に攝受する所の心をして彼の法の爲めに惱亂せられざらしむ。若し彼の苾芻是の如き自心の相貌を取らず、但だ自ら此の隨煩惱染汙心を了知し已れば便ち外緣に於いて淨妙なる相を取り、是れを因と爲すに由りて能く暫時現在の現前の隨惑を除遣すと雖も、然も後時に於いて若し復た前の如く心を內聚に攝むれば還つて是の如き隨惑の爲めに惱まされて靜定を得ず、先の如く自心の相を取らざるが故なり。是の因緣に由りて隨煩惱の爲めに數數擾亂せられ、又欣求する所の義を得ること能はず、復た憂愁の爲めに損惱せられ、又長時を經て內心の寂止を獲得すること能はず、奢摩他毘鉢舍那を先と爲るに依りて清淨なる增上第一の正念正知を獲得すること能はず、內心の寂止を獲得せざるに由るが故に（一五六）四の增上心の現法樂住を得ること能はず。增上第一の正念

【一五五】相を取るを解す。
【一五六】四の增上心の現法樂住。增上心とは定、色界四禪の定を云ふ。

正智を獲得せざるに由るが故に先に未だ得ざりし所の無上安隱究竟の涅槃を得ること能はず。上と相違するは應に知るべし卽ち是れ一切白品なり、乃至先に未だ得ざりし所の無上安穩究竟の涅槃を獲得すと。此の中典廚を瑜伽に譬へ、師主を卽ち內に於ける奢摩他に攝受する所の心に譬へ、其の餚饍の味を相を執取するに喩へ、上妙なる衣食を內に於ける心の奢摩他等に喩ふ。當に知るべし黑品は諸の愚夫の所有に喩へ、白品は諸の智者「の所有」に喩ふと。

一五七 復た次に、諸の苾芻あり、諸の念住に於いて正に勤めて修習す、而も是れ異生にして或は勝妙なる可愛の境界正に現在前するあり、或は復た獨處して諸の相狀を得、失念するに由るが故に不如理なる想を以て依止と爲して卒爾に猛利なる貪纏を發起す。彼れ此の纏に於いて深心に厭恥して、自身厄難「或は」極めて鄙穢なる處に墮するが如く謂ひ、猛利なる遠離を思ふ心を發起す。是の如き行に由りて便ち彼の纏に於いて心に解脫を得、既に解脫し已つて心に歡喜を生じ、此れより已後猛利なる厭「心」を起し、猛利に厭うて後無常想を得、大犂を見るが如く諸行の塊を發き、便ち聖諦に於いて如實に現觀し、其れを以て涅槃に依止し依附す。又卽ち有學にして觀察作意し、勝妙なる境に於いて淨相を思惟するも、未だ永へに貪の隨眠を斷せざるに由るが故に貪纏卒爾に生起し現前せんに、尋いで復た彼に於いて深く過患を見、此の纏及び隨眠を斷せんと欲するが爲めに無相定に入る。是の如く能く未だ斷せざりし法を斷じ、定より起ち已つて

【一五七】諸の纏を顯す。

如實に一切已に斷ぜりと了知し、微妙なる解脫の喜樂を領受し、如實に自己を觀見す。大智力を成就するが故に名づけて彊盛と爲す、諸の（一五八）魔羅品は其の力羸劣なり。

（一五九）復た次に、四念住を修するより引く所の功德は當に知るべし能く最勝增上なる究竟の果を感ずるが故に大果ありと名づくと。當に知るべし能く最勝增上なる樂の勝利を感ずるが故に大利ありと名づくと。

【一五八】魔羅。略して魔と云ふ。
【一五九】大果利を解す。

巻の第九十八

攝事分中契經事菩提分法擇攝第四の二

復た次に、嗢柁南に曰く、

（一）「邪師と雪山に住すると、勸勉と繋屬淨と、漸次と戒圓滿とにして、
德と成就とを後と爲す。」

（二）諸の外道あり、弟子衆に於いて自ら立てて師と爲し、專ら利養を求め、專ら恭敬を求め、專ら自利を求め、緣に遇うて和合す。族姓子ありて其に投じて出家す、因つて謂つて曰く、「汝と我れと先きに一切の資身の衆具の共に受用す可き無し、汝應に我が爲に他處に往詣し、我が德を褒讚し、我が失を掩藏すべし、我れも亦た汝が爲めに是の如き事を行ぜん、我等二人迭ひに相依護し、當に諸王若くは王と等しき「もの」乃至一切の大商主の邊に於いて多く利養及以び恭敬を獲べし」と。若くは是の言を作す諸の外道の師を自利を專らにすと名づく、然れども其の弟子は便ち抗言を發す、「此の見を爲すこと勿れ」と。是の如く護る者は未だ自ら護ると名づけず、惡趣に往く失あり、若し此の失を防ぐを乃ち自ら護ると名

【一】前卷の續、此は總頌第一門念住を解する四頌の中の第四頌なり。此の中更に八門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【二】邪師を解す。

づく。「是の故に汝應に前の如く自ら護るべし、我れ亦た當に自ら別に餘を護ることを爲すべし、我れ既に汝を護ること能はず、汝亦た須らく我れを護るべからず」と。此の義の中に於て當に知るべし弟子は是れ如理語の者なり、是れ聰慧なる者なりと、當來を重んずるが故なり。應に知るべし其の師は是れ非理語の者なり、是れ愚癡なる者なりと、現在を重んずるが故なり。復た雜染ありて他を觸惱す、雜染に由るが故に自ら護ること能はず、此れに由りて他を惱ませば他を護ると名けず。此の中前の如く親近等に由りて諸の煩惱を斷ずるを當に自ら護ると名づく。此より已後斷を因と爲るに由りて他等を惱まさざるを當に他を護ると名づく。應に知るべし此の中瞋無く害する無きは是れ惱ますこと無き義なりと。緣無きに而も利樂の二心を起し、緣無きに而も慈悲の二心を起す、當に知るべし此の如きは是れ哀愍の義なりと。哀愍に由るが故に他を惱まさず、是の故に當に知るべし一切の哀愍と彼れと相違すと。

(三)復た次に、應に知るべし雪山を佛の善説の法毗奈耶に喩ふと。此の中略して三分の得可きあり、一には無學地、二には有學地、三には異生地なり。猨猴を彼の非理なる作意の諸の相應の心に喩へ、獵人を魔に喩ふ。無學地に於いては(四)倶に行くこと能はず、(五)有學地乃至不還[果]に於いては唯だ非理なる作意相應の猨猴の喩の心獨一能く往くあるのみ、獵人の喩の魔の能く行く所に非ず、異生地に

【三】雪山に住するを解す。
【四】倶に。猨猴と獵人と倶に。
【五】有學地乃至不還果。第一預流果より第三不還果まで。

於いては二俱に能く行く。又諸の愚夫は要ず（六）餘境を觀、能く（七）餘境を出で、（八）餘境を追求し、（九）餘境に縛せらる、是の故に境に於いて解脫を得ず。

（一〇）復た次に、正法に於いて義理を（一）聽聞し（二）受持し、（三）觀察し（三）（一一）法に隨つて法を行ずるに由りて其の次第の如く應に知るべし勸化の四義を安立すと。復た三法あり、尙は能く一切の勝妙なる婬欲貪の纒を斷除す、況んや鄙劣なる諸の欲貪の纒をや。何等をか三と爲す、一には精進力、二には不放逸力、三には對治力なり。精進力に由りて其の已に生ぜる者をば堅く住せざらしめ、餘の二力に由りて其の未だ生ぜざる者をば生ずることを得ざらしむ。是の如く行者正行を勤修し、已に生ぜる惡を斷除せんと欲するが爲めの故に、及び未だ生ぜざる者を生ぜざらしむるが故なり。

（一二）復た次に、四念住に於いて殷重に修習することは聲聞地の如く應に其の相を知るべし。繫屬魔とは、謂く欲界に在り、此れ不還果にて卽ち能く超度す。繫屬死とは、謂く欲界より乃し有頂「天」に至る、此れ阿羅漢「果」にて乃ち能く超度す。清淨ならざる諸の有情と言ふは、謂く諸の異生なり、淸淨と言ふは、謂く諸の有學なり。鮮白と言ふは、謂く諸の無學なり。復た（一三）三種あり、（一）證淨なり、（二）未だ淸淨ならざる者を能く淸淨ならし

【六】餘境とは上境なり
【七】餘境。是れは下境なり。
【八】餘境。是れは上境なり。
【九】餘境。是れは下境なり。
【一〇】勤勉を解す。
【一一】法とは敎法、隨法行とは敎法に隨ふ修行なり。
【一二】繫屬淨を解す。
【一三】此の三種は次第の如く前の三種を重釋す。

め、(一三)已に清淨なる者を能く鮮白ならしむ。當に知るべし此の中(一四)上の諸の有學を說いて清淨と名づけ、(一五)下の諸の有學を不清淨と名づく、彼れ修道未だ清淨ならざるに由るが故なりと、(一六)餘は前に說けるが如し。

(一七)復た次に、四念住を修するに應に知るべし略して五種の漸次ありと。一には信の增上力［より］清淨にして出家すること、二には戒律儀、三には根律儀、四には遠離を樂ふこと、五には蓋清淨なることなり。諸の在家の者は復た數數諸の念住を修し、淨信を獲得し、諸蓋清淨なりと雖も、然も(一八)學處を闕けば當に知るべし修する所圓滿なることを得ずと。

(一九)復た次に、三の因緣に由りて具戒の苾芻は當に禁戒淨命の圓滿を知るべし。云何なるを三と爲すや、一には所行圓滿、二には攝取圓滿、三には受用圓滿なり。所行圓滿とは、謂く買賣より乃し害縛斷截撾打揣摩等の事に至るまで皆な悉く遠離するなり。攝取圓滿とは、謂く象馬等を攝取する事乃至生穀等を攝取する事に於いて皆な悉く遠離するなり。受用圓滿とは、謂く衣僅に身を蔽ひ、食纔に腹に充つれば便ち喜足を生じ、餘の(二〇)長物非時食等に於いて皆な悉く遠離するなり。

(二一)復た次に、身等の四法は四大路の如く、彼に於いて生ずる所の非理なる作意は邪に稻穀麥穗を

【一四】上の諸の有學とは一來果の人なり。
【一五】下の諸の有學とは預流果の人なり。
【一六】阿羅漢を鮮白と名づくることは前の如し。
【一七】漸次を解す。漸次とは次第のこと。
【一八】學處。五種の漸次の中の中間の三漸次を云ふ。
【一九】戒圓滿を解す。
【二〇】長物とは餘分の衣なり。
【二一】穗を解す。

祈願するが如く、彼に於いて生ずる所の如理なる作意は正に稻穀麥穗を祈願するが如し。當に知るべし欲界は是れ定地ならざること猶ほし其の皮の如く、色無色界は倶に是れ定地なること猶ほし其の肉の如く、無明は血の如しと。三界の中に於いて三種の漏に由りて淋漏の義あるなり。

〔三二〕復た次に、先に說ける所の如き所有貪等の種種無量なる惡不善の法をば、二の因緣に由りて若し成就する者は四種の念住を修習すること能はず、是れ一切汎く成就する者には非ず。云何なるを二と爲すや。一には貪等の纒現前することあるが故に、二には此の纒に於いて過を見ざるが故なり。纒現在前すれば雜染心なるが故に修習すること能はず、暫らく遠離すと雖も性染著するが故に〔顧〕戀すること無きに非ざるが故に能く貪等に隨順する諸法に於いて其の心散動し、常に逐うて漂淪し、種種なる尋思恆に隨つて擾亂す、是の故に念住を修習すること能はず。若し爾らざる者は諸有其の性深く染著せざれども皆な應に念住を修習すること能はざるべし。若し是の如き者は能く〔三三〕四念住を修することあるべき無し。

復た次に、嗢柁南に曰く、

〔三四〕「勇と力と等持を修することにして、異門と神足とは後なり。」

〔三五〕應に知るべし四種の正斷を建立することは〔三六〕聲聞地に已に廣く分別せるが如しと。此の中勇の

〔三二〕成就を解す。
〔三三〕四念住。身受心法なり。
〔三四〕此の半頌は第九十七卷首の總頌の第二門正斷、第三門神通を解する別頌なり。此の中更に五門を列し、長行に於て次第に解釋す。
〔三五〕勇を解す。
〔三六〕第二十九卷。

第五の句を宣説せん。云何なるを勇と名づくるや、謂く前に説けるが如く堪能忍受し、勤めて精進することを發し、生ずる所の衆苦、諸の淋漓の苦、(二七)界不平[等]の苦、他の麤惡なる言損惱等の事より生ずる所の衆苦[あるも]、此の因緣に[由りて]正斷を修習する加行を退捨するに非ざるが故に名づけて勇と爲す。

(二八)復た次に、應に知るべし四種の神足を建立することは(二九)聲聞地に已に廣く分別せるが如しと。若し略して說かば、四種の力に由りて心を持して定ならしむ、是の故に四種の神足を建立す。云何なるを四と爲すや。一には淨意樂力、二には勤務力、三には心喜樂力、四には正智力なり。當に知るべし此の中第一の力に由りて三摩地に於いて樂欲を發生し、證得せんが爲めの故に修習し勤務し、第二の力に由りて最初の住心其をして定に安せしめ、第三の力に由りて已住の定心を復た散動すること無く、外に於いて更に復た飄轉せしめず。第四の力に由りて等持の所治の煩惱を觀察し、斷と未斷とに於いて如實に了知し、又(三〇)等持の入住出の相に於いて能く善く了別すと。是の如く復た奢摩他等の所有諸相、若くは奢摩他毗鉢舍那の諸の隨煩惱及び隨煩惱の能對治等をば皆な如實に知る。等持を樂ふ者等持の中に於いて但だ(三一)爾所の等持の作事あり、此れを除きて更に若くは過ぎ若くは增すこと無し。

【二七】界不平等の苦　界とは種子。四大種不調なるより生ずる所の病苦。
【二八】力を解す。
【二九】第二十九卷。
【三〇】等持の入住出の相。入定の相、住定の相、出定の相。
【三一】爾所の等持の所作とは欲、勤、心、觀、四力等を云ふ。

〔三二〕復た次に、五の因緣に由りて當に神足をば略して修習する相を知るべし。一には奢摩他品の隨煩惱を遠離するに由るが故に、二には毘鉢舍那品の隨煩惱を遠離するに由るが故に、三には毘鉢舍那品の所緣の境界に於いて心を繫縛するが故に、四には奢摩他品の所緣の境界に於いて心を繫縛するが故に、五には倶に二品の所緣の境界に於いて心を繫縛するが故なり。應に知るべし此の中奢摩他品の隨煩惱とは、謂く懈怠と倶行する欲等及び惛沈睡眠と倶行する欲等なり。當に知るべし懈怠と倶行する欲等は是れ〔三三〕惛沈睡眠と倶行する欲等の依止する所の性なりと。毘鉢舍那品の隨煩惱とは、謂く〔三四〕掉擧と倶行する欲等及び〔五〕妙欲の散動と倶行する欲等なり。當に知るべし掉擧と倶行する欲等は是れ〔五〕妙欲の散動と倶行する欲等の依止する所の性なりと。又此の中に於いて懈怠と倶行する欲等に由りて奢摩他品に於いて雜染に住せしむれども、然も諸の奢摩他をして皆な悉く滅沒せしむること能はず。惛沈睡眠と倶行する欲等に由りては奢摩他品に於いて雜染に住せしめ、亦た復た能く諸の奢摩他をして皆な悉く滅沒せしむ。掉擧と倶行する欲等に由りては毘鉢舍那品に於いて雜染に住せしむれども、而も毘鉢舍那をして一切滅沒せしむること能はず。〔五〕妙欲の散動と倶行する欲等は毘鉢舍那品に於いて雜染に住せしめ、亦た一切の毘鉢舍那をして皆な悉く滅沒せしむ。毘鉢舍那品の所緣の境とは、謂く〔三五〕前

【三二】 等持を修することを解す。
【三三】 惛沈とは心闇昧なる性、卽ち沈鬱性なり。
【三四】 掉擧とは心輕擧する性なり。
【三五】 前後の想とは坐を觀じ臥を觀じ後行に在りて前行を觀ずる等なり。

後の想なり、此の想の分別は〔三六〕聲聞地の如く應に其の相を知るべし。奢摩他品の所縁の境とは、謂く〔三七〕上下の想なり、此れ亦た前の如く應に其の相を知るべし。〔三八〕倶品の所縁の境とは、謂く光明の想なり、彼れ倶品に於いて動搖に由るが故に諸の光影と倶行する心あり。修又欲等と餘の懈怠と相應するが如くに非ざるを說いて懈怠倶行すと名く。精進も亦た爾なり、懈怠共に相應する義あることを得、然れば卽ち精進慢緩に墮在して正に勤めて精進することを發さず相續するを說いて懈怠倶行すと名づく。又此の五相に當に知るべし總じて一切種の修を攝すと、等持を樂ふ者は此に由りて等持をば速に成滿することを得。

〔三九〕復た次に、〔四〇〕五解脱處に於いて其の所應の如く當に欲等の增上する四種の三摩地を知るべし。若し苾芻あり、淨意樂及び猛利なる欲に依りて最勝なる通慧を證得せんと欲するが爲めに諸の如來及び佛弟子に從つて殷重に恭敬し、正法を聽聞し、聞より無間に漸次に勝れたる三摩地を證得す、當に知るべし是れを〔四一〕欲增上三摩地と名づくと。復た苾芻あり、聞く所の法の如く、得る所の法の如く大功用を起し、大精進を發し、或は正に他の爲めに宣說開示し、或は勝妙なる音詞を以て讀誦し、此れより無間に漸次の因緣に能く隨つて勝れたる三摩地を獲得す、

〔三六〕第二十八卷。

〔三七〕上下の想とは上有頂天より下足下に至るまで種種なる不淨充滿すと觀ずるなり。

〔三八〕倶品とは奢摩他と毘鉢舍那との二品なり。

〔三九〕異門を解す。

〔四〇〕五解脱處。(一)法を聽くに因て解脱を得(二)他の爲めに說くに因て解脱を得(三)自ら經を讀誦するに因て解脱を得(四)思惟するに因て解脱を得(五)法に隨つて法を行じて解脱を得。

〔四一〕是れ五解脱の第一法を聽くに因て得る定なり。

當に知るべし是れを（四二）精進增上三摩地と名づくと。復た苾芻あり、諸の賢善の三摩地の相に於いて善く取り、思惟し青瘀等乃至骨鎖を觀じて以て邊際と爲し、此の所緣に由りて次第に勝れたる三摩地を生起す、當に知るべし是れを（四三）心增上三摩地と名づくと。復た苾芻あり、聞く所の法の如く、得る所の法の如く、獨り空閑に處り、思惟し籌量し、審諦に觀察し、此の因緣に由りて漸次に勝れたる三摩地を生起す、當に知るべし是れを（四四）觀增上三摩地と名づくと。

復た次に、差別をいはば、謂く四門に由りて三摩地を起す。一には前の如く他に從つて猛利なる樂欲を生起し、正法門を聞くに由る。二には他に從つて無倒なる教授教誡を獲得し、無間殷重に加行を發起し、未だ根本の勝れたる三摩地に入らざるに趣入せんと欲するが爲めの正しき教授門に由る。三には已に根本の勝れたる三摩地に入り、轉た所餘の上位の勝れたる三摩地を得んと欲するが爲めの心喜樂門に由る。四には多聞聞持し、自ら能く法に於いて如理に觀察する平等觀門に由る。當に知るべし此の中第一門に由りて欲增上三摩地を起し、第二門に由りて精進增上三摩地を起し、第三門に由りて心增上三摩地を起し、第四門に由りて觀增上三摩地を起すと。所餘の義を分別し及び斷行を分別することは（四五）聲聞地の如く應に其の相を知るべし。

【四二】是れ五解脫の第二他の爲めに說き、第三自ら經を讀誦するに因つて得る定なり。

【四三】是れ第五解脫の第四思惟するに因て得る定なり。

【四四】是れ五解脫の第五法に隨つて法を行ずるに因つて得る定なり。

【四五】第二十九卷。

〔四六〕復た次に、諸の神足を修するを以て依止と爲して能く正に諸聖の神通を引發す、外道の諸の神足を修めて能く正に諸聖の神通を引發すること無し。又諸の聖者は所有最勝なる神通を引發し、願樂する所に隨つて諸の壽行を延ぶ、或は一劫、或は一劫餘に住す、謂く一劫を過ぎたる〔四七〕不淨種姓の補特伽羅を名づけて物類と爲す、當に知るべし此の類唯だ内法に住するのみなりと。又諸の聖者の變化神通は其の四事に於いて變化すること能はず、一には根、二には心、三には心所有の法、四には業及び業異熟なり。又諸の聖者の性を變ずる神通は、樂受に順ずる業を轉變して自性をして改めて苦受に順ずる「もの」と成さしむること能はず、樂受に順ずる「もの」を苦受に順ずる「もの」に望むるが如く、苦受に順ずる業を樂受に順ずる「もの」に望むるも應に知るべし亦た爾なりと。若し業の能く〔四八〕非苦樂受に順ずる「もの」は當に知るべし畢竟して非苦樂に順ずと。又諸の聖者の住持する神通は非苦樂受に順ずる業を任持するを無受と成さしむること能はず、餘も亦た是の如し。又諸の聖者の時を變ずる神通は順現法受業を轉變して順後法受業を成ぜしめ、及び順後法受業を順現法受業と成さしむること能はず。

復た次に、嗢柁南に曰く、

〔四九〕安立と所行の境と、慧根を最勝と爲すなり、當に知るべし後のは安住と、外の異生品等な

〔四六〕神足を解す。
〔四七〕不淨種姓の補特伽羅とは旃荼羅（Caṇḍāla）種の人即ち屠殺業者あり。
〔四八〕非苦樂受とは捨受なり。
〔四九〕此は第九十七卷首總頌第四門、五根を解する別頌也。此の中更に四門を列し、長行に於て次第に解釋す。

り。』

略して六處の增上なる義に由るが故に當に知るべし二十二根を建立すと。何等をか六と爲すや。一には能く境界を取る增上なる義の故に、二には家族を繼嗣する增上なる義の故に、三には活命の因緣各別の事業加行の士用の增上なる義の故に、四には先世の諸業の作す所の愛不愛の果を受用し及び新業を造る增上なる義の故に、五には世間に趣向する離欲の增上なる義の故に、六には出世に趣向する離欲の增上なる義の故なり。當に知るべし此の中眼根は最初にして、意根を後と爲す是の如き（五〇）六根は境界を取るに於いて增上なる義にあり。男女の二根は能く家族子孫を繼嗣するに於て增上なる義あり。命根の一種は命を愛する者の活命の因緣各別の事業加行の士用に於いて增上なる義あり。業を最も初と爲し、捨を其の後と爲す、是の如き（五一）五根は其の先業の作る所の愛不愛の果を受用し、及び新業を造るに於て增上なる義あり。信を最初と爲し、慧を其の後と爲す、是の如き（五二）五根は能く世間に趣向する離欲に於て增上なる義あり。未知、當知、已知具知の三無漏根は能く出世に趣向する離欲最極究竟に於いて增上なる義あり。一切世間の「ものの」現見する所の義は其れ唯だ此の量のみなり。當に知るべし是の義の能く究覺する者は此の二十二根を出づること無し、故に一切の根は二十二の攝なり。

【五〇】六根。眼耳鼻舌身意の六根。

【五一】五根。業、喜、苦、憂、捨の五根。

【五二】五根。信、精進、念、定、慧の五根。

(五三)復た次に、或は一類あり、是の思惟を作さく、若し内我の六根門に託して六境界を(五四)行ずること無くんば。是の如き六根各別の所行、各別の境界たるや。然も此の六根のみ唯だ能く自の所行の境を領受す、誰か能く是の如き六根所行の境性を領受せんやと。當に知るべし、此れ緣起の道理を了達すること能はざるに由るが故に諸行に於いて邪なる分別を起すと。緣起の理とは、謂く若しある時瑜伽を修する師にして内の六根に於いて如理に攀緣し、精勤して加行し、四念住を修し、即ち爾の時に於いて此の四念住〔觀〕にて六根の所行の境性を領受す、即ち此れ彼に於いて清淨なるに由るが故に名づけて出離と爲す。又即ち四念住〔觀〕を勤修するが故に初めて諦理に達し七覺支を得、即ち爾の時に於いて此の諸の覺支眞なるが故に、實なるが故に〔四〕念住の所行の境性を領受す。又覺支を修習する因緣に由りて(五五)明脫を起し、即ち爾の時に於いて是の如く明脫し、覺支を領受し已つて善く修習し。此れより已後復た應に所行の境性を修すべからず。如實に已に一切の煩惱を斷じ、即ち爾の時に於いて諸の煩惱斷滅せる涅槃に於いて增上慢を離る。即ち增上慢を遠離するに由るが故に此れ現に實に究竟の明脫あり。如實に領受し已つて明脫の所行の境性を得、此に由りて一切の所有有爲の法を出離するが故に當に知るべし明脫も亦た出離を得と。涅槃の中に於いて能取所取の二種の施設皆な所有無く、一切の戲論永へに滅離するが故に是の故に乃至諸の有爲法の展轉して問答し施

【五三】所行の境を解す。
【五四】行ずとは緣ずと同じ。
【五五】明脫。明とは無漏の慧・慧と相應して解脫するを明脫と云ふ。

設することを得可き能取所取の言論の差別、究竟涅槃の無爲法の中の一切の問答言論の差別皆な如理ならず。是の故に當に知るべし無我の中に於いては應に正に唯だ雜染あるのみ、唯だ清淨あるのみなりと顯示すべしと。

〔五六〕復た次に、若し黠慧にして諸根猛利なる種類の士夫補特伽羅あり、思擇力に由りて如理に作意し、諸法を思惟し、乃ち涅槃に於いて正しき信解を得。此に由りて增上し勤めて精進することを發す。此の增上の故に能く〔五七〕身等の所縁の境界に於いて正念に安住す。此の增上の故に能く所縁に於いて心をして一趣ならしむ。此の增上の故に一切の法に於いて如實に了知し、如實に觀見し、是の因縁に由りて能く究竟に到る。是の故に此の慧は若くは初にも若くは後にも多く所作あるが故に慧根を最も殊勝なりと爲すと說く。

〔五八〕復た次に、若し諸佛の無上菩提に依りて得る所の〔五九〕正信乃至正慧〔及び〕此の〔六〇〕世間〔の信等〕に於いても亦たあること無き者は、當に知るべし此れ〔六一〕外の異生品に住すと。卽ち此の法に於いて唯だ世間〔の信等〕のみあるも、〔六二〕出世〔の信等〕無き者は、當に知るべし此れ〔六三〕內の異生品に住すと、外の異生には非ず。若し此の法に於いて出

【五六】慧根乃至安住を解す。
【五七】身等とは身受心法の四念住なり。
【五八】外の異生品等を解す。
【五九】正信、正精進、正念、正定、正慧。
【六〇】世間の信等とは有漏の信等なり。
【六一】外の異生品とは外凡の位なり、異生とは凡夫と同じ。
【六二】出世の信等とは無漏の信等なり。
【六三】內の異生とは內凡の位なり。

世〔の信等〕あるは、當に知るべし、(六四)一切の別住ありと、餘品は彼の品類に非ず。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(六五)『思擇と覺慧等と、國等及び諸王と、阿羅漢と有學とにして、質直を最も後と爲す。』

(六六)略して一切の現法後法の諸の惡行の中に於いて深く過を見已つて能く正に思擇して諸の惡行を息め、諸の善行を修するを思擇力と名づく。當に知るべし此の力能く二事を成ずと、一には能く人天の善趣に往く、二には能く現法涅槃に往く。又此れ能く修習力の與に攝せられ、諸の念住を修めて所依止と爲す、此れを〔所〕依と爲るに由りて能く正に四念住等の菩提分法を修習す、當に知るべし此の修を修習力と名づくと。又思擇力能く三處の羞恥の與に伴と爲る。何等をか名づけて三處の羞恥と爲すや。一には他處の羞恥、謂く是の思を作さく、若し我れ惡を作さば當に世間の他心智ある諸佛世尊若くは聖弟子若くは諸天衆にして佛教を信ずる者の爲めに共に呵毀せらるべしと、是れを第一處の思擇力と名づく。二には自處の羞恥、謂く是の思を作さく、若し我れ惡を作さば定んで當に己の爲めに深く呵毀せらるべし、何ぞ善人ありて斯の惡行を爲さんやと、是れを第二處の增上力と名づく。三には法處と羞恥、謂く是の思を作さく、我れ若し惡を作さば便ち障礙を爲すなり、善說の法毗柰耶の中にて修する所の梵行に於いて此の法若し

【六四】一切の別住とは聖位の人なり。

【六五】此は第九十七卷首總頌第五門、五力を解する別頌なり。此の中更に六門を列し長行に於て次第に解釋す。

【六六】思擇を解す。

あらば便ち梵行を壞せんと、是れを第三處の思擇力と名づく。是の如く羞恥するは當に知るべし三處を以て增上〔緣〕と爲すと、一には世增上、二には自增上、三には法增上なり。

(六七)復た次に、自利の行及び利他の行を增上〔緣〕と爲すに由るが故に當に知るべし四種の力ありと建立すと、一には覺慧力、二には精進力、三には無罪力、四には攝受力なり。能く現法涅槃に往くを名づけて(六八)自義と爲し、能く人天の善趣に往くを亦た自義と名づく。當に知るべし此の中(六九)第一の自義に依りて覺慧精進の二力を建立し、是の二力に由りて能く方便ありて正勤を發起すと。

(七〇)第二の自義に依りて無罪力を立て、此の三力に由りて一切の自義皆な究竟することを得。利他を樂ふ者は(七一)他義なり、有餘の(七二)此の增上に由りて攝受力を立つ。當に知るべし「四」攝事は(七三)菩薩地に已に其の相を辯ぜるが如しと。

(七四)復た次に、國及び王、若くは男若くは女、若くは夫若くは妻、若くは愚若くは智、若くは居家に處する〔もの〕若くは出家衆に當に知るべし(七五)十種の力ありと建立すと。謂く諸の國王には自在力あり、是の如き等の力は廣く說くこと經の如し。

【六七】覺慧等を解す。
【六八】自義とは自利と同じ。
【六九】第一の自義とは現法涅槃に往くを云ふ。
【七〇】第二の自義とは能く人天の善趣に往くを云ふ。
【七一】他義とは利他と同じ。
【七二】此の增上とは他義の增上のこと。
【七三】第四十三卷攝事品。
【七四】國等及び諸王を解す。
【七五】十種の力。國、王、乃至出家衆の十種に各一自在力あり、故に十種の力となる。

（七六）復た次に、諸の阿羅漢は此の人力を成じ、如實に領受して貪瞋癡等永へに盡きて餘す無し。諸惡を造らざるが故に復た諸善〔ある〕なり、謂く心遠離出離の般涅槃に趣向するが故に後有を厭背し、因緣を厭背して惡業を造らず。又諸欲を見ること猶ほし一分の熱炭火の如くなるが故に業究まる諸欲を厭背する因緣もて惡業を造らず。此の二力に由りて諸惡を造らず、惡を造らざるが故に復た六門に由りて諸善を修習す、謂く〔四〕念住、〔四〕正斷、〔四〕神足、〔五〕根、〔五〕力、〔七〕覺支、〔八〕道支なり。

（七七）復た次に、諸佛如來は自利の行及び利他の行に依りて己れと諸の弟子と差別あることを顯はさんと欲するが爲めの故に是の如き言を說きたまへり、「諸の有學の者は（七八）五力を成就し、唯だ如來のみ有して（七九）十力を成就したまふ」と。若し有學の五力を成就し自利行を行ずることある諸の聖弟子は最上阿羅漢果を獲得し、此れより無間に一切の自義皆な究竟するとを得。如來は阿羅漢〔果〕を獲得し已つて十力を成就し、利他の行を行じ、即ち利他を用て以て自義と爲す。設し是の時に於いて一切の化する所の其の事究竟すれば無餘依般涅槃界に入る、當に知るべし爾の時所作の事に於いて方に圓滿することを得と。〔所作の事とは〕若くは修行する所の阿羅漢の行、若くは利他の爲にする即ち自義の行なり。此の二の因緣もて（八〇）諸の弟子に於いて皆な殊勝なりと爲す。如來の十力は（八一）菩

【七六】阿羅漢を解す。
【七七】有學を解す。
【七八】第一百卷に出づ。
【七九】第四十九卷に廣說す。
【八〇】諸の弟子よりも。
【八一】第四十九卷。

薩地に已に廣く分別せるが如し。

〔八二〕復た次に。若し自ら無諂無誑を愛し、其の性質直なる補特伽羅あり、自義を證せんが爲めに四種の相あり、若し惡說の法毗柰耶に依れば便ち稽留あり、善說の法毗柰耶に依れば乃ち稽留無し。云何んが四相なる。一には正法教を說く、二には教授教誡す、三には如理に通達す、四には眞實の證を得るなり。聞く所の正法は是れ諸の勝解の所依止の處なり、能く無因惡因を遠離するに由りて理に稱ふ正因の義を開示するが故に、諸有顚倒なる教授教誡善く能く斷の加行の教の文義に攝むる所の無顚倒の法に隨順すれば能く前の如き勝解の所依處の法を證得せしむ。若し自愛する諸の善男子あり、已に調ひ相續し堪能する所ありて內法毗柰耶の中に來入し、正しく宣說することを得、正しく開悟することを得、便ち能く速疾に趣向し勝進し、如理に應に通達すべき所に通達し、亦た能く實に眞の應に證すべき所を證す。謂く四念住を以て依止と爲し。有爲の法に於いて諸の聰慧なる者共に許して有と爲し、或は許して無と爲ることを皆な正に了知し、無爲の法乃至有頂〔天〕の皆な是れ有上なるに於いては能く正に了知して是れを有上と爲し、涅槃の無上なるを如實に了知して是れを無上と爲す、是の如きを名づけて如理に通達すと爲す。又四念住を以て依止と爲し、靜定の心に由り、七覺支に於いて正に修習し已つて明解脫に於いて究竟して作證す、是の如きを名づけて眞實の證を得と爲す。若し彼の自愛する諸の善男子にして惡說の法毗柰耶に

【八二】質直を解す。

趣入するは是の四處に於いて皆な得ること能はざるが故に稽留と名づく。

復た次に、嗢柁南に曰く、

(八三)「立と差別と、食と漸次と、安樂と住とにして、修は後に居す。」

(八四)奢摩他毘鉢舍那の倶品の差別に由りて「七」覺支を建立することは(八五)聲聞地の如く應に其の相を知るべし。

(八六)復た次に、自性差別するが故に、及び所緣因緣の相差別するが故に應に知るべし七覺支の十四種差別す。所緣因緣の相を廣く分別する義は(八七)「三摩呬多地及び聲聞地の如し應に其の相を知るべし。

(八八)復た次に、能く覺支に隨順する法の中に於いて略して二種の無倒なる作意あり、當に知るべし總じて覺支の與に食と爲ると。何等をか二と爲す。一には正しき作意、二には數なる作意なり。此れと相違するは當に知るべし食に非ずと。

(八九)復た次に、初中後に於いて一支を闕くに隨つて如實なる覺をして圓滿することを得ざらしむ。其の色類の所依、能依、流轉、安立の如きは、其の生起するに隨つて漸次にして說く。當に知るべし此の中念「覺支」を所依と爲し、擇法「覺支」は能依なりと。餘は所應に隨つて、當に知るべし亦た爾な

【八三】此は第九十七卷首總頌の第六門、七覺支を解する別頌なり。此の中更に七門を列し、長行に於て次第に解釋す。
【八四】立を解す。
【八五】第二十九卷。
【八六】差別を解す。
【八七】第十一卷。
【八八】食を解す。
【八九】漸次を解す。

りと。

（九〇）復た次に、若し苾芻ありて諸の覺支に於いて方便修習し、四の因緣に由りて其をして安隱にして住することを得ざらしむ。何等をか四種の因緣と爲すや。一には一切の煩惱の品類の麤重をば皆な未だ離れざるが故に、二には奢摩他品の諸の隨煩惱現在前するが故に、三には毗鉢舍那品の諸の隨煩惱現在前するが故に、四には道未だ調善ならざるに而も乘駕するが故なり。此れと相違する四種の因緣は其をして安隱にして住することを獲得せしむ。（九一）此の二種に於いて善巧なる苾芻は如實に了達して正知にして住す。諸の作意に由りて加行あるが故に精進太だ過ぎたり、又前後に增減あるに由るが故に運轉すること等しからず。此の二緣に由りて當に知るべし名づけて道調善ならずと爲し、此れと相違する二の因緣の故に道調善なりと名づくと。轉輪王の四洲渚に於いて大自在を得て獲る所の（九二）七寶の如く、是の如く心王の四聖諦に於いて大自在を得て獲る所の眞淨なる七覺支寶も當に知るべし亦た爾なりと。謂く奢摩他毗鉢舍那の雙品運轉するに於いて、一切の煩惱を降伏し、怨に勝つ、此の義に由るが故に初の念覺支は猶ほし（九三）輪寶の如し。所知の境相は其の量無邊なり。能知の智體も亦隨って廣大なり、此の義に由るが故に擇法覺支は猶ほし象寶の如し。此に依りて速に能く乃至彼の所行の所に

【九〇】安樂を解す。
【九一】此の二種とは四種の因緣と、相違する四種の因緣との二なり。
【九二】七寶。次の本文に出づ。
【九三】輪寶とは七寶の第一なり、轉輪王は此輪寶を運轉して四洲を統治す、故に其名あり。

往き、殊異なる勝處を得、此の義に由るが故に精進覺支は猶ほし馬寶の如し。意を悦ばし[めて]罪無きを最も殊勝なりと爲す、此の義に由るが故に其の喜覺支は猶ほし女寶の如し。身心暎徹にして堪能する所あり、此の義に由るが故に輕安覺支は神珠寶の如し。能く一切の欣求する所の事を辦ず、此の義に由るが故に其の定覺支は藏臣寶の如し。能く一切の染汙の法軍を推き、能く一切の清淨の法軍を率ゐて能く無相安隱の住處に趣く、此の義に由るが故に其の捨覺支は軍將寶の如し。

(九四)復た次に、諸の修行者七覺支を得ることは譬へば大王の妙衣篋ありて三時に受用し、三分に安住するが如し。彼の七覺支も當に知るべし亦た爾なりと。三時と云ふは、謂く初日分時と中日分時と後日分時なり。三分と言ふは、謂く奢摩他品と毘鉢舍那品及び其の倶品なり。初分の中に於いては(九五)四覺支に住し、第二分の中には(九六)四覺支に住し、第三分の中には具足して七種覺支に安住す。諸の修行者未だ曾て唯だ(九七)一覺支又七覺支に安住せざるを、諸の外道に於いて怨憎無きが故に、違競無きが故に、恆に利益する意樂を懷いて轉ずるが故に、一切の煩惱をば皆な離繫するが故に說いて怨無く敵無く害無く災あること無しと名づく。若くは修行者七覺分に於いて時に隨つて現前し、量に隨つて現前するを說いて名づけて住と爲し、若し時に退出するを說いて名づけて滅と爲す。是の一切に於いて如實に了知す、彼れ是の如く正知にして住するに由るが故に罪

【九四】住を解す。
【九五】四覺支とは定、輕安、捨、念の四覺支なり。
【九六】四覺支は擇法、精進、喜、念の四覺支なり。
【九七】一覺支は念覺支なり。

無き住と名づく、愛味あること無く、心に味染を離る。

（九八）復た次に、（九九）二十一種の想と倶行して諸の覺支を修する者は、當に知るべし略して二の因縁に由るが故なり、一には相應し倶行する義に據り、二には無間に倶行する義に據るなりと。無常等の想と倶行して修し、乃至死想と倶行して修するは相應する義に據り、不淨等の想と倶行して修し、乃至觀空の想と倶行して修するは無間の義に據る、慈等と倶行して修するも應に知るべし亦た爾なりと。（一〇〇）又過去未來現在の一切の行の中に於ける諸行の愛染若くは懶惰懈怠若くは薩迦耶見已に斷滅すと雖も習氣隨縛して我慢の現行し、若くは味を貪る愛若くは世間の種種なる妙事に於ける欲樂貪愛若くは所餘の煩惱隨眠あり、若くは利養を希求し、若くは活命を希求し、若くは諸の欲愛、若くは諸の有愛、若くは虚妄ある分別に隨つて起す所の四種の欲貪、一には美色貪、二には形貌貪、三には細觸貪、四には承事貪、是の如きは能く所有非理なる過患を生起せしめ、及び其の心をして越路して轉せしむ。彼れを對治するが故に其の所應に隨つて二十一想と倶行して覺支を修する差別あり。謂く（一〇一）四種の障を對治せんが爲めの故に

【九八】修を解す。

【九九】二十一種の想。一無常想、二苦想、三無我想、四空想、五不淨想、六食を厭離する想、七世間は樂しむべからざる想、八死想、九斷想、十離想、十一滅想、是れに死尸青瘀乃至觀空の九想と過患の想とを加へて二十一想とす。

【一〇〇】以下二十一想所治の十四行を列擧す。九想は本文下に出づ。

【一〇一】四種の障云云。無常想は三世の諸行の愛染を治し、苦想は懶怠を治し、不淨想食を厭離する想は味を貪る愛を治し、一切世間は樂しむべからざる想は世間の種種なる妙事に於ける貪愛を治す。

〔一〇二〕無願行想と無常想より乃至一切世間は樂むべからざる想とを修し、〔一〇三〕一種の障を對治せんと欲するが爲めの故に空行想と苦無我想とを修し、所餘の煩惱隨眠の障を斷滅せんと欲するが爲めの故に〔一〇四〕三界に於ける無相行想を修し、利養を希求すると及び欲愛とを對治せんと欲するが爲めの故に諸欲の中に於いて過患の想を修し、活命を希求すると及び有愛とを對治せんと欲するが爲めの故に死想を修習し、虛妄なる分別に隨逐して起る所の四欲貪を對治せんと欲するが爲めの故に、不淨想を修するを初めと爲し、乃至觀空の想を後と爲す。又此の一切青瘀の想より乃至觀空想は當に知るべし皆な是れ不淨想の攝なりと。又此の中に於いて青瘀の想を初と爲し、降脹想を後と爲して美色貪を對治し、食噉想と分赤想と分散想とは形貌貪を對治し、骸骨想と骨鎖想とは細觸貪を對治し、無心識空を觀ずる有尸想は承事貪を對治す。又此の中に於いて慈を修し、最極にして徧淨[天]に至る等は三摩呬多地の如く應に其の相を知るべし。

復た次に、嗢柁南に曰く、

〔一〇五〕『初めは內外の力と、淸淨の差別と、異門と沙門とにして、後は婆羅門なり。』

若くは內若くは外の一切の力の中に八支聖道を生起せんと欲するが爲めに二種の力あり、所餘の力

【一〇二】無願行想は無常想乃至世間は樂しむべからざる想の五想の總稱なり。

【一〇三】一種の障とは十四行の中の第三薩迦耶見已に斷滅すと雖も習氣隨縛して我慢現行する障なり。

【一〇四】三界とは斷、無欲(離)、滅なり、此の三想を總稱して無相行想とす。

【一〇五】此は第九十七卷首の總頌の第七門、八正道支を解する別頌也。此の中更に四門を列し長行に於て次第に解釋す。

に於いて最も殊勝なりと爲す。云何なるを二と爲すや。一には外力の中に於いては善知識の力を最も殊勝なりと爲す、二には內力の中に於いては正しき思惟の力を最も殊勝なりと爲す。當に知るべし此の中 諸の障礙を離れ、先づ福業を修して衣食等に於いて匱乏無き等を除の外力と名づけ、正しき思惟に相應する想を除ける外の餘の斷の支分を餘の內力と名づくと。外の善知識とは、謂く彼に從つて無上なる正法を聞くなり、此れに由るが故に、他に從つて音を聞くと名づく。內の正しき思惟とは、謂く此の無間に能く正見を發すを上首の道と爲す。

〔一〇六〕復た次に、彼の正見等の若し有學「位」に在るは無漏に由るが故に說いて清淨と名づけ、若し無學「位」に在るは相續して淨きが故に說いて鮮白と名づけ、若し世間に在るは無量の外道の見に隨ふ諸の惡邪行を遠離す。是の故に說いて塵黷あること無しと名づけ、塵黷より起る所の後有の諸の業雜染を遠離す、是の故に說いて隨煩惱を離ると名づく。略して一切の八聖道支を說かば二處の所攝なり、一には世間、二には出世間なり。其の世間は、〔一〇七〕三漏 〔一〇八〕四取の隨縛する所なるが故に苦を盡すこと能はざるも、是れ善性なるが故に能く善趣に往く。出世間は、彼れと相違して能く衆苦を盡くす。又正見等の八聖道支は廣く義を分別すること〔一〇九〕聲聞地及び攝異門分の如く應に其の相

【一〇六】清淨の差別を解す。
【一〇七】三漏。前卷脚註に出づ。
【一〇八】四取とは(一)欲取、五塵を貪欲取著す、(二)見取、我見邊見等を妄計取著す、(三)戒取、非理なる禁戒を取著修行す、(四)我語取、我見等より生ずる說を取著す。
【一〇九】第二十九卷。

を知るべし。〔二〇〕七種の定具は三摩呬多地に已に說けるが如し。

〔二一〕復た次に、正見を首と爲る八聖道支は正理に會するが故に說いて名づけて法と爲す。能く一切の諸の煩惱を滅するが故に毗奈耶と名づく。諸の惡法を去ること極めて懸に遠し、故に一切の聖賢共に祖とし習ふが故に說いて名づけて聖と爲す。能く〔是れに〕隨順すれば諸の善趣に往くが故に說いて名づけて善趣と爲す。涅槃の故に說いて應に修すべしと名づく。諸有る智者の稱讚する所なるが故に說いて善哉と名づく。此れと相違すれば應に知るべし卽ち是れ邪見を首と爲す八邪道支なりと。所有差別は無明黑闇品に墮在す、故に名づけて黑と爲す。惡趣に往くが故に說いて無義と名づく。不善の性なるが故に說いて下劣と名づく。現法の中の所有怖畏及び怨憎を生ずるが故に說いて有罪と名づく。諸有る智者の譏毀する所なるが故に、遠離する所なるが故に應に遠離すべしと名づく。

〔二二〕復た次に、第一義に依る所有の沙門是の如き八支聖道を安立するを沙門の義と爲す、此の義の爲めの故に善說の法毗奈耶の中に於いて假名の出家にして沙門の性を受く、又此れ畢竟して失壞すること無きが故に第一義と名づく、其の假名の者は卽ち是の如くならず。諸有る此の第一義の沙門の性を成就する者を當に知るべし亦た勝義の沙門と名づくと。又彼れは此の沙門果の貪瞋癡等畢竟して斷

【二〇】七種の定具。倫記中有釋に云く、八正道支の中正定を除ける餘の七道支なりと。麗本には「七種の定因具には」とあり。

【二一】異門を解す。異門とは八聖道支の諸名の差別なり。

【二二】沙門婆羅門を解す。

せる義を追求す、是の故に彼を說いて沙門の義と名づく。此の沙門の義に復た二種あり、一には無差別總相にして建立し、二には所作あるなり。若し所作無きには行向住果の差別を建立す。是の如き一切に總じて四種あり、一には（二一三）沙門性、二には（二一四）是沙門、三には（二一五）沙門義、四には（二一六）沙門果なり。其の婆羅門の差別の道理も當に知るべし亦た爾なりと。

復た次に、嗢柁南に曰く、

（二一七）『障隨惑尋等と、果と欲と細と身勞と、學住と及び作意とにして、
智無執を後と爲す。』

（二一八）入出息念を修習する差別に十六行あり、廣く義を分別すること（二一九）聲聞地の如く應に其の相を知るべし。又勤めて修行する諸の瑜伽師は是の如き入出息念を修習し、爾の時應に五の障礙の法を知るべし、一には其の外緣に於いて其の心散亂し、二には入出の息に轉た艱難する所あり、三には棹擧惡作の纒現在前す、四には惛沈睡眠の纒現在前す、五には樂つて道俗と共に相雜住す。是の如き五法は未だ定を得ざるに心定を求めんと欲し、及び定を得已つて倍復た增長せんとするに於いて當に知るべし一切能く障礙を爲すと。奢摩他品の

【二一三】善說の法毘柰耶の中に於いて假名の出家にして沙門の性を受くる者。

【二一四】沙門の體たる八正道。

【二一五】能く諸惡を止息する義、又沙門果の貪瞋癡等畢竟斷する義なり。

【二一六】智斷二果。

【二一七】此は第九十七卷首の總頌第八門、息念を解する別頌なり。此の中更に八門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【二一八】障隨惑尋等を解す。文の中入出息念とは入出の息を數ふる數息觀のこと。

【二一九】第七十七卷。

諸の隨煩惱に染汚せらるる時身の惛沈を發し、心の下劣を生ず。正しく入出息念を修習するに由りて身心輕安にして能く惛沈下劣の俱行する身心の麤重をして皆な悉く遠離せしむ。毘鉢舍那品の諸の隨煩惱に染汚せらるる時種種なる尋伺妄想を發生す、謂く欲尋伺等の不正なる尋伺及び無明分の尋伺より起る所の諸の欲想等の種種なる妄想なり。正しく入出息念を修習するに由りて、尋伺等をして悉く皆な靜息せしめ、彼の無明分の諸の妄想を對治せんと欲するが爲めの故に純ら明分の想を修して速に圓滿することを得せしむ。

（二〇）復た次に、入出息念を正に勤めて修習する諸の瑜伽師は過去の諸行を緣ずる尋伺の能く無間に生ずる所の等持をして間缺あらしむる者に於いて速に損減することを得、現在の諸行を緣ずる尋伺の能く無間に生ずる所の等持をして間缺あらしむる者に於いて速に寂靜を得。又若し略して說かば能く六種の結を永へに斷ずるに由るが故に當に知るべし二種四種及以び七種の諸果の勝利を建立すと、經に廣く說くが如し。云何が六結なりや。謂く（二一）下分（二二）上分に順ずる二結と、見道修道の所斷の二結と、若くは（二三）起、若くは（二四）生の二分の位の結なり。是の如き別別を當に知るべし總じて六種の結ありと說くと。其の次第の如く（二五）二種四種七種の諸果

【二〇】果を解す。
【二一】下分に順ずる結とは五下分結なり。
【二二】上分に順ずる結とは五上分結なり。
【二三】起とは中有なり。
【二四】生とは生有なり。
【二五】二種。五下分結を斷ずるに由つて不還果を、五上分結を斷ずるに由つて阿羅漢果を立つ。四種、見道所斷の結を斷ずるに由つて四果の中の初果を立て、修道所斷の結を斷ずるに由つて後の三果を立つ。七種、中有の結を斷ずるに由つて下中上の三那含を、生有

の勝利を建立す。

（二六）復た次に、入出息を修習する差別に略して二種あり、一には有上、二には無上なり。其の有上とは、謂く一あるが如き獨り空閑に處し、靜定心を以て如理に命根は入息出息に繫屬すと觀察すらく若し我れ入息の後に於いて出息あること無く、或は出息の後入息無くんば是の如き命根は卽ち應に斷滅すべし。而も無常の行の中に於て希奇の事ありて入息滅し已つて我が命根住し、乃ち復た出息生ずる時に至ることを得、出息滅し已つて我が命根住し、乃ち復た入息生ずる時に至ることを得と。彼れ是の如き事を攀緣するに由るが故に深心に三世の境に於いて發す所の愛恚を厭離し、淨く其の心を修む。是れを有上の十六行修と名づく、當に無上を知るべし。

（二七）復た次に、是の如く入息出息念に住し、細風色を緣じて境界と爲すが故に微細住と名づけ、一切の亂尋伺を隔絶するが故に流散せずと名づけ、廣大なる身心の所有の妙輕安を發生するが故に伏すべからずと名づく。

（二八）復た次に、是の如き入出息念を修習し、身をして勞無く善く能く奢摩他品の隨煩惱を除遣せしむるが故に、眼をして勞無く善く能く毘鉢舍那品の隨煩惱を除遣せしむるが故に、隨つて涅槃の樂を觀察するに由るが故に隨つて樂を觀すと名づけ、隨つて第三靜慮地の中の樂を領受するに由るが故に

の結を斷ずるに由つて生、有行、無行、上流の四那含が立つ。

【二六】欲を解す。

【二七】細を解す。

【二八】身勞を解す。

樂を領受すと名づけ、無染にして住するが故に、恐畏無きが故に安樂にして住すと名づく。

（二二九）復た次に、是の處あるべし、或は一人あり、是の如き念を作さく、如來と彼の最も極めて下劣なる慧解脱を得たる阿羅漢果と差別あること無しと。謂く解脱に依りて是の思惟を作さく、如來の解脱と慧解脱の阿羅漢果の所有の解脱と差別あること無しと。頗し復た人ありて是の如き念を作さく、如來の所有の諸蓋を離れて住すると、内法の中に居る最も極めて下劣なる若くは諸の有學、若くは諸の異生とを精進力と曰ひ、其の五蓋に於いて伏斷して住するを蓋を離れて住すと名づけ、此の蓋を離れて住すると彼の蓋を離れて住するとは、解脱の如く差別あると無しと爲んや、差別ありと爲んやと。應に知るべし是の如き二の蓋を離れたる住に極めて大なる差別あり、謂く諸の有學は現行の故に蓋を離れて住する心と如來と等しと雖も、然も彼れの隨眠未だ永へに斷せざるが故に、諸蓋數數心に間つて相續し、數數作意し力を勵して除遣す。如來の諸蓋は畢竟して斷ずるが故に、諸蓋を離れて住すると彼れの所有の諸蓋を離れて住すると極めて大なる差別あり、解脱の差別あること無きが如くには非ず。

【二二九】學住を解す。
【二三〇】作意を解す。

（二三〇）復た次に、瑜伽を修する師は入出息念を所依止と爲して四念住を修し、如理なる作意を以て依止と爲し、諸の未だ斷せざる内心の所有非理なる作意に於いて如實に了知して是れを非理なりと爲し、内の所有如理なる作意に於いては如實に了知し、是れを如理なりと爲し、既に了知し已つて内の

所有非理なる作意に於いては一向に遠離し、內の所有如理なる作意に於いては一向に修習す、彼をして永へに斷滅せしめんと欲するが爲めの故なり。又此の中の（二三一）身等の四法の四大路の如くなるに於ける非理なる作意は塵土丘の如し、堅牢ならざるが故に、眞實ならざるが故に、心を迷亂するが故なり、如理なる作意は四方より來る輿乘車と車緣との如し。［輿乘車と車緣との如き如理なる作意は］身等の四の境界門に轉じて能く彼の塵土丘の如き非理なる作意を損害して亦た一切をして相續して淸淨ならしむ。

（二三二）復た次に、諸の息念を精勤し修習する者は正しく四種の念住を修習するに由りて我等無きが故に平等平等なり。是の身の種類に能く身に於ける如理なる作意を取る、身の如く無我の作意も亦た爾なり、是の故に（二三三）彼を說いて（二三四）身の一分と爲す、能く是の如き身念住を修する者は（二三五）都べて得可らず、身念住の如く廣く說かば、乃至法念住を修するも當に知るべし亦た爾なりと。是の如きは諸佛の念住を修する敎なり、外道の法の中には皆な所有無し。是の故に此の念住を修する敎を說いて、一切の外道の執する所に非ずと名づく。

復た次に、嗢柁南に曰く、

【二三一】身等の四法とは身受心法の四なり。
【二三二】智無執を解す。
【二三三】彼とは無我の作意なり。
【二三四】身を觀する作意も身の一分なるが如く無我の作意も身の一分にして身以外にあるに非ず。
【二三五】神我等ありて身念住を修するにあらず、神我等都て得べからざるなり。

(二三六)「初めは尸羅を尊重すると、淸淨戒の圓滿と、現行と學の勝利とにして、學の差別を後と爲す。』

(二三七)學に三種あり、謂く增上戒學、增上心學、增上慧學なり。是の如き三學の差別を建立すること聲聞地の如く應に其の相を知るべし、又略して此の諸の所學の中に於いて所有邪行をば應に正しく了知すべく、所有正行をば應に正しく了知すべし。邪行と言ふは、謂く一あるが如き戒を尊重せず、汎爾に出家し、復た出家すと雖も淨戒を以て其の增上を爲さず、淨戒に於けるが如く定に於いても慧に於いても應に知るべし亦た爾なりと。彼れ(二三八)無餘罪を犯すことあるべし、彼れに於いて世尊說きたまはく、「其は(二三九)諸の沙門果證に於いて能無き者と爲らん」と。是の故に當に知るべし彼れは三學に於いて一向に毀犯するなり。正行と言ふは三正行あり、謂く下中上なり。下の正行とは、謂く一あるが如き淨戒を尊重し、亦た淨戒を以て其の增上と爲すこと前と相違するも、定に於いて慧に於いては尊重を生ぜず、增上を爲さず、此は無餘罪を犯すことあるべからざるも、而も小隨小罪を犯すことあるべし、此に於いては如來は、其は沙門の果證に於いて能無き者と爲らんと說きたまはず。中の正行とは、謂く戒定に於いて皆な悉く尊重し、亦た增上を爲

【二三六】此は第九十七卷首總頌第九門學を解する別頌なり。此の中更に五門を列し、長行に於て次第に解釋す。

【二三七】尸羅を尊重することを解す。尸羅(Śīla)は戒と譯す。

【二三八】無餘罪は波羅夷(Pārājika)罪の譯名。戒律中の重罪にして此れを犯せば僧侶の分限を失ひ永へに衆より棄てらる。

【二三九】諸の沙門果證とは預流一來等の四果なり。

すなり。戒を尊重するが如く毀犯する次第も此の中亦た爾なり、是の故に當に知るべし乃至所有諸の異生位なりと。上の正行とは、謂く已に諦〔理〕を見、三種の學に於いて皆な悉く尊重し、此れ已に沙門の果證を獲得し、有能無能を思擇するを待たず。〔一四〇〕是の如き二行を開いて四種と爲す、即ち此の四種を合して二行と爲す、此の二と四と平等平等なり。當に知るべし此の中若し定學あれば必ず戒學あり、若し慧學あれば必ず定學あるも、戒學ある者は必定して定學慧學あるにあらずと。若し瑜伽師諸學を尊重すれば當に知るべし是れを所作の圓滿と名づけ、其の餘は但だ所作の一分と名づくと。

〔一四一〕復た次に、〔一四二〕性罪の處に於いて能く遠離するが故に當に知るべし是れを淨戒の圓滿と名づくと。能く〔一四三〕諸の根門を密護する等淨戒を攝受する所有の善法に於いて無間に受持し相續して轉するが故に、當に知るべし是れを善法の圓滿と名づくと。〔一四四〕遮罪の處に於いて能く遠離するが故に當に知るべし是れを別解脱の圓滿と名づくと。又聖所愛戒に依り、若くは蘊等の五種の善巧に依り、及び別解脱律儀に依り世俗所有の禁戒を受持するは

【一四〇】是の如き二行とは有能の行と無能の行との二行なり前者は正行にして開いて上中下の三種とし、後者は邪行の人にして一種となし、合して四種とす。

【一四一】清淨戒の圓滿を解す。

【一四二】性罪とは自性として罪惡にして、佛の禁制すると否とに拘らざる根本的なる罪惡、殺生、偸盗、邪婬の如きを云ふ。

【一四三】諸の根門とは六根門なり。

【一四四】遮罪とは其事自性罪惡にあらざれどもそれに依つて他の罪を惹起するに至るが故に佛これを禁制遮止せられたるを云ふ。

(二四五)其の次第に隨つて應に知るべし淨戒の圓滿等の第二〔義〕門の差別なりと。

(二四六)復た次に、淨尸羅に依りて略して二種の所學の差別あり、一には(二四七)非止所攝所受の尸羅の所有如法なる身語の現行に攝むる所の學處を受持す、二には(二四八)是止所攝所受の尸羅に攝むる所の學處を受持す。(二四九)此に復二種あり、謂く或は(二五〇)是れ毘奈耶の所說にして別解脫の所說に非ざるあり、或は(二五一)是れ毘奈耶の所說にして亦是れ別解脫の所說なるあり。是の故に一切を總略して、學處ありと言ふ、一には(二五二)增上なる現行、二には(二五三)增上なる毘奈耶、三はは(二五四)增上なる別解脫なり。

(二五五)復た次に、學の勝利は慧に住するを上首と爲し、解脫堅固の念を增上と爲す。三學を修習すれば速に圓滿する等は(二五六)攝釋分に廣く辯せるが如し應に知るべし。

(二五七)復た次に、具戒に住する等は聲聞地の如し應に知るべし已に辯せりと。又卽ち淨戒は一切の犯

【二四五】聖所愛戒に依るを淨戒の圓滿、蘊等の善巧に依るを善法の圓滿、別解脫律儀に依るを別解脫の圓滿と名づく。

【二四六】現行を解す。

【二四七】是れ作持戒（積極的に作すべき戒）、又曰く別解脫戒なり。

【二四八】是れ止持戒（消極的に作すべからざる戒）、又曰く定共戒なり。

【二四九】此とは前二種の中の後者なり。

【二五〇】曇無德部の四分律、摩訶僧祇部の婆麤富羅律、彌沙塞部の五分律、薩婆多部の十誦律、迦葉維部の律、此の五部の廣律にして一卷の別解脫戒本の所說に非ざるなり。

【二五一】五部の廣律に一卷の別解脫戒本を合成せるもの。

【二五二】增上なる現行とは作持戒なり。

【二五三】增上なる毘奈耶とは五部の廣律なり。

【二五四】增上なる別解脫とは一卷の別解脫戒本なり。

【二五五】學の勝利を解す。

【二五六】第八十一卷。

【二五七】學の差別を解す。

戒の惡を對治するが故に、根門を密護する所依處なるが故に説いて律儀と名づけ、初め善く受くるが故に説いて圓滿と名づけ、後善く守るが故に説いて淸淨と名づけ、愛果を感ずるが故に説いて善と名づけ、染汚無きが故に説いて無罪と名づけ、諸の有情に於いて能く善く隨順する慈心の定なるが故に説いて無害と名づけ、沙門の性に於いて善く隨順するが故に説いて隨順すと名づけ、聖の愛する所の澄淸の性に趣くが故に澄淸に順ずと名づけ、終に戒禁取「見」に隨順せざるが故に隨順せずと名づけ、同法の者と同分と爲るが故に同色類と名づけ、正しき修習に於いて增上心慧を所依處と爲し隨順し轉ずるが故に名づけて頓轉と爲す、他を惱まさず饒益し轉ずるが故なり。又正に自苦行を遠離するが故に熱惱無しと名づけ、受持する所に於いて變悔無きが故に燒惱無しと名づけ、諸の毀犯に於いて現行せざるが故に、如法に己が所犯を悔除するが故に悔惱無しと名づく。是の如きを名づけて增上戒學の所有差別と爲す。〔一五八〕三住を「所」依と爲して當に增上心學と慧學との所有差別を知るべし、謂く天住梵住の差別に由りて應に增上心學の差別を知るべく、諸の所有〔一五九〕覺分等の法の聖住の差別に由りて應に增上慧學の差別を知るべし。謂く四靜慮四無色等を名づけて天住と爲し、〔一六〇〕四無量定を名づけて梵住と爲し。四聖諦智四種念住乃至「八正」道支四種の行迹、勝れたる奢摩他毗鉢舍那四法迹等をば當に知るべし一切皆な聖住と名づくと。又四種の若くは行にまれ若くは住にまれ雜染

【一五八】三住とは聖住、天住、梵住なり。
【一五九】覺分とは七覺支なり。
【一六〇】四無量定とは慈悲喜捨の四無量定なり。

無き法あり、修觀の者をして或は境界に於て退出し遊行し、或は所緣に於いて心を靜定に安んじ、諸の雜染を離れ安穩にして住せしむ。云何なるを四と爲すや。一には喜受に隨順する境界に於ける諸の雜染と喜の染心とを棄捨し、二には憂受に隨順する境界に於ける諸の染汙と憂の染心とを棄捨し、三には毘鉢舍那品の諸の隨煩惱に於いて淨く其の心を修し、四には奢摩他品の諸の隨煩惱に於いて淨く其の心を修す。是の四種に於いて若くは行にまれ若くは住にまれ諸の雜染を離れ安穩にして法に住す。應に知るべし、四種の安足する處所の所依の法迹は其の所應の如く當に知るべし即ち是れ無貪、無瞋、正念、正定なりと。

復た次に、嗢柁南に曰く、

[一六一]證淨を初めに安立すると、變異あるを先と爲すと、天路と明鏡に喩ふるとにして、記別を最も後に居く。

[一六二]正見を具足せる如來の弟子は、略して二法に由りて能く正に澄淸なる性を攝受するが故に應に知るべし[一六三]四種の證淨を建立すと。謂く(一)沙門の義に攝むる所の信戒(二)[一六四]能說の者に於ける(三)[一六五]沙門の義に於ける(四)[一六六]同法の者に於ける[一六七]能く沙門「果」を證得する助伴に於ける所有の淨信は深く根本を固め、餘生の中に於いても亦た[一六八]引く

【一六一】此は第九十七卷首の總頌の第十門證淨を解する別頌なり。此の中更に五門を列し、長行に於いて次第に解釋す。
【一六二】證淨を初めに安立するを解す。
【一六三】四種の證淨とは佛法僧戒を信するなり。
【一六四】能說の者とは佛なり。
【一六五】沙門の義とは法なり。
【一六六】同法の者とは僧なり。
【一六七】能く沙門果を證得する助伴とは僧なり。
【一六八】引くべからず。引奪すべからざるなり。

可からず、過所無きが故に澄淨なる性と名づく。及び淨尸羅に其の一切の能く惡趣に往く惡不善の法に於いて畢竟不作の律儀を獲得す、是の故に亦た澄淨なる性と名づくることを得。應に知るべし此の中淨信に依止して善說の法毘奈耶の中に於いて深く信解を生ずと、此の淨信に由りて澄淨なる性なるが故に設ひ衆生に在るも【二六九】佛の善說の法毘奈耶に於いて畢竟して轉ずること無し。又、諸の惡道の苦を怖畏し、淨戒を受持し、惡行を對治するに由り、此の衆を攝受するに由りて澄淨なる性は設ひ衆生に在るも亦た惡を造りて諸の惡趣に墮せず、畢竟退墮することも無く、乃ち涅槃に至る。善說の法毘奈耶に於いて畢竟轉ずること無き所依處なるに由るが故に、畢竟して一切の惡趣に往かざる所依處なるが故に其の用最勝なれば唯だ信戒のみを說いて澄淨なる性と爲す、餘の精進念定等の法には非ず、「是れ」澄淨なる性には非ず。又此の信戒は是れ其の增上戒定慧學の所依止の處なり、信戒は是れ清淨なりと說くに由るが故に義として三學は皆な清淨を得ることを顯はす。是の因緣に由りて唯だ【二七〇】此の二のみを說いて只で證淨と爲す、是れを第二義門の差別と名づく。是の如き證淨善く能く一切の障界白淨の法を遮詞するが故に、遍く遮詞すと名づけ、能く殊勝なる諸の聖道を引くが故に善く遮詞すと名づけ、能く所餘の煩惱を斷ずることを引くが故に能く業を引くと名づく。

【二六九】佛の善說の法毘奈耶より轉ずることはなしとの意なり。

【二七〇】此の二とは信戒の二なり。

(二七一)復た次に、一向に決定して能く善趣に往き證淨を成就「せん」とする諸の聖弟子に猶は善趣に住し、三種の(二七二)諸大互ひに違し變異して起す所の重苦の怖畏あり、然れども惡趣の所有怖畏無し。云何んが三種の重苦の怖畏なりや。一には病苦、二には老苦、三には(二七三)斷截末摩の死苦なり。是の故に說いて其の四大種を變異せしむべしと言ふ、已に四種の證淨を成就せる諸の聖弟子に變異ある可きには非ず。

(二七四)復た次に、若し第一義淸淨の諸天をば說いて最勝にして惱害あること無しと名づく。身語意に畢竟して惱害の事あること無きに由るが故なり。卽ち是の如き淸淨天の性に依りて四證淨を說いて名づけて(二七五)天路と爲す。又四證淨を所依止と爲る諸の聖弟子は三種の門に依りて(二七六)六隨念を修す、一には奢摩他品の諸の隨煩惱より起る所の染惱を斷ぜんが爲めに、二には毘鉢舍那品の諸の隨煩惱より起る所の染惱を斷ぜんが爲めに、三には諸の染惱無しと雖も、而も未來に於いて當に生起す可き(二七七)二の隨煩惱を斷ず。當に知るべし此の中惛沈睡眠を奢摩他品の諸の隨煩惱と名づくと。諸欲を欣樂すると俱行する掉擧貪等の過失より生ずる所の不善の欲尋伺等の、心をして流散せしむる諸の雜染の法を毘鉢

【二七一】變異あるを解す。

【二七二】諸大互に違し、諸大とは四大、四大不調なるなり。

【二七三】斷截末摩。末摩(Marmacchid)は支節又は死穴と譯す、他物之に觸るれば劇痛を起して命斷截す、故に梵漢兼擧して斷截末摩と云ふ。

【二七四】天路を解す。

【二七五】天路。四證淨は諸天の遊履する所の路なるが故に天路と名づく。

【二七六】六隨念とは佛法僧戒施天の六を念ずるなり。

【二七七】二の隨煩惱とは奢摩他品と毘鉢舍那品との隨煩惱なり。

舍那品の諸の隨煩惱と名づく。又勝義諦の理に由りて得る所の隨念を義威勇と名づけ、世俗諦の理に由りて得る所の隨念を法威勇と名づく。

(一七八)復た次に、譬へば人ありて明鏡を執持して自らの面の淨不淨の相を觀ることを爲すが如く、是の如く如來の諸の聖弟子も微妙なる證淨の明鏡を執持して如實に自身の所有の染淨の諸相を觀ることを爲す。

(一七九)復た次に、若し四種の證淨を成就することあれば唯だ即ち自らの四種の證淨に依りて他の爲めに記別し、上位に依らず、能く順じて修する所の道念を歡喜す、此の因緣に由りて當に知るべし預流果の證を記別すと、未だ上位の修する所の道に趣かざるが故なり。若し上位に於いては能く順じて(一八〇)五種の隨念を歡喜して他の爲めに記別す、是の因緣に由りて當に知るべし一來果の證を記別すと、三摩地未だ成滿せざるに由るが故に、離欲道に於いて未だ圓滿ならざるが故に、彼の諸天に於いて未だ現見せざるが故なり。離欲を求めんが爲めに修習して能く順じて諸法を歡喜し、此の歡喜を所依と爲るに由るが故に輕安を發生し、輕安に由るが故に身樂を領受し、樂を受くるに由るが故に心に正定を得、而も靜定を證するに未だ成滿することを得ず。若し上位に於いては六種の隨念をば他の爲めに記別す、是の因緣に由りて當に知るべし不還果の證を記別すと。阿羅漢果は唯だ出世道なり、

【一七八】明鏡に喩ふるを解す。
【一七九】記別を解す。
【一八〇】五種の隨念とは六隨念の中念天を除ける自餘の五。

乃ち能く所有隨念を趣證するは唯だ是れ世間なり、是の故に不還果證已上には、更に是の如き隨念の記別無し。又四證淨をば預流果の中には、唯だ說いて淨と爲し、(一八一)餘の學果に於いては圓滿淨と說き、(一八二)最上果に於いては說いて第一圓滿淸淨と爲す。

(一八三)是の如く略して此の論の(一八四)境智相應に隨順する諸經の宗要の摩呾理迦を引けり、其の餘の一切は此の方隅に隨つて皆な當に覺了すべし。

【一八一】餘の學果とは一來不還の二果なり。
【一八二】最上果とは阿羅漢果なり。
【一八三】契經事總結の文なり。
【一八四】境智相應とは瑜伽なり。

卷の第九十九

攝事分中(一)調伏事總擇攝第五の一

是の如く已に素呾纜事の摩呾理迦を說けり。

云何なるを名づけて毗柰耶事の摩呾理迦と爲すや、謂く即ち此の(二)四種の經より外の別解脫經の所有の廣く說ける摩呾理迦展轉して傳來する如來の所說、如來の所顯、如來の所讚を毗柰耶摩呾理迦と名づく。此の毗柰耶摩呾理迦の總相の少分をば我れ今當に說くべし、嗢柁南に曰く、

(三)利と聚と攝と隨行と、逆順と能く寂靜なると、徧知と信不信とにして、力等を其の後と爲す。

(四)如來(五)十種の勝利を觀見したまひ、毗柰耶

【一】調伏　梵に毗柰耶(Vinaya)と云ひ意譯して律と云ふ。諸惡を制除するが故に調伏と云ふ。而して戒律の要事を總攝し簡擇するが故に調伏事總擇攝と云ふ。以下一卷半に涉る。

【二】四種の經とは倫記に二說あり、一に四阿含經なり、二に曰く前の契經事の行、處、緣起食諦界、菩提分法の四擇攝なりと。

【三】此頌に十一門を列し、長行に於て次第に解釋す。力等の等の字に二門を攝す。

【四】第一利を解する門。二段あり、第一段廣く解す。利とは利益なり。

【五】十種の勝利は是れ律の利益なり四分律の第一卷に曰く、(一)僧を攝取す、(二)僧をして歡喜せしむ、(三)僧をして安樂ならしむ、(四)未信者をして信ぜしむ、(五)已信者を增長せしむ、(六)調し難き者を調順せしむ、(七)慚愧の者に安樂を得せしむ、(八)現在の有漏を斷ず、(九)未來の有漏を斷ず、(十)正法を久住することを得。

の中に於いて諸の弟子の爲めに學處を制立したまへり、謂く（六）僧伽を攝受し、僧をして精懇せしむ、乃至廣く說くこと攝釋分の如し應に其の相を知るべし。（七）若し能く（八）四大姓等の正信なる出家にして（九）非家衆に趣くを攝受すれば當に知るべし說いて僧伽を攝受すと名づくと。（一〇）是の如く出家して非家に趣き已れば其の爲めに、因緣あり出離あり所依あり勇猛あり神變ある等の甚深なる法敎を宣說するを當に知るべし說いて僧をして精懇せしむと名づくと。因緣あり等の諸句の差別は菩薩地に已に其の相を辯ぜるが如し、（一一）五種の相に由りて應に知るべし僧をして安樂せしむと名くと。（一二）一には道に順ずる具に匱乏する所無からしむ、（一三）二には異法の補特伽羅を擯せしむ、（一四）三には善く生ずる所の惡作を除遣せしむ、（一五）四には善く諸の煩惱の纏を降伏せしむ、（一六）五には善く永く隨眠煩惱を滅せしむ。當に知るべし（一七）此の中最初の安樂の增上力の故に（一八）未だ淨信ならざる者には淨信を生ぜしめ、（一九）已に淨信なる者をば其をして增長せしめ、第二の安樂の增上力の故に（二〇）鄙惡なる補特伽羅を調攝し、第三の安樂の增上力の故に（二一）慚愧する者をして安樂住を得せしめ、第四の安樂の增上力の故に

【六】第一第二の勝利を擧げ他を略す。僧伽(Saṅgha)略して僧、譯して衆と云ふ、僧衆のことなり。
【七】第一の勝利を說く。
【八】四大姓とは婆羅門等の四姓なり。
【九】非家衆とは出家衆なり。
【一〇】第二の勝利を說く。
【一一】第三の勝利を說く。
【一二】第四第五の二の勝利を說く。
【一三】第六の勝利を說く。
【一四】第七の勝利を說く。
【一五】第八の勝利を說く。
【一六】第九の勝利を說く。
【一七】五種の相の安樂の中。
【一八】第四の勝利。
【一九】第五の勝利。
【二〇】第六の勝利。
【二一】第七の勝利。

(二二)善く現法の諸漏を防護せしめ、第五の安樂の增上力の故に(二三)能く永へに當來の諸漏を滅せしむと。(二四)是の如く安樂住を獲得し已つて未だ入ることを得ざる者をば入り易からしむるが故に、多人の梵行をして久しく住せしめんと欲す乃至廣く說けり、皆な應に了知すべし。(二五)又此の一切要を以て之を言はば、謂く(二六)正に最初の攝受を顯示し、次に(二七)正に攝受し(二八)既に攝受し已れば安樂に住せしめ、及び(二九)未來の未だ攝受せざる者の入り易き方便を顯はす。是の如きを名づけて第二の差別と爲す。

(三〇)復た次に、應に知るべし略して(三一)五種の罪聚ありて一切の罪を攝すと。何等をか五と爲すや。一には(三二)彼勝罪聚、二には(三三)衆餘罪聚、三には(三四)隕墜罪聚、四には(三五)別悔罪聚、五に

【二二】第八の勝利。
【二三】第九の勝利。
【二四】第十の勝利を說く。
【二五】第二段、略して釋す。
【二六】前の第一の勝利を略顯す。
【二七】前の第二の勝利を略顯す。
【二八】前の五相卽ち第三より第九までの勝利を略顯す。
【二九】前の第十の勝利を略顯す。
【三〇】第二聚を釋する門。
【三一】五種の罪聚とは五篇罪なり。
【三二】彼勝罪聚とは波羅夷(パーラージカー Pārājika)にして最重の罪なり、若し之を犯せば人の頭を斷たれしが如く比丘たることを擯斥せらる、而して彼の淨衆の爲めに勝たれ或は魔の爲めに勝たるるが故に彼勝罪聚と云ふ。
【三三】衆餘罪聚とは僧殘也。僧殘とは梵漢兼擧。梵語は僧伽婆尸沙(サンガーヴシェーシャ Saṃghāvaśeṣa)也、人に斫られて僅かに咽喉を存し餘命ありて早く救はざれば死するが如く、此罪を犯せば僧命僅かに存す衆僧爲めに懺悔の法を行ふて急に救はずんば生くるに由なきなり、又曰く此罪を犯せば衆外に遣りて懺悔せしむるが故に名く。
【三四】隕墜罪聚。梵語は波逸提(プラーヤシチッカー Prāyaścittika)、墮と譯す、此罪を犯せば寒熱の地獄に墮つるが故に名く。
【三五】別悔罪聚。梵語は波羅提提舍尼(プラチデイシャニーヤ Prati-deśanīya)向彼悔と譯す、他に向うて懺悔すべき罪なり。

は〔三六〕惡作罪聚なり。〔三七〕集麤定まらざるは其の所應の如く、即ち是の如き諸の罪聚の中に入る。復た四種の還淨〔すべき〕罪聚あり、何等をか四と爲すや。謂く彼勝を除いて所餘の罪聚は皆な還淨すべきが故に四種の還淨〔すべき〕罪聚あり。最初の罪聚は還淨す可しと雖も、然も唯だ〔三八〕二の補特伽羅に依る、一切差別あること無く皆な還淨すべしと爲るには非ず、是の故に彼勝をば一向還淨聚の中には立てず。又若し略して說かば十五種の犯罪過失あり。徧く一切の犯罪聚の中に於いて當に知るべし諸の所犯の罪を建立すと。何等か十五なりや。一には事重き過失、二には猛利なる纒の過失、三には匱乏に喜足せざる過失、四には他に譏嫌せらるる過失、五には淨信無き者を倍信せざらしめ、淨信ある者をば其をして變異せしむる過失、六には諸の財寶多く諸の事業多き過失、七には染著の過失、八には他を惱ます過失、九には疾病を發起する過失、十には善趣に往く沙門を障ふる過失、十一には應に避護すべきに於て正しく避護せず、應に避護すべからざるに反つて避護する過失、十二には應に依と爲るべからざるに反つて與に依と爲り、應に與に依と爲るべきに而も依と爲らざる過失、十三には應に恭敬すべきに於いて而も恭敬せず、應に恭敬すべからざるに而も反つて恭敬する過失、十四には應に覆藏すべきに於いて而も覆藏せず、應に覆藏すべからざるに而も反つて覆藏

〔三六〕惡作罪聚。梵語は突吉羅(Duşkrita)惡作と譯す、惡しき行なれば常に愼しむべきを云ふ。

〔三七〕集麤。麤とは罪なり、罪を集起するを集麤と云ふ。

〔三八〕二の補特伽羅云云。二人の共罪例へば婬を行ずるが如き、一人の罪を還淨するも他の罪の未だ還淨せざるあり。

する過失、十五には應に習近すべきに於いて而も習近せず、應に習近すべからざるに而も反つて習近する過失なり。(三九)應に知るべし此の中(四〇)初修業の者は(四一)四彼勝に於いて事重き過失ありと雖も、而も猛利なる纏の過失無し、彼の意樂に勃惡無きに由るが故に謂ゆる沙門に於いて顧戀する所無し。若し初業の者は此の法は能く沙門を障ふると了知して命の因緣の爲めに亦た違犯せず、意樂の力彊く、唯だ事に依らざるが故に彼には犯無し。所犯を制立することは、要らず意樂に由り彊力を増すが故に、若し犯すことありと雖も、而も一念の覆藏心を起すこと無ければ、彼も亦た出づ可く、沙門果に於いて仍て堪能することあり。其の餘の一切の彼勝を犯す者は、亦た事重き過失あり、亦た猛利なる無慚無愧諸の煩惱の纏の過失あり、當に知るべし、彼れは(四二)二皆な重きに由るが故に出づべからざる法、及び不般涅槃法を成ずと。(四三)若くは衣鉢等の世尊應に持つべしと開許したまへるは作「淨」して而して之を受用し、彼の一切に於いては悉く皆な棄捨す「べし」、或は作淨せずして而も輒く受用する、是の如き等の罪は匱乏に喜足せざる過に由り依つて所犯を制立す。(四四)若くは親屬に非ざる苾芻尼の所にて衣を受け衣を與へ、或は彼等と共に獨り一處に在り、或は復た非時に諸の苾芻僧の同じく忍許せざるに輒く往きて教授し、或は餘時諸の母邑と道路を共にして行くを除く。是の如き等の類は當に知るべし是

【三九】以下十五種の犯罪の過失を釋す。
【四〇】第一第二の犯罪を釋す。
【四一】四彼勝とは四波羅夷罪なり。
【四二】二とは第一第二の犯罪を云ふ。
【四三】第三の犯罪を釋す。
【四四】第四の犯罪を釋す。

れを他に譏嫌せらるる過失と名づくと。(四五)若くは非威儀にして聚落等に入りて乞食し自用し、坐して如法に手を澡ひ器を滌がず、或は請に因らずして其の食前に於いて輒く他の舍に入り、或は(四六)日を觀ぜずして其の食後に於いて邑居に遊履す、是の如き等の類を當に知るべし是れを淨信無き者を倍信ぜざらしめ、淨信ある者をば其をして變異せしむる過失と名づくと。(四七)若くは金銀等の寶を執受し、種種なる品類の買賣を營んで林木を種蒔することを爲し、(四八)憍賒耶の妙臥具を畜ふることある等を當に知るべし是れを諸の財寶多く諸の事業多き過失と名づくと。(四九)若くは故に精を泄し、或は復た母邑の手に執觸する等、或は媒娉を行じ、茲に因つて變異の染心に趣入し、或は好の爲めの故に親屬の所に往き上妙なる長衣服を追求する等を當に知るべし是れを染著の過失と名くと。(五〇)若くは無根なるを以て異分の法を假りて他の苾芻を毀り、或は人を離間する等の事を作すを當に知るべし是れを他を惱ます過失と名づくと。(五一)若くは自ら羊毛を持つて(五二)三踰繕那を過ぎ、或は重擔を荷ひ、或は人樹を上り過ゆる等を當に知るべし是れを疾病を發起する過失と名づくと。(五三)若くは和合僧を破壞せんが爲めの故に勤めて勇猛なる方便の事を設くる等を當に知るべし是れを善趣に往くを障ふる過失と名づ

【四五】第五の犯罪を釋す。
【四六】日を觀ぜずしてとは非時にしてなり。
【四七】第六の犯罪を釋す。
【四八】憍賒耶(Kauśeya)は絹衣の名、野蠶より作りたる衣。
【四九】第七の犯罪を釋す。
【五〇】第八の犯罪を釋す。
【五一】第九の犯罪を釋す。
【五二】三踰繕那。踰繕那(Yojana)は印度古代の里程の單位、王帝一日行軍の里程なり、或は唐土六町一里にて計算して或は四十里或は三十里と云ふ。
【五三】第十の犯罪を釋す。

くと。若くは與に自ら語らざる等の事を作すを當に知るべし是れを沙門を障礙する過失と名づくと。(五四)若くは僧祇の臥具を棄擲して廻露處に置いて捨てて去ることある等、或は邪に受用する等を當に知るべし是れを應に避護すべきに於いて正しく避護せざる過失と名づくと。(五五)若くは邪見の苾芻(五六)勤策と共に居住する等、依止と爲る等を當に知るべし是れを應に依と爲るべからざるに反つて與に依と爲る過失と名づくと。(五七)若くは尊敎に於て輕觸し、怨み咎め睛を怒らして惡く視、恭敬せずして別解脱經を聽受する等を當に知るべし是れを應に恭敬すべきに於いて而も恭敬せざる過失と名づくと。(五八)若くは未だ具戒を受けざる補特伽羅の前に於いて實に人に勝過せる法を得たりと宣示し、或は復た苾芻の犯す所の麤惡罪を覆藏する等を當に知るべし是れを應に覆藏すべきに於いて而も覆藏せず、應に覆藏すべからざるに而も反つて覆藏する過失と名づくと。(五九)若くは不淨非法なる衣服等を受用する事あるを當に知るべし是れを應に習近すべからざるに[於いて]而も反つて習近する過失と名づくと。是の如く說く所の十五の過失は當に知るべし彼の犯す所の罪の中に於いて或は多數或は二或は一ありと。

(六〇)復た次に、略して五法ありて毗奈耶を攝す。何等をか五と爲すや。一には性罪、二には遮罪、三には制、四には開、五には行なり。云何んが性罪なりや。謂く性是れ不善にして能く雜染を爲して

【五四】第十一の犯罪を釋す。
【五五】第十二の犯罪を釋す。
【五六】勤策、梵名沙彌なり。
【五七】第十三の犯罪を釋す。
【五八】第十四の犯罪を釋す。
【五九】第十五の犯罪を釋す。
【六〇】第三攝を解する門。

他を損惱し、能く雜染を爲して自を損惱す、遮制せずと雖も但だ現行することあれば便ち惡趣に往き、遮制せずと雖も但だ現行することあれば能く沙門を障ふ。云何んが遮罪なりや。謂く佛世尊彼の形相の如法ならざるを觀たまへるが故に、或は衆生をして正法を重んぜしむるが故に、或は所作性罪を現行する法に隨順すと見たまへるが故に、或は他を護る心に隨順したまはんが爲めの故に、或は善趣と壽命と沙門の性とを障礙すと見たまへるが故に而も正しく遮止したまへり。若し是の如き等の事を現行することあるをば說いて遮罪と名づく。云何んが制と名づくるや。謂く所作の能く惡趣に往き、或は善趣を障へ、或は如法に得る所の利養を障へ、或は壽命を障へ、或は沙門を障ふる等あり。是の如き等の類をば如來は遮制して現行せしめたまはざるが故に名づけて制と爲す。此れと相違するを應に知るべし開と名づくと。云何んが行と名づくるや。謂く略して三行あり、一には有犯、二には無犯、三には還淨なり、是の如き三種を略攝して二と爲す、一には邪行、二には正行なり。應に知るべし有犯を說いて邪行と名づけ、無犯還淨を說いて正行と名くと。此の中云何んが所犯の罪を犯すや。謂く應に作すべきに於いて而も作さざるが故に、及び加行の故に、應に作すべからざるに於て而も反つて作すが故に、及び加行の故に所犯の罪を犯す。又彼れ略して四の因緣に由るが故に所犯の罪を犯す、一には無知なるが故に、二には放逸なるが故に、三には煩惱盛なるが故に、四には輕慢なるが故なり。云何なるを名づけて無知に由るが故に所犯の罪を犯すと爲すや。謂く一あるが如き所犯の罪に

於いて審に聽聞せず、善く領悟せず、彼れ解了無く覺慧あること無く知る所無きが故に其の所犯に於いて犯す無き想を起し、而も衆罪を犯す、是の如きを名づけて無知に由るが故に所犯の罪を犯すと爲す。云何なるを名づけて放逸に由るが故に所犯の罪を犯すと爲すや。謂く一あるが如き所犯の罪に於いて復た解了し、其の覺慧あり亦た知る所ありと雖も而も忘住に住し、不正知に住し、彼れ是の如く念に住せざるに由るが故に知る所無きが如く衆罪を犯す、是の如きを名づけて放逸に由るが故に所犯の罪を犯すと爲す。云何なるを名づけて煩惱盛なるが故に所犯の罪を犯すと爲すや。謂く一あるが如き其の所犯に於いて復た解了し、其の覺慧あり亦た知る所ありと雖も而も彼の本性の貪瞋癡等極めて猛利なるが爲めに、彼れ猛利なる貪瞋癡に由るが故に、是の事は應せざる所なりと知ると雖も煩惱纒の爲めに逼られて自在ならざるが故に衆罪を犯す、是の如きを名づけて煩惱盛なるが故に所犯の罪を犯すと爲す。云何なるを名づけて輕慢に由るが故に所犯の罪を犯すと爲すや。謂く一あるが如き所犯の罪に於いて復た解了し、其の覺慧あり亦た知る所ありと雖も而も彼の信解極めて下劣なるが爲めに彊盛なる宿善の因行あること無し、其の信解極めて下劣なるに由るが故に沙門の性に於いて、般涅槃に於いて願戀する所無く、佛法僧に於いて敬無く憚無く羞恥あること無く、所學を樂はず、輕慢に由るが故に其の所欲に隨つて廣く衆罪を犯す、是の如きを名づけて輕慢に由るが故に所犯の罪を犯すと爲す。當に知るべし此の中無知と放逸との犯す所の衆罪は是れ染汙ならず、煩惱の盛なると及以び

輕慢に由りて犯す所の衆罪は是れ其れ染汙なりと。五の因緣に由りて當に知るべし所犯に下中上の三品の差別を成ずと。何等をか五と爲すや。一には自性に由るが故に、二には毀犯に由るが故に、三には意樂に由るが故に、四には事に由るが故に、五には積集に由るが故なり。自性に由るとは、謂く彼勝罪聚は是れ上品の罪なり、衆餘の罪聚は是れ中品の罪なり、所餘の罪聚は是れ下品の罪なり。復た差別あり、謂く彼勝と衆餘とは是れ重品の罪なり。隕墜と別悔とは是れ中品の罪なり、惡作罪聚は是れ輕品の罪なり。是の如く應に知るべし自性に由るが故に諸の所犯の罪は下中上の三品の差別を成ずと。毀犯に由るとは、謂く無知なるが故に及び放逸なる故に犯す所の衆罪は是れ下品の罪なり、煩惱盛なるが故に犯す所の衆罪は是れ中品の罪なり、輕慢に由るが故に犯す所の衆罪は是れ上品の罪なり。是の如く應に知るべし毀犯に由るが故に諸の犯す所の罪は下中上の三品の差別を成ずと。意樂に由るとは、謂く下品の貪瞋癡纏に由りて犯す所の衆罪は是れ下品の罪なり、若し中品に由るは是れ中品の罪なり、若し上品に由るは是れ上品の罪なり。是の如く應に知るべし意樂に由るが故に諸の犯す所の罪は下中上の三品の差別を成ずと。事に由るが故なりとは、謂く相似の意樂を現行すと雖も而も其の事一類に非ざるに由るが故に應に知るべし所犯に下中上の三品の差別を成ずと。瞋纏を以て傍生趣の所有衆生に於て故思して殺害するが如きは隕墜罪を生ず、卽ち是の如き相似の瞋纏を以て或は其の人或は（六二）人形狀の父に非ず母に非ざる「もの」

【六二】人形狀とは入胎四十九日の間の胎兒を云ふ。

に於て故思して殺害すれば彼勝罪を生ず、無間罪には非ず、卽ち是の如き相似の瞋纏を以つて人の父母に於いて故思して殺害するは彼勝罪及び無間罪を生ず、是の如く應に知るべし事の別に由るが故に諸の所犯の罪に下中上の三品の差別を成ずと。積集に由るとは、謂く一あるが如き或は一罪を犯し如法に速疾に悔除すること能はず、或は二、或は三、乃至或は五、是の如く應に知るべし積集に由るが故に下品の罪を成ずと。此より已後或は十罪を犯し、或は二十を犯し、或は三十を犯し、乃至或は了ず可き數の罪を犯し、如法に速疾に悔除すること能はず、是の如く應に知るべし積集に由るが故に中品の罪を成ずと。若し所犯の罪其の數無量にして了知す可からざるを我れ今是の如き重罪を毀犯す、是の如く應に知るべし積集に由るが故に上品の罪を成ずと。云何んが應に作すべき、謂く若し彼に於いて作さざるに由るが故に及び加行の故に便ち毀犯を成ず。此の應に作すべき所に略して五種あり、一には村邑に於て應に作すべき所の事、二には道場に於いて應に作すべき所の事、三には善品に於いて應に作すべき所の事なり。卽ち此の善品の應に作すべき所の事に復た二種あり、一には資糧の應に作すべき所の事、二には清淨の應に作すべき所の事なり。是の如き資糧の應に作すべき所の事は聲聞地に十三種の所有資糧を說けるが如し。是の如き清淨の應に作すべき所の事は聲聞地に作意を修するを說けるが如し。又城邑に於いて應に作すべき所とは、謂く或は已が衣服等の事の爲めに聚落に入り、或は復た佛法僧の事同梵行の事の爲め、或は未だ信ぜざるをば其をして信を生ぜしめ、其の已に

信せる者をば倍增長せしめんが爲めに聚落に入るなり。此れと相違する所有の能く五の應に作すべき事を障ふるは其の所應の如く當に知るべし五種の應に作すべからざる事なりと。云何んが無犯なりや。謂く五の因緣に中に犯す所無からしむ。何等をか五と爲すや。謂く根門に於いて密護して住し、飮食に量を知り、初夜後夜に當て睡眠せず、勤めて勝行を修し、正知にして住す、是の如きを名づけて第一の因緣と爲す。又沙門に於いて其の上品なる精勤顧戀を起し、其の大師諸有る智者同梵行「者」の所に於いて其の上品なる愛樂恭敬を起し、現行する罪に於いて猛利なる增上の慚愧を發起す、是の如きを名づけて第二の因緣と爲す。又財物を少くし、事を少くし、業を少くし、怱務を多くせず、是の如きを名づけて第三の因緣と爲す。又喜足に住し、犯不犯に於いて能く善く了知して道俗と交遊し縱蕩せず、專ら善品を修し、曾て間隙無し、是の如きを名づけて第四の因緣と爲す。又初修業「の者」は癡狂心亂痛惱に逼めらる、是の如きを名けて第五の因緣と爲す。當に知るべし此の五の因緣に由るが故に初より犯さずと。云何んが還淨なりや。謂く一あるが如き所犯の罪に隨ひ卽ち便ち五種の惡作を生起す。（六三）五支所攝の不放逸行を以て依止と爲して五種の相に由りて彼より生ずる所の五種の惡作を除く。云何んが五種の惡作を生起するや。一には我が淨戒を毀犯せる因緣に由りて後に於いて定んで當に深く自ら懇に責め惡作を生起すべし。二には我が淨戒を毀犯せる因緣に由りて定んで當に他の諸天に呵責せられて惡作を生起すべし。三に

【六三】五支とは五蘊の支分なり。

は我が淨戒を毀犯せる因緣に由りて定んで大師及び諸の有智「者」同梵行者の爲めに當に共に呵責せられて惡作を生起すべし。四には我が淨戒を毀犯せる因緣に由りて定んで方維に徧くして惡名惡稱惡聲惡頌彰顯し流布するに「於いて」惡作を生起すべし。五には我が淨戒を毀犯せる因緣に由りて身壞して已後必定して當に諸の惡趣の中に墮すべきに「於いて」惡作を生起す。五支所攝の不放逸行は聲聞地の如く應に其の相を知るべし、謂く(一)前際より俱行し(二)後際に俱行し(三)中際に俱行するもの(四)初時の所作及び(五)俱に隨行するものなり。云何んが五種の相に由りて彼より生ずる所の五種の惡作を除くや。一には世尊の說きたまへる所の正法は皆な因緣あり、亦た出離あり、是の故に犯す所は還淨すべし、是に由りて生ずる所の惡作を除遣す。二には彼の無知と放逸と煩惱熾盛なると及以び輕慢とに由りて所犯の罪を犯す。卽ち此の無知乃至輕慢をば我れ已に斷滅し、所有正智乃至尊敬をば我れ已に生起すれば是に由りて生ずる所の惡作を除遣す。三には當來に犯すこと無き意樂を我れ已に生起し、是に由りて生ずる所の惡作を除遣す。四には我れ已に諸の有智「者」同梵行「者」の所にて發露し悔滅し、是に由りて生ずる所の惡作を除遣す。五には我れ佛の善說の法毘奈耶の中に於いて既に出家し已りぬれば學處を越すと雖も而も能く悔滅するを極めて善哉なりと爲す、然れば薄伽梵は無量の門を以て、犯す所の相續の惡作を呵毀して蓋と爲し障と爲したまへり、我れ今彼に於いて多住し堅執して除遣すること能はずんば極めて善哉なるに非ずと。此れを了知し已つて是に由りて生ずる所の

惡作を除遣す。是の如きを名づけて所犯還淨なりと爲す。

〔六三〕復た次に、應に知るべし略して五の毘柰耶の隨行する法なり。毘柰耶に依りて勤學する苾芻は彼を隨行すと。云何んが五と爲すや。一には安住、二には居處、三には所依、四には受用、五には羯磨なり。云何んが安住なりや。謂く毘柰耶に依りて勤學する苾芻は應に當に五種の〔六四〕想住に安住すべし。何等をか五と爲すや。一には若し聚落に入らば應に當に牢獄に入るの想に安住すべし。二には若し道場に在らば常に當に己に於いて沙門の想に住すべし。應に知るべし此の中沙門の想とは、謂く我れ今に於いては色形別異にして俗相を棄捨し、我れ已に〔六五〕壞色を受持する等の事廣く說くこと經の如し、審諦に〔六六〕二十二處を觀察す。三には若し〔六七〕飲食する時は常に當に療病の爲めにする想に安住すべし。四には若し遠離に處せば眼所識の色、耳所識の聲等に於いて應に盲聾瘖瘂等の想に住すべし。五には若し寢息する時は當に保ち難き曠野林中の驚怖せる鹿の想を起すべし。毘柰耶に依りて勤學する苾芻は常に當に是の五の想住に安住すべし。此の想住に於て既に安住し已らんに現に國王の受くる所と爲るに堪へたる衣服飮食臥具を受用すと雖も而も欲樂を受くる行の邊に墮せざれ。云何んが居處なりや。謂く五の居處あり、

〔六三〕第四隨行を解する門。

〔六四〕想住とは觀想に住すること。

〔六五〕壞色とは世の好色を壞りたる一種の混合色を云ふ例へば青、黑、木蘭色の如し、今は壞色の衣の義なり、壞色の衣を著するは飾を捨て憍慢を制するが爲めなり。

〔六六〕二十二處は第二十卷に出づ。

〔六七〕佛遺經に曰く「汝等比丘、諸の飲食を受けては當に藥を服するが如くすべし云云。」

一には苾芻の居處、二には苾芻尼の居處、三には外道の居處、四には雑染なる居處、五には雑染無き居處なり。苾芻の居處とは、謂く是の處に於いて諸の苾芻の（六八）下中上座の居止する所あり。苾芻尼の居處とは、謂く是の處に於いて苾芻尼の前の如き（六九）三種の居止する所あり。外道の居處とは、謂く是の處に於いて種種なる外道の居止する所、謂ゆる離繫、淨命、（七〇）波輸鉢多、是の如き等の類「ある」なり。雑染なる居處とは、謂く是の處に於いて（七一）一切の羯磨をば皆な施設せず、或は但だ一分の羯磨を施設するのみ。雑染無き居處とは謂く是の處に於て具足して一切の羯磨を施設す。又雑染無き苾芻の居處は應に知るべし衆會安立し整肅なりと。若し雑染ある苾芻の居處は應に知るべし衆會安立し混雑すと。諸有る所學を愛樂する苾芻は雑染ある苾芻の居處に於ては應に故に思擇し、利養を棄捨し、恭敬を「受くること」を棄捨すべし、應に止住すべからず、危難あらんに暫時依附し或は道路を行くに暫時止息し、或は彼の諸の苾芻衆を抜いて不善處より出し、善處に安置せんが爲め「にする」をば除く。苾芻尼衆の所居の處に於いては應に止住すべからず、餘は前に說ける（七二）三種の因縁の如し、外道の居處も當に知るべし亦た爾なりと。雑染な

【六八】下中上座。無夏より九夏に至るもの是れ下座、十夏より十九夏に至るもの是れ中座、二十夏より四十九夏に至るもの是れ上座、五十夏以上は耆舊長老なり。夏とは九旬の夏安居なり。

【六九】三種とは下中上座の三。

【七〇】波輸鉢多。倫記に曰く畜愛と譯す、畜生を愛する外道なり。又曰く、牛主或は獣主と云ふ。

【七一】結界なきを以て羯磨を作さず、羯磨（Karman）は業、所作、作法と譯す、戒法に關する作法なり。

【七二】三種の因縁とは危難ある時等の三種なり。

き苾芻の居處に於いては正に思擇し壽を盡すまで止住すと雖も而も應に常に羇旅の想を懷くべし。若し苾芻あり、是の如き諸の所居の處に住すと雖も應に種種の慮恐する處なりとの想を懷くべし、是の如く譏嫌無き處に住すと雖も而も常に諸の智あるもの同梵行者の爲めに譏嫌せらるることを慮恐せよ。云何なるか所依なりや、謂く五の所依なり。何等をか五と爲すや。一には村田の所依、二には居處の所依、三には補特伽羅の所依、四には諸の衣服等の資具の所依、五には威儀の所依なり。若し村城の地方の分所に依つて安住することを得ば應に知るべし是れを村田の所依と名づくと。若し園林或は諸の寺院經行の處等に依りて安住することを得ば應に知るべし是れを居處の所依と名づくと。若し施主と軌範「師」と親教「師」と諫誨し憶念し教授し教誡し正法を說く者とに依りて安住することを得ば應に知るべし是れを補特伽羅の所依と名づくと。若し道に順ずる或は麤なる或は妙なる、隨つて獲得する所の衣服飮食と病緣の醫藥と資身の衆具とに依つて安住することを得ば應に知るべし是れを諸の衣服等の資具の所依と名づくと。若し是の處に依つて時時の間に於いて身の（十三）四威儀を其の樂ふ所の如くにして安樂に住することを得ば應に知るべし是れを威儀の所依と名づくと。若し是の如き所依に依つて住せば終に其の苦惱非聖の無義より引く所の因弊匪宜の爲めに自己を損害せられず。云何んが受用なりや、謂く五種の不淨の受用及び五種の清淨の受用あり。云何んが五種の不淨の受用なりや。一には窣堵波の物を受用す、

【十三】**四威儀**とは行住坐臥の四なり。

重病に遭ふに非ず、設ひ重病に遭ふとも餘の方計ある「べき」なり。二には諸の僧祇物を受用す、僧の授與するに非ず、鉢中に墮するに非ず、彼の分攝に非ず。三には他の別人の物を受用す、彼より得るにあらず、彼の許す所に非ざるに意に隨つて受用するなり。四には委信するに非ざる物を受用す、謂く委信するに非ざる補特伽羅の一切の所有をば、受用すべからず。五には諸の便穢等に染汙せられたる物或は習近するに由りて諸の善法を滅じ不善法を增し、或は習近する時諸の世間「のもの」をして譏訶を生起せしめ、(七四)諸の世間「のもの」に共に厭賤せられ、未だ信を生ぜざる者を倍不信ならしめ、已に信を生ぜる者をば其をして變異せしむる「もの」を受用す。是を五種の不淨の受用と名く。毗柰耶に於て勤學する苾芻は應に當に遠離すべし。此と相違するは應に知るべし、五種の淸淨の受用なりと。毗柰耶に於て勤學する苾芻は應に當に是の如きを受用すべし。不淨の受用を遠離し、「淸淨の受用に於て隨行する苾芻は能く善く所有の信施を酬報するなり。云何が羯磨なりや、謂く一切の羯磨に略して四種あり。一には(七五)單白羯磨、二には(七六)白二羯磨、三には(七七)白

【七四】諸字の上に原本に助令字あるも讀し難し

【七五】單白羯磨とは衆會を集めて但だ白して告知するを云ふ、其事小なるか、常に行ふ所なるか、異義なきかの場合に行ふ作法にして但だ告知するのみにて受戒衆の承認する羯磨を要せざるを云ふ。

【七六】白二羯磨とは一白一羯磨なり、事參差なる場合には先づ一度衆會に白して告知し更に受戒衆の一回承認する羯磨を要するを云ふ。

【七七】白四羯磨とは一白三羯磨なり、事大小に通じて特に異見を懷くべきものあれば先づ一度白して其事を受戒衆に告知し更に三たび其承認する羯磨を要するを云ふ。

四羯磨、四には（七八）三語羯磨なり。此の四羯磨に略して二事ありて所依處と爲る、一には有情數の事を所依處と爲す、二には無情數の事を所依處と爲す。有情數の事を所依處と爲すとは、謂く（七九）出家の羯磨なり、若くは具足「戒」を受くる羯磨、若くは（八〇）補特伽羅の同意の羯磨、若くは（八一）出罪羯磨、若くは（八二）擧羯磨、若くは（八三）擯羯磨、若くは兩安居に受くる十、二十、四十夜を受くる等の所有羯磨なり。是の如く或は有情を攝受せんが爲め、或は有情を折伏せんが爲めに羯磨を施設するを是れを有情數の事を所依處と爲る羯磨と名づく。無情數の事を所依處と爲すとは、謂く衣鉢を受持する羯磨、若くは（八四）羯祉那衣を持ち衣を護りて捨てざる羯磨、若くは（八五）結界羯磨、若くは稻穀を淨うする同意の羯磨なり、是の如き等の類の所有羯磨を當に知るべし是れを無情數の事を所依處と爲る羯磨と名づくと。又此の羯磨に當に知るべし或は二衆の所作あり、或は十衆の所作あり、或は二十衆の所作あり、或は四十衆の所作あり、或は合衆の所作ありと。二衆の所作とは、謂く一の苾芻、一の苾芻に對し三說し別に「懺」悔す

【七八】三語羯磨とは對首法なり、同學三人互に告知し互に承認する作法を云ふ。

【七九】出家の羯磨とは俗人あつて出家せんと欲する時必ず衆を集めて告白し、然して後剃髮せしむるが如きを云ふ。

【八〇】補特伽羅の同意の羯磨とは凡そ事を作さんと欲する時衆の同意を得る羯磨なり。

【八一】出罪羯磨とは若し僧殘を犯せば二十僧の中にて羯磨して出罪すべきを云ふ。

【八二】擧羯磨とは罪を擧げ或は德を擧ぐる作法なり。

【八三】擯羯磨とは重罪を犯せる者をば衆外に擯出し若し惡行を行じ他家を汙せば村落外に擯する作法なり。

【八四】羯祉那（Kathina）衣は功德衣と譯す。

【八五】結界羯磨とは淨地を結する作法なり。

る羯磨にして或は(八六)隕墜罪、或は惡作罪等を發露し悔除するなり。四衆の所作とは、謂く一あるが如き麤罪を犯し已つて四人の前に於いて發露し悔除する羯磨なり。十衆の所作とは、謂く具足「戒」を受くる羯磨なり。二十衆の所作とは、謂く苾芻の(八七)衆餘罪を出す羯磨、及び苾芻尼の具足「戒」を受くる羯磨なり。四十衆の所作とは、謂く苾芻尼の衆餘罪を出す羯磨なり。合衆の所作とは、謂く(八八)增長羯磨、若くは(八九)恣擧羯磨、或は餘の所有種類の羯磨なり。是の四羯磨は事の差別に由りて無量種と成る、廣く說く應に知るべし毘柰耶摩呾理迦の如しと。是の如く所有羯磨を解了し、毘柰耶に於いて勤學する苾芻に隨つて行じ、所犯の罪に於いて而も善巧「智」を得、罪に於いて出離するに亦た善巧「智」を得、自身を避護し、清淨を得て諸の罪過を離れしむ。

(九〇)復た次に、毘柰耶に於いて勤學する苾芻は應に知るべし五の學に違逆する法あるを應に當に遠離すべく、復た五種の學に隨順する法あるを應に當に受持ずべしと。云何なるを五の學に違逆する法と爲すや。一には障礙、二には像似の正法、三には惡友、四には愚癡煩惱の熾盛なること、五には宿世の資糧其の力薄弱なるなり。

(九一)云何んが障礙なりや。謂く五障あり、一には增上戒の障、二には增上心の障、三には增上慧の障、四には善趣に往く障、五には利養壽命所作の事の障なり。云何んが名けて增上戒の障と爲すや。

【八六】隕墜罪惡作罪とは前に說けり。
【八七】衆餘罪とは僧殘罪なり。
【八八】增長羯磨とは說戒時の作法なり。
【八九】恣擧羯磨とは自恣卽ち自ら罪を擧ぐる作法なり。
【九〇】第五に違順を解する門。
【九一】第一障礙を釋す。

謂く一あるが如き或は是れ奴婢なり、或は是れ（九二）獲得せるなり、或は言ふ所あり、廣く說かば一切の出家の法を障へて而も與に相應するなり、是の如きを名づけて增上戒の障と爲す。云何んが名づけて增上心の障と爲すや。（九三）十一障あり、當に知るべし名づけて增上心の障と爲すと、謂く數數衆と會するを初と爲し、居處を處分するを後と爲す。云何んが名づけて增上慧の障と爲すや。謂く正法及び說法師に於いて恭敬を起さず、正法及び說法師を陵懱し、自己を輕賤し、法に於いて慳悋にして他の正法を障へ、正法に背き正法を毀謗せしむ、是の如き等の類を當に知るべし皆な增上慧の障と名づくと。云何んが名づけて善趣に往く障と爲すや。謂く一あるが如き惡欲邪見にして諸の忿恨多く、乃至廣く說かば是の如き色類諸の惡趣に順じ、受學し法を轉ずるを當に知るべし、是れを惡趣に順ずる障と名づくと。利養の障とは、謂く所行に隨つて未だ信せざる者をして、更に不信を增さしめ、其の已に信せる者をば能く改變せしめ、功德を樂はず、時時の中に施福の業事を精勤し修習せず、他の爲めに引攝する所有の利益安樂を樂はず、是の如き等の類なり。壽命の障とは、謂く謹愼して惡象を遠避せず、廣く說かば乃至善く災あり疫ある諸の惡國土を遠離せず、又諸の因諸の緣未だ壽量を盡さずして能く夭歿せしむるを遠離せず、是の如き等の類なり。所作の事の障とは、謂く能く衣鉢等を營む所有の事業を障礙するなり。是の如き一切を總攝して一と爲し、應に知るべし、と說いて利養壽命所作の事の障と

【九二】獲得とは掠奪せるものを云ふ。

【九三】十一障。本地分に出づ。

名づくと。

(九四)云何んが名づけて像似の正法と爲すや。謂く略して二種の像似の正法あり、一には似教正法、二には似行正法なり。若し非法に於いて是法「なりと」の想を生じ、非法を顯示して以て是法なりと爲し、他をして中に於いて正法の想を生ぜしむ、是の如きの法教は實なるが故に、諦なるが故なりと、是れ正法に非ざるも、而も復た正法に像似し顯現す、是の故に名づけて似教正法と爲す。若し廣く他の爲めに是の如く宣說して他をして受學せしめ、亦た自ら修行し、妄りに法想を起し、諸の邪行を習ひ、而も自ら憍慢して稱して我れ能く是の正行を修すと言ふ、應に知るべし是れを似行正法と名づけ、廣く像似の正法を宣說すと爲す。復た中間の嗢柁南を說いて曰く、

(九五)『初めには法等の五種、次には根等の諸見と、非處と惡作等とにして、暴惡戒等を後となす。』

(九六)諸の如來の說きたまふ所の法教と相似せる文句を以て諸經の中に於いて僞經を安置し、諸律の中に於いて僞律を安置す、是の如きを名づけて像似の正法と爲す。

又(九七)增益し或は(九八)損減する見に由りて虛事を增益し實事を損減し、此の方便に由りて無常等の種

【九四】第二像似の正法を釋す。
【九五】是れ像似の正法を解する頌なり、此の中四門を列し、長行に於て次第に解釋す。
【九六】以下五文は頌の初句を釋す。
【九七】增益する見とは有見常見なり。
【九八】損減する見とは空見斷見なり。

種なる義門に於いて廣く他人の爲めに宣說し、是く如しと開示し自他習行す、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

又補特伽羅の所有經典を宣說するに於いて邪取し分別して（九九）眞實の補特伽羅ありと說く、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

又た種種の假有の法の中に於いて宣說し開示して實有の性と爲す、是の如きを亦た像似の正法と爲す。

又一切の戲論を遠離せる究竟の涅槃に於いて分別して有と爲し、或は非有と爲し、說いて有性或は非有性と爲す、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

（一〇〇）又一類の補特伽羅あり、是の如き說を作す、世尊は根門を密護することを宣示し稱揚し讃歎したまへり、是の因緣に由りて寧ろ「眼を以て」色を視ず、乃至法に於いて意を以て思はず、繫念して衆色を觀視し乃至意を以て諸法を思惟せず、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

又世尊の簡靜にして住するを宣示し稱歎したまへるを聞いて便ち是の言を作さく、寧んぞ咎無きに責めんや、他を測量せざれど、應に毀るべき者に於いて而も呵毀せず、應に讃むべき者に於いても亦た稱讃せず、而も呵毀し稱讃する所あらず、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

【九九】眞實の補特伽羅とは實我なり。

【一〇〇】以下十文は頌の第二句を釋す。

又世尊の和氣軟語を宣示し稱歎したまへるを聞いて便ち是の言を作さく、默然戒を受けて都て言說無きを極めて善哉なりと爲すと、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

又世尊の衣食を節量するを宣示し稱讃したまへるを聞いて便ち是の言を作さく、斷食して住し露體にして行くるを最も妙善なりと爲すと、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

又世尊の諠雜住を離れ、諸の言說及び事業を息むるを宣示し稱歎したまへるを聞いて便ち是の言を作さく、臥具を棄捨し、寂靜にして閑居し、修習する所無きを極めて美妙なりと爲すと、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

又佛の、心は世間を將導す、心は一切を營造す、心に隨つて生起する所皆な自在にして轉ずと說きたまへるを聞いて、是の如き等の諸經の義趣に於いて如實に知らず、或は一類あり、惡しき取執に由り是の如き言を作す、唯だ一識のみありて生死に馳流す、二無く別無しと、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

又佛の、持戒の士夫補特伽羅の百味の食百千の衣服を受くることを許したまへるを聞いて障道の妙欲設しくは此の品類を正に受用する時も亦た障と爲らずとし、或は一類あり、惡しき取執に由りて是の如き言を作す、世尊の說きたまへる所の障道の諸欲に若し習近することありとも障と爲るに足らずと、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

又佛の、諸の阿羅漢は現法の中に於いて〔101〕食、言說、蘊界處等に於いて捨てず取らず、如實に知らずと說きたまへるを聞いて便ち是の說を作す、我が佛の說きたまへる所の法を解するが如くんば阿羅漢僧は其の死後に於いて覺了する所無しと、是の如きを亦た像似の正法と名づく。

復た一類あり、如實に世俗勝義の二諦の道理を知らず、二諦の理に違ひ、是の如き言を作す、諸蘊無我ならば云何んぞ無我諸業を造作して我をして觸證せしむるやと、應に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

復た一類あり、本性愚癡にして多く謗毀を行ず、彼れ〔102〕九種の內の正しき住心に於いて如實に知らず、〔四〕諦の觀行〔四〕念住の觀行に於いて如實に知らず、知らざるに由るが故に他の爲めに唯だ信解作意する是れ奢摩他品なり、唯だ信解作意する是れ毗鉢舍那品なり、唯だ信解作意能く究竟を得と宣說し、自ら亦た習行す、是の如き相行を當に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

〔103〕復た一類あり、非處惡作をば而も思惟せざるを當に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

復た一類あり、其の讀誦と觀行作意とに於いて皆な堪能することありて而も僧事を樂ひ、亦た其の中に於いて勝れたる功德を見、他の爲めに、宣說するを當に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

復た一類あり、戒に於いて修に於いて堪能する所あつて而も惠施に於いて勝れたる功德を見、諸方

---

〔101〕食とは四食、言說とは四諦、蘊とは五蘊、界とは十八界、處とは十二處なり。

〔102〕是れ九種の住心なり。

〔103〕以下六文、頌の第三句を釋す。

に遊歷し、自らの禁戒の遮止せらるる處に於いて多く毀犯することありて諸の財物を集めて佛法僧に奉るを當に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

復た一類あり、善說の法毗柰耶の中に於いて旣に出家し已つて展轉して相ひ引きて、專ら聽聞するを以て其の究竟と爲すを當に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

復た一類あり、諸の苾芻の大族大福にして多く衣等の所有利養を獲るを見、少欲等を捨てて其の所に往いて恭敬敍慰し、親を現じ誨喩し、新苾芻の邪心をして動作せしむるを當に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

復た一類あり、如來の說きたまへる所の甚深なる空性相應する所有の經典を棄捨し、專ら樂つて世間に隨順する文章呪術を習學して自ら聽明慢を懷くことを察せず、又他をして己が聰敏を知らしめんと欲するを當に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

【一四】以下五文、頌の第四句を釋す。

〔一四〕復た一類あり、暴惡及び諸の犯戒を折伏し、彼の暴惡犯戒に於いて不饒益を作さんと欲するが爲めに惡思を發起するは當に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

復た一類あり、種種なる矯詐の威儀を構集するを當に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

復た一類あり、世間の文章呪術を解するを以て所有利養を多く求め多く獲るを當に知るべし亦た

像似の正法と名づくと。

復た一類あり、他を損惱し、其の非法を以て財寶を積聚し、罪ある福を作すを當に知るべし亦た像似の正法と名づくと。

又卽ち彼の能く無義を引く像似の正法に於て諸の因緣を以て開示し建立するを當に知るべし亦像似の正法と名づくと。是の如き一切の像似の正法をば應に知るべし皆な是れ學に違逆する法なりと。

〔一〇五〕惡友の性相は廣く說くこと應に知るべし聲聞地及び菩薩地の如しと。又略して說かば、若くは放逸に於いて或は惡行に於いて、或は下劣なる諸善の功德に於いて相ひ勸勵するを應に知るべし是の類を總じて惡友と名づくと。

〔一〇六〕若し諸の昧劣愚癡の種類の所有の猛利なる長時の煩惱を是れを愚戇煩惱熾盛なりと名づく。

〔一〇七〕若し宿世に於いて〔一〇八〕信等の善法を修習せざるが故に現法の中に於いて信等微弱にして極めて精懇すと雖も、然も力能く卽ち現法に於いて涅槃を獲得すること無きを當に知るべし是れを宿世の資糧に闕くる所あるが故に現法の中に於いて其の力薄弱なりと名づくと。

是れを五種の學に違逆する法と名づく。此れと相違するは應に知るべし五種の學に隨順する法なり

【一〇五】第三惡友を釋す。
【一〇六】第四愚戇煩惱の熾盛なることを釋す。
【一〇七】第五宿世の資糧其力薄弱なることを釋す。
【一〇八】信等の善法とは信精進念定慧なり。

と。彼を成就するが故に毗奈耶に於いて勤學する苾芻は能く正しく一切の所學を修集し、是の如き隨順する法を成就する者には復た五法ありて能く戒蘊を防ぐ、一には正しく出家す、二には善く請問す、三には審に觀察す、四には對治を修す、五には信を任持するなり。債に厄せられずして而も出家を求むること前に廣く說けるが如く、唯だ涅槃を求め、所學を愛樂して出家を求む、當に知るべし是の如きを正しく出家すと名づくと。既に出家し已つて犯無犯及び還淨の中に於いて若し苾芻の經律論を持つあれば、其の未だ了せざる所を「以て」躬ら往いて決「定」を請すれば彼れ便ち開曉す、當に知るべし是の如きを善く請問すと名づくと。自らの尸羅に於いて三時に觀察す、或は初日分、或は中日分、或は後日分に「於いて」若し犯す無きを見ては便ち歡喜を生じ、晝夜に精勤し隨學して住し、若し犯すあるを見ば卽ち便ち速疾に如法に悔除す、當に知るべし是の如きを審に觀察すと名づくと。時時の間初夜初夜或は晝日分に於いて所有貪等の煩惱を對治することを思惟し修習し、唯だ尸羅の言教を聽聞するのみにて便ち喜足を生ずるに非ず、當に知るべし是の如きを對治を修すと名づくと。深く犯すことあるは當「來」の不愛の果なりと信じ、深く犯すこと無きは當來の愛果なりと信ず、當に知るべし是の如きを信を任持すと名づくと。又正しき出家を所依止と爲し、〔一九〕餘の二事を作し、正しき請問に由りて終に毀犯せず無知なるが故に犯し、審に觀察するに由りて終に毀犯せず放逸なるが故に犯し、對治を修するに由りて終に毀犯せず煩惱熾盛

【一九】餘の四事とは五法の中正しき出家以外の四事なり。

又二相に由りて樂しむ可き性を成ず、一には（二七）彼の有徳を體として尊重するが故に、二には（二八）彼の有恩を荷つて慰意するが故なり。又樂しむ可き性に二の差別あり、一には未だ生ぜざるを其をして生ずることを得せしめ、二には生じ已れるをば當に倍增廣すべし。應に知るべし此の中尊重增上は、謂く彼の有徳を體とし、慰意增上は、謂く（二九）財法の二の攝なり、（三〇）彼の二の增上は、謂く善和合なり、和合增上は謂く心に擾惱無きなり、貪等の所有擾惱を遠離すれば名づけて無違と曰ひ和合方便して共に一事を爲すを名づけて無諍と曰ひ、水乳を和同するを一趣性と名づく。

（三一）又處所圓滿、教導圓滿、正行圓滿、資糧圓滿を所依止と爲して、應に知るべし、人天の四輪を建立すと。（三二）五種の妙好なる住する所の方處を處所圓滿と名づくと、廣く說くこと應に知るべし聲聞地の如しと。（三三）正士善友を教導圓滿と名づく、廣く說くこと應に知るべし聲聞地及び菩薩地の如しと。（三四）五種の相に由りて自ら正願を發すを正行圓滿と名づく。何等をか五と爲すや。一には正しき教授に於いて能く敬順して取る、二には行に違逆無し、三には如實に自ら顯はす、四には其の教授師より隨つて獲得する所の精麤の衣服飲食臥具「に於いて」便ち喜足

【二七】彼の有徳とは六和敬を云ふ。
【二八】彼の有恩も亦六和敬を云ふ。
【二九】六和敬の中施和敬は財の攝、其餘の五和敬は法の所攝なり。
【三〇】彼の二の增上とは尊重增上と慰意增上となり。
【三一】五種を廣釋する中第二斷を解す。
【三二】處所圓滿を說く。
【三三】教導圓滿を說く。
【三四】正行圓滿を說く。

を生ず、五には無間と殷重との二種の加行に於いて、斷を樂ひ修を樂ひ乃至（一三五）四種の苾芻の愛取を對治することを修習す。

（一三六）又宿し作せし所の福は補特伽羅の宿世の善根の增上力の故に應に知るべし五相の果の勝利ありと。謂く宿し作せし所の福の增上力の故に二種の愛すべき果報に安住す、一には內、二には外なり。內の愛すべき果報とは、謂く長壽にして久しく住し、妙色端嚴にして病無く惱少く、僕に非ず女に非ず、半擇迦に非ず、智慧猛利にして言を發するに威肅にして大宗葉を具ふるなり。外の愛すべき果報とは、謂く富貴の家に生る、經に廣く說きたまへるが如く、大富大貴にして、大侍衞あるなり。是れを第一の宿し作せし所の、福相の果の勝利と名づく。

【一三五】四種とは聲聞・緣覺、菩薩、佛の四聖種なり。

【一三六】資糧圓滿を說く。

又宿し作せし所の福の增上力の故に善く安住することを得、諸の魍魎、藥叉、非人、守宅神等能く障礙を爲すに非ず、謂く財位に於いて障礙を作さず、或は壽命に於いて障礙を作さざるなり。是れを第二の宿し作せし所の福相の果の勝利と名づく。

又宿し作せし所の福の增上力の故に性となり善法に於いて心能く趣入し修習して怠ること無し、是れを第三の宿し作せし所の福相の果の勝利と名づく。

又宿し作せし所の福の增上力の故に性となり惡行に於いて深く自ら懇に愧ぢ、惡を作し已れりと

雖も時時に猛利なる悔心を發起し、此の因緣に由りて已に作るせ惡をして現在に微劣ならしめ、當來の惡に於いて能く永へに遠離す。是れを第四の宿し作せし所の福相の果の勝利と名づく。

又宿し作せし所の福の增上力の故に一切の事業の方便加行の意趣技能展轉して昌盛なり、凡そ施爲する所敬順せざる無く、少かに功力を用ゐて多く成辦することあり、是れを第五の宿し作せし所の福相の果の勝利と名づく。

是の如き（二三七）四種の天上の諸天、人中の諸人の所有の止觀勝妙の車輪は闕くる所あるに隨つて其の車轉せざるなり。

（二三八）又應に得る所の義に「於いて」深く信解を生ずべきに依りて（一）師長の前に於いて如實に自ら（二）身に勇悍あり（三）心に勇悍ありて能く（四）善說（五）惡說の所有法義を領解するに堪へたることを顯はす、其の次第の如く應に知るべし五種の斷支を建立すと、一支を闕くに隨つて斷成辦せず。

（二三九）又（二四〇）最初に於いて應に當に勉勵して大師に敬事すべし、謂く能く增上戒學、增上心學、增上慧學の所有法敎を宣說すればなり。（二四一）次に應に其の所說の法に敬事すべし。（二四二）次に法隨法行を修習する時應に當に增上戒と毗奈耶との相應に依る學處に敬事すべし。（二四三）次に應に增上心及び增上慧に依る

【二三七】四種乃至車輪とは四輪のこと。
【二三八】五種を廣釋する中第三斷支を解す。
【二三九】五種を廣釋する中第四に敬事を解す。
【二四〇】第一敬佛。
【二四一】第二敬法。
【二四二】第三敬僧。以上三寶に敬事するなり。
【二四三】第四敬戒第五敬定第六敬慧、是れ三學に敬事するなり。

敎誡敎授に敬事し、時時の間に於いて財供養及び法供養を修すべし。應に知るべし此の中財法の供養は、謂く同じく居止し及び同じく受用するなりと。(一四四)次に靜慮に於いて三摩地を修し、此より無間に隨つて愛味無く、諦理に通達し、永へに諸漏を盡して放逸あること無し。是の如き七種の敬事の差別次第をば應に知るべし。

(一四五)又三相に由りて應に敬事を知るべし(一)能く彼の功德勝利を體とするに由るが故に尊重を起し、(二)體とする所に隨つて悉く身語意の三種の正行を以て恭敬を修し(三)復に種種なる幢旛蓋等を設けて供養を爲すと。諸の同梵行者にして餘の同梵行者の犯す所の衆罪を舉ぐることあらば、卽ち現前に於いて四目相對して其の實を以てして非實を以てせず、乃至廣く說かば彼れ未だ了せざるに於いて正しく解了する時便ち更に犯すこと無く、更に犯すこと無きが故に是の諸の苾芻は見聞疑に由りて應に重く前に犯せる所の事を舉ぐべからず、是の如くして淨事便ち除滅することを得、諸の苾芻あり、餘の苾芻の罪を犯せるを見る時節、別に復時に於いて彼の罪を犯せる者自ら犯す所を忘れんに其の犯せるを見たる者は彼れの犯せし所を記し、便ち是の事を舉げて問うて曰く、汝自ら犯せし所を憶するや不やと彼れ乃ち答へて言はく、我れ都て憶せずと。彼れ既に憶せざれば自ら悔ゆ可からず、妄りに我れ憶すと言はば、悔ゆる言無く、能く惡作を離るるに非ず、既に他に舉げらるるが故に他に信

【一四四】第七眞善無漏涅槃の敬事。

【一四五】五種を實釋する中第五に滅諍を解す。

順して應に衆僧に從つて憶念して毗奈耶の想及以び清淨を求乞せべし。爾の時衆僧諸の苾芻を信じて彼れに清淨を與ふれば彼の罪を犯せる者は惡作を離るることを得。是の諸の苾芻は應に重ねて前に犯せし所の事を擧ぐべからず、是の如くして諍事便ち除滅するとを得。復た苾芻あり、顚狂に由るが故に衆多の沙門に非ざる法を現行して法に隨順せず、彼れ此の事に由るが故に（一四六）犯を成せず、時に一類無知なる苾芻ありて彼れ非處を犯すと謂つて擧發す。諸の苾芻ありて未來を防がんが爲めに憶念することを教示し、自心をして還つて衆僧に從つて癡ならざると、毗奈耶の想及以び清淨を求乞することを得せしむ。彼れ是れを聞き已つて卽ち便ち求乞す。爾の時衆僧應に是の如き補特伽羅は犯を成ぜずと斷じ、僧和合し住して唱へて清淨を與ふべし。無知なる苾芻既に是を聞き已つて復た重ねて前に犯せし所の事を擧げず、是の如くして諍事便ち除滅することを得。復た苾芻あり、衆僧の中に於いて苾芻の罪を擧ぐ、其の能く擧ぐる者は犯せしことある想を起し、彼の擧げられたる者は犯せしこと無き想を起す、犯せしこと無き想に由りて便ち自ら稱して我れ犯せし所無しと言ひ、能く擧ぐる者は、長老よ豈曾て是の如き是の如き事を作さざらんやと云ふ。彼れ遂に誠言すらく、我れ曾て作さざりきと、能く擧ぐるもの復た云く、彼れ先に已に犯せり、今擧發することを得たれども猶は了せず、故に仍ほ犯さずと言ふと。爾の時衆僧便ち爲めに事の自性犯せることを爲せるや犯さざりしやと尋求して實を得已るを待ちて當に如法に斷ず、

【一四六】顚狂の行爲なるが故に犯罪とならず。

是の如くして諍事便ち除滅することを得。住處を異にする衆多の苾芻あり、犯す所の罪に於いて互に疑諍を生じ、或は犯せることありと言ひ、或は犯せること無しと言ひ、或は是れ重しと言ひ、或は是れ輕しと言ふ[時]、別の住處の衆ありて數前を過ぎ、或は彼の衆に望み、此れ慧解多く、三藏を受持せんに、彼れ應に此れに就いて請して所疑を決し、究竟に到らしむべし、是の如くして諍事便ち除滅することを得。復た苾芻あり、既に罪を犯し已りて自らの惡作の纒に激發せられて遂に憂悴を成し他の擧發せんことを慮り、便ち如法に悔ゆ、此に由りて一切の諍事除滅す。多くの苾芻ありて互に相ひ擧罪し、各憍慢の爲めに執持せられて展轉し相ひ對して發露することを欲せず、離散を事とし、二部別居し、各是の言を作さく、彼れ既に背て來りて我が衆に對して發露悔滅せず、我等何爲れぞ輙ち彼の衆に就て發露悔滅せんと。彼此の部中に各應に一の智ある[者]を衆首に推し、共に言ふ所を稟くべし、補特伽羅の同じく他衆に主たるもの、其の犯せるを發露し悔滅することを許す、是の如くして諍事便ち除滅することを得。[四七]是の如き諍事に略して四種あり、應に知るべし除滅に亦た四種ありと。云何んが名づけて四種の諍事と爲すや。一には他の擧ぐる諍事、二には疑ふ諍事、三には自ら擧ぐる諍事、四には互に擧ぐる事なり。何等をか復た四種の除滅と名づくるや。一には顯つて犯せし所を出して除滅し、二には清淨を施與して除滅し、三には實性を求むるを許して除滅し、四には各各發露して除滅す。

【四七】以下前述の諍事及び滅諍の法を略攝す、前述に照合して看よ。

卷の第一百

攝事分中調伏事總擇攝第五の二

〔一〕復た次に、毘奈耶に依りて勤學する苾芻は其の五處に於いて應に正に徧知すべし。云何なるを五と爲るや。一には事の徧知、二には罪の徧知、三には補特伽羅の徧知、四には義利を引攝する徧知、五には煩惱の徧知なり。

云何んが事の徧知なりや。謂く〔二〕蘊等の五事は、聲聞地に已に說けるが如し。

云何んが罪の徧知なりや。謂く毘奈耶に依りて勤學する苾芻は五種の相に由りて犯す所を徧知す、一には犯罪の因緣を徧知す、二には犯罪の等起を徧知す、三には犯す所の罪事を徧知す、四には犯罪の加行を徧知す、五には犯罪の究竟を徧知するなり。犯罪の因緣を徧知すとは、謂く或は貪の因緣、或は瞋の因緣、或は癡の因緣に「由りて」衆罪を毀犯するなり。犯罪の等起を徧知すとは、謂く或は罪あり、身に由りて等起して語にも非ず心にも非ず、或は復た罪あり、語に由りて等起して身にも非ず心にも非ず、或は復た罪あり、心に由りて等起して身にも非ず語にも非

〔一〕前卷首章十一門の中第七に徧知を釋す。
〔二〕蘊等の五事とは五蘊、十二處、十八界、十二緣起、處非處なり。

す、或は復た罪あり、身に由り心に由りて等起して語には非ず、或は復た罪あり、語に由り心に由りて等起して身には非ず、或は復た罪あり、身に由り語に由りて等起して心には非ず、或は復た罪あり、身に由り語に由り心に由りて等起して獨り心に由りて犯す所の衆罪無し。應に他處に從つて發露し悔除すべく、唯だ當に慇懃に深く自ら防護すべし。茲芻あるが如き、種種なる欲尋思等の不善なる尋思を發起し、犯す所の罪事を徧知す、謂く犯罪の事に略して二種あり、一には有情數の事、二には無情數の事なり。犯罪の加行を徧知すとは、謂く犯す所の罪に二の加行あり、一には應に作すべき所に非ざる事業の加行、二には是れ應に作すべき所なる事業の加行なり。犯罪の究竟を徧知すとは、謂く是の處に於いて方便を施設し、即ち是の處に於いて究竟を得、中間に於いて其の退轉することあるに非ず、是の「因」縁を以ての故に犯す所圓滿す。諸の〔三〕集罪と〔四〕彼勝と衆餘との方便の中に隕墜と惡作とを犯し、彼の方便及び自衆の中に於いて究竟することを得、隕墜罪の諸の方便の中に於いて亦た惡作を犯す。四種の罪聚をば有餘罪と名づけ、彼勝罪聚をば無餘罪と名づく。若くは犯す所の罪をば、智あるに由るが故に積集せずと名づく。或は復た他に從つて顯發するが故に亦た積集せず、此れと相違するは積集せざるに非ず。若くは犯す所の罪を已に他に從つて如法に發露し、方便し悔除するを已に顯說せりと名づけ、此れと相違するを未だ顯說せずと名づく。若くは犯す所の罪を權りに持して當に悔ゆるを期願

〔三〕集罪、前卷に出づ。
〔四〕彼勝、衆餘、隕墜、惡作は五篇罪の内、前卷に委出。

ありと名づけ、此れと相違するを期願無しと名づく。若くは犯す所の罪を諸佛世尊別解脫毗柰耶の中に於いて建立して犯と爲したまふを制立ありと名づけ、此れと相違するを制立無しと名づく。若くは犯す所の罪或は一類の補特伽羅に約し、或は復た時に約して決定せず、先には差別無きを總相にして制立す、當に知るべし此の罪を名づけて（五）等運と爲し、此れと相違するを等運に非ずと名づくと。

云何んが補特伽羅の徧知なりや。謂く五相に由りて應に差別を知るべし、一には行の差別に由るが故に、二には衆の差別に由るが故に、三には增減の差別に由るが故に、四には證得の差別に由るが故に、五には觀察の差別に由るが故なり。行の差別に由るとは、謂く能く貪等の行に由りて差別あることを徧知するが故なり、彼の差別あることは聲聞地の如く應に其の相を知るべし。衆の差別に由るとは、謂く能く苾芻苾芻尼等の（六）七衆の別に由るが故に彼の差別ありと徧知するなり。增減の差別に由るとは、謂く一類の補特伽羅の如き或は貴族にして出家し、或は富族にして出家し、或は顏容端正なり、其の餘の一類は則ち是の如くならず、復た一類の補特伽羅あり、多聞博識にして語具さに圓滿し、大智大福にして淨尸羅に於いて堅猛に防護し、少かに犯す所あれば多く（七）惡作を生じ、犯「罪」に於いて出「罪」に於いて能く善く了知す、其の餘の一類は則ち是の如くならず、若し能く是の如き等の事を徧知するを當

【五】等運とは總じて犯すを云ふ、平等に運轉し倶に犯すが故なり。又曰く罪相同じきが故に等運と云ふ。

【六】七衆とは比丘、比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼、優婆塞、優婆夷なり。

【七】惡作とは作せるを惡む追悔の心なり。

に知るべし說いて增減に差別あるが故に彼に差別ありと徧知すと名づく。證得の差別に由るとは、謂く能く隨信行より倶分解脱を以て後邊と爲る〔八〕七種の差別、預流果向より乃ち最後の阿羅漢果に至る〔九〕八種の差別、諸の是の如き等の補特伽羅の差別を徧知し分別するなり、聲聞地に已に其の相を辯せるが如し。觀察の差別に由るとは、謂く能く罪を擧ぐる補特伽羅は應に善く罪を擧げらるる者を觀察して然して後應に擧ぐべく、爲めに憶念を作せ、謂く擧げらるる補特伽羅は我が邊に於いて愛敬ありと爲んや否やと觀せよ、廣く說くこと經の如く應に其の相を知るべし。其の發擧せらるる補特伽羅も亦た應に善く能く罪を擧ぐる者を察すべし、是れ愚夫顛狂癡駭にして非法に罪を擧げ、我が所に於いて當に損害を作すべしと爲んやと、廣く說くこと經の如く應に其の相を知るべし。是れ智者にして狂に非ず駭に非ざる所有の白品と爲んやと、廣く說くと經の如く應に其の相を知るべし。又擧ぐるに堪へたる補特伽羅に於いては應に正しく開擧爲んや否やと觀察すべし。是の如く補特伽羅の所有の差別を觀察するを應に知るべし說いて補特伽羅の徧知と名づくと。

云何んが義利を引攝する徧知なりや。謂く能く略して三種の義利を引攝する有るを徧知す。何等をか三と爲す。一には自身の利養の義利を引攝し、二には他身の出罪の義利を引攝し、三には僧伽の犯

【八】七種の差別とは見道以上の聖者利鈍の根性の差別、(一)隨信行(二)隨法行(三)信解(四)見至(五)身證(六)慧解脱(七)倶解脱なり。

【九】八種の差別とは四向四果なり。

戒を擯斥し安樂なる義利を引攝するなり。自身の利養の義利を引攝すとは、〔一〇〕謂く(一)若くは諸の利養の體是れ清淨なるを是れを眞實と名づく。(二)若くは諸の利養の體是れ清淨にして而も要用に堪ふるも、所用無きに徒らに多く凡百の資緣を貯畜するには非ず、是の如きを名づけて能く義利を引くと爲す。(三)若くは諸の利養時を過ぎず、受用に堪任するを是れを時に應ずと名づく。(四)若くは諸の利養にして其の餘の苾芻亦た現に引攝するを是れを有伴と名づけ、(五)卽ち此の有伴は破僧を引くに非ざれば破僧を離ると名づく。若くは引攝する所の利養の義利に此の五支を具へて正念に安住す、無染心を以て應に當に受用すべし、是の如く利養の義利を引攝するを名づけて無罪と爲す。他身の出罪の義利を引攝すとは、謂く若し犯す所の罪を彼れ實に現行するを是れを眞實と名づく。若し復た自ら我れ能く彼をして不善處を出で善處に安置せしむと知る、是の如きを名づけて能く義利を引くと爲す。若し他の說法し、尊長に敬事し、病等を恭承する正しき加行の時罪を擧ぐること無きを、是れを時に應ずと名づく。若し憶せる罪を擧げんに諸の餘の苾芻共に助伴と爲るを是れを有伴と名づく。此の因緣能く破僧を引くに非ず、是の如きを名づけて〔一一〕第五の清淨と爲す。若し引攝する所の出罪の義利に此の五支を具ふれば正念に安住して染汚心無く、慈善友の如く柔軟の言を以て應に他の出罪の義利を引攝すべし。他の出罪の義利を引攝するが如く僧伽の犯戒を擯斥する安樂の義利を引攝するも當に知るべし亦た爾なり

〔一〇〕以下五支を出す。
〔一一〕第五とは五支の中の第五支なり。

と。而も差別をいはば、若し擯斥するに因りて其の擯「斥」せらるる者能く擯「斥」するが與めに命に障礙を爲さず、或は此に因りて僧の居園を壞らず、亦た此に因りて　三制多を損壞せず、及び餘の同梵行者を損せず。是の如きを名づけて能く義利を引くと爲す、此れと相違するを應に知るべし說いて無義利を引くと名づくと。

云何んが損惱の徧知なる。謂く五種の現法の損惱ありて凡夫の趣く所、愚癡の趣く所、智者の離るる所にして、實に狂に非ずと雖も、狂の所作の如く乃至唯だ虛誑のみありて稽留し、都べて所有義利を增長すること無し。云何んが五と爲すや。謂く一類あり、死亡を傷悼し、無量の門を以て而も自ら煎迫し喪者を傷淪す、是れを第一の現法の損惱と名づく、凡夫の趣く所なり乃至廣く說けり。復た一類あり、幸に所餘の活き易き方便あるに而も衢路大市鄽の間に於いて肢節を分解し、命殆んど盡きなんと疑はるる邪苦にて己を逼て以て自ら存活す、是れを第二の現法の損惱と名づく、凡夫の趣く所なり乃至廣く說けり。復一類あり、性と爲り慳貪にして慳垢に蔽はれ、幸に種種の命を養ふ資緣あるに而も大に艱辛して以て自ら存活す、是れを第三の現法の損惱と名く、凡夫の趣く所なり乃至廣く說けり。云何んが慳垢なりや。謂く八の慳垢あり、一には宿し慳貪を習ひ、惠施を串はざる慳垢、二には現法に上品に身命を顧戀する慳垢、三には同分支の共住し隨轉する諸の有情の所に於いて

【三】制多(Caitya)は積聚の義、翻じて靈廟と云ふ、土石を積聚して之れを成ずれば也、又世尊の無量の福德之れに積集すればなり。

悲「心」を串習せず、悲心微劣なる慳垢、四には(一三)田の寡德なるを見て正行を毀犯する慳垢、五には諸の財物に於いて得難き想を起す慳垢、六には三時に憂悔する慳垢、七には諸の財物に於いて唯だ功德を見て過患を見ざる慳垢、八には邪に施し廻向する慳垢なり、當に知るべし是れを八種の慳垢と名づくと。復た一類あり、天趣を愛樂し、求めて天に生ぜんと欲するも、如實に生天の道路を知らず斷食し火に投じ、高巖より墜つる等自ら逼害を加ふ、是れを第四の現法の損惱と名づく、凡夫の趣く所なり乃至廣く說けり。復た一類あり、(一四)淸淨を愛樂するも、如實に淸淨の道路を知らず、苦法を加へて淸淨を得と謂つて無量なる門を以て自ら逼害を爲す、是れを第五の現法の損惱と名づく、凡夫の趣く所なり乃至廣く說けり。是の如き五種の現法逼惱をば、毗柰耶に依りて勤學する苾芻は正に徧知し、應に速に遠離すべし。

(一五)復た次に、毗柰耶に依りて勤學する苾芻は五法を成就して未だ信を生ぜざる者をば其をして信を生ぜしめ、已に信を生ぜる者をば倍增長せしむ。云何んが五と爲すや、一には尸羅圓滿、二には正見圓滿、三には軌則圓滿、四には淨命圓滿、五には遠離展轉して鬪諍するを遠離する圓滿なり。尸羅圓滿に略して十種あり、聲聞地に已に其の相を辯ぜるが如し。謂く初め善く受持して太だ沈聚せず、太だ浮散せず、乃至廣く說けり。正見圓滿に略して五種あり、一には(一六)增益の薩迦耶見及び

【一三】田とは福田、施等の福業を植うべき所を云ふ。
【一四】淸淨とは涅槃を云ふ。
【一五】前卷首の頌の十一門の中、第八信不信を解す。
【一六】增益。無なるを有なりと增益し執著す。

（一七）邊執見已に永へに斷ずるが故に、二には損減（一八）撥無の邪見已に永へに斷ずるが故に、三には取見、謂く諸の見取及び戒禁取已に永へに斷ずるが故に、四には妄りに吉祥處を計する見已に永へに斷ずるが故に、五には妄りに非有を計して有と爲し、有を非有と爲る諸の顚倒の見已に永へに斷ずるが故なり。軌則圓滿に亦た五種あり、謂く（一）或は時務に依りて應に作すべき所の事、（二）或は善品に依りて應に作すべき所の事、（三）或は威儀に依りて應に作すべき所の事、（四）世間及び（五）毗奈耶に隨順する所有の軌則なり、廣く說くこと應に聲聞地の如く知るべし。淨命圓滿に亦た五種あり、謂く能く矯詐等の五の邪命を起す法を遠離す、聲聞地の如く應に其の相を知るべし。展轉して鬪諍するを遠離する圓滿に略して六種あり、謂く六種の鬪諍の根を離るるが故なり、此の中六種の鬪諍の根とは、謂く（一九）忿恨等なり、廣く說くこと經の如し。又六處に依りて應に知るべし六鬪諍の根を建立すと。云何んが六處なりや。一には不饒益の相、二には樂つて己が過を隱し、憍慢し執持す、三には利養恭敬に［於いて］欲愛現行す、四には增上戒行を毀犯し、五には增上心行を毀犯し、六には增上慧行を毀犯するなり。應に知るべし第一處に依りて第一の鬪諍の根本を建立し、乃至第六處に依りて第六の鬪諍の根本を建立すと。謂く、一類の補特伽羅あり、衆に識知せられ、廣く他處より多く利養を獲、是の因緣に由り毀犯する所あり、犯す所

【一七】邊執見とは偏見、斷常の二見なり。

【一八】撥無とは因果を撥無するなり。

【一九】（一）忿恨（二）覆憍慢（三）貪欲或は諂誑（四）慚愧無き故戒を犯す（五）散亂或は惛沈（六）掉擧或は惡慧。下文に準じて知れ。

の罪に於て樂つて隱藏せんと欲し、他をして己が犯せる所を知らしむることを欲せず、諸の苾芻あり、既に了知し已つて一に對し二に對し、或は衆多に對して其の犯事を擧ぐ、彼れ此に由るが故に一向に憂感し、身心を燒惱し、又憍慢に執持せらるるに由るが故に多く熱惱を生ず、彼れ復た他の衆人の前に對して我を呰責すると勿らんやと、是の如く彼の人先に犯せる所を隱すを說いて名づけて覆と爲す、又復た憍慢の煩惱を發起す、(一〇)此の二を合して樂つて己が過を隱し憍慢を執持すと名づけ、是に由りて鬪諍の根本を建立す。復た苾芻あり、恭敬利養に〔於いて〕欲愛現行し、他人の多饒なる財寶衆に知識せられ大福祐を具ふるあるを見れば則ち便ち親附し、殷重に承事し、愛するに非ず敬ふに非ず、亦た法を樂ふに非ず、專ら〔自己の〕利養恭敬の因緣の爲めにす。是の如く思惟し攝取す、質直忍辱柔和を依止と爲し、我を師とし、其の處に於いて意に隨つて自在にして、彼れ我が所に於いて多く施爲することあるも、而も我れ彼に於いて都て作す所無からんと。是の如く思惟し攝取す、捷慧にして愛樂し、福を修し、同梵行者を以て助伴と爲し、所有僧事及び其の餘の事をば皆な彼をして作さしめ、我れ獨り蕭然として自得して任せんと。是の如くして或は禁戒を毀犯するあり、同梵行者正に詰問する時便ち分明ならず、餘事に假託して說く所あり、是の如きを名づけて嬌僞を行じ、誑諂を行ずと爲す、處所に此の因緣に由りて諸の鬪諍を起す、餘は所應に隨つて當に其の相を知るべし。是れと相違して五種の法あり、未だ信せざる者をして

【一〇】此の二とは覆と憍慢なり。

轉た不信を增さしめ、已に信ぜる者をして導いで還つて變革せしむ。

【三】復た次に、毗奈耶に依りて勤學する苾芻は、五力を成就し、一切種に於いて等意にして正しく所有加行を行ず。云何んが五力なりや。一には加行力、二には意樂力、三には開曉力、四には正智力、五には質直力なり。若くは學を樂ひ、一切身分にて諸學の中に於いて正しく善く修學し、又所學に於いて最も極めて恭敬し、自ら調伏せんが爲め、般涅槃の爲めにするあり、是の如きを當に知るべし加行力と名づくと。若し犯す所あれば意樂に由るが故に速に還つて出離す、是の如きを當に知るべし意樂力と名づくと。若くは學處に於いて時時に三藏を持つ者に請問する所有の自愛する諸の善男子の「爲めに」修學する所に應じて亦た能く開示す、是の如きを當に知るべし開曉力と名づくと。他より聞き已つて若し其の中に於いて是れ眞是れ實なるをば無倒に攝受し、若し其の中に於いて僞なる毗奈耶像似の正法、諸の惡言説の法性に違背するをば如實に了知し、彼に至りて躬ら請問を申べず、未だ開曉せざる所なりと雖も而も多聞なるが故に佛世尊の遮止したまはず亦た開許したまはざる「所」に於いて能く自ら沙門の性に於いて是は能く隨順す、是は能く違逆すと思惟し、旣に了知し已つて其の所應の如く能く正に修行し、能く正に遠離す、是の如きを當に知るべし正智力と名づくと。若くは信解の力は諸の誑諂を離れて少分の詐妄分別あること無く、少分の開許せられたる中に於いて多分なりと增益して現行を起すに非ず、多分の開許せられたる

【三】前卷首の頌の十一門の中の第九力を解す。

中に於いて少分なりと損減して現行を起すに非ず、其の現行する所増さず減らず、是の如く最初に自ら欣慶を生ず、後に自他をして安樂にして住し、正行を修行せしめ、他を眩惑するに非ず、是の如きを當に知るべし質直力と名づくと。

〔二二〕復た次に、毗奈耶に依りて學する所の加行に應に知るべし五の補特伽羅の品類差別ありと。謂く〔二三〕一類の補特伽羅あり、善說の法毗奈耶の中に於いて出家の法に依りて始め將に發趣せんとし、發趣せんと欲すと雖も仍ほ未だ出家せず、便ち煩惱邪欲尋求を生ず、是の縁を以ての故に遂に出家せず。〔二四〕復た一類あり、既に出家し已つて煩惱熾盛にして故思して罪を犯し、是の因縁に由りて諸の憂悔多くして便ち煩惱邪欲尋求を生ず。

〔二五〕復た一類あり。既に出家し已つて出家の法に於いて喜樂を生ぜず、〔二六〕捨の所學に於いて將に發趣せんと欲し、及び出家に於いて憂悔を發生し、而も是の念を作さく、我れ好んで所謂出家と作るに非ずと、彼れは〔二七〕二の縁に由りて煩惱邪欲尋求を發生す。〔二八〕復た一類あり、既に出家し已つて命難の因縁にも故思して所學に違越することを起さず、乃至命を盡すまで出家を愛樂し、梵行を勤修す、彼は二縁にて煩惱邪欲尋求を發生するに非ず。是の如き四種の補特伽羅は是れ異生の類なり。〔二九〕復た一類あり、謂く

【二二】前卷首の頌の十一門の中第十、五人の品類差別を解する門。
【二三】第一人。
【二四】第二人。
【二五】第三人。
【二六】捨とは喜樂に偏せざる平等を云ふ。
【二七】二の縁とは(一)捨の所學に於いて將に發趣せんと欲す、(二)出家に於いて憂悔を發生す。
【二八】第四人。
【二九】第五人。

諸の有學にして未だ解脱を得ず、即ち此を「所」依と爲し、後の第一の心慧解脱に於いて通達し昇進し、如實に了知す、是れを第五の補特伽羅と名づく。即ち此の第五を前の第四の諸の異生類に望むるに調善にして愛す可き有學の解脱は後の解脱に於いて通達し昇進す「べきものな」るに由つて而も差別あり、即ち此を當に已に諦迹を見たるものなりと知るべし。此の中前の三補特伽羅は其の所應の如く發趣より生ずる所、憂悔より生ずる所及び倶より生ずる所の所有煩惱邪欲尋求に於いて應に正しく除遣すべく、上の解脱に於いて應に正しく了知すべく、第四は唯だ後の上の解脱に於いて應に正しく了知すべし、若し能く是の如くならば一切は當に平等平等なることを得べし。

(三〇)復た次に、三學の中に於いて當に知るべし略して三種の邪行ありと、謂く一類の補特伽羅あり、先に涅槃を求め而も出家を樂ひ、出家し已つて後天の妙欲の爲めに愛味に漂はされ、受持する所の戒を善趣に廻向し、唯だ尸羅を護りて便ち喜足を生ず、是れを(三一)外結の補特伽羅の增上戒に於ける第一の邪行と名づく。復た一類の補特伽羅あり、唯だ戒を護りて便ち喜足を生せず、而も能く上の諸の世間隨一の靜定を趣證し、即ち此の定に於いて深く味染を生じて進んで上聖諦現觀を求めず、是れを(三二)內結の補特伽羅の增上心に於ける第二の邪行と名づく。復た一類の補特伽羅あり、是れ其れ有學にして已に諦迹を見たるも、放逸に住するに

【三〇】前巻首の頌の十一門の中第十一に三種の邪行を解する門。

【三一】外結とは外部的の煩惱束縛なり。

【三二】內結とは內部的の煩惱束縛なり。

由りて現法の中に於いて般涅槃せざるを當に知るべし是れを增上慧に於ける第三の邪行と名づくと。

（三）是の如く略して此の論の境智相應に隨順する調伏の宗要の摩呾理迦を引けり、其の餘の一切は此の方隅に隨つて皆な當に覺了すべし。

【三】調伏事を總結す。

攝事分中 (一)本母事序辯攝

是の如く已に毗奈耶事の摩呾理迦を說けり、云何なるを名づけて摩呾理迦の事と爲るや。謂く若くは素呾纜の摩呾理迦、若くは毗奈耶の摩呾理迦を總略して一摩呾理迦と名づく、更に別の摩呾理迦無しと雖も、然れども流轉と還滅と雜染と清淨とを略攝して雜へて說法せんが爲の故に我れ今復た法相を分別する摩呾理迦を說く。嗢柁南に曰く、

(二)『要らず餘に由り餘を釋す。卽ち此を此と釋するに非ず、前に於いて略して事を序し、自後當に廣く辯ずべし。』

(三)若し諸法の應に他の爲めに說くべきあらば要ず餘門を以て先づ總じて標擧し、復た餘門を以て後に別して解釋す、若し是の如くなれば正理に順ずと名づく。卽ち此の門をば先づ總じて標擧して、還つて此の門を以て後に別して解釋するに非ず。先づ總じて云何んが有爲なりやと擧げ、後に別して釋

【一】本母事序辯攝。上來經律二藏の事を辯じ已れり、次下半卷は論藏の事を辯ず、阿毘達磨(Abhidharma)藏卽ち對法藏は餘の經律二藏の要義を生ずるが故に摩呾理迦(Mātṛkā)譯して本母と名づく。序とは名を標し、辯とは其の名を辯釋するなり、此の序辯の中に一切諸法の相を攝す、故に序辯攝と云ふ。

【二】此頌の上半は正しく釋義の方軌を辯じ下半は正しく序辯の前後を明す。長行に於て此頌を更に細釋す。

【三】頌の上半を釋す。

して所謂五蘊なりと言ふが如し、若し是の如くなれば正理に順ずと名づく。先づ總じて云何んが有爲なりやと擧げ、後に別して釋して所謂有爲なりと言ふには非ず。是の如き一切をば應に隨つて覺了すべし。

(四)略して二相に由りて應に知るべし法相を分別する摩呾理迦を建立することを、一には先づ略して事を序し、二には卽ち是の如く略して序する所の事に依りて後當に廣く辯ずべし。

云何なるを名づけて先づ略して事を序すと爲るや。謂く略して流轉の雜染品の事及以び還滅の淸淨品の事を序するなり。

云何んが流轉の雜染品の事なりや。謂く六識身の自性と所依と所緣と助伴との事、若くは〔五〕蘊〔十八〕界〔十二〕處の事、若くは諸の〔十二〕緣起處非處の事、若くは三受の事、若くは三世の事、若くは四緣の事、若くは諸業の事、若くは煩惱の事、若くは三界の事、謂く欲界等なり、若くは十有の事、謂く欲有、色有、無色有、那落迦有、傍生有、鬼有、天有、人有、業有、中有なり、(五)欲〔界〕の善趣惡趣を別離し招引趣向に差別あるに由るが故なり、若くは十一識住の事、謂く四識住と七識住と總合して說くが故なり、若くは九有情居の事、經に廣く說きたまへるが如し、若くは五趣の事、若

【四】頌の下半を釋す。

【五】欲界の善趣を別ちて天有、人有の二となし、惡趣を別ちて那落迦、傍生、餓鬼の三趣となす。招引とは業なり、業に依りて欲、色、無色の三有を立て復た合して一業有とす。趣向とは中有なり、趣向は欲色二界に通ず亦別に立てて一中有とす。

くは四生の事、若くは四入胎の事、若くは〔六〕四の得の自體の事、若くは四食の事、若くは四言說の事、若くは〔七〕四法受の事、若くは四顚倒の事、若くは苦諦の事、若くは集諦の事、是の如き等の類を名づけて略して流轉の雜染品の事を序すと爲す。

云何んが還滅の淸淨品の事なりや。謂く滅諦の事、若くは道諦の事、若くは三摩地の事、若くは諸智の事、若くは此より引く所の諸の功德の事、若くは〔八〕七正法の事、若くは七の正しき作意の觀察の事、若くは三十七の菩提分法の事、若くは四行迹の事、若くは四法迹の事、若くは奢摩他毗鉢舍那の事、若くは四修定の事、若くは三福業の事、若くは三學の事、若くは四沙門果の事、若くは四證淨の事、若くは四聖種の事、若くは三乘の事、若くは四問記の事。是の如き等の類を名づけて、略して還滅の淸淨品の事を序すと爲す。是の如き等の事に廣く建立を辯ず、其の所應に隨つて前に說ける所の〔九〕彼彼の地の中及び〔一〇〕諸の攝分の如く應に其の相を知るべし。

又一切の事に要を以て之を言はば、總じて〔一一〕五事あり、一には心事、二には心所有法の事、三に

【六】四の得の自體とは(一)自害を行ずることを得るも他害を行ぜず、(二)他害を行ずることを得るも自害を行ぜず、(三)自害他害俱に行ず(四)自害他害俱に行ぜず。

【七】四法受とは(一)現在に樂を受け當來世に於て苦果を受く、(二)現在に苦を受け當來世に於て樂果を受く(三)現在に樂を受け當來世に樂果を受く(四)現在に苦を受け當來世に於て苦果を受く。

【八】七正法とは(一)法を知る(二)義を知る(三)時を知る(四)量を知る(五)衆を知る(六)自を知る(七)尊卑を知るなり。

【九】彼彼の地とは本地分なり。

【一〇】諸の攝分とは攝決擇分、攝釋分、攝異門分、攝事分なり。

【一一】五事是れ五位なり、前四位は有爲法後の一は無爲法なり。

は色の事、四には心不相應行の事、五には無爲の事なり。

云何んが卽ち是の如く略して序する所の事に依りて後に當に廣く辯ずるや。謂く略して四相に由りて廣く彼の事を辯ず。何等をか四と爲すや。一には異門の差別の故に、二には體相の差別の故に、三には釋詞の差別の故に、四には品類の差別の故なり。異門と體相と釋詞との差別は攝釋分の如く應に其の相を知るべし。品類の差別に復た八種あり、一には有非有異非異の性の差別を建立し、二には界の差別を建立し、三には時分の差別を建立し、四には方所の差別を建立し、五には相續の差別を建立し、六には分位の差別を建立し、七には品分の差別を建立し、八には道理の差別を建立す。是の如き等の八種の差別に由りて一切の事の品類の差別に於いて應に隨つて覺了すべし。

【三】以下次第に品類差別の八種を別解す。

(三)云何んが有非有異非異の性の差別を建立するや。謂く若し略して說かば三種の有あり、一には實有、二には假有、三には勝義有なり。

云何んが實有なりや。謂く諸の法を詮表するに名の得可きあり事の得可きあり、此の名は事に於いて無礙にして轉ず、或る時は轉じ或る時は轉ぜざるに非ず、當に知るべし是れを略して實有を說くと名づくと。色等の諸の法聚の中に於て墉室軍林草木衣食等の想を建立するが如き、此の「名」想は唯だ此の聚に於いて隨轉し、餘に於いては退還す、色等の諸の「名」想は一切處に於いて皆な悉く隨轉す、

是の故に此の「名」想の詮する所は實有なり、當に知るべし餘の「名」想の詮する所は假有なりと。又此の假有に略して六種あり、一には聚集假有、二には因假有、三には果假有、四には所行假有、五には分位假有、六には觀待假有なり。聚集假有とは、謂く世間に隨順する爲めの言說は解了し易きが故に五蘊等の總相に於いて我及び有情、補特伽羅、衆生等の「名」想を建立す、此の「名」想は唯だ能く此の聚を顯了す、是の故に說いて聚集假有と名づく。因假有とは、謂く未來世に生ず可き法行は未だ生ぜざるに由るが故に實有に非ずと雖も、而も其の因の當に生ず可きあるが故に因假有と名づく。果假有とは、所謂(二三)擇滅は是れ道果なるが故に無と說く可からず、然れども實有には非ず、唯だ已に一切の煩惱を斷じ、當來世に於いて畢竟して生ぜざるに約して假立するなり。所行假有とは、謂く過去世に已に滅せる諸行は唯だ現前の(二四)念の(二五)行ずる所の境と作る、是の故に說いて所行假有と名づく、已に謝滅するが故なり、而も實有には非ず。分位假有とは、謂く(二六)生等の諸の(二七)心不相應行なり、前の意地に已に標し辯釋せるが如し、卽ち諸行に於いて前後の有及び非有に依りて同類異類相續する分位に假に生等を立つるに由る、此の生等の(二八)諸

【二三】擇滅とは無漏の智慧の簡擇力にて煩惱を斷じたる所に顯はれたる無爲涅槃を云ふ、滅とは涅槃なり。

【二四】念とは記憶なり。

【二五】行ずるとは觀ずるなり。

【二六】生等とは生老住無常等なり。

【二七】心不相應行とは實には色心不相應行なり、卽ち心にも色にも相應せず心にも非ず色にも非ざるものにして色と心との一分の上に假立せる概念のことなり、色と心との共通點を抽象して得たる概念なるを以て色にも非ず心にも非ず亦は色亦は心と云ひ得るなり。

【二八】諸行とは諸法なり。

行を離れて外に眞實の體として別に得可きあるに非ず。觀待假有とは、諸の（一九）虛空非擇滅等なり。虛空無爲は諸の色趣に［相］待して假に建立す、若し是の處に於いて色趣の有るに非ざるを假に虛空と說く、色無の顯はす所の法を離れて、外に別に虛空の實體として得可きあるに非ず、無の顯はす所を實有と名づくることを得るに非ず。（二〇）諸行の俱に生起せざるを觀待し、未來世の不生の法の中に於いて非擇滅の無生の顯はす所を立てて、假に說いて有と爲す、無生の顯はす所を說いて實有と爲す可きには非ず。

云何んが（二一）勝義有なりや。謂く其の中に於いて一切の名言、一切の施設をば皆な悉く永へに斷じ、諸の戲論を離れ、諸の分別を離れたるを善權方便して說いて法性、眞如、實際、空、無我等と爲す、菩薩地の眞實義品の第四の所知障淨なる智の所行の眞實の如く應に其の相を知るべし。上と相違するは當に知るべし非有なりと。

又四種の別無別に由るが故に應に知るべし異不異の性を建立すと、一には所因の別無別に由るが故に、二には所依の別無別に由るが故に、三には作用の別無別に由るが故に、四には時分の別無別に由るが故なり。（二二）若くは所因等の諸法の異相差別

【一九】虛空とは虛空無爲、非擇滅とは非擇滅無爲なり。

【二〇】生ずべき諸行の緣闕けて生ぜざる所に非擇滅無爲を立つ、非擇滅無爲とは人智の簡擇力にて煩惱を斷じて得たる眞如に非ず法爾自然に不生にして不滅なる眞如なり、是れ人爲にて顯はす眞如に非ざるが故に非擇滅無爲と云ふ。

【二一】勝義有とは離言絕慮の眞如其者を云ふ、されば眞如と言ふも旣に謬れり、言詮不及意路不到の那一物なり、今權りに强ひて名づけ眞如と云ひ、實際と云ひ、空と云ひ、無我と云ふのみ。

【二二】是れ總じて四種の別の方面を釋す。

得可し、此れ餘に異るなり。(三三)若くは異相差別の得可き無し、此れ前及び後與に現じて異り無きなり。時分の差別とは、謂く一切の行は唯だ刹那のみ住す、即ち此の自體を還つて自體に望めて説いて不異と爲し、刹那を過ぎたる後を説いて異と爲す。彼を種と爲るに由りて此れ生ずることを得るを説いて所因と爲す。若し眼等〔の五根〕及び〔四〕大種等を〔所〕依と爲して轉ずるを所依と名づく。若し一切の行の別別の功能をば説いて作用と名づく。是の如きを名づけて第一の有非有異非異の性の品類差別を建立すと爲す。

云何んが界地の差別を建立するや。謂く欲色無色の三界の差別なり。欲界と言ふは、謂く下(三四)無間より上(三五)他化〔天〕を越え、(三六)魔羅〔天〕宮に至るまでの其の中の諸行は皆な欲界の煩惱に因りて生ずる所にして、其の三世に於いて彼の煩惱の與に所依止と爲り、彼の品の麤重の隨縛する所にして彼が爲めに繫〔縛〕せらる。又欲界の中にては一切の煩惱をば全く未だ離欲せず、定地の攝に非ず。色無色界にては一切の煩惱をば一分離欲す、定地の所攝なり。餘の煩惱の相は前の如く應に知るべし。色界と言ふは、謂く四靜慮並に靜慮の中間の(三七)十七地あり。無色界とは、謂く空處等の四無色地なり。

【三三】是れ總じて四種の無別の方面を釋す。
【三四】無間とは地獄なり。
【三五】他化天は欲界六天の最高天なり。
【三六】魔羅とは略して魔、魔王天なり、是れ他化天の最頂上にあり。
【三七】十七地とは初禪天第二禪天第三禪天に各三天あり九天となる、第四禪に九天ある中無想天を廣果天に攝むるが故に八天となる、合計十七天なり。

云何んが時分の差別を建立するや。謂く過去世に於いて無間に已に滅せるあり、隣近にして已に滅せるあり、久遠にして已に滅せるあり、未來世に於いて無間に將に生ぜんとするあり、隣近にして當に生ずべきあり、久遠にして當に生ずべきあり、現在世に於いて刹那現在するあり、衆同分の現在するあり、相續して未だ滅せず現在するあり。

云何んが方所の差別を建立するや。謂く〔二八〕有色の諸法は處所に據るが故に遠近の方所の差別あることを得、〔二九〕無色の諸法は無色に由るが故に處所に據ること無し。若し色法に依りて生起するとを得ば卽ち其の處に於いて方所ありと說くも、〔三〇〕此は相を轉ずるに由るが故なり、處所に據るが故に非ず、有色の諸法は具に二種に由る。

云何んが相續の差別を建立するや。當に知るべし相續に略して四種あり。自他の〔六〕根〔六〕境に差別あるが故に四の相續を立つ、一には自身相續、二には他身相續、三には諸根相續、四には境界相續なり。〔前の〕二は是れ假りの建立、〔後の〕二は是れ眞實の義なり。

云何んが分位の差別を建立するや。謂く苦の分位、樂の分位、不苦不樂の分位なり。卽ち是れ能く三受に順ずる諸法なり。

云何んが品分の差別を建立するや。當に知るべし所治能治の二品の差別を建立すと。謂く染不染の

〔二八〕有色の諸法とは物質なり。
〔二九〕無色の諸法とは心法なり。
〔三〇〕此とは無色卽ち心法なり。

法、下劣勝妙の法、麤細の法、執受非執受の法、有色無色の法、有見無見の法、有對無對の法、有爲無爲の法、有漏無漏の法、有諍無諍の法、有愛味無愛味の法、耽嗜に依り出離に依る法、世間出世間の法、墮攝非墮攝の法なり。當に知るべし此の內五の因緣に由りて染法を建立すと。一には三受の中に於いて其の所應の如く雜染を爲すが故に、二には能く徧く諸の煩惱品の麤重の性を攝受するが故に、三には能く徧く現法當來の非愛の果を攝受するが故に、四には能く徧く連りて結生し相續するが故に、五には能く徧く一切の善法及び所知障に於いて智の生ずるを障礙するが故なり。是の因緣に由りて名づけて染法と爲す、是れと相違するは應に當に不染法の相なりと了知すべし。此の不染の法に於略して二種あり、謂く善と無記となり。臭爛不淨及び煩惱不淨に由るが故に不淨と名け、此の中に於て諸の所有受は皆な悉く是れ苦なるに由るが故に名けて苦と爲し、無常の性なるに由るが故に不堅と名く。若し是の如き勝義の道理に由れば性となり是れ不淨、性となり是れ苦、性となり是れ不堅なり。其の性鄙穢なれば名けて下劣と爲し、此に超過すれば應に知るべし勝妙なりと。又相待するが故に下劣勝妙の二相差別す、謂く色界に待すれば欲界は是れ劣なり、無色界に待すれば色界は是れ劣なり、若し涅槃に待すれば三界皆な劣なり、是の如き等の類をば應に當に了知すべし。微著の差別の故に、淨穢の差別の故に、勢用の差別の故に應に知るべし色趣の麤細を建立すと。輭「中上」等の品類に差別あるが故に應に知るべし無色の諸法の所有麤細を建立すと。又有色の法無色の法は世俗勝義諦の理の了

じ易く〔或は〕了じ難きに由るが故に應に知るべし麤細の二種差別すと。微は謂く微聚なり、著は謂く所餘の聚なり、淨は謂く中有上地の色聚なり、穢は謂く（三一）餘有下地の色聚なり。勢用と言ふは、謂く若し是の處に地大等あらんに、勢用増彊く、餘聚と其の物量等しと雖も、而も能く餘に勝れて麤顯にして得可きなり。輭等の品類に差別ありとは、謂く（三二）樂等の諸受（三三）信等の諸法に輭中上の品類の差別あるなり。執受法とは、謂く諸の色法心心所の爲めに執持せられ、彼に託するに由るが故に心心所轉ずるに（三四）安危の事に同じきなり。安危を同じうすとは、心心所の任持する力に由るが故に其の色斷せず壞せず爛せず、卽ち是の如く執受する所の色或時は衰損し、或時は攝益するに由りて其の心心所も亦た隨つて損益す。此れと相違するを非執受と名づく。有色と言ふは、謂く能く方所に據る、無色と言ふは、謂く方所に據らざるなり、此は所緣の領納流轉に約して施設し建立す。有見と言ふは、謂く若し諸色の眼の爲に識られ及び所依等たるに堪ふるは亦た此れ彼に在りて明了に現前するなり、此れと相違するを名づけて無見と爲す。有對と言ふは、謂く若くは諸色は能く他の見を礙へ他と往來を礙ふ、此れと相違するを名づけて無對と爲す。有爲と言ふは、謂く生滅繫屬する因緣あるなり、此れと相違するは應に知るべし無爲なりと。有漏と言ふは、謂く若くは諸法諸漏より生ずる所、諸漏の麤重の隨縛する所にして諸漏の相應、諸漏の所緣の能く諸漏を生

（三一）餘有とは中有外の生有老死有なり。
（三二）樂等とは苦樂捨なり。
（三三）信等とは信、精進、念、定、慧の五根なり。
（三四）死生安危を同じうする。

し、去來今に於いて漏の依止と爲るなり。此れと相違するは應に知るべし無漏なりと。能く當來の【三五】生等の衆苦の與に生因と爲るが故に、現法の中に於いて有罪の性なるが故に名づけて有諍と爲す、此れと相違するを名づけて無諍と爲すと。內門の自體に愛染して隨ふが故に有愛味と名づけ、此れと相違するを無愛味と名づけ、外門の境界に愛著して隨ふが故に耽嗜に依ると名づけ、此れと相違するを出離に依ると名づく。若くは法の有漏有諍にして愛味あり耽嗜に依る、是の如き一切を名づけて世間と爲す、若くは能く此れを治する世俗諦に依りて起す所の俗智及び引く所の法を亦た世間と名づく、此れと相違するを出世間と名づく。若くは諸の世間をに墮攝法と名づく、有情の器たる欲色無色の世間の攝に墮するが故なり。若くは出世間は墮攝法に非ず、前に說く世間の攝に墮せざるが故なり。

云何んが道理の差別を建立するや。謂く四道理あり、一には【三六】相待道理、二には證成道理、三には作用道理、四には法爾道理なり。是の如き道理の差別の分別は聲聞地の如く應に其の相を知るべし。是の如き八種の品類の差別及び前に說ける所の異門と體相と釋詞との差別は應に知るべし前に廣略して序せる所、一切の事の中に能く正に廣く辯せるが如し、此に過ぐる辯無しと。

復た次に、嗢柁南に曰く、

【三七】『初めは聚と相攝等なり、其の次は成就等と、自性等と因等とにして、後に廣く地等を說く。』

【三五】生老病死の四苦。
【三六】亦觀待道理と云ふ。
【三七】此の一頌に六門を列し、長行に於て次第に解釋す。

(三八)九法聚あり、一切の法を攝す。何等をか九と爲すや。一には善の法聚、二には不善の法聚、三には無記の法聚、四には見所斷の法聚、五には修所斷の法聚、六には無斷の法聚、七には邪性定の法聚、八には正性定の法聚、九には不定の法聚なり。善等の法聚は廣く意地に已に其の相を辯ぜるが如し。見所斷の法聚とは、謂く(三九)一切の見、若くは見等に依る貪瞋癡慢、若くは(四〇)惡趣の業、若くは諸諦に於いて猶豫する疑等なり。修所斷の法聚とは、謂く餘の一切の應に斷ずべき所の法なり。無斷の法聚とは、謂く無漏の法なり。邪性定の法聚とは、謂く無間の業及び斷善根なり。正性定の法聚とは、謂く[有]學無學の所有諸法なり。不定の法聚とは、謂く餘の學に非ず無學に非ざる法なり。

(四一)應に此の中の所有諸法の自性の相攝他性の相應を知るべし。

(四二)或は一類の補特伽羅にして、善友及び無記法を成就するも、不善法には非ざるあり、謂く諸の聖者の已に欲貪を離れ及び此の異生の種子法を除けるなり。或は一類の補特伽羅にして、不善及び無記法を成就するも、諸の善法には非ざるあり、謂く斷善根の補特伽羅にして種子法を除き、善不善の法を成就することあること無く、無記法には非ず、或は唯だ不善、或は唯だ無記のみ而も得可き者なり。又此の中に於いて應に諸法をば其の所應の如く若くは得若くは捨つる

【三八】第一聚を解する門。
【三九】一切の見とは身見邊見等なり。
【四〇】惡趣の業とは惡趣を招く業因なり。
【四一】第二相攝等を解する門なり、相攝等とは相攝と相應なり。
【四二】第三成就等を解する門なり、成就等とは成就と得と捨なり。

を知るべし、謂く一類あり、所受を受くるに由るが故に、或は所受を捨つるが故に、或は邪に推求するが故に、或は正しく推求するが故に、或は形を轉ずるが故に、或は法爾なるが故に、或は欲を離るるが故に、或は加行の故に、或は退失するが故に、或は果を得るが故に、或は死生の故に而も得捨あり、別解脱律儀等の法の如く彼を受くるに由るが故に得、彼を捨つるに由るが故に捨つ。若くは諸の善法をば邪に推求するに由るが故に捨て、正しく推求するに由るが故に得、形を轉ずるに由るが故に苾芻の律儀或は苾芻尼の律儀を捨て、其の一二形の生ずることを得るに隨ふが故に一切永へに捨つ。法爾に由るが故に世間壞する時能く法爾として得る所の靜慮に入る、欲を離るるに由るが故に能く〔四三〕上地の所有善法を得、加行に由るが故に能く彼に依つて引く所の功德を發し、現在前せしめ、退失するに由るが故に還つて先時の諸の下劣なる法を得、果を得るに由るが故に諸の世法を捨て、出世の法及び後の明淨なる世間の善法を得。死生に由るが故に若し下に生ずる時は〔四四〕生得の善及び不善無記の諸法を獲、若し上に生ずる時は唯だ善法及び無記の法を得。諸有る捨つる所をば其の所應の如く亦た隨つて覺了し、相違あること無く、諸の心心所而も共に相應し、及以び相攝す、即ち此の刹那の行還つて此の刹那と與なり。又一切の生死の諸行の永へに斷す可き法無し。又諸行先より未だ曾て生ぜずして欻然として今起ること無し。又一切の行皆な刹那に生じ、生ぜる刹那の後必ず停住すること無く、諸行一

〔四三〕上地とは色無色界なり。
〔四四〕生得の善とは生れ乍らの先天的の善。

び生じ、一び住し、一び滅す。

(四五)又一切の法の一一の自性に第二の自性として得可き「もの」あること無し。又定んで同類の二法一時に相應することあること無し、即ち第二の自性無きに由るが故なり。又一法に乖異の相二種の作用あるに非ず。又一切の行は他に依つて轉じて而も自ら依らず。又自性と自性と俱なるに非ず、亦た隨轉せず。又即ち此の一刹那の心、此の刹那の心の與に所緣と爲るに非ず。

(四六)又即ち此の刹那の自性此の刹那の自性の與に因と爲るに非ず、亦た後生は前生の因と爲るに非ず、亦た同類は異類の因と爲るに非ず、不善を善に望め、善を不善に望むるが如し、而も無記の異熟果の因と作る。

(四七)廣く地等を說かん、嗢柁南に曰く、

(四八)「初めは諸地と諸依なり、次は諦と智と加行と、三摩地と根と道と、對治と行と修習と、
有漏無漏法と、諸果と諸の因と緣とにして、補特伽羅を立つ、後は徧智と究竟なり。」

(四九)九種の地あり、何等をか九と爲すや。一には資糧地、二には方便地、三には觀行地、四には見地、五には修地、六には有學地、七には無學地、八には聖者地、九には異生地なり。先づ應に出世の

【四五】第四自性等を解する門なり、自性等とは自性と作用なり。
【四六】第五因等を解する門。
【四七】第六廣く地等を解する門。
【四八】此の二頌に十八門を列す。
【四九】第一門諸地を解す。

資糧を積集し、次に漏を盡さんが爲めに方便を勤修し、次に（五〇）隨順決擇分を修する時正しく（五一）諸諦を觀じ、次に能く（五二）正性離生に證入し、次に後漸く（五三）四沙門果を證す。此の中前の三「果」は是れ有學地なり、其の第四果は是れ無學地なり。「正性」離生を證し已つて一切世間に漸く昇進する道を名づけて修地と爲し、即ち總じて（五四）見「道」を攝す。「有」學無學地を聖者地と名づけ、此の餘の一切を異生地と名づく、謂く若くは未だ加行を修せず、若くは已に加行を修し、若くは已に離欲せるなり。（五五）一切の異生に復た九依ありて能く諸漏を盡す、何等をか九と爲すや。謂く（五六）未至定若くは初靜慮、（五七）中間、餘の三靜慮及び（五八）三無色なり、（五九）第一有を除く。（六〇）復た四聖諦あり、能く惑所を盡淨することを爲す。（六一）復た十智あり、能く一切の所知の境界を覺す、謂く法智、類智、若くは世俗智、若くは他心智、若くは（六二）苦等の智、（六三）盡無生智なり、此れ廣く分別することは聲聞地の如し。（六四）又瑜伽師に五の加行あり、一には正性離生に證入せんと欲するが爲め、

【五〇】隨順決擇分とは順決擇分と同じ。
【五一】諸諦とは四諦なり。
【五二】正性離生とは見道なり。
【五三】四沙門果とは預流果、一來果、不還果、阿羅漢果なり。
【五四】見道は修道の初地に攝す。
【五五】第二門諸依を解す。
【五六】未至定とは初靜慮根本定に入る前方便の定なり。
【五七】中間定とは初靜慮と第二靜慮との中間の定なり。
【五八】三無色とは無色界下三處なり。
【五九】第一有とは非想非非想處なり。
【六〇】第三門諦を解す。
【六一】第四門智を解す。
【六二】苦等の智とは苦集滅道の四諦を覺る智なり。
【六三】盡無生智とは盡智と無生智との二智なり。
【六四】第五門加行を解す。

二には上果を得んが爲め、三には離欲に進まんが爲め、四には轉根せんと欲するが爲め、五には功德を引かんが爲めなり。(六五)復た瑜伽の三三摩地あり、一には空三摩地、二には無願三摩地、三には無相三摩地なり。(六六)復た三種の一切の(六七)行向住果の者の根あり。一には未知欲知根、是れ預流果向を行ずる者の根なり。二には已知根、是れ預流果已上乃至阿羅漢果向を行ずる者の根なり。三には具知根、是れ阿羅漢果に住する者の根なり。(六八)復た九道あり、云何んが九と爲すや。一には世間道、二には出世道、三には加行道、四には無間道、五には解脫道、六には勝進道、七には下品道、八には中品道、九には上品道なり。世間道とは、謂く此に由るが故に能く世間の諸の煩惱斷ずることを證し、或は斷を證せず能く善趣に往き、或は惡趣に往くなり。出世道とは、謂く此に由るが故に能く究竟の諸の煩惱斷ずることを證す。加行道とは、謂く惑を斷せんが爲めに加行を勤修するなり。無間道とは、謂く正しく惑を斷ずるなり。解脫道とは、謂く斷ずる無間に心に解脫を得るなり。勝進道とは、謂く此より後勝れたる加行を發するなり。下品道とは、謂く能く上品の煩惱を對治するなり。中品道とは、謂く能く中品の煩惱を對治するなり。上品道とは、謂く能く下品の煩惱を對治するなり。(六九)復た四種の對治あり、一には厭壞對治、二には斷滅對治、三には任持對治、四には遠分對治なり。(七〇)復た十六行相あり、謂く諸諦を觀じて無常

【六五】第六門三摩地を解す。
【六六】第七門根を解す。
【六七】行向とは四向を修行すること、住果とは四果に住すること。
【六八】第八門道を解す。
【六九】第九門對治を解す。
【七〇】第十門行を解す。

等と爲すなり、前に已に辯せるが如し。(七一)復た八種の修習あり、是の如き對治、是の如き行相、是の如き修習は前の定地及び聲聞地の如く應に其の相を觀ずべし。(七二)復た二品ありて一切の法を攝す、一には有漏法、二には無漏法なり。此の二は前の如く應に知るべし已に辯せるを。(七三)復た五果あり、一には異熟果、二には等流果、三には離繫果、四には士用果、五には增上果なり。(七四)復た十因あり、一には隨說因、二には觀待因、三には牽引因、四には攝受因、五には生起因、六には引發因、七には定異因、八には同事因、九には相違因、十には不相違因なり。(七五)復た四緣あり、一には因緣、二には等無間緣、三には所緣緣、四には增上緣なり。是の如き一切の果、因及び緣は菩薩地等に已に其の相を辯せるが如し。(七六)復た七種の補特伽羅あり、謂く隨信行等なり、復た六種の阿羅漢あり、謂く退法等なり、復た八種の補特伽羅あり、謂く行四向及び住四果の建立なり、應に知るべし聲聞地の如しと。(七七)復た六種の徧智あり、一には(七八)不定地の有漏諦の徧智、二には(七九)定地の有漏諦の徧智、三には(八〇)無漏無爲諦の徧智、四には(八一)無漏有爲諦の徧智、五には(八二)順下分結の徧智、六には(八三)順上分

【七一】第十一門修習を解す。
【七二】第十二門有漏無漏法を解す。
【七三】第十三門諸果を解す。
【七四】第十四門因を解す。
【七五】第十五門緣を解す。
【七六】第十六門補特伽羅を立つるを解す。
【七七】第十七門徧知を解す。
【七八】欲界の苦集二諦盡くる處に立つる徧知。
【七九】色無色二界の苦集二諦の惑盡くる處に立つる徧知。
【八〇】三界の滅諦下の惑盡くる處に立つる徧知。
【八一】三界の道諦下の惑盡くる處に立つる徧知。
【八二】欲界の見惑を斷じ見道に入る處に立つる徧智。
【八三】上二界の修惑を斷じ阿羅漢果を證する處に立つる徧智。

結の徧智なり。(八四)復た二種の究竟あり、一には智究竟、二には斷究竟なり。智究竟とは、謂く盡無生智なり、斯より已後を煩惱を斷じて復た應に知るべき無しと爲す。斷究竟とは、謂く諸の煩惱斷ずることを究竟す。彼れ斷ずるに由るが故に圓滿究竟して心解脱及び慧解脱を證す。

(八五)是の如く略して此の論の境智相應に隨順する摩呾理迦の所有宗要を引けり、其の餘の一切は此の方隅に隨つて皆な當に覺了すべし。(八六)徧行の一切の摩呾理迦は攝釋分の如く應に其の相を知るべし。

(八七)如來の法敎數限量無し、何ぞ能く窮めて無邊の彼岸に到らん。此の方隅に隨ひ、此の引發に隨ひ、此の義趣に隨うて、諸の聰慧なる者は餘の一切に於いて應に正に尋思すべく、應に正に覺了すべし。

【八四】第十八門究竟を解す。
【八五】本母事序辯攝を總結す。
【八六】通じて經律の摩呾理迦を辨す。
【八七】第八十五卷以下攝事分全部を總結す。

國譯瑜伽師地論　終

國譯瑜伽師地論附錄

瑜伽論條目

巻の第三（伽抄第二[下]　倫記一の下[二十]）……五九

本地分中意地第二の三……五九

巻の第四（伽抄第二[十八]　倫記二の上[二]）……八九

本地分中有尋有伺等三地の一……八九

巻の第五（倫抄第三下　倫記二の上三十）……一一一

巻の第六（倫抄第三末　倫記二の上三十）……一三八

巻の第十二（伽抄第五十六丁　倫記四の下一）…………三一〇

本地分中三摩呬多地第六の二…………三一〇

巻の第十三（伽抄第六十一丁　倫記五の上）…………三四二

本地分中三摩呬多地第六の三…………三四二

卷の第二十一（伽抄第八下一　倫記六の上下十六）……六〇二

卷の第三十四(伽抄第九下十二　倫記八の上三十下)……一五八

卷の第三十五(伽抄第十下一　倫記八の下下二)……一九四

本地分中菩薩地第十五初持瑜伽處發心品第二……二〇四

本地分中菩薩地第十五初持瑜伽處自他利品第三の一……二一三

卷の第三十六（伽抄第十下十七　倫記九の上丁一）……二二一

本地分中菩薩地第十五初持瑜伽處自他利品第三の餘……二二一

本地分中菩薩地第十五初持瑜伽處眞實義品第四……二三〇

卷の第五十二（伽抄第十三四十丁　倫記十三の下一丁）六九七

卷の第五十三（伽抄第十三五十八丁　倫記十四の上一丁）七一九

巻の第五十四（伽抄第十四下　倫記十四の下）……一
（洋裝第八卷 和裝第八帙）

攝決擇分中五識身相應地意地の四……一

巻の第五十五（伽抄第十四三十倫記十五の上下一）・三六

巻の第五十六（伽抄第十五下一倫記十五の下一）六七

卷の第五十九（伽抄第十五[四十八丁]　倫記十七の上[十一丁]）一七二

卷の第六十（伽抄第十五[五十二丁]　倫記十七の上[二十四丁]）一九九

巻の第六十九（倫記十八の下二十二丁）……………………四二九

攝決擇分中聲聞地の三………………………四二九

巻の第七十（倫記十九の上一丁）……………………四五五

攝決擇分中聲聞地の四………………………四五五

卷の第七十三（倫記十九の下丁）……五二三

攝決擇分中菩薩地の二……五二三

卷の第七十四（倫記二十の上丁）……五六〇

攝決擇分中菩薩地の三……六五〇

巻の第七十五（倫記二十の上四十丁）……五九一

卷の第七十六（倫記二十の下丁二）……六二六

攝決擇分中菩薩地の五……六二六

卷の第七十七（倫記二十の下丁十六）……六五六

攝決擇分中菩薩地の六……六五六

巻の第七十八（倫記二十一の上下）……六九三

攝決擇分中菩薩地の七……六九三

巻の第七十九(倫記二十一の上 二十六丁)……七三八

攝決擇分中菩薩地の八……七三八

巻の第八十(倫記二十一の下 一丁)……一

洋裝第九卷
和裝第九帙

攝決擇分中菩薩地の九……一

卷の第八十四(倫記二十二の上三十丁)……一一六

卷の第八十五(倫記二十二の上三十五丁)……一四五

巻の第八十六（倫記二十二の下一）……一七五

巻の第八十七(倫記二十二の下丁十一)……………二〇八

攝事分中契經事行擇攝第一の三……………二〇八

巻の第八十八(倫記二十二の上丁一)……………二四八

攝事分中契經事行擇攝第一の四……………二四八

卷の第八十九（倫記二十三の下十九丁）……二八六

卷の第九十(倫記二十三の上二十七丁)……三一八

卷の第九十一(倫記二十三の下一丁)……三五一

卷の第九十二(倫記二十三の下十丁)……三八五

瑜伽論條目終

國譯瑜伽師地論後叙

瑜伽師地論百卷の國譯は至難の業にして歳を閲すること滿三箇年、茲に漸く完成したるは寔に佛天の加護に依ると雖も、亦た以て外護の諸知識の助力に俟つ所多大なりとす。編輯長曹洞宗大學學監兼講師山上曹源君の梵語校閲、余が隨身たりし曹洞宗大學講師保坂玉泉君の檢字、初校、編輯員靈山實圓、伊藤俊光兩君の再三四校、曹洞宗大學學生文殊覺穎、小野金舟、野村得珠三君の淨寫、曹洞宗興福寺住職吉留隆堂君の瑜伽論條目調製等の分擔に對しては衷心感謝する所なり。

曩に解深密經を國譯せり、斯論第七十五卷より第七十八卷に至る四卷に於て斯經の全文を引攝せるを以て瑜伽論國譯の當初に此の四卷の文の脚註を省略し、是れを解深密經の脚註に讓ることとし、解題の終りに一言報ずるところありしに、國藏の熱心なる研究者某より書を刊行會に寄せられ、斯くては不便多しとの忠言あり、譯者快諾甘受し、例の如く脚註を施せり。

元來玄奘三藏の譯は思想よりも語學に重きを置けるを以て行文難解、且つ本論は廣汎なれば、通俗平易なる脚註を加へんことは、限りある紙面と日月とは是れを許さず、讀者の便利尠きを遺憾とす、此の短を補ふべく茲に瑜伽論條目を附することとせり。讀者宜しく條目を以て索引と見做し前後を參看對照し應用自在なれ、爾れば和會通釋難からざるべしと信ず。

瑜伽論條目上下二卷（寫傳。編者不詳、眞宗大谷大學圖書館藏）あり、幸に同館より貸り受け是れを原本として今此の瑜伽論條目を作製す。作製に當り原本は漢文なるを國譯し、便宜上處處增減改作せるは譯者の情に任せたりと雖も。國譯瑜伽師地論に符合せしめんがためなり。因に大谷大學圖書館に深謝す。

譯者　佐伯定胤記